

とある神谷の幻想創造 神の右席編

nozomu7

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、上条当麻の殺し（ブレイク）と神谷駿斗の創造（クリエイト）の物語

『法の書』事件をきっかけに悪化の一途をたどっていた学園都市とローマ正教の関係だったが、『アドリア海の女王』事件がその運命を決定づけた。ローマ正教は学園都市に対して攻撃を開始。対し、学園都市はそれを逆手に取り、利用しながら世界を変えていく。

そして、2人の少年は世界に立ち向かって行く。

目次

○九三〇事件編 Imaginary District

始まりの日の朝 | 1

罰ゲームとデート | 14

争いの前の静けさ | 28

そして引き金は引かれる | 42

この街の姿 | 53

ヒューズIIカザキリ | 66

3人の思い | 80

次なる戦いへ | 93

10月3日編

戻った日常とその裏で | 108

駒場利徳、その後の酔っ払い | 121

学園都市で動く闇 | 135

C文書編 Last Judgment

世界の騒動 | 149

犠牲と出発 | 161

超音速での途中下車 | 173

光の処刑 | 186

闖入者 | 199

救いの意味 | 212

その意味は | 224

暗部抗争編 Forceps

独立記念日の始まり | 236

人工衛星の価値 | 249

戦闘開始	261
少年院への襲撃	273
崩壊のはじまり	285
未元物質	297
聖人襲撃編 Saint / Holy Mother	
天草式の来訪	310
襲撃と敗北	322
決戦への準備	333
反省と再戦	345
魔術の才能	357
あるべき場所へ	369
聖人崩し	382
英国騒乱編 Curtana	
騒乱の最中へ	395
空の上でも	406
そして飛行機は落ち始める	418
空の上での戦闘	430
王族との謁見	442
作戦会議	454
新たなる光	466
思わぬ遭遇と本当の配達物	478
叛逆者たち	490
戻ってくる戦士たち	501
傭兵の戦い	513
不死鳥とソーロム	525

武器の正体	538
使徒の師	550
紙の巨人	561
全次元切断	573
孤高な暴虐	585
騎士団長と傭兵	597
連合の意義	609
戦争の火種	621
大戦前暗部編	Dragon
暗闇の戦いを生き抜いた者たち	633
暗部の仕事風景	644
敵襲と人質	656
悪党に相応しい戦い方	667
新たなる敵たち	679
戦いの終わりと逃亡の始まり	692
超能力者の戦い	705
そして舞台は、北の戦場へ	718
第三次世界大戦編	Magic / Science
ヒーローたちの戦争	729
それぞれの作戦会議	741
突き付けられるもの	754
悩み抜いた先に	769
雪原の襲撃	783
己の心を守るため	799
得体のしれない何か	817

魔術師たち	832
空に輝くもの	847
新たな星と日蝕の下で	863
彼らの敵は目の前に	879
それぞれの強さと対峙する時	894
差し伸べられる手	908
救済と祈り	922
善意で人は繋がっている	935
守るために、最後まで……	952
新たな時代へ	968

始まりの日の朝

約1か月前に終わった夏休みに1人の少年は、2人の少年と2人の少女に、その目標を阻まれた。

そして、その結果9989人の『死亡する予定だった』クローンの少女たちは研究者たちの当初の予定を裏切って、生き残ることとなった。

そして、『彼女たちの10032人の姉を殺し、そして生き残っていた彼女たちをも殺すはずだった』その少年は、夏休みの終わりの8月31日に、彼女たちの『末っ子』を死の崖っぷちから引きずりあげた。その行動の代償に脳に障害を負い、彼の言語能力と演算能力を失うという形で。

そして、ある医者や学園都市の協力機関に派遣されその先で短命な肉体に『調整』を施すことで、彼女たちは今の所は生き永らえ、その彼女たちのサポートを受けつつも彼は末っ子の世話をしながら、以前とは異なる平和な日常を——例えそれが一時的なものであったとしても——送ることとなった。

しかし、それは本当に全て真実だったのだろうか。

もしも、この都市の全てを管理しきるほどの権限と頭脳を持っている人間がいたとすれば、人間の心境を読み取り、人物像を読み取り、人々の動きを誘導することくらい、訳はないのかもしれない。

これは、神谷駿斗がそんな恐ろしい考えに気付く物語。

「見てみて！ ミサカが入院してた間に、皆の服装が変わっているーって、ミサカはミサカははわあっ!？」

車の窓から外を眺めていた少女打ち止めを、白と灰色を基調とした服装をしている少年、一方通行は、アクセラレータ彼女の襟をつかむと後部座席の上

に雑に倒す。

「テメエの服装は涼しすぎるんだよ。つーか病み上がり早々、病人の膝の上に乗っかって外を見てンじゃねエぞクソガキ」

そう言う一方通行に、空色のキャミソールに男物のワイシャツを羽織っている打ち止めは起き上がるとかん高い声で文句を叫ぶ。

「ひどい！ 病み上がりなのはミサカも同じなのにつて、ミサカはミサカは」

「はいはい、そこまです。心温まる喧嘩は、新しい滞在先に着いてからにして頂戴ね」

そこに、乗用車を運転していた女性が割って入った。

彼女の名は芳川桔梗。

遺伝子方面を専門とする研究者であり、かつてはその腕を買われて『絶対能力進化実験』と呼ばれる『実験』に参加していた経緯がある。

しかし現在は絶対能力進化実験の完全なる中止に伴い、現在は研究職を終われ無職に近い状態となってしまうた。研究所を1つ潰してしまうという失態は研究者としてあまりに大きいものであり、もう研究者としては生きていけないためか、現在は旧友である高校体育教師（兼警備員^{アンチスキル}）の黄泉川愛穂と一緒に職を探している最中である。

「で、その『滞在先』ってのはどこなんだ」

「私の知り合いよ。君、今の学校はもうやめてしまうのでしよう？」

「絶対能力^{レベル6}なもんに関わるのは、もうごめんだからなア」

そして、彼らは出会った。

「何だこれは……」

一方通行は『彼女』の姿を見るなり驚愕の表情を露わにする。その彼に付き添う打ち止めは、彼の服の裾をつかんでいた。

「おいおい、どうした人の顔を見るなり固まって。もしかして、もう私の顔を忘れちゃったじゃん？」

「お前のことじゃねエ」

彼は黄泉川の言葉に不機嫌そうに返すと、その杖の先で『彼女』の顔を指した。

「俺が言ってるのは、この説明不能の生き物のことだア！」

どこからどう見ても小学生にしか見えない容姿を持つ『教師』の顔を。

「説明不能とはなんですか!? こう見えても、私は先生なのですよー」
その言葉を聞いているのかいないのか、杖の先を降ろした一方通行はチツ、と舌を鳴らす。

「細胞の老化現象を抑える『二五〇年法』は、もう完成していたのかア!?」

「そ、そうではなくてですね……」

「可哀想に。きつと実験ばかりで、このままずっと自由時間とかもないんだって、ミサカはミサカはそつとハンカチを目に当ててみたり」
「先生の話聞いてくださいですー!」

小萌が叫ぶ。すると、その様子を見ていた黄泉川は笑って言った。

「いやあ、掴みはもう完璧そうじゃん」

彼女は車を動かすために、キーを取り出しながら歩いて行く。その背中に、一方通行が訊いた。

「良いのか、この俺を居候なんかさせて」

「ノープロブレム。部屋は余っているし何も」

「そうじゃねエ」

一方通行が訊いているのは、そういった“一般的な心配事”ではない。
い。

「俺を匿うつてのは、学園都市の醜いクソ暗部を丸ごと相手にするってことだ」

彼は最強の超能力者だ。例え能力に制限が設けられてしまった今となつても、その事実が変わらない。

彼からもたらされる『利益』を巡って、『闇』の連中が彼に何かを仕掛けてくる可能性は十分に考えられる。

しかし、彼女の答えは一方通行の予想の斜め上を行った。

「だからこそ、じゃんよ。私の職業を忘れたか? 警備員の自宅をバカ正直に襲撃する人間は少ないと思うけどね」

彼のせいで死ぬようなことになつても、彼女は文句を言わない。

自分の名前が『連中』のリストに登録されたなら、その『連中』を

更生させるのが彼女の仕事なのだ。

「にしても、良かったよ。あんた、聞いていたよりもずっと助けるのが簡単そうだ」

黄泉川は、彼に背を向けてまま言った。

「……本気で言ってるのか」

「だってそうじゃんよ。なんだかんだ言ってる、家主の心配をしている。……それってつまり、私たちを守る気満々なんでしょ？」

「チッ。だからこの手のバカは始末に負えねェんだ」

その言葉を聞いた打ち止めが嬉しそうに一方通行に駆け寄った。その一方通行にしても、忌々しそうに言ったがそれでも「お前らを守るつもりはない」などとは言わない。

それは、8月31日に打ち止めを助けたことによって彼に起きた、心境の変化なのか。

だがそんなやりとりをしていたその時、予期せぬ相手が現れた。

「……一方通行」

「御坂妹に聞いた話は、超事実だったようですね」

その場に現れたのは、真新しい常盤台中学の冬服に身を包んだ2人の少女だった。

「テメエらは……」

その顔を怪訝そうな顔で見つめた一方通行に最愛は近づくと、他の人間には聞こえないように小さな声で耳打ちする。

『『暗闇の五月計画』といえば、分かるんじゃないですか？』

その言葉を聞いて、一方通行は顔をしかめる。

「何の用だ」

「何の用だ、じゃねえだろ。お前が今妹達シスターズの個体の世話をしているということ。それが、どれほど私たちにとって驚きだったか分かって言っているのか？」

不機嫌そうな一方通行に対して、平然と答える黒夜。並大抵の人ならビビって逃げ出してしまっような状況だが、『攻撃性』を植え付けられ、1か月半ほど前まで『闇』の中で生きてきた彼女にはその威圧は通用しない。

「まあ、様子見ですよ。一応ですが超大丈夫そうなので、とりあえずは安心、といったところででしょうか」

「……フン」

そう言っつて、一方通行は打ち止めを連れてマンションの中に入っていく。その後をついて行こうとした芳川だったが、ふと思いついたように彼女たちの方へ振り返ると言った。

「2人とも『あの子たち』を助けてくれて、ありがとう」

あの子たち。

2人とも、8月31日のことは聞いていた。そして、布束と同じように研究者であった彼女が妹達シスターズを救おうとしていたことも。

「じゃあ、これからはあなたが『親』として面倒を見てやってくださいよ」

「以下同文だな」

そう言っつて、彼女たちは離れていく。

その様子を、事情を知っている一方通行と彼（と打ち止め、というかミサカネットワーク）から聞いている芳川は様々な思いを巡らせながら見つめ、何も知らない小萌と黄泉川は頭に疑問符を浮かべていた。

9月30日。打ち止めが気づいていたように、この日は学園都市の全学校が、衣替えのために午前中授業であった。

全人口の8割を学生が占めるこの街では、『衣替え』というのは都市全体において大きな行事となるためである。今日行うのは新調した冬服の受け渡しだけなのだが、業者で制服の受け渡しをする学生と、それに合わせてスーツを変える教師やサラリーマンなども含めると、服飾業界は大忙しになるのだ。

また、新しい服を『慣らす』ために、この日から冬服を身にまとうのも風習の1つとなっている。

そして、とある高校に通う上条当麻と神谷駿斗もまた、この日から白いワイシャツ姿から詰襟へと姿を変えていた。

「……出会いが欲しい」

休み時間、廊下で当麻がそう呟いた瞬間、その頬に両サイドから拳が入った。

「うにゃあ!? 何するんですかー!？」

当麻がそう言うのと、

「いやあ、かみやんが言うのと嫌味にしか聞こえないんだぜよ」

「その言葉を引き金にして、そこらじゅうからけつたいな女子おなごが出てきそうやもんなあ。ああ、そうや。かみやんとはやとんなら、超電脳ロボット少女から泉の聖霊風お嬢様まで、なんでもどうにかなつてしまうんや!」

デルタフォース（当麻、土御門、青ピの3人組の通称、命名吹寄）が騒ぎ出すのを横目に、駿斗ははあ、とため息をつく。その時、彼の携帯電話にメールの着信があった。

折り畳み式のそれを開いてみると、差出人は佐天涙子。

内容は簡単に言えば、「他のみんなも誘って一緒に出掛けませんか」とのこと。最愛と海鳥も来るようなのだが、駿斗は疑問に思った。

こういったことなら大抵最愛か海鳥のどちらかが彼に連絡するのだが。

実は佐天がこのメールを送信したわけではなく、恋愛関連の話で盛り上がり過ぎていた彼女の友人たちが勝手に佐天のケータイを使ってメールを送信しただけであるのだが、駿斗はそんな事とはつゆ知らず。

恥ずかしさのあまり慌てて最愛と海鳥にメールを送ったことを、佐天は後で後悔することになる。

そんな事情を察することもないまま、駿斗は二つ返事でそれを承諾した旨をメールで送る。

最愛に海鳥、佐天と初春、御坂に白井、食蜂……俺は年下だけなら女子との出会いに恵まれているのかもしれないなあ、などと考えつつそのメールを送信する。そして、彼が教室の方を見るとデルタフォースが健康オタク少女・吹寄制理に拳と頭突き（通称おでこデラックス）で倒されているところであった。

駿斗は知らないが、原因としては彼らが「揉ませて、吹寄！」などと言って彼女に突進していったためである。……「揉む」という言葉の前に、「肩を」という言葉を入れなかった当麻に、大半の原因があるのだが。

その時、次の授業のために小萌先生が教室へと入ってきた。

「さあ、皆さん。次は先生の化学の授業なのですよ……ふええ!? このクラスが、一転してルール無用の不良のバトル空間っぽくなっているです!？」

床に倒れたまま頬を姫神秋沙につつかれている当麻を見下ろしながら、仁王立ちしている吹寄は堂々と言い放った。

「世界の平和のためですー!」

……とまあ、そんなことがあり、波乱万丈の大覇星祭、そしてイタリア旅行から平和な日常へと戻ってきたことを噛みしめつつ、騒がしくも穏やかな生活を送っていた当麻だったのだが、その放課後に御坂美琴に見つかつた。

「いたいたいやがったわね、アンタ!」

お嬢様学校である名門常盤台中学のエースとは思えない口調で、御坂は当麻に迫る。それに対し、当麻は彼女を一瞥すると明後日の方向を見つめながら呟いた。

「はあ……まあ、あれだ。不幸だー」

「人の顔を見てその反応は何なのよ!？」

寝言でルームメイト（白井黒子）の安眠を妨害するほどに（声が大きくて煩かったという意味ではない）楽しみにしていたにもかかわらず、相手にすつとぼけようとされたことに対して声を荒げる御坂。

「で、何か俺に用でもあるのか、ビリビリ」

ビリビリ、というのは当麻が彼女と出会ったばかりのころ、会うたびに雷撃の槍を放っていたことからついた呼び名である。

しかし、そんな当麻の様子に対して、御坂は腰に手を当てた格好をすると挑発的な態度で言った。

「今のアンタにそんな態度をとる権利があるのかしら?」

「はあ?」

言葉の意味が分からずに、彼女に聞き返す当麻。すると、御坂はビシイ、と当麻の顔をまっすぐに指さして、言った。

「罰ゲームよん♪」

罰ゲーム、というのは、大覇星祭において彼らが交わした『大覇星祭で負けた方が何でも1つ言うことを聞く』というものである。

そしてその大覇星祭の結果はというと、こんな無能力者が大半を占めている一般校がエリート集まりである常盤台にかなうはずもなく、頼みの同じ白組にいる他の学校の努力もむなしく、今年は常盤台に優勝を持つていかれることとなってしまったのだ。

そんなわけで、御坂には当麻に何でも1つ命令ができることとなったのだが……。

「あれ？ あれってまだ有効だったっけ？」

「勝手に水に流しているんじゃないわよ！ とにかく、本当に何でも言うことを聞いてもらうんだから。もっとも、アンタみたいな凡人にできることなんてたかが知れてるんだろうけど。まあ、その辺は？ せいぜい頑張ってみたらー……？」

余裕の表情を見せながら話し出した御坂であったが、言葉が進むにつれて彼の表情が変わっていくことに気が付いた。

「分かったよ」

ひよっとして怒ったのか、と一瞬考えた御坂だったが、その言葉にパアツ、と顔を輝かせる。

訳は分からないがとりあえず、彼とこれから一緒に過ごすことができる。そう安堵しかけた御坂であったが、彼女はその後の彼の行動を予測することができなかった。

「よろしい!!」

当麻はガバツ、と顔を上げるとカバンを地面に置き、拳を握りしめて声高く宣言した。

「ならばこの愛玩奴隷上条当麻に何なりとお申しつけるが良い!!」

な……？ と一瞬思考が停止する御坂。

しかし、その間に当麻はカバンから下敷きを取り出して、彼女の前に跪くとそのまま下から下敷きで御坂を仰ぎ始める。風でスカート

がめくり上がりそうになるのを御坂は慌てて手で押さえているのだが、そのことに当麻は気が付いていない。

そして、ただでさえカオスなその状況に更に別の人間が加わってしまふ。

「お姉さま……」

「御坂……?」

そこにいたのは黒いオーラを纏った、最近車椅子から解放された後輩にしてルームメイトである白井黒子。そして、その同級生で友人である絹旗最愛と黑夜海鳥であった。

「ま、まあ趣味は人それぞれだから……。私は御坂の趣味に口出しはしないぞ?」

「ま、まあ私も超関わるつもりはありませんし……。いや、むしろ超何も知りたくありませんが」

最愛と海鳥にあらぬ誤解を受けている御坂。

(な、なんとという直球服従姿勢! この類人猿、只者ではありませんの!?)

そして、自身も下敷きで彼女を仰ぎ始める白井。

「いや、ちょ、誤解だから! 誤解だからいい加減下敷きで仰ぐのをやめなさい! 私はどこぞの教祖なのか!?!」

最愛と海鳥の生暖かい視線を受けながら、混乱して叫ぶ御坂。

だがその後「セブンスミスにきっかり13時に来なさい!」と約束を(一方的ではあるが)取り付けたという点は、しっかりしているのかもしれない。

今日は午前授業であり、駿斗も当麻も、自分の弁当もインデックスの食事も用意していない。

というわけで、2人とも寮に戻って昼食を取ることになったのだが。

「今日もそうめん」

「やだ!」

当麻の言葉に、インデックスは両手に白い棒のような乾いた状態のそうめんが束ねられているものを持って、それを振り回しながら叫ぶ。

「これって何!?! 食という文化を応用した体内調整魔術の一種なの!?!」

もちろん、そんな訳ではない。

「たまたま貰い物が重なっただけだって、言っているだろう!」

当麻が叫ぶ。

始まりは、「さすがにインデックスにも、そうめんを茹でるくらいはできるはずだ」と安売りをしていたそうめんを駿斗と当麻の2人で大量購入したことだった。

しかしそのタイミングで、学園都市の『外』で生活している当麻の両親から『福引きでたくさんもらっちゃってさ』と、大量のそうめんの箱が学生寮の部屋に届けられてしまった。

インデックスの食事代が浮くことは2人にとってもうれしいことなのだが、さすがに毎日のように食べていけば飽きる。

しかし、賞味期限までにはまだ十分な月日があるものの、さすがにある程度は減らしておかなければ来年の初夏あたりがやばいことになるので、このあたりで食べておくに越したことはない。

そのため、当麻は駿斗とも協力して新しい食べ方を模索しつつそうめんを消費する毎日だったのだ。

しかし、サラダ風、パスタ風、うどん風……と頑張ってみたものの、さすがに男子高校生の料理では限界というものがある。

どうするべきか、と駿斗が新たな手法を模索し始めた時、当麻の部屋のインターフォンが鳴らされた。

「うふふふふー」

出てきたのは、ものすごく上機嫌な土御門舞夏であった。

「どうしたんだ?」

「この幸せをおすそ分けしたいのだから!」

頭に疑問符を浮かべる3人に、土御門はそのメイド服の袖口を見せつける。

「これだよ、これー！」

その白い袖口は先が折りたたまれ、そこには薄く花の模様が付けられていた。どうやら、自分のメイド服に改造を施したらしい。

「メイドってのは、基本的に目立っちゃダメだからなー。こうしてこつそり個性を出しているんだぞー。今の私はとーっても気分が良
いから、ちよつとしたお願いくらいは聞いてやってもよろしいー」

突然の来訪に驚いていた駿斗たちであったが、その言葉に顔を輝かせる。

そして、3人一斉に言った。

「「「そうめんの新しい食べ方が知りたい！」」」

「という訳で、旅行帰りから話していた物が出来上がったぞ、当麻」

昼食を終え、御坂との約束のために出かけようとした当麻に対して、駿斗は1つの物を手渡す。

「ああ、あれか……」

当麻は駿斗の方へ振り返ると、少し複雑そうな表情でその『手袋』を受け取り、自分の制服のポケットへと入れた。

ためらう気持ちは分からなくもない、と駿斗は思う。なぜなら、『それ』は便利な『道具』であると同時に、『武器』なのだから。

フリックグローブ
『硬化手袋』。

一切『異能の力』を用いることのできず、だがそれらを打ち消すことのできる当麻のため、これからの戦いのことを危惧した駿斗が用意した、当麻専用の武器。

特に重量が重いわけではないが、左手だけに用意されたそれは、手の甲と手首にマジックテープで巻きつけるベルトの部分¹が非常に硬い。その『手袋』全体において学園都市製の防弾・防刃繊維が使用されているというだけでなく、その部分には薄く小さな特殊合金の板²が³あてはめられているからだ。

当麻の右手は異能の力に対しては有効だが、それが関与らない普通の物理攻撃に対しては全く意味を持たない。だから、その弱点を補う

ためのもの。野球でバッターが使用しているようなバッティンググローブのような見た目は裏腹に、あらゆる凶器に耐える『硬さ』を持つ手袋だ。

また、それ以外にも先端に小さなかぎづめをつけられた、細いが極めて丈夫な鋼糸ワイヤーを圧縮ガスによって射出する機構なども存在する。何かしらの原因によって落下する際に、少しでも手助けになればと思っ用意したものだ。

異能の力に対抗する右手に対し、物理に対抗する左手、というコンセプトで、駿斗が作製した。

駿斗だって、武器を使う必要がないのならば、使わない方が良いと思う。それなりに凝って作成したものではあるが、やはり平和な方が良いに決まっている。

しかし、そんなに甘いことを言っていられる場合ではないだろう、とも考えるのだ。

インデックスから魔術を学んでいる駿斗にとって、あの『アドリア海の女王』事件において自分たちが旗艦を破壊したことが、どれほど大きな意味を持っているのかを少しは理解できるようになっていた。

片手で持つことのできるサイズの、象徴武器シンボリックウェポンとは違う、例え一流の職人が何百人と集まっても完全に再現できるか難しいような、ローマ正教において極めて貴重な霊装。それが、『使徒十字クローチエティビエトロ』のような、『聖霊十式』なのだ。

それを破壊したということはすなわち、ローマ正教にそれだけの脅威であることを伝えるとともに、彼らが何かしらの『行動』を起こすための『理由』を与えることにもなる。

「やっぱり、嫌か？」

駿斗は、自らの手で作成した『武器』を携帯した親友に尋ねる。

「まあ、それもあるけど……それよりも、現実味が湧かないというか、現実を認めたくないという感じかもな」

当麻は、片手で頭を掻きながらそう言うと、インデックスに留守番を任せて部屋を出て行った。駿斗も、佐天さんとの約束に間に合うように、外へ出かけていく。

そして、その腰には詰襟の制服に隠すように1本の『杖』が携えられていた。

『イマジン・コアロッド幻想核杖』と名付けたそれは、これから彼の『力』の核となるものだ。

「使いたくないが、使わなければならないだろうな。だが、いつかはその幻想もぶち殺してやるよ」

駿斗は呟くと、寮を後にした。

罰ゲームとデート

初春飾利さんがログアウトしました。

というのも、御坂は当麻との約束のために、指定した時間の30分前——12時半から待ち合わせの場所に来ていた。

だが。

「来ない……」

待ち合わせには早めに来るのが当然でしょ、などと甘い考えを持っていた彼女はその幻想を軽々と壊されてしまい、約束の1時になっても待ちぼうけを食わされていた。

そんな時、1人の少女が彼女特有の甘ったるい声で声をかけてきた。

「御坂さん」

「ああ、初春さん」

御坂がその声に携帯電話の画面から顔を上げると、そこには冬服のセーラー服を纏った初春飾利がいた。彼女は白井と同じく風紀委員ジャッジメントであり、御坂も彼女と知り合った夏からは仲の良い友人となった。

彼女のトレードマークである花飾りに目を瞑れば、一見普通の女の子に見えるだろうが、実は風紀委員の試験を『情報処理』の一点突破で合格し、ハツカーの中では『守護神』ゴールキーパーなどという二つ名で通っているという、意外すぎる特技を持っている少女である。

「あの、白井さんが荷物を受け取りに来ることになっていたと思うんですけれど……私、白井さんに風紀委員の仕事を押し付け——いえ、仕事で手が離せなくなってしまったようなので、代わりに私が」

「そうなんだ」

と答えた御坂だったが、そこで気が付く。

部外者は原則として、常盤台中学の中には入れない。

彼女の寮は『学舎の園』の外にあるのだが、それでも寮の中にまで入ることは難しい。必然的に、同じ寮の誰かに運んでもらうことになるだろう。

同室の白井に頼むことができないので、他に頼めるような人と言え

ば最愛か海鳥ということになるが、彼女たちは友人の佐天に誘われて出かけると言っていたので、頼むのも悪いだらう。

そう考えた御坂だったが、初春は彼女の持っているケースに入ったバイオリンをまじまじと見つめる。

「それにしても、さすがは常盤台中学ですよ。授業でバイオリンなんてすごいです」

常盤台のお嬢さま方にとっては、これでも『一般教養』に入るのだろうが、庶民である初春にとっては触れる機会もないような楽器である。

「大げさね。なんなら、ちよつと弾いてみる？」

「ええっ!？」

突然の御坂の提案に驚く初春であったが、提案した本人は気に留めることなくケースから中身を取り出すとバイオリンを初春に持たせる。

そして、彼女を後ろから抱くような格好になり、教えていった。

「そう、鎖骨と顎で楽器を支えるの。左手は添えるようにそつとネックをもつて——」

普通では味わえない体験に、初春は感激しながらもゆっくりと右手に持った弓を、その右手に重ねられた御坂の手と共に引いた。

ギィ、と少し不器用ではあったが、確かに音が響いた。

憧れのその感覚は、どこか夢を見ているようにも初春は感じられ――

「ひい!？」

とその時、初春は悲鳴ともうめき声とも区別のつかないような声を上げた。

「どうしたの?」

御坂が聞くも、初春は「あ、あ……」と声を漏らしながら後ろ向きに歩くばかりで何も言わない。

まさか、急に体調でも悪くしたのか、と一瞬思った御坂だったが、すぐに彼女がバイオリンの弓で1つの方向を指していることに気が付く。

「初春」

その方向にはどす黒いオーラを纏った白井黒子が……という訳で、彼女は強制退場させられたのである。

その様子を冷や汗をかきながら見ていた御坂だったが、その時ようやくお目当ての人物がやってきた。

「いやー、ごめんごめん」

全く悪びれることのないその様子に、さらに彼女は腹が立ってしまった。

「あのねえ……罰ゲームをかけた戦いの勝者は私なのよ。なのに、どうして1時間も待たされなきゃならないのかしら!」

前髪から電撃をバチバチと鳴らしながら、御坂は当麻に食って掛かった。

「いや、それには深い訳が……」

当麻は言う。

土御門舞夏がやってきた後、料理を教えてもらうことには成功した。しかし、それは舞夏^{教えてくれる人}とインデックス^食両方の心に火をつけてしまい、昼食の時間が予定外に伸びてしまったのだ。

「って、あれ? 確か約束って1時だったよな?」

御坂は「1時間も待たされた」と言ったが、現在時刻は1時半。それに対し約束の時間は1時。

つまり、約束の時間からは30分しか経っていないはずであるが……。

「お前30分前からここにいたのか? そりやあまあ、悪かったな」

「ば、別にきつちり1時間前から待っていたわけじゃ……」

顔を赤らめてそう言う御坂に対し、当麻の表情が真剣なものに変わる。彼が滅多に見せないその表情に、さらに彼女の鼓動が速くなっている。

「御坂、お前……」

「だから、その……」

「そんなに罰ゲームで苦しむ俺を見たかったのか」

(まだ認めたくはないが)自分の気持ちがばれるのでは、と緊張

していた彼女だったが、そこに予想外の言葉が返ってきた。

「お前って、実は結構陰険なんじゃ」

当麻がその言葉を言い終わる前に、御坂の前髪から電撃の槍が迸った。当麻は反射的に右手をかざして、それを打ち消す。

そんな、ある意味において彼ららしい騒動が終わった後、罰ゲームが始まった。

そんな頃駿斗は、当麻とは対照的に平和に（というのも変ではあるが）佐天、最愛、海鳥の3人の少女と合流した。

「遅刻してすまん。待たせたな」

駿斗は、謝りながら彼女たちの方へ駆けて行く。

「いえ、そんな。突然声をかけたのは私の方ですし」

初春と同じくセーラーの冬服を着ている少女はそう言い、笑って駿斗のことを許した。

彼女は佐天涙子。柵川中学に通う中学1年生の少女である。

特にエリート校でもないその中学においては珍しく、異能力者^{レベル2}の能力、空力使用^{エアロハンド}を持っている。

もつとも、彼女は夏休みの始まる直前までは無能力者^{レベル0}であったのだが。

「謝罪を超言っている余裕があったら、とにかく行きますよ！」

「お、おい！ 最愛？」

すると、最愛が彼の腕を引っ張って（空素装甲は未使用）真っ先に歩き出した。すると、その行動を見た他の2人の少女が「あ！」という声を上げて彼らを追いかける。

修羅場ではあるのだが、何かがあると真っ先に雷撃がほとぼしる親友たちとは違って、物理的な攻撃がないという点においては比較的穏やかであった。

そんな訳で、彼らが最初に着いたのは『セブンスミスト』であった。

「随分と懐かしい場所に来たな」

懐かしい場所、というのは夏休み前に起こっていた虚空爆破事件に^{グラビトン}

において、彼が当麻と2人で爆破の対象となったこの建物を守ったということがあったからだ。

駿斗はそこまでおしゃれなどをするタイプではない。基本的にちぐはぐな服装でなければOKといった感じであり、さらに日頃から平日の放課後は制服のままにいることが基本なので、あまりこのような場所に来ることが少ない。そのため、その時以来この場所に来てはいなかったのである。

「こんなのはどうでしょうか？」

「えー、少しスカート丈が短すぎるような……」

「つーか、佐天は基本的にパンツだろ。どうして自分の好み丸出しのミニスカ勧めているんだよ、絹旗」

海鳥の言う通り、最愛はその常盤台中学のスカート丈が結構短い。流石に、学校や寮の中では校則通りの長さにしてあるのだが、本人曰く「見えそうで見えないギリギリの角度を計算してある」のだとか。

幼馴染のお兄さんである駿斗としては、もう少し女の子らしい恥じらいをもってもらいたいものだ、と思う。傍から見たら、彼女は名門のお嬢様学校の制服を着ていながら、同時に挑発的な格好もしているのだ。

性質たちの悪い男に掴まりはしないだろうか、と駿斗は少しだけ心配になった。

とは言っても、実際の所彼女が誘惑したいのは1人の少年だけであり、その彼はそのような誘惑に対してどうしてもリアクション反応が得られないので、最愛としてはどうしてアピールすればいいのか、分からないまままだ。

特に、映画のように彼と再会した挙句、『闇』から救い出されるといふことがあってから1か月以上たち、今となっては海鳥と2人で駿斗の人気ぶりに頭を悩ませているのである。

流石に、彼の親友のように老若男女問わず、まるで魔法のように次々と——とまではなっていないのだが、それでも年下を主力として片手の指で足りているのかどうか。

ひよっとしたら、自分の知らないところで両手の指の数以上の旗フラッグを

立ててきているのかもしれない。

そう考えると、ますますこの『デート』という絶好の機会チャンスを逃したくはなく、余計に挑発的な格好を試みたりしてしまうのだが、彼は彼の親友と同じく『好意』に対して非常に鈍感だ。

もつとも、それは自分たちにしても同じなのかもしれない。——ここにいる人で佐天を除く3人が、本来誰よりも『愛情』を注いでくれる存在親がいなかった、ということを考えれば。

だが、やはり強力なライバルが存在するのは危険——この辺りで、一気に距離を縮めておきたい。

特に、『大覇星祭』の前に起こった『エンデュミオン』の一件の中心となった少女、自分たちの友人でもある鳴護アリサは、ライバルとして非常に強力だ。乙女としての本能がそう告げている。

「そうだ、駿斗兄ちゃんも秋物の服を買っておきましょうよ」

一通り見終わった時、最愛がそんな提案をした。

「いや、別に俺は」

駿斗が今の所秋物の服には困っていない、と言おうとすると、その前に女の子たちに先の言葉を遮られる。

「ああ、もう！ そんなことを言っていたらダメですよ。高校生なんですから、たまには超カッコいい服装を試してみてください」

「あ、ああ！ そりやもう、私たちがほ、惚れるくらいの姿になってみるよ！」

最愛の言葉に続いて、海鳥が顔を少し赤く染めながら言う。

さらに、その言葉を聞いた佐天も積極的に、

「ほら、男の人の服を見に行きますよ、神谷さん」

自然な仕草で駿斗の腕を取ると、メンズ服売り場へと彼を引っ張って行った。流れるようなその動作に一瞬最愛と海鳥は呆けてしまうが、すぐに「あ！」と大声を上げるとすぐさま幼馴染の両腕に抱き付く。

周りからの非常に痛い視線を感じた駿斗は、すぐに立ち止まると体を回転させて速やかに少女たちの手から脱出した。

「「えー」」

「えー、じゃないだろ!? 美少女3人に囲まれている時点で、周りからの視線が痛すぎます。俺としても心臓だとか、理性だとか、いろいろやばいから、勘弁してくれ」

傍から見たら、中学1年生の美少女3人に抱き付かれてハーレム状態、ということは駿斗も自覚しているのです、彼は少し彼女たちと距離をとる。その一方で、その言葉を聞いた彼女たちは、

(び、美少女!? それって私のこと意識してもらっているってことですかよ? わわ……)

(は、駿斗兄ちゃん……私のことを単なる幼馴染と見ていたわけではないのですか。超やった!)

(さ、さりげなく言いやがって……べ、別に美少女とか言われて嬉しくなったわけじゃ)

非常に混乱していた。

「ん、おい。お前ら顔を赤くしてどうしたんだ?」

しかし、他人から他人への好意に対しては敏感でも、自分への好意に対しては鈍感な駿斗は、その反応を頭に疑問符を浮かべながら見つめ、そのままスルーしてしまう。

「まさか、熱じゃねえよな?」

そんなある意味テンプレな台詞を吐きながら、自然な仕草でその両手を幼馴染2人のおでこに当てる。

かあ、と一気に顔を真っ赤にする2人。そのままボン、と音を立てて沸騰してしまいそうである。一方で、その様子を見ていた佐天は少し不満げな表情だ。

そしてそのまま、幼馴染かあ、と呟く。

彼女としてはそんな『特別なポジション』に納まっている彼女たちが羨ましく、そして少し妬ましい。

(私も、幼馴染だったらよかったのかな……)

佐天はそんなことを考えてみる。幼馴染という貴重なポジションに納まっている自分を。

そして、駿斗がメンズ服売り場へと歩いて行く。佐天は、その後姿を見ながら、うーん、と少し考えると、

「……駿斗兄ちゃん」

と、誰にも聞かれないようにボソリ、と呟いてみた。

彼女には、彼ら3人と違って血のつながった『家族』がちやんといる。今年の『大覇星祭』も見に来てくれたし、そこで駿斗のおかげで手に入れた能力をようやく家族に披露することができた。

そんな、駿斗たち『置き去り』チャイルドエラーには存在しない、大切なものを自分は持っている。それは自覚しているが、その反面、やはり彼らの関係に憧れてしまうのも事実だ。

それが、少しだけ寂しかった。

「あ、駿斗兄ちゃん、この赤いクロスのシャツはどうですか？」

「ああ、結構良さそうだな」

「じゃあ、それにこのTシャツと一緒に来てみるのは、どうだ？ いや、これでもいいかもな」

2人の少女が、少年の服装をアレンジしていく。佐天は、それになんとかついていけなかった。

だって――

「……天。おい、佐天ってば」

ふと自分呼びかける声が聞こえたので、顔を上げると海鳥に佐天は呼ばれていた。

「おい、どうしたんだよ？」

「いや、別にそんな」

「なんだか、1人だけ仲間はずれな顔をしていたけどな」

海鳥に言われて、彼女はギクリとする。凶星だった。

「その顔は、超正解のようですね」

佐天の様子を見て、最愛が言う。

「いや、その……やっぱり、幼馴染なんだな、と思つて」

少し壁を感じてしまったのは事実だ。

すると、駿斗は何も言わずに彼女の頭にその右手をポン、と置いた。突然のその行動に、佐天は思考が停止してしまう。

「別に、そんなこと考えることはないぞ。俺たちも、一緒にいて楽しい友達ができて嬉しいと思つているんだからな」

少しだけ彼女が求めていることとは違ったような気もしたが、その心遣いが温かくて、彼女は元の笑顔を取り戻した。

「ありがとうございます、神谷さん」

「ん、どうってことはねえよ」

そう言つて、佐天は少し前向きに行動してみる。

「あ、神谷さん。こんなのはどうですか？」

佐天は、爽やかな外見の彼に似合いそうな薄い青色と緑色のシャツを手に取った。

「ハンディアンテナサービス？」

「そつ」

当麻は、御坂に連れられて地下街にやってきた。そして、彼女は1軒の携帯電話サービス店の前で止まる。

「加入者同士でネットワークを構築できるの。それに、ペア契約だから通話料も安くなるのよ」

このサービスは、簡単に言えば街中で携帯電話を持ち歩いている全員が中継アンテナになるのだ。

それぞれの携帯電話をアンテナ基地代わりにすることで、近くにアンテナ基地が無くても通話出来る様になる。また、大学側がテスト運用として補助金を出す為、料金が非常に安く、さらに男女のペア契約はそれに加えてその他の通話料金も安くなる上に、2人の間なら通話料金とパケット代金がかからなくなる。

しかし、そのようなメリットの反面、非常にマイナーなサービスで加入者が少ないこと。そのため利用者みんなが常に電源をオンにして持ち歩かないと中継アンテナ効果が期待出来ないのも、そのせいでバッテリーの消耗が増えてしまう、というデメリットも存在する。

「ペア契約？」

頭に疑問符を浮かべながら言う当麻に、御坂はなぜか得意げに説明を続ける。

「で、今契約するともれなく、ラヴリーミトンのゲコ太ストラップがも

らえるの！」

彼女は重度のゲコラー（ゲコ太ファンの通称）だ。それは、当麻も夏休みのころから薄々知っていたことではある。

「という訳で、一緒に加入しなさい」

「……要はストラップ目当てかよ。っていうか、カエルならもう持っているんじゃない」

その言葉に、御坂はつかみかかるように叫んだ。

「カエルじゃなくて、ゲコ太！」

どうやら、当麻は彼女のゲコラーとしての地雷を思い切り踏み抜いてしまったらしい。

「ゲコ太はこの子の隣に住んでるおじさんで乗り物に弱くてゲコゲコしちゃうからゲコ太って呼ばれてんのよ！　こんな簡単な違いが分からないほどアンタおっさんだった訳!？」

別に、男子高校生にまで浸透しているほどゲコ太は人気のあるキャラクターではないのだが、それでも彼女としては当麻の言葉を許せなかったらしい。

「とにかく、加入す・る・の！」

その気迫が感じられる表情に、当麻もしぶしぶ御坂に付き合うことを決めたのだが、ふと思いついたように言う。

「で、でもさ。ペア契約ってそもそも、恋人同士とかで加入するもんなんじゃ」

すると、その『恋人』という言葉聞いた御坂は耳まで顔を赤くした。

「い、いやバカ、違うわよ！　何言っているのアンタ！　べっ、別に男女って書いてあるだけで恋人同士じゃなきゃいけないって訳じゃ、そうよ、例えば夫婦だって問題ないでしょうが!!」

「もしもし。恋人よりも重たくなってますよ御坂さん」

当麻のつつこみに、御坂はさらに一段と顔を赤くすると、当麻の手の首をがっしりとつかむ。

「ば、罰ゲームなんだから、あんたは文句言わずについてきなさい！」

そして、そう言うとき当麻を店の中へと引きずり込んだ。

すると、カウンターで書類手続きをしてくれた店員さんが一言。

「書類の作成にあたって写真が必要なんですが、お持ちでしょうか？」

「証明写真とかですか？」

え？ と御坂はキョトン、とした表情で、店員に尋ねる。

しかし、店員さんは接客用の笑顔を浮かべながら、

「いえ、これはペア契約でして、登録に当たって『このお二方はペアである』事を証明していただきたいだけなので。ツーショットであれば、携帯の写真などでも」

そんな訳で、彼らは写真撮影のために一度サービス店の外へ出た。ツーショット。

映画や漫画などで、『恋人同士』がよくやる、あのツーショット。

そう考えるだけで、御坂の頭は沸騰してしまいそうである。

「証明写真のボックスを探すの面倒だし、携帯のカメラでさっさと済みますか。御坂、お前って他にデジカメとか持ってないよな」

「え？ ええ、まあ、私の携帯電話はカウンターに預けちゃったし」

しかし、傍から見てもテンパリまくっている御坂とは対称的に当麻は、魔術師との戦いをして一切壊れる様子のない、頑丈さが売りの自分の携帯電話を出す。

「じゃあ、撮るぞー」

当麻はそう言つて携帯電話のカメラを自分の方へと向けるのだが、顔を赤く染めている御坂は明後日の方向を向いている。

その様子に、当麻は怪訝そうな表情をすると御坂に言った。

「一応聞いておくけど、これお前が言い出したことだよな？」

「わ、分かっているわよー」

当麻が少しも恥じる様子のないことに、御坂は一層緊張が増してしまっていたのだが、それでも一度拳を握りしめて「待ってなさい、ゲコ太！」と気合を入れると、一気に当麻に寄り添うとカメラの方を向く。

思い切りのいいその行動に、さすがの当麻も少し緊張しながら「と、撮るぞ」とだけ言うと、カメラに自分たちがばっちり収まっていることを確認する。

寄り添うために、片腕を互いに相手の背中に回していることが、さらに緊張感を加速させるが、そのまま親指でシャッターを切る――

――その瞬間に、ドロップキックを喰らわされた。

「つたく、新参者の奴隷と思って甘く見ていたのが間違いでしたの」
当麻を地面にたたき伏せた白井が言う。

「お姉さまも、さつきからあちこちで大盤振る舞いを」

最近、白井は睡眠不足であった。というのも、全て彼女の憧れるお姉さま（の寝言）が原因である。

愛しのお姉様がまさに恋する少女のように、彼女のベッドの枕をまるで何かを代用するかのようぎゅっと握りしめ、甘い声で『んふふ……。罰ゲームなんだから、何でも言う事聞かなくちゃいけないだからねえー』とか、それはとても幸せそうな感じで呟いているのを聞くと、寝てもいられなくなってしまったのだった。

「か、勘違いしてんじゃないわよ！ 私はまだ、ゲコ太ストラップが欲しくて、ペア契約用の写真を！」

『ペア契約』の言葉を聞いた白井は、自分の頭を抑えながら、お嬢様らしからぬ様子でぶんぶん振り回す。

「だったら、わたくしとお姉さまがペアになれば何の問題もありませんの！ さ、行きますわよお姉さま。ここらで一生の思い出を作ってしまうのですの」

先ほどとは一転して、甘い声と共に御坂の腕をつかんで携帯電話サービス店へと連行していく。

すると、ドロップキックされて地面に倒されたままその様子を見ていた当麻は、事態の解決方法を見つけたかのごとく、言った。

「それでオツケーなら、俺はもう帰っちゃってもいい？」

「男女のペアじゃなきゃダメだって、言っているでしょうがー！」
返事と共に10億ボルトの雷撃をもらおう当麻。

その後、彼女は「ゲコ太だけじゃなくて、ピヨ子までー！」とゲコラーモード全開状態になってしまったので、その喜びの叫びを聞きながら、当麻は外でその声を聞きながら待たされることとなった。

すると、そこに別の少女が現れる。

「はあ、手続き終わったのか？　って、あれ？」

そこに現れたのは、御坂美琴と全く同じ容姿をしていて、常盤台の制服まで全く同じものを着た少女だった。

しかし、彼女とはどこか雰囲気が違う。さらに、未だにサービス店からは御坂の声が聞こえてきているので当麻は彼女の正体に気が付いた。

「ひよつとしてお前、御坂妹の方か？」

「はい、とミサカは念のため、10032号と^{シリアルナンバー}検体番号を付け加えて返答します」

「-googleつけてなかったから、すぐに分からなかったぜ」

妹達の^{シスターズ}検体番号10032号、通称御坂妹。8月に当麻と駿斗、そして御坂と最愛によって命を救われた、御坂美琴のクローンの個体である。

彼女は、自身の手を自分の胸の高さで水平にすると、当麻に訊いた。

「これくらいのミサカを見かけなかったでしょうか、とミサカは自分の胸のちよつと下あたりを指し示します」

「ああ、えつと……^{ラストオーダー}打ち止め、だっけ？　絹旗や黒夜から聞いたけど、お前らサイズ変更とかつてできたのか？」

先ほど最愛と海鳥が一方通行に接触していたが、前述したように彼女たちは御坂妹、そしてミサカネットワークを通じて打ち止めと一方通行のことをある程度は知っている。もっとも、妹達の1人が一方通行とともにいると聞いた場合、御坂は何をするかわからないので、しばらくは伏せておこう、という方向で話をまとめてあるが。

「その様子から見ると、あまり知らないようですね、とミサカはあなたの役立たずっぷりに落胆します」

当麻の疑問を御坂妹は軽くスルーしつつ、さりげなく毒を吐いた。「ミサカは-googleを奪われてしまったので、早急に回収しなければならぬのです、とミサカは暗に手伝えと上目づかいで頼んでみます」

この強引さには、どこか先ほどの二の舞の雰囲気を感じさせられ

る。

男を強引に引きずり回そうとするのは、御坂の遺伝子を持った女性にデフォルトで備わっているステータスなのだろうか。

当麻はしぶしぶ彼女に付き合うことになった。

争いの前の静けさ

(……当麻が今、女関係で苦労している気がする)

当麻がそんなふうに着苦している一方で、駿斗は佐天、最愛、海鳥とウインドウショッピングに連れられていた。

「あ、この小物入れかわいいデザインですよ」

「あった！ イルカのデザインのペン立て！」

「これ、C級映画の傑作のデザインのハンカチじゃないですか！」

当然のことながら、ショッピングを楽しんでいるのは3人の少女なのであるが、駿斗も半ば無理矢理に買い与えられた赤いシャツと青と緑のシャツを入れた紙袋を持っている。

当然のことながら駿斗は遠慮したのだが、「人に貸しを作ったままにしようとしたってそうはいかない」と彼女たちが買い与えたのだった。

(ま、こうやって貰い物をするのは嬉しいものだし、いいか)

駿斗はそう考えて、必要以上に遠慮をするのも考えものか、と思いい彼女たちの好意をありがたく受け取ったのだった。

「で、これからどうする？ 他の服も見てみるか？」

「買い物を通り終わったところで、駿斗が3人に訊く。

「どっかファミレスでも入りませんか？ まあ、いつも通りといいますか」

「そうだな」

そんな少女たちの言葉を聞いた駿斗は、「OK」とだけ言った。

(こういうところが、男女の差なんだろうなあ)

駿斗たちにとって、ファミレスでお茶をしたりだとか休憩に使ったりだとかは基本的にしない。ファミレスは、食事以外には宿題が多いときなどに使うのが基本的な『彼らの』使い方である。

反対に、彼女たちは日頃から結構ファミレスで友達どうしで集まることも多い。彼女たちの場合は、基本的にはドリンクバーオンリー若しくは、スイーツ系を1品頼む、といった感じである。(スイーツを大量に注文する初春は例外)

そんな訳で、彼らは近くのファミレスで休憩することにした。この店にしても、彼女たちにとっては『通り慣れた』店なのであるが、駿斗からすると『時々しか来ない』場所なのであった。

「私はマロンパフェで」

「私も佐天と同じで」

「私も同じです」

女子3人は、季節もののマロンパフェを注文する。

「じゃあ、マロンパフェが3つな。あと、アイスのストレートティーで」

「かしこまりました」

最後に俺が注文をして、店員さんがテーブルを離れたところでゆっくりと話をしていった。

「今更のようだけど、冬服は今日からだったよな。3人とも、似合っていて可愛いぞ」

駿斗がそんなことを言うと、3人の少女の頬が赤く染まる。

「い、一々そんなことを普通に……」

と、佐天は恥ずかしそうに俯いてしまう。

それを見た駿斗は、少しデリカシーが足りなかったか、と考え直す。その様子を見ていた最愛が言った。

「これが『かみやん・はやとん病』ですか……」

「おい待て、その名前をお前らどこで聞いた」

『かみやん・はやとん病』。

土御門元春が名付けたその病（笑）は『無意識に女性とフラグを立てる病気』。特に、彼らが何か危険を冒すたびに、感染が確認される場合が多いとの報告がある。

もともとの名前は『かみやん病』だったのだが（校内のフラグは当麻の方が圧倒的に目立つため）、実は駿斗も当麻の陰で無意識のうちに旗を立てていることが確認されたため、この名前がつけられた。

「この間、繚乱家政女学校からきた土御門舞夏っていうメイドに会ったから」

「舞夏は『兄貴が言っていた』とか超言っていましたけれど」

そうか、と駿斗は表向きには冷静を保ちつつ幼馴染の話聞いた。(とりあえず、最愛に変なことを吹き込んだ土御門の野郎は今度ぶっ飛ばす)

だが表向きの様子とは裏腹に、心の中で明日の第一優先目標を定める駿斗。しかし、その間にも少女たちの会話は進んで行く。

「常盤台は繚乱家政女学校からメイドを呼んでいるの?」

「正確には、そのメイドの見習いである繚乱の生徒を、実地研修という形で出しているらしいがな」

繚乱家政女学校は、道路のガム剥がしから各国の首脳会議に至る、あらゆる局面で主人を補佐することの出来るスペシャリスト育成を目指しているメイド養育施設である。土曜も日曜も無く夏休みも存在せず、『真のメイドさんには休息はいらないうのが校則』であるとのこと。

「舞夏が言うには、全員が実地研修できるわけではないらしいがな」

その中で、一部のエリートメイドは学園都市内を縦横無尽に『実地研修』することが出来る。つまり、舞夏はその『一部のエリート』に属する優等生なのだ。

駿斗ははあ、とため息をつくと言う。

「とにかく、俺は当麻のような旗製造機フラグメーカーではないんだから、その名称はやめてくれ」

「嘘を言うな(言わないでください)」

彼の申請は、少女3人にコンマ数秒で却下された。その行動に、駿斗本人は訳が分からないといった表情をしている。

新たな武器を携えている駿斗であったが、彼は今日も平常運転である。

「確か、あんたは罰ゲームで今日1日私の言うことを聞くことになってたわよね……。だというのに、アンタはあちこちでいい顔しやがって! そんなに『妹』って響きが好きかコラアーツ!」

当麻は御坂妹にネックレスをプレゼントした結果、その姉からビリ

ビリ攻撃を喰らってしまった。

「ところでお姉さまはここで何を、とミサカは情報収集を開始します」
「え？ いや、まあ……大覇星祭で罰ゲームに私が勝ったから、私があいつを引きずり回しているってだけで」

その言葉を聞いた御坂妹は、相変わらずの無表情で告げる。

「つまりお姉さまは、素直になれないのですか？ と、ミサカは情報を分析します」

「わ、私に裏表なんかないわよ！ 大体、こんなやつに素直になんて……」

その思いがけぬカウンターに、御坂は顔を真っ赤にして叫んだ。

すると、妹は（いつもと同じであるが）極めて冷静な調子で行動する。

「そうですか、ではミサカはお姉さまとは違う道を歩んでみます」

そして、自然な調子で当麻の方に歩み寄ると、その右腕をつかんで抱きしめる。さらに、彼女は銀色に光るハート形のネックレスを取り出して言った。

「ちらり、とミサカはさりげなく買ってもらったアクセサリーをお姉さまに見せつけてみます」

その一方的ともいえる攻撃に、御坂はたじろぐ。するとそこに、さらに状況を混沌カオスに陥れる少女が現れた。

「ミサカも反対側から抱き付いてみる、ってミサカはミサカは面白そうなことに混ぜてもらってみたい！」

打ち止めが、勢いよくその右腕に飛びつく。

「って、打ち止め!?!」

「ミサカの前に現れるとはいい度胸ですね、とミサカはにわかには本気モードへと移行します」

そして、彼女たちは速やかに去って行った。

「……何だったんだ？」

「さあ？ っていうか、あの子も妹達シスターズなの？」

そして、あまりのドタバタぶりに、彼らの険悪な雰囲気は霧散していった。

その後、御坂はイライラをゲームセンターのパンチングマシンへぶつけに行つたのだが、当麻は地下街のベンチに座り込んだ。

「はあ、なんていうか、不幸だ」

そこに、再び打ち止めが現れる。

「何を疲労感に肩を落としているの、ってミスカはミスカは癒し系マスコットとしてあなたの背中に張り付いてみたり」

彼女は、ベンチに座っている当麻に後ろから抱き付いた。

「……で、お前は妹達を束ねているホストコンピューターみたいなものだっけ?」

彼女をベンチに座らせた当麻が言う。

「ホストと言うよりはコンソールに近いかも、ってミスカはミスカは訂正してみたり。ミスカの中心点はどこにもなくて、ネットワークの中で特定の個体が核として存在することにはあんまり意味がないの、ってミスカはミスカは偉そうに胸を張って講釈してみる」

打ち止めはそう言うが、あまり頭のよろしくない当麻としては正直なところちんぷんかんぷんである。

これは、駿斗が最愛、海鳥あたりに訊いた方が早そうだ。

「あのね、ミスカは『実験』の時にあなたたちに助けてもらったから、お礼を言いに来たの、ってミスカはミスカは鶴の恩返し的展開を提示してみたり。キヌハタとクロヨルには会えたけど、あなたたちにはなかなか会えなかったの、ってミスカはミスカは中々会えなかったことが寂しかったことを伝えてみる」

そう説明する打ち止めに対し、当麻はやる気ゼロの顔で言った。

「で、本音は?」

「一瞬たりとも信用してないし、ってミスカはミスカは地団駄を踏んでみたり!」

当麻はやはり、女の子の相手は苦手だ、と思った。

「悪い、悪かった。あそこでポップコーン売ってるからそれでお許しください」

なんとか打ち止めの機嫌を取るために、当麻は屋台を指さして言うてみる。すると、打ち止めはその方向をちらり、と見てから当麻に向

き直った。

「女の子の繊細な心理を食べ物ごときで誘導できると思ってるの!?
ってミサカはミサカは愕然としてみる!!」

インデックスや御坂妹にも通じたので、女の子には甘いものが最善の手札だと思っただが、どうやら違うらしい。

当麻はそう反省する。

そんな頃、そこに1組の少年少女が向かっていた。

学園都市の繁華街を、霧ヶ丘女学院の夏服を着た地味な見た目の少女が1人、歩いていった。

腰まで延ばされた茶色いその髪は、何も手が加えられていないようでその先に癖が残っている。そして、その髪は顔の横で1か所だけゴムで括られていた。

その整った顔立ちには大きなメガネがかけられているが、彼女に起こっている『ノイズ』は非常に周囲の注目を浴びる原因となっていた。

電波環境の悪い場所で聞くラジオのように、ザザザというノイズが走るたびに彼女のスタイルの良い輪郭がぶれる。そして、幾度かそれが繰り返されたとき、少女は冬服へと衣装が変わり、よりはつきりとした輪郭を見せた。

彼女は注目されているものの、それを恐れているような人間はいない。この街では驚異的な科学が搭載されたものが日常茶飯事であるからだ。

さらに、超能力開発を行っているということも合わせて考えると、周囲の人々にはこういった不自然な現象も『何かの能力か科学技術だろう』という一言で片づけられてしまうのである。

「これか、通報にあったのは」

そこに2人の大人の男が現れた。彼らは『警備員』アンチスキルである。

「全く、良くできた立体映像だな。全く、手の込んだいたずらしやがって」

彼らは、『彼女』のことをそう分析した。その言葉に『少女』は一瞬

だけ表情を歪めると、顔を俯かせる。

「本部に連絡して、該当する能力者を洗い出してもらおうか」

そうして、『少女』——風斬氷華は周囲に違和感なく許容されてしま
う。

それ以上の何なのかを、まったく知られないまま。

「……で、そいつがエリアU、つまり地下街用だったってわけ」

ラストオーダー アクセラレータ
打ち止めが一方通行の下からいなくなった。

迷子の彼女を探すために、一方通行は警備員である黄泉川の助けを
借りながら、彼女の捜索をしていた。

「で、俺にそこに向かえってことかア」

『一先ずはね。もつとも、あのすばしっこい子がまだあそこにいると
は限らないけど』

黄泉川は、そこで一度言葉を切った。

『ねえ、一方通行。人に好意を向けることがそんなに怖い？』

「なんだと？」

彼は打ち止めの好意を受け入れているみたいだが、その一方で自分
から好意を向けることには拒んでいる。——裏目に出て取り返しの
つかなくなるのが怖いから。

『君が、昔いた場所が場所だけにね』

「特力研、か」

特例能力者多重調整技術研究所——通称、特力研。

一方通行は9歳までそこに放り込まれていた。

「あそこは生きた人間を処分するための掃き溜めさ」

学園都市にかつて存在した、多重能力者の研究・実験施設であり、現
在の常識である『多重能力の実現は不可能である』という学説はここ
で行われた『実験』で示された——つまり、数多くの『失敗』によつ
て。

そして、そこを制圧・解体したのは黄泉川の率いる警備員の部隊
だった。

『私も見たよ。重たい扉の向こうに横たわっているそれを』

「俺はその特力研すら持て余すほどの『怪物』だった。芳川から聞いてんだろ。俺が『実験』で何をしてきたのか……。好意を向けるなんて、不可能なんだ」

しかし、それでも彼女は話し続ける。

『だけど、それでも君はそんな自分を嫌悪している。違う？ これは、私が自分に課しているルールなんだけど、私は子供に対して武器を向けない。例え、それが能力者であってもね。どうしてか分かる？ そういうことよ。確かに、君に比べたら比べようもないほど軽いものかもしれないけれど、それでも負債を抱えていることには変わりない』
「だったら、どんなに無様でも払い続けるしかないじゃんよ。そう黄泉川は言った。」

『君には私と違って力がある。手はいくらでもあるじゃんよ』

もしも、この力で『実験』を止めていけば。

もしも、この力で死に突き進むことしか知らなかった妹達シスターズを押さえつけることができたら。

もしも、今からでも遅くないならば……。

「くっだらねエ」

そんな考えを、一方通行は一蹴する。

『そのくだらないものの積み重ねが、負債を返していくじゃんよ』

そして、一方通行が移動した先で会ったのは、銀髪のシスターであつた。

「……なんだこれは」

ただし、腹から愉快的な音を立てながら倒れていたが。

仕方がないので、一方通行は彼女に近くのファーストフード店でハンバーガーを奢ることにしたのであつたが。

「でね、私はとうまかはやとを探していたんだけど、途中でおながが減っちゃって、それでね」

目の前のシスターは、ハンバーガーを食べつつジュースを飲み干していく。

「……食うか喋るかどっちかにしろオ。つか、俺に何か言うことが

あるんじゃないかねエのか」

一方通行のその言葉に、彼女は一気にハンバーガーをその小さな口に押し込むと言った。

「うん、ありがとね」

「一言かよ、オイ」

シスターはテーブルの上のペットボトル程の大きさのあるジュースのボトルの中身を一気に口の中に流し込んで飲み干していく。

「えつとね、私の名前はインデックスって言うんだよ」

「きたねえ面で自己紹介か？」

彼女の口元が汚れているのを見た一方通行は、彼女にポケットティッシュを渡す。そして、携帯電話を操作すると、打ち止めの写真を呼び出した。

「オマエ、このガキを見た事があるか？」

「いや、知らないけど」

即答。その返事に、やるべきことはやったとばかりに、一方通行は立ち上がる。

「もう行っちゃうの？」

「ああ、あいにくと大忙しだ」

しかし、インデックスがその次に発した言葉に、彼は思わず立ち止まった。

「私はどうまかはやとを探していたんだけど、よく考えたらさいあいかうみどりでも良かったかも」

さいあいかうみどり——最愛か海鳥。

絹旗最愛か、黒夜海鳥？

(どオしてこのガキが、『暗闇の五月計画』の残骸のことを知ってやがる?)

すると、先ほど彼女が言っていた言葉を思い出した。

『私はどうまかはやとを探していた』

まさかとは思うが、その2人がおそらく『あの日』に突然現れた4人の中にいた男なのだろうか。

一方通行はチツ、と忌々しげに舌を鳴らすと、ファーストフード店

を去って行った。インデックスは、慌ててその後を追いかける。

「でね、とうまもはやとも、2人ともいつつも私のことを置いてけぼりにしちゃうんだよ。あれはもう、1種の放浪癖なのかも。気が付いたら旅に出ている人なんだよ」

地下街の中を歩く一方通行を、後ろからインデックスが騒がしく追いかける。一方通行のチョーカーにとって、電波の悪い地下はあまり好まないのだが、ここは多くの人が集うためか、電波環境が良いようだ。

しかし、先ほどからインデックスが話す2人の少年の話が、一方通行を苛立たせていた。

「ところで、あなたはここで何をしているの?」

そして、いつも話が唐突に変わる。

「人探しだ」

「さっきのケータイの子?」

「だったら、何だ」

一方通行は現代的なデザインの杖を右手一本で突きながら、歩く。

「そういえば、まだお礼をしてなかったね」

「いいから帰れ、クソガキ」

「まだ、お礼をしてなかったね」

「俺の言ったことをスルーしてんじゃねエぞ!」

どうもやりづらい。この少女といい、あのガキといい、自分は年下の無邪気な女に対して苦手なのだろうか。

「とうまかはやとが見つかるまで、一緒に探してあげても良いよ?」

ね? と無邪気な笑顔で首を傾げる少女に対し、一方通行は思わず立ち止まって下を向くと、呟いた。

「……クソツタレが」

当麻が携帯電話の時計を見た時には、18時を回っていた。

「と、もうこんな時間か」

「うん、もう行くね。本当はもっと一緒にいたかったし、もう1人にも

会いたかったけど、ってミサカはミサカはしょんぼりしてみたり。ここで会ったのはたまたまだったけど、お礼をしたかったのは本当だし、ってミサカはミサカは心中を吐露してみる」

そう語る打ち止めは、それまでとは異なっただけその表情にどこか暗い影を落としていた。

「でも、あの人が心配すると思うんだ」

「あの人が？」

当麻は訊く。

最愛と海鳥は知っているが、駿斗と当麻は知らない。今彼女の側にいる相手を。

「あんまり遅いとミサカを探しに来るかもしれないし。ミサカも迷惑とかはかけたくないから、ってミサカはミサカは笑いながら言うてる」

打ち止めがそう言って、少し寂しげな笑顔を浮かべる。

すると、その話を聞いた当麻が言った。

「ふうん、いいやつそうじゃないか、そいつ」

「……弱いんだよ」

だが、打ち止めは寂しそうな表情のまま言った。

「あの人はいっぱい傷ついて……手の中の物を守れなかったばかりか、それをすくっていった両手もボロボロになっちゃっているの、ってミサカはミサカは断片的に情報を伝えてみたり。だからこれ以上は負担をかけたくないし。今度はミサカが守ってあげるんだ、ってミサカはミサカは打ち明けてみる」

そう言って顔を上げた打ち止めを見て、当麻は「そっか」とだけ言った。

打ち止めにも前に『実験』以外の何かがあって、その時にその人から守られたのだろう。それしか分からないが、今はそれだけを知れば十分な気がした。

打ち止めは、そう言って去って行った。

「あ、とうまだ……」

一方通行の共に歩いていたインデックスが、一点を見つめながらピタリと動きを止める。彼女は通路の先、地下街にあふれる人々の中を見ている。

「オマエが捜してたヤツか」

「うん」

すると、一方通行もその時自分に向けて手を振って来る1人の少女に気が付いた。

その少女は、相変わらずの無邪気な笑顔である。

「行けよ」

そう言った一方通行に、インデックスが心配そうに訊く。

「でも、あなたの知り合いの方は？」

「心配すんな。こつちも今見つけた」

吐き捨てるように言うと、一方通行は彼女に呼びかける。

「ラストオーダーッ！」

自身が呼ばれた事に気付いたその小さな少女は、彼の方を見ると、笑顔を向けながらまっすぐに駆けて行く。

「じゃあ行くね。ありがとう」

その横で、インデックスも駆け出した。

「とうま!!」

彼女たちは振り返らない。科学と魔術、2人の少女は地下街の一点で一瞬交差するが、お互いに気付かないまま離れていく。

「じゃあ、俺も佐天さんを寮まで送ったら帰るからな。お前らも、ちゃんと門限に間に合うように帰ろよ」

そう言つて、駿斗は最愛、海鳥と別れた。

暗い夜道で、佐天と2人きりなのであるが、彼は普通に雑談を交わしながら帰り道を進んで行く。

「つーか、結構遅くなっちゃったよな。こういう時、門限がないのは助かる」

「そうですね。御坂さんたちの話を聞いてみると、大変そうですね。」

佐天がそう返事をしたとき、駿斗の携帯が軽快な着信音を奏でた。

駿斗は佐天に断りを入れた後で、電話に出る。

「当麻か、どうした？」

『ああ、実はさっき打ち止めに会ったからな。今はインデックスを追いかけているけど』

打ち止めか、と駿斗はその言葉を反芻する。

「ていうか、何でインデックスを追いかけているんだ？ もう帰ったんじゃないのか？」

『ああ、御坂との罰ゲームは途中で御坂妹に会ったら、何だかうやむやになっちまって。どうしてあんなに機嫌が悪かったんだ、あいつ？』

大体察しがついたが、駿斗はあえて黙っておくことにする。

『それで、なんか知らないけどインデックスが親切な人にハンバーガーを奢ってもらったみたいで。その時に渡されたポケットティッシュを、あいつ律儀に返しに行ったから、それを追いかけているんだけ——何だ？』

その時、電話口の向こうからバタバタ、と何かが倒れるような音がした。

それと同時に、駿斗は気づく。

『ど、どうしました？ もしもし、もしもし？』

「当麻！」

駿斗の大声に佐天さんが驚いているが、それを無視して彼は話し続ける。

『おい、駿斗、急に近くの警備員アンチスキルが倒れて——』

「魔術だ！ 大規模な魔術が発生している！」

駿斗は、佐天さんに聞かれないように口を手で覆いながら話す。

「とりあえず、俺はすぐに佐天さんを寮に送り届ける。その後、一度合流するぞ！」

そして、彼は怪訝そうな表情をしていた佐天を突然抱き上げると、高速移動術式を使用して駆け出した。

(くそ、嫌な予想が的中じゃねーか！)
懐にある幻想イマジン・コアロッド核杖の存在に注意を向けながら、駿斗はひたすら走り続けた。

そして引き金は引かれる

「おおー、雨が降ってる、ってミサカはミサカは夜空を見上げてみたり。ミサカはお月様を見たかったのに、ってちよつとしょんぼりしてみる」

最終下校時刻を過ぎて雨も降り始めた真つ暗な街の道中で、ラストオーダー打ち止めは万歳するように両手を空へと向けながら雨をその掌で受ける。その一方で、アクセラレータ一方通行はそんな打ち止めを、気怠げな様子で眺めていた。

「鬱陶しいからその辺で固まってる」

「ミサカはお月さまが見たかったのに、ってミサカはミサカは」

「おい」

先ほどから落ち着きのない打ち止めの襟元を、一方通行は手でがちりと捕まえた。

「ちよろちよろすんなって言っているだろオが、クソガキ」

「ミサカはここまで過保護にされなくても大丈夫かも、ってミサカはミサカは自由と解放を求めてみたり」

「何をフロンティア精神に溢れた寝言吐いてんだコラ。そもそも保護なんてしてねエし」

その言葉に、打ち止めは笑顔を見せて言った。

「またまたー、そんなに照れなくっても、ってミサカはミサカは人差し指でつんつんしてみた——何故そこで力強く拳が握られるの？ つてミサカはミサカは激情緩和用にこやかスマイルを浮かべて尋ねてみたり」

やはりこいつといると疲れる、というのが一方通行の感想だった。はあ、と思わず口からため息が漏れる。

『ねえ、一方通行。人に好意を向けることがそんなに怖い？』

そんな中、今日黄泉川から言われた言葉を思い出した。

『君は打ち止めの好意を受け入れているみたいだけれど、その一方で自分から好意を向けることには拒んでいる。——裏目に出て取り返しのつかなくなることが怖いから』

見透かされているのか、と一方通行は考える。

(……あのガキどもはどオなんだ)

彼は自分の『自分パーソナルリアリティだけの現実』の一部を無理矢理植え付けられた、2人の少女を思い返した。

彼女らも、つい最近までは学園都市の『闇』の真ただ中にいたはずだ。

と、その時、「痛っー!」と甲高い声が響いた。

「転んだー、ってミサカはミサカは地べたで状況報告してみたり」

打ち止めが女の子座りの状態で、濡れた道路に尻をついている。

どうやら、小雨で濡れた路面で足を滑らして転んでしまったようだ。

「つたく、言わんこつちゃねえだろオが」

彼女の両膝には擦り傷ができており、そこからは赤いものが滲んでいた。

「消毒が必要かも、ってミサカはミサカはちよつと涙目になってみたり」

打ち止めが、泣きそうになって少し掠れている声で言う。

「ツバでも付けとけよ」

一方通行はぶっきらぼうに言う。鬱陶しい、と言わんばかりの様子だった。

しかし、実際に雨も降り始めているため、あまり長い間外にいたくはないのも事実だった。

「分かった、ってミサカはミサカは納得してみたり。ここは痛いけど我慢してみる、ってミサカはミサカはテクテク歩いてあなたの後ろを歩いていてみる」

すると、打ち止めは傷についてそれ以上言及しようともせず、立ち上がったて歩き出した。

しかし、歩くペースがそれまでと明らかに違う。

いつもなら、常に元気いっぱい一方通行の周りを騒がしく走り回るのだが、今は彼の少し後をぽつぽつと歩いているだけであった。

「……クソツツたれが」

一方通行は、杖をついていない、もう一方の手で打ち止めのおでこに指を当てて、そのまま後ろにあつた屋根のついているバス停のベンチへ倒すように座らせた。

「わっ！ ってミサカはミサカ——？」

突然の行動に驚く打ち止めであつたが、そこでようやく自分が無理矢理ベンチに座らせられたことに気が付く。

一方通行は、そのままぶつきらぼうに言った。

「そこで待ってろ。勝手に動いたら叩き潰すぞ」

彼は、少し離れた場所にある薬局へと向かう。

店内で絆創膏の箱を手にとったときは1度「……バカげてやがる」と呟いたが、それでもその箱を購入して打ち止めの下へ歩いた。

彼自身にも、慣れないことをやっている自覚は十分にある。

だが、

『そのくだらないことの積み重ねが、負債を返していくじゃんよ』

今日の黄泉川の言葉が、再び一方通行の脳裏によみがえる。

「クソツタレが」

思わずそう言った時、彼は気配を感じた。それは一方通行にとって、非常に慣れたものだ。

迷わず、首の黒いチョーカーのスイッチを切り替える。

そして、

ゴン！！ と。

猛スピードで突っ込んできた黒いワンボックスカーが、一方通行に激突した。

その運動量を『反射』した一方通行は当然無傷。

対称的に、ワンボックスカーはガードレールがひしゃげて折れ曲がり、自動車のライトやフロントガラスが細かく砕け散って周囲に残骸をまき散らしていた。

一方通行は黙って振り返る。

ひしゃげた運転席では、ゴーグルに黒ずくめの服で全身を隠した男

が悲鳴を上げそうになっていた。

「まあ、来ると思ってたんだこういうバカが。俺に恨みがある奴か、俺を利用しようとするやつか。どっちかは知らねえが」

一方通行は、その名の通り一方通行いっぽうつうこうに宣言した。

「ブチ殺す」

一方通行が彼らを蹂躪する。

男たちの顎を砕き、壁へと投げ叩き付け、皮膚さえ剥いで一方的な暴力を振るっていく。

「演出」苦勞オ！ 華々しく散らせてやるから感謝しろオ」

炎の中で一方通行が声高に叫んだとき、前方に停止していた男たちの車の中から1人分の影が現れた。

「だーから言ってるんじやねえかよお、あのガキ潰すにやこんなもんじや駄目なんだよ……だから最初から俺が出るつつつてんじやねえか」

その白衣をまとった男は、顔に入れ墨がされており、そしてその手には、文字通り1マイクロメートルクラスの繊細な作業を可能とする機械製のグローブ——マイクロマニピュレーターを装備していた。

「木原クンよオ、何だアその思わせぶりな登場の仕方はア？」

その男の名前は木原数多。

かつて、学園都市最強の超能力者レベル5の能力開発を行っていた、学園都市で最も優秀な能力開発研究者であった。

「俺としてもテメエと会うのはお断りなんだけどなあ。上の命令だから、仕方なくやっているんだ。なんでも、緊急の事態だから手段を選んでいる余裕はないんだと」

木原数多は、片手で頭を掻きながら面倒くさそうに言う。

「だからまあ、悪いけどここので潰されてくれねえか」

木原数多と一方通行。両者の眼光が激突する。

そして、木原数多は『反射』が適用されているはずの一方通行にまっすぐにその拳を突き出し——

——ガキイン、とかん高い音と共に、その体が後ろに吹き飛ばされた。

そう、一方通行の『反射』をこの男は突破した。
奇しくも、かつての無能力者と同じ『拳』という獲物で。

一方通行は驚いて体制を立て直す。

(どオいうことだ、チョーカーは正常なはずなのに、反射が効いてない!?)

彼とは対照的に、木原数多は冷静だった。

「おい、もう一度訊くけどよ……そのつまんねえ力を開発してやったのは、どこの誰だと思ってるんだ、クソガキが！」

木原数多の拳が一方通行を後方へと殴り飛ばす。その拍子に、一方通行の提げていたビニール袋から、絆創膏の箱が飛び出した。

それを木原数多は踏み潰す。

「似合わないねえ。ま、あれはこっちで回収しておくから安心しろ」

「っ!? なめてんじやねエぞ！」

一方通行は風のベクトルを操って、暴風を目の前の男に向かって打ち出す。しかし、突如として発生した高周波の音によって、霧散した。

『ベクトル操作』によつて風を攻撃手段とするのは、通常の風力使用^{エアロニューター}のような能力者と異なり、カオス演算を含めた非常に複雑なものとなる。したがって、彼の演算の死角となる波長、振動数、方向性を持った音波で簡単に妨害できてしまうのだ。

一方的な暴力が、彼を襲った。

しかし、そこに1人の少女が現れる。

「そこで何をしてるの?」

先ほど昼食を奢らされた銀髪のシスターだった。そして、彼は木原数多の部下である黒服の男たち——^{ハウンドドッグ} 獵犬部隊の気がそれたその瞬間を見逃さない。

「っ! 打ち止めアー!」
ラストオーダー

間一髪で、回収されかけた打ち止めを風によって吹き飛ばす。

(誰か、あのがきを……)

一方通行は誰に願うともなく、願った。

「くそ、インデックスの野郎、どこにいったんだ……?」

上条当麻は雨の中を走り回っていた。今日は傘を持っていなかったのだが、インデックスを頼っておくわけにはいかない。

彼女は完全記憶能力もちにもかかわらず、なぜか迷子になるのだった。

このままでは確実に、なぜかいつもよりも数の多い『警備員』^{アンチスキル}の補導対象になる。ものすごく面倒な事態になる。

今は、駿斗と電話をしながら夜道を走っていた。

「ああ、実はさつき打ち止めに会ったからな。今はインデックスを追いかけているけど」

持たせている0円ケータイにも通じないし、とりあえず探してみるしかなさそうさだ。

と、そう思ったその時。

ゴトリ、と妙な音が耳に着いた。

(何が……?)

当麻は頭に疑問符を浮かべながら辺りを見渡す。すると、そこには異様な光景が広がっていた。

何人もの人が地面に倒れている。それも……

(警備員?)

「ど、どうしました? もしもし、もしもし?」

当麻は、すぐに彼らの1人の下に駆けつけて、重体でないことを確認する。

「おい駿斗、急に近くの警備員アンチスキルが倒れて——」

『魔術だ! 大規模な魔術が発生している!』

駿斗が慌てたように叫んでいた。

ちよつと待て、魔術だつて?

ただ単に、人が倒れたようにしか見えないのにな?

『とりあえず、俺はすぐに佐天さんを寮に送り届ける。その後、一度合流してインデックスを探すぞ!』

親友の、切羽詰まった声が聞こえてくる。

すると、倒れた警備員の無線機から、雑音と共に声が聞こえてきた。

『……入。繰り返す……、ゲートの破壊を確認！ 侵入者は市街地へ。こちらにも正体不明の攻撃を——』

ザザツ！ というノイズと共に通信が切れる。

侵入者。その言葉から、当麻は今日の昼に駿斗から渡された『硬化手袋』^{フリックグローブ}を思い出して、すぐに身に着ける。

(つまり、魔術師。それも駿斗の睨んでいたように、ローマ正教のやつの可能性が高い。もしかしたら、シエリーのように独断行動の魔術師かもしれないけれど)

しかし、それでもここまで大規模な魔術を発動させるとなると、単なる個人的な暴走をした魔術師よりは、世界で最大の十字教宗派であるローマ正教の可能性が高いだろう。

(駿斗は、たとえ襲われても自分で何とかできるかもしれない。だけど、インデックスは大丈夫なんだろうな……)

彼女にも『強制詠唱』^{スベルインターセプト}や『魔滅の声』^{シエオリラフイア}といった、魔力を必要としない攻撃手段を備えてはいるが、それがあって決して安心できるわけではない。

しかし、そう考えた時当麻の下腹部に衝撃が走った。

彼がそれを見下ろすと、10歳前後程度の容姿をしている少女がそこにいた。

「助けて……！」

彼女は、当麻がしばらく前まで一緒にいた少女であった。

「お願いだからあの人を助けてって、ミサカはミサカは頼み込んでみる！」

そして、彼女は打ち止めと呼ばれている少女であった。

黄色い装束を身にまとった、1人の女が3人の男を引き連れて、夜の街を歩いていた。

彼らは周囲に倒れている警備員を見ても、それが風景の一部、あるいは当然の光景であるかのように通り過ぎようとし、その前に1つの無線機を手を取った。

彼らが倒れている警備員たちに対して無反応である理由は酷く単純なものだ。つまり、彼らがこの事態を引き起こしているのだった。

「ハイ、アレイスター!」

女は無線機に向かって呼びかける。

彼女が何か操作をしているわけではないが、その言葉は目的の相手にも届いていた。つまり、アレイスターはこのような回線にも潜り込んでいるだろう、と予想していたのだ。

『何の用だ』

彼女の予想通り、返事があった。

学園都市の長。統括理事長、アレイスタークロウリー。

「統括理事会の顔を3つほど潰してきたところなんだけど」

『補充なら利くさ。いくらでもな』

両者は、ゆっくりと話している。

それは、互いに『化物』『怪物』などと呼ばれるレベルに達した存在同士の対話だった。

「私の素性は分かっている?」

『さあな』

『神の右席』。白を切るってのなら、それでもいいけど」

彼女は、自分の舌に長い鎖でつけられた十字架を下にたらず。

『この街を甘く見ていないか』

「ああら、自分の街の現状すらつかめていないのかしら。警備員に^{ジャッジメント}風紀委員だっけ? そんなちやっちなもので身を守ろうとするからあつさり首を取られるのよ?」

『そんなものでこの街の包囲網を砕けたと思っっているのなら、全くおめでないな。君はこの街の本当の姿をまるで理解していない』

淡々とした調子の声に、女は「へえ」と不敵な笑みを浮かべた。

『隠し玉を持っているのは、君だけではないということだ』

「何であれ、私は敵対するものを全て叩き潰すわ」

彼女は歩むのをやめて、後ろにいる3人の男たちの方へと向き直る。

「私は『前方のヴェント』。ローマ正教20億の中の最終兵器」

そして、宣言を続けた。

「この一晩で全て潰してあげる。アンタも、イマジンプレイカー幻想殺しも、イマジックリエイト幻想創造も、禁書目録も、全てをね」

彼女は手に持っていた無線機を握りつぶすと、男たち——それぞれピエール、アンドレ、ジエームスという名前があつたが——『十二使徒』に命令を下す。

「さあ、さっさと幻想殺しの死体を持ってきなさい。幻想創造については、前に言った通り私がもらうわ」

そして、ヴェント、ピエール、アンドレ、ジエームスは、各々の目標に向かって行く。

駿斗は、佐天を無理矢理彼女のアパートの部屋へと押し込めた。

「いいか、絶対に外に出るんじゃないぞ。どうやら、警備員が次々に襲われているらしい」

その真剣な声に、佐天が目を見開く。

「神谷さんっ！」

だが、彼はそのまま外へと飛び出そうとする。そこを、間一髪で腕をつかんだ。

「おい」

「だったら、神谷さんだつて危ないじゃないですか！」

佐天の声が、アパートに響いた。

彼女は知らない。彼が幻想御手事件以降から、『魔術』というものと関わってきたことを。

彼女は知らない。彼が世界に20億人の信徒を誇るローマ正教から抹殺命令が出ていることを。

そう……彼女は何も知らない。そして、知らされない。

駿斗が、彼女を巻き込むまいと考えているからだ。

だから、駿斗は言った。

「俺なら、大丈夫だ。俺は1人じゃない」

今回の事件にも、やはり親友と立ち向かえる。さらに、恐らくはイ

ンデックスも関わって来る。

それに、多分御坂もまだ学生寮に帰ってない。最愛と海鳥も、まだ帰っていないことを電話で確認している。

しかし彼女たちなら、恐らくこの街で今起こっている騒動の1つや2つに突っ込んだ挙句、無傷で帰って来るだろう。そう信じていた。

駿斗にとつて、最愛や海鳥と比べた時の佐天の違いはそこだ。

幼馴染は、たとえ面倒事に巻き込まれたとしても彼女たちの実力を信じ、待つことができる。その反面、佐天に対しては、まず彼女を安全地帯まで連れて行こうとする。

彼女を信頼していないわけではない。駿斗は、彼女を巻き込みたくないのだ。

彼の知り合いのほとんどが享受できていない、『平穏』と呼べる生活を送っているのが羨ましいから。

「悪いけれど、佐天さんはこのままこの部屋にいてくれ」

駿斗は、そう言われても彼の腕をつかむ佐天に対して、睡眠へ誘導させる術式をかけて眠らせるとベッドに寝かせ、その部屋に鍵をかけて学生寮を飛び出した。

彼はこの街に流れる力を順番に感じ取ってゆく。

(AIM拡散力場は平常通り。地脈、龍脈も同様。奇妙なのは、この街にかなりの量の天使デレズマの力が流されていることか。やはり魔術……それも、威力の高い天使の力に特化した術式)

複雑な聖書や神話については未だに勉強が追いついていないものの、駿斗は魔術について基本的な事柄についてはほとんどマスターしていた。それは、駿斗が熱心に勉強したからでもあるし、インデックスという優秀な先生がいるからでもあるし、イマジックリクエスト幻想創造によって『力』の流れを正確に感じ取ることができるからでもある。

彼は『イマジック・コアロッド幻想核杖』を取り出して、その右手に握る。そして、高速移動術式と身体制御術式を発動させて街の中を駆けて行く。

『幻想核杖』。

駿斗が、『幻想創造』という力を最大限引き出すために用意した霊装。

それは杖——火の象徴シンボリックウエポン武器の形をしているが、それは見かけだけであり、実際には四大元素の象徴武器、杖、杯、短剣、円盤——それら全ての要素を抽出して全属性に対応できるように作られている。さらには変形機構も備えており、西洋系の術式だけでなく東洋系の術式にも対応が可能だ。

他にも治療術式にも使える形態もあるし、さらには今までのコンスチテュートエンジンテレキネシス構造変換に念動力系統の能力や原子変換系の能力を加えることで完成させた新たな力、自在変換マテリアルハンドによって、別の武器へと変化させるとすらもできる。

駿斗の手の中で、その武器が赤、青、黄、緑——四大属性を象徴する色に光る。

「まずはあいつらと合流しねえと……!」

駿斗は、親友と1人の少女を目指して走る。

この街の姿

木原数多達、『ハウンドドッグ猟犬部隊』の前に突然現れたインデックス。彼らが彼女たちに意識を裂いたその一瞬について、一方通行は彼らの車の1つに乗り込む。

そして、車体の一部である鉄骨を引き抜くと、それを運転席の男にシート越しに突き刺した。

「進め。さっさと病院に行かねエと、手遅れになるぞ」

ずっとハンドルを握ったままの男は、自分の背中から感じる痛みとその言葉に戦慄し、車をUターンさせると猛スピードで走りだした。

その様子を見た木原数多は叫ぶ。

「おい、何をしている！ さっさと撃ち落せ！」

仲間の乗っている車だったために発砲をためらっていた、猟犬部隊の男たちは慌ててマシンガンを連射する。

一方通行は、未だに何もせずに子猫（スフィンクス）を抱えて立っているインデックスを車の中へ放り込んだ。

「騒ぐんじゃないぞ、そのまま直進しろ。時間がねエのはお互い様だろ」

「ど、どちらまで」

その言葉に、一方通行は「良い場所を知っているんだ」と返した。

その一方、取り残された木原数多はすぐに次の行動に移した。

「アレだアレ、アレ持って来い!!」

『アレ』ばかりで一見意味不明な命令だが、彼の部下たちは従順に行動に移した。つまり、ワンボックスカーの中から荷物を取り出したのだ。

それは、携行型の対戦車ミサイル。

彼はすばやくそれを組み立て、安全装置を解除していった。その動作には一切の躊躇いが見られない。むしろ、命令をされた部下の方が狼狽していた。

今、あの黒いワンボックスカーを運転しているのは、『猟犬部隊』の一員。つまり彼らの仲間だったのだ。

だが、木原数多には関係なかった。

ガチャ、という音と共に、木原数多は全長1mほどの黒い金属の塊を肩に担いで、側面に備え付けられているスコープに目を通す。

スコープによって、彼の目の前にワンボックスカーが大きく映される。

照準を合わせる。

(間に合う)

彼は確信と共に引き金を引こうとする。

一方通行は死なないだろうが、確実に足がなくなる。そうならば、今の彼にとって最大のネックである打ち止めはこちらに確保されたまま、さらに無関係のシスターまで巻き込もうとはしないだろう。

そうなれば、一方通行はそのまま自分に倒されるのみとなる。

「あばよクソ野郎」

そう言って引き金に指をかけた瞬間、スコープを黄色い影が遮った。

「……つたく」

木原数多は面倒くさそうに引き金を躊躇なく引いた。

町の中心で爆発が起きる。

空気が揺さぶられる。

しかし、その後に立ち込める煙は風によって吹き散らされた。どうやら、あの攻撃を防いだらしい。

そこには黄色い装束を身にまとい、片手に十字の形をした巨大なハンマーを持った人間がいた。

「いい街ね。もっと速く『侵食』が進むと思っていたのだけれど」

彼女はそう言って、男たちの方へと振り向く。

その女は顔中にピアスをつけており、その耳にも十字のピアスが付けられていた。

「何者だ？」

木原数多は気怠げに訊いた。

「殺しの商売敵」

そう彼女が答えるのを聞くと、彼は部下に「殺せ」とだけ命令して

立ち去っていく。

その様子を見ていた女が言った。

「アンタ、敵意がないのね」

「向けてほしけりゃ、もうちよつと有能になることだ」

木原数多は、それだけ言うのと車に乗った。

科学と魔術の怪物同士の立ち合いは、それきりだった。

当麻は打ち止めに連れられて、ある場所に来た。
ラストオーダー

そこにはつぶれた車が1台と、気を失っている黒服の男が数名。

「この人たちに襲われたの、ってミサカはミサカは本当のことを言ってみる」

「だけどこれって、お前の知り合いがやったってことなのか？」

当麻はその凄惨な光景に息をのみながら尋ねる。

明らかにかなりの武装をしているように見えるのにもかかわらず、一方的に暴力を振るった後が見受けられるからだ。

「それはないかも。あの人の仕返しがこれっぽっちだなんて考えられないもん、ってミサカはミサカは通告していたり」

……これで『仕返しがこれっぽっち』だなんて、そいつの側にいる打ち止めは大丈夫なのだろうか、と当麻は少々心配になった。

これだけの人数相手でも余裕だとは、明らかに最低でも大能力者⁴、下手すると超能力者の領域に入る。

「とにかく、通報しないとなあっ!？」

携帯電話を取り出そうとする当麻だったが、その時突然腕をつかまれてひっぱられた。

当麻は打ち止めに連れられて車の陰に入る。

「奴らが来た、ってミサカはミサカは車の陰に隠れて報告してみたり」
当麻の全身が強張った。嫌な汗が、ぶわつと体から噴き出る。

イマジナリーレイカー
幻想殺しは異能の力に対しては、この上ない防御能力を持つ。しかし、その反面ただの銃弾の前では何の意味もない代物だ。

このままでは見つかる。そう感じた当麻は、打ち止めを抱えてその

場から駆け出した。気付いた誰かが発砲したようだが、後ろを振り返らずにひたすら走る。

行き着いた先には、レストランがあつた。その店の非常口へと向かう。

打ち止めの能力、強能力レベル3の欠陥電気レディオノイズによつて店の扉の電子ロックを解除すると、当麻はその中に駆け込んだ。

「こんなので本当にあの人を助けられるのかな、つてミサカはミサカは自分の力のなさを嘆いてみたり」

店内の厨房であろうか。暗い部屋の中で、当麻の腕から降ろされた打ち止めが、ぽつりと眩く。

「さあな。だけど、俺たちが無事でいない限り、そいつを助けることもできないんだ」

当麻は慎重に扉を開けて、店のホールへと移動した。

そこには、やはり客もウエイトレスもその場で倒れている。

「どういう」

どういうことだ、と言おうとしたその瞬間、外から銃撃を受けた。

慌てて身を伏せる当麻と打ち止め。店の電気が壊され、店内から人工的な光が消える。銃撃がいったん収まると、当麻は少女を抱きかかえて店内の奥にある物陰に潜む。

ガラスの破片を踏みながら彼らは確実に近づいてくる。

(……使えるか)

この中で唯一使える手があるとすれば、『硬化手袋フリックグロウ』に取り付けられたワイヤー射出機構。しかし、それも慰め程度のものでしかない。

当麻は覚悟を決める。しかし、いつまでたつても黒服の連中はやってこなかった。

代わりに聞こえてきたのは、3人の男の声。

「やれやれ、ようやく見つけましたか。もつとも、余分な連中もいるようですよ」

「ええ。では……はじめまして、幻想殺し。我々は『十二使徒』のピエール、アンドレ、ジェームス。あなたの抹殺に来ました」

その男、ピエールはその手に持っている霊装を弄びながら言う。彼

らの周囲には、倒れている『獵犬部隊』の黒服たちがいた。

(……鍵?)

その男が持っていたのは『鍵』だった。

『十二使徒』……女王艦隊の時のことといい、何が目的なんだ!」

当麻が叫ぶ。すると、彼とは対照的に、アンドレがゆつくりと話した。

「目的は主に2つあります」

「2つ?」

当麻は警戒したまま聞き返す。

「1つは、科学サイドの中心である学園都市の破壊です」

「くそ!」

やはり、駿斗の予想通り——『アドリア海の女王』の一件で、ローマ正教は学園都市を倒すべき敵と完全に判断したようだ。

「そして、もう1つは……あなたたち、イマジンプレイカー 幻想殺し、イマジックリエイト 幻想創造を抹殺、その後に幻想創造の肉体を回収すること」

「ちよつと待て、『回収』だ?!」

当麻は怪訝な目をする。彼らの目的はほとんど駿斗の予想通りだったが、その言葉だけは分からなかった。

当麻の言葉に対し、ジエームスが淡々と答えた。

「ええ。彼の力は正しくローマ正教、それも『神の右席』にはうつつつけの『素材』となるでしょう。その力をローマ正教に捧げれば、神の子、いや、もしかすればそれ以上の奇蹟をもたらす可能性も否定できません。何しろ、学園都市の歪な能力開発をその身に受けておきながら、何のリスクもなく、強力な魔術を扱えるのですから」

彼は、説明を続ける。

「したがって、彼はその存在そのものが立派な『戦争』の要因となってしまう。何しろかつての実験で、能力者に魔術が使えないことは、はっきりと示されているのですから」

かつて学園都市とイギリス清教の間で行われた、『必要悪の教会』ネセサリウス所属の魔術師、シエリーの親友であるエリスがその命を落とした、その実験。

そこで、『能力開発を受けた人間は魔術を使えない』ということが証明されてしまった。

「あなたたちは、この世に災いをもたらす」

彼らはそれぞれの霊装、鍵とホタテ貝とX字型の十字架を掲げた。

「ローマ正教の教えによつて手に入れていた安息は混沌へと姿を変え、人々は『学園都市』という悪魔の言葉に惑わされるようになる」
勢いよく放たれた水と炎の魔術を、当麻はその右手で必死に受け止める。

「ですから、その前にローマ正教が、この世界を正しく治めなければならぬのです。神の子の言葉を聞く前の人々が、隣人を愛することを忘れていたのを正したように。神の子も天使も、助けを求める彼らの前に現れないなんてことが、決してないように」

打ち止めといるために、『回避』という選択肢を採ることができない当麻は、弾丸のように放たれた土を右手で打ち消す。

「行け、打ち止め！ 誰か応援を呼んできてくれ！」

その言葉を聞いた彼女は、先の銃撃で割れているガラスの穴から外へと駆け出す。

「ふむ。一般人をまず逃がしましたか。あのような幼い少女をそのままにするのは、『報告』とわずかに違うというべきか、それとも巻き込まないようにしたことを報告通りと捉えるべきか。どちらでしょうね」

ジェームスはそう言うと、そのホタテ貝を持った手を当麻に向けて差し出す。

（今までとは違って、霊装をこつちに向けた!?）

そう考えた当麻は、右手をまっすぐに差し出す。

するとやはり彼の予想通り、貝殻から放たれた暴風が荒波のように当麻へと迫りくる。

——だが、それは彼の予想を裏切って、右手で打ち消されずにその体を壁へと叩き付けた。

「くそ、インデックスも当麻も電話に出ない。インデックスの方は操作ミスの可能性もあるけれど、当麻に関しては既に『遭遇』したのかもしれないねえな……」

駿斗は、街中を駆けていた。

いや、それは『駆ける』というよりは『跳び回る』という方が正確なのかもしれない。身体強化術式、高速移動術式、身体制御術式をかけている彼は、すでに並の魔術師では追いつけない速さで街中を移動していた。

しかも、それらの術式に気を配りながら同時に、魔力と天使テレズマの力を頼りに侵入者である魔術師の搜索を行っているのだ。

（くそ、『幻想核杖』イマジニ・コアロッドの製作の後すぐに来たせいで、探知特化型の術式の構築が間に合っていないか。雑な探査ならできなくもないが、それなら天使の力を頼りに走り回ったほうが早いな）

だが、焦りつつも駿斗は確実に搜索範囲を狭めていく。そしてついに、街の真ん中で彼女を見つけた。

つまり、黄色い装束に身を包み、長い鎖の先に十字架のついたピアスを舌につけている女——ヴェントを。

「おいー」

駿斗がその前に降り立つと、ヴェントはにやりと笑って駿斗を見る。

「あら、これは向こうから獲物がやってきてくれたってワケ？　まあ、どっちにしろ後には見つけるつもりでいたんだけれど」

「獲物、か。違うな。倒されるのはお前の方だ！　街中の人たちを昏倒させているのは、お前が今使用している術式であることくらい分かっているんだよー！」

駿斗は、杖の頭をヴェントに向けながら叫ぶ。

「目的は俺たちか？」

「よく分かっているじゃないの。私の目的は上条当麻及び神谷駿斗の2名。ほら」

駿斗の言葉に、ヴェントは1枚の紙を見せた。

駿斗は読めないイタリア語だらけの紙を見て、眉をひそめる。

「何だ、それは」

「ローマ教皇直々のサイン付き。抹殺命令よ。あの禁書目録でさえ、アンタたちの前では軽いつてコト。ま、アンタはそれなりに自覚があるようね？」

彼女は余裕を持った様子で話す。

「私は『神の右席』前方のヴェント。ローマ正教20億人の中の最終兵器。そんな訳で、さっさと殺される。神谷駿斗！」

ヴェントがその巨大なハンマーを振り回す。それに対し、駿斗も応えるように天使の力によって黄色く輝いた『幻想核杖』を横に振った。

天使の力がこめられた2つの風の塊が、衝突する。

（ハンマーの動きはフェイクで、本命は舌から垂れ提げられている十字架。この昏倒術式もあの十字架が核か！）

駿斗は、ヴェントに向かって駆け出す。一刻も早く、この騒ぎを終息させるために。

対し、ヴェントは立て続けに数回、ハンマーを振るうと、風の弾丸や竜巻を引き起こしてそれを遮った。

駿斗は、冷静に相手を見極めていく。

（使うのは恐らく『風』だけの、属性特化型。だったら、相手の攻撃手段を絞ることができる！）

リフレクタクション
万象再現によって、次々と魔術を発動する駿斗。それに対し、ヴェントはやはりハンマーを振るって風を生み出す。

複数の魔術が互いに衝突し、その余波によって周囲の地面が捲れ上がる。

（くそ、周囲で倒れている人々が！）

「させねえー！」

あまり残されていない余力で防御術式を周囲に展開し、被害を食い止める駿斗。その様子を見たヴェントは、一層激しく彼を攻撃していく。

「あら、随分とがんばっちゃっているようね？ 速く見捨てた方が楽なんじゃないの？」

「んな訳あるか、この野郎！」

駿斗は使用する能力を万象再現から自在変換マテリアルハンドに切り替えると、地面を『形状変換』して壁を作ると同時、『物質変換』によつて魔法陣を描き出す。

自在変換には主な使い方が3種類ある。

物体の形状を変える、『形状変換』。

物質の三態、気体、液体、固体の状態変化をもたらす、『状態変換』。物質の元素そのものを変えてしまう、『物質変換』。

これらは、主に魔法陣を描き出したり、壁を作るのに役立つ能力だ。そして、ローマ正教による襲撃に備えて創造した能力である。

魔法陣から放たれた魔法がヴェントを襲う。その攻撃に対し、ヴェントはハンマーを振るい、風によつてそれらの攻撃を迎え撃つ。

ゴオツ！ と2人の間で衝突が起こった。

「拮抗、か」

「アンタの方こそ、この私と拮抗できるなんてどうかしてるよ」

駿斗は単純な魔法攻撃だけでなく、自在変換による物理的な攻撃も加えているのだが、それらも含めて相殺されていく。さらに、それと同時に防御術式を展開して街への被害をも食い止める。

「は、お優しいことねえー！ ん!? ぐふっ、がは……」

その時だった。

ポタ、ポタ、と赤黒い液体が地面に滴り落ちる。

（何だ……?）

それは、ヴェントの口から漏れていた。

（魔法による副作用？ 天使の力を体内に呼び込みすぎて、暴走したとか？）

いや、違う。駿斗は、自分の考えをすぐに否定した。

（周囲のA I M拡散力場が奇妙だ。まるで、似た性質を持つ天使の力を圧迫するように……!）

ヴェントと同じように天使の力を操る駿斗は、すぐに『調整』に取り掛かった。つまり、自分が体内に封入した天使の力が暴走しないように、『加工』する手段を創造する。

その時、ヴェントはハンマーを振るつて地面をえぐると、立ち込め

る土煙に姿を隠しながら去って行った。自分から仕掛けた駿斗も、その退却にほつ、と一息つく。

正直に言って、このまま戦闘を続けられるとは思えなかったのだ。それほどに、このAIM拡散力場は『奇妙』であった。

「ひよつとして、今この街で起こっている異変はローマ正教による襲撃だけではないのか……?」

いや、そもそもだ、と駿斗は考える。

……どうして科学の産物であるAIM拡散力場が天使の力と酷似している?!

（くそ、どうして今までそのまま放置していたんだ！ 少し考えればすぐに気が付くことだったじゃねえか！ 『能力』と『魔術』を今までに切り離して考えていたことによる弊害か?）

駿斗は、歯を食いしばる。

（そうすると、俺と当麻の常識が根本から崩れることになる！ 『魔術』と科学的な『能力』は完全な別物って訳じゃない。そうすると）彼は、今までの経験を振り返っていく。

（魔術。天使の力。その力の塊である天使。科学的な能力開発。AIM拡散力場。それらの集合体である、虚数学区の鍵の風斬氷華）

1つ1つは、パズルのピースのように組み合わさっていく。

（SYSTEM……『神ならず身にして天上の意志に辿り着くもの』。まさか）

駿斗は、思わず口に出して言った。

「初めから、これが目的だったということか!? だけど、なぜ……」

一方通行は、『ハウンドドッグ猟犬部隊』の男の運転する車で、インデックスと共にある病院の前に来た。その病院は、よく当麻もお世話になっている、ハンキョウセラピー冥土返しハンキョウセラピーの勤める病院だ。

一方通行は、それまで少女の話を黙って聞きながら座っていた。

『とつま』という少年は、非常に不幸であること。『はやと』という少年は、とても親切であるということ。『はやと』という少年は、『さ

「あい」と『うみどり』——絹旗最愛、黑夜海鳥、『暗闇の五月計画』の少女2人と幼馴染であるということ。

(幼馴染、か)

だったら、あの少年があの場合にいたことにも納得がいく。恐らくは何らかの因果で超電磁砲^{レールガン}、御坂美琴と知り合い、妹達^{シスターズ}のことを知り、その結果『暗部』にいた少女と再会した、といったところだろうか。

しかしそうになると、分からないことが増える。そもそも、『暗部』なんてものはそこから簡単に抜け出せるような組織ではない。ましてや、彼女たちは違法な研究の被験者なのだ。そんな人間を、簡単に『表』へ頼り出せるほどのこの街は甘くはない。

考えられる理由としては。

(『あいつら』が何か重要な役割を持っている。下手すると『プラン』の根幹をなすような、何かを)

一方通行は、インデックスに言う。

「この近くに、でかい病院がある。そこに行つて、カエルによく似た顔の医者を見つけれ」

そして、彼の首に付けられている黒いチョーカーを左手の人差指で軽くたたく。

「医者に会つたら、『ミサカネットワーク接続用電極のバッテリー』を用意しろと伝えろ。それで通じる」

「うん、分かった。『ミサカネットワーク接続用電極のバッテリー』だね」

一字一句、完璧に復唱された。どうやら、今まで彼に見せていた話し方や様子からは予想外に、頭は悪くないらしい。

彼女は三毛猫を抱えると、車の外へと出た。

「待っててね」

「いいから、さっさと行け」

シスターが、雨の中を走って行く。それを見送りながら、一方通行は考える。

(学園都市は、何を隠してやがる？ 今更あのガキを捕まえる必要がどこにあるってんだ?)

一方通行は、車を移動させた。公衆電話を見つけると、そこから冥土返しに電話をかける。

「トラブルが起きた。デカイトラブルだ」

『一応、御坂妹さんとやらから大体の事情は聞いているよ』

打ち止めの身に起こったことは、『ミサカネットワーク』を通じて全固体に情報共有がされている。そのため、病院内にいる妹達はそれらの情報を全て把握していた。

「だったら話は早エ。どうなっている?」

『今は、「猟犬部隊」の別働隊に追われているようだね? たまたま居合わせた一般人と、一緒だそうだけど?』

冥土返しの返事に、一方通行はチツ、と舌打ちした。

「場所は何?」

『彼女自身もつかめていないようだね?』

「そっちに、白い修道服を着たガキは来たか? そこに引き止めておけ」

一方通行はインデックスのことを冥土返しに預けた。

『やれやれ。それで、君はどこまでやるつもりだい?』

「木原は殺す」

即答だった。

『「猟犬部隊」も潰す。で、あのガキを無傷で助け出す』

『不可能だよ』

しかし、一方通行の言葉にやはり冥土返しも即答した。

『この局面において君はあまりにも多くを望み過ぎている。それでは君は絶対に目標を達成できない』

「っ!? 知ったような口を……!」

『僕は君以上の地獄を見てきているよ』

だからこそ、冥土返しには言えることもある。

『君は余計なことなど考えず、打ち止めの命を助けることだけを優先しろ。例え内臓が潰されようが手足を腕がれようが構わない。必ず生きて僕の元に連れて来い。そうすれば僕が絶対に彼女を救ってみせる』

彼の『化物』に対する『説教』は続く。

『優先順位を間違えるな、今、最優先なのは彼女の命を守ることだ。違
うと言うのなら、彼女の命よりも大切な物を今この場で言ってみろ』

一方通行はその言葉に、口元に笑みを浮かべた。

「上等じゃねエか」

ヒューズⅡカザキリ

「ぐっ!？」

勢いよく、背中を壁に叩き付けられた当麻の肺から空気が漏れる。ジェームスが放ったのは、確かに魔術であるはずだった。そして、当麻はあらゆる異能の力を打ち消す右手を、それに向かつて突き出したはずだった。

しかし、その結果は予想に反したものとなった。

(イマジンブレイカー幻想殺しが、効いてない?)

当麻は、今の感覚に覚えがあった。

大覇星祭の、1日目。

『使徒 十字』と学園都市の命運をかけた、オリアナⅡトムソンとの最後の戦い。

「あらかじめ空気を圧縮封入しておいて、逆流させているのか!」

その言葉を聞いたジェームスの眼が、大きく見開かれる。

「この術式の正体を見破るとは、これは驚きですね」

彼の名前は、十二使徒の一人、大ヤコブに由来する。その人物の伝承の1つ。

大ヤコブの最期は斬首であったが、その遺体は弟子たちによって持ち出された。風のままに船を進ませたその先で、遺体を大きな石の上に置いたところ、石は自然と棺の形になったという。

つまり、石が彼の肉体を収納するために最適な形に変形した。この話を参考にして構成された術式。

霊装である貝殻を何かを収納するのに最適なものと化す。その貝殻は、どんなものでも、どんな量でも、たとえ物質でなくとも、『収納』してしまうのだ。

そして、そこから解放されるとき、一気にそれが飛び出した。水をとめていたダムから、水を放流したように。

「やっぱり『右手』に対して対策を練ってきたな!」

「というよりは、相性の良い術式を持っている私を選ばれた、という方が正確ですが」

彼は靈装に天使の力を通して、周囲の空気を再び収納し始める。

当麻はすぐに立ち上がると、別の男、ピエールに向かって走り始めた。当麻に対し、彼は呪文を紡ぐとその鍵を当麻に向けながら前に出た。すると、そこにアンドレが炎を放つ。

ピエールごと、巻き込む形で。

(バカっ!?)

当麻は思わず、ピエールの後ろから迫る炎に向かって手を伸ばす。しかし、彼はその右手をつかむと、無造作に横の壁へと放り投げた。

再び、当麻は体を壁に叩き付けられる。その直後、ピエールの肉体を炎が包み込んだ。

当麻は、その光景に唾然とする。

「テ、メエ……!」

「おや、敵のことを心配している余裕があるのですか?」

再びジェームスから貝殻を向けられた当麻は、すぐに近くの椅子の陰に飛び込む。その直後、風によって飛んでいたテーブルが、レストランの窓を割って飛び出していった。

「危な——!?!」

店の中と外に、ガラス片が飛び散る。その速度に、当麻の背筋に寒いものが走った。

しかし、当麻にはそれよりも気になることがあった。

「お前、なんで……!」

アンドレの放った炎に包まれたはずのピエールは、そこに平然と立っていた。そして、彼の靈装である鍵を当麻に向かって突き出す。

当麻は混乱から抜け出せないまま、その場から飛び去った。水の塊が地面をへこませ、亀裂を入れる。

(くそ、一先ずは他の人を巻き込まない場所に移動しねえと!)

当麻は、一度店内から飛び出した。3人の聖職者たちは、その後をゆっくりと追いかけてくる。

「ここからだ、一番近くて広くて、人がいないのは……!」

当麻は第七学区の中でも端にある、第五学区に近い公園へと彼らを誘導する。ジェームスたちは目的が当麻1人であるためか、その誘い

に簡単に乗ってきた。恐らく、駿斗のことは完全にヴェントへ任せ
て、自分は当麻のことに専念するのであろう。

街の中を、4人の男たちが駆け抜ける。彼らは、時として光を放ち、
互いに腕を振り回し、競うようにして移動していった。

(インデックスは駿斗の話を聞いて、『十二使徒』の使ってきた術式は
十字教徒としては異色だ、と言っていた。普通は、現実的な問題とし
て非常に扱うのが難しいはず、とも。だったら、あのピエールとかい
うやつが無傷だったのも、『異色の魔術』とやらの可能性が高い。問題
は、どんな魔術なのか全く見当がつかないアンドレか)

当麻は、再び炎を右手で打ち消す。飛んできた瓦礫を『硬化手袋』フリックグググローブで
弾くと、その懐へ飛び込もうとする。

それに対し彼らは当麻から距離を取ると、魔術を放ってくる。やは
り、先ほどと同じようにピエールは仲間の魔術攻撃に巻き込まれよう
としても、何もせずそのまま喰らい、無傷でその中から現れる。他の
2人にしても、仲間に向けて魔術を放つことをためらうそぶりを一切
見せない。

(俺みたいな、魔術の無効化？ だけど、それだとあいつも『神の奇跡
を否定する者』と見なされるはずだ。いや、むしろ)

当麻は、数々の魔術を打消し、よけながら考える。

(むしろ、その攻撃を受けると体の動きが良くなっているようにさえ
見える)

彼は一度急に立ち止まると、相手が走る速度を緩めたその隙をつい
て一気にピエールの懐へ飛び込もうとする。まずは、先ほどから身体
能力が明らかに向上しつつある相手を倒そうと考えたのだ。

だが、彼は風によって砂埃を撒いた。目くらましだ。

「くそ、あくまで攻撃は魔術に依存するつもりかよー！」

早く1人だけでも倒してしまおうと砂埃を突破するが、既にそこ
にはいなかった。その代わりとばかりに向かってきた炎を、当麻は右手
で打ち消す。

すると、そこにジエームスが接近してきて、右手に持った貝殻を前
に突き出してきた。

「2度も喰らうか！」

当麻は、すぐに横へ跳んだ。すると、先ほどと同じように風が吹き出してくる。

「……やりますね。ここまでとは、非常に予想外でした」

アンドレはそう言った。

「お前らのおかげで、いやというほど魔術師と戦ったからな」

「ですが、むしろその実力がこちらにとっては問題となるのですよ。たとえ学園都市がどうなろうと、あなたたちを殺さなくてはならないほどこね！」

アンドレは水を生み出すと、津波のようにして放つ。当麻は右拳をそれに向かって叩き付けた。

だが、そこに3人の男はいない。

(水による虚像?!)

その直後、後ろにいたジェームスから再び暴風が放たれる。当麻はそのまま吹き飛ばされるが、着地の際に受け身を取ると、すぐに横へ転がってピエールから放たれた攻撃を避けた。

「くそ、これじゃ体力を消耗するだけか……!」

しかし、そのタイミングで『十二使徒』の動きが突如停止する。

「ぐ、ぱあ……?」

彼らは、口から血を吐いていた。

「な、お前ら……」

「一時撤退します。いいですね?」

アンドレの言葉に2人が頷くと、彼らは煙を発生させて去って行った。

『ハウンドドッグ
獵犬部隊』は嗅覚センサーを頼りに、打ち止めを探していた。

「嗅覚センサーは?」

「待て、今結果が」

その時、周囲の照明が落ちて突然光を失った。

警戒する獵犬部隊のメンバーだが、周囲からなる音を頼りにしても

敵は見つからない。

何かが割れる音がしたと思ったら、近くにあるガス管が割れていた。

そして、何かが倒れる音がしたと思ったら、仲間が地面に倒れていた。

彼、あるいは彼女らの緊張が極限に高まった時、金属音が鳴り響く。反射的に、彼らはマシンガンの引き金を引いた。

仲間の位置を、正確に把握することもなく。

共倒れによって混乱する彼らを、さらに一方通行は確実に追い詰めていく。

床に倒れた1人に向かって、工場のシャッターが降りて行く。それを見た仲間の1人が、すぐにそのスイッチを切りに走った。

スイッチを押すと、無事にシャッターの動きが止まる。

だが、そこに白い影が現れた。

工場の中が、赤く染まっていく。

ほとんどの黒服たちを『片付けた』一方通行は、最後の1人を倒すために外へと出た。

「ま、待ってくれ一方通行！」

フェンスの向こうにいる男が叫ぶ。

その時、数台の車がやってきて、近くに停止した。アンチスキル警備員だ。

「や、やった……俺は助かったぞ！　ざまあみろ！　手を出せば、散々守りたがっていたクソガキとの関係も終わりだぜ！」

一方通行であっても、警備員の手前では人を殺すことはできない。それは、彼が警備員に手配されるようなことになるわけにはいかないからでもあり、今の一方通行は、無関係な人々を巻き込むことができなくなってしまったからでもある。

だが、今の彼は違った。

一方通行は、しばらく離れたところにいる警備員を横目に、『猟犬部隊』の男に近づく。そのチョーカーのスイッチを入れた状態で。

「おおおおあああー！」

獣のようなうめき声と共にフェンスが砕け、その1つが警備員の車

に直撃した。そして、彼らの注意がそれたところで、砂埃によってその姿を隠す。

男の断末魔が響いた。

「ま、待ってくれ一方通行！ 助け」

その様子を見ていた警備員の男たちが、すぐに拳銃を構えなおす。

「そ、その人から離れろ！」

声が震えていたが、それでもやめなかったのは警備員としての強い正義感があったのか。

しかし、煙が完全に晴れた時、そこには血だまりしか残されていないかった。

だが、それでも彼らは動く。

『第五学区内。事件現場での証言を元に、書庫バンクより照合』

その頃、黄泉川愛穂の車を見つけて駆けつけた芳川桔梗は、全警備員に配信されたその写真を見て、顔色を変えた。

『この者を、殺人事件の重要参考人として手配する』

その一方で、当の本人は考えていた。

(能力の使用モードは、あと4分も残されていねエ)

路地裏で、彼はライフルを杖代わりに歩く。

その時、携帯電話が鳴った。

『元気かな、一方通行ア！』

その声に、彼の瞳が大きく見開かれる。

「何の用かな、木原くん？」

『なあ、その辺りにガキのシャツの切れ端とか落ちてねえ？』

それは、木原数多がわざと残したものだ。一方通行に、敗北を味わせるために。

『それにしても、学習装置デスタメントつてのはすげえよなあ？ 人間の頭にウイ

ルスぶち込めるなんて、普通じゃねえよ』

木原数多の笑い声が、携帯電話越しに届いて来る。しかし、一方通行は挑発的に返した。

「で、俺は何てリアクションすれば良いんだ？」

『はあ。』

「腹抱えて笑ってやるのが良いのかア、マゾ太君？」

『おいテメエ、状況判断能力が壊れちまってんのか？』

木原数多の言葉に対し、一方通行はあくまでも余裕をもって言う。

「どうせお前に命令した奴は、傷一つ付けず回収しろなんて人情あふれるセリフを吐いちゃあいねえよなア？」

『殺す』

その言葉を最後に、通信が途切れた。

一方通行は考える。

（こんなのは木原らしくねエ。ということとは、あいつに命令した奴がいるってことだ。となると……上層部、統括理事会か！）

そして、その頂点に立つ統括理事長。

「ふざけんじゃねエぞ!! ナメヤがってええええ!!」

彼の叫びと共に、首のチョーカーに取り付けられた電極のスイッチが入られる。

学園都市最強の能力が躊躇なく振るわれた。

地球の自転、そのエネルギーのベクトルを操作し、今までの中で最大級の一撃を『窓のないビル』に喰らわせる。

間にあつたビルは障害物と呼べもしない、ただ壊れていく背景にしかならなかった。

『窓のないビル』が煙に包まれる。

だが、煙が晴れたとき、そこには『窓のないビル』が無傷で立っていた。

「くつ、アアあああああああああああッ!!」

届かない。自分の最強の力をもつてしても、核攻撃にすら耐えうる『演算型・衝撃拡散性複合素材』でつくられた『窓のないビル』には傷1つ、つけられない。

圧倒的な差。届かない高み。

それを見せつけられた彼の咆哮が、学園都市に響く。

（殺す。あのガキを巻き込む奴は全てなア！）

そして、一方通行が統括理事会の1人、トマスⅡプラチナバードにショットガンを撃ち込み情報を集めているときに、それは出現した。

「嘘、だろ……」

当麻は、それを見て呆然と呟いた。

「何よ、あれ。電気じゃないけど……」

御坂は、それを見て唾然とした。

「これは、天使の力？ ううん、酷似しているけど違う。いや、ひょうか……？」

インデックスは、1つの方向に向かって駆け出した。

「AIM拡散力場を利用した『天使』だともいうのか？ 本当に、この街は『科学』だけなのか!？」

駿斗は、真実へと一歩近づいた。

「何なんだよ、あれは!？」

「超分かりませんよ。『闇』にいたところだってあんな情報は知りませんでしたよ!？」

最愛と海鳥は、自分たちが知っていたことは一端に過ぎないことを思い知らされた。

学園都市の中央に、『ヒューズⅡカザキリ』が出現した。

御坂美琴は、たまたま合流した絹旗最愛と黑夜海鳥とともに、コンビニで買ったビニール傘を指しながら寮への道に向かっていった。

「ちよつと、本当に見当もつかないの?」

「悔しいけどな。手がかりも何もつかめない」

学園都市に発生している紫電の翼を指して、彼女たちは話し合う。その時、彼女たちの横を金の刺繍の入っている、白い修道服を着た少女が通りかかった。

「ちよ、ちよつと!?! アンタこんなところで何をしているのよー!」

御坂は、彼女の腕を掴んで引き止める。

「インデックスじゃないですか。そんなに超急いでどうしたんですか

？」

「つーか、お前上条と一緒にじゃなかったわけ？」

彼女たちの問いかけに、インデックスは慌てた様子で答える。

「離して！ 行かないと、あそこにはひようかが！」

「「ひようか？」」

彼女の言葉に首を傾げた時、2人の少年を発見した。

「だめだよ、とうま、はやと！ ひようかを殺さないで！」

その言葉に、彼らは振り向いた。

「インデックス、御坂？」

「最愛と海鳥も？」

だが彼らが話し合うのを待たずに、1つ離れた通りに黒いワンボックスカーが停車して、『カウンターストップ 獵犬部隊』のメンバーが武装したまま降りてきた。

「「こつちだ」

2人は阿吽の呼吸でアイコンタクトすると、4人を路地裏へと連れて行く。

「とうまは、あそこにはいかないで！ あそこにいるのはきつと、ひようかなんだよ！」

「風斬……？」

キョトンとする当麻に対し、駿斗が口添えをする。

「恐らくは何らかの方法でAI M拡散力場に指向性を持たせて、風斬とその能力である『カウンターストップ 正体不明』を制御しているのだと思う」

「とうまが触ったら、ひようかが死んじゃうんだよ！ ひようかは私が何とかするから、だからとうまはひようかに手を出さないで！」

インデックスの必至の呼びかけ。その言葉に、当麻よりも先に駿斗が口を開いた。

「俺が風斬のもとへ行く」

「駿斗……」

その言葉に、その場にいた5人が駿斗へと視線を向ける。

「どうやら、元凶であるやつも風斬のいる場所まで移動しているようだしな。当麻、俺がこれから戦う敵の情報をくれ。俺のところに『十

二使徒』が来ていたから、恐らく当麻にはその上司が来ていたんだろ？」

駿斗が確認するように目配せをすると、当麻はこくりと頷いた。

「当麻は黒服の連中を避けつつ『十二使徒』を発見、そして撤退させること。頼む」

「分かった」

「で、インデックス」

当麻が承諾したことを確認すると、駿斗はインデックスの方へ向き直る。

「インデックスは俺と移動。お前の『知識』でこの解決方法を見つける」

「分かったんだよ」

彼の説明が終わった時、ため息が3つ聞こえた。

御坂、最愛、海鳥。3人の少女が、ため息を吐きながら傘を降ろしていた。

「何だか知らないけど、またアンタたちはデカイ事件に巻き込まれているのね？」

「で、その中心には駿斗兄ちゃんたちの知り合いが超巻き込まれている、と」

御坂と最愛は、非常にめんどくさそうな調子で言った。

「知り合いじゃないよ、ともだち！」

「1つだけ確認させてほしいんだけど、そいつは悪人じゃないのよね？」

インデックスの言葉を聞いた彼女は、当麻に訊く。とは言っても、それはほとんど答えの分かっていることを確認しているような調子であった。

「絶対に違う。あそこにいるのは、俺たちの友達なんだ！」

「友達、ね……」

そう呟いた彼女は、路地裏の出た先で走り回っている『猫犬部隊』を一瞥する。

「じゃ、あいつらが悪者って訳ね？」

「役割が決まったところで、行こうか」

御坂の呟きに、海鳥が答えるようにその手にボンバーランス窒素爆槍を生成した。最愛も同じように、オフエンスアーマー窒素装甲を身に纏う。

「おい、お前」

当麻が何か言いかける前に、御坂がコインを弾き、海鳥はその掌を黒いワンボックスカーへと向ける。

「悪いな、上条」

「止める間もなく、始めちゃうわよ！」

そして、路地裏をオレンジ色の閃光と無色透明な槍が突き抜けた。貫かれたワンボックスカーが、爆発する。

さらに、その後へつつこんで行った最愛がその腕を振るい、完全武装の『獵犬部隊』を数人なぎ倒した。

「おい、御坂！」

「罰ゲーム、まだ有効なんだからね？」

御坂は、1人の男を踏みつけながら話す。

「アンタたちは、友達を必ず助けて帰ってきてくること！ 分かった？」

「必ず守る！ だからお前も、死ぬなよ！」

御坂と当麻が続いて、最愛と海鳥は、幼馴染に向かって叫ぶ。

「駿斗兄ちゃんも、無理しないで下さいよ！ 怪我したら超罰ゲームですから！」

「そうだぞ、絶対に帰ってきてくれよ！」

駿斗も、それに応える。

「お前からこそ、俺に心配させるようなことするなよ！ インデックス、まずは相手の術式の正体を知りたい。頼めるか!？」

「分かったんだよ！」

3人は、走り始める。

「これは多分、『天罰』だと思う」

「『天罰』？」

何処の誰だろうが、神様に唾吐くものは許さないという理屈。ある感情を抱いたものを、距離や場所を問わず叩き潰す、驚異的な術式。

「特定の感情……敵意や悪意か!？」

「うん。術者が術式を解除するまで治らないと思う」

くそ、と彼らは歯を食いしばる。当麻は、焦ったように話す。

「じゃあ、風斬の天使の仕組みはどうなっている？ あいつは大丈夫なんだよな？」

「分かんないよ！」

インデックスは叫ぶ。

「外観が似ている魔導書はいくつかあるけれど、使われているパーツはめっちゃくちゃ……見たことがないものばかりなんだよ！」

「風斬は科学サイドのAIM拡散力場でできているからな。無理もない。最低限、分かることだけを教えてくれ。俺に分かることは、1人の能力者を核としていくことくらいだ」

駿斗は、彼女の言葉に対して穏やかに言った。

「私にも、あの天使と核が別の場所にあることくらいしか……」

インデックスの口調が、静かなものになる。しかし、そこで駿斗は素早く提案する。

「俺もできれば核の場所を一緒に探してたいが、あまり時間がない。当麻、まずはインデックスのケータイを御坂とつないでくれ」

「おう、了解」

「繋いだら、インデックスにそれを返せ。インデックスは、科学について分からないことをあいつらに訊け」

「分かったんだよ」

駿斗は、1人1人指示を出す。

「当麻は、先ほど言ったように風斬から離れた場所にいる『十二使徒』を倒すこと。おおよその場所はケータイで送る。俺は風斬の場所まで行って、ヴェントを止めて、風斬を助ける」

「おう、まずは御坂だな」

当麻は、電話を掛ける。そして何回か言葉を交わしたのちに、彼はインデックスに携帯電話を投げ渡した。

3人は、1つの大きな交差点で別れる。

「行くぞ」

「おう！」「うん！」

駿斗は風斬の下へと走る。そうしながら、同時にヴェントを倒すための戦略も練っていた。

（相手が『風』及び『天使の力』^{テレズマ}特化型であることは間違いない。だが、今までに戦った魔術師とは威力が桁違いだ。純粋な力量で倒すにはやっぱり切り札の1つを切るしかないか）

駿斗は、『幻想核杖』^{イマジン・コアロッド}を作ると同時に、インデックスの協力のもといくつかの術式を創り出している。その中で、今までにない強力な術式も切り札として用意しておいた。

（学園都市の中で戦う以上、本来なら『あれ』の方が良いんだがまだ準備の方が足りていない。そもそも、あの術式は特定のフィールドでしか使えないからな。やっぱり『権天使』^{アルヒヤイ}でいくしかない）

権天使。

それは神学において、天上の存在の中でも大天使の上位の階級に存在するとされる存在。

駿斗は、インデックスからの知識をもとに、大天使がそれぞれ対応している四大元素を全て掌握する。そしてその翼をもつことで、偶像崇拜の理論によって力を高めることを考えたのだった。

（どのくらいの時間使えるのかが、問題だな。『神の力』^{ガブリエル}だけだったら1時間くらい続くかもしれないが、四大属性を一度に扱うために『権天使』だったら15分。長くても20分が限界）

しかし。

（このAIM拡散力場の中だったら、下手に『神の力』だけにするよりも『権天使』で、各属性を相生や相剋を利用して制御した方が良い。それに、純粋な力だったら『権天使』の方が上だ）

そして、駿斗は風斬の下まで辿り着いた。

「風、斬……」

特徴的な丸メガネ。長い髪を、左側を少しだけ括ってある髪型。

背中から紫電の翼を生やし、頭上には輪^{ハイロー}まで持っているが、彼女は間違いなく風斬氷華だった。

駿斗は、迷いなく彼女の下へと駆け出そうとする。しかし、そこに1つの陰が現れた。

「あらあら。大罪人同士、傷のなめ合いでもやっているところだったかしら?」

ヴェントだ。

「折角後回しにしてやろうと考えていたのに、自分から殺されに来ちゃったの? それとも、これ以上悲惨なものを見たくないから、先にぶっ潰してほしいってコト?」

「風斬はやらせねえよ」

駿斗は、臆することなく前へと踏み出した。

「お前はここで倒す。『天罰』は解かせてもらう。それで終わりだ」

「私は、『神の右席』の一員としてその怪物を見過ごすわけにはいかないの」

ヴェントがそのハンマーを振るう。猛烈な風が、風斬へと襲い掛かった。

だが、駿斗は『幻想核杖』を振るうと、それを相殺する。

「俺の友達に、手を出させはしねえ!」

駿斗の背から、赤、青、黄、緑——四大元素を示す色を持った四枚の翼が噴き出した。

『権天使』。

駿斗は、1人の友達を守るためにヴェントの前へと立ちはだかる。

3人の思い

「ははっ、スゲーなオイ！　ありやあ一体何なんだ!？」

廃ビルのオフィスを改造した『ハウンドドッグ猟犬部隊』の拠点の1つで、木原数多は歓声をあげた。

上層部から与えられたウイルス『ANGEL』を打ち止めにラストオーダー学習装置で打ち込んだ結果現れた、大量の紫電の翼。

その姿は、まさに天使だった。

「ちくしよう、飛んでやがるなアレイスター!!　理論のりの字も分かんねーぞお!？」　科学者のくせに科学を否定するたあ、何たる科学者だよ」

彼の後ろに待機している5人の『ハウンドドッグ猟犬部隊』は、あまりに予想外の展開について行けず、ただ呆然と窓の外を見つめていた。

「見ろよテメエら！　聖書つてのはいつから飛び出す絵本に……」

彼らは木原数多の言葉に従っているのか、それともただ呆然としているだけなのかも定かでないまま、ビルの窓から紫電の翼を見つめている。

だが、その時窓の外に1つの影が現れた。

紫電の翼ではない。それは白い悪魔だった。

ライフルを片手に持ったまま、一方通行はためらわずに窓を突き破って入って来る。そして、黒服の1人を蹴り飛ばした。当然、すでに彼のチョーカーのスイッチは能力使用モードへと切り替わっており——その男は部屋の壁へと叩き付けられる。

そして、彼はすぐに体の向きを変えると、銃口を木原数多に向ける。しかし、放たれた銃弾は彼には当たらない。木原数多は側にいた部下の1人を盾にしたからだ。

「ほら、ちゃーんと狙って撃てよお。じゃねーと、皆の迷惑だぜ!!」

一方通行は、木原数多の安い挑発を無視し、慌てて武器を構える男たちを優先した。

1人の男が手榴弾のピンを抜いたのを確認すると、一方通行はためらわずに男へと肉迫する。そして、隣にいた奴も一緒に巻き込みなが

ら、部屋の隅へと蹴り飛ばした。

手榴弾が爆発し、2人の男が爆発にのみこまれる。

「ひっ!？」

その光景を見た最後の男は、咄嗟に事務机の上に寝かされていた打ち止めを掴み抱きかかえた。人質として交渉を考えたのだ。

しかし、それは今の彼にとって最悪の選択だ。

脚力のベクトル操作によって、一方通行が一瞬で真横まで距離を詰める。そして、逆手に持ったショットガンのグリップで頬を打った。

あまりの衝撃にショットガンが砕け、複数の金属のパーツが弾けるように飛び出す。

男から解放された打ち止めの体が宙を舞う。しかし、彼は放り出された打ち止めの身体をキャッチすると、再び彼女をオフィスのデスクの上へと乗せた。

「カツコイーツ!! 一皮剥けやがって、惚れちまいそーだぜ一方通行ア！」

しかし、その様子を見ても木原数多は余裕を見せるかのように笑う。実際、先ほど証明した通り彼にとっては学園都市最強の能力である『一方通行』も脅威にはならない。

木原数多は、かつての研究によって『一方通行』を知り尽くしているからだ。

触れただけで即死するその両手は、絶対に当たらないので問題ない。例え、拳一つで人間の肉体全てを破壊できるとしても、触れた途端に血流が逆流して心臓が爆発するとしても、『当たらなければ問題ない』。

彼のキャッチコピーである『核を撃つても大丈夫』な、どんなに強力な兵器を使用しても体に傷一つ付かない絶対の壁『反射』であつても、『自分の体に触れたものの向きを逆方向に向け直すだけのものではない』。

金槌サイズの威力を顕微鏡サイズで制御する、この拳ならば『反射』が適用されるタイミングで拳を引けば彼の肉体に触れることは可能だ。

能力さえなければ、ただの貧弱なクソガキ。

だから、一方通行の能力の前に、木原数多が負ける要因は……ない。
「さアて、スクラップの時間だぜエ。クツソ野郎がアアアア！」

しかしそれでも、一方通行は絶望的な戦いに挑む。1人の少女を、『闇』から救い上げるために。

(制限時間はあと60秒)

彼は、相手を黙って見据える。

(とにかく、こいつを倒せばすべてが終わる。俺はもう、光の道には戻れねエ。だから木原と一緒に、地獄へ落ちることだけを考えろ！)

足元のベクトルを操作して、一気に距離を縮める。常人では反応しきれないその速度でも、彼の顔を木原数多の拳は正確にとらえた。

頬から鈍い音が立つ。

だが、一方通行はすぐに体制を立て直すと、再び木原数多に迫った。
もう一度、彼の細い体に拳が叩き付けられる。

「どうした小僧！ あのがきを助けに来たんじゃねえのかよ？」

「クソツタレが……！」

「おい、テメエ。ここで1人のガキ助けるためにデカイ悪に立ち向かって。もしかして自分のことカツコイイとか思ってたのか!? これで自分のやってきたことチャラにできるとか思ってたのか? んなわけねえだろ！ ハハツ、テメエは一生泥の中なんだよ！」

木原数多の蹴りが、一方通行を吹き飛ばす。

しかし、一方通行はそれでも机に手をつけて立ち上がった。

(分かってんだよ。一生泥の中ってことくらい)

それでも、彼には戦うべき理由がある。

(地獄に落ちるのは俺とオマエだけで良い。このガキまで巻き込むんじゃねエ！)

一方通行は木原数多に飛びかかり、その顔に右手を伸ばす。

あと少しで手が届く……だがその時、チョーカーのランプが消えた。

タイムリミット。電池切れだった。

木原数多は、一方通行の攻撃を横へ躲すと、そのまま床に倒れて行

く彼を見ていた。

「ハハ……」

白い少年は、そのまま動かない。

「ハハハハハハハッ！」

木原数多は笑う。

「電池が切れりやあ、ただの動かないガラクタつてか？」

彼は呟くと、打ち止めの方へと歩み寄る。だが、そこで低い音がした。

木原数多が振り向くと、一方通行が机に手を突きながら、必死で立ち上がっているところだった。

「っ！ ふざけんじゃねえぞ、このファツキン野郎！」

憤った木原数多はその拳を一方通行に向かって突き出す。今まで、何度も彼を地へ叩き付けてきたその拳を。

しかし、それは一方通行の左手によって捕らえられた。

「なっ……っ！」

木原数多の表情が、初めて驚愕に染まる。今までの彼では、その拳を受け止めることはおろか、よけることすらもできなかつたはずだった。

本来弱体化しているべき、能力が使えない電池切れの状態。しかし、ここで窮鼠が猫を噛んだ。

木原数多は、足首をつかまれて床に倒される。

(そうか、こいつが能力を使えないってことは、俺が用意した対抗策も無効になる)

そう、彼が一方通行に対して有利を保っていたのは、彼の能力とその使い方を熟知していたからだだった。逆に言えば、能力を使用していない一方通行との戦闘は想定外の出来事だったのである。

彼は考える。一方通行を完膚なきまでに叩き潰す方法を。

当麻は、駿斗から送られてきた情報を頼りに『十二使徒』の3人、ピエール、アンドレ、ジェームスを探していた。

「この次の角を曲がったところか」

彼は携帯電話をしまうと、左手の『硬化手袋』フリックグローブの感触を確かめながら、3人に向かって行く。

「やはり来ましたか」

霊装であるX字型の十字架を持ったアンドレが、真つ先に当麻に気が付いて振り返った。いや、正確には2人もほとんど同じタイミングで気が付いていたようだ。

「お前たちはここで倒させてもらおう」

当麻は、3人を相手に啖呵を切る。

「今駿斗が、ヴェントと風斬の方へと向かっているからな。ヴェントを倒して、インデックスが風斬の『天使』の仕組みを理解すれば、あとはそのまま解決できる」

『天罰』というのは、ヴェントの術式なんだろう？ と当麻は言った。

その言葉に、ピエールは頷く。

「そうですね。そもそも、ヴェント様が倒されてしまえば我々の力も削がれてしまいますから。もつとも、その心配はしていませんけれども」

ピエールに続けて、ジェームスが言う。

「ですから、あなたは安心して玉砕してください」

その言葉が言い終わった瞬間に、灼熱の炎が当麻に向かって放たれた。それと同時に、他の2人が左右へと当麻を囲むように動き出す。

「ちっ！」

当麻はその炎には向かわず、まずは何の術式なのか分からないアンドレに向かって走り出す。すると、彼は地面を隆起させて土の塊を放ってきた。

当麻は、それを打ち消すとそのまま彼に迫る。だが、彼はやはり距離を取った。

さらに、横方向からレビが迫り風を水を放ってくる。当麻はそれを避けて距離を取ると、その後ろからやってきたジェームスに向かって突撃した。

ジエームスは慌てて貝殻を突き出すが、間に合わないことを悟るとすぐに体をひねってその貝殻を守る。

当麻の拳が跳ぶと同時に、彼はかがみこんでやりすごした。そして、その霊装を突きつける。

(まずい！)

当麻はすぐに地面へと転がる。その直後、貝殻から暴風が放たれて周囲の地面を削った。

強い風によって当麻は少しだけ地面を転がされたが、すぐに立ち上がると飛んできた瓦礫を『硬化手袋』で弾いた。そして、一度彼に向かってワイヤーを射出して牽制すると、そのまま下がって距離を取ろうとする。

しかし、その先には回り込むようにアンドレが立っており、彼は炎の壁を作りだした。

(壁破壊後に攻撃か！)

だが、当麻は次の攻撃を予測する。視界を奪った後に死角から攻撃するのは、今までの喧嘩で慣れていた。

壁が右手で打ち消すと同時、彼はその体を屈める。土の槍がその頭上を通り過ぎた。そして、バネのように縮こまった体を思い切り跳び上がらせ、アンドレの顔を拳が捉えた。

「アンドレ、下がらなさい！」

渾身の一撃を放ったために、アンドレの口からは血が出ている。しかし、それをチャンスとばかりに放たれた攻撃を、当麻は1撃目を打ち消した後に、2撃目を躲す。

しかし、アンドレは霊装であるX字型の十字架を当麻へ向かって突き出すと、小さな水弾を大量に売って弾幕を張った。当麻は横に跳んで転がることで、右手だけでは打ち消しきれないそれを回避する。

そして再びアンドレの顔を見据えた時には、すでに彼の血は止まっていた。当麻はそのことに疑問を覚える。

(口の中の切り傷なんて、そう簡単に治るものなのか？ それとも、あまり拳に威力がなかった？)

しかし、あの一撃は意識を奪うとまではいかなくとも、10秒くら

いは戦闘から離れる必要があつたはずだ。それに、あんなに簡単に血が止まるものとは思えない。

（魔術、か。簡単なものなら霊装だけでも発動できるとは聞いていたし）

だが、治療が簡単にできるとなると厄介ではあつた。基本的な攻撃方法が生身の拳である当麻にとって、一撃で意識を刈り取るような攻撃は、相手を追い詰めてからでないといけないからだ。

1対1ならばいつも通りでも良いのかもしれないが、今は1対3であるため分が悪い。そのことも、彼は理解していた。

飛んできた瓦礫を左手でいなして避ける。

「なんでお前らはこんなことをしているんだよ！　そもそも、どうしてローマ正教は科学と魔術が相容れないものとするんだ！　単に能力者には魔術が使えないだとか、そんな単純な理由じゃねえだろ!?」
当麻のその言葉に、一瞬彼らがキョトンとした表情をする。しかし、次の瞬間彼らの口から血が吐き出された。

「おい、お前ら……」

「分かっていないのですね……」

ピエールは、血に染まっていく唇を動かす。

「そもそも、あなた方にしても魔術師わたしたちにたいして『墮天使』の出現に加えて『界の圧迫』などということを行っているではないですか。このようなことこそが、ローマ正教にとって最大の侮辱なのですよ」

「『界の圧迫』……?」

「今の天界を否定し、歪んだ科学によって我らの信仰の対象である神を冒瀆する。そのような行いが、我らにとってはあなたたちに裁きを下す理由としては十分なのです!」

ゴオ!　と三人が同じタイミングで風を生み出す。それらは互いに重なり合い、一気にその威力を爆発的に増大させていった。

差し出された当麻の右手に、今までにない重圧がかかる。

「ぐっ……」

そこにジェームスによる追撃が迫る。当麻はとっさに体をひねることで、その風を斜め後ろ方向にずらしながら、2つの暴風を回避し

た。

(風が、魔術の軌道がずれた?)

『消去』を利用した『干渉』。ここに来て、上条当麻は新たな戦法を身に着けた。

イマジンプレイカー
幻想殺しはあらゆる異能の力を問答無用で打ち消すが、一度に打ち消すことができる量には限界が存在する。それは、中学の時に駿斗と自分たちの持つ力を検証しているときから、知っていたことであつた。

しかし、具体的な線引きがどうしてもわからず、エネルギー量で計算しようとしても電気量と熱量によって異なっていたりしたために、結局『打ち消しきれないときはどうするのか』の答えは出ないままになつていた。

そもそも魔術と出会つていなかったために、そこまでの死闘を繰り広げてはいなかったというのも、1つ理由にある。

「冒読だと……」

「あの天使の存在そのものが、我々の危惧するものなのですよ」

「ふざけんな！ 風斬は俺たちの友達だ！ 仲間なんだ！」

当麻は、力強く大地を蹴る。

「それ以上バカにすることは許さねえ！」

魔術を打ち消し、軌道を逸らしながら、当麻は駆け続ける。彼らはさらに距離を取ろうとするが、そこで当麻は圧縮ガスのカートリッジを入れ替えると、ワイヤーを再び射出した。

それが、ピエールの腕に絡みつく。

「っ！ させません！」

アンドレが魔術を放つて牽制するが、当麻はそれを打ち消すと、ジエームスよりも早くピエールにせまる。1つの確信をもって。

(恐らく、あいつの効果は『魔術の効果の逆転』。防御の魔術とも考えたが、こつちならあいつの身体能力の増強も理由が付く！)

当麻の考えた通り、ピエールはペトロが最期、逆十字で処刑されたことを題材にした『十字術式の効果の逆転』を使用していた。

本来ならば自爆しても無傷で動ける強力な術式だが、彼の右手の前

ではそれは意味をなさない。

そしてついに、1人目、ピエールの霊装である『鍵』が破壊された。当麻はすぐに、距離を取る。そこで、1つの事実に気が付いた。

今までの戦闘で巻き込まれたはずの、周囲の人間の中に怪我をしている人がまるでないことに。

「ハハッ、日頃から不幸、不幸、つて言っているけれど、これだけあれば十分に幸せじゃねーか！」

駿斗とヴェントが、風斬氷華、いや、ヒューズIIカザキリの下で対峙していた。

その背中に2対4枚の赤、青、黄、緑の翼を生み出している駿斗は『イマジン・コアロッド幻想核杖』を構え、いつでも能力や魔術を発動できるように準備をする。

それに対し、ヴェントは余裕を持った表情でそのハンマーを構えた。

最初に動いたのはヴェント。彼女のハンマーが振るわれると同時に、生み出された暴風が駿斗に襲い掛かる。

だが、駿斗はその杖を振るうと、やはり同様に風を起こしてその全てを相殺した。

ヴェントがハンマーを振るい、その舌から垂れ提げられている十字架に当たって高い金属音が響く。そのフェイクを看破している駿斗は、他の攻撃と同様に防いでいった。

そこで、再びヴェントが口から血を吐き出すと、嘲るように言った。「まったく、その肉体をローマ正教に捧げれば、アタシたちが有効活用させてあげるといふのに。さつきから、そんなに気持ちの悪い天使まで庇ってまでして戦って、どこまでアタシを笑わせれば気が済むのかしら？」

その言葉に、駿斗が怒りを見せる。

「ふざけんじゃねえよ、テメエ！ こいつは、風斬は、俺たちの友達なんだよ！ 例え、科学的な能力によって生み出されていたとしても、

親友がその右手で触れるだけで砕け散ってしまうような儂い存在だとしても」

駿斗は、神ガブリエルの力の天使テレズマの力を凝縮した水塊に、他の属性の術式を混ぜてから発射する。ヴェントがそれを相殺すると同時に、『聖人』をも上回る速さで彼女に迫る。

「それでも、俺たちの『ともだち』なんだ！」

駿斗は杖を彼女に突きつけると、地面に押し倒す。翼から魔術が放たれ、周囲にクレーターが生まれる。

だが、駿斗はすぐに彼女から距離を取る。ヴェントが間一髪で、圧縮した空気でその攻撃を凌いだからだ。

再びヴェントが盾にするように、風を起こす。

「アタシは科学が嫌い」

その暴風を、駿斗が杖と翼から魔術で迎撃する。

「科学が憎い！」

その暴風をよけた直後、駿斗は気づいた。

(まずい、『天罰』に倒されている一般人がいたのか！)

瓦礫の山で隠れていたが、そこにはまだ一般人が倒れていた。

しかし、駿斗の注意がそれたその一瞬を、彼女は見逃さない。

「随分と余裕ね！」

今までよりも多くの天使の力がこめられた風の塊が、駿斗を襲う。

駿斗は慌てて、風で相殺することでそれを凌いだ。

だが、先ほど放たれた暴風は容赦なく彼の後ろを抉っていった。つまり、一般人がいた場所を。

「テ、メエ……！」

駿斗はヴェントを睨みつけるが、彼女は人を馬鹿にするような笑みを浮かべたままだ。

しかし、駿斗はすぐに気が付いた。

(AIM拡散力場……粒子状に凝結させて?)

空から光の粉が舞っている。風斬氷華の翼から、一般人を守るように。

「この偽善者が、何をやっているのよ！」

「ハハ、ハハハハッ！」

ヴェントが叫ぶが、駿斗は笑い出した。

そして、大声で叫ぶ。

「おい、俺の親友！ 日頃から不幸、不幸、って言っているけど、これだけあれば十分に幸せじゃねーか！ なあ、そうだろ？」

この時、偶然にもその親友が同じことを言っていたことを、彼らは互いに知らない。

しかし、2人は彼らの友達に対して感謝していた。自分が知らない間に、苦しい思いすら感じられないかもしれない状態であるはずなのに、それでも誰かを守ろうとしている彼女に対して。

その想いを、彼らは確かに受け取った。

「今、インデックスがお前を助けるために動いている。だから、俺はこいつをここで食い止める。……いくぞ！」

駿斗は、そこでさらに翼を増やした。それは天使の力ではない。

AIM拡散力場……『カウンターストップ正体不明』の模倣だ。

科学と魔術。本来相容れないその2つをイメージングクリエイト幻想創造は、掌握する手段を創造する。

6枚の翼が、空気を叩く。対し、ヴェントは複数の空気の塊を融合させて、巨大なものを創り上げた。

両者が激突する、その直前にそれは起きた。

ドオン！ と、ヴェントの制御を離れた空気の塊が爆発する。

「ヴェント!?!」

自爆して後方へとその体を飛ばした彼女に、思わず駿斗は声をかける。る。

「ハッ、何バカみたいな声出しているのよ。あの天使の出現に合わせ、『界』全体に強制的に術的圧迫を加える。魔力の循環不全を引き起こすってトコか……。アレイスターの奴もやらしい手を考える」

ヴェントがぶつぶつ呟いているが、駿斗はそれよりも気になった。

「そこまでして戦う理由なんてあるのかよー！」

ヴェントはかなり消耗している。そして、A I M拡散力場による天使の力への干渉がある以上、彼女はその力を最大限に引き出せない。このままではただ消耗して力尽きていくだけの運命だ。

しかし、彼女はそれでも続ける。

「白々しいセリフを吐いているんじゃないわよ！」

ヴェントは素早くハンマーを振るい、複数の空気の塊を併せると今までの物を上回る恐ろしい速度でそれを撃ち放つ。

だが、駿斗は翼を前面に展開して拮抗すると、さらに防御術式を展開して完璧に防ぐ。

そして、ついに限界が来たヴェントが、そのハンマーを手からこぼした。

「限界が来たか。だったら、さっさと病院送りにしてやるよ！」

「黙れ！」

駿斗の言葉に、ヴェントは声を荒げる。

「アタシは科学なんかに身を預けない！……私の弟は、科学によって殺された」

その言葉に、駿斗の動きが止まる。

弟を殺された？ 科学によって？

遊園地のあるアトラクション。科学的には絶対に問題ないと言われているそれが、誤作動を起こした。

『何重もの安全装置』『全自動の速度管理プログラム』……そんな頼もしい単語が並べられていたそれは、何も役に立たなかった。

その後病院に運ばれたときは、結局2人分の輸血が用意できず、弟の言葉に従って姉だけを助けた。

「驚いた？ 『神の右席』がこんな理由で戦っているなんて。それでもアタシはね、『神の右席』を利用してでも科学を潰したいほど憎んでいるのよ！」

彼女の想いは、決して駿斗には完璧に救えないものだった。完璧に彼女を救えるのはただ1人、彼女の弟だけなのだから。

だけど、それでも真実を伝えることはできる。

「科学がお前の弟を殺した？ 違うに決まってるだろ。その医者だっ

て、2人とも命を助けたかったに決まってるんだろ。その遊園地だつて、ただ大勢の人の笑顔を作りたかっただけに決まってるんだろ！」

「黙れ……」

ヴェントはたじろぐが、駿斗はその翼をしまつて、彼女に言葉を突きつける。

「お前の弟だつて、ただお前が生きていてほしいと思つただけだろうが。復讐なんてしてほしいと願つたりなんてしないだろうが！」

お前はそいつの姉貴なんだろ。『お姉ちゃん』が、『弟』の復讐するなんて口実で、人を傷つけて良いはずがねえだろうが！ 『お姉ちゃん』なのだったら、『弟』に対して胸を張っていられるような奴にならなきゃならねえだろうが！」

次なる戦いへ

木原数多は、懐から一枚のチップを取り出した。そして、それを一方通行の目の前へと突きつける。

「ほら見ろ、あのガキに打ち込んだウイルスのオリジナルスクリプトだ！　これがないや、あのガキは絶対に助からねえ！」

その言葉を言い終えるや否や、指先でそのチップをへし折った。

木原数多は笑い声を上げる。

「ざまあみろ！　悔しかねえか、このクソガキイ！」

一方通行は、立ち上がった木原数多に殴られた。そして、床に倒れたままのその体を蹴り続けられる。

しかし、そこへ一人の少女が現れた。

「いた、あの子だ！」

インデックスは少し一方通行と木原数多の方を見たが、すぐさま『天使』の核となっている打ち止めへと駆け寄る。

「何だ？　こっちは仕事！」

その様子を見てインデックスを排除しようとした木原数多だったが、それを一方通行に阻まれる。

一方通行は、彼女に一抹の望みをかけた。

（やつぱりこの子が全ての核だ。基本は天使の構築で、形のない天使の力を人のイメージという袋に押し込めている）

しかし、『ヒューズIIカザキリ』はあくまでも科学サイドだ。魔術の知識だけでは完璧には分からない。

だから、インデックスはすぐに頼った。

「短髪、質問！　『脳波を応用した電子的ネットワーク』って何？」

科学サイドの少女、御坂美琴に。

「えっと、発電能力者たちが、脳波を使って、電子的なネットワークを構築すること、かな」

「じゃあ、『学園都市に蔓延しているAIM拡散力場』ってというのは？」

御坂は、目の前の猟犬部隊ハウンドドッグに電撃を放つ。

『学園都市の能力者が発生させている力のフィールド！』

電撃により一時的に強いノイズが走るが、それでもなんとか御坂の声はインデックスに届いた。

『御坂は一度、電話の方に超集中してください！ こっちは私たちがやります！』

最愛の声が聞こえる中、インデックスは考えた。

(要するに、街中には特殊な力が充ちていて、それを束ねるのがこの女の子で、この子の精神を縛ることで、特殊な力を捻じ曲げ、天使を作っているだけ……)

「それなら、この子の頭の中にある結び目をほどけばいいんだよ！でも、この考えを具体的な手段にするには……」

彼女の隣では、一方通行が体を張って木原数多を食い止めている。

電話の向こうでは、御坂が最愛と海鳥の2人と共に戦いながらも、自分が訊いた質問の答えを提示してくれた。

みんなの助けを借りて、インデックスはこの悲劇を終わらせる手段をついに導き出す。

「……歌」

単純な言葉よりも伝わりやすい。リズムを使って多重的にやり取りできる手段。1時間の説教を受けても泣かない人間も1分間の歌で涙を流さすことがある。何年も眠り続けた孤児の目を覚まさせた話もある。そして、神の怒りさえも鎮めた伝説も存在する。

そして、『スベルインターセプト強制詠唱』や『シエールファイア魔滅の声』といった方法を用いるインデックスにとっては、もっともなじみ深い手段だ。

『ちよつと、そんなアナログな方法で何とかなるわけ？』

「できるよ」

魔術を知らない御坂が疑問の声を上げるが、インデックスは即答した。

「祈りは届く。人はそれで救われる。私みたいな修道女は、そうやって教えを広めたんだから！ 私達の祈りで救ってみせる。この子も、ひようかも、学園都市も！」

十万三千冊の魔導書をその完全記憶能力によって頭に収納している『禁書目録』。その歌が学園都市に響き渡る。

その声のすぐそばで、一方通行が幾度も立ち上がり、木原数多に挑んでいた。

「そうだよなあ、そんなに簡単に倒れちゃったらつまんねえもんなあ！ サービス精神旺盛で助かるぜ、一方通行！」

両者が激突。

先に木原数多が一方通行の顔を殴り飛ばす。

しかし、力強く床を踏みしめてその反動を殺した一方通行は、木原数多の顔を殴り返す。

「響かねえぞ、小僧！」

木原数多の拳を受けた一方通行が、再び床に倒された。

「よし、調子が出てきた。もっと面白くしてやるから、もう少しやる気出してくれよ！」

ピンを外された手榴弾が、一方通行の額に落ちて爆発する。

それを確認した木原数多が笑い出すが、すぐにそれは止まった。

立っている。一方通行が、だらりとした様子で立っていた。

そして、その背中から黒い翼が噴き出す。朦朧とする意識の中で生み出されたその翼は、かつてないほどの破壊力を秘めていることを自然と連想させた。

ただ、圧倒的な力。それが、今の一方通行だった。

「何、だよ……その背中から生えている、真つ黒な翼はア！」

木原は叫ぶが、それよりも早く一方通行によってその顔面を掴まれる。

（コイツ……『自分だけの現実』^{パーソナルリアリティ}に、何の数値を入力した？）

その体が、宙に浮かぶ。

（まさか、天使だのなんだの、あの力の正体は）

「ihbf殺wq」

ノイズと殺意の混じった声と共に、木原数多は一瞬にしてビルの外へと飛ばされる。

そしてあまりのその速さに、大気との摩擦熱によりその体は光となくなって消えた。

「幸せ、ですか……」

当麻の叫びを聞いたアンドレが、その言葉を繰り返す。

「ああ、確かにこの右手は神様の奇蹟すらも打ち消してしまっているのかもしれない。だがよ、それでも俺の、いや、俺たちのために風斬が、みんなが協力してくれていて、支えてもらっているんだ！ そんな友達がいるってこと自体が、とんでもなく幸せなんだよ！」

当麻は、笑顔で言葉を返す。

インデックスが当麻の右手の力を聞いた時、「その右手はあらゆる『幸運』の力を消してしまっている」と言っていた。その事実にも多少ショックを受けた。

さらに言えば、右手がなければ『疫病神』などと呼ばれることはなかっただろうし、両親にも迷惑や心配をかけなかっただろうし、魔術師と戦うことも、そのたびにけがを負うこともなかっただろうし、その他にもいろいろある。

だが、それでも多くの『不幸』と関わって得られたものはあった。今までにたくさん悲しみに会った。

だけど、1つ1つはちっぽけでも、確かにその中で喜びに出会うこともあった。

そして、数多くの人に出会えた。

インデックス。御坂美琴。ステイル。神裂火織。姫神秋沙。
妹達^{シスターズ}。絹旗最愛。黑夜海鳥。風斬氷華。オルソラと、アニエーゼ率いるローマ正教のシスター達。

挙げていけばきりが無い。

他人から見れば、費やしてきた労力とは割に合わないと感じるかもしれない。

だけど、それが彼の『偽善』であった。

目の前の人が傷つかない方が良い。誰かに寂しい思いなんてしてほしくない。そんな思いだけで幾多の戦場を駆け巡ってきた。

そして、ここまで来た。絶対に信頼できる、親友と共に。
だからこそ。

「分かっているとは思いますが、改めて言うぜ。絶対に、俺たちの友達にも、この学園都市にも、これ以上は手を出させねえ」

上条当麻は立ち向かえる。今も、そしてこれからも。

『不幸』な俺が、こんなにも『幸せ』を感じられるこの場所は、絶対に壊させねえ！」

当麻は駆ける。

すでに霊装を失っているピエールは、すぐに後ろに下がる。後方支援に徹するつもりか、他の2人の影に隠れる。

そして、その2人は逆に前進してきた。

2つの風が放たれる。1つはアンドレの十字架から。もう1つはジエームスの貝殻から。

(魔術と物理攻撃を、同時に……！)

当麻はすぐに体を横に飛ばす。

しかし、それと同時に岩が飛んできた。すぐに左手の『硬化手袋』フリックググローブで岩を弾くと、水でできた羽ペンのような剣を右手で打ち消す。

そして、その勢いでアンドレの十字架に手を伸ばした。

だが、アンドレは体を前かがみに丸めると、逆に当麻の腹に体当たりを喰らわせる。そして、すぐに離れるとジエームスの貝殻から再び攻撃が放たれる。

「くそっ！」

当麻はその暴風を喰らってしまうが、あえてそのまま地面を転がることで次の攻撃を避けると、中腰のまま右拳を突き出す。

その拳は綺麗にアンドレの頬へと叩き付けられた。

しかし、とっさの行動だったのであまり威力が乗っていないかった。アンドレはすぐに当麻と距離を取ると、体勢を立て直してしまう。

だが、それでも当麻は足のバネを解放すると、その勢いで、再び霊装に天使の力テレスマを通そうするジエームスに迫った。

ジエームスがその貝殻を前に突き出し、当麻がその右拳を振りかぶる。

「間に合え！」

両者の腕が交差し、結果が示される。

1つの瓦礫が当麻の横腹を直撃していた。

だが、当麻の右手は貝殻を粉々に砕き、そのままジェームスを地面にたたき伏せていた。

（魔術の発動に間に合わなかったか）

当麻は、地面に崩れ落ちながら考える。

ジェームスの魔術は、あくまでも収納したものを解放するだけ。例えば『解放』した後でその霊装を破壊しても、解放したものの運動エネルギーはそのまま残る。

当麻の拳があたる直前に魔術は発動し、しかし、解放した暴風が瓦礫を叩き付けるよりも早く霊装が破壊され、ジェームスが倒されたのだった。

地面に倒れた当麻に、アンドレとピエールが近づいて来る。

（すまん、駿斗……）

心の中で、親友に謝った。

（勝てなかった）

しかし、その次の瞬間、アンドレとピエールが急に地面に膝をついた。

「撤退しますよ。すぐに。この学園都市から！」

高速移動術式でも使ったのか、立ち上がると速やかに去っていくアンドレ、ピエール、ジェームス。

当麻は地面に倒れたまま、その様子を見ていることしかできなかつた。

「この道は私が決めた」

ヴェントは駿斗の言葉を聞いても、その戦意を曲げはしなかった。「たった今話を聞いただけのテーマに、そうそう簡単に捻じ曲げられるはずがないのよ！」

ハンマーが振るわれると同時に、莫大な風が彼女の周囲に集まってく。それに応じるように、駿斗は莫大なAIM拡散力場を天使の力を操るのと同じ要領で右手の杖の先に集めながら、一直線にヴェント

へ突撃していく。

「ああああああっ！」

「うおおおおおっ！」

2人の咆哮が響き渡る。そして、彼らが最期に振り絞った力の塊が放たれる。

今までにない轟音と共に、激突する。

衝撃波が生じ、周囲の地面を抉っていく。だが、駿斗はそれでもその足を力を入れて地面を蹴り出し、進んで行った。

ひたすらに、前へ。

ただ、一直線にヴェントの下へ。彼女に最後の一撃を喰らわせるために、駿斗は前進を続ける。

先ほどの『アルヒヤイ権天使』の使用は、この状態では厳しいから、使えない。同じように、『ガブリエル神の力』も使えるほどの力は残されていないだろう。

しかし、駿斗にはまだとっておきの武器がある。

親友と同じ、『拳』という得物だ。

(学園都市が、風斬が抱えている危機的状况も。ヴェントが囚われている、科学への憎しみも)

駿斗は、『イマジン・コアロッド幻想核杖』を放り出して駆ける。

(そんな幻想は、まとめてぶち壊す！)

その右手を強く握りしめる。

「お前の弟に比べれば全然たいしたことはないだろうが、少しだけお前を救ってやる。弟の前で胸を張って『お姉ちゃん』でいられるように、もう一度やり直してこい。この大馬鹿野郎！」

全体重をのせ、愚直なまでにまっすぐ突き出されたその拳がヴェントへと突き出される。拳を顔面から受けたヴェントが、地面に倒されて意識を失った。

それでも、まだ終わっていない。やることがあった。

駿斗は、すぐに彼女の十字架を破壊する。

「これでよし」

『天罰』が解除され、学園都市にあった天使の力が霧散していくのを感じる。

だが、その時莫大な魔力を感じ取る。それと同時に、ある特定の感覚も。

駿斗はすぐにその場から飛び去る。するとその直後、ヴェントのいた場所で轟音と共に土煙が巻き起こった。

しかし視界が奪われていても、その独特な感覚は1つの言葉を連想させるのには十分だった。

「まさか、『聖人』か……?」

砂煙が晴れた後に姿を現したのは、1人の男だった。

青いズボンに、やはり青い十字架が描かれた、ゴルフウェアを彷彿とさせる服装。その衣装に身を包んでいる屈強な肉体が、ヴェントを抱えて現れた。

堀の深い白い顔立ちをした男。その肉体には莫大な力が秘められていることが見て取れる。

「失礼。この子に用があつたものでな」

その口から流暢な日本語が紡がれたが、その言葉は必要なものだけがそろつた簡潔なものだった。

「誰だ? ローマ正教にも『聖人』がいたというのは初耳なんだが」

駿斗は、突如現れた敵に警戒しながら話す。

「後方のアックア。ヴェントと同じく、『神の右席』の1人である」

確認がとれた駿斗は、すぐに自分の戦力を確認する。

（『権天使』も『神の力』も使えない。となると、カウンターストップ正体不明の模倣をしないとならないか?）

焦りが募る。この状況で『聖人』と戦うのは最悪だった。

しかも相手は、ヴェントと同じ『神の右席』の1人だ。2つもの素養を持つているアックアは間違いなくヴェントよりも強いだろうし、ということとは、下手すると学園都市は今度こそ崩壊しかねない。

しかし、その様子を見たアックアは言う。

「心配するな。今日の所はこれで引き返す」

その言葉に駿斗は安心するよりも早く叫んだ。

「ヴェントを離せ! そいつの科学への敵対心はただの勘違いなんだ!」

しかし、アックアは簡単に言った。

「ヴェントの闇が、そう簡単に打ち消せるものか。そもそもここでヴェントを離せば、科学サイドに捕縛され処刑されるであろう」

「ちっ……！」

その言葉に、駿斗は舌打ちをすると、悔しそうに表情を歪めた。

そんな駿斗に向かって、アックアは1つの十字架を投げた。

「これをくれてやる」

それは、ヴェントの舌に付けられていた、鎖のつけられた十字架……『天罰』に必要な霊装だ。

「貴様に破壊され、もはやそれはただのガラクタだ。ヴェントはもう『天罰』を使えん。制圧された人間もすぐに回復するだろう。今はそれで、学園都市の平穏を守れたということでお返ししておけ」

アックアはそれだけ言うと、もはや用は済ませたといった様子で立ち去ろうとする。

「おい、待てー！」

駿斗は呼び止めようとするが、爆音とともにその体が消失する。

彼はその後をしばらく見つめていたが、しばらくすると風斬に向かって行った。

彼女の背中には、紫電の翼がまだ残っている。しかし、そこに初めの攻撃的な脅威はなかった。どちらかと言えば、それは風が吹けばすぐに消えてしまう灯ともしびのような印象さえ抱かせる。

「風斬ー！」

その少女の背中に会った紫電の翼が消失していき、頭上に会った輪ハイロウもすでになくなっていった。そして、まだわずかに残って周囲に降り注いでいた光の粉までなくなると、彼女はそのまま地面に倒れそうになる。

しかし、倒れる前に駿斗が自在変換マテリアルハンドで地面の形状を変えてその体を支えようと、すぐに風斬の下へ駆け寄った。

「風斬ー！」

駿斗はその体を抱え上げると呼びかける。すると、少しうめき声を漏らした後に、彼女が目を覚ました。

「良かった。無事だったか……」

一度何らかの干渉を受けて変わってしまったとしても、風斬の様子が再び元に戻ったことに安堵する駿斗。だが、彼女の表情は優れなかった。「ダ、メ……ですよ」

風斬は、駿斗の後ろに広がる、破壊されつくした街並みを見つめていた。

「何で、こんなことになってるんですか」

彼女が震える声で言った。

——全部、自分のせいなのに。

自分がここにいなければ、街が破壊される事もなかった。だということに、どうして自分だけが無傷なのだ。

「結局、私って何なんですか!? 能力者の人達の力のおかげで、ようやく存在できる化物なのに。折角あの子に『友達』って言ってもらって、それで少しは人間らしくなれたと思ったのに!」

結局は、周りの人々を傷つける化物のままだった。

だから、風斬は言った。

「もう、あの人の右手で私を終わらせてください!」

駿斗はその言葉に目を見開き、少しだけ顔を俯かせる。

そして、言った。

「良かった。安心したよ」

——え? と風斬は予想を裏切られ、表情を変えた。

「やっぱり、風斬と『友達』になれて良かった」

「なんで……」

風斬の言葉に、駿斗は答えた。

「あいつなら、『そんなことをするくらいなら右手を引きちぎった方がましだ』とか言いそうだから? ま、あいつのそういうところは昔から変わっていないだろうし」

駿斗は、親友のことを考えながら言う。

「お前は自分がどんな目に合っているにしても、それでも周りの人たちを守ろうとしてくれていた。それだけで十分だ。もつと自信を持って良いんだよ」

だからさ、と言葉を続ける。

「今度はいつまたお前と出会えるか分からないからさ。とりあえず今はインデックスや当麻と合流しようぜ。あ、なんで、とかは言うなよ？俺たちは友達なんだからさ」

「大丈夫なの？ 背中のはあれは天使デレスマの力に酷似していたけれど……」
『ごらー！ で、結局どうなったのよ？ あのデカイ羽はなくなったみたいだけど？』

修道女は医者呼びにオフィスから飛び出していった。一方通行はそれをぼんやりと見送る。

外の騒動が収まっているのを雰囲気で察するが、電極のバッテリーが切れ、ここの防衛に力を使い果たした彼は、体も頭ももうまともに動かせない。

一方通行の意識は途切れそうになり、それに逆らわずに目を瞑ろうとするが、その時頭の中に声が響く。

『一方通行、お話がありますが、よろしいですか』
(精神感応テレパスか。わずかだが、演算能力も戻っている)

『その通り。複数の精神感応系の能力者を用意しております』

その言葉の後に、彼らは『交渉』を開始した。

一方通行が引き起こした学園都市の損害。それについて彼には『借金』がたまっている。

『我々と行動を共にしませんか？』

(学園都市は戦争でも始めるつもりか？)

『お答えできません』

ふざけんじゃねエ、と一方通行は吐き捨てる。

『学園都市は、ここが正念場なのです』

仮に学園都市が完全に消えた場合、能力者たちの居場所はない。他の独自の技術に関しても同様だ。

(1つだけ教えろ)

『なんででしょう？』

一方通行には、これだけでも聞いておかなければならないことがある。

（今回の首謀者の名前だ。あのガキをこんな風に扱った人間の首を切り落とす）

『構いませんが、どうせスケープゴートですよ。で、どうしますか？』（好きにしろ）

『良いお返事です』

暴徒鎮圧用のゴム弾をその身に浴びた一方通行が、連れられて行く。

最強の怪物を、再び学園都市の『闇』が呑み込んでいく。

ヴェントを回収したアックアは、『十二使徒』のピエール、アンドレ、ジェームスと学園都市の外で合流した。そこに、アックアへ通信が入る。

「テツラか」

『ええ、そうですよ。「左方のテツラ」です。そちらは終わりましたか？』

通信先からは、男の声が聞こえてくる。

「ヴェントがやられた。『使徒』たちと共に今回回収して、学園都市周辺の別働部隊を下げさせたところだ」

『ご苦労様です』

「次はどう出る。なんなら、私が標的の首を切り落として来ても構わんが」

アックアは言う。同じ組織に属するものが倒されているのにもかかわらず、その言葉は淡々としたものだった。

『やめておきましょう。そちらの話聞いた上で、どう学園都市を落とすか、考えを練り直した方が良さそうです』

ヴェントは失敗した。しかし、それでも彼らには学園都市を、そして上条当麻と神谷駿斗の2人を攻撃しなければならない理由が残っている。

「学園都市を落とす、か」

『気に入りませんか?』

「小細工は苦手だ。倒すべき敵は真正面から叩き潰した方が楽に決まっている」

それがアックアなりの流儀であった。

しかし、テッラは続ける。

『どうにでも利用価値があるとは思えませんかねー? 例えば、あの墮天使とか。何より、幻想創造はまさに我ら「神の右席」にはうってつけでしょうしねー』

「戦場での略奪行為には賛同しかねるぞ」

『さすが、騎士様は言うことが違いますねー』

その言葉にアックアは少しだけ昔の記憶を思い起こすが、しかし、すぐに言った。

「騎士ではない。私は傭兵崩れのごろつきである」

『ま、ともあれヴェントを連れてさっさと引き返してくださいねー。』

こいつは「右方のフィアンマ」からの指示でもあります」

「了解した」

そう言って通話を切ったアックアは、一度立ち止まり後ろに広がる学園都市を見つめる。

(果たして学園都市は貴様が思っているほど貧弱な存在なのかね……左方のテッラ)

「おはよう、アレイスター。1つ君に言うておくことがあるのだけだよね?」

その翌朝、学園都市の病院内にある一室から、冥土返しヘヴンキャンセラーは電話をかけていた。

通話の相手は、学園都市統括理事長、アレイスターIIクロウリー。『何だ?』

「僕の患者と教え子をオモチャにするのは止めてもらいたいんだ」

一方通行と打ち止め。彼らは今回、アレイスターによって利用さ

れ、弄ばれた。

『聞かなかつたらどうする?』

「僕は、あの子達の医者なんだ。……アレイスター、君が何であれ、ここを曲げる事は出来ない。アレイスター、分かるだろう? 僕の覚悟がどんなものか」

カエル顔の医者はそので一度言葉を区切ると、穏やかに、しかしはつきりと告げた。

「かつて僕に命を救われた、君ならば」

かつてイギリスの片田舎で史上最強最悪の魔術師が、瀕死の状態であるのに遭遇した。その彼を治療して英国から匿い、生命維持装置を作り、日本に逃がして『学園都市』を作る手伝いをした。

それが、彼らの関係。

医者と患者という関係だった。

『後悔しているか』

「本気で尋ねているのかい?」

『遠隔操作で生命維持装置を止めるなら今しかないぞ』

「僕を馬鹿にするならいい加減にして欲しい」

『そうか』

アレイスターはそれでも笑う。

今までの長い人生で、彼は様々なものを敵に回してきた。数えきれないどころか、魔術業界では全てが敵と言っても差支えないだろう。しかし、ここに来てさらに敵に回すものがいたとは……。

『だが、私の意思は変わらない。貴方はその理由を知っている筈だ。だから、私は止まらない。もうその段階は過ぎている』

だから、決別する。

やるべきことが彼にはあり、そしてその障害となるのだというのならば。

『お別れだ。優しい優しい私の敵』

最後となるであろう、彼らの通話が切れた。しかし、その医者はそれでもその瞳に強い意志の光を灯している。

(忘れていないかい、アレイスター。君だって、僕の患者の1人だって

言う事を)

この目をきっかけにして、科学と魔術からなるこの世界は、その亀裂を深めていく。

そして、それは最終的に1つの激突へと向かう。

その中心に巻き込まれた2人の少年は、しかしそれでも、これまで以上の激闘の中に身を投じて行く。

10月3日編

戻った日常とその裏で

「購買へ急げー!」

授業が終わり、教室から生徒たちが一斉に飛び出すと廊下を駆けて行く。その様子を横目に見ながら、当麻と駿斗は弁当を取り出した。そこへ1人の少女が近づいて来る。

「むむ。なんだか今日は。珍しい」

姫神秋沙だった。

「またうまそうなものを持ったやつが来たなー」

「ただで分けるおかずはない。やるならトレード」

彼女は当麻の前の席に座ると、当麻の机に弁当を広げた。駿斗も同じように、当麻の後ろにある自分の席で弁当を広げる。

「むむ。煮汁がご飯ゾーンに侵入している」

当麻の弁当を覗き込んだ姫神が呟いた。

「こ、この煮汁が染み出たのがうまいんだぞ」

「……負け惜しみ?」

「違っつー!」

そんなにぎやかな様子を横目に、駿斗は箸を進めた。

(全く、この平穩がいつまで続くものなのか)

駿斗は、弁当の中身を右手に持った箸で口に運びながら、空いている左手で携帯電話をいじった。インターネットを使って、ニュースサイトを開く。

そこには、海外——特にローマ正教が主に信仰されている国・地域で学園都市に対する抗議活動が始まる兆しを見せている、との情報があった。

そのサイトを見て、駿斗ははあ、とため息をつく。

ここまでは彼の予想通りだ。

先日、9月30日には学園都市のゲートが破壊され、何者かが侵入した。そして町の全域の住人が学生教職員その他問わず片っ端から

『攻撃』され、治安維持組織である風紀委員や警備員の機能さえも完全に停止。おまけに謎の『天使』の出現によって街の中心部が半径100メートルにわたってクレーター上に破壊された。

そして、学園都市はこのことについて『国外の宗教団体が秘密裏に科学的な超能力開発を行っていて、そこで開発された能力者たちが襲ってきた』と発表。

その一方で、ローマ正教側は『学園都市は科学によって「天使」を作り出そうとしている。これは宗教に対する冒涇だ』などといって、公式に対立の立場を表明した。

まさに一触即発の状態。

駿斗にはそんな気がするのだった。

(しかし、『前方のヴェント』ね)

ローマ正教の最暗部『神の右席』、『十二使徒』という部下を引き連れて現れた、その一員。

『前方の』とわざわざ名づけられているということは、『左方』『後方』『右方』も存在するのだろう。

(この間のインデックスの話だと、『前方』『黄』『風』を司るのが『神の火』という話だったっけ?)

彼女は4人の内の1人に過ぎない。おまけに、二大天使の力を持つ『神の力』と、天使長である『神の如き者』はそれよりも強いはずだ。(単なる出力の上昇だけじゃなくて、いくつか対抗できるだけの術式を考案しておかないと)

そう考えた時、鈍い音が聞こえた。

駿斗が思考を中断してそちらを見ると、姫神が当麻にボディーブローでKOされている場面であった。

「おいっ!? 急にどうしたんだ?」

駿斗は慌てて声をかけるが、姫神は首を手で抑えながら教室から飛び出していってしまう。

「当麻、大丈夫かー?」

当麻は依然として、そのまま床にかがみこんでいた。そこに、1人の少女が近づいて来る。

「……何やってんだか」

「吹寄……」

頼れる我がクラスの女傑、吹寄制理が仁王立ちしていた。彼女はそのまま麻の机の上に座ると、パンを食べ始める。

「……で、お前は どうしていつもそんなのばかり食っているわけ？」

彼女はいかにも味気なさそうなパンを食べていた。

「味気ないなんてことないわ！ おいしいわよ」

「『脳を活性化させる十二の栄養素が入った能力上昇パン』……？」

そんな話をしていると、購買の戦争に勝利したクラスメイト達が戻ってきた。

「……でさ、今度の広域社会見学なくなるかも、ってさ」

「一端覧祭に影響しないだろうな？」

「そうそう！ 警備員の先生たちが対策練るから、中間テストどころじゃなくなるってさー」

「本当？」

全員がそんな話をしている。その様子を3人は複雑な表情で見つめていた。

テストを潰してでも、警備員が対策を練る——つまり、それだけ先日の事件は学園都市にとって大きな傷跡を残した、ということだ。

そして、その中心にこの2人の少年は巻き込まれている。

「戦争、か」

吹寄が呟く。

「まいっちゃうわよね。だって、戦争が始まったらお肉とか野菜とかの値段が上がっちゃうんでしょ？ あと、石油とかも」

彼女の言葉に、2人は黙り込んだ。

一般の学生にとっては、結局は『その程度』の認識でしかない。そのことを確認したからだ。

対して、彼らは自分たちが直接戦う側なのだ。

しかし、この流れをいったいどうやったら止められるのか——

「ちよっと、アンタたち。何急に黙っているわけ？」

吹寄の言葉に、駿斗たちは思考から現実へ戻される。

「い、いや何でも？ だったら、今のうちに鍋とか食べておいた方が得なのかなー、みたいなの」

当麻が慌てて言葉を返す。

「お、おう。そうだな。俺もそういったものを食べておいても良いんじゃないのかなーみたいなの」

「そうだけど……」

そこに、デルタフォースの残り2人がやってきた。

「あれ、かみやんにはやとんまで。今日は鍋にすんの？」

「いやーすき焼きだったら、安くてうまい店知ってるぜい」

その土御門の発言によって、その話が教室中に拡散する。

「何？ お前ら今日鍋にすんの？」

「うまい店の一人占めとは許せませんなあ」

「つーか、なんで急にまた鍋なわけ？」

教室内が急に騒がしくなった。その様子を、駿斗たちは啞然とした様子で見ている。

「あれ？ いつの間にクラスみんなで晩御飯食へに行く話になってんの？」

「諦める、当麻。これが俺たちのクラスだ」

駿斗が若干嬉しそうな表情をしながらも、ため息をつきながら言う。すると、その様子を見ていた吹寄が、おでこを見せるように髪をまとめ、教壇に立った。

「吹寄おでこデラックス!？」

彼女は黒板にでかかど『今晚の鍋』と書くど、

「さあ、この私が面倒を見てやるから、さっさと清き一票を入れなさい！」

クラス総選挙が始まった。

「「いただきまーす！」」

放課後、夕方になって駿斗たちクラスの全員がすき焼き屋に集まった。

もちろんインデックスまで参加して、鍋の中から次々と食べ物が消えていく。

そんな中、小萌先生は疲れたような表情をしていた。

「保護者の皆様から『もし戦争が起きたら学園都市は危ないから、子供を返してほしい』っていうお問い合わせが増えているのですよ……」

彼女にしては珍しく、生徒に愚痴をこぼしていた。

「え？ そんな話になってるんですか？」

「まあ、心配なんだろうな。自分の子供が戦争に巻き込まれたりなんかしたら、たまったものじゃないだろうし」

当麻は疑問を呈するが、駿斗はあたかも予想通りといった感じに受け流してしまう。

「(しかしそうすると、親のいない俺たち『置き去り』チャイルドエラだけがこの街に残るってことが、分かっているのかね。まあ、自分の子供のことで精一杯なんだろうけどさ)」

あいにく、駿斗は自分と同じ境遇で育つていく子供たちを見捨てるつもりはない。だから、仕方のないことにしても『親から捨てられた子供だけが危険にさらされる』という結果となることには、眉をひそめるのも当然のことであろう。

「まあ、さすがに学生が戦争に駆り出されることはないだろうけどな」

「そう？ 貴重な戦力でしょ？」

吹寄が疑問を呈するが、駿斗は言った。

「能力者なんて、その存在自体が機密情報の塊だつたの。そもそも、長期休みに実家に帰る無能力者レベでさえ、長つたらしくてめんどくさい手続きを行った上に、ナノデバイスを注射されなきゃならないじゃないか」

『実家』というものが学園都市内にある『置き去り』の施設である駿斗も、夏休みに一度学園都市の外に出ているので、その辺りの事情は知っている。

「ましてや、戦争なんかに駆り出されたら、いつその情報の塊が盗まれるか分かったもんじゃねえ。能力を持っているとはいえ何の訓練も

受けていない学生が戦争で戦えるとは思えないし、自分の子供が戦争に駆り出されたと知ったら、この後自分の子供を学園都市へ預けようと考える親が激減してしまう」

駿斗の言葉に、吹寄は納得したような表情になった。

(ま、俺たちは自分から飛び込んでいくことになるだろうが)

駿斗はそう考えながら、親友と目を合わせた。

これから起こる戦い。それに向けて覚悟をしなければならぬからだ。

「しつつかし、メニューを見る限りやと、まだ値段は変わつとらんようやね」

青髪ピアスが言った。

「ああ、そうだな。まあ、仕入れの段階では既に上がり始めているのかもしれないが」

「つまり、今のうちに食つとけつちゆうことやな。あ、そーれ！」

青髪ピアスは、鍋の中から肉を箸で取り出す。

「あ、テメー、肉ばつかとりやがつて！」

そこへ、インデックスが飛び込んでくる。

「どうま、はやとー！ お肉お代わり！」

「テメエ、シスターなんだったら、肉がなかったら野菜を食べるくらいはしろやー！」

駿斗はシスターを押しさえつけ、自分の鍋の中に残っている肉を死守。シスターとのすき焼き争奪戦が幕を開けた。

結局、追加注文が必要になったのは言うまでもない。

追加注文が来る間まで、駿斗と当麻は少し外へ出た。

ビルが立ち並んでいたが、視線を少し上へと上げると、クレーンが見える。それらは、9月30日のあの騒動——『〇九三〇事件』において破壊されたものを立て直しているのだ。

「戦争、か」

当麻が呟く。

先ほどまで見ていたように、この街で暮らしている学生たちは、まだ笑いあうことができている。

しかしその一方で、先日的事件で多くの人が傷つき、多くの物が破壊されたことも、また事実である。

ローマ正教と学園都市の衝突。

魔術サイドと科学サイドの戦い。

それを止めるためには、『十二使徒』を率いる『神の右席』と戦っていかねばならない。しかし、その戦いが起こるたびに先日のような被害が出れば、勝ったところで多くの物を失ってしまうだろう。

だが、戦いそのものを回避する機会は恐らくもう失われている。

ヴェントは、ローマ教皇が直々に抹殺命令書にサインをした、と言うっていた。それはつまり、ローマ正教徒20億人にとって、当麻と駿斗の2人が明確に『敵』になってしまったのと同義だ。

残りの『神の右席』は恐らく3人。そして、『十二使徒』はまだ健在だ。

「……何とかしないとな」

そう言った時、「かみやん、はやとん」という聞き慣れた声があった。声のあつた方を振り向くと、土御門が立っていた。

「これから起こる戦争が、全部自分のせいだっと思うのなら、大間違いだぜ。お前たちはこれまで、周りの連中を守ってきたんだ」

土御門が言う。

「そう、かな……」

「戦争が起こったのは、裏方がしくじったからだ」

だが、駿斗たちが戦争の要因の1つとなっているのは事実だ。

「始まるぞ」

決定的なその言葉を、土御門が言った。

「戦いの規模が変わる。今のままで、これから先の局面を潜り抜けるのは難しい」

「そうだな」

当麻は右手を、己の武器を見つめた。

「むしろ、今まで何とか潜り抜けてきたことが奇跡的だったんだ」

「だろうな。俺は何も知らなかった。世界のことはおろか、自分が育ったこの街のことさえも」

駿斗が言う。

「知らないからって、知らないままではいけないんだ。何も知らなかったら、俺が気づかないうちに何か取り返しのつかないことが起こっているかもしれない。いや、本当はそのことを俺たちはとつくに知っていたはずだったんだ。最愛と海鳥が使われた『計画』然り。^{シスターズ}妹達が犠牲になった『実験』然り。何も知らなかったら、俺たちは誰かが泣いているのに気付かないまま通り過ぎて、気づいた時にはすべてが壊されているかもしれない」

今までのことを思い返し、駿斗は言う。

「俺は今まで甘えていたんだ。自分の知らない世界のことを、全部他人に任せていた」

「でも、それじゃあこれからはだめだ」

駿斗の言葉を、当麻が引き継ぐ。

「俺は今まで知らなかった世界に、足を踏み入れて行かなくてはならないんだよ」

当麻は拳を握りしめた。

「駿斗、土御門。俺は決めた」

真剣な表情で、当麻は言う。

「かみやん」

そして、当麻は宣言した。

「俺は、これから英語を勉強するツツツ!!」

……はい？ と駿斗と土御門の目が点になった。

「そりゃあ、今まではみんな日本語で合わせてくれていたけれど……」

そう話し始める当麻に対し、駿斗と土御門は「なぜこのタイミングで英語……？」と何とも言えないような表情になる。

しばらくすると、土御門は当麻に一撃拳を喰らわせてから、どこかへと行ってしまった。

『演習NO. 42、開始します』

アクセラレータ
一方通行は、拳銃を構えると、動物的に狙いを定めて引き金を引く。弾が切れるとマガジンを杖を突いてない左手だけで取り替え、顎も使って弾を装填、再び銃を撃つ。

チョーカーの電源を入れない限り、杖を突かなければ立つことすらままならない。だから、全てを片手でやるしかないのだ。

だが、遅い。

こんなに遅いのでは、『仕事』に支障がでる。

(使えねエ)

一方通行は心の中で悪態をつく。

そして、それが終わった後、後ろを振り返らずに声をかけた。

「何の用だ、変装野郎」

その言葉に、後ろから人影が現れた。

「自分なりに気配ってやつを絶ってみたんですけどね」

「海原光貴、だったか」

「顔も名前も偽物ですけどね」

そう言つて海原は苦笑する。

一方通行は彼の本名を知らなかったが、それでも『違和感』を感じてはいた。この男に近づいたたびに、胸に何とも言えない圧迫感を感じるのだった。

「武器の方は決まりましたか?」

「じっくりくるものはねエな」

世界中の銃を集めても見つかんねエかもな、と一方通行は話す。

ついこの間に、能力だけではこの世界に対抗できないことを彼は思い知っている。この暗部組織『グループ』の技術部の手によって、能力使用可能時間が15分から30分へと延長されたものの、時間制限があることには変わりないし、能力を使用しているからといって『最強』ではないことは2度の敗北で分かっている。

「15分だろうが30分だろうが、時間制限があることには変わりがねエ。故障したから戦えませんが、じゃ生き残れねエだろオが。要件はそれだけか?」

「統括理事会から我々『グループ』に、仕事のオーダーが入りました」
海原はそう言うのと、歩き出した。一方通行は、その少し後ろを歩く。
今、学園都市は9月30日の事件——『0930事件』を引き起こした犯人であるローマ正教との戦争のため、準備を進めている。

実際、そのための戦力として一方通行も『闇』に落とされたのだ。「しかし、その『対ローマ正教用』に重点を置くあまり、内側への防御が手薄になりつつあるのも事実です。今回は、その隙について学園都市の機能へ打撃を与えようとしている勢力を一掃します」

その主犯は、武装無能力集団——スキルアウト。

学園都市全体のおよそ1%を占める、学校にも寮にも戻らない路上生活者の武装集団であり、無能力者の集まりだ。

「彼らが今作っているオモチャ、樫の木材をくり抜いて、側面に塩化ビニール製の羽を取りつけて加工したものの中に爆薬を詰めた直径5cm、全長70cmのロケット兵器。所謂、『棒火矢』が確認されています」

『棒火矢』とは、江戸時代の試作兵器で、飛距離はせいぜい2000m、しかも飛ばすだけ。先端に高級品のプラスチック爆弾でも積まない限り、何の脅威にもならない。

だが、それも要するに使いようであり、これを多少の下準備をした状況下だとするならば、話は変わる。

この数日間で、災害時の誘導経路附近に多くの自転車を放置したり、VIP施設の出入り口周辺の排水溝にゴミを詰めて塞いだり、と言った工作が行われている。

正直、保安上の問題としては取り上げるまでもないただの悪戯のレベル。

「グループってのは、ガキの後始末まで請け負ってんのか？」

一方通行が悪態をつく一方で、海原は説明を続ける。

設置された『エラー』にする必要性の低い問題』はすでに2万件以上。そして、平時では放っておかれるようなものであっても、第二級オレンジや第一級レッド時に上昇した警戒レベルには『エラー』として検出されてしまう。彼らはそれを狙った。

『棒火矢』を起爆させ、第二級警報を誘発されれば、過剰な情報量に通信網が埋め尽くされてしまう。そうしておこったパンクによって、中継局サーバーはダウン。そうして誘発されたトラブルに、警備員や風紀委員はこの2万もの『爆弾』の処理に追われるようになり、一部の地域に、1、2日ほど穴ができる。

「じゃあ、警報を解除すれば良いだろオがよ」

「今が戦争中でなければね」

一方通行の言葉に、海原が答えた。

「内も外も敵だらけ、か。学園都市つてのは、よほど多くの人間から恨まれているみてエだな」

「そう言う人々をなんとかするのが、我々の仕事です」

ゴミ収集車に送られて、一方通行は『初仕事先』に送られる。

「何でゴミ収集車なんだよ」

携帯電話で、つまらなそうに聞いた。

『何かと便利なんですよ。死体の処分などもありますから』

その場所に着くと、一方通行はゴミ収集車から降りる。

『20分後に来ます。では、お気をつけて』

通話が切れる。一方通行は、顔をしかめて呟いた。

「勝つても負けてもあれに乗るわけか。生身か死体かはさておいてなア」

彼は歩きながら、周囲を見渡す。そこには、有刺鉄線と木の板でつくられた柵や、ビルとビルの屋上の間に張られている布があった。

それらは、警備ロボットと人工衛星からの監視に対抗するための小細工だ。

懐かしい空気を一方通行は感じ取る。その時、携帯電話が震えた。

「土御門か」

『そろそろ初陣だと思つてな。お前に1つ忠告しておくことがある』

「忠告ときたか。内容は何だよ、先輩」

彼は鬱陶しそうに応じた。

『俺たちのことを信じるな』

土御門は、淡々と続けた。

彼らは、表にその存在がばれた時点で問題になるような連中の集まりである。そのような集まりにおいて、普通のチームとしての考えは通用しない。

「この俺がご褒美でも期待していると言いたいのかア？」

『統括理事会をが定めたルールに従っているだけじゃ、あいつらを出し抜けない。その上で勝つにはどうしたらいいか、認識しておけよ。……俺もお前も、守るべきものを持っているんだからな』

「要件はそれだけかよ」

『早いとこ終わらせて帰ってこい。結標のほうも、そっちのほうでそろそろ仕事を終えて帰って来るだろうしな』

「仕事だと？」と一方通行が聞き返したとたんに、爆音とともに風が起る。

「競争とは聞いてねエンだけどな」

『あいつが狙っているのは人じゃない。金だ』

「つーかアイツ、まだ使い物になったのか」

その『あいつ』はかつて、一方通行の拳によって吹き飛ばされ、入院を余儀なくされている。また、彼女は優秀な能力者である反面、トラウマも抱えており、不完全なままなのだった。

『お前と同じだよ。補強している』

そおかい、と言って電話を切った一方通行は、首にあるチョーカーに搭載された電極のスイッチを入れる。

「お片づけだ。10分で終わらせてやる」

一方で、結標は順調に仕事をこなしていた。

「これで9か所。歯ごたえが足りないわね」

彼女は現在、能力に対するトラウマへの対抗策として低周波治療器を使用している。そのため、自分の転移は未だに抵抗があるが、他の物体の転移は普通にできるようになっていた。

その時、彼女の前に大柄な男が立ちはだかる。

「少しは加減してほしいものだな、能力者」

「……駒場利徳」

厳つい筋肉を安物のジャケットで覆う、ゴリラのような大男。

しかし、その巨体を見た結標は不敵な笑みを浮かべた。
「あらまあ、こちらが先にターゲットとぶつかってしまったわ」

駒場利徳、その後の酔っ払い

「各所に分散させておいた資金を一度に剥ぎ取るとは、いささか大人げないとは思うが？」

駒場利徳は、低い声で静かに言う。

「こちらは破壊目標を確実に叩くだけ。活動資金のことなんか知ったことではないわ」

結標淡希は軍用の懐中電灯を構えながら言う。

「……座標移動か。厄介な力だ」

駒場が呟く。

座標移動。

空間移動と同じく、十一次元を利用することで物理的な壁や重力など三次元的な制約を超えて移動できる力だが、結標のそれは、その系統の能力者では最高位を誇る。

「厄介程度で収まると思う？」

結標は挑発するように言う。だが、駒場は相手を睨むだけであった。

「……そうだな。厄介以上に憎らしい」

「眉間にぶち込んで終わらせてあげるわ」

彼女は懐中電灯を振ると、コルク抜きを転移させる。

駒場の体に、直接。

しかし、転移させる直前に駒場は大きく跳び上がった。その跳躍は、明らかにただの人間にできる動きを超えている。

「こちらだってまじめにやる」

彼は宙に浮かぶコルク抜きを、結標にめがけて蹴り出した。対し、彼女は近くにあった乗用車を転移させることで、それを盾にして防ぐ。だが、周囲の建物にあった鉄棒を蹴り放たれた。

いくつかは乗用車を避けて結標の体を切り裂く。そして、残りは乗用車に突き刺さり——爆発が起きた。

駒場は地面に着地すると、燃え盛る乗用車を間に挟みながら、結標と対峙する。

「……貴様のような化物と戦うには、このくらいのハンデがあってもいいだろう?」

彼女は改めて懐中電灯を構えた。

「その驚異的な身体能力。服の内側に発条包帯ハードテーピングを仕込んでいるわね」

発条包帯……超音波伸縮性の軍用特殊テーピング。

「手に入れるのには苦労した」

学園都市で使われている駆動鎧の身体強化を行う部分のみを取り出したようなものであり、身体各所に貼り付けることで、運動機能を飛躍的に増強することが出来る。

だが、それはそんなに都合の良いことばかりではない。

「そんな欠陥品を生身の体に使って、ただで済むと思うの?」

『発条包帯』は、駆動鎧と比較して分厚い装甲や巨体が無い分、小回りが利いてより機動力が増した事が利点だが、使用者を保護する身体的プロテクトが一切存在しないため、身体に対して甚大なる負担をもたらすという欠点も持ち合わせている。そのため、警備員の試験運用からも落ちた欠陥品なのだ。

「その程度の覚悟は決まっている。早急に決着をつけよう」

だが、それでも彼は戦う。

それは自分の目的のためでもあり——そして何より、もともとから代償なくしては勝負ができないことを覚悟しているからでもあった。

彼の体が、膨張したように見えた。

「俺の前には、やるべきことが山積しているのぞな!」

駒場は飛び出した。

対し、結標は2回懐中電灯を振るう。

彼との間に障害物が2つ配置される。だが、それを見ても駒場は笑っていた。

「薄いな」

彼はその強い脚力で地面を踏みしめ、一気に跳び上がる。

「その程度の膜では、俺を止めることはできない!」

分厚い金属の箱の包囲網が、人間の限界を超えるまでに強化された蹴りで粉碎された。直後、爆発によって破壊されていた鉄屑などがま

とめて吹き飛ぶ。

「……あつけない」

駒場は、自分の戦果を確認すると呟いた。

そして、すぐに次の戦場へと向かう。すなわち、自分の仕事を順調にこなしている一方通行へと。

「さてきて、あつちのノルマも終わったみたいだし」

自分に刃向ってきた男たちを蹴散らした一方通行は、電極のスイッチを入れ替えると、歩みを進めた。

「1人で残業つてのも」

「それなら休ませてやろう」

しかし、そこに駒場利徳が現れる。

「一方通行……」

「駒場利徳か。一応理由を尋ねてやる」

自分の標的を見つけた一方通行は、駒場と対峙する。

「スキルアウトが能力者と戦う理由など、聞いても面白いものではない」

フン、と一方通行はその言葉を鼻で笑った。

「街を混乱させたうえで無差別攻撃ってことか？」

「無差別ではない。標的くらいはこちらで選ぶ」

無差別、という言葉が気に入らないのか、駒場はすぐに訂正する。

実際、彼らは無差別攻撃をしているわけではない。あくまでも、能力者が敵なのだ。無能力者ではなくて。

「中々余裕があるみたいだな。今の状況つかめているのか？」

一方通行は言うが、駒場は1つの機械を相手の足下に向かって放り投げた。

「俺が殺した」

それは、結標が使用していた低周波治療器だ。

一方通行はそれを確認すると、思わぬ戦力に相手を見る。

「……聞いていた話と違うな。日陰者たちも普通ならここではためらわない」

「そオかい」

一方通行は、チョーカーのスイッチに手を当てた。

「知っているか？ 俺の前に立ったクソ野郎は、普通ならミンチになるんだぜ」

その様子を見た駒場はすぐに判断した。

彼は自分の首筋を人差指で突く。

「その電極。何らかの電子情報を送受信しているな」

自分の弱点がばれた一方通行は、すぐにスイッチを切り替える。そして、風を起こしながら一気に跳躍した。

これで終わり。

あの奇妙な右手を持つ男でもない限り、自分の能力を知り尽くした木原数多でもない限り、自分の能力は突破されることはない。

……そう、能力は。

駒場は、1つの缶を取り出すと、その中身をぶちまける。そこからは光を反射してキラキラと光る金属粉があふれ出した。

それを見た一方通行の表情が変わる。

「何だこれは？」

「攪乱の羽……電波攪乱装置の一種だよ」

竹とんぼ状の薄い金属膜を辺り一帯に無数散布し、電波を攪乱する。1つ1つはシャーペンの芯ケースほどの大きさであるが、フタバガキ科の植物の種子を参考にした構造をしているそれは、マイクロモーターを使って緩やかに回転、自律浮遊を行うことができる。

そう、妹達シスターズからの電波は、一方通行には届かなくなってしまう。

風を使った空中での制御を失った一方通行は、そのままビルの側に取り付けられた作業用の足場に落下する。

駒場の追撃に対して、銃で応戦する一方通行。しかし、それすらも弾道を見切られ、躲かれてしまう。その一方で、駒場はその強化された脚力で足場を叩き曲げた。

そして、駒場が新たな武器を取り出す。

「真っ赤に弾けろー」

一方通行はその大口径の銃を見て、迷わず空中へ身を投げる。その後、引き金が引かれ足場が爆散した。

「ぐああああアア！」

左肩から落ちたため、そこに激痛が走る。駒場は地面に飛び降りると、迷わず一方通行に向かって再び引き金を引いた。

地面に寝転がったまま、一方通行は横に転がる。そして、そこに先ほどまではなかった落ちていた銃をつかむと、引き金を引いた。だが、それは駒場には当たらずに、路地裏でビルとビルとの間に張られた、人工衛星対策であろう、布を飛ばす。

「チエックメイトだ」

駒場が銃を突きつける。

(そうやって、何の罪もない人間から順番に、不幸にするつもりか)

一方通行は、ラストオーダー打ち止めのことを少し思い返すと、迷わずに銃を突きつけた。

「ふざけんじゃねエぞ、クソ野郎がアアア！」

銃声。

両者の弾丸は、互いの体にきちんと照準を定められていた。

「ばかな……」

しかし、血を流した人間は1人。

「なぜ、お前の『反射』が生きている」

「バカじゃねエの？」

チャフというのは、空气中に金属膜をばらまくことで、電波障害を引き起こすもの。だったら、換気をすればよいだけだ。

駒場利徳は上を見る。するとそこには、先ほど一方通行の銃によって1つの結び目を絶たれた布が、風によってはためいていた。

「シアてと」

一方通行は立ち上がる。

「無能力者の分際で、超能力者に喧嘩を売る根性、もう1度見せてもらおうかア」

駒場は慌てて攪乱の羽を取り出すが、一方通行によって蹴りとばされた石が、音速を超えた速さでその缶を飛ばし、駒場の体に突き刺さる。

さらに、一方通行自身が彼に肉迫し、そのベクトルを操作してその

巨体を壁に叩き付けた。

「チエックメイト、だよなア」

一方通行は、地面に蹲る駒場の前に立つ。

「無能力者というだけじゃ悪にはならねエ。ああいう連中が邪魔者扱いされるのは、単にお前らみたいなスキルアウトがはしゃいでいるせいで」

彼は糾弾する。

権利の獲得？ 安全の保障？ そのような行動こそが、無能力者自身の首を絞めていたのだ、と。

それに対し、駒場はやはり冷静だった。

「もしもの話をしようか」

能力の優劣に、人格的な問題は考慮されない。中には強大な力を振りかざすだけの醜い人間もいる。

そういった能力者が、抵抗する力を持たないスキルアウト以外の無能力者をゲーム感覚で襲い続けていたとしたら？

「いずれこのような結末になることは分かっていたが」

駒場は地面に落ちた自分の携帯電話を見る。

そこには、金髪の幼い少女と共に写っている、駒場の姿があった。

「この野郎……」

一方通行がその言葉を漏らすのを聞いて、駒場は少し笑った。

「どうやら、今のお前は俺と似たような境遇にあるらしいな」

駒場は銃を構える。しかしその照準は先ほどとは違い、『反射』が有効である一方通行だ。

「手土産だ。この無様な光景を、胸に刻んでおけ」

銃声が鳴り響いた。

駒場の死を見届けた一方通行は、路地裏から出る。

『ご苦労様です』

電話で海原と話す。

『死体の搬送、及び証拠の隠滅はこちらで行います』

一方通行は収集車には乗らず、自分で歩く。

忠告を無視して通話を切ると、後ろに向かって声をかけた。

「生きてンだろ、結標淡希」

すると、路地裏の暗がりから少女が姿を現した。

「途中から見ていたけど、どこで気づいたのかしら?」

「バレバレなんだよ。鬱陶しい真似しやがって」

先ほど一方通行が地面に落とされた際に落ちていた銃。それは、彼女が転移させたものだったのだ。

「命の恩人に対して、そんな言葉づかいでいいのかしら?」

「命の恩人、ね。死ぬまで言ってる」

そう言う一方通行は歩き出した。

駒場の携帯電話を取り出すと、電話帳を探す。

「残業だよ、サービス残業」

だが、その帰りに彼は出会った。

「コンビニでコーヒーでも買っていくか」

そう決めてコンビニに向かった一方通行だったが、その途中でポストを抱きしめている女性に出会った。

そのまま通り過ぎようとした一方通行は、その顔を見ると思わず立ち止まる。

(どこかで見たような)

そう、彼女はかつて殺し続けたクローンと、そのオリジナルである御坂美琴にそっくりなのである。

「はいはい、御坂美鈴さんですよー」

美鈴は一方通行の方へ振り返ると、そのまま押し倒した。

「て、テメエ……」

「趣味は数論のお勉強、特技は水泳、おっぱいは91センチです。……いけね、私結婚していたんだった」

美鈴はそこから起き上がる。

「あれ、断崖大学のデータベースセンターってどこだっけ?」

彼女に関わると、ろくなことにならない。

それを感じ取った一方通行は、無視して歩き出した……が、やはり彼女に足首をつかまれ倒された。

「知るか、タクシーでも捕まえろ!」

イライラですぐにでも殴り飛ばしたいのを抑えながら、一方通行は乱暴に叫ぶ。

その後、彼は彼女を乱暴にタクシーにぶち込んだ。

「それを言ったら、コロッケだって鍋の1つだと思ふ訳よ」

当麻は歩きながら言った。

すき焼き屋で解散した後、土御門は何かしら用事があるらしくどこかへと行ってしまい、駿斗たち3人は寮への道を歩いて帰っていた。「それは極論過ぎると思うけどな。確かに、油という液体の中に具材を放り込むという点ではあっているが」

「作り立ての方がおいしいっていうのはその通りかも。あ、それならいっそ、私の前で当麻と駿斗が料理を作って、それを私が全部食べちやうってほうが——」

そう話をしながら、寮に向かって夜の学園都市を歩いていると、突然「あ、あーっ!」という声があった。

駿斗たちがそちらの方を見ると、近くに泊まっていたタクシーの中から倒れるように女の人が出てきた。御坂美鈴である。

「御坂さん?」

「美鈴さんはもう何もいりませーん、むにや……いけね。ストレッチしてないし乳液も塗ってないじゃん。よいしょ」

何というか、完璧に泥酔している様子である。

2人は彼女を何とかしようと思いつくが、

「おっしやー、年下の坊やゲッター!」

当麻が押し倒された。

「こんな時間にぶらぶらしちゃってー、美琴ちゃんはどうしたのよーぐわっ!?!」

駿斗は彼女の襟首を後ろから掴むと当麻から引きはがし、一度重力操作で拘束した。

「ねえねえ、断崖大学のデータベースセンターってどこだっけ?」

酔っ払い(美鈴)は、地面に拘束されたまま勝手に話を進める。

「レポートを書くための資料が学園都市にしかねーつつうもんだから、わざわざここにやってくるしかなかったんです」

「はあ」

「そうだ、電話番号とアドレス交換しよ？」

「唐突!？」

アドレス交換を済ませたことで満足したのか、彼女はタクシーに乗って目的地である断崖大学のデータベースセンターへと向かって行った。

一方通行は、夜道を歩いていた。

気になるのは、先ほど絡まれた、やっかいな酔っ払いの女性のことだ。

(御坂……偶然?)

自分が殺し続けたクローンとそっくりな容姿に、その姉オリジナルと同じ苗字。

単なる偶然とは思えない。

一方通行は携帯電話を取り出すと、電話をかける。

『一方通行。何か御用ですか』

だが、そこから聞こえた言葉は予想していた物とは異なっていた。(チツ、割り込まれたか)悪趣味な野郎だなア。お前が『グループ』の上か

『質問の内容を承ります』

「何もねエよ。こつちのことはこつちでやる」

一方通行は不機嫌そうな様子で言葉を返す。

『お耳に入れておきたい案件があったのですが、ちようどよかった。今始まったところですよ』

何? と彼が眉をひそめた時、鈍い音が響いているのが聞こえた。そちらを見ると、離れた場所にある1つのドーム状の建物から煙が出ているのが確認できる。

『かの御坂美鈴様より、断崖大学のデータベースセンターの利用申請

が出されていたものですから、そちらを襲撃させていただきました』
襲撃？

「その御坂美鈴ってのは何者だ」

『御坂美鈴様は、御坂美琴嬢の母親にあたります』

その言葉で、一方通行は納得がいった。先ほどあった女性が恐らく御坂美鈴なのだろう。それならば、今までに見たことがあったような気がするのも頷ける。

何しろ、一方通行はその娘と同じ顔をした少女に1万人以上会っているのだから。

『回収運動、という言葉はご存知ですか？』

この間の『〇九三〇事件』によって、学園都市とローマ正教との摩擦は表面化した。そのために学園都市が戦場になる事を恐れた保護者が、子供を安全な地方に移そうと運動を始めたのだ。

その運動の中で、御坂美鈴は保護者代表の様な立場に居るらしい。『多くの学生が学園都市を離れてしまうと、いろいろと困るのですよ。ですから、ここで摘んでおくことにしました。あなたも参加しますか、一方通行』

「何だと？」

『今回の件はスキルアウトに依頼したのですが、いやあ、手際が悪い。アシストしていただけるのであれば——』

その言葉を遮って、一方通行ははっきりと言った。

「お断りだ」

その上で告げる。

「俺の人生は俺のもんだ。そっちにどんな思惑があるのかは関係ねエ」

『そうですか』

通話先の相手は、さほど落胆している様子もなく言った。

『なら早く帰宅してください。それまであなたの能力はこちらで預かっておきますね』

そのとたんに、チョコレート電極の様子が変わる。

彼は表情を変えて叫んだ。

「お前、電極に細工を」

『では失礼させていただきます。おやすみなさい、一方通行』
通話が切れる。

一方通行は舌打ちしたが、不敵な笑みを浮かべた。

「御坂美鈴、だったか」

高揚すら感じさせるような声で呟く。

「こいつを助けりゃ、上は歯ぎしりするんだよなア」

体の向きを変えて、歩き出した。

その直後。

かつて自分を倒したツンツン頭の男と、もう1人その後ろから援護していた男が、目の前を横切って行った。

(あの野郎……いや、今はそれじゃねエ)

一方通行は余計な雑念を振り払う。

「さアと、最も救いから遠い方法で、何もかも血まみどろに救ってやる」

「そいつらは多分スキルアウトだ！」

当麻は駿斗と共に走りながら、電話で美鈴と話していた。

『スキルアウト?』

「無能力者が武装して集まった、ギャングみたいなもん」

『私を狙うのはなぜ?』

その質問に、当麻は駿斗の方へと顔を向ける。駿斗は頷くと、当麻から電話を受け取った。

「色々考えられます。例えば、娘さんは学園都市に7人しかいない超能力者です。最近は保護者の人たちが学園都市から自分の子供を、戦争が起ころる前に出そうとしているそうですね」

『ええ、そうよ。私はその運動で代表みたいなものをしているから』
その言葉を聞いた駿斗の表情が変わる。

「恐らく、それが原因です」

『え?』

「あなたの娘さんは1人で外の軍隊1つと戦えるほどの力を持っています。例え戦争に駆り出されることはないとしても、その戦力をアピールするだけで大抵の国は尻込みしてしまいます」

つまり、情報戦においては貴重な『戦力』となる。だから、手元に残しておきたいのではないか。

「それに、実際に回収運動が始まったら、それに倣って他の保護者達も動き出します。ですから、最初の1人を出さないようにしたい」

『……この街が不良に依頼したって言うの?』

美鈴の声が震える。

「この街が依頼したのか、それともマッドサイエンティストみたいな研究者が『被検体』を学園都市の外に出さないように依頼したのか……正確なところは分かりません。とりあえず、貴女が今はこの学園都市の将来、その一部分に大きく関わる可能性がある、ということは頭に入れておいてください」

駿斗は必要なことを伝えていった。

「御坂さん、アンタの娘には連絡したのか?」

当麻が叫ぶ。

「もしもまだ……」

『待つて、美琴ちゃんはパス!』

電話口から、慌てたような声が聞こえてくる。

『私の問題にあの子を巻き込んだら……もう、あの子に顔をあわせられないわ』

「分かった」

駿斗は当麻に電話を返した。

「それなら俺たちが行く!」

『ええ!? 君たちにそこまでは頼んではいな』

彼女の言葉を最後まで聞かずに、当麻は電話を切った。

2人は目的地である断崖大学のデータベースセンターに向かって走る。

「当麻」

その手前で、駿斗は声をかけた。

「相手がスキルアウトだということはお前の右手は通用しない。硬化手袋フリックグローブならある程度は何とかなるかもしれないが、恐らくは銃を装備しているはずだ。とすると……」

「ああ。途中で防弾ガラスか何かを拝借する必要があるな」

駿斗の言葉に、当麻は頷く。

彼らは建物の中に入ると、まずは周囲の索敵から始めた。

(AIM拡散力場による感知から、もつとも効率よく美鈴さんを助けてだすルートを考えないと……)

その時、駿斗は見覚えのあるものを感じ取る。

(……一方通行?)

それは間違いなく、夏に親友や幼馴染と戦った最強の超能力者のものだった。

(どうしてここにいるのかは知らないが、あいつが無能力者に加担しているとは考えにくい。目的が分からない以上は保留ってどこか)

そして、彼らは美鈴のいる場所を突き止めた。

扉を開く前に、小声で話し合う。

「(当麻、相手の数は5人。全員が銃を所持。俺が最初に武器を無効化するから、その後が続け)」

「(おう!)」

駿斗は念動フォーサーマー鎧を纏うと、防弾ガラスを抱えてわざと目につくように大きな挙動で飛び出した。

「何者だ!」

スキルアウトが発砲する。だが、駿斗はガラスを盾にすることもなく、やすやすと近づいた。

そして、ガラスを構えると念動鎧を解除し、銃に狙いを定めてその金属結合を分解していく。

「銃が!」

「こいつ、能力者か!」

その直後、後ろの扉から銃声が鳴り響き、スキルアウトが倒された。

「(一方通行!) 当麻! 御坂さんを連れて行け!」

駿斗は周囲のスキルアウトをなぎ倒すと、後ろからの銃に気を配り

ながら当麻の援護を始めた。

学園都市で動く闇

当麻は美鈴を連れて扉を開けた。

「裏口か。とりあえず、人の多いところへ行こう」

駿斗が言う。だが、その瞬間彼は防御術式を展開した。

「誰か、そこにいるな？」

「何でだよ……」

その後ろの陰から、茶髪の男が姿を現した。

「何でこのタイミングでやってこれた。依頼そのものがダミーで、俺たちははめられたのか？」

その男は、右手に金属棒のような武器を持っていた。

「依頼だと？」

「駒場の野郎が殺されて、路地裏に対する制圧作戦を回避するには、奴らに取り入るしかねえと……くそ、最初から見捨てる腹だったのか！」

彼の言葉の意味を、2人は徐々に理解していった。

「お前は勘違いをしている」

防御術式を消して、駿斗は言った。

「俺たちは、この人から電話を受けてやってきただけだ」

当麻の言葉に、男の表情が変わる。

「つまり、あれか」

男が声を荒げる。

「この浜面仕上の人生が終わるつつうのに、巨大な陰謀に巻き込まれたとか、とんでもない策士がいたとか、そういう風に誤魔化すこともできないってのか!？」

浜面は伸縮式の特種警棒を取り出した。

「甘ん」

駿斗は、すぐにそれを塵にする。

右手から砂のように崩れていく警棒を見て、浜面は舌を鳴らした。

「くそ、能力者が……」

「当麻、俺は御坂さんを連れて行く。ここを頼めるか？」

この男には、2人でわざわざ勝負する必要がない。そう駿斗は判断した。

むしろ、当麻1人でも過剰なくらいだ、と。

「分かった。御坂さんを頼む」

「おう。という訳で、こつちに来てください」

駿斗は彼女の手を引きながら走り、片方の手で携帯電話を操作する。

（やっぱり警備員にはつながらないか。とすると、風紀委員、いや、初春さんあたりにでも頼んだ方がいいか？）

一方で、当麻は浜面と戦っていた。

自分の武器である警棒を失った浜面は、拳を振るう。

対し、当麻も『硬化手袋』フリックグローブをしまうと、自分の拳を握りしめた。

「つてことは、あれだよな。お前が依頼主と無関係ってことは、まだ依頼は有効って訳だ。ターゲットの死体をもっていけば……」

「もう一度言ってみろ、テメエ！」

当麻は浜面の胸倉をつかむと、頭突きを喰らわせた後に右拳をお見舞いする。

「ぶぎけんなよ……人の命をなんだと思つてやがる！」

当麻の言葉に対し、浜面は鼻から血を流しながら叫んだ。

「仕方ねえだろ！俺たち無能力者はこうでもしねえと生きていけねえんだ！」

始まりは自分たちのリーダーであった駒場利徳の死であった。

路地裏に対する制圧作戦のために、彼らスキルアウトは大きくその力を失った。だから、上層部に取り入ることにしたのだ。

そうしないと、この先を続けて行くことができないから。

だが。

「一緒にするんじゃないよ」

その言葉を上条当麻は否定する。

「全ての無能力者を、テメエ見てえな野郎と一緒にするんじゃないよ！」

その言葉で、浜面は気が付く。

先ほど御坂美鈴を連れて行った男は確かに能力を使用していた……だが、目の前のこの男はどうだ？

ここまで追って来たのは、その足だった。

仲間を倒していたのは、その拳だった。

「無能力者の人間なんぞ、学園都市にはゴロゴロいる。だけど、そういったら普通に学校に行って、普通に友達作って、普通に生活しているんだろ。そういうお前の方が、一番無能力者をバカにしているんじゃないか！」

「テメエも、俺たちと同じ……」

「同じじゃねえよ」

当麻は即答する。

「確かに俺は無能力者だけだな……他人の足を引つ張って喜ぶほど、
“マイナス”になった覚えはねえんだよ！」

「俺たちがマイナスだと……力を持っているのに何も与えてくれない、あんな連中に比べれば！俺たちスキルアウトの方が、100倍マシだろうが！」

「じゃあお前は、助けを求めている人に手を差し伸べたのか」

その言葉に、浜面が虚を突かれたような表情になる。

「もしもスキルアウトを結成するだけの力を使って、もっと弱い立場の人を助けていたら、それだけでテメエらの立場は変わったんだ！
強大な能力者に反撃するだけの力を使って、困っている人に手を差し伸べていれば、テメエらは学園都市中の人たちから認められていたはずなんだよ！」

「黙れ！」

浜面がもう一度、特殊警棒を構える。

「そういう風に生きてきた駒場利徳って無能力者のリーダーは、殺された。場違いにも！弱者を守ろうとしてな！」

「だがそいつには、テメエにはなかったものがあつたはずだ！」

だが、上条当麻の言葉は止まらない。

「だから、逃げずに最期まで戦ったんじゃないのか。弱者なんて言わずに！仲間を守るために！」

「ふざけるな！俺たちと同じ無能力者のくせに、ろくな力も持っていないくせに、バカにしゃがって！」

浜面が駆け出した。当麻は、右拳を握りしめる。

「お前たちがバカにされてきた理由は、力のあるなしなんかじゃねえ」
特殊警棒を振るう浜面に対し、当麻がやることはいつもと同じだ。
相手の幻想をぶち殺すために、全力で右拳を振るう。

「そんなつまねえ幻想なんて、自分でどうにかしやがれ！このクソ野郎が！」

2人は交差し、そして片方の影だけが崩れ落ちた。

「実を言うとね」

救急車に乗せられた当麻を見ながら、美鈴が言う。

「私は、美琴ちゃんを連れもどしにきたの。でもまあ、安心したよ。君たちみたいなのが、美琴ちゃんを守ってくれるのなら、何も問題ないって話よ」

「……そうですか」

ふと、今までの妹^{シスターズ}達関連の騒動——絶対能力^{レベル}進化計画⁶、暗闇の五月計画、エクステリアの一件、0930事件——を思い出して、駿斗が呟く。

自分は、そこまで大層な人間なのだろうか、と。

救急車が発進したので、駿斗は病院へと歩き出した。

「そうだ、インデックスも連れて行かねえと」

一度寮に戻る必要があるそうだと、駿斗は考え移動する。

「おーい、インデックスー」

当麻の部屋の扉を開けると、インデックスはスフィックスを抱えながら部屋でテレビを見ていた。だが、駿斗が1人で入ってきたことに驚く。

「あ、はやと。あれ？とうまは？」

「いつもの病院。ちよつくら友人の母親を助けってきました」

その言葉に表情を変えたインデックスが、スフィックスを抱えたまま

ま部屋を飛び出そうとする。このままでは危ない、と駿斗は彼女を落ち着かせて（具体的には後ろから襟首を捕まえて）部屋を出た。

暗い夜道の中を、駿斗とインデックスは歩く。

その途中で、電話が鳴った。

駿斗がケータイを開くと、そのディスプレイには『絹旗最愛』の文字。

『もしかして、今日そちらで超面倒なことが起こりませんでした？』

知っていたのかよ、と駿斗は心の中でツッコんだ。

「ああ……えつとだな」

『心配しなくても、自分たちの部屋からかけているから御坂はいないぞ』

「そうか」

駿斗は、大人しく御坂美鈴を中心とした一連の騒動を説明する。

「……という訳でした」

『御坂の母親が、ねえ……』

駿斗からの説明を聞いて事情を理解した最愛と海鳥は、そう言った。

「とりあえずそのスキルアウトはぶつとばしておいたけれど」

『しかし、どうしてわざわざスキルアウトなんかに依頼したんだ？』

海鳥が疑問を発する。

「路地裏に対する制圧作戦を回避するためにやつらに取り入った、とか言っていたけどな」

『まあ、すでに暗部に所属している奴よりも安く利用できるのは超分かりますけれども』

最愛が話す。

『考えても分からない物はしょうがない、か』

「それよりも、また0930事件の二番煎じが起こらないように、今はローマ正教が何かしてこないかを考えた方が良い気がするからな」

そこまで話すと、病院が近づいてきたので駿斗は通話を切った。

「さて、いつもの『ふりだし』に戻った親友を……と、あれ？」

「あ、ひょうかだ！」

病院の1つ手前の交差点で、駿斗達は風斬氷華と遭遇した。

「あれ、2人……?」

彼らを見た風斬が、そんなことを呟いた。

インデックスはどちらかというところ、駿斗よりも当麻と一緒にいることが多いからだろうか。

「当麻には、今から会いに行くところだ。例によって面倒ごとに巻き込まれて入院したからな」

「それは大丈夫なの?」

風斬が心配そうに言う。

「大丈夫だと思うぞ」

だが、駿斗は言った。

「多分、明日には退院しているってオチだと思うから」

駿斗にとっては、親友の入院騒ぎは中学の頃から手慣れたものであるために、あまり危機感がなかったりする。(それもどうか、とは本人も思っているが)

そういうわけで。

「こんにちは」

「上条さんなら、いつもの部屋ですよ」

「ありがとうございます」

——というやりとりだけで、駿斗のお見舞いの受付は済んでしまったりするのだが。

最近では、インデックスもほとんど顔パスに近い状態になりつつあったりする。

「あまりうれしくない『慣れ』かも」

「冥土返しヘウンキャンセラの先生とも、すっかり顔見知りになっちゃったしなあ

……」

冥土返し。

どんな病気・負傷であっても最後まで患者を見捨てず、あらゆる手段を用いて治療してしまうという。

噂によれば、現在まで行った全手術を成功させている上に、彼自身は寿命すら克服してしまったらしいとのこと。

例の病室の前にたどり着き、インデックスがその扉を開ける。

「とうまー」

入院着を着て頭に包帯を巻いた少年を確認すると、彼らは部屋の中に入った。

始まりは例によつて、インデックスのお説教である。

「もう、また駿斗と出かけて大けがするなんて、相変わらず2人の行動は訳が分からないんだよ!」

「あ、今回はまだ運がよかったほう……」

言い訳を始めた言いかけた当麻だが、インデックスの纏うオーラが黒くなったのを見て顔を引きつらせる。

シスターの口が大きく開かれた。

「はいはい、落ち着けてインデックス」

駿斗が彼女を拘束し、当麻は何かかみつき地獄を逃れることに成功する。

「しかし、上層部からそういった命令が出ているとすると、どうするつもりだろうか」

この街は、このまま戦争に向けて準備を進めていくのだろうか。

「戦争か……土御門も今日言っていたけれど、あまり実感がわかないんだよな。それとも、また9月30日のような事件が起きるっていうのか?」

深刻な顔をした当麻が言う。

「どうだろうか」

駿斗はあごに手を当てた。

「世界史の教科書などを見る限り……過去の戦争においては、その引き金は様々だ。第一次世界大戦ではオーストリアⅡハンガリー帝国の皇位継承者の夫妻が銃撃されたことがきっかけだったし、第二次世界大戦では世界恐慌の結果、ファシズムが台頭したドイツがポーランドへ侵攻したことが始まりだったと思う」

だけだ。

「今の世界情勢……それは、今のところ学園都市&イギリス清教VSローマ正教という構図になっているということだ。だが、今のところ

は2つの勢力に大きな隔たりがある」

「大きな隔たり？　ローマ正教っていうのは、信徒に20億人をおかかえているんだろ？」

駿斗の言葉に当麻が疑問を呈した。だが、彼は言葉を続ける。

「だが、それらは全て宗教であり、魔術サイドなんだよ。たしかに魔術は強力だが、学園都市の驚異的な科学はそれに対抗し、そして打ち勝つ可能性すら秘めているからな」

さらに、魔術は必ず人間が使用をしなければならぬのに対し、科学は一度兵器を作ってしまうえばある程度自動操縦で活用することもできるというメリットも存在する。

それに、魔術は基本的に表に出てはならない物だ。その辺りにも制限という物は存在するだろう。

「まあ、今はニュースを見て世界情勢をチェックしておくことが、俺たちにできることだろうな……」

少年のつぶやきが病室に霧散する。

争いが迫っていることは分かっている。

しかし、彼らは必ず後手に回ってしまうのだった。

暗部もまた、次なる戦争に向けて動く。

スキルアウトの撤退を確認した一方通行は、現代的なデザインの杖をつきながら路地裏を歩いていた。

だが、十字路の手前で急に立ち止まると、言葉を発する。

「……上に言われて、俺に罰則でも与えに来たのか？」

その言葉に応じるように、横から土御門、海原、結標の3人が姿を現した。

「まさか」

土御門が言う。

「御坂美鈴の件について、娘を学園都市から連れ出そうという気は失せたらしい。なので、殺害は中止」

「上がそんな曖昧な結論で認めるのかア？」

一方通行が疑問を発したが、土御門は海原の方へと視線をやった。「認めるだろうさ。主に、海原のバカが1人で頑張ったからな」

海原は柔和な笑みを浮かべた。

「いやあ、あの少年にはこちらの思い人とその周りの世界を守ってもらうという約束を、守っていただけているようですし。自分も頑張らないといけないー、と思ひまして。少しだけ、肩に力が入りすぎてしまったのですよ」

「……さつきからずっとこの調子で具体的な回答を控えているのよ。恐らく、よほど醜い手を使ったのでしようね」

結標が呆れたように言った。

「とにかく、残業も含めて初陣お疲れさま」

土御門が言うと、一方通行は「クソツタレが」と吐き捨てるように言った。

「ルールに従っているだけじゃ、奴らは出し抜けない」

土御門が話す。

「普通の方法じゃ、ダメってことさ。上にとってお前は、よほど貴重な物らしいからな。手を結ぼうぜ、一方通行」

「面白エ。ただし、お前らが足を引っ張るなら、容赦なく切り捨てる」その言葉に、土御門は笑った。

「威勢の良い小僧だ。ついてこい。そろそろ、上の連中に反撃しようぜ」

土御門を先頭にして、結標、海原も歩き出した。その後に、一方通行も続く。

(楽しいねエ。目的があるっていうのは、本当に楽しい)

嘘
土御門元春と。

案内人
結標淡希と。

偽物
海原光貴と。

悪党
一方通行。

初陣を終えた彼ら『グループ』は、本当の目的に向けて動き出す。

そして、それは彼らだけでなく、他の暗部もまた同じだ。

夜。学園都市の外周にある、壁からあまり離れていない場所。そこ
の暗闇を、一筋の閃光が切り裂いた。

「ブ・チ・コ・ロ・シ確定だ、クソ野郎——」
マルチタウナー
原子崩し。

通常、『粒子』あるいは『波』の状態をしている電子を、その2つの
どちらにも属さない『曖昧な状態』で固定、高速で射出する第4位の
レベル5
超能力。

その能力を所有しているのがこの暗部組織『アイテム』のリーダー、
麦野沈利であった。

「むぎの、あの扉の向こうにも1人」

そう言った少女は滝壺理后。

学園都市内では希少なAIM拡散力場に関わる能力、AIMストーカー
能力追跡を有
している。

「りょーかい」

麦野は扉を気にすることなく、原子崩しで打ち抜いた。

『曖昧な状態』となった電子は本来、その場に『留まる』性質を持つ。
しかし、彼女はそれを無理矢理高速で移動させることにより、擬似的
な『壁』となった電子を相手に叩きつけることができるのだ。

その破壊力は超電磁砲レールガンをも上回る。

科学的な正式分類名は『粒機波形高速砲』。

扉ごと切り抜かれた先には、1つの肉塊と1人の男がいた。

「侵入者はっけーん！ 結局、私達の手にかかればこんなものって訳
よ」

「残念でした、ってことで」

そこに金髪にベレー帽をかぶった少女、フレンダと、ジーンズに
パーカーという非常にラフな格好をしたサイドポニーの黒髪の少女、
きりおかめぐみ
霧丘愛深が現れた。

フレンダが手に爆弾を持っているのに対し、霧丘という少女が持つ
ているのは、刃渡りが15センチほどのナイフだった。

正確には、ナイフはその右手にだけ握られているのではない。その

前方にも6本が浮いていた。

「ば、化け物……」

「そんな言葉、今更なんですけれど」

侵入者の男が言葉を発するが、霧丘はさも当然といったように受け流してしまふ。

「く、くそー」

男は彼女に向けて銃を向ける。

彼女の前に浮いているナイフが3本落ち、だがそのナイフが向けられるよりも早く引き金が引かれた。

しかし。

「ば、馬鹿なー。ハンマーが」

拳銃に取り付けられているハンマーはそのままであった。

「さようなら」

彼女が男に向かって突進すると、浮いていたナイフが彼女の動きにシンクロするように男に突き刺さり、そして彼女の手に握られていたナイフの刃が男の首を切る。

「あら、アンタも少しは慣れた？。霧丘」

麦野は霧丘に向かって声をかける。

「まあ、少しは」

「霧丘はもう少し話すことが多くても良いと思う訳よ」

フレンドが話に加わる。

「絹旗がいなくなつて、あのうるさいC級映画の話も……ヒイ！」

フレンドが途中で言葉を止めた。

その視線の先には、いかにも「不機嫌です」と言わんばかりの表情をした麦野がいる。

「ふーれんだあー？ あのクソ処女野郎の話はやめようってこの間言っただけじゃなかったかにやーん？」

「ゆ、許してほしい訳よ、麦野」

その表情に、冷や汗を全身から流しながら後ずさりをするフレンド。

「待って、麦野」

彼女が振り上げようとしたその手が、突然不自然に停止する。

「全く、やっかいな能力ね。その座標確立は」

大能力^{レベル4}の座標確立——それが霧丘愛深の能力であった。

「たいしたこと、ない。私は、『不適合者』だから」

『不適合者』——それが、彼女がかつて研究者に押された烙印だった。他でもない、かつてこの『アイテム』に所属していた少女が巻き込まれていた『暗闇の五月計画』——その計画に参加すらせずに切り捨てられた少女に。

「ま、使えるなら別に良いわ」

麦野は気軽に言う。

この少女が『アイテム』に所属することになったのは、つい最近のことだ。8月の中旬に抜け出したかつてのメンバー、絹旗最愛に変わり、『上』が用意した人員であった。

「使える人間、じゃなきや。そもそも、下部組織に配属される」

「ご名答、霧丘」

麦野は合図をして、そして彼女たちは撤退を始めた。

今日の『仕事』が終わったのだ。

「はー、今日も今まで通り、か」

「霧丘が来たから少し変化があるかと思ったら、結局今まで通りの依頼だったって訳よ」

麦野の言葉に、フレンダが苦笑いで返す。

「南西から信号が来てる……」

車内ではそんなことを呟いて、滝壺はひたすらぼーっとしていた。その様子を見た霧丘が言った。

「そういえば、滝壺さんって、『体晶』、を使用しているんだっけ」

「そう」

彼女の言葉に、滝壺は簡潔に答えた。

「どう？」

「別に」

それだけで会話は終了し、霧丘と滝壺の2人はそれ以上何もしゃべらなかつた。

麦野は思索にふける。

(あの時から1ヶ月半か)

あの時——第4位の彼女が1人の少年に敗れ、そしてメンバーであった少女が、『裏』から『表』へと返されてから1ヶ月半。

それだけの時間が経った。

(絹旗のやつは『表』で暮らせているのか?)

あの男に連れられるように『アイテム』から姿を消した絹旗——だが、その後に来たのは「絹旗最愛を『アイテム』の正規メンバーから除外する」というものだった。

本来なら暗部から、そして現実世界からも『クビ』になっていなければおかしい状況。

だが、彼女がまだ生存しており『表』の学生として常盤台中学に編入したことを『アイテム』はつかんでいた。

(あの男には、それだけの価値があるってことか)

麦野はあのときの少年を思い出す。

様々な能力を使い、1人の少女を救い出していったヒーローのような彼を。

「じゃあ、今日はこんなところで終わりがしら」

彼女たちはワゴン車に乗り込む。

しばらくは適当に話をして時間のつぶしていたが、そこへ通信が入った。

『連絡があるからさー。黙って聞いていてね』

「連絡だと? どうした、メンバーの補充なら間に合っている」

電話の先の女の声に、麦野は面倒くさそうに返す。

『そうじゃなくてさー、下っ端の方。どうでもいい仕事をスキルアウトの奴に依頼したらさー、失敗しやがってさ、こいつとききたら。そのリーダー格の男をあんたらの下働きとして入れることが決定したから』

その言葉を聞いて、麦野はつまらなそうな表情を浮かべた。

「使えない奴はいらないんだけど」

『決定したことだから、文句言わないでよね。こいつとききたら。じゃ、

よろしくー』

通話が切られてしまったので、
麦野はメンバーに一言伝えた。
「下っ端が増えるってさ」

C文書編 Last Judgment
世界の騒動

10月初旬のある夜。黒夜海鳥は、寮の部屋で携帯端末の小さなディスプレイを絹旗最愛と共に見つめていた。

そこには普段なら、大抵は最愛の趣味であるC級映画が映されているのであるが、この日その画面に映っていたのは怪獣達の陳腐な戦闘シーンでもなく、変わった服装をした人間たちが剣や銃の先を互いに向けている姿でもなかった。

その画面に映されているのは、全てが学園都市ではなく海外の……特にローマ正教が広まっている国々を中心とする場所で、学園都市を批判する人々である。これはニュース番組なのだ。

『現在時刻から二時間ほど前から始まったばかりのこのデモですが、彼らの勢いは衰えることを知らず、逆に多くの人がある列に加わり続けており、付近の家電量販店など学園都市の製品が並ぶ店舗では破壊行動なども見られています』

アナウンサーが、恐らく先ほど書き上げられたばかりであろう原稿を読み上げている。

『フランスでは国民の8割以上がカトリック系ローマ正教徒であると言われており、同様の活動が複数の都市でもみられることから——』
「戦争、か」

そのニュースを見た海鳥が呟く。

「学園都市は、どうするつもりなんだか」

特に答えを求めているわけではない言葉であったが、最愛がその呟きに応えた。

「これですよ、黒夜」

最愛は彼女に携帯電話の画面を見せる。そこには、学園都市の各地で催されるイベントがずらりと並べられていた。

南米の芸術品の展示だの、著名な音楽家のコンサートなどが多くを占めており、普段なら絶対に開くことのないそのページを彼女が開い

たのには、そのページの一行が理由を示していた。

『第三学区／迎撃兵器ショー』

迎撃兵器。

本来ならば、学園都市が開発する必要があるのは、暴走した能力者を最低限のダメージだけで捕獲するような武器だけである。実際、アンチスキル警備員が使っているのは基本的に暴徒鎮圧などに使われるゴム弾が基本であるし、そしてそのような武器が使われることは基本的に少ない。

しかし、この『迎撃兵器』は異なっていた。

これまでの武器にあったそのような色合いは影をひそめ、その代わりとして登場したのは、戦車の陰に隠れたら、その戦車ごと標的を貫通するような大威力・高殺傷力の兵器ばかりである。

「この迎撃兵器ショー。一見すれば、統括理事会側からの超正式な『デモには屈しない』という意思表示」ととることができません。しかし」「あまりにも手際が良すぎる」

最愛の言葉の先を、海鳥が先に答えた。

これは警備員アンチスキルか風紀委員ジャッジメントでもなければ、一般人では答えられない。『暗部』にいたからこそ答えられるものだった。

「兵器開発というのは、プラモデルをつくるというのは訳が違う。開発の申請、予算の計算、試作機的设计、何回ものシミュレート……：物品を作っても、『商品』として売り出せるものにするには年単位の開発を必要とするものだ」

一連のデモが激化したのはつい先日の話だ。デモが起こってからでは絶対に間に合わない。

「つまり、この状況は上層部の連中にとっては超予想通りというわけなんでしょうね」

「ああ」

さらに、このような公開は明らかに外部企業への『売り』セールスを目的としていないだろう。どちらかといえば、これは公開軍事演習と言った方が良い代物だ。『外』の技術では決してわからない詳細不明の破壊力だけを『敵』に突きつけ、その威圧感をもって外交のカードを切る

うとしている。

『外』と取引する商品にしても、だ。展示しているものがそのまま売りに出されるわけじゃあない。ライフルのフルオート機能を排除して店頭に並べるように、実際には三世代くらいはグレードを落として売るんだろう……。『外』のことをまるで知らない私たちが言うのも何だが、下手したら、『外』でも作ろうと思えば作れるような代物になっている可能性すら、あるな」

どうして学園都市はそこまでして兵器を売りさばこうとしているのだろうか。

「金を集めて新しい兵器でも作るつもりか？」

「まあ学園都市だったら、昔のC級映画に出てくるような、ロケットパンチを繰り出すロボットを作っても超不思議というわけでもありませんけれども」

そんな彼女たちは知らなかったが、今回の大きな『争い』の中心には、彼女たちが良く知る二人の少年の存在があった。

上条当麻。そして、神谷駿斗。

当麻は幻想殺しという特殊な力を持つこと以外には、極端に不幸であることを除けばごく普通の高校生であるはずの少年だった。

そして、駿斗は彼女たちとは同じように親に学園都市に捨てられたチャイルドエラー置き去りで、同じ施設で育った幼馴染である。また、当麻と同じように幻想創造という特殊な力を持つてはいるが、その2つを除けばやはりごく普通の高校生。

しかし、この少年たちは『神の右席』や『十二使徒』の言葉通りであれば、二十億人を敵に回している状態であった。まあ、ここ数か月で彼らがなし崩し的に解決してきた問題の数々を思い返せば無理もない話ではある。

そういうわけで割と争いの中心っぽい少年の片割れ、上条当麻は、

「――で、何でこんな事をしたのか、先生に話してみなさい」

職員室で長身の、ブランド品の逆三角形の眼鏡をかけた女教師、親船素甘から思いつきり説教を受けていた。

より厳密には彼一人というわけではなく、同じクラスの土御門元春や青髪ピアスも一緒であり、つまるところ、いわゆる『デルタフォースクラスの三馬鹿』と呼ばれる彼らが説教を受けていたのであった。

「もう一度尋ねるわ。この学び舎で好き勝手に乱闘し、コブシを武器にアツイソウルをぶつけ合っちゃった理由をこの私に説明しなさい」沈黙が生まれた。

職員室の壁際に置かれたテレビでは、『度重なるデモによって、イタリアのサツカーリーグが今季の試合を中止した』といった内容のニュースが流れている。

この女教師は『しつけ』に関して厳しいことで有名だった。いつもなら彼らのバカ騒ぎは小萌先生の管轄なのであるが、昼休み中は彼女がいなかったのだからまたま居合わせたこの教師が彼らを連行することになったのだ。

当麻はキツ！ と正面を強く見据えると、

「だって！ 俺と青髪ピアスで『バニーガールは赤と黒のどちらが最強か』を論じていたのに、そこに土御門が横から『バニーガールと言えば白ウサギに決まってるだろボケが』とか訳の分からないことを口走るから！」

ガタガタン！ という大きな音と共に、素甘が椅子ごと後ろへとひっくり返った。

起き上がった彼女は三バカの背後に立っていた吹寄制理に目を向けると、

「ま、まさか、あなたもそんなくだらない論議に参加して……？」

「あたしはこの馬鹿どもを黙らせようとしただけです！ 何であたしまで引つ張られなくちゃならないんですか!？」

こめかみに血管が浮き出ている吹寄だったが、この教師が教室に入った時には吹寄が土御門にヘッドロックをかけながら青髪ピアスを蹴り倒し、当麻に硬いオデコを叩き付けているところだったのだ。

ガキ大将度で言えば間違いなく彼女がナンバーワンだったりする。

「神谷君はどうしたの？ 普段、彼らの行き過ぎた悪ふざけは基本的に彼が食い止めていたと思うのだけれど」

素甘の言葉を聞いた当麻が言う。

「駿斗ですか。あいつはなんだか忙しいみたいで、最近は昼休みも屋上に行つてよく携帯電話で誰かと話しているみたいなんですけれど。なんでも、『準備をしている』とか」

「準備？」

素甘はその言葉に疑問を発するが、第二ラウンドを始めた彼らを治めるために生活指導の災誤ゴリ先生を呼ばなければならなくなった。

結局、その後彼らは放課後に体育館裏の草むしりをする事となった。

「土御門と青髪ピアスめ……あいつら雲隠れしやがったな」

だが、現場に集まったのは4人の内2人だけであった。

「どうせ全部抜く前に完全下校時刻になって追い出されるだろ。それまでまつたりと草むしりをしていようぜ」

発火能力者でもつれてくれば早く終わるのに、とぶつぶつ文句を言いながら当麻はゆっくりと草をつまみ出した。どうして私が……、とその隣で文句を言いながらも吹寄もまた草むしりを続ける。

始めて5分くらいで飽きてきた当麻は、少し離れたところで屈み込んで作業している吹寄に話しかける。

「そういえば吹寄せ」

「何よ？」

彼女も退屈していたのか、簡単に話に乗ってきた。

「中間テストが中止になったじゃん？ にも拘らず休み時間に勉強していたみたいだけれど、あれはいったい？」

その疑問に対し、なんだ、そんなこと？ と吹寄はそっけない調子で答えた。

「分かっているの上条？ 中間テストがないってことは、期末のテスト範囲がその分増えるってことじゃない。単純計算で倍にね」

「……」

「ちなみにノートは見せないわよ。あと、何でもかんでも神谷に頼るんじゃないわよ」

中間テストがなくなったぜイエーイ！ と有頂天になっていた当麻に淡々とどめを刺していく吹寄。彼は平常運転であった。

その一方、駿斗は『準備』を終えて教室へ荷物を取りに向かっていた。

「まったく、あの先輩も良い人なんだけれどなあ……。飄々としていてつかめないというか」

屋上で携帯電話を使って通話していた彼であったが、話が終わりこの後の予定が決まったので、帰宅してから速攻で親友を捕まえてその用事を済ませなければならなくなったのだ。

教室に着いた彼であったが、そこにまだ彼のカバンが残っている事に気が付く。

「ん？ また何かに巻き込まれているのか？」

いつも通りの『不幸』だろうか、と考えていた彼だったが、周囲に誰もいないことを確認すると、『幻想核杖』イマジネーションコアロッドを取り出した。

『幻想千眼』サウザンズアイ

幻想千眼。

千里眼の伝説を始めとした、あらゆる知覚系統の能力・魔術を1つに収束したものだ。

(AIM拡散力場が常に消失している座標を検索)

彼は移動を始めた。

そして、体育館裏へと移動した駿斗だったが、その時慌てて走り去っていく親船素甘を目撃する。傍から見ても、彼女はいつものクールな姿とは程遠いことがうかがえた。

「で、何があったんだよ親友」

駿斗は後ろを振り向かず、背後に吹寄と共にいる親友へと声をかける。

「ちよつとした、不幸な事故だったのですよ親友」

そもその話は、当麻が「学校の勉強だけが全てじゃない」と言ったことに対して、吹寄が「勉強しかできない訳じゃない」という感じ

で言い返したことがきっかけであった。

そして、「フオークボールが投げられる」という吹寄に対し、「かつとばす」という当麻が箒をバット代わりに使いながら勝負を開始。しかし、『負けた方が5分間草むしりをする』というルールが導入されてから23戦目の時、その事件は起こった。

簡単に言えばこうだ。

ファウルチップが、草むしり終了を知らせに来た親船素甘の顔面に直撃☆

「やばいからな!? それ絶対に鬼の説教コースだからな!」

「いや、ただの不幸だったんですってば!」

特にあの教師は普段から非常に服装や化粧に気を使っている節が見られるので、説教が少なくとも3割増しになることは確定である。

「まあ、私の不注意でもあったから、他人ごとではないのだけれど……本当、もつといろいろと気をつけなさいよ。上条当麻」

吹寄からありがたい説教をもらおう当麻。

駿斗はため息をついて、当麻に言う。

「とにかく、早く親船先生のところへと行って来い。それよりも、やることができた……ローマ正教関連でな」

駿斗は、最後の方が近くにいる吹寄に聞こえないように言った。

その言葉に、当麻が表情を変える。

「急ぐぞ。何しろ、今回待たせている人は統括理事会の人だからな」

当麻は目を大きく見開いて驚いた。

彼らは急いで帰宅すると料理を舞夏に全て丸投げし、インデックスを置き去りにして部屋を飛び出す。

その途中で、御坂と遭遇した。しかもジューズの自販機にハイキックをぶち当てては、「ここの自販機はだめなのか……。あれー?」などとのたまっている。

その様子を見た当麻が、その場でぐるりと180度回転した。

「……君子危うきに近寄らず。または触らぬ神に祟りなしとも言おう」

「何がよ？」

当麻が呟いた独り言に、キョトンとした表情でありながらも鋭く反応する御坂。

恐る恐る、といった感じで180度回転した当麻は、うう……と悲嘆めいた吐息を漏らす。

「許してください……」

「いや、それは大げさすぎる気がするぞ」

「だから何がよ？」

その言葉に駿斗はつつこむが、当麻はその後をつづけた。

「上条さんは放課後の草むしりとかでヘトヘトなのです！ ただできえこれからも用事があるのに、これ以上のトラブルは本当に勘弁してください！」

「だから何だつつつてんのよ！」

マツハで逃げ去ろうとする当麻を捕まえる御坂。

「つつーかことあるごとくに話しきりあげようとするんじゃないわよ！」

この間送ったメールの返信もほったらかしだし！」

「メール……？ そんなのあつたつけ？」

「あつたわよ！」

当麻は首をひねって思い出そうとしていたが、どうにも思い出せないように携帯電話をポケットから取り出した。

「あつたつつつてんでしょ！ ギゃえ、受信ボックスに何も無い！」

一人でギャーギャー騒いでいる御坂。すると、彼女は当麻の携帯をぶんどって、電話をかけた。

どうやら、当麻の携帯電話の電話帳に彼女の母親である御坂美鈴が登録されているのを確認したため、その理由を聞くために通話しているようである。

(たしか、この間の10月3日だったつけ？)

彼女の母親の命が狙われたあの日、酔っぱらっていた美鈴によって半ば強引に電話帳を交換させられていたはずだ、と駿斗は思い返す。

そして通話を終えた彼女はにっこりとほほ笑み、お上品に携帯電話を両手で包んで返しながら、

「ア・ン・タ・は、人ん家の母親を酔わせて何をするつもりだったアああああ!？」

「はあー!? 何だそのエキセントリックな推理は!? あとお前の母は絶対に覚えているよ! なぜなら最期の笑いが超胡散臭かったからッ!」

彼らが2人だけの世界に入ってしまった、完全に忘れ去られている駿斗。

(まあ、まだ時間はあるけどな)

そう思いながら彼は遠くを見る。

ここから500メートルほど先には、9月30日の『大天使』の出現と共に切り崩されて行つた街並みがあるからだ。

駿斗が思いを馳せているうちに、2人の話題もそちらにシフトしたらしい。

駿斗が分かっているのは、あの日1人の『神の右席』によって学園都市のゲートが破壊された上に警備が無力化されたこと。

そして、それについて来る形で『十二使徒』のうち3人がともに侵入したこと。

さらに、それに対抗するかのよう^{シスターズ}に学園都市が風斬氷華を、妹達を利用してA I M拡散力場に干渉することで『天使』と化したこと。

逆に言えば、それだけなのだ。事件の中心に巻き込まれたためにある程度の情報は知っているが、逆に言えば事件の中心にいたにもかかわらずこの程度のことしか知らないのだった。ならば、ただ巻き込まれただけの人間が知っていることなどたかが知れているだろう。

もつとも、事件の中心から外れているからこそ、『安全な位置から調べ物をする余裕』が発生しているのかもしれない。そして、御坂としても学園都市が発表した『国外の宗教団体が秘密裏に科学的な超能力開発を行っていて、そこで開発された能力者たちが襲ってきた』という話を鵜呑みにしてはいない。

だが、彼女は今は別のもの——ニュースを映し出す飛行艇に注目しているようだった。

『今までヨーロッパ圏内で活発に行われていた、ローマ正教派による

大規模なデモ行進や抗議行動ですが、今度はアメリカ国内です』

アナウンサーは淡々と原稿を読み上げている。

「ちくしょう。また一気に拡大したな……」

画面の中では、マラソンのスタート直後のように道路をいっぱいに覆い尽くす人々が、火をつけた学園都市の看板を掲げたり、横断幕をズタズタに引き裂いたりしている。

一見すれば、彼らはただ怒りをアピールしながら行進しているだけのようにも見える。

しかし次の映像には、救急車に運ばれて行く男性の姿や、顔に青黒いあざを作ったシスターが、ぐったりとした神父に肩を貸している姿などが見られた。

あの人たちは、確かに十字架や聖書を所持しているローマ正教徒であるのかもしれない。しかし、『魔術』あるいは『神の右席』と関わっているかと言えばNOだと思うのだ。

「どうなってるのよ……」

御坂が呟く。

「9月30日に何が起きたのなんて知らない。だけど、別にこんな望んでいなかったじゃない。あの一件が引き金になったなんて言われても、当の学園都市は全然静かなまま……絹旗も黒夜も、街中を歩いても特に奇妙な動きは今のところ感じられなかったって言った。なのに、どうして黒幕は顔を出さずにこいつらだけが勝手に傷つけあっているのよ」

黒幕、と御坂は言った。

だが、通常このような騒動には『黒幕』というものは存在しない。多くの人々の思惑、願い、陰謀……それらが幾重にも重なりあって発生する。そして、そのような問題はたとえ最初の1人がどこかにいたとしても、その人を倒しただけで解決などは望めない。

しかし、それは今回のデモが『自然』に発生していたらの話だ。

処刑塔はイギリスの観光名所としても知られている。

かつてはその名の通り囚人たちの末路として、その名に相応しい建物として機能していたのだが、現在では14ポンド足らずで、喫茶店で紅茶を頼むよりも気軽に、誰でも見学ができる。展示されているのも処刑設備としての歴史を示すものだけでなく、英国王室が所有する宝石類さえ並べられているほどだ。

その一方で、この建物の『死角』は依然として処刑塔としての機能を果たしていた。

「……相変わらず、重苦しい空気だ」

そう呟きながら、煙草をくわえて歩いているのはステイルⅡマグヌス。その隣に並んでいるのは、元ローマ正教のアニエーゼⅡサンクティスだった。

「尋問対象はビアージオⅡブゾーニとリドヴィアⅡロレンツエッティということですからねども」

「彼らには『神の右席』について聞きたいことがある」

「しゃべると思っっているんですか？ あの神職貴族たちが」

「ま、その辺も含めてイギリス流のやり方を学ばせてあげようという訳だ」

軽口をたたいたステイルは、1つの扉の前で足を止めた。

黒い木の扉を開けると、そこにはテーブル1つとイスが4つ、並べられていた。

しかし、4つの椅子のうち2つにはクッションがつけられておらず、代わりに付けられているのは拘束具だ。そして、その2つの椅子には男が拘束されていた。

リドヴィアⅡロレンツエッティ。

ビアージオⅡブゾーニ。

どちらも、かつてはローマ正教内で『重役』だった人間だ。

「こちらが訊きたいことは分かっているな？」

ステイルは右側の椅子に座りつつ、面倒臭そうな調子で声を放った。

対するビアージオは、ジロリとステイルを睨みつける。

「聞きたいことか。聖書をレクチャーしてほしいなら日曜にしろ」

『神の右席』。そして『十二使徒』……知っていることを全て話せ」
「イギリス清教自慢の拷問道具でも何でも持って来い。私の信仰心が
どれほどのものか、未熟な貴様らに見せてくれる」

ピアージオは不遜な態度を崩さない。そして、リドヴィアは会話の
応酬にすら興味が無いといった感じで自然な感じで顔に変化が見ら
れなかった。

長期戦になるのを覚悟したアニエーゼだったが、それはステイルの
言葉をきっかけとして終わりを告げる。

「僕たち必要悪の教会には死体の脳から情報を引き出す技術も存在す
る。見くびるなよ」

その言葉に横で聞いていたアニエーゼの背筋を寒いものが走り抜
けた。

彼らは——というよりもリドヴィアが、最終的にオリアナとイギリ
ス清教の取引を知ると、ゆっくりとその情報を話し始めた。

犠牲と出発

「本当に、こんなところに統括理事会の人が来るのか？」

「ああ。といっても、12人のうちの誰なのかは知らされていないんだけどな。向こうから接触してきたときは、本名を名乗るのは次回とか言っていたし」

駿斗に誘導されて当麻がやってきたのは児童公園だった。それも、公園としてきちんと区画整理されたというよりは、土地開発をしたらそこが余ってしまったのでそのスペースを埋めるために造ったような、狭苦しいものである。

2人はその端にあるベンチに並んで腰を掛けていた。

しかし、しばらくすると5、60歳くらいの初老の女性がやってきた。腰は曲がってはいるが、ただ立っているだけでも当麻や駿斗より二回りは小さい人だった。折り曲げた腕に畳んだコートをひっかけている。その上首にはマフラーもしているので、10月の始めにしては随分と着込んでいた。

「お待たせしてしまって、すみませんね」

女性は丁寧な言葉で言った。

「僕たちも今来たところですよ。それよりも、早く本題に入りませんか？」

駿斗が言う。一人称が『僕』となっている上に敬語を使っているあたり、相手との立場がうかがえた。彼は、敵対意志を少しでも見せるような相手には例え年上でも敬語を使わない。当麻と同じだ。

「そういえば、ここで一体何が始まるっていうんだ？ 駿斗から何も聞かされていないんだけれど」

「お話をしましょう。現在、世界中で起きている大きな混乱について」
当麻の疑問に、女性が答える。

「……話し合うって、国連の偉い人とか、どっかの国の大統領とかじゃなくてか」

「国家を主軸に置いた組織は、宗教的・思想的な混乱には弱いという傾向があります」

彼女はすらすらと答えた。

「俗に近代国家と言われる組織が、これらの問題を解決できた例は稀です。『解決した』と言われることがあっても、その大半は武力によって無理矢理に押さえつけたもので、むしろ問題を大きくこじらせてしまっていることの方が多かったですりもします」

誰もいない公園で、初老の女性は続ける。

「この混乱は簡単に止められない問題であると同時に『第二の火種』でもあるのですよ。この消し方に失敗すると、国家としての機能を麻痺させるほどの大きな内乱につながる恐れもあるので」

「……本当に統括理事会の人なんだな」

未だに正体を少し疑っていた当麻が言う。

「自己紹介を省いてしまっていましたね。私は親船最中といいます」
自分たちの自己紹介は、と当麻は考えたが、駿斗が何もしないあたり全て相手に伝わっているのだろうと推測する。

「それで、各国は解決マニュアルを手に入れるために他国が実際に動き、一定の効果を得られたことを確認するまでは様子見をしたい……そう考えているのです」

駿斗がここで口を開いた。

「問題の解決に、現状ではどの国も具体的には動けない」

「はい」

「だから、国ではなく個人……僕たちに頼みに来たわけですか」

納得したようにそう言った駿斗に対して、当麻は意外そうな表情をした。

「どうやって。自分の手で解決できるのなら誰だってそうしたい。そんなの、世界中の人たちがそう思っているんじゃないのか？ でも、現実には何も変わっていない。解くべき問題は分かっているのに、誰も解こうとしない。それはなぜか」

当麻は、2人の言葉を待たずに続ける。

「手っ取り早い『理由』や『原因』なんてものが存在しないからだろ。そんなの解決できるのか？ まさか、世界中を回ってデモや抗議をしている連中を1人1人説得していけ、なんて言うつもりじゃないだろ

うな」

当麻の言葉に対し、親船は冷静に続けた。

「ところが、その手っ取り早い『理由』や『原因』が存在するとしたらどうですか？」

「なんだって？」

「ですから、私はあなた方にこの話をしているのですよ。国連や国家の代表でも持っていない、貴女方だけが持っているものに期待して」「何のことだよ」

「特に言えば、あなたの右手のことですよ」

当麻は、思わず自分の右手に目をやってしまう。

イマジナフレイカー
幻想殺し。

この場合、そう考えるのが妥当だろう。魔術だろうが超能力だろうが、それが『異能の力』である限り打ち消すことのできる特殊能力。しかしこの力は、『異能の力』が何も関わっていない、デモや抗議行動といった『普通の現象』には本来通用しない。

それはつまり。

「まさか……そういうことなのか」

「ええ」

「この混乱の裏にはその手の『異能の力』があつて、そいつが全ての元凶で、たったその1つをぶち壊せばすべてが元通りになる」

駿斗がその言葉を継いだ。

「9月30日の『結果』ではなくて、今もまだ『続いている』問題だからこそ、なんとかなる」

「そういうことです」

彼女は簡単に頷いた。

「ちなみに、この混乱を生み出しているのは学園都市ではありません。何でも統括理事長の話によると、科学的超能力開発機関は世界最大の宗教集団・ローマ正教の中にも存在するらしいですね」

一瞬彼女の言っていることが分からなかったが、そこで気が付いた。

世間では……というよりも学園都市の発表では、『魔術』というオカ

ルトは存在せずそう呼ばれているのはかつてそう呼ばれていた科学的な『超能力』のことなのだ、と。

「まあ当然ですけど、我々学園都市に混乱を引き起こすメリットなど存在しませんからね。問題を起こすとなればおのずとローマ正教側になるでしょう」

「そうなのか……と当麻は頷きかけたようだが、駿斗が口をはさんだ。

「そのところは僕にもよく分からないんですけど、どうして彼らにメリットが存在するんですか？ デモや抗議行動が発生しているのはローマ正教が多く広まっている地域です。彼らが自分の領地で、自分の信徒たちを苦しめるような行動にメリットがあるとは思えないんですけれども」

だが、親船はその疑問を予期していたかのように話した。

「ところが、メリットならあるのですよ」

「……何？」

「簡単なことです」

彼女はすらすらと説明を続ける。

ローマ正教の信徒は公式発表で20億人。学園都市の人口の230万とはまさに月とスッポンの差だといっても差支えない。実際に戦争になれば、圧倒的な物量で学園都市は押し切られてしまうだろう。

しかし、実際にはその圧倒的な数で押しつぶすという分かりやすい手段を採らずに、こんなにも回りくどい方法を取っている。

「……まさか」

「ええ」

親船はにっこりとほほ笑んだ。

「20億人を操れるなんて情報はね、嘘なんですよ」

確かに信徒であるかどうかで考えれば、世界中には20億人の人がローマ正教の教会に日曜に出かけたり、聖書を持っていたりするのかもしれない。しかし、実際に十字教のために殺人を犯せるかどうかとなれば、話は変わって来る。

「現状、この世界は2つに分かれていると考えられています」

学園都市と巨大宗教団体。

しかし、実際には厳密な区分を設けられている例は稀だ。学園都市の関連機関が経営している銀行でローンを組んで人生設計しつつ、ローマ正教の教会で結婚式を挙げる——といったことが、学園都市の『外』では普通に行われている。

「線引きはあやふやで、両方の世界の美味しいところをそれぞれ引って張ってきて、自分なりの信じる者で固めた自分なりの世界というものを築いているんです」

「科学サイドと魔術サイドが、重なっている……?」

当麻の言葉に、親船は「魔術サイド……?」と眉をひそめた。しかし、それでも彼女は会話をやめない。

「ええ。世界の大多数……『多数決の勝者』とは、そういうものなんです」

じゃあ、と駿斗は言った。

「世界を覆い尽くしているのは『科学と宗教のどちらの恩恵も受けている人たち』とすると、ローマ正教の狙いは彼らを味方につけることですか」

「でしようね。『どちらの恩恵も受けている』では困るのでしよう。最大の切り札たる20億の人材は、全て自分たちが確保したい。味方はできるだけ多く抱えておきたい」

だからこそ『何か』を実行した。

デモは『それ』によって何かがこじれてしまった結果。

「デモの誘発が目的なのではありません。『混乱』というブースターを経て、彼らは学園都市によって基盤を固められてしまった世界を攻撃しようとしているのでしよう」

親船の言葉は科学サイドよりだったが、彼女の立場上仕方がない、と駿斗は考えて何も言わなかった。

「学園都市は、ローマ正教のこの動きを特に警戒しています」

「本当に……このデモによって世界中の人たちが、ローマ正教側に集まることを恐れているからか?」

駿斗が思ったことと同じことを、当麻が訊いた。

それもありますが、と親船は答え、

「たとえばその通りに行かなかったとしても、別の展開が浮上する可能性があるので。我々は『経済爆撃』と呼んで対策を練っているところですが」

「……経済、爆撃……」

物騒な名前がでてきた気がする。

この混乱によって万が一恐慌が起きてしまった場合、学園都市が引き裂かれてしまう可能性がある、と親船は言った。

「軍需関係には莫大なお金がかかる反面、戦争でも起きない限りそれらが有効に活用されることはあまりない。せいぜいが防衛や災害が起きた場合の派遣による救助活動に使われるくらい……要するに、利益を生み出すことが少ない。むしろ経済面では減らす一方、といったところですか」

駿斗は言うが、当麻が疑問を呈した。

「でも大きな軍隊を抱えている国って、いざというときのためにもすごい量の石油を備蓄していたり、弾薬のストックを抱えていたりするんだろ？」

「はは。戦争というものは実際に備蓄を失ってから起こるものではありません。それでは戦うこともできませんからね」

むしろ、『このままではいずれ失うことになる』と感じさせることが暴走の引き金になるのだという。

妙にきつぱりとした言い方に、当麻は絶句した。

「そういう流れが関係しているのかどうかは分かりませんが……学園都市は現在、戦争のための資金を手に入れようと躍起になっています」

彼女が言うには、学園都市が開発する駆動鎧パワードスーツなどの兵器を展示した上で、商品用にグレードを落とすという名目で『外』でも開発できるようにつまらない兵器を売りさばいているのだという。

一方で、ローマ正教の側も『混乱を収めるための平和基金』という名目で信徒から寄付を募っているそうだ。もっとも、上層部がどうい

う意味で『平和のため』としているのかは分からないが。20億の信徒を抱える彼らとしては、簡単に大金が集められる。さらに、富裕層の中には『寄付金の多さがステータスになる』という風習もあるそうで、実際には1人1円相当を寄付したとした場合集まる20億円をも軽く超えてしまっているらしい。

「免罪符の制度などが形を変えて残っているのでしょうかね」

親船はそう言った。

親友が『免罪符』という言葉に疑問符を浮かべていたので、駿斗は簡単に講釈をしておく。

「よほど熱心な人でもない限り、科学と信仰を天秤にかければ、普通は科学を選ぶでしょう」

あくまで『信じよう』というだけの宗教。

即物的な科学。

分かりやすいほうを人々がとるのは、無理もないことだ。

「しかし、それでは困る人たちが小細工を行った。それが正常に動いていた人たちの心に何等か影響を及ぼし、結果として大きな混乱を招いてしまった——私はそう睨んでいます」

2人は考える。

今の話が本当だった可能性。

逆に、学園都市が混乱を発生させることで、数で劣る自分たちに少しでも有利なように20億人という数字を削ろうとしている可能性。

しかし、あのような表立った行動が『裏』の存在である魔術サイドに与える悪影響は少ないだろう、ということではよりローマ正教が犯人であると彼らは考えた。

当麻が親船に、自分はどうすれば良いのかを尋ねる。

「ええ、それはですね——」

彼の問いかけに答えかけた彼女だったが、ふと言葉を止めた。

視線の先には、新たな人影があつたからだ。駿斗はとづくにそのAIM拡散力場及び魔力に気が付いていた。

「土御門？」

しかしその姿には、今日草むしりをすつぽかしたことを当麻が追求

できるような雰囲気を纏っていないかった。今の彼は、二重スパイとして、エージェントとしての土御門元春として動いていた。

「話は終わったか」

彼は何回か親船と言葉を交わすと、駿斗たちの方へと向き直る。

「2人とも、向こうに人を待たせているから急いでくれ」

彼は顎で、公園の入り口を指した。

言葉通りに、彼らが体の向きを変えて動き出した次の瞬間——小さな児童公園に銃声が鳴り響いた。

親船最中が、腹を撃たれた。上条はその事実^に気付き激昂するまで、数秒の時間が必要だった。

しかし、駿斗はすぐに動いた。

「土御門オオオ！」

彼はすぐに土御門につかみかかると頬を殴り飛ばし、その後重力操作^{グラビティ}で後ろへ吹き飛ばした。土御門は得意とする反則的なカウンターで抵抗することもなく、大人しく殴られている。

そして駿斗はすぐに親船の下で屈み込むと、治療を始めようとした。当麻は土御門の胸ぐらをつかみ上げようと迫った。

「彼、を……」

しかし、その時駿斗の手を親船が掴んだ。

「彼を……責めないで、ください……」

2人は混乱に陥る。しかし、親船は微笑みながら言った。

自分の行動は学園都市の思惑とは異なるもの。学園都市の方はむしろ、この混乱に乗じて戦争を激化させ、ローマ正教を中心とする宗教サイドの徹底的な破壊を望んでいる。

統括理事会の親船は1人、その動きを止めるために動き出そうとした。

しかし、彼女は立場上学園都市上層部全体の思惑に逆らうような形で権力を振るうことはできない。だから、そのようなもの縛られずに、そして状況を打破できる力を持った人物に接触することにした。

そして彼女は、身内を巻き込まないために自らが『制裁』の対象とすることを選んだ。

「俺との、取引は……」

「取引は、もちろん成立してますよ……」

駿斗の取引……その交渉が彼の『準備』であった。

幼馴染を二度と『闇』に落とさないように取り計らうこと……特に、『アイテム』の人間には手出ししないようにすること。

しかし、彼を迎えたのは予想外の結末。

「もうしゃべるな。後はこつちでやる」

土御門が親船に言った。

「お前はお前の役割を完璧に果たした。お前にもいろいろ言いたいことがあるんだろうが、こつちから答えられることは1つだけだ。――安心しろ。お前はそれだけ覚えていれば、それで良い」

土御門の言葉に、親船は倒れたままゆっくりと笑みを深くした。

そして、彼らは航空機の用意されている第二十三学区へとバスで移動する。

第二十三学区は学園都市においては航空・宇宙産業だけに特化した学区である。主要な空港・施設のすべてがここに集中している。

「第二十三学区ということは、飛行機に乗るのか」

「ま、国外に出るからな」

「マジでか!? ……つつか、パスポートとかは?」

「ない」

土御門が即答した。

彼らはこれから、別に海外旅行に出かけるわけではない。ばれた時点で国際的非難間違いなしの非公式活動であるため、今更出入国スタンプの1つや2つでガタガタ言っていたら始まらない、とのこと。

その言い方があまりに堂々としているために、なんとなく納得させられてしまう2人。

空港特湯のただっ広いアスファルトの平原の先、地平線の向こうから、入道雲のような白い水蒸気が上がっていた。

「ロケットか。無事に発射されたみたいだにやー」

土御門が言う。

携帯電話のニュースでも、テレビでも、その映像が映し出されてい

た。

「学園都市の4機目の衛星って話だったけど、真実はどうなんだろうな」

当麻の問いに、駿斗が答えた。

「このタイミングでロケットを発射させることによって、いろいろな憶測を立てさせること自体が目的なのかもしれないな。ロケット技術は、そのまま大陸間弾道ミサイルなどにも応用できるはずだし」「他にも軍事衛星なんかも考えられる……可能性をあれこれ並べさせれば、それだけ牽制の効果が増すだろうしにやー」

駿斗の言葉を継いで答えた土御門の言葉に、これが情報戦ってやつか……と当麻は考える。しかし、そこで駿斗の動きがピタリと止まった。

「あ、今日のインデックスの食事当番俺だったじゃん。夕食どうしよう」

彼女を危険な戦場へと連れて行きたくはないが、ほったらかしにしておくのもまずい気がする。

「舞夏がかみやんの部屋に行っているから大丈夫だぜい。多分、いつもの食いしん坊より3割近くツヤツヤしているはずだにやー」

土御門のその言葉を聞いてほっとする反面、自分たちの存在意義はもう『ご飯を作ってくれる人』でしかないのか、と呆れる当麻。

そうこうしているうちに、バスが国際空港の前に到着した。

「それで、俺たちはこれからどこに行くんだ？ まさか、ローマ正教の総本部であるバチカンとか言うんじゃないだろうな」

そんなことになったら、間違いなく残りの『神の右席』3人と鉢合わせすることになるであろう。

「まさか。これから行くのはフランスだぜい」

「つつーと、往復で何泊くらいになるんだよ。飛行機に乗っている時間も長そうだな。大体10時間ぐらいか？」

当麻の言葉に、しかし土御門は予想外の言葉で返した。

「いや、1時間ちよつとで着くにやー」

「ちよつ」

土御門が指さしたのは、数週間前に乗ったばかりの飛行機だった。「あれ、だよな。俺の記憶が正しければ、あれはたしかヴェネツィアから日本に帰って来る時に利用したやつだよな——」

「ああ。そうらしいにゃー。俺は『アドリア海の女王』事件にはあまり関わっていなかったから、詳しくは知らないけど」

「——時速7000キロくらい出るやつ」

「はっはっは、と土御門は笑う。」

「何事も速い方が良いだろ」

「速すぎなんだよー！」という当麻の叫びを無視して、彼らは怪物飛行機に乗り込んだ。

『神の右席』とは、『原罪』を克服するための集団だそうで」

リドヴィア・ロレンツェッティの声が、処刑塔ロンドンの小さな尋問室に響く。

アダムとイヴ。人類の最初の男女は始めは『楽園』に住んでいたが、蛇に騙されてイヴが禁断の『知恵の実』を食べてしまったために、そしてそのイヴに言われてアダムも食べてしまったために、彼らは『楽園』を追放された。

十字教徒にとつては非常になじみ深いものであり、またそうでなくとも有名な話である。

「アダムとイヴ。彼らの『罪』は、その子供である我ら人類すべてにも同じ『罪』があるという話だったね」

「そこまでが旧約聖書の話ですが」

リドヴィアが話を続けた。

「新約聖書では『神の子』が『罪』の抹消に一役買っていますので」

『神の子』は十字架にかけられることでその『罪』を一手に引き受けた。これによって、信仰を貫き続けた人間は『最後の審判』で『罪』を洗い流され、『神聖の国』へと至るのだ。

「ところが、この話には例外があるので」

「例外？」

羊皮紙に記録していたアニエーゼは、思わずといった調子で尋ねていた。

「本来、世界全人類に与えられているはずの『罪』に例外があるという話ですが」

「——聖母マリアだな」

ステイルは答えを看破した。

『神の子』を産む媒体として聖霊と深く接触した聖母からは罪が消えた——いわゆる『無原罪の宿り』。

そこに唯一の例外が存在する。

「つまり、そこに例外があるわけで」

リドヴィアは話し続けた。

『神の子』に対する信仰を貫く意外に存在する、『原罪』を打ち消す別の方法。

そして、それを実行し『罪』を可能な限り薄めることに成功したのが『神の右席』。『質』が天使へと近づいた人間は、通常行使不可能な天使や主の扱う術式すら使用可能になる。

「しかし、『罪』は『知恵の実』と同義ですので。反面、通常の『人間』用の魔術を使えなくなってしまう……という特性もあるようですが」

だが、『神の右席』の最終目的は『原罪』の抹消に留まらない。いや、それはただの手段に過ぎないのだという。

『『原罪』の抹消だって相当なものだぞ。それがただの手段だと?』

それなら本当の目的は何なんだ、と思うステイルに、リドヴィアは含み笑いをしたまま言った。

「彼らの目的は最初から大きく掲げられていますよ」

——『神の右席』。それが彼らの目指すところですよ。

超音速での途中下車

「C文書。それが今回の鍵となる霊装の名前だにやー」

土御門が説明を始めた。

超音速旅客機というのは、通常の航空機よりも一回り大きい。それを乗組員を除けばたったの3人で利用することとなった彼らは、せっかくなので堂々とファーストクラスの席を陣取った。

今回問題の中心となるのは『C文書』という霊装。正式にはDocument of Constantine。それまで迫害を続けていたローマ帝国の中で、初めて十字教を公認したローマ皇帝、コンスタンティヌス大帝が記した文書だ。

『十字教の最大トップはローマ教皇であり、コンスタンティヌス大帝が自治するヨーロッパ広域の土地権利は全てローマ教皇に与える。だから、そのヨーロッパ広域にすむ者達は全員、ローマ教皇に従わなくてはならない』……という、胡散臭いくらいにローマ正教にとって有利な証明書。

そんな説明を、土御門は座席についている液晶のタッチ式モニターをいじりながら続けた。

「その『霊装』としての効果は、そうだな。コンパスみたいなもんだって言われている」

約1700年前前大帝が治めた土地の中なら、C文書には現在でも刻まれた『皇帝の土地である』との刻印が浮かび上がる。大帝の遺産は教皇のものでもある事から、『C文書の印が反応した土地・物品は全てローマ正教に開発・使用の決定権が委ねられる』。

しかし、その真偽は胡散臭く、そして実際には「その程度のもの」ではなかった。

「C文書の真の効果はもつとスケールがデカいんだ。そいつは『ローマ教皇の発言が全て正しい情報となる』というものだった」

そこまで説明した土御門は当麻の方へと向き直る。

「かみやーん、人の話をちやんと聞いてんのかにやー?」

「お(バ)バ(バ)バ(バ)バ(バ)ば(バ)ん(バ)つー」

当麻はきちんとした返事ができないようだ。

時速7000キロ。そのGに、通常の人間は耐えきれない。

しかし、やはり土御門のような例外はいるようだ。

「当麻が聞いていなかったら、地上に降りる際に俺が適当に叩き込んでおくよ」

駿斗が平然と答えた。

もつとも、彼は天使デレズマの力による肉体強化という反則技を使用しているためであって、決して彼自身が丈夫だったとかそういうわけではない。

「その、C文書ってのは、それを使って、教皇が話したことが、全部、正しくなるってこと、だよな」

あの状況の中でも、話だけはきちんとして聞いていたらしい。

「じゃあ、つまり、何でも願いがかなう、錬金術の『黄金錬成』アルス・マグナみたいなものか……おえっ！」

「いや、そうじゃないにやー」

当麻に対して、土御門は鼻歌でも歌いそうな気軽さだった。

流石の駿斗も、その驚異的な頑丈さには目を見張る。

「C文書の効果はあくまでも『正しいと人に信じさせる』効果でしかない。実際に物理法則がねじまがっちゃうとか、そういうものではないぜい」

「要するに、人の思考を誘導するものってところか？」

「はやとん、正解。おおざっぱに言えばそんなところだにやー」

駿斗の質問に答える土御門。

この霊装はあくまでも『ローマ正教にとって正しい』と信じ込ませるためのものではなく、『ローマ正教にとっての正しさなんてどうでもいい』とか、『たとえ間違っけていても構わない』と思っている人間は霊装の効果の対象外となるのだという。

「いいい、言っていることを、正しいと思わせる霊装？で、でもそれって」

「ハハッ、なんとなく卑怯に聞こえるかにやー。でも権力者の発言＝絶対の法律じゃなかった時代には、威厳を保つための小細工なんてい

「くらでもやったにやー」

たとえば日本ならば、江戸時代には『切り捨て御免』という制度があった。

近世において武士が百姓など下の身分の者らから耐え難い『無礼』を受けた時は、斬殺しても処罰されない——これは当時の江戸幕府の法律である『公事方御定書』にも明記された。当時は無礼な行為によって武士の名誉が傷つけられる事を制止するための、正当防衛的な行為と認識されていたらしい。

それと同じ。

ペストの流行。十字軍遠征の失敗……そういつたことで『神は絶対』というものが揺らいでしまった。そこで、ローマ正教があまりにも大きな危機に際した時、人々の心が離れないようにしたい。

そうしてできたのが『C文書』。

「で、でででも、そんな凄まじい、霊装があるなら、何で、今まで使つて、来なかつたんだ……？」

「C文書の効果は絶大だぜい。一度『正しい』と設定した事柄はC文書を使つても打ち消すのは難しい」

だから、下手に設定を乱立するわけにはいかなかったらしい。

「それに、誰でも扱えるものじゃない上に、場所だって特定されている。本来ならバチカンの中心部に据え置かないと使えないはずだぜい」

「じゃあ、どうしてフランス何だ？ 確かに、ローマ正教の本拠地に乗り込むよりはマシだろうけど」

駿斗が土御門に訊いた。

「ええとだにやー。それを説明するにはどこから話せばいいんだっけ……？」

彼がそう言った時、ポーン、と飛行機のスピーカーから電子音が聞こえてきた。続いて、合成音声のような女性のアナウンスも。日本語でも英語でもなかったので、さっぱり彼らには分からない。

「つと、そろそろ時間がなくなってきたみたいだにやー。かみやん、本当に大丈夫か。辛かったら深呼吸してみろ」

土御門が医者ができるように「はい、吸ってー吐いてー」と当麻の介抱をする。

「おい、当麻。本当に大丈夫か？」

駿斗は心配そうに声をかけるが、土御門は「だー、こりや一度吐いちまった方が楽になるんじゃないの？」と当麻をどこかへと連れて行ってしまふ。駿斗も、心配そうについて行った。

そして。

「はい。これつけてこれ」

「え？」

土御門から2人に手渡されたのは、ごついベルトが付いたリュックサックみたいなものだ。……というか、駿斗にはどうしても、テレビでスカイダイビングをやっている人が装着しているパラシュートにしか見えなかった。

駿斗はとりあえず装着したが、嫌な予感を感じ取る。

「あの、土御門？ これはもしかして」

「じゃ、思う存分吐いちゃおうぜーい！」

ごうん、とポンプが動く音の後に、

ガバツ、と。

唐突に機体の壁が大きく開き、その向こうに青空が見えた。

はい？ と2人の眼が思わず点になる。

しかし、そうしているうちに機内に烈風が吹き荒れて、中の者が全て外に吐き出されそうになった。

「つつつつ、土御門オー!?!」

当麻は慌てて機内の壁の突起に手をかけた。駿斗も、すぐに重力操作グラビティで自分の体を縫い付ける。

轟音と共に吹き荒れる風の中、土御門は笑っていた。

「さあかみやん、準備は終わったから思う存分吐いちゃうにやー」

「吐いちゃうにやーじゃねえよどうなってんだ！ おっ、お前。さては荷物搬入用の後部ハッチを思いっきり開放しやがったのかー!?!」

しかし、当麻の抗議もむなしく土御門はそのまま友人2人を外へと蹴り飛ばす。

駿斗はすぐに2つの手のひらから空気を噴射して、空中で体制を整えた。その時、土御門がいかにもスカイスポーツ満喫してます的な笑顔で飛び降りてくるのが見える。

しばらくすると、パラシュートが首に絡まった親友が100メートル以上の幅を持つ大河に落ちて行くのが確認できたので、駿斗は急いで軌道修正。

今回も『不幸』なことになりそうだ、と駿斗は考えつつ、親友の下へと移動する。

「えつと……天草式の五和、だっけ?」

「あ、はい。ご無沙汰しています」

当麻と駿斗の目の前の日本人、ぱっちりとした二重瞼の少女はぺこりと頭を下げた。

当麻をローヌ川から引き上げてくれたこの少女だが、彼女は本来なら他の天草式メンバーと一緒にイギリスで生活しているはずなのだ。しかし、今この場にいる理由なんて1つしかないだろう。

「やっぱり、その辺に隠れている他のメンバーと一緒に、デモや抗議行動を止めるためにC文書をどうのこうのとか……」

「ど、どうしてそのことを知っているんですか!？」

口元に手を当てて驚愕する五和は、そのまま叫んだ。

「私たち天草式がようやく探り当てた糸口をそんな簡単に? さすがは元女教皇様を倒した御方です!」

何やら瞳をキラキラさせている五和であるが、駿斗からしたら「えー? 倒してはないだろう」と言った感じである。

そもそも初対面の時は会話するだけで終わったし、エンゼルフォール御使墮しの際には共闘しただけ。そして、唯一戦ったと言えるアリサの一件ではあくまでも『拮抗』であった。……そもそも聖人に拮抗できる時点で、人間離れしているのだが。

その時、当麻が五和に訊いた。

「なあ、五和。もしかして土御門に呼ばれてここに来たのか？」

「はあ。ツチミカドさん、ですか？」

「どうやら五和は土御門のことを知らないらしい。」

「あの、その、ええと。というか、そもそもあなた方は何でいきなりパラシュートで降りてきたんですか？ 日本の学校の方は大丈夫なんですか？」

五和に常識的なクエスチョンをぶつけられる2人。その質問には駿斗が答えた。

「学校の方は完全下校時刻を回っているよ。まあ、明日は多分休まなくちゃなくなるけどな……で、土御門からC文書の話の話を聞かされてそれを止めるために来たってところだ。五和は？」

「私たちはイギリス清教から要請を受けて、フランス国内の地脈や地形の魔術的価値などの調査を行っていたのですが」

「私たち……つまり、天草式のメンバーが彼女以外にもここにいないことか。駿斗はそう考えて納得する。」

彼女以外にも身に覚えのある魔力が多く感じられたからだ。

五和の話によると、ここはフランスのアビニヨンという町であるらしい。

ふと当麻が言った。

「なあ五和。そういうえば、土御門の話だとC文書ってバチカンじゃないかや使えないって話じゃなかったっけ？」

「はい」

肯定の返事をする五和。

「だとしたらなぜイタリアじゃなくてフランスにいるんだ？」

土御門には答えを聞く前に飛行機から叩き落とされたから、知らないんだよな、と言う駿斗。微妙な苦笑をしている五和であるが、どうやら彼女は駿斗の言葉の後半部分を冗談だと思ったようである。

……まあ、むしろ本当に飛行機から叩き落とされたとは思わないのが普通であろう。

「あの、その前に荷物を取ってきてもいいですか？」

「荷物？」

「ええ。橋の上に置いてきちやっただまなので」

その言葉に、駿斗は近くにある半分くらい崩れたアーチ状の石橋の方を振り返った。

「じゃあ、取ってきてくれ。あと、できれば別の服装に着替えてくれると助かる」

その言葉に不思議そうな顔をした彼女であったが、2人がためらいがちに顔を逸らしながらその胸元を指さした。厳密には、水にぬれて張り付いた上に色々と透けてしまっているピンク色のタンクトップを。

彼女は顔を赤くしながらも両手を交差させて胸元を隠しつつ、小走りで行き去ってしまった。

「うーん……」

彼らの知り合いのように、平手打ちをする、頭に噛みつく、10億ボルトの高圧電流で黒焦げにする、といったエキセントリックな行動をしなかったので、むしろ彼らの方が気まずい感じである。

「お、お待たせしました」

しばらくすると、彼女は薄い緑色のブラウスを羽織ってやってきた。何も来ていない裸の上から、直接。

「……、五和さん？」

ぎよつとする2人であったが、彼女は顔を真っ赤にして体を縮こませてしまった。

露出度で言えば彼女たちの女教皇である神裂火織のほうが高いのだが、五輪は神裂のように堂々としていないので余計に目立ってしまっている気がする。

「その、あなたたちもC文書の方を回収しに来たのなら、その方と合流するまで行動を共にしませんか」

自分の格好のことを早く頭の中から追い出したいのか、彼女は少し強引に『仕事』の話を持ち出してきた。もともと、この提案はフランス語も話せずフランスの貨幣やパスポートも持っていない彼らにとってはあるがたいものだった。

「あ、とりあえず体の方をなんとかしようかな。魔術でも使うか……いや、こんな人目のつく場所はやめた方がいいのか」

自分の泥だらけの格好を見た駿斗が言った。学園都市の外に出ることに慣れていない駿斗だが、異能の力をおおっぴろげに使う訳にはいかない、と自重したのだ。

その発言に当麻も同意する。

「そうだな。俺も」

「そ、それならですね。私おしぼり持っていますから——」

彼女がそう言い終わる前に、駿斗の頭に大きなタオルがかぶせられた。驚いた駿斗が見上げると、大きな犬と一緒に散歩をしていたおじさんが振り向きもせず、『返さなくていいよ』と手を振っていた。

その様子を見ていた当麻が言った。

「……はあ、親切な人っているんだなあ。フランス人ってなんで挙動があんないいちいち格好いいんだろ。あれ、五和？」

「い、いえ。何でもありません……」

彼女は明らかに落胆したような感じで、当麻におしぼりを渡す。

一通り泥を適当に落とした後、彼らは広場から離れて喫茶店に入った。

「なぜそこでドロリーコーヒー？ 老夫婦が趣味で始めましたみたいな隠れた名店とかかないの？」

当麻が言う。

彼女が言うには、そういった店にいるのは地元の常連ばかりで目立ってしまうのだという。

「待った。そんなこと言ったら、俺たちもかなり汚れているぞ」

タオルで水は取れたが、泥は完全には落ちない。

しかし、五和は言った。

「今なら、大丈夫なんです」

店内に入った彼らは、その言葉の意味を知る。

客の大半が髪や服の乱れがあり、泥が付いたり、手足に包帯を巻いていた。屈強な大人から子供まで、無傷の人であるほうが珍しいくらいだ。

「デモや抗議行動、か」

当麻が思わずぼつりとつぶやいた。

五和によれば、カウンターで何かメニューを頼まないと目立ってしまいうらしい。そこで、彼らは軽食を取ることとなった。

「コーヒーアンドサンドウィッチ、プリーズ！」

当麻が片言で英語をしゃべる。五和が料金を払ってくれた。そして駿斗と五和は。

「エスプレッソとサラミのサンドイッチで」

「エスプレッソと黒豚のサンドイッチ。あとはヘルシー野菜ステイックでお願いします」

ええー日本語で大丈夫だったの？ と声を上げる当麻だが、よく見れば店員さんの肩に国旗を模したバッジがいくつかついているのだ。不自然なので、通じる言語を表したものであると駿斗は考えたというわけである。

3人はそれぞれのトレイをもって1つのテーブルを囲む。すると、五和のカバンからゴトリと重たい音が聞こえた。2人がそれを注視する。すると、五和が手をバタバタと振った。

「き、気にしないでください」

「いや、でも」

当麻が何か言いかけると、彼女はほとんど唇を動かさないようにして話す。

「(……そのう、武器が入っているんです)」

「はっ！」

彼女が話すには、武器である海軍用船上フリウリスピア銃を分解し、使うときにはアタッチメント接続器で固定するようにしているらしい。

「それより、そのツチミカドさんとは連絡が取れたんですか？」

「いや、だめだ」

五和が話を変えたが、駿斗が即答した。

「携帯電話はつながらない。相手が電源を切っているか、電波の届かないところにいるかのどちらかだろう」

とりあえずサンドイッチでも食べながら、作戦会議をすることにす

るが、そこで当麻が気が付いた。

「うわ、どうしよう。食べる前に手を拭いておきたかったんだけど」

その言葉に五和が顔を輝かせた。

「そ、それならですね、私が——」

彼女がカバンからおしぼりを取り出そうとしたが、その時店員さんが短いフランス語の後にぞんざいな手つきで紙ナプキンを置いていった。

五和がなにやらがっかりしたような表情をしていたが、それに気が付かないまま彼らは自分の手をふく。

「さっきの話の続きだけどき。結局、どういうわけでバチカンじゃないくてアビニオンなんだ？」

気を取り直して駿斗が聞く。

「教皇庁宮殿、という建物はご存知ですか？」

五和の言葉に、彼らはハテナマークを頭に浮かべる。

彼女の話によりと、教皇庁宮殿というのはアビニオンの中でもローマ正教最大の施設であるらしい。

13世紀末に起こったローマ教皇とフランス国王の間の諍い。それに勝利したフランスは、ローマ教皇にアビニオンに幽閉することに……これがアビニオン捕囚というらしい。

その際に幽閉された宮殿であるから、教皇庁宮殿、と名付けられた。「このアビニオン捕囚は68年間、数代にわたってローマ教皇を縛り付けました。当然、その間もこの町で教皇としての職務は果たさなければならぬわけ」

しかし、仕事の中には枢機卿の任命式などローマ教皇領の中でできないものもある。必要な霊装がそこに揃っているからだ。

「ですから、彼らローマ正教は小細工をする必要があったんです」

アビニオンとローマの間に術式的なパイプラインを築き、ローマ教皇領の設備を遠隔操作できるように小細工をした。

「……大型サーバーにアクセス用のコンピュータを接続するようなものか」

「アビニオン捕囚が終わってローマ教皇がフランスから本拠地へ戻る

際に、こうしたパイプラインは何重にもわたって切断されたはずなんですけれど……」

しかし、地脈から考えてもこの場所でC文書を使えるのはそこしかないという。

「じゃあ、土御門が俺たちをここで落としたのは教皇庁宮殿が狙いつてわけか。だけど五和、どうして本拠地のバチカンじゃなくてわざわざアビニオンまで来るんだ？」

駿斗の疑問はもつともであるため、五和もすぐに答えた。

「それについてはいろいろ仮説がありますけど、C文書の使用の承認を得るには莫大な時間がかかるんじゃないでしょうか」

ローマ正教の上層部にいる枢機卿は141人。ローマ教皇ですら、彼1人の独断では使用できないという。

「ところが、アビニオン経由での操作は例外で、枢機卿の意見をまとめる必要はない……という情報もあるんです」

その場合には、バチカンとは異なる『準備』が必要となるらしいので、今ならまだC文書の行使をやめて世界中の混乱を収められる可能性がある……と五和は言った。

彼女たち『天草式』は情報を集めた上で、数日後には教皇庁宮殿へ突入するつもりらしい。

駿斗と当麻にしても、今までの情報源である土御門を失った状態なので、勝手に本拠地に乗り込むよりは五和と一緒に教皇庁宮殿へ乗り込む天草式の作戦に協力した方が良さだろう、と考える。

「五和、俺たちになんか手伝えることはないか？」

「え？」

「数日後には突入するって話だったけれど、少しでも早い方がいいだろう」

「は、はい。それなら——」

彼女は問いかけながらも、2人の問いに答えようとした。だが、彼女の応えがきちんと発せられることはなかった。

ドバン！ という轟音と共に。

いきなり道路に面したウィンドウが一斉に碎け散ったからだ。

そこから飛び出したのは無数の手。石や鉄パイプを扱うこともなく、その圧力だけでガラスが碎け散った。

「暴動か！」

「こ、こつちです！」

カバンをつかんだ五和の誘導に従う2人。満員電車のような店内を、正面出入口ではなく非常口へと向かって走る。

『日本人だ！』

『学園都市か!?!』

『潰せ。ためらうな。あれは敵だ！』

2人にはフランス語が分からなかったが、それでも彼らの感情のニュアンスが伝わってきた。3人は無数の手に追いつかれる前に店の中を脱出し、五和が鉄製のドアを蹴り飛ばして閉める。

「五和、せめて店内にいた子供だけでも——」

「あれぐらいなら！」

引き返そうとした当麻に、五和が叫ぶ。

「あれぐらいなら、世界中で起きています。私たちは、あの災いの根っこであるC文書を止めに来たんです！」

「ちくしょう！」

当麻の叫びと、駿斗の思いが重なる。駿斗は自分の奥歯を強く噛みしめていた。

ローマ正教は暴動を引き起こしている。

学園都市はそれを利用している。

人々の叫び声やガラスの割れる音が聞こえる中、彼らは駆けだした。

「五和、どこまで逃げる気だ！」

「とりあえず、人ごみに巻き込まれないところならどこでもいいんですけれど……」

「いや、それは本命にでも辿り着かない限り難しいと思う」

駿斗が言う。

「向こうのタイミングが良すぎる。五和、今までこのような暴動に巻き込まれたことは？」

「ありませんでしたけれど……まさか」

「これは連中からの『迎撃』ってわけだ！ 学園都市の超音速旅客機からパラシュートで何かを投下したことくらいなら、あいつらにだって分かるだろうからな！」

彼らは、人の波に突っ込む覚悟を決めた。

光の処刑

教皇庁宮殿のあるアビニヨン旧市街は、古い城壁に囲まれた狭い都市である。その中に10メートル以上の高さの建物が次々と並んでおり、その間の狭い道を走ると異様な圧迫感を与えられた。

そして、今はその細い道が人の波によって塞がれている。これを突破しない限り、目的地にはたどり着けない。

「行くぞ」

すると、当麻も駿斗と同じことを考えていたようだ。

「そうだな。土御門の連絡や天草式との合流を待っている時間はなさそうだな。それよりも、連中がバチカンにC文書を持ち帰ってしまう可能性も否定できない。今は、C文書の破壊を最優先にするべきだ」

五和はわずかに逡巡したが、やがてゆっくりと頷いた。

彼らは満員電車のような暴徒たちの壁を見据える。

「……突っ込むときは中腰になって下さい」

五和が言った。

集団の中から顔が出ていると、ターゲットにされる恐れがあるとのことだ。

「よし」

異様な緊張を感じながら、当麻が言う。

「走るぞ」

その言葉と共に、彼らは自ら暴徒たちの中へと突き進んで行った。

それと同時に、駿斗は念動鎧フォースアーマーを展開する。

超能力なら魔術と異なり、近くに魔術師がいたとしても気が付くことはない。

掴んでくる手を、振り回される腕を弾き飛ばしながら、駿斗はその中を強引に突破した。

「当麻、五和、大丈夫か？」

「はいー」

先に返事をしたのは五和だった。しかし、彼女はこめかみから一筋の血を垂らしている。バッグの中には槍があるという話だったが、そ

れを振り回す気にはならなかったのだろう。駿斗は黙って万象再現リフレクシオンをかけて治療をした。

「駿斗！ 五和！」

その直後人並みの中から当麻が現れた。彼は血こそ流れていないが、足元が多少おぼつかないようだ。

「い、五和。教皇庁宮殿は？」

しかし、それでも次に進むために彼は話を聞いた。

「まだ先です。向こうの方に屋根が見えているのが宮殿ですから……つ、次はあれを越えなくちゃいけません」

五和が指さした方向を、2人はゆっくりと見た。そちらにあるのは、今さつき乗り越えたものとは比べ物にならないほどの大規模な暴動の渦があった。

教皇庁宮殿への道は険しすぎる。

駿斗はその気になれば建物の屋上を跳んでいくこともできるのだが、他の2人を移動させる手段までは持ち合わせていない。

暴徒が自分たちの方へと移動してきているのを確認した彼らは、一度近くにある集合住宅の中へと駆け込んだ。厚い木の扉を閉めると、ガンガンと衝撃が伝わってきた。道いっばいに広がった暴徒たちの腕や肩が当たっているようだ。

当麻と駿斗は、背中を扉に預けたままずると床に腰を下ろした。

「……こんなのどうするんだよ。これじゃあ教皇庁宮殿なんて行けないぞ」

「たしかに、この暴動の中を進んで行くのは難しそうですね……」
彼女はそういうと、バッグの中から部品を取り出して海軍用船上銃フリウリスピアを組み立てた。

その様子を見ていた2人であったが、思わず顔を逸らす。ブラウスの前だけを適当に縛った五和の谷間が見えかけたせいだ。その服は色々と反則だろうと2人は思うのだが、当の本人は全く気が付く様子がない。

「どうしましょう。暴動は避けることを前提としていたので、実際に

そこに巻き込まれたときの策や術式は持っていません」

「俺の方も、暴動を治められるような力は持っていませんからなあ」

食蜂なら『エクステリア』を用いれば簡単なのだろうけれど、と駿斗は考えるが、彼に『エクステリア』は使用できない。

「暴動を治めるためには教皇庁宮殿へ行く必要があつて、教皇庁宮殿へ行くには暴動を治める必要がある、か」

当麻が堂々巡りだな、と呟いた。

おまけに、敵が危機感を抱けばC文書をバチカンへと持ち帰ってしまふ可能性がある。そのために、あまりゆつくりとしている余裕はない。

その時、駿斗のポケットから軽快な音楽が流れだした。

発信源である携帯電話を見ると、相手は土御門。

『はやとん、そっちは大丈夫か?』

「お前は今どこにいるんだよ! こっちは今暴動から退避するために近くにあつた建物の中にいる。一緒にいるのは当麻以外に、天草式の五和だ」

『今は教皇庁宮殿つて建物に向かっている最中。天草式と一緒にいるつてことは、大体の事情は聴いているのかにやー?』

「ああ。暴徒のせいで動けない。お前の方はどうなんだ」

『こつちも似たようなもんだにやー。まあ、いろいろあつた』

やはり、土御門も同じような状況になっているようだった。

そして、こちらから合流を、と駿斗は言うが、

『自然に起きている騒ぎならそれでもいいんだろうが、こいつはC文書によって意図的に引き起こされたもんだ』

ローマ正教の都合でいくらでも引き延ばせるため、ただ待つだけではどうにもならないという。

しかし、他にも手がある、と彼はあつさりと言った。

『逆転の発想つてやつだな』

教皇庁宮殿へ行けないなら、教皇庁宮殿へ行かずに問題を解決できる方法を使えばいい。

『——つてことで問題です。教皇庁宮殿が重要視されている理由はな

んでしよう』

「バチカンにある施設を遠隔操作できるからだろ……ああ、そういうことか」

その質問に答えた駿斗は、土御門の言いたいことを理解した。

「アビニヨンとバチカンを結んでいる術的なパイプラインを破壊する……それがやるべきことなんだろう？」

『ああ。それだけで連中はC文書を使えなくなるはずだ』

教皇庁宮殿へ近づけなくとも、その途中にあるパイプラインまでいったらまだ近づける可能性がある。

しかし、この方法にもやはりネックとなることが1つ。

「でも、C文書が使えなくなれば、教皇庁宮殿でそれを扱っている連中も気づくはずだぞ。そうなったら逃げられちまうかもしれない」

『そうだな。その可能性は否定できない』

したがって、パイプラインを遮断してから教皇庁宮殿へ向かうまでが勝負となる。

しかしそれに成功すれば、駿斗なら誰がC文書を使っているのかわど一目瞭然で分かるはずだ。

「地脈を利用した魔術を発動する霊装。それを持っている奴を倒せば、それでOKっと」

『ようやく活路が見えてきたな』

土御門の声が少し明るくなった気がした。

彼らは通話を切ると、集合住宅の中を通り抜けて裏口から外へ出る。

「五和の仲間……天草式の連中ってまだ来れないのか？」

「す、すみません。先ほど緊急連絡はしておいたのですが、明日の朝に合流できるかどうか」

五和たちはまさかこのような展開になるとは思わず、数日後に突入するつもりでいたためであろう。無理もない、と駿斗は思った。

「その、ツチミカドさんに指定された場所は分かりますけれど……本当にそこに教皇庁宮殿からバチカンに繋がるパイプラインがあるんですか？」

「土御門の術式はたしか陰陽系だったはずだ。それに関しては信頼していいと思う」

むしろ、その手に関しては彼を頼るのが一番手っ取り早いのではないだろうか。

『ま、地脈の読み方は文明によってだいぶ違うものだが、これに関しちやほぼ間違いないぜい』

そのポイントは駿斗たちの近くにあるらしい。そのため、地脈を壊すのは五和がやれ、とのことだった。駿斗は地脈を利用することはできるものの、パイプラインの切断までできるかは分からないからだ。「つていうか、俺の右手を使えば地脈だろうがパイプラインだろうが一発じゃねえの?」

当麻が自分の幻想殺しについて触れた。

確かに、駿斗もその方が早いと思う。だが。

『かみやんの右手で本当に地脈が消えるのかは分からないな』

本当に地脈が消えるのであれば、当麻の右手が地面に触れた時点で地球が粉々になるだろう。人間の生命力マナというのもオカルトの領域であるが、彼が人の体に触っただけでその人が死ぬわけではない。

何か奇妙な『例外』が存在する気がする——と土御門は言った。

『はやとんはどう思っているんだ』

「できるかもしれないが、無理な可能性も高いな。俺から言わせてもらえば、当麻の右手には対象が『異能の力』であること以外にも制限があるはずだ。今のところは、一度に打ち消すことができる許容量が存在するとしか分かっていない」

許容量——それは、竜王ドラゴンブレスの吐息を打ち消せなかったときに新たに判明したことだ。

当麻は思わず自身の右手に目をやっていた。

(——例外、だって?)

そこにはどんな意味があるのか。

仕組みがあることに、何らかの意味があるのか。

それは駿斗の力にしても同じ事であった。

3人は小さな街の博物館に辿り着いた。博物館といっても、道の左右に聳える砦、あるいは城壁のような建物の一角が展示室のようになっているだけのものだ。

今は平日の昼間なのであるが、その正面玄関には金属格子のシャッターが下りていて恐らくは『閉館』と書かれているのであろう、フランス語の看板がノブにかかっていた。

「暴動を恐れて、早めに店じまいにしたみたいですね」

五和が言う。

「この中にあるのか。シャッターをバラバラに分解するという方法もあるが、天草式には鍵開けのスキルとかは——」

「えいや」

駿斗の言葉は五和の可愛らしい掛け声に遮られた。

彼女は槍の先端をシャッターと地面の隙間に差し込むと、てこの原理っぽく槍を動かして中の歯車を壊したのだった。

「さ、早く早く」

「ええと……五和さん？」

当麻はぎよつとした顔で小柄な少女の顔を眺める。駿斗にしても、予想外の方法に少しの間呆けていた。

館内は真つ暗だった。恐らくは、展示品を余計な光に当てないように窓を全て塞いであるのだろう。非常口を示す光以外のすべてが失われているため、足元が心もとない。

しかし、五和と駿斗は迷わずに足を進めていく。

「ここか」

「はい、そうですね」

当麻を置いて先行していた彼らは、一か所に集まる。そこは何の変哲もない床であったが、展示用のガラスのショーケースの配置を見ると、なぜかここだけ規則性が無視されていて、不自然に何もなかった。

「巧妙に隠蔽が施されてはいるが、ローマ正教式の術式だな。他宗教に対する一種の浄化作用を併せ持っている。西洋社会特有の『脈』つてやつだ」

「はい。では、これからパイプラインの切断に入りますから、ちよつと下がっててくださいね」

パイプラインの切断は、つまり地脈を1つ切断することと同義だ。したがって『聖人』クラスの間あるいは駿斗でもない限り完璧に切断することは不可能だが、利用ができなくなるくらいに傷をつけて方向をずらすくらいなら五和1人でもなんとかなるようだった。

天草式の少女はバッグを置くと、その中をゴソゴソと漁る。どうやら、術式に使う道具を選び出しているらしい。彼らは日常に埋もれている何気ない物や仕草、作法で魔術を発動するのだ。

「ええと、今必要なのは……カメラに、スリッパに、パンフレットに、ミネラルウォーターに白いパンツー」

彼女は一度それを取り出してから、「ひゃあっ!?!」と叫んで恐らくはさつき着替えた時に脱いだものであるろう下着を慌ててバッグに戻した。

顔を真っ赤にしたまま、彼女の動きがピタリと止まる。

「……なんです」

ぼそりと、五和は口だけを動かして呟いた。

「この術式の構成に、どうしても必要なんです……」

彼女は希望を失ったような表情で淡々と魔方陣の構成を進めた。男2人は後ろを向こうかとも思ったのだが、「い、いえ。気にしないでください」と言われるとなんとなく後ろを振り向いてしまうのも悪い気がしてしまう。

そして、いざ準備が整ったところで。

「行きま「五和、後ろへ跳べ！」」

駿斗が、術式のために槍を地面に突き立てようとしていた彼女の目の前に立ちふさがった。その次の瞬間、壁を切り裂きながら白い刃が彼らに襲い掛かる。

「おおおっ！」

駿斗は既に取り出していた幻想核杖イマジン・コアロッドに天使テレズマの力を通すと、その白い刃にぶつける。

その刃はいとも簡単に切り裂かれたが、緑色の服を着た男が手をか

ざすと、再びその掌に納まっていく。

「おやおや。まとめて3人も引つかかりましたか。2人だと思っていたのですが余計な虫が1匹いるようですわねー」

痩せ細ったその男は言う。さらに、その後ろから3人の男たちが姿を現した。

「……ローマ正教か」

「間違いではありませんが、どうせなら『神の右席』と呼んでほしかったですわねー」

『神の右席』。

9月30日に、学園都市の機能のほとんどを麻痺させたヴェントと肩を並べる者。

その言葉に当麻と五和一気に警戒心を跳ね上げ、駿斗はやっぱりか、と呟いた。

「私の名前は『左方のテツラ』。後ろにいるのが『十二使徒』。ヨハネ、フィリポ、バルテルミ」

『十二使徒』。

『神の右席』に付き従う男たち。

「やっと私の出番が来たようです。何せ『神の右席』わたしたちは人間が使うような普通の魔術は扱えませんがねー。C文書の行使は他の術者に任せなければなりませんし」

テツラは小麦粉を収束させ、その手にギロチンを生み出した。本来縄で吊るすべき場所を手で持っている。いや、正確には彼の手の動きに小麦粉の刃が連動しているのか。

処刑用の刃を無造作にぶら下げながら、楽しそうに笑うテツラ。後ろに控えている3人も、それぞれの武器——杯、十字架、ナイフを構える。

テツラは処刑用の刃をぶら下げてにつこりと笑う。

その直後、戦闘が始まった。

先に動いたのはローマ正教の4人だった。

テツラが硬化手袋フリックグローブを装着した当麻とその側に立っている五和に向けて、他の3人が2人とは少し距離を置いていた駿斗に向けて突撃する。

テツラがその刃を振るい、その斬撃が辺りに立ち込めている粉塵を切り裂く。

「おおおっ！」

当麻は反射的に右手を構えた。

建物が裂かれ、当麻の右側を境に風景が2つに裂かれた。

当麻の左には古い街並みがある。

しかし、当麻の右はすでに瓦礫の山となっていた。

「(あいつの攻撃は俺の右手でなんとかなるなら) 五和！」

当麻は叫ぶと同時にテツラへと突っ込んだ。

一方で、テツラの方も彼の右手に注目したらしい。

「本来なら今の一撃で死んでいたはずですけど、なるほど、それがイマジンブレイカーの幻想殺し。『十二使徒』相手に3対1にも関わらず善戦したと聞いていますかねー」

彼は不健康そうな目を細めながら感心したように言ったが、その後ギロチンを振るった。

当麻がそれを右手で弾き飛ばし、その直後、ヒュツ、と五和が槍を構えてテツラに突撃した。

「ふん」

テツラのギロチンが五和に襲いかかる。しかし、彼女は足を止めずにその一撃を上半身を振るうようにして回避した。そして槍を構え、一度後ろに引いたそれをまっすぐに突き出す。

テツラはそれをギロチンで横に弾いた。返す刀で白い刃が五和を襲う。だが、彼女はそれを無理に受け止めようとはせず、斜め前に飛ぶようにして攻撃を避けながら前へと進む。そのまま槍を突き出すとうとするが、回避行動によって生じた余計な時間のせいで、このままではテツラの攻撃が彼女よりも先を制する。

しかし、チカツ、とテツラの周囲に光の筋が現れた。それは彼をあらゆる角度から取り囲んでいる。

「すみません、と謝っておきます……」

五和はギリギリと音を立てて力をためていたそれを解放した。

「——七教七刃！」

空気を裂きながら、鋼糸が7方向からテツラの急所を狙う。

しかし。

「——優先する」

テツラは表情を変えずにそう呟いた。そして、鋼糸は彼の体を切断せずにタコ糸のようにその体に絡みつくだけだった。

五和の表情が驚愕に染まる。

しかし、彼女とは対照的にテツラは、体に絡みついた蜘蛛の糸で裂くかのように腕を軽く振るうだけでその鋼糸を切り解いてみせた。

五和はすぐにその槍を前に突き出す。

「優先する。——外壁を下位に、人体を上位に」

テツラが一言を呟いた途端、彼の体は背後の壁の中へ吸い込まれるようにして消えて行った。まるで、その壁がただの立体映像であったのかと思わせるような動きだった。

「っ！」

しかし五和の槍の先端は壁に突き刺さり、彼女は手に伝わってきた衝撃に歯を食いしばった。

その直後。

「優先する。——外壁を下位に、刃の動きを上位に」

壁を突き抜けたギロチンが五和を襲う。彼女は地面を転がるようにして回避、髪の毛が数本切れて宙を舞った。

自らが壊した外壁の隙間を跨いだテツラが、地面に転がっている五和にギロチンを振り下ろした。このままでは彼女は回避が間に合わない。

「おおおっああ！」

当麻がその白い刃をギリギリのところまで右手を使って吹き飛ばす。ギロチンは爆発するかのように周囲に白い粉となって舞った。

「優先する。——外壁を下位に、刃の動きを上位に」

しかし、テツラが再集結された白い刃を横合いの壁に無造作へ突き

刺した。外壁はメロンほどの大きさの岩の塊に数十に分かれ、当麻へと向かって飛んできた。

「くっ！」

当麻は起き上がりかけた五和の腕をつかみ、左手に装着した硬化手袋で1つの岩を横へ受け流しながら彼女を引き寄せる。つい先ほどまで2人がいた場所が、簡単に建材によって潰されていた。

テツラはその様子を見ながら、余裕をもって彼らに近づいていく。

「幻想殺しイマジンブレイカーの話は以前から耳にしていましたから、多少は期待していません。これは幻想創造イマジンクリエイトのほうも足を引っ張られたまま大した力を発揮できていないかもしれません。ヴェント戦の勝利は学園都市が『墮天使』や『界の圧迫』などを使ってヴェントを内側から締め付けていたからのようですねー」

当麻は相手の一挙一動に警戒する。

あのヴェント——学園都市の機能をほぼ完全に麻痺させた彼女と肩を並べる男が、ただ刃物を使って攻撃してくるだけで終わるわけがないのだ。

(これが、『神の右席』……！)

「おやおや、どうしたのですか。まさか、後ろに下がっているだけで私に勝てるとは思っていませんよねー？もっと私を楽しませてください。これでは『調整』の参考にもならないのですが」

「くっ！」

当麻は五和と共に重たい体を引きずりながら、同時にテツラに向かって突っ込んだ。対するテツラは、再び言葉を口ずさむ。

「優先する。——槍の動きを下位に、空気を上位に」

五和の動きが、何か見えない壁に阻まれたかのようにガクンと落ちた。当麻はそれを横目に見ながら突撃する。

しかし、その拳が届くよりも早く、テツラの一撃は当麻の脇腹に吸い込まれて行った。

(まず……！)

ギロチンが当麻の体を横合いの壁に叩き付ける。
激痛が走る。

(…………あれ?)

しかし、それ以上のことは何も起こらなかった。あの硬い壁をいとも簡単に切り裂いていた刃が、人間の体どころか当麻の制服すら切り裂かなかつたのだ。

明らかに不自然な現象。それに対して怪訝な目を向ける当麻だが、そこで五和がぽつりとつぶやいた。

『優先する』…………』

そして、彼女は自分の槍の穂先についている白い粉に気が付く。

『…………小麦粉?』

彼女はぎよつとしたように顔を強張らせる。

「まさか、その武器…………『神の肉』に対応しているんじゃない?」

「へえ。東洋人でも分かりますか」

テツラは挑発するように告げた。

「ミサでは葡萄酒は『神の血』、パンは『神の肉』として扱われます。そしてミサのモデルとなったイベントは、言うまでもなく『十字架を使った「神の子」の処刑』ですよー?」

だが、処刑の話には1つ矛盾がある…………そう、本来ならば『神の子』を『人間』が殺すことはできないのだ。それは、身分階級表である『セフィロトの木』から考えても当然のことである。

「しかし、神話は時として『優先順位』を変更します。例えば『神の子』が世界人類の『原罪』を背負うために、本来の順位を無視して『ただの人間』にあつさりど殺されてしまったように」

『神の子』の神話を完成させるための秘儀…………『優先順位の変更』。小麦粉を媒体とした刃物への任意変形はその副産物に過ぎない。

テツラは楽しげに解説した。

つまり。

『ワイヤー』よりも『テツラの体』が優先されたから、彼の体は傷1つ付かなかつた。

『外壁』より『小麦粉の刃』が優先されたから、いとも容易く破壊された。

『槍の動き』より『空気』が優先されたから、その動きは阻害された。

「この私の前では強さ弱さなど関係ありません。そもそも、その順番を制御できるのですからねー」

闖入者

一方、駿斗と対峙している『十二使徒』の3人の中で最初に動いたのはバルテルミだった。彼は霊装であるナイフを構え、風を放つと同時に駿斗に向かって駆け出す。

対する駿斗は幻想核杖イマジン・コアロッドに天使の力を通し、その杖を黄色に光らせる。そこから放たれたのは、やはり風であった。

2つの暴風が相殺された直後、2つの武器がぶつかり合う。

「近接格闘までいけるのか。ならー！」

駿斗は足下を中心に四方へ向かって地割れを発生させ、さらにその瓦礫を宙に浮かばせて反転させた。加えて、その下から自在変換で生み出した10ほどの土の槍が飛び出す。

「単なる物理攻撃如き……」

「で終わるとでも？」

バルテルミの言葉が言い終わらないうちに、駿斗が呟く。その直後、土の槍に描かれていた魔方陣が光りを発し、そこから無数の石のナイフが飛び出す。

しかし、彼はそれを炎を発生させて簡単に防いでしまった。そして、すぐに距離を取る。

（バルテルミの反応、早すぎるだろ……！）

駿斗が思った直後、左右からヨハンが霊装の杯から水弾を、フィリペが十字架から風を生み出して攻撃してくる。

「喰らうかー！」

駿斗は自在変換で自分の足場を沈めて2つの攻撃を回避、直後杖を振るって爆発を発生させた。

ヨハンがその攻撃を受けて吹き飛ぶ。

しかし、他の2人はそれを無視して攻撃を加えてきた。どうやら、攻撃には互いに協力するものの、庇おうとする意思はないらしい。

「仲間をかばう気はないのかよ……。今の一撃なら、ヨハンを意識を奪うとまではいかなくても戦闘不能には追い込んだだろうに」

駿斗は特に返事を期待せずに、思ったことを口に出す。すると、意

外なことにバルテルミが言葉を返してきた。

「その点についてはご心配なく。あの程度ではすぐに復帰できるかと」

何!? と駿斗が驚くよりも早く2人の後ろ、未だに土煙が立ち込めていてはつきりとヨハンの姿が見えない場所から天使の力が感知され、その直後に水の刃が駿斗に向かって放たれた。彼は慌てて防御術式で防ぐ。

土煙が晴れると、ダメージを負ってはいるものかなり肉体を治療したヨハンが立っていた。

駿斗はその光景に驚愕する。

(ばかな……魔法陣を構成せず、呪文の詠唱もなしにあの短時間であるそこまで回復するまでの治療術式。あれがあいつの『十二使徒』特有の術式だというのか?)

驚きのあまりその動きを止めた駿斗に対して、3人から次々と魔術が放たれる。しかし、すぐに防御術式が発動し、それが宙に現れた複数の光る魔法陣によって防がれた。

「まだ行くぞー!」

駿斗は自分を奮い立たせるようにそう叫ぶと、次々と魔術を発動させた。3対1の、魔法の打ち合いが始まる。

ドォー! と空間そのものが爆発したのではないかと思うくらいの衝突が起きた。

互いに拮抗し、衝突し、行き場を失ったエネルギーが横に漏れてすでに崩れている周囲の瓦礫を薙ぎ払う。

今までの戦闘で、すでに当麻たちとは離れていた。今はどうやら、博物館から少し離れた、暴動で壊された喫茶店の中にいるようだ、と駿斗は周囲の瓦礫の狭間にあるティーカップや、洒落ているが半ばほどで割れてしまっている看板を見て推測する。

そうやって周囲を見ていて初めて、駿斗はヨハンの持っている杯について気が付いたことがあった。

「その霊装……単なる杯じゃない。それは十二使徒ヨハネの象徴である蛇が巻いているものか!」

その言葉を聞いたヨハンは、一度攻撃の手を休め感心したように駿斗を見る。

「へえ、気付きましたか。どうやら、少しは勉強してきたようですね」「毒抜き……魔術によるダメージを『毒』と定義している。そういうことか」

十二使徒ヨハネに、エフィソスのディアナ神殿の祭司から罰として与えられた毒が入った杯が与えられたことがある。しかし、その毒は蛇となって去ってしまったという。

駿斗の言った通り、魔術によつて生じる傷、ダメージを『毒』と定義することでそれを治療することができるのだ。

最も、これは『ローマ正教にとつての毒』でならなければならない以上、純粋なローマ正教式の術式によるダメージはは通用しないのだが、駿斗が使っている十字術式は、基本的にインデックスから教えられた知識をもとにしているため、ほとんどがイギリス清教式である。

つまり、駿斗の攻撃によつて受けた傷はすぐに治療できてしまう。(つまり、あいつを倒す時は一撃で意識を奪うしかない)

放たれた暴風を土の壁で守り、返す刀で水弾を放ちながら駿斗は考える。

(それに、他の2人の術式がまだ分からない。ヨハンは治療術式、バルテルミは反応速度の増幅、か?)

先ほどの攻撃の結果を思い出す。だとしたら、ヨハンの体が治っていたのも、バルテルミの切り替えしが早かったことにも納得がいく。

駿斗は攻撃用の術式と防御術式を同時展開させ、相手を倒すための算段を考え始めた。

バルテルミのナイフから放たれた暴風が防御術式で防がれたが、彼はその反動を利用して大きく跳び上がる。

上から落ちてきたバルテルミを避けると、駿斗は自分に向かって突き立てられたナイフを幻想核杖で防ぐ。

駿斗は肉体を使った格闘戦には(不良との戦いレベルではあるが)そこそこ慣れている。だが、プロとの戦いなどできないし、まして『十二使徒』などという役職についている人間とはまともに戦える自信は

ない。

だが、それはあくまで『普通の』駿斗であるならば、の話だ。

「チャンスだな」

「まず——！」

そう呟いた声にバルテルミが表情を変えた次の瞬間、駿斗の背から水翼が生えた。

起こったのは爆発とも呼べるほどの衝撃波だった。それは、『十二使徒』を含めた周囲のあらゆるものを吹き飛ばしていく。

ガブリエル
神の力。

大天使の一角に相応しい破壊力が見せつけられる。

だが。

「あ、危ないところでした……」

聞こえてきた言葉に駿斗は驚愕する。その声の主は、バルテルミだったのだ。

「ばかな……ゼロ距離からの攻撃だったんだぞ！」

神の力など、いかに『十二使徒』が特別であったとしても大天使にかなうはずがない。それに、あのタイミングでは術式の構築と発動は間に合わなかったはずだった。

なのに。

「いえ、あなたが発動しようとするのが見えたので。慌てて防御させていただきました……といっても、この程度で済んだのは奇蹟だと思いますけれどね。主から加護を受けたのでしよう」

バルテルミは服が破けたところどころに血が滲んでいるものの、それでも戦闘ができるようなのだ。戦闘不能どころか、意識を奪ってもお釣りがくるような一撃を放ったのにも関わらず。

これは、何かの形で防御をしたとしか考えられない。反応速度の増幅、という言葉で済ませられるものではない。

つまり。

「……使用する術式の予知？」

駿斗は声に出していた。

「……ええ」

バルテルミは、ナイフを持ち直しながら頷く。

「私の術式は『天使の加護』を受ける、というものですよ。天使の加護を受けるがために、肉体は疲れを知らず、傷も癒され、御言葉を授かることで相手の術式を予知できるのです」

十二使徒の1人……バルテロマイには天使が付き添っていたと言われている。

そのため、彼は疲れも飢えも知らずに働くことができ、その上ありとあらゆることを見通していたと言われている。

「やつかいな術式を……」

駿斗がそう言いかけた次の瞬間、轟音が鳴り響いた。

爆薬がアビニヨンの街並みを突き崩し、駿斗たちが立っていた場所が吹き飛んだ。

「……何なんだよ、これ。何がどうなっているんだ」

当麻は思わずぽつりと呟いた。

当麻はテツラから『光の処刑』という彼固有の術式の説明を受けた後、打開の策が見つからず焦っていた。その状況を動かしたのは、土御門であった。

『大サーベイスだな。10秒もあれば、3つは思いつくぞ』

土御門はそう言って、炎に包まれた折り紙の魔術と拳銃を順番に相手に撃った。

当然ながら結果は無傷。

『優先する。——魔術を下位に人肌を上位に』

『優先する。——弾丸を下位に人肌を上位に』

その言葉で簡単に防がれていた攻撃だが、土御門は彼の相手をしながら同時に、五和を通じて教皇庁宮殿へ行くよう、当麻に指示してきた。

しかし、その次の瞬間建物の外壁が吹き飛び、彼らが姿を現した。

バードスーツ
駆動鎧。

当然ながら、それを実用化できるレベルで開発できるところなど、

1つしかない。

(土御門の話じゃ、学園都市は動かないって話じゃなかったのかよ！) 彼らの手には、リボルバー方式の対壁用ショットガンが握られていた。

歩く上で邪魔となる建物や自動車には実弾を。

暴徒たちには空砲を。

容赦なく叩き付けている。

空砲、と言つてもそれは駆動鎧の外観に相応しい大きなサイズのものだ。当然ながらその分火薬の量も多いために、衝撃波だけで人間の体を地面に叩き付けることができる。その光景を見た暴徒たちは静まり返り、そして道路の隅でガタガタと震えだした。

親船最中の話と違う。

いや、むしろ彼女の話の通りであるからこそ、必要な利益がもう得られたので事態の收拾に乗り出したのだろうか。

「なるほど、そうきましたか」

テツラが言った。彼は集合住宅の外壁に開けられた大穴を使って、どこかへと去ってしまう。

土御門が叫ぶ。

「かみやん、動けるか。俺たちも教皇庁宮殿へ行くぞ！」

「くそ、問題をややこしくしやがって……学園都市は動かないんじゃないのかよ！」

当麻は忌々しげに叫ぶ。

「今はC文書を追うのが先だ！ 連中の目的も同じだろうから、それが破壊できればこの混乱も収まるかもしれない！」

「ちくしょう、本当にあいつらはこの混乱を収めるつもりがあるんだろうな」

アビニョンの人たちは暴動と駆動鎧、いったいどちらを憎んでいるのだろうか。

そんな考えが、当麻の頭に浮かぶ。

だがその時、テツラが通って行った大穴から駆動鎧が姿を現した。しかもそいつは、同じ学園都市の人間のはずなのに、銃口をピタリと

当麻たちに向けている。どうやら、一々どこの所属なのかを確かめるつもりはないようだ。アビニオンにいる人たち全員が、敵と定められているのだろう。

「……かみやん、ここで二手に分かれよう。イツワだったか。お前もかみやんと一緒に教皇庁宮殿へと向かえ」

「土御門？」

「俺は後からやってきた学園都市のバカどもを止める」

「どうやら、こいつらを放っておくのは難しいようだしな。と答える土御門。反論しようとする当麻に向かって、彼は言葉を続けた。

「連中は完璧に敵って訳じゃない。一度は戦うことになるだろうが、話をするチャンスを作ってみる。こういうのは、俺の方が得意だろうが」

「……ちくしょう」

「はやとんも戦っているはずだ。友人を助けるためにも、行け、かみやん！」

「ちくしょう！」

当麻は叫び、五和と一緒に狭い通路を駆け抜けて行った。

火薬と煙の臭いが鼻につく。逃げ惑う人々と、それを的確に追いかける駆動鎧の姿があちこちに見えた。

(どうなってやがる！)

デモや暴動とは比べ物にならない、軍事行動という圧倒的暴力を見ながら、頭の血管が切れるような思いをしながら当麻は五和と教皇庁宮殿へ走る。

しばらくすると、あれだけ恐ろしかった暴徒たちがいなくなっていた。その大半が駆逐されてしまったようである。

道路がめくれあがったり、建物の瓦礫で塞がったりしてまともに道が進めない中、当麻は瓦礫を乗り越え穴の開いた壁を潜り抜けながら進んで行く。

周囲を見渡せば、街のあちこちに駆動鎧が確認できた。

彼らが扱っているのはあくまでも空砲であるためか、この街の風景とは裏腹に血の匂いは感じられなかった。アビニオンの暴徒たちは

気を失ったままあちこちに積み上げられ、防弾繊維でできた偵察用のバルーンにつけられたゴンドラに積み込まれて行く。恐らくは、彼らを作戦行動の領域外まで追い出してしまおうためであろう。

彼らの考えは土御門と同じなのかもしれない。
でも。

「土御門はこんな手を使わない……」

思わずつぶやいた言葉に振り向いた五和だったが、当麻は応えない。

今なら親船最中が止めたかったものが分かる気がした。彼女はローマ正教を倒したかったのではなく、全てはこのような——あらゆるものを破壊していく『争い』そのものを止めてほしかったのだ。

（止めてやる。この状況が正当なものだと思っている奴の幻想なんか、ぶち壊してやる！）

当麻は歯を食いしばって走る。

「っ、着きました。あそこです……！」

五和が声を上げた。

宮殿、という言葉のイメージとは裏腹に、そこにあつたのは中世の要塞だった。砦、という言葉が似合いそうなものだ。

しかし、彼らはそれを見た途端に顔をしかめた。

「風穴が……」

両開きの巨大な正面入り口が内側に吹き飛ばされ、窓は壁ごと粉碎されている。さらに、その中から銃声や爆撃音が聞こえてくる。

「もう始まってやがる！ 行くぞ、五和！」

「は、はい！」

彼らは広い建物の中を駆ける。

壁紙のない石の壁以外にあるのは、建物を支える石の柱のみであった。本来なら平日には観光地としても解放されている建物であるが、今は人間などいなかった。

銃声や爆撃音が続いている。彼らは抵抗を続けているのだろうか。

「……そもそも、あの駆動鎧。いったいどこから出てきたんだ」

当麻が呟く。

「学園都市から来たのか、それとも協力機関に依頼したのか。大体、ここまでしたら隠蔽などできないだろうに……」

彼は考えた後、携帯電話を開いた。テレビニュースが映らないことを確認すると、登録されているメモリに電話をかける。

「御坂！」

『な、なによ』

通話の相手は、御坂美琴。

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど、今いいか？」

彼は相手と2つ3つ言葉を交わしてから本題に入る。

「御坂。今ニュースで海外のアビニョンって街で何が起きているのか調べてほしいんだけど」

『はあ？』

あまりに唐突な質問だったか、と当麻が考えるが、その予想は裏切られた。

『あんた何言っているわけ？ テレビなんてどこをつけても臨時ニュースしかやっていないじゃない。フランスのアビニョンでどこの宗教団体が国際法に抵触する特別破壊兵器を作っていて、その制圧掃討作戦が開始されたって大騒ぎになっているでしょ』

「……何だつて？」

ギョツとする当麻に、御坂はそのまま説明を続けた。

本来ならフランス政府が対処すべきものなのであるが、特殊技術関連のエキスパートが必要だということで学園都市がかなり深く食い込んでいるとのことだ。

「……つかアンタ今どこにいるわけ？ むしろこの情報が入ってこない場所を探す方が難しいんじゃないかしら」

ええとだな……と当麻が誤魔化そうとした時、彼は気が付く。

先ほどまで騒がしかった場所が、静まり返っていた。携帯電話から聞こえる御坂も声を無視して、五和と2人で耳を澄ませる。ゆっくりと前に進む。

得体のしれない緊張感に包まれた2人だが、その原因を知る前に変化があった。

ゴバツ！ という破壊音と共に、当麻の右手にあつた分厚い壁が破られたからだ。

「なっ！」

その壁から出てきたものは駆動鎧。当麻は自分に寄りかかつてきたその重量に耐えきれず、そのまま倒れてしまう。五和は慌てて槍の穂先を駆動鎧に向けるが、それが完全に機能停止に追い込まれているのが分かり、その手が止まった。

さらには、周囲に駆動鎧が使っていたのであろう銃器やその弾丸が散らばっていた。

五和は当麻を庇うように前に出る。

「やられましたねー」

駆動鎧によって崩された壁の向こう。そこから1人の男が影を現した。『光の処刑』を使つて、汗1つ書かずに学園都市製の駆動鎧を倒したテツラだ。

彼の言葉には、わずかな苛立ちがこもっているように思える。

「暴動を混乱で呑み込んでしまおうとするとは、学園都市はある程度国際的非難を受けてでもこいつをどうにかしたいようですねー」

彼の手には羊皮紙が握られていた。それを見た五和が、その正体を呟く。

「C文書……」

その霊装を使用していた他の術者ではなく、彼自身がそれを握っている。ということはある。

「まったく、面倒な連中です」

彼はそう言った。

「私が蹴散らしている間に術者が攻撃されてしまう可能性は否めませんし……人間の術式を扱えないっていう私の『体質』も問題ですね。凡人の術者に足を引っ張られて……今回はこのあたりで引き上げておくのが得策というやつでしょうねー」

「黙っていかせると思うか」

当麻は両手を構える。

あらゆる魔術を打ち消す右手と。

物理攻撃を弾く左手を。

「C文書はバチカンに戻っても扱える。それを分かっている、俺たちが行かせるとでも思っているのか？」

「だから何だと言うのです。このアビニオンに來た学園都市の舞台では私を止めることはできないんですねー。それとも、あなたの右手は彼らよりも優れているとでも？」

テツラは嘲るように言う。

しかし、当麻は言った。

「確かに、俺の力はいつらに比べれば大したことがないかもしれない
「い」

一度認め、だがよ、と続ける。

「それで諦める理由にはならねえよ。親友に、任せられちゃっているんだ」

当麻は、贈り物をはめた左手を突き出した。その様子を隣で見ている五和も、フリウリスピア海軍用船上槍を構える。

テツラも、それに呼応するように白いギロチンを構える。

「存分に挑戦し、存分に諦めてください。こちらとしても、そういう展開の方が面白くて大好きなんでね」

その頃、アビニオンの上空9000メートルには11機の爆撃機が飛んでいた。

超音速ステルス爆撃機、H s B ー 0 2。

その内4機が、正方形を描くような軌道を取った。その機体には、機体の全長の半分ほどの長さもある漆黒のブレードが付いている。それは大気を時速7000キロオーバーで切り裂き、真空の刃を生み出していた。加えて、そこに砂鉄が投下される。

ゴバツ！ と大地がアビニオンを取り囲むように正方形に切り裂かれた。

『アースブレード
地殻破断』。

時速1万キロオーバーで投下されたことにより気体と化した砂鉄が、大地を切り裂いたのだ。

幅20メートル、深さ10メートル以上のオレンジ色の溝は、旧市街を外と完全に隔離させてしまう。電気や水道はおろか、ローヌ川の流れすら完全に断ち切られ、アビニヨンの人間を完全に閉じ込めた。

まっすぐに飛ぶだけで、その純粋な速度でミサイルを振り切れる爆撃機は更に動く。

「作戦行動領域の隔離を確認！」

その機内でメンテナンス要員が声を上げるのを、学園都市最強の怪物は側で聞いていた。

次の攻撃目標はアビニヨン旧市街内部らしい。駆動鎧を使っていた人間たちは、その技術を外に出さないように地殻破断によってできたマグマの溝を使って完全に焼き払い、得体のしれない技術を使ってマグマの皮を飛び越えるはずだ。最期には地中海沿岸に待機している潜水艦で脱出する手はずとなっている。

しかし、旧市街内部にまだ逃げ遅れている人間が数多く残っていることを知った一方通行は告げた。

「変更だ。狙いは教皇庁宮殿だろ。先にそこを叩く。爆撃しても成果が出ねエよオなら俺が落ちる。その後に俺からの連絡がなかったら、予定通り旧市街を爆撃しろ」

「いえ、しかし……」

「変更だ」

言葉を遮ってそう告げた一方通行を見て、メンテナンス要員の背筋が強張った。彼がこの期待に乗っている理由を思い出したからだ。

この超能力者は爆弾だ。原爆や水爆と同じように、大型爆撃機に積み込んで作戦行動領域に投下する爆弾なのだ。

彼は上層部の人間と無線で連絡を取る。『爆弾』が言った言葉の内容を伝え、作戦を仕切っている上層部の人間と掛け合うしかないからだ。何度も何度も言葉の応酬を繰り返したのちに、メンテナンス要員は無線機を置いて静かに超能力者を見た。

「……し、申請は受理されました。作戦行動Bの予定を変更し、教皇庁
宮殿への攻撃に集中します」

「それで良い」

上層部の柔軟すぎる対応に奇妙な表情をしているメンテナンス要
員に向かって、一方通行は言う。

「一流の悪党ってのはな、カタギの命は狙わねエンだよ」

救いの意味

駿斗たちが戦っていた場所が、パワードスーツ駆動鎧から放たれた巨大な弾丸によって吹き飛ばされた。

しかし、彼らは1人も倒れない。そのまま戦闘を続けて行く。

火が、水が、風が、土が、時には雷や光が飛び交った。それらは周囲の建物を瓦礫へと姿を変え、自分たちに迫ってきた駆動鎧を吹き飛ばしてしまう。

さらに、『十二使徒』の三人はそれぞれ独特な術式を使っている。

ヨハンは魔術によるダメージを治す『毒抜き』の術式を。

バルテルミは相手が構築しようとしている術式を予知する『天使の加護』の術式を。

フィリペは分からないままであるが、それでも苦も無く駿斗の猛攻を凌いでいるために、やはり並の魔術師にはない力があるはずだ。

しかし、駿斗は次々と攻撃を仕掛ける。

「火よ。水よ。風よ。土よ——」

溶岩のような灼熱の液体が吹き出し、それは壁となって彼らの攻撃を防ぐ。

「この星を構築する四の元素よ。我が敵を撃つ刃と成せ」

さらに、その壁が崩れた瞬間駿斗の手に灼熱の剣が生み出され、それが斬撃となって放たれる。ヨハンは水を生み出すが、剣は逆にそれを飲み込んだ。

直後に剣が爆発を起こすが、彼ら4人はそれでも無傷のまま戦いを続けている。

事態が硬直している。しかし、それでも駿斗の表情は次第に落ち着きを取り戻していた。

「なるほどな」

彼は呟く。

「フィリペの術式は『統一』といったところか……確かに、十字教は数々の宗派を産んでいるし、他の宗教にも影響を与えているが、始まりをたどれば『神の子』に帰結する。簡単に言えば変圧器みたいなも

のだな。あらゆる魔術に対してローマ正教式の術式で対処できるようになる、といったところか」

これで3人の術式の正体は暴いた。

対魔術用の魔術。それが彼らの共通点だ。

「だったら、学園都市の人間に相応しく、科学で戦ってやるよー！」

彼は自在変換で地面を隆起させ、岩の腕を創り出した。それは9月1日のシェリーが使っていたゴーレムを連想させるようなものだ。

「安心しろ。自由落下するだけだ」

その直後能力は軌道修正に切り替えられ、大小の瓦礫が様々な軌道で彼らに迫る。

彼らはそれらを回避し、あるいは弾いて防御するが、その全てを防ぎきれず、落下した瓦礫で周囲に土煙が立ち込めた。

「知っているか？ 鎌鼬って言うのは真空の刃じゃない。その中に混ざり込んだ粉末によって物体を切断するらしいな」

その土煙が、風と共に刃となって彼らに襲い掛かる。

三人は、そのまま後ろへと吹き飛ばされた。

「まだ、ですよ」

彼らは起き上がると、再び魔術を放つ。駿斗は自在変換でそれを防御術式と併用した壁を作りだして防ぎつつ、同時並行で魔術と物理攻撃、あるいは科学的な知識を利用した攻撃でもって迎撃し、相手を追い詰めていく。

「そんなにローマ正教の勝利が重要か？ お前らは……自分の信徒たちを利用してでも、か!?!」

駿斗は糾弾する。

「そんなに『神の右席』の言うことが重要か」

すると、彼らの目つきが険しくなった。

「私たちはあの方たちを信じているのですよ。……実際に、本当に困った時に主と共に救いを差し伸べてくださったのは、あの方たちだけだったのですから」

「……何?」

助けた? あいつらが?

怪訝な顔をする駿斗に対して、ヨハンは話を続ける。

「エボラ出血熱、後天性免疫不全症候群、筋ジストロフィー……そのような病気を始めとして、今でも世界には数多くの難病があります。それらの一部は発達した現代医学だけではなく、普通の魔術ですら、治すことはできません」

彼らは、それらの病気に罹っていたということなのだろうか。

「病気……でも、学園都市にさえくれば」

「その街に入るのに、どれほどの条件が必要だということですか？」

彼に言われて、駿斗は考える。

「知つての通り、あなたたちはその技術を狭い都市で独占しています。数多くの人々を救おうとすることもせず、技術を独占することでその利益を貪り、人々に怠惰をもたらしているのです。しかも、その街に入るができるのは一部の認められた存在のみ……あなた方が、どれほど身勝手なのか分かりましたか？」

彼は糾弾する。

学園都市が、その独立性が、この世界の平穏を揺らがしているのだと。

しかし、駿斗はそれでも言葉を返した。

「……だったら、どうしてこんなことをしているんだよ」

そのことを認めたくらうで、それでも言い返す。

「ローマ正教にこれだけの人を動かす力があるんだったら、その力で世界中の人たちを救ってしまえば良いだろうが！ 確かに、学園都市の上層部には胡散臭いやつらもいる。だけど、それはお前たちにしても同じ事だ。お前らの魔術を使えば、戦力を別の方向に向けてしまえば、いったいどれほどの人々が救われると思っっているんだ！」

初めて出会った魔術師は、1人の少女を守るために行動していた。初めて出会った『聖人』は、あらゆる人に救いの手を差し伸べることを魔法名として己に刻んでいた。

『神様。あなたが選ばれた人々だけを救うというならば、残りの選ばれなかった人々は、一人も余さず私が救う』

駿斗は神裂火織の言葉を思い出す。

そのような魔術師を知っているからこそ、駿斗は余計に彼らが許せなかった。

「お前らは救いってものの言葉をはき違えているんだよ！」

——だから、まずはその幻想をぶち殺す！

彼は再びその杖を強く光らせた。まずは、今までよりも大きな爆発を起す。

3人は防御に入った。しかし、その爆発によって立ち込めた土煙が、一瞬で切り裂かれた。

背中から4色4枚の翼を生やした——『アルヒヤイ権天使』の姿となった駿斗は、その力で一気に勝負をつけに来たのだ。

攻撃は音を超えた。

まずは、一気にヨハンの懐に飛び込み、その胴体に蹴りを叩き込む。

天使の力で身体強化でもしていたのか、腕でガードされたが駿斗は蹴りを放った足を地面につけると、風を纏わせた左拳でヨハンを遠くへ吹き飛ばした。

その直後に、天から槍のような雨が駿斗に降り注いだ。

だが、通常の間人では視認さえも困難なそれであっても、今の駿斗にとってはゆっくりとした動きでしかない。

「我が盾となりその幻想からわが身を守れ——『アイギス幻想防壁』」

彼が呟いた直後、イマジン・コアロッド幻想核杖を中心に展開した半透明の光の盾が、その雨を完全に遮断した。

幻想防壁。

『アイギスの盾』の伝承を始めとした、様々な能力、防御術式、霊装、結界を1つに集約した防御技である。

物理攻撃は窒素の壁が、能力や魔術の攻撃に対しては防御術式や結界が、それらを完璧に遮断する。

「お前らの抱えている事情が何であろうが……こんな人を巻き込む方法が救いだなんていうんだったら」

彼は、その右拳に全ての天使の力を集約する。

「まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す！」

まっすぐに突き出された右手を起点として、『十二使徒』に向かって

光の塊が——純粹な天使の力が放たれる。

魔術とはとても呼べないそれは予知することもできず、傷を治す余裕も与えず、三人を吹き飛ばした。

当麻たちとテツラの距離は7メートル前後。その距離で、彼らは対峙していた。

「最期に尋ねるけどよ。大人しくC文書を渡すつもりはねえんだな」

当麻は『硬化手袋』フリックグローブをはめ直しながら尋ねる。

「ええ。遠慮なさらず、存分に玉砕してください」

その言葉を聞くと同時、当麻は前へと駆け出した。

相手が振るってくる小麦粉のギロチンに合わせて、当麻は右手を前に出す。だが。

「優先する。——大気を下位に、小麦粉を上位に」

膨大な空気を巻き込んだ小麦粉が、団扇うちわとなって当麻の方へと飛ばされてくる。

反応できない。

しかし、五和が当麻の腕をつかんで横に跳んだ。その直後、硬さや鋭さを持たないはずの『ただの空気』が教皇庁宮殿の床や壁を破壊する。衝撃波のような爆音が炸裂した。

五和は当麻の腕をそつと放すと、その仕草からは打って変わって素早い動きでテツラに向かって槍を突き出す。

ドッ、という音と共に、てつくいのように勢いよく槍が空気を切り裂く。

対し、テツラのやることは変わらない。

「優先する。——刃を下位に、人肌を上位に」

彼が呟くと、五和の槍の穂先は人肌に弾かれた。ギイン！ と金属の震える音が教皇庁宮殿にこだまする。

しかし、それでも彼女は動きを止めることはなく、足元にあった石をテツラの眼を狙って鋭く蹴りあげた。

対し、テツラは目をつぶることもせずそのままギロチンを振るっ

た。横薙ぎの一撃が小石と五和、さらには別の角度から攻撃を仕掛けようとしていた当麻さえも巻き込んで押し返す。

彼らはそのまま床に倒れ込んだ。

「痛……い」

起き上がろうとした五和が顔をしかめる。テツラが崩した石の壁の残骸の上に倒れ込んでしまったため、足首にダメージを負ってしまったようだ。

「優先する。——人肉を下位に、小麦粉を上位に」

小麦粉の刃が放たれる。

足をやられた五和は動けない。だから、当麻は右手を突き出して間に割って入った。テツラの攻撃が四方八方に吹き飛ばされる。

その直後に放たれた第2連撃に対し、五和は当麻を突き飛ばし後に横に転がることで回避する。2人の間を斬撃が切り裂いていった。

「おや勇ましい。しかし、もう限界でしょう。足を引っ張る……とは、まさに言葉通りですねー」

余裕を持った表情のまま、そう言つて笑うテツラ。

「……確かに」

しかしカツとなりかけた当麻よりも先に、五和が冷静に言葉を返した。

「でも、ようやくあなたはボロを出してくれました。決定的なボロを」

「何でしょう？」

「あのツチミカドさんが言いかけていたこと」

——あなたが得意とする優先術式『光の処刑』の弱点。

五和はそう言った。

「今のあなたの動きには、不自然なところがありましたから」

へえ、と面白そうに相槌を打つテツラに対して、彼女はゆっくりと槍の穂先を向ける。

「天草式十字凄教は呪文や魔法陣なんかを用いず、生活用品や習慣の中に残る魔術的記号を組み合わせて術式を形成しますから。そういった記号探しは得意なんですよ」

「なるほど。それは困りました」

テツラは感情のこもっていない声でそう言った。自分の優勢を絶対に信じているようだ。五和の発見は、それを覆することができるのだろうか。

だが、戦況は動く。活用までの時間がない。

テツラが掲げたギロチンがその形状を変え、ねじのようにとがって天井へと突き刺さる。

「優先する。——天井を下位に、小麦粉を上位に」

テツラの手が天井からつりさげられた紐を引っ張るように動いた。その直後。

フロアの天井が、ゲームやマンガの罠トラップのように落ちてきた。天井を支える柱さえも、不自然なほど滑らかに地面の中へ飲み込まれて行く。

「なっ！」

五和は慌てて槍を地面へ垂直に立てた。

槍が落ちてきた天井と床の間に挟まることで、辛うじて圧殺を逃れる。しかし、武器を失った彼女に向かってギロチンが放たれた。

横薙ぎの一撃は彼女の胴体へ直撃。その小さな体を後方へと飛ばした。

地面に激突しても威力が収まらず、2回3回と地表を転がってからようやくその動きが止まった。

「五和！」

当麻は呼びかけるが、彼女は返事をしない。胸が上下に動いていることから死んではいないようだが、呼びかけた言葉には応じなかった。

「ま、こんなところでしょかねー。ただの魔術師が『神の右席』に太刀打ちできると思っていることが、すでに間違いということですよ」

落ちてきた天井が、ゆっくりと元へ戻っていった。圧縮されていた柱も、ゆっくりと元の長さへと戻っていく。

今のは、『光の処刑』によって変更された『優先順位』を元に戻した、ということだろうか。

五和の槍が、圧迫から解放されカランと音を立てて床に転がった。

「テ、メエ……！」

当麻の右拳に力が入る。

しかし、テツラは余裕の表情を崩さなかった。

「おやおや。勝手に怒ってもらっても困りますねー。今は戦闘中ですよ？ まさか、私には一発も反撃しないで殴られ続けろとか言うつもりじゃありませんよねえ？」

その言葉に、当麻は無言で返した。テツラはそのまま言葉を続ける。

「というか、こちらとしてもがっかりですよ。幻想殺しや幻想創造イマジンプレイカー イマジックリエイトというからには、多少は苦戦すると思っていたのですが、まさかここまで未完成とはねー。その右手の本来の性能を回復していれば、少なくとも今の攻撃からそちらの魔術師を庇うくらいのことではできなはずなのに。あの幻想創造に至っては、その本来の力を発揮することができれば『十二使徒』の3人程度、他の作業の片手間で戦ってもお釣りがくるでしょうにねえ」

何だと？ と当麻は眉をひそめた。

幻想殺しと幻想創造——その本来の性能。

思わず自身の右手に視線を移してしまふ当麻を見て、テツラはうっすらとした笑みを浮かべた。

「おや、もしかして知らない？ 普通なら知っていなければならぬ。だというのに、まさかあなた1人ならまだしも、あの幻想創造までもが？ ……とすると、んん？ 本来気づかせてくれるべき人がいなかっただからですか？」

本来存在するはずの、その正体を教えてくれる人——学校の先生でもなく、魔術の英知が詰まったインデックスでもない存在となれば、考えられるのは……親。

『置き去り』である駿斗に欠けている存在。

「ダメエー！」

ここで当麻が怒るのは筋違いなのかもしれない。

しかし、それは彼の親友にとって最大級の侮辱ではないのか。

「そうかそうか、いやあ、学園都市は潜り込むのは簡単ですが、個人情報

報に関してはセキュリティが厳しくてですね。あの手の類は全て電子的なデータとなつているので、わたしたち魔術ではなくあなたたち科学の領分ですし……そうか、どうしてそんなことになったのか。その者たちは今どこでどうしているのか。そこから調査を試みるのも面白いかもしれないですねー」

怒りが当麻を支配する。

それは、目の前で親友が丸裸にされていくような思いさえ感じられた。

「良いんじゃないですか」

左方のテツラは笑いながら訳の分からないことを言う。

「どうせここで死ぬんですし、心配は全て捨てましょうよ」

テツラがゆつたりとした動作で小麦粉のギロチンを構える。

（あの刃物の破壊力自体は大したことがない。問題は例の『優先』……その弱点を見つける！）

土御門も五和も、それが『ある』と言っていた。恐らく、駿斗であればもつと早く気が付いていたであろう。

だが、当麻ではすぐにそれに気が付くことができなかつた。だから、これから見つけなければならぬ。

（あいつの攻撃の中で不自然なこと。そう、嬉しい誤算だったから深く考えないでおいたこと。そう、あれは）

「おや、そちらからはこないんですか」

テツラが小麦粉のギロチンを振りながら、嘲るように言った。

「それなら待つのも面倒ですし、こちらからいきましようか、ね！」

テツラが白い刃物を当麻に向けて放つ。だが、当麻はそれに右手も左手も合わせなかつた。

顔面に向かつてくるそれを、首を振って避ける。そうしながら、足元に転がっていた弁当箱くらいの大きさの外壁の破片を、手に取つた。

起き上がるときの勢いに乗せて、カウンターのようにはテツラに向けて投げる。

「優先する。——石材を下位に、人肌を上位に」

テツラが歌うように呟き、その直後石材がその顔に衝突する。本来ならば頭蓋骨の額の部分が砕けてもおかしくないが、彼の表情は変わらなかった。

それを見た当麻は、ズボンのポケットに手を突っ込んだ。それを見たテツラの眼が険しくなる。

何か、武器でも隠し持っていたのか。

テツラはポケットの中から投げつけられたものを、ギロチンで引き裂いた。その正体を見たテツラは眉をひそめる。

それはシンプルな財布だった。

「どうしてだろうな」

当麻が彼に突きつけるように言った。

「五和の槍や土御門の魔術も簡単に防いだくせに、どうしてただの財布を『優先』で防がなかったんだだろうな」

「……ッ!？」

テツラは当麻の口を塞ぐようにギロチンを叩き付けるが、小麦粉でできたそれは右手に吹き散らされた。

「考えてみりやおかしかったんだ」

もはや恐れるものはないと言わんばかりに、当麻は前に出る。

「あの白い歯の直撃を喰らって、俺や五和が生きているってことがない。テツラに手加減をする理由はない。彼らを生かしておく理由もない。だったら、答えは自然と1つに定まる。」

簡単なことだ。あえて殺さなかったのではなく、どうやっても殺せなかった。ただそれだけの理由なのだ。

小麦粉の刃物そのものの威力では、人間1人殺すのにも不十分なものだ。だから、テツラはそれを『優先』によって威力を増幅させて使用していた。

だから、答えは1つに絞られる。

「テメエの『優先』は融通が利かないんだろ。刃の威力が軽減されたのは、決まって俺たちの攻撃を受け止めた直後だった。つまり、テメエの『優先』は一度に複数の対象に向かっては扱えない」

術式の正体を丸裸にしていく当麻。

「1つの『優先』から別の『優先』に切り替えるには、いちいち1つ1つ再設定していく必要がある。そんなところじゃねえのか」

「ふ」

テツラは笑った。

「弱点とは、そういうことですか。何分こいつは未調整でしてね。そちらの言葉には多少興味があつたのですが」

微笑む聖職者。しかし、そこから一転して彼の顔に嘲りが戻る。

「しかし、そんなことが分かったからと言ってどうだというのでしょうか。その程度で敗北するほど、左方のテツラは甘くはないんですがねえ！」

ゴツ！ と空気を切り裂きながら白い刃が動いた。

当麻はそれを右手で弾き飛ばすと、バックステップで距離を取ろうとしているテツラに向かって突撃する。

「テツラ！」

「優先する。——床を下位に、小麦粉を上位に」

石の床が簡単にはがされ、その破片が当麻に襲い掛かった。当麻はそれを横つ飛びで避ける。

「テメエがここまでする理由は何だ！ 俺たちどころか、アビニョンの人たちまで巻き込む理由があるのかよ！」

「ハッ、騒ぎの半分以上はあなたたち学園都市のせいだと思いますけれどねー？」

テツラは後ろへ下がる。

「十字教徒全ての最終目的——『神聖の国』ですよ」

「何？」

「おやまあ、十字教文化圏の人間なら、信号の色よりもポピュラーな情報なんですけれどねー」

最後の審判ののちに、神がその手で築いてくれるという王国。深い信仰によって研鑽したもののみが滞在を許される、永遠の救いという場所。

そんな説明をしている間にも、白い刃と右手が衝突する。

「しかし、ふと思ったわけです」

人はこの神聖の国で争いをしてしまわないのだろうか？

十字教はただでさえもローマ正教、イギリス清教、ロシア正教といったように別れてしまっているのに、ローマ正教の中でさえ無数の派閥に分裂してしまっている。仮に『ローマ正教』という枠組みで選ばれた人々が神聖の国に招かれた場合、その派閥の問題がそのまま持ち込まれてしまう。

神がどれだけ完璧な王国を築きあげても、人間が神の期待以下ならば全てがご破算になってしまう。その前に、どのように人々を導けばよいのか。

「だからこそその『神の右席』なのですよ！」

前方のヴェントは、個人的な理由で科学を憎んでいた。

しかし、テツラはローマ正教のために自らの道を選んでいる。だから、彼は本気でローマ正教の人々を救おうとしているのかもしれない。

「……救いって、その程度なのかよ」

だが、当麻は言った。

「救いって言葉の意味が全く分かってねえんだよ、テメエは！」

当麻と駿斗を動かすために、自ら銃弾を受けても争いを止めようとした親船最中。

共に戦ってくれた土御門や五和。

そして、今も必死で戦っている親友。

当麻は、この争いを止めるために必死になっている彼らを思い出しながら叫ぶ。

「ローマ正教が悪いってわけじゃない。だがな、テメエらの神様だって、こんな争いを生むために教えを広めていったわけじゃねえだろうが！ ふざけやがって、勝手に救いの定義を決めつけて1人で満足するっていうなら」

眼前にいる敵をにらみつける。

「そのふざけた幻想は、今すぐここでぶち壊す！」

当麻は叫び、テツラの懐へと飛び込む。

その意味は

迫る当麻に対して、テツラはさらに下がっていた。身体能力では当麻の方が上のようなだが、足元に散らばっている瓦礫などが進行を妨げ、両者の移動速度はほぼ同じだ。

これでは、いつまでたつても追いつくことができない。

床に会った駆動鎧バードスリットの弾丸を足の裏が捉えたが、無視してさらに強く踏みつけた。

そして、足元にあった物を前方へ思い切り蹴飛ばす。

床の上を滑って行った五和の海上用戦闘フリウリスピア銃は、対隔壁用ショットガンの銃身に激突してその軌道が曲がる。それは、テツラの足首に襲いかかった。

「ッー」

テツラはそれをギロチンで床に叩き付けた。

足を少し動かせば避けられたのにも関わらず、わざわざギロチンを選んだのだ。

(やっぱり)

当麻はその間に、さらにテツラとの距離を縮める。

(左方のテツラは強くなかない)

テツラ自身にもとから強大な力があれば、『優先順位を入れ替える』という術式は必要ない。本当の意味での強者とは、そのようなことをしなくても最初から頂点に立ち続けることができるのだから。

(安全地帯に隠れて強いように見せているだけの野郎が、実際にこの足で戦場に立っている俺や五和、駿斗よりも強いわけがねえだろうが！)

槍をギロチンで地面に叩き付けたテツラは、「優先する」と呟くと返す刀で当麻に向けてギロチンを振るう。だが、その攻撃は右手に防がれた。

「遅っせえんだよー」

彼の拳が、テツラの顔面を捉えた。

しかし、彼はまだ倒れない。

「キ、サマ……異教のクソ猿がああああ！」

怒声と共に『神の右席』に力が戻る。

靴底が床をすべる音がした。テツラは倒れている駆動鎧に足をひっかけてバランスを崩しているが、そのままギロチンを横に振るおうとする。

それは当麻の腹に向けて突き出された。

「優先する。——人体を下位に、小麦粉を上位に！」

右手でガードするのは間に合わない。左手では防ぎきれない。だから、当麻は足を動かした。足元の対隔壁用ショットガンを踏みつける。瓦礫によって斜めに傾いていたショットガンは、当麻の足に踏まれることよってシーソーのようにその銃身をまっすぐに起こす。

「甘いんですがねえ！」

だがテツラは焦らなかつた。

ショットガンは駆動鎧用のものだ。人間用の物とはサイズが全く異なるそれは、簡単につかんで構えることなどできない。仮に当麻がそれを試みたとしても、引き金が引かれるよりも早くテツラのギロチンが彼の体を引き裂くだろう。

起死回生の手は通じない。ショットガンごと、当麻の体に白い刃が突き刺さる。

ズドッ！ というすさまじい音が教皇庁宮殿に響き渡った。

赤い血が舞った。

「なっ……」

息をのむ音。だが、それは当麻の口から洩れたものではない。

テツラが目の前の光景に驚愕し、思わず口から出たものだ。

そう。『優先』の魔術によって強化された一撃は、当麻の体を真つ二つにできなかつたのだから。

当麻はニヤリと笑うと、腹に突き刺さったギロチンを右手で握りしめる。小麦粉の刃物は簡単に砕けた。そして、左手の『硬化手袋』フリックグロープからワイヤーを射出して、テツラの首に絡める。

テツラはもう、彼の拳の射程圏内に捕らえられた。

「何だ、このふざけた結果は……幻想殺しは右手にしか適用されない

はず。何が起きた。異教の猿が、まさかすでにその力には——」

「そんなもんじゃねえよ」

混乱するテツラに、当麻は拳を握りしめて告げる。

「今のは幻想殺イマジナルブレイカーしとは関係ねえ」

「ならっ……！」

テツラが叫ぶよりも早く、当麻が動く。

「答えると思うか」

テツラの体が床に投げ出される。

——決着がついた。

「ぐっ……」

それを見届けた当麻は痛む腹を押さえながら、足に力を入れて踏みとどまった。さすがに、最後の二撃で横腹に加わった衝撃は大きかった。

(どうにか、助かった……か)

当麻は床に散乱している五和の槍やショットガンを眺める。そのショットガンが衝撃で歪められているのを確認するとぞつとしたが、それでも安堵の息を漏らした。

テツラの最期の二撃は『上条当麻の体よりもギロチンの威力を優先する』とされていた。普通なら真つ二つにされている当麻だが、その間に挟んだショットガンに遮られたために、凌ぐことができたのだ。

『光の処刑』は確かに強力な術式だが、その『優先順位』は1種類の項目にしか適用されない。つまり、『上条当麻の体よりもギロチンの威力を優先する』時には、『上条当麻の体以外にはギロチンの威力が優先されない』ということになるのだ。

財布など元から柔らかいものは別として、ギロチンの威力は当麻の体を引き裂けない程度の物でしかないことは分かっていた。

ネックだったのはどこまでが『上条当麻の体』に適用されるのか、ということだったが、その直前に蹴りあげた五和の槍によって、蹴り飛ばす程度の接触なら『他人の持ち物』として扱われることが分かった。もしも当麻がああ槍を普段から持ち歩いていたら、当麻は槍ごと真つ二つにされていただろう。

当麻は床に転がっているテツラを見る。術が解除されたのか、周囲にギロチンの形状から崩れた小麦粉が散らばっていた。

(どうにか、終わったな……五和は大丈夫か。駿斗は『十二使徒』とまだ戦っているのか。土御門もまだ駆動鎧と戦っているのかもしれない……)

彼に近づくと、その懐から筒状に丸められた古い羊皮紙が転がり出ているのを発見する。

Document of Constantine——通称『C文書』。

今回のデモを中心とした騒乱の中心となった霊装だ。

当麻は体がかがめてそれを掴もうと右手を伸ばす。だが掴む前に、まるで燃え尽きて灰となったものがしばらくの間その形状を保っていただけであるかのように、砂の城よりも簡単に崩れた。

拍子抜けするほどだった。あまりにも呆気なかった。

粉末が風に乗って飛ばされて行くのを見届けると、今度は今まで戦っていた敵について考える。

ここは学園都市ではないから、今までのように後始末を学園都市に任せることはできない。できれば『十二使徒』とまだ戦っているかもしれない駿斗の方へ応援に行きたい当麻だったが、テツラを拘束して、しかるべきところへ預けなければ安心できないのだ。

(そういえば、土御門の奴は大丈夫なのか。あいつと連絡して、とりあえずイギリス清教の方とかけあうかな。なんとなくだけど、ここだと学園都市の影響って少ないような気がするし……)

一応アビニヨンへ強襲してきた駆動鎧も学園都市製なのであるが、第一印象が最悪だったためか彼らと相談するという選択肢は思い浮かばなかった。

当麻は周囲を見渡すと、少し離れたところに倒れている五和の下に近づいて行く。肩を掴んで揺さぶってみると、呼吸は確認できたが反応はなかった。

「そうだ、こいつの槍……」

自分が蹴とばした槍を拾うと、彼女の隣にそつと置いた。

「ありがとう、五和。お前がここにいなかったら、多分俺は勝てなかったと思う」

彼女は気を失っていたため、駿斗が侮辱されたことについては五和に聞かれなかった。

それでいいと当麻は思った。駿斗の事情は、学園都市ではある程度の確率で存在するとはいえ、そんなに言いふらして良いものではない。

それに、と当麻は考える。

『俺が置き去りであることと、チャイルドエラー幻想創造を持つていることは何か関連があるかもしれない……最近はそのように邪推してしまうんだ。例えば、もしも仮に俺の親が魔術に関わっていたら、そんな力を持っている自分の子供がどうなるかなんて分かってしまいうんじやないのかな』

9月のいつだったか、駿斗が言っていた言葉を思い出す。

駿斗の履歴について分かっているのは、少しだけだ。

当麻と同じ中学に通っていたこと、小学校よりも以前から学園都市に預けられ、置き去りにされたために施設で生活していたこと。その程度だ。

親のことは名前はおろか、どのような話をしたかすら思っていない始末である。

(……いくらなんでも、不自然すぎないか?)

当麻は思う。

幼稚園のことであっても、親の顔を少しくらいは覚えているものではないだろうか。

だが思考を中断して、とにかく土御門と連絡を取ろうとポケットに手を入れた。しかし携帯電話がない。辺りを見ると落ちていたのでそれを手に取る。液晶が砕けて、何も見えなくなっていた。

くそ、と吐き捨てた当麻であったが、後ろから発生した物音に反応して振り向く。

テッラは倒れたままだったが、その腕の位置が移動していた。恐らくは、起き上がるだけの力がまだなかったのだろう。

「なるほど。確かに幻想殺しは我々とは相性が悪い。何でもかんでも無効化してくれて、全く自分たちの努力を否定されているような気分ですよ」

床に転がったテツラが、当麻を忌々しげににらみつける。

「尋ねないのですか」

「何を」

「幻想殺し。そして、幻想創造について」

その2つの単語がテツラの口から再び出てきたことで、当麻の動きがわずかに止まった。

これまで当たり前前のように使ってきて、しかし原理も正体も正確なところは何も分かっていない、使い方がある程度判明しているだけのこの力。

テツラがこの力の正体を知っているということは、これはやはり魔術サイドのものなのか。しかし、10万3000冊の魔導書図書館、インデックスはこの2つの正体を知っている感じではない。

「知っているのか」

「くっくっ」

その言葉を聞いたテツラが、酷薄に笑う。

「そこで私に確認を取るということは、本当に彼に教えてくれる人はいなかったようですねー。そうですね、まずはその幻想殺しイマジンプレイカーが、なぜあなたの『右手』に宿っているのかを考えてみてください。幻想創造についても同様で良いでしょう。そこには大きな答えが隠されている。あらゆる魔術を問答無用で打ち消し、あらゆる魔術を自在に生み出し行使するというその効力にも、意味があるんですがね……」

当麻は黙って、笑うテツラの言葉の続きを待った。

「簡単なことですよ」

テツラの薄く息を吐く音が、当麻の耳にやけに大きく響いた。そして、その唇から決定的な言葉が紡がれる。

「まず、幻想殺しの正体は——」

その時、ゴッ！ という轟音と共に、天井を突き破って降り注いだ

オレンジ色の閃光が左方のテツラの体を爆発させた。

当麻の体だけではなく、周囲に転がっていた五和の体や駆動鎧までもが吹き飛ばされた。

「ぐあああああ!?!」

床に叩き付けられた当麻が絶叫する。腕の辺りからジリジリとした痛みがあった。これは、外傷による痛みではない。日焼けの感覚に似ていた。

(な、何が……)

爆破地点へ視線を移した当麻の顔が強張った。先ほどまでテツラが倒れていた場所が溶岩と化していたからだ。大穴の開いた天井からも、オレンジ色のものがドロツ、と垂れている。

窓の外には、黒い影が見えた。

爆撃機だ。

「テツラ……」

当麻はその熱気の立ち込める中に近づくこともままならないまま、敵だった男の名前を呼んだ。

「テツラああああー!」

——再度爆破されたその場所からは、左方のテツラは遺体すらも残さずに消えた。

その衝撃で五和は目を覚ました。

すぐそばに壁があることに気が付く。自分は部屋の中央辺りで気を失ったはずだが、そこまで転がされたようだ。すぐそばには槍もある。あの少年が、持ってきてくれたのだろうか。

重い体を動かして、その槍を手に取る。体に熱があるような気がする。

しかし、次の瞬間それが間違いであることに気が付いた。

前方。

十数メートル先からその場所は溶岩の海と化していた。

「な、にが……う？」

視界が白い蒸気に覆われていた。しかし周囲を観察すると、周辺に散らばっている駆動鎧と、そして幻想殺しの少年が見つかった。近づいてみると、少年の肌には赤みが差している。火照っているのではなく、軽い火傷を負っているようだ。

この程度なら痕は残らないと判断した五和は、得意ではない氷の魔術を使うのはやめておしぼりを彼の腕に押し当てた。

(左方のテツラは……う?)

五和はぼんやりと考えた。

そもそもさっきまで気を失っていた彼女は、C文書がどうなったのかも、どうしてこんな惨状になったのかも、分からないままであった。自分たちは勝ったのか、それとも負けたのか……それすらも判断できない。

少年は重傷を負っているようには見えないので、彼が意識を戻してから話をしてもらった方が良さそうだ。あるいは、もう1人の少年が『十二使徒』との戦いを終えてこちらに来るかもしれない。

彼女はテツラとの戦いの途中で気を失い、残りをこの少年に押し付けてしまった不甲斐なさをそっと噛みしめた。しかし、その時声がした。

「チツ、何だか面倒臭エことになってンなア」

突然聞こえた声に、五和の全身が強張った。彼女は慌てて槍を構える。

これは左方のテツラの声ではない。しかし、声の聞こえてきた方向が異常だった。

前方だ。その溶岩の中、立ち込める蒸気の中に1つの人影が平然と立っていた。その蒸気だけでも100度を超えているであろう、その中心部に。

相手は無線か携帯電話で誰かと話をしているようだ。彼は五和の方を振り向きもしていない。

それで良い、と五和は思った。

槍を握った手から嫌な汗が噴き出る。

あそこに立っている人影は別格だ、ということも自然と五和は理解していた。奇蹟が起きれば勝てるかもしれないとか、そういう段階を軽く超えている。それは巨大な鉄の塊に細い槍を振るう感覚を思い起こさせた。

「二応この辺を洗って死体を捜してはみるけどよ。ああ？ 機能停止した駆動鎧の回収だ？ そんなもんは雑用係に押し付けちまえよ。フランスにも学園都市協力派の組織や機関ぐらいいあるだろオがよ」

そこで通話が途切れたのか、声が聞こえなくなった。そして、その人影は蒸気の奥へと消えていく。

五和は声をかけることなどできなかつた。むしろ、去って行ったことに、それで良い、とさえ思う。追いかけることなど、できるはずもなかつたのだ。

駿斗から声をかけられるまで、五和は緊張で体を動かさなかつた。

処刑塔の尋問室で、ステイルとアニエーゼはリドヴィアから話を聞いていた。どうやら、ビアーゾは最後まで非協力的な立場を崩すつもりはないらしく、一言も口を利かなかつた。

「十字教では『神の子』の死後に『神』は現れませんが」

リドヴィアの声が、狭い尋問室に響く。

「代わりに、その手足として動いている『天使』はかなりの頻度で人前に出現します」

天使と悪魔で大戦争を起こしていた、だとか、ある神学者が9つのグループに分けた、といったことから考えても、天使の総数はかなりのものになるのかもしれない。しかし、そのように『天使』が人前に現れるのであれば……『神』もまた、人の前に現れていないのではなく天使のふりをしてこっそり人間と接触しているのではないか。

そのように考え、『天使の中に紛れ込んだ何者か』の影を追いかけているのが『神の右席』だという。

十字教以外の神話では、神が別のもの……人間と同等か、あるいは下位のものに化けて地上へやってくる話は珍しくない。たとえば、ギリシア神話で主神ゼウスは、白鳥の姿に化けて王妃レーダーの前に現れた。

そのあたりの思想が混じっているのか、とステイルは考える。

「……それが『神の右席』という名前とどうつながる？ 確か君の話だと、『神の右席』は組織名であると同時に最終目標であるということだったけれど」

「人間は神にはなれません」

リドヴィアは直接質問には答えず、それまでの話を続けた。

そういう術があるらしい、という仮説は存在するが、実践されたとの報告までにはいかない。しかし、そのかい段階、つまり『天使』までなら、極めて稀ではあるが錬金術などで一部報告が挙げられている。

「彼らは人間を縛り付ける『原罪』を消去したうえで、『天使』となるための法を求めています。しかも、それはただの『天使』ではありませんので」

すなわち、『天使』の中に紛れ込んだ真の『神』たる個体。神の力を認めるだけではなく、その力をもぎ取ろうとする傲慢な意思がそこには現れている。

「……立派な異端宗派だな」

ステイルは口の端を歪めて笑った。

「今の所、彼らは天使の中でも最大級の力を持ち、『光を掲げる者』の対として生み出された個体『神の如き者』に狙いを定めています」

『光を掲げる者』は唯一神の『右側』——『対等』を意味するその場所に座ることを認められた個体だ。そして、その『光を掲げる者』が墮天使の長として反乱を起こした時、それを一撃で打ち倒したのは『神の如き者』であった。

しかし、なぜそうなっている？

本来、神が唯一の存在というのであれば、『対等』を意味するその場所には誰も座らせないはずだ。ましてや、神の下僕として生み出され

た天使になど、その座を与えるとは考えにくい。

にも拘らず、そこに天使長を置いておくとのことには、何か特別な意味がある——そう考えているのだろう。

「彼らは『神の右席』に座ることを目的とした集団です」

そして、その場所を得た彼らはその力を持って天使からさらに別の存在へと進化できる……そう信じているらしい。

その名は。

「La persona superiore a Dio」

——神上、とそう呼ぶらしいです。

その言葉にステイルとアニーゼは、それぞれ眉をひそめた。

だが、まだ聞くべきことはあったので、尋問を続ける。

「では、『十二使徒』は？ 『神の右席』とどう繋がりがある？」

「先ほども言ったように、『神の右席』は人間用の術式を使えません」

リドヴィアの声は平坦なままだ。

「そのため、何か儀式などを行うことには不都合が生じるのですよ。何しろ、扱える『天使の力』の属性すらそれによって制限されてしまいますからね。ですから、その代わりをするための人員が必要になつたわけです」

そして生み出されたのが『十二使徒』。

「だが、ただの人間の寄せ集め……というわけではないのだろうか？」

ステイルが言った。

「ええ」

リドヴィアはそれに首肯する。

「彼らもまた、特定の『素養』を持った人間たちです。『十二使徒』のための、ね」

「素養？」

「簡単に言えば、偶像崇拝の理論を利用しています」

例えば、『聖人』というのは『神の子』と身体的特徴の一部が似通っているために偶像崇拝の理論によって大きな『力』を持つことに成功した人間である。

だったら、同じように『十二使徒』に似通った身体的特徴を持たせ

てしまえば良い。

「神の子と異なり、十二使徒は処女から生まれたわけでもなく、普通に生まれた存在です。そのため、彼らはその後に力を授けられたと言っても良いでしょう。そういった点からも、『神の右席』よりも選ぶのが簡単だったわけです」

簡単に言うが、そのためにどれほどの魔術が使われたのであろうか。

「したがって、彼らも『聖人』……とまではいかずとも、並の魔術師では太刀打ちできない力を持っています。司教程度では、話にならないほどにはね。術的素養も上がっておりますが、さすがに天使の術式までは扱えません。さしずめ、その真似事を行うのが精いっぱいでしょう」

逆に言えば、天使の術式の劣化版までなら扱えるということである。

1人や2人ならまだしもそれが12人揃うとなると、『聖人』でも勝つことは難しいだろう。

ステイルはそのことを考えながら、新しい煙草に火をつけた。

暗部抗争編 Forceps 独立記念日の始まり

10月9日は学園都市内部に限り、『独立記念日』のために祝日となる。

この日、神谷駿斗は第七学区コンサートホール前広場にやってきていた。

彼の親友もついて来ようとしたのだが、『宿題』と『補習』、この2つに追われているおかげで結局やってきていない。

また、彼の側には幼馴染である2人の少女も控えていた。

彼ら3人が遊びに出かけるときは大抵がアミューズメント施設が集中した第六学区か、繁華街のある第十五学区、あるいは商業区画となっている第十六学区なのであるが、この日は異なっていた。

その理由は、彼らの目の前で演説をしている1人の女性にあった。

おやふねもなか
親船最中。

この学園都市を12人で治めている重鎮、統括理事会の1人である。

「……つか、仮にも統括理事会の野外公演なのに、こんなに杜撰な警備でいいのかよ」

そう呟いたのは黑夜海鳥だ。

過去には『闇』の中でも有名な『暗闇の五月計画』という非人道的な実験によって、絹旗最愛と同様に精神の一部と引き換えにその能力を無理矢理に強化された大能力者^{レベル4}——という経緯を持つが、今は『表』の学生として名門、常盤台に通っている中学1年生である。

「全く、警戒する気は超ないみたいですね。あの服装を見れば、防弾装備がないのが超まるわかりですし」

黑夜の言葉に答えるようにため息をついたのは、絹旗最愛。『攻撃性』に特化した海鳥の能力、ボンバーランス 窒素爆槍^{ボンバーランス}に対し、『防御性』に特化したオフエンスアーマー 窒素装甲^{オフエンスアーマー}という能力を持つ。

「はあ……あの様子を見てそんな感想を漏らすのは、お前らくらい

だつっーの」

駿斗はそう答えた。

祝日ということもあつてか、彼らの周囲には同じような人が多くいた。ざっと見渡しても、2、300人はいらるだろう。

それだけ、彼女には人気があるのだった。

「親船最中……確か、学園都市の子供たちに選挙権を超与えようとしているんでしたっけ？」

「ああ」

最愛の言葉に、駿斗は首肯する。

「この街の住民の大半は未成年だ。したがって、参政権の最たるものである選挙権を有している人間はそれ以下ということ。大人の都合で明日から消費税を30%に引き上げますなんて言われても、子供たちは反論ができない。だから、それを与えようとしているらしい」

『外』の世界なら学生に選挙権を与えるなど考えられないことなのだろうが、こういった発想が出てくること自体、この学園都市の独自性を示しているのだろう。

「ま、他の統括理事会クン野郎どもにとっては、分かりやすい『目の上のたんこぶ』なんだろうな」

海鳥はそんな感想を漏らした。

「まあ、歴史を見る限り、例えば子供に選挙権が与えられたところですぐに変革が起きるわけじゃない。きっかけはしよせんきつかけだ。俺たちの意識が変わって、積極的に世の中を変えようとしないう限り、この街は変わらないだろうな」

駿斗がそう言った。

彼も学校で日本史や世界史は習っている。だがそれらの内容を思い起こす限り、そんなに簡単に世の中が変わったことはなかったはずだ。

だから、自分たちの意識も改める必要がある。

(まあ、この街には変わってほしいことがたくさんあるからな)

駿斗は2人の幼馴染を見つめながら思う。

大切な2人の少女がかつて受けていた苦しみを、誰かに繰り返させ

るわけにはいかないから。

しかしその時、見覚えのあるAIM拡散力場を4つ感じ取った。これは、最愛や海鳥のものではない。

駿斗はまず周囲に目を走らせる。

すると、後ろの方に白髪と金髪の2人の男が身を潜めているのを発見した。

「おい、最愛、海鳥」

駿斗が小声で後方へ注意を促すと、彼女たちもその視線の先をたどった。

「(一方通行?^{アクセラレータ} どうしてあんなやつがこんな場所に超いるんでしょう?)」

「(分からねえよ。それだけじゃない、あっちだ)」

今度は駿斗が2人の少女を指した。10歳くらいのアホ毛と白衣が特徴的な少女と、頭に大量の花飾りをつけた少女が手をつないで歩いている。

「……面倒なことが起こりそうな気がしねえか?」

「駿斗兄ちゃんは、いつから上条の不幸体質がうつったんだよ」

海鳥は呆れたような表情で駿斗を見るが、彼はそれを苦笑いをしながら受け流した。

「とにかく、初春さんに声をかけようぜ」

「そうですね、ちよつと行ってきます」

最愛は後ろから彼女たちに近づくと、声をかける。

「初春」

「はい……つて絹旗さん?」

初春飾利は思いがけない場所で出会った友人を見て、驚いた表情を見せる。

「で、久しぶりですね、^{ラストオーダー}打ち止め」

「久しぶり! つてミサカはミサカは最愛お姉ちゃんに勢いよく抱き付いてみたり!」

最愛に飛びつく打ち止め。その後ろから、駿斗と海鳥も声をかける。

「どうした？ 一方通行と一緒にいるんじゃないのかよ」

「あの人がどこかに行っちゃったから、このお姉ちゃんに探すのを手伝ってもらっていたの、ってミサカはミサカはヒーローさんに報告してみる」

「ヒーローさんはよしてくれ……」

駿斗が苦笑いをしながら、打ち止めと話した。

その様子を見た初春が言う。

「あれ、神谷さんたちはアホ毛ちゃんと知り合いだったんですか？」

「ああ、まあな……」

駿斗は適当に答えつつも、少し焦っていた。

この状況は少しまずい。

なぜなら、この打ち止めという奇怪な名前の少女は、彼らの共通の知人である第3位の超能力者、御坂美琴の能力、超電磁砲レベルガンを増産するための軍用クローンである妹達シスターズであり、この少女はその中でも司令塔的な役割を果たしているのだ。

さらに言えばこの妹達というのはその存在だけでも国際法違反であるにもかかわらず、この春から夏にかけては『絶対能力進化計画』レベル6シフトというふざけた実験によって、全2万2体（プロトタイプ0号のドリー+2万+打ち止め）のうちの10031人が、今この場にいる一方通行によって殺されていたりもする。

絶対に彼女に関わらせてはいけないのだ。

その時、ベコン、という金属がへこむような音が耳についた。辺りの喧騒に誤魔化されそうになるが、駿斗の耳にははつきりと聞こえた。

「なあ、4人とも。今何か……そうだな、金属の鍋の底がへこむような音が聞こえなかったか？」

駿斗が訊く。

「え？ 私には特に……」

初春はそう言うが、最愛と海鳥は険しい表情をしていた。

「駿斗兄ちゃん。あの空気清浄機です」

最愛が指さした場所を見ると、最新式の機械の横に、親指ほどの穴

が開いていた。

「あれは恐らく『妨害気流』ウインドディフェンスだったんでしょ」

「『妨害気流』？」

「遠距離から狙撃されなかったための対策だよ。乱数で発生した強風で、ライフルの球の軌道を捻じ曲げるためのものだ」

最愛と海鳥の解説を聞いた駿斗が、その表情をこわばらせる。

「おい、それって……」

「まずいことになったな。どうする？」

「とりあえず」

防御術式を使おうと、駿斗が動こうとした瞬間だった。

ゴバツ！ と広場の一角にある空気清浄機が爆発した。

「くそ、今度は何だ!？」

周囲から悲鳴が上がる中、駿斗は思わず叫ぶ。初春さんが呆気にとられた後すぐに風紀委員として動こうとするが、それよりも早く護衛の人たちが親船最中を取り囲んだ。

ライフル弾が当たったのか、1人の護衛が倒れる。

「初春さんはとりあえずその子を連れて行け！ この場のことは、他の人に任せろ！」

「混乱している人たちは、私たちがなんとかします！ あとは風紀委員と警備員アンチスキルに超連絡してください！」

駿斗に続いて最愛が叫び、初春は慌てて少女の手をつないで走って行った。

「俺はとりあえず消火する」

「頼みます、駿斗兄ちゃん！」

駿斗は水系の魔術を連続して使用すると、黒い煙と共に炎に包まれている妨害気流を消火する。

「全く、今日も穏やかに生活することはできなさそうだな！」

彼らの休日とは、とんでもない騒ぎから始まったのだった。

暗部組織『グループ』に所属している土御門は、親船の安全が確保されたのを確認すると、すぐに射撃予測地点へと向かった。

ホテルの一室。

だがそこには誰もおらず、しかし状況証拠として窓の一部が四角く切り取られていた。

「チッ」

彼は舌打ちすると、携帯電話で一方通行と連絡を取る。

「回収には失敗した。ただ、砂皿がここで逃げたつてことは、続けて狙撃が行われる可能性は低いな。一応親船の公演は中止させて、警備体制を組み直したうえで移送させてくれ」

きっかけは土御門が潰した『人材派遣』^{マネジメント}であった。その『商品』として取引されたのは腕利きのスナイパーである砂皿緻密。紹介料だけで70万ということから『目玉商品』なのだろう。そして、それと共に用意された武器がMSR—001—磁力狙撃砲。

その途中で『グループ』の構成員の1人である海原光貴（偽名）が襲撃を受けて行方不明という事態が起こったのだが、彼らは簡単にそのメンバーを見捨てた。

だが海原からの報告にあった紙幣の中のICチップを解析すると、出てきたのが砂皿だったという訳だ。また、その過程で海原が変装魔術によってどこかに潜入していることも判明したのだが……。

『こっちは結標から伝言だ。読み取れなかった4枚目のICチップの中身は予想通り、砂皿緻密を雇った連中の名簿だとさ』

「誰だそいつは？」

土御門が言うのと、一方通行は鬱陶しそうな声で答えた。

『——「スクール」』

「何だど？」

『俺たち「グループ」と同じ……学園都市の裏に潜んでいる組織だよ』

昼時になると、彼らは部下がまわしてきたキャンピングカーの中に乗り込んで昼食を取る。ボルトで床に固定された小さなテーブルの

上には、ファーストフード系の食べ物と並んでいた。

しかし、土御門はハンバーガー、一方通行はフライドチキン、結標淡希は地中海にある産地直送ブランドの高級サラダ、と昼飯一つにしても意気投合しない面子である。

「……早死にするわね、貴方達」

男連中の食事を見ながら、1人だけ野菜を食べている結標が言った。

「にゃー、緑黄色野菜だけってのもヘルシーすぎねーかにゃー。肉も野菜も適度に食べてこそ健康体を維持できるのですよ？ 何事も偏りすぎは良くないぜい」

ハンバーガーにかぶりつきながら土御門が言った。

「ハッ。つか肉を食って死ぬってのは幸せじゃねエの？」

最後まで好きなことをして死ぬるんだからよ、と一方通行が結標に話す。

「で、『スクール』って連中については何か分かったのかよ」

『書庫』^{バンク}にアクセスはしてみたけど、名前以外は何も」

機密レベルは『グループ』と同等のようだが、しかしそれ以外の名前も出てきたらしい。

「二つだけじゃないのか」

土御門は、ハンバーガーから肉がこぼれないように抑えながらかぶりつく。

今の処判明しているのは、『グループ』『スクール』『アイテム』『メンバー』『ブロック』の5つ。恐らくは、その全てが『グループ』と同じような少数の人員を寄せ集めて作られた非公式部隊。

「親船最中の狙撃を企てたのは『スクール』。なら人材派遣のマンションを爆破したり護送車を襲撃したのもコイツらなのかしら？ 海原光貴もそこにもぐりこんでいるとか」

「さあな。ただ『スクール』でスパイ活動をしているならサインくらいは出してほしいもんだ。敵だと思ってうっかり潰してしまうかもしれないし」

一方通行は缶コーヒーに口をつけながら、土御門と結標の話を聞いて

ていた。

……それにしても、その『スクール』とやらはどうして親船最中を暗殺しようとしたのだろうか？

そんな疑問が一同の頭に浮かんだが、それを話す余裕はなかった。ビーツ！ という警告の電子音がキャンピングカーの中に響き渡ったからだ。

『き、緊急です！ 今データをそちらに送ります！』

車内スピーカーから、オペレーターを兼ねた運転手の慌てた声が聞こえてくる。そして、運転手と後部の居住区を隔てる壁に設置されたスクリーンに、学園都市の地図が表示された。

「第五学区、ウイルス保管センターだ?!」

学園都市製のコンピュータウイルスを解析し、そのワクチンソフトをつくる施設。そこがハッキングを受けているらしい。

本来ならば警備員が解決するべきであるような事件だが、この『グループ』にその担当が回された時点で彼らには手に負えない規模の物であるのだろう。

「にしても、俺たちが動かなくちゃならねエのかよ。さつき『グループ』と似たような組織は他にもいくつかあるって言っただろ」

「部署が違うんだろ。連中が必ずしも動く保証はないし、その上、その中でも1つは学園都市を裏切っている可能性が高い」

俺たちが動くしかないな、と土御門は言う。

そのウイルス管理センターには未解析のウイルスだけではなく、学園都市の研究機関が意図的に作り上げたものも含まれているらしい。学園都市と『外』の間には技術的な面で2、30年の違いがあるため……例えば学園都市では『時代遅れ』のものであっても、『外』においては最新式のものとなってしまふのだ。

もつとも、そのような圧倒的な技術力の差があるため、学園都市のセキュリティは『外から中へ』よりも『中から外へ』を優先的にガードするようにできている。そのため設備が、

「……外部接続ターミナルか」

インターネットの世界において、学園都市と外をつなぐための施設

である。

その時、通信が入った。

『外部接続ターミナルの緊急遮断を開始……ッ!? 第十三学区、西部ターミナルが応答しません! 遮断確認できず!』

「ハハッ、まあた分かりやすい構図だな!」

その報告を受けた一方通行が大笑いをする。

『グループ』は再び動き出した。

やりたい放題だな、と浜面仕上は思った。

昼時の、第七学区のファミレス。しかし、テーブル席を陣取っている4人の少女は、必ずしもファミレスに注文したものを食べているのではなかった。

「あれ? 今日のシャケ弁と昨日のシャケ弁はなんか違う気がするけど、あれー?」

そう言つて窓際で首を傾げているのは麦野沈利。秋物の、明るい色の半袖コートを着込んだ彼女はストッキングに包まれた足を組み直しながら、外で買ってきたコンビニ弁当を堂々と食べていた。端でびくびくしている小柄なウエイトレスが、あまりにも不憫だ。

変わんねえよ、と浜面は心の中でだけ突っ込む。

「結局さ、サバの缶詰がキてるわけよ。カレーね、カレーが最高」

麦野の隣にいる金髪碧眼の女子高生は、フレンダーセイヴェルン。彼女は缶切りがうまく使えないのか、本来はドアをこじ開けるためのツールであるビニールテープのような爆薬をサバ缶の周りに貼り付けると、電気信管を使って焼き切った。

一方で霧丘愛深きりおかめぐみという、黒髪を横で括ったサイドポニーの少女はサンドイッチを一口ほおぼると、隣に座っている滝壺理后に話しかけた。

「何か、感じる?」

霧丘もジーンズにパーカーというラフな格好をしているのだが、滝壺に至ってはおしゃれ感ゼロの、機能性最優先のジャージ姿である。

「……南南西から信号が来てる……」

——彼女たちは『アイテム』。

『グループ』や『スクール』などと同じく学園都市の非公式組織であり、主な業務は統括理事会を含む『上層部』暴走の阻止である。たった4人でこの街を、ひいては科学サイドを左右させる面子である。

この中でも霧丘と浜面は新入りだ。

しかし正式メンバーの霧丘に対して、浜面は『アイテム』の正式なメンバーではない。以前は路地裏の無能力者レベルが作る組織『スキルアウト』を束ねる一時的なリーダーだったのだが、そこでの作戦が失敗した。そのため今は下部組織の所属……つまりただの下働きで、主な業務は運転手などの雑用だ。

(にしても……女だけの中に1人だけ男がいるというのは何とも居心地が悪いな)

さらに言えば、彼はその少女たちよりも立場が下なのである。あてがわれた座席も一番通路側であり、当然のようにドリンクバーの往復係を命じられていた。

「んでね」

シヤケ弁当を食べ終えた麦野が話を切り出す。

「昼前に統括理事会の1人、親船最中が狙撃された事件があったわよね。あれについて、そろそろこっちも動きたい訳なんだけど」

「つか、結局その情報、私は持ってないよ」

フレンドアが言うと、霧丘も頷いた。その反応を見て、半袖コートの女は下っ端に目をやる。

「浜面。全員のケータイに事件の詳細を転送」

へいへい、と浜面は適当に答えて自分の携帯電話を取り出した。指図されることに文句を言える立場ではない。

「ふむふむ」

『アイテム』の全員が自分の携帯電話で情報を確認する。

すると、画面に出てきたのはネットで落としたエロ動画だった。

その瞬間、『アイテム』の4人はバシンと携帯電話を畳んだ。彼女たちは自分の心の戸締り及び心の地下の核シエルターまでの退避を完了させた。

「違っ、待て！ やり直させろ！ これは何かの間違いなんだツツツ！」

かつては100人以上の不良を束ねていた元リーダー(笑)、浜面仕上は腹から大声を上げて代弁するが、生暖かい視線と共に言葉を贈る。

「浜面……」

「結局、浜面ってキモいんだけど」

「バニーさんが、そんなにいいの？」

「大丈夫だよ、はまづら。私はそんなはまづらを応援してる」

その言葉を一身に受けた浜面は、今度こそ親船最中狙撃未遂事件の情報全員に転送した。

すると、霧丘がいつものゆっくりペースで言葉を発した。

「これって、『スクール』が計画していた、あれでしょ？ あの、スナイパーは。こっちで、始末しなかった？」

「新しく雇ったんだらうね。ま、つまりこっちの『警告』は無視されたって訳かな」

「結局、あの時も『何で親船最中なのか』ってことで論議してなかった？」

フレンドがサバの缶詰の中身をフォークで刺しながら言った。

親船最中という人物は『統括理事会』の中では最も素性が知られており(とは言っても、あまり知らない人も多いが)、そして市民からの人気もある。しかし、その反面で権力・影響力に関して言えばあまり持っていないのだ。

しかし、『スクール』は『アイテム』の『警告』を無視。新たなスナイパーを補充してまで狙撃を実行した。

「親船最中には殺すだけの価値がない。そして目をつけられるリスクを負ってでも、『スクール』は予定を無理に合わせて狙撃を実行した。それはなぜでしょ——ハイ浜面君！」

突然麦野に指名された浜面は、ビクウ！ と肩を震わせた。

(はあ!? どうしてそんなタイミングで『今から面白いこと言つて』的な話の振り方をするんだ!?)

急展開に混乱する浜面。

「え、ええとだな!? ちょっと待て喉まで出かかっているからあと少しで分かるんだ!」

と、勢いだけは良いのだが、結局何も言うことはできず。

そして、『アイテム』の少女たちからは失望のため息が漏れた。

「いやー、浜面……」

「結局、そのうろたえ方がキモいんだって」

「最悪に、キモいよ」

「大丈夫だよ、はまづら。私はそんなキモいと呼ばれ続ける浜面を応援している」

少女たちの口から飛び出す容赦ない攻撃に、浜面は床に屈み込んで動かなくなった。

しかしそんな下つ端のことは全員にスルーされる。

「ま、さつきも言った通り親船最中つてのは暗殺するだけの価値がない。それくらい表裏がないんだよね。にもかかわらず、『スクール』は親船をターゲットに選んだ……これつてさ、親船に価値がないからこそ、親船が選ばれたんじゃないかな」

一見、意味が分からない言葉だが、霧丘はその言葉の続きを言った。「つまり、誰でも良かった、つてこと?」

「そう。とにかく騒ぎを起こせば構わなかったつて訳」

そのため、『できるだけ死んでも影響がなさそうなVIP』……つまり、『もつとも警備が手薄なVIP』が選ばれたのではないか。

麦野は自分の考えを楽しそうに続けた。

「他のVIP……まあ統括理事会だけで考えても、ここ数日で野外公演をする人間なんて他にいなかったわけだしね。潮岸の野郎なんて四六時中駆動鎧パワードスーツを着込んでいるんでしょ。そんな相手に狙撃が成功するはずがない」

だから、『最も狙いやすい相手』が選ばれた。その結果が親船最中の

狙撃未遂。

「……結局、可哀想な親船」

「もしそうなら『スクール』はいつたい何を求めていたのか。私はここで『VIP用安全保障体制』を提唱したい」

人工衛星の価値

12人の統括理事会を始めとして、学園都市にはいくつかのVIP認定された人員・組織が存在する。彼らは普通とは違う警備で守られている他、命の危機に見舞われれば、様々な部署から招集がかけられるはずだ。

つまり、と麦野が言葉を区切った。

「VIPが暗殺されたら、どうなると思う？」

「治療先の病院の、警備の強化とか。特殊な機材や、研究員なんかも召集される。つまり、その混乱に乗じて、『スクール』は行動するつもり」

単純でつまらない手、と霧丘が言った。

確かに『隙』を作ることではできるのかもしれない。しかし、それにしては決定打に欠ける方法だ。もともと警備が厳重な場所——第二十三学区や、『窓のないビル』には特に意味のないことである。元々『襲撃される可能性のある施設』から『その可能性を釣り上げる』のが限界であろう。

「保険、かもしれないわね。『スクール』の連中なら、本気になれば力技でも大抵の施設は突破できるだろうし」

だが、『スクール』はその保険のために潰されたスナイパーを補充したり、親船最中の暗殺を企てたりした。それらの点を鑑みると、かなり神経質に調整された計画のようだ。

つまり、親船最中の暗殺未遂は単なる『保険の1つ』に過ぎず、彼らはこれから本命の『どこか』あるいは『誰か』を襲う予定である——ということだ。

その話を横で聞いていた浜面は、恐る恐る言葉をかける。

「あれ？ ということは、親船暗殺は『未遂』で終わって正解なのか？」
「どっちでもいいんじゃない？」

親船は曲がりなりにも12人しかいないトップの1人。

仮に暗殺が成功すれば、今度は心肺蘇生や検視、解剖のために多くの人員や得体のしれない技術を総動員して対処することになる。

『スクール』は親船暗殺が成功した場合でも失敗した場合でも、どちらでも動ける状況を作つてあるはずだ。つまり、『どちらの状況になつても警備の手薄になる施設』が連中の目的ということになる。

そこまで話した麦野は勢いよく席を立つと、浜面の方を振り向きもせずに口だけで命令する。

「車を探して来て頂戴。すぐに出ることになりそうだし」

その偉そうな物言いに浜面はイラツと来たが、反論などできる立場ではない。それでも、思わず独り言のように呟く。

「くそつ、俺は100人以上のスキルアウトを束ねていた組織のリーダーなんだぞ……」

「そうね。だから何？」

(……ちくしう)

今度は心の中だけに留めた浜面は、先にファミレスを出て車を探すことにした。

そして、路地裏で『調達』しようとしていたのだが、その時麦野のポケットにある携帯端末がピーピーと電子音を鳴らす。

「おい、それ放つておいて良いのか？」

「良いって良いって。私らがやらなくたって、別の誰かが対処してるよ」

麦野はそうは言ったものの、あまりのやかましさにについて電話に出た。そして噛みつくような大声を出す。

「やかましいなバカ！ 応答する気がないことくらい分からないの!?!」

『こいつとききたら！ こつちだつて連絡したくて連絡してるわけじゃないんだつーの!』

別にスピーカーフォンではないのだが、そばで聞いている浜面にも煩き感じられるほどの大音量が流れ出した。相手はいつも通り、『アイテム』に指示を出している『電話の女』である。

『第五学区のウイルス保管センターで緊急事態が発生しているから、アンタらも出動して問題を解決しなさい!』

「えー」

麦野はいかにも面倒くさい、といった様子で不満の声を漏らす。

彼女はやかましく叫ぶ『電話の女』と言葉の応酬を繰り広げていたが、麦野が『スクール』野郎を皆殺しにする」と言うのと相手の反応が変わった。

『ええと、追加でいい？ 最低でも1人に10発は鉛玉をぶち込んであげて？』

「……あのー、つかぬ事をお聞きしますが、管理者のお前は止めるべき場面ですよ？」

『騒ぐな下っ端。「スクール」の連中は前から嫌いだったのよ。この私の頭を悩ませるものは全て地球から消えてしまえば良いのだーっ！』
がはははーっ！ という、とても女の物とは思えない笑い声と共に電話が切れると、麦野は自分の手にある携帯端末を呆れたような表情をしながらポケットに収めた。

あれが組織のまとめ役で良いのか、という呆れ顔をしている。

「ところで浜面、本当にアシは手に入るの？」

浜面はその質問には適当に答えると、路上駐車してある乗用車に近づいた。携帯電話に取り付けたファイバースコープ装置によって鍵穴の形状を確認すると、数本の針金を使うだけであっさりとドアのロックが解除される。

さらに、浜面は運転席に乗り込むと、ハンドル下にあるエンジンキーの鍵穴を調べた。

「はー、便利なスキルだね」

本当に感心しているような声で、助手席に乗り込む麦野。後部座席には霧丘、フレンダ、滝壺の3人が少し窮屈そうに並んでいる。

「行先は？」

浜面が麦野に尋ねると、第十八学区の霧ヶ丘女学院。その近くにある素粒子工学研究所、という答えが返ってきた。

「親船の騒ぎに乗って施設警備の人間が緊急招集されたり機材が運ばれたりって混乱があったのはあそこだけ。それにあわせてガードもかなり手薄になっている」

分かりやすい計画犯罪だよね、と嘲笑する麦野。浜面も思ったこと

を口にした。

「1か所だけって、随分と簡単な構図だな」

「失礼、言い忘れた。数ある中で有益なポイントは1か所だけでし
たって話」

そーかい、と浜面は適当に返す。

「それにしても、素粒子工学？ 仮にそこが本当のターゲットだった
として、『スクール』の連中は何が目的なんだ？」

「さあね、少なくとも親船最中の命よりは重要なんじゃない？ そう
いう訳で、クソ野郎どもの尻拭いツアーにしゅっぱーつ」

あっさりとエンジンを始動させる浜面に、滝壺が声をかけた。

「はまづら、免許持っていたの？」

「必要なのはカードじゃない。技術だ」

適当に浜面は答えて、オートマ車を滑らかに発進させた。言いつけ
通り、彼らを『仕事場』まで運ぶ。

「暇だ……」

そして自分以外誰もいなくなった車内で、浜面は呟いた。盗難車は
今、目的地の近くで路上駐車させてある。

100メートルほど先の四角い建物では、研究所を強襲する『ス
クール』とその迎撃を行う『アイテム』、2つの組織が戦闘を繰り広げ
ているはずだ。

浜面はその方向を見て、建物が半分くらい崩れていることに気が付
いた。

(超能力^{レベル5}、ね)

『アイテム』のリーダー、麦野沈利は学園都市第4位の超能力者だ。こ
の組織に働かされるようになってから初めて彼は超能力者を間近で
見たわけであるが、かつてそれらと敵対する道を選んだ、自分たちの
元リーダーのことを思い出していた。

かつての武装無能力者集団のリーダー駒場利徳は、本当にあれと
戦って勝てると思っていたのだろうか……そして、そのリーダーを
失った彼らは、それでもまだ戦おうとしているのだろうか。

「……チッ」

浜面はつまらなさそうにハンドルを叩く。どちらにしろ、そのスキルアウトからも逃げて能力者の軍門に渡った自分に、何かを語る資格などない。

苛立ちが高まった彼は、気分転換に外に出ることにした。

そこで浜面は目を見張った。

（おおおつ!? ブースタの89年モデルがあるじゃねえか！ 4ドアの帝王って呼ばれている奴だぞ!）

あまり高い車を選ぶことは、『暗部』の活動上目立つことになるのでよろしくない。しかし、それでも彼は興奮を抑えきれずに、ポケットから開錠用のツールを取り出すとグレードの高い、違いの分かる大人なスポーツカーに近づこうとする。

しかし、その時突然後ろから声がかけられた。

「浜面あ!」

「はひい!」

突如として飛んできた声に、浜面は慌ててツールをポケットにしまうと後ろへ振り向いた。

そこにいたのは、緑色のジャージを着た女教師、黄泉川愛穂だった。その上からでも体の凹凸が分かるほどのスタイルであるが、それでもセンスの悪さ丸出しの緑色ジャージを着ているのは、単に彼女が体育教師だからという理由だけではない。

彼女は警備員アンチスキルなのだ。スキルアウトには天敵とも呼べる存在であり、実際に浜面も彼女に補導された経験がある。

「あれー? お前どうしたじゃんよ。確か断崖大学データベースセンターの件で補導されたって聞いていたけど。結局、お前じゃなかったの?」

良かったよかった、などと言っている彼女であるが、この気さくな行為は彼女からの一方的なものだった。「すまない。……惚れたかも」などと過去にのたまった友人はともかく、少なくとも浜面は過去に14回も夜の街にいた自分を留置場にぶち込んだ女に好感を持っているような人間ではない。

何でここにいるんだ、と浜面が忌々しそうに言うと、彼女はそんな

の決まっている、とばかりに件の素粒子工学研究所を指さした。そこから煙も上がっており、いかに下部組織が情報操作をしても目視をされたら誤魔化しきれない。

思わず額に手を当てる浜面だったが、黄泉川は両手を腰に当ててここにことほほ笑んでいる。

「で、先生はいつでもお前の更生を願っているじゃんけど」

「はあ？ 何を言ってる——」

「何で車の鍵穴を覗き込むような中腰じゃんよ。まさかと思うが、こんなところで私に手錠を使わせるつもりじゃないじゃん？」

ギクウ！ と身を縮こませそうになる浜面。しかしこんなところでジ・エンド等は決して許されるわけではないので、彼は慌てて弁明する。

「ち、違うんだ！ 赤ちゃんが！」

赤ちゃんが車内に取り残されて！ という浜面の言葉に、何!? と黄泉川が慌てて車内を覗き込もうとした時だった。

警報装置が作動して、ピリピリピリーツというけたたましい音が辺りに響き渡る。

慌てる黄泉川の横で、素知らぬ顔で口笛を吹き始めた浜面だったが、その時研究所から一台のステーションワゴンが猛スピードで走り去って行った。その後を追うように、麦野が滝壺の首ねっこを掴みながら走って来る。

「浜面！ 下手なナンパしてないでこっち来い！ あのステーションワゴンを追うの！ 早く！」

「せっかくの休日だというのに、学園都市の『闇』は超平常運転……それどころか、むしろこの日を狙って行動を超起こしているみたいですよ」

盗聴をした最愛が言った。

結局あの親船最中の公演中に起きた空気清浄機爆発事故（……に見せかけての狙撃未遂事件）が発生した後、駿斗たちは人知れず消火を

したうえで、混乱している人たちへの対応を警備員と風紀委員ジャッジメントの到着まで初春を手伝っていた。

結局、打ち止めは彼女に預けたままの状態になってしまっているのだが、下手に知らない人物に預けるよりも、まだ友人である初春の方が良いだろう、ということにした。もちろん、御坂にもメールを送信したので、あまり時間がかからないうちに彼女に引き取られるだろうが。

さて、これで問題の1つは解決した……と願いたい訳なのだが。

「しかも、それを表に堂々と出しているってどういうことだよ……」
「えっとー、その親船最中を狙ったスナイパーがどうなったのかは超知りませんけれど、他の組織も色々と超動いているみたいですよ？
外部接続ターミナルが原因不明のハッキングを受けているみたいですし、第十八学区の霧ヶ丘女学院近くにある素粒子工学研究所では、謎の煙が超確認されて火事ではないか、という話ですが、警備員の出勤が不自然に超遅れています」

了解、と駿斗は返す。

何が起こっているのかくらい知っておこう、と思つて情報収集を提案したのは駿斗だったのだが、まさか幼馴染が、『暗部』で得た知識と情報を元にここまでやってくれるとは思わなかったので逆に少し啞然としている。

これがプロか……などと呟きながら、二度と彼女たちには協力の要請などさせるまい、と駿斗は決意していた。

すると、最愛が焦つたような声を出した。

「もう1つ、第二十三学区でクラッキングを超受けている施設があります！……ここは……航空宇宙工学研究所所属、衛星管制センター？」
「人工衛星がクラックされているのか!？」

何やら大がかりなことになったことに、駿斗も口をはさむ。すると、今度は海鳥の顔に焦りが浮かぶ。

「おい、そりやまずいぞ。確か衛星ひこぼしII号には『あれ』が搭載されているはずだ」

「あれ？」

駿斗が聞き返すと、彼女は少しためらった後に答えた。

「……地上攻撃用大口徑レーザー。厳密には白色光波を利用した光学爆撃兵器だが、対象を4000度程度の高温で焼くと同時に、白色光波は紫外線同様に細胞核を破壊するはたらきを持つからな。周囲一帯にいた人は焼死するか、ガンで寿命を縮めるかの2択だ」

それはつまり、クラッキングした犯人は地上の任意の場所をいつでも焼け野原にできる、ということだった。しかも、それは最小で半径5メートルではあるが、最大では半径5キロにも及ぶ照射範囲を持つという。

「……急ぐぞ。衛星管理センターのアンテナさえ破壊できれば、クラッキングは止まるよな?」

「テロでも超起こすつもりですか?」

「ばれないようにやるさ。何、無能力者だったら警備員にそこまで危険視されることもない」

駿斗は電話をつなげると、高速移動術式を使用して駆け出した。

『第二十三学区なんて、一番警備が超厳しいところですが大丈夫ですか?』

「問題ないよ。センサーの類は全て波動干渉で誤魔化せるからな」

監視カメラや赤外線センサーといった類は問題ない。むしろ、今は間に合うかどうかの方が問題であった。

だが、駿斗にしてもその問題は解決済みだ。

「幻想魔弾を展開」

駿斗は射程圏内に目標を収めると、イマジン・コアロッド幻想核杖の先を前方へ向けて魔力を通す。すると、それを中心にライフル銃が形成され、さらには上部に魔方陣が展開された。中心が空洞となっているその魔方陣の中には、衛星管理センターが映し出されている。

幻想魔弾。

オペラで有名な『魔弾の射手』をメインとして、他にも主神の槍やグングニル雷神の槌、空翔る剣などの伝承に共通する『射程距離』、豊穰神フレイの剣などをモチーフにした『命中精度』などの要素を取り込んだ、百発百中の狙撃術式となっている。

もつとも、今のままでは威力は大したことないが、アンテナを使い物にならなくする程度であれば問題ない。

「目標を補足。弾道の調整を完了。……発射！」

小さな光の弾が、何キロも離れたアンテナを射抜いた。

「破壊成功。……これでOKか？」

『はい。ハッキングは止まったようですが……』

「ん？ 何だ？」

幼馴染の、イマイチ釈然としない声に駿斗は聞き返す。すると、最愛が言った。

『先ほどまでは焦っていたので、頭から抜けていました。しかし、ひこぼしⅡ号の主な用途は学園都市と周辺地域の監視なんですよ』

「なっ……！」

驚きの声を上げる駿斗に、最愛ははつきりと言った。

『敵に超踊らされた、という訳です。ひよっとしたら、外部から大量に「敵」が超入って来るかもしれません』

一方、駿斗と同じような境遇を一方通行と海原光貴も味わっていた。アクセラレータ

暗部組織『スクール』に襲われたかのように見えた海原であったが、実際に彼を襲い、そして彼が潜入に成功したのは『ブロック』という組織であった。そして、クラッキングをしかけたのも同様だ。

下っ端らしき人物とすり替わった彼であったが、思わぬことにこの『山手』という人物は『ブロック』の中でも主要な人物であつたらしい。「一方通行さん……で合ってますよね。海原です」

今は変装中であるので、普段の声を使用するだけで危険だが、仕方がない。

『悪リイが助けに来いってんなら聞かねえよ。今は衛星へのクラッキングを止める必要があるからな。お前が「スクール」を止めるっつーなら話を聞いてやっても良いが』

『スクール』じゃないんです」

そう、この日に合わせて計画を練っていたのは『スクール』だけではなかった。『ブロック』もまたこの日に合わせて独自の計画を考えており、たまたま日付がかぶっただけであるらしい。

「現状だと、あと20分くらいで『ひこぼしII号』は『ブロック』の手に落ちてしまいます」

恐らくは通常のマニュアル通りに従って衛星の管制を一時凍結しようとするれば、恐らくそれだけで1時間以上かかるはずだ。とてもじゃないが間に合わない。宇宙関連には金がかかることは分かっているが、だからと言って、いざというときに使えない対応マニュアルなど役立たずもいろいろあるところだ。

『ターゲットは』

「第十三学区ですよ」

一方通行は眉をひそめる。あそこには現在外部接続ターミナルの関係で土御門と結標が向かっているはずだが、それ以外には特に意味が感じられない。

『あんな所を狙ったって、外部接続ターミナル以外にロクな施設はないだろオが。幼稚園やら小学校やらが集まっているばかりだぞ』

しかし、海原の回答は予想とは異なっていた。

「ですから、それが狙いなんです」

第十三学区を攻撃すれば、被害者となるのは学園都市の中でも最年少の住民だ。つまり、そんなところへ自分の子供を預けようとする親はいなくなってしまう。

一方であくまでも学生の街である学園都市では、人々はその都市の中に限って就職をするわけではない。いつかは『卒業』していくものなのだ。そのために、新入生がいなくなってしまうえば都市の人口は減るばかりで最後には機能できなくなってしまう。

『……10年単位で、この街をゆっくりと殺していくつもりか』

結局、一方通行が衛星用の地上アンテナを壊すことで話が落ち着くと、海原は通信を切った。しばらくすると、彼ら『ブロック』は第10学区にある雑居ビルに入る。どうやら、ここが『ブロック』の隠れ家の1つとして機能しているらしい。

「……そろそろだな」

リーダーの佐久辰彦が、熊のような巨体を揺らして言った。筋肉質の女性、手塩が彼の前に置いてある阿蘇紺の画面を見ながら、話しかける。

「成功したのか」

「概ねな。ウイルス保管センターをダミーに使ったおかげで、第二十三学区も手薄になった」

力を感じさせる口調で、彼は手塩の方を見ずに独り言のように話す。

「これで、隅から隅までアレイスターの匂いが染み渡った、クソみたいな世界からおさらばできる。こいつは、そのための第一歩、といったところだな」

横でそんな話が進められていくのを見つめる海原は、ちらりと壁に掛けられた時計を確認する。一方通行からの連絡はないため、彼がアンテナを破壊できたのかは分からない。

(……あのパソコンを破壊すれば済む話でしょうが、そうなたら自分の命はないでしょうね)

決断までの猶予がない。その事実には、さらに海原の手に汗がにじむ。

だがその時、佐久が表情を変えた。

「……衛星との通信が切れた。地上アンテナを破壊したな」

その言葉に、海原は思わずキョトンとしてしまった。いくら一方通行でも、早すぎはしないか。

「早すぎないか」

「他の組織の超能力者^{レベル5}か、あるいは第三勢力か。分からねえが、とにかく地上アンテナが破壊されたっていうなら話が早い」

その余裕を持った言葉を聞いて、海原が表情を強張らせた。何か、策があるのだ。一度アンテナを壊されても、何とかなるようなものが。

理解が追い付かない海原の横で、佐久がさらに言った。

「成功だ」

今度こそ。海原の思考が一瞬停止した。

だが、彼は慌てて考える。自分の決定的な勘違いに気が付く。

「俺たちの能力じゃあ、第二十三学区の正面突破は難しかったからな。しかしまあ、地上アンテナを破壊しないことには始まらない。だから、もっと有能な馬鹿に手伝ってもらわなければならない」

「以外に、考えすぎだったのかも、しれない。超能力者は、もうアンテナに、到着している」

ひこぼしⅡ号の攻撃能力は奪われたが、それと同時に監視機能が犠牲になった。そのことを『グループ』に携帯電話で伝えたいが、このタイミングで場所を離れて連絡を取るのには難しい。

手塩が佐久の顔をじろりと見る。

「第十一学区、『外』で待機している連中……本当に使えるんだろうな」
「今回の計画に限れば、ああいった連中のほうが適任だ」

佐久がノートパソコンを下部組織の連中に放り投げた。

「行くぞ。壁の外じゃあ5000人の傭兵たちが待っている」

10月9日、午後1時29分。

学園都市は上空からの監視網を失い、その防衛機能が大幅に低下した。

戦闘開始

無駄に絡んでくる警備員アンチスキルの黄泉川愛穂から逃れた浜面は、一気にアクセルをふかした。

「お、おい。霧丘とフレンドの2人はどうしたんだよ!？」

「あいつらはあのぐらいじゃ死なない。今はあのステーションワゴンが先!」

麦野の声には苛立ちが含まれていた。

ルームミラーを使って見ると、彼女の半そでコートの端は黒く焦げている、頬は殴られたように腫れている。

「何でこんなことになってんだよ、お前。第4位のくせに」

「向こうにも超能力者レベル5がいたの。垣根帝督、第2位のクソツタレがね」
もつとも、一方的に『スクール』にやられたわけではなく、1人のメンバーをつぶしてきたらしい。彼女は戦利品であるのか、ゴツイ機械製のヘッドギアを振る。頭をぐるりと囲むように輪になっているもので、土星の輪を連想させるが、そこには血がべつとりとついていた。

「で、あのステーションワゴンを追ってどうするんだ?」

「乗ってるやつを叩き潰して、積み荷は回収」

聞くと、あのワゴンには『ピンセット』と呼ばれるものが積んであるらしい。超微粒子干渉用吸着式マニピュレータと説明されたが、浜面には理解できなかった。

「つつか、この車で追いつけるんだろうね!？」

「大丈夫」

瘡癩を起こすように叫ぶ麦野に対して答えたのは滝壺だった。後部座席に座っている彼女は、だらりと手足を投げ出している。

「私の『能力追跡』AIMストーカーは一度記録したAIM拡散力場の持ち主を徹底的に追いつける」

能力追跡。

学園都市では非常に希少なAIM拡散力場に干渉する能力であり、例え対象が太陽系よりも外に出してしまったとしても、検索・捕捉する

ことができる優れた能力だ。最も、『体晶』を使用しない限りには『漠然と感じ取る』程度にしか使えないという欠点があるが。

「優秀なナビがついていれば見逃すことはないさ。それよりも、あの車の動きを封じた後はどうするん——」

しかし、すぐ横の道から大型のクレーンが飛び出してきたことにより、浜面の声は途切れた。

「ッー」

ハンドル操作をする余裕も与えられずに、浜面の駆る4ドアの横にクレーン車が激突する。グシャア！ という音を立ててドアがへこんだ。エアバッグが作動するが、横からの衝撃に対して有効とは思えない。

クレーン車の衝突によって横向きのベクトルを加えられた浜面の車は、ガードレールを突き破って歩道に乗り上げると、ビルの壁に激突した。黄色いクレーン車とコンクリートの壁に囲まれた4ドアは、動きを封じられる。

相手は周囲の騒ぎを考えていない。多少『表』に騒ぎが漏れたとしても、ここで浜面達『アイテム』を殺すつもりだ。

「くそ、『スクール』ね。どうしてもあのステーションワゴンを逃がしたいらしい。私らの足止めに出てきたんだ！」

麦野が噛みつくように言うと、クレーン車は10メートルほど後退した。その運転席にはホステスを思わせるようなドレスを着た、14歳ほどの華奢な少女が座っている。

もう一度衝突するつもりか、と身構えた浜面に対して、クレーン車の動きは予想とは異なっていた。つまり、クレーンのアームを伸ばしたのだ。そして、その先に取り付けられているのは金属製のフックではない。

それは、建物を壊すための巨大な鉄球だ。

「ちくしょうー」

麦野がドアから出ようとするが、歪んだ扉は開かない。だから、浜面はフロントガラスを叩き割った。

「フロントガラスから出るんだ！ 早く！」

ボンネットの上に飛び出した彼の後を追うように、倒したシートの上を通って麦野と滝壺が前の席へ回って来る。しかし、その時振り子のように鉄球が放たれた。

麦野は脱出するが滝壺は間に合わない。そのことを感じ取った浜面は、慌てて滝壺の手を掴むと車から引つ張り出す。その直後、轟音が炸裂した。

ボンネット上にいた3人が横からの衝撃で地面に振り落される。浜面は顔を上げようとしたが、その前に麦野に頭を掴まれると地面にたたき伏せられるような状態になった。そして、一拍遅れて乗用車が炎上と共に爆発を引き起こす。

全員生きているのが不思議な状況だった。

しかし、辺りに集まり始めた野次馬などお構いなしに、クレーン車の少女は鉄球を再び操作する。ゴウン、という不気味な響きと共に、それが吊り上げられていった。

「三手に分かれよう」

麦野はそう言った。

「戦わないのかよ、超能力者」

「私の目的はあのステーションワゴンと積み荷の『ピンセット』。雑魚に構って時間稼ぎに付き合うつもりはないからね」

あのクレーン女のチカラは鬱陶しいし、と付け加える彼女。どうやら、麦野は少女の能力を知っているようだ。あの麦野をして鬱陶しい、と言われる時点で、凶悪な能力を保有していることがうかがえた。

車道を横断して細い道に麦野が入っていくと、滝壺も別方向へと去って行った。

彼らから離れるように、浜面もビルとビルとの間にある路地を駆け抜ける。しかし、後ろから湿った足音が聞こえてくると、浜面の額に嫌な汗が流れた。

(やばいぞ、おい！ 俺を追って来やがった！)

浜面の喉が干上がる。あの少女は小柄な体格であったが、『スクール』という組織に所属している時点で強力な戦力となるような人材であろう。浜面はひたすら逃げ続けると、ビルの外側に付けられた金属

製の非常階段を駆け上がった。適当な階で建物に入った。

「どうやらそこは学生寮だったらしい、と入った後で浜面は気が付く。直線的な通路を駆け抜けるが、その時ガチャリと背後で音がした。」

「追いつかれた。」

「少しだけ後ろを振り向いた浜面は、例の小柄な少女の姿を確認する。その手にはレディース用の、小さな拳銃が握られていた。」

「死ぬ!?!」

「浜面は横の壁にあったボタンに手を叩き付ける。鋼鉄でできた暴走能力用のシャッターがギロチンのように落下する。少女が拳銃を発砲すると、浜面は思わず目をつぶったがその弾丸は彼と少女との間を遮っている鋼鉄の壁を貫いてはいなかった。」

「どうやら相手の火力では、このシャッターは破れないらしい。」

「そのことを確認した彼は、世界で一番人を馬鹿にした表情を作ると、両手を上にあげ左右に尻を振りながら「いつひいつひいつひいつひ!」と叫んだ。」

「すると、壁のボタン近くにあるモニターに映されている少女は、拳銃を太股にしまうと今度は後ろへと手を回し、40ミリの小型のグレネード砲を取り出してきた。」

「これ、絶対死んだんじゃないやね? などと思いつながら冷や汗を流す浜面が通路の奥へと走ろうとすると同時、シャッターがその破片をまき散らしながら爆発した。その煽りを受けた彼はノーバウンドで5メートル以上吹き飛ばされる。」

「ぐ、がああっ!?!」

「悲鳴を上げながらも浜面はどうか立ち上がると、壁に手を突きながらよろよろと通路の奥へ。しかしその先はテラスになっており、逆に逃げ場がなくなってしまうた浜面は『3階分の高さダイブ』と『正体不明の「スクール」の少女』から1つ選ばざるを得なくなった。」

「(もちろん3階ダイブに即決定!?)」

「あんなあからさまに強そうな相手は、自分が立ち向かうような相手ではない。小物なりに自分の道を選んだ浜面は、着地地点の確認もせ

ずに宙に身を躍らせた。

「ハハッ！ 負け犬上等オオオオオオ！」

しかし、ここで彼は1つ失敗した。跳ぶことに対して恐怖心を極力抱かないようにするために、着地点を確認してなかったのだ。また、追手のことを考えると確認するだけの余裕が時間的にも精神的にもなかったためでもある。

つまり「くそ、何か下にクッションになるものは——」と確認した時には、自分の着地予想地点に乳母車を押す幸せそうな若奥様がいるのを発見してしまった。

「ぐおおおおお！」

浜面は手足を必死にばたつかせてエアウオークを試みる。その甲斐あって、彼の大柄な体は乳母車の横15センチに足から伝わる鋭い痛みを伴って着地に成功した。

若奥様は口に片手を当ててお上品に驚き、乳母車にいた赤ちゃんは泣くことも忘れて目を丸くしている。すると、若奥様が言った。

「え、ええと……どちらさまでしょう？」

「空から落ちてくる系のヒロインです。ここは危ない、早くお逃げなさいお嬢さん」

爽やかな笑みと共に適当なことを言っ、近くにある路地へと逃げ去る浜面。

一方、標的を失った少女はリーダーに報告する。「ターゲットの男が幼な妻またはベビーカーに偽装しているという可能性はあると思う？」と訊くと、ばーか死ね、という答えが返ってきた。

初春飾利と打ち止めは第七学区の駅のホームにいた。打ち止めは電車は初めてらしく、辺りをうろちよろして危なっかしいので初春は手をつないでいる。

(まったく……なんでわたしがこんなことを)

もともとはタクシーのお釣りを渡した後一度警備員に預けたのであるが、一体どういうスキルを使ったのか、気が付けば打ち止めは詰

め所を抜け出して再び街の雑踏をウロウロしていた。このままでは永遠にそのまま彷徨っていきそうな彼女だったので、初春はこうして迷子探しを手伝っているのである。

途中で一度会った最愛達からは「多分……会うのは超難しいんじゃないですかね。もう警備員に丸投げしてしまった方が良いんじゃないかと思えますよ」との助言を得ていたが、それでも放つてはおけないのが彼女である。

最も、この子1人のために親友の佐天や先輩の固法に頼るわけにもいかないのです、自然と初春が1人で彼女に付き添いながら、打ち止めが検討をつけて歩く後ろについて行く、という形になっていた。幼い少女は一応時折考えるようにしながらも、それでもある程度の見当をつけながら歩いているようだ。

(それにしても、打ち止めてどういう能力なんだろう?)

ちよつと聞いたぐらいでは中身の想像できない呼び名だった。

能力名というのは、その名づけ方からおおまかに分けて2つに分けられる。1つは学校が決める『念動力』テレキネシス『発電能力』エレクトロマスターといったシンブルなもの、そしてもう1つが学生自身が申請を出して決める『超電磁砲』レールガンなどだ。恐らくはこの子も自分で考えて決めたものなのだろう、と初春は適当に想像した。さつき会った最愛達に、聞いてみればよかったのかもしれない。

「なんで電車が来ないの? ってミサカはミサカは首を傾げてみたり」

「貨物列車が通過するみたいですね。というか、迷子はいったいどの辺にいますと考えているのですか?」

彼女はうんうん唸りながらも、何かしらの見当をつけながら歩いている。

「こんなので本当に迷子を見つけれられるのかな、ってミサカはミサカはしょんぼりしてみたり」

「大丈夫ですよ」

「超アバウトな応援ありがとう、ってミサカはミサカは一応お礼を言ってみる」

「そんなあなたのアホ毛に元気が出るように、プレゼントを差し上げます」

初春は頭に大量につけている造花の中から、鮮やかな赤い花を取り出した。

「ええっ！ 頭のお花って自在に取り外せるの、ってミサカはミサカは驚愕を露わにしてみたり！」

「はいこれ。ハイビスカスの花言葉は『まあやってみたまえ』です」

「しかも間違った花言葉を堂々と宣言してるし、ってミサカはミサカは混乱してみる！」

打ち止めの言葉を笑顔で無視する初春。すると、その横をスポーツカーがけたたましいエンジン音を立てながら猛スピードで過ぎ去って行った。

「いったいどこを走っているんでしょうね。警備員もしっかり取り締まってくれないと」

初春は呆れたように言ったが、打ち止めはその横で何やら難しそうにうんうんと唸っていた。

海原のいる第十一学区では、『空白』の20分が始まるうとしていた。

第十一学区は、海に面していない学園都市において、『外』とのつながる手段である『陸』と『空』のうち、『陸』の最大の玄関口として機能する場所である。『ブロック』の周囲にある四角い建物に窓が存在していないのも、その中では大勢の人間が働いているわけではなく、立体駐車場のようになった内部には学園都市製の電気自動車が出荷のために待機しているからだ。

その倉庫街からは、1日に7000トン以上の物資がやり取りされる。

管理が厳重なゲートに比べて、この倉庫街はそこまで警備が厳しくない。そのため、昔の映画において夜の港で密会をするマフィアのように、夜な夜な怪しげな取引がされることも珍しくはなかった。

さらに、海原の注意は倉庫街の奥にある、500メートル以上離れているにもかかわらずその存在感をはつきりと示している巨大な壁に向けられた。その上は万里の長城の如く通路になっており、しかしその上を歩いているのは観光客ではなくドラム缶型の警備ロボットである。

このセキュリティは通常、科学を騙すことができる魔術師でしか乗り越えられない（その侵入を許していることさえも、アレイスターに計算されている……とは思いたくなかった）。しかし、現在は人工衛星による監視が消えたために、警備強度は極端に下がっていた。

あの向こうには、『ブロック』の佐久が呼び寄せた傭兵5000人が待機しているはずだ。

そして『グループ』のメンバーはこれを知らない可能性が高い。上層部でも掴んでいるかどうか疑わしい。『衛星による光学兵器を使った攻撃の阻止』という目先の危機を乗り越えたことで安堵している可能性も高い。

そして、海原にはこの情報を知らせるだけの余裕がない。さらに言えば、この後『ブロック』が傭兵を引き連れてどこに行くつもりなのか、分かっていない。

そんなことを考えていると、不意に声がかけられた。

「山手。心配でも、してるの」

近くにいた手塩恵未^{てしおめぐみ}だった。海原は「別に」と短く答える。本来は最低でも1週間以上かける変装先の相手の調査がないのであるから、モデルとなる人物像がつかめないうちは、発言を控えた方が良い。

幸い、大きな計画に緊張していると思われたのか、その態度については言及してこなかった。

彼らの話によると、『グループ』（正確にはその所属の一方通行^{アクセラレータ}）を使って衛星を潰すことには成功したものの、警備ロボットは依然として残っているらしい。

「問題が、あるのか」

「いいや。あの手のロボットには火器は搭載されちゃあいないし、障害にはならないだろう。タイミングさえ誤らなければ、外壁は乗り越

えられる」

「なんで武装してねえんだ？」

ずっと黙っているのも不自然であるため、海原も会話に加わった。

佐久は海原の眼をちらりと見る。

「理由はいろいろだよ」

外周部を歩いているロボットから放たれた弾が、万が一『外』にいた人間に当たったら大問題になってしまう。また、装弾数が空になっても自分では補給が行えない。

しかし、その一方で警報を鳴らされると、第二十三学区の管制から無人攻撃ヘリ『六枚羽』を呼び寄せることになっているらしい。この間の『迎撃兵器ショー』でも出展された最新型だ。

だが、警備ロボットには充電するための時間が必要だ。駆動組と充電組に分けて稼働させている訳であるが、その交代の間には20分から30分の間が生まれる。

普段であれば、人工衛星が全てを担っているその時間。しかし、今はそれが完全な『空白』になろうとしていた。

「可能な限り、車を用意しておけ。ナンバープレートを付け替えるのも忘れるな。その辺の立体駐車場に止めてある、出荷予定の電気自動車だ。そいつを使って5000人ほど運搬しなくちゃならないからな」

佐久は、『ブロック』の下部組織の連中に指示を出す。

そして、ついに空白の20分が始まった。

(……やるしかない)

海原は懐にある黒曜石のナイフに意識を集中させた。すでに傭兵たちが外壁をロープを使ってよじ登っているのが分かるが、その方向にナイフを向けたところで5000人が4999人になるだけだ。

彼の得意とする魔術、トラウイスマルパンテクウトリの槍は、金星から放たれる光を黒曜石のナイフで反射し、その光が当たった物体を分解するという極めて強力なものだ。しかし、一度にその矛先を向けることができるのは1つのみ。つまり、『どんなに強力な敵でも一撃で葬る』代わりに、『どんなに弱い敵でも1人ずつ攻撃しなくてはなら

ない』のだ。

したがって、より効果的な一撃となる標的を選ばなくてはならない。

『ブロック』の正規メンバーを狙うべきか。確かに指揮を執っている佐久が倒れれば効果はあるだろうが、すでにここまで計画が進んでしまっている以上、リーダーを失った程度で完全に停止するとは考えにくい。代わりの誰かが臨時のリーダーとなって行動を起こすだけだ。（一撃でこの流れを断ち切れるような、そんな攻撃対象は……）

したがって、彼は外壁を上る傭兵たちへ向けていた双眼鏡を顔から外し、一気に視線を別に向ける。

（——そこだー！）

黒曜石のナイフを引き抜き、金星の光が向けられた先は、すぐ近くにある立体駐車場だ。

佐久や手塩は海原が黒曜石のナイフを取り出しても、ポカンとしていた。魔術についての知識がないため、何をやっているのか理解ができなかったのだろう。しかし、海原が突然ビルに向かって走り出したことと、そしてその立体駐車場が何の前触れもなく崩れ始めたことを関連付けるくらいの想像力はあったようだ。

バキン、という音と共に、鉄筋コンクリートでできた立体駐車場の崩壊が始まる。

「なっ、山手エエええええ！」

佐久の叫びが響くが、海原は頭上から降り注ぐコンクリートの中を走った。その破片が銃弾から海原の背中を守る。彼はさらに地面を破壊すると、下水道に飛び込んでその身を守ろうとする。

しかし、あまりにも多くの崩落物は下水道さえも押しつぶしてきた。

「おおおおおおおっ！」

海原は全力で走り、躓いて地面に倒れても横に転がる。

そして立体駐車場の崩落が終わると、海原は天井に空いた光の差し込む穴から顔を出した。

そこには。

HS AFH-11、無人攻撃ヘリ『六枚羽』が第十一学区の空を舞う。

ヘリコプターというものの定義は、縦軸に取り付けられた回転軸ローターによって揚力を生み出し、その翼の角度によって移動する航空機のことである。その定義に従っている以上、『六枚羽』はヘリコプターという分類になっている。

しかし、一般的な感覚からすれば、補助動力として2機のロケットエンジンを搭載し、最高でマッハ2.5に達するそれをヘリコプターと呼んでいいのかどうかは微妙なところだ。

無人攻撃ヘリの演算機能は最初に崩れた立体駐車場を確認し、そしてその次に数百メートル離れた位置にある外壁をよじ登って来る不審人物の集団を認識した。

5000程度の敵に対して、すぐに自動攻撃が開始される。

機銃。大量の地上用攻撃ミサイル。弾丸に刻んだ溝により、空気摩擦を利用して2500度まで熱した超耐熱金属弾、フレイムクラッシュ摩擦弾頭。傭兵の対空ミサイルに対しては、宙に砂鉄をばらまいて高圧電流を流すことで発生した『面』によって命中する前に爆発させ、返す刀で放たれたミサイルが辺り一帯を紅蓮の炎に包み込む。

そんな地獄の最中、駿斗はその現場に到着した。

「学園都市製の戦闘ヘリ……！ こんな強引な方法で『排除』するってのか!？」

駿斗はヘリが無人機であることを見抜くと、身体強化をして後ろからその後部に飛びついた。そして、それを下に誰もいないことを確認してから重力操作グラビティによって地面に叩き付け、その後魔術によって爆破する。

だが、そうなれば今度は傭兵たちが中に入って来る。駿斗は『ブロック』と彼ら（そもそも傭兵であるということも知らない）の正体をよく分かっていたが、今までの情報から恐らく衛星をハッキングした連中だろう、ということを探していた。

そこに駆けつけてきた一方通行アッセラレータが同じように『六枚羽』を壊すのを見て、駿斗は周囲の状況を今一度確認する。そして、ヘリを倒している横で傭兵たちがどこかへ立ち去ろうとしているのを見つけると、堂々とその前に立ちはだかった。

「物騒なやつらを見つけたんだ。そのまま素直に帰るかっつもの」

少年院への襲撃

浜面仕上は路地から大きな通りへ飛び出した。

(と、とりあえず生き延びたか……)

休日を満喫している辺りの少年少女は息を切らしている浜面へ怪訝な目を向けているが、とりあえず襲撃者の眼はなかった。浜面は近くの自動販売機で烏龍茶を買うと、乾ききった喉を潤す。

もはや全てを投げ出してどこかへと旅に出てしまいたい浜面であつたが、その時無情にも携帯電話が鳴り響いた。

画面に表示された『麦野沈利』という文字を見て、浜面はうめき声を上げる。

『よー。電話に出たつてことは、とりあえず生きてるみたいだね。……手錠をかけられて電話を耳に押し付けられている、なんてへまはしていないでしょうね?』

「一応生きているぜ……俺が『当たり前』を引いたんだから、そつちは無事なんだろうけど」

『そりゃぶこ苦労さん。おかげで私は楽ができた。んで、悪いんだけどすぐに戻ってきてくれないかな。下つ端の雑用係に仕事ができたの』
仕事? と嫌そうな顔をした浜面に、麦野はあつさりと言つた。

——死人が出たの。こいつの処分を頼みたいんだけど。

浜面が黒い寝袋とその中身の焼却処分を頼まれてやってきたのは、誰も使っていない廃墟となつたビルだった。その建物の半端な階の真ん中にあるのは、実験動物排気用の電子炉である。3500度近い膨大な熱量をもつてして、動物の死骸と各種最近をまとめて殺菌処分することができる。

「……どうやって電力を引っ張つてきているんだか。コンセントくらいじゃ足りないだろうに」

彼はそんなことを呟くと、大金庫の扉のような蓋を開けて袋を放り込んだ。そして金属蓋を閉めると、事前に調整を済ませている電子炉の着火ボタンを押す。

それだけで、死体はDNA情報すら破壊されてただの灰になった。

寝袋の中身については考えない方がいい——麦野からは事前になんとも言われていた。できるだけ何も考えないようにしたら、本当に顔から表情を消してボタンに指先を当てると、恐怖心によって震えた指がボタンを押してしまった。

ゴウン、という低い音を立てて『処分』が始まるのを見た浜面は、一歩二歩と後ろ下がるとそのまま埃だらけの床に座り込んでしまう。

あの寝袋には誰が入っていたのだろう。

どんな事情を抱えていたのかも、そもそも学生だったのか大人だったのかも知らない相手であるが、それが全て焼かれて消えて行ってしまうことを彼は考えた。

「はまづら」

後ろから声をかけられても、彼はしばらく動けなかった。

「はまづら。どうしたの？」

大能力者⁴の滝壺^{レベル}后と、無能力者^{レベル}の自分。

彼はそのことを考えると、処分を終えた電子炉の灰をかき集める。

そしてその後は、彼女を無視して歩き出した。

「ちくしょう。無能力者^{おれたち}の命^{つて}、いったいいつからこんな安くなっちゃまったんだよ……」

悩んだ結果、結局灰は川に流した。

そんなものはただの自己満足に過ぎないことくらい浜面にも分かっていたのだが、しかしどうしても元は人間だったものを生ゴミの自動処理^{オートメーション}の中に放り込むことはできなかった。

(……最低だな)

滝壺と別れた浜面は、一人で川沿いの道を歩きながら考えた。

彼はあの寝袋の中身に対して同情したわけではない。ただ怖かったのだ。あの寝袋の中身がいつか、自分になってしまっているのではないか、自分もあのようにならざるを得ないかと想像して気持ち悪かったのだ。

「ちくしょう……」

またあいつらの所へ戻らなくちゃならないのかよ。そう叫びたくなるのを応えて歩き出す浜面。しかしその時、おい、と後ろから声をかけられた。

その次に来たのは、頭にかかる衝撃。

地面に倒れた浜面が、笑い声が聞こえた後方に目をやると、見たことない少年たちが3人ほどいた。1人は浜面を殴ったのであろうゴルフクラブを持っている。

空き巣稼業、ということに気が付いた。学生寮から人がいなくなる時間帯を狙った不良グループがいるのだ。

「やっぱそうだけ。こいつ、見た顔だ。第七学区のスキルアウトじゃねえの?」

「あそこは潰れたんじゃないやなかつたつけ」

「事情なんてどうでもいいだろ。ここで潰すんだしさ」

そんなことを話し合いながら、笑い声と共に浜面は四方から蹴りを入れられる。

「知っているかい、スキルアウト。俺たちはついこの間まで生活に苦労していたんだぜ」

「お前らのアタマ……駒場つつたっけか。あいつがなかなか鬱陶しくてさ。ろくに『仕事』もできない状態だったんだ」

「そんなこんなで、テメエの顔を潰して少年Aにするくらいにはムシヤクシヤしてんだわ。分かってもらえたかな?」

それは俺のせいじゃない、と言おうとした浜面の脇腹に、蹴りが入れられた。呼吸困難になった彼の脳裏に、先ほどの灰が川に流れていく光景が浮かぶ。自分もそうやって消されて行くのだということが、無能力者の命の軽さが、頭に来た。

汚い路上に転がっていた鉄パイプを掴む。そして、L字に曲がったそれを勢いよく横に振った。

ゴルフクラブを持っていたクソの足首に直撃すると、ゴキリと骨を砕く感触が手に伝わってきた。絶叫して転がる馬鹿と入れ替わりざまに起き上がり、血まみれの浜面は追撃を加える。

倒れている少年の絶叫を聞いた仲間に1人が、カバンから金槌を取

り出した。

これは死ぬかな、と彼は思った。鉄パイプの破壊力は強力なものだが、一撃で意識を奪えるほどの物ではない。泥沼の『殴り合い』になれば相討ちも考えられる。

しかし、攻撃の手をやめる気は起きなかった。しかし、彼の掌に黒い寝袋の感触が、驚くほど鮮明に浮かんだ。

「こつちだ、浜面―」

すると、金槌を握る少年の首がゴキン！ と真横にはねた。煉瓦のようなものを投げつけられた、と浜面が気が付く前に、彼は誰かに腕を掴まれたまま移動する。

「来い、バカ野郎！ さっさと逃げるんだよ―」

『グループ』は、『ブロック』の手引きで侵入した傭兵の1人を捕まえることに成功した。結局ほとんどの人数は『六枚羽』に殺されてしまったし、その他にも駿斗によつて無力化された上で『外』に物理的に放り出されたために、『ブロック』が現在引き連れている数は当初彼らが予定していた数をはるかに下回る100人ほどになっていた。

第十一学区の倉庫街で海原が自分の集めた情報を公表すると、土御門が捕まえた傭兵に質問した。

「5000人の傭兵をかき集めて、お前たちは一体どこを襲撃しようとしていた？」

「な、何の話だ」

「5000人という大した数に聞こえるが、別にそれだけで学園都市を潰せるって物量でもない。『商売』の内容を言えよ、傭兵。それだけの人数を使ってどんな計画を立てていた？」

傭兵は黙って、『グループ』の4人の顔を順番に見た。

心の中で葛藤していたようだが、この惨状を見て自分たちには既に分が悪い状況であることを知ったのか、彼はゆっくりと口を開く。

「……第十学区だ」

「第十学区？」

あそこは最も土地の値段が安く、実験動物の廃棄場や原子力関連の研究所など、ろくな施設がなかったはずだが……。

「第十学区にある、少年院を襲撃する予定だった」
「っ！」

その言葉に、1人の少女が表情を変えた。

その場所は能力者に対して様々な対策が施されている。確かに、それならば学園都市内の人材よりも『外』から人材を調達した方が成功率も上がるだろう。

結標は傭兵の胸ぐらを掴み上げた。

「何でそんな所を襲撃するのよ……VIPの犯罪者でも助け出すって言うの？」

「俺たちの、目的は……座標移動だ」
ムーブポイント

ピクリ、と結標の眉が動いた。しかし、目の前にいる女の正体を知らない傭兵はそのまま話をつづけた。

あの少年院には座標移動の仲間が入っているという情報を手に入れた。だから、『窓のないビル』の『案内人』である彼女のことを知った『ブロック』は、彼女のことを徹底的に調べ上げて交渉材料を集めることにしたのだ。

物資搬入ルートの情報を掴み、そして外からなら核兵器にも耐える『窓のないビル』を内側から吹き飛ばす。『ブロック』は多層同期爆弾という戦術兵器——学園都市内での使用を前提とした、『極めて小さな標的へ、高位力の爆風を一点集中させて徹底的に破壊する』という、都市部に紛れた敵要塞を民間への被害を最小限に抑えて爆破するために編み出されたもの——の用意がある、と言っていたらしい。
「世界の混乱を収める必要があった。俺は傭兵をやっているから分かる」

この世界には限界が近づいている。そのため、いずれはあちこちで発生する内紛をその前に止める。

しかし、計画に必要な座標移動は仲間として組み込むことは難しいと考えた。

「こっちは協力を得られないことを前提に——」

「そう」

遮るように言った結標は、続けて聞く。

「ところで貴方、今日の前にいるのが誰だか分かってる？」

は？ と一瞬眉をひそめた傭兵は、すぐに顔を青くした。

「う、うそだろ、そんな……！」

しかし彼が何か言い終わるよりも早く、その体に10本近い鉄の杭が突き刺さった。

結標はボロボロになった男の体から手を離すと、ただ俯いたまま奥歯をかみしめていた。そんな彼女に対して言葉をかける人間はいなかった。全員が、同じようなものを抱えているからこそ。

恐らくアレイスターは、こんな状況をも得体のしれない技術を使つて高みの見物を決め込んでいるだろう。手助けなどせず、自分の作った箱庭の中でもがく人間たちを笑っているに違いない。

だけど、それでも。例え自分がどんな『闇』に落とされたとしても、彼らには守るべき人間たちがいる。

「行くぞ」

これは結標の個人的な事情だ。しかし、海原が『ブロック』の中に紛れた時のように『仕事』として窮地を乗り切ろうとするのではない。だから、誰もそのことについて口出しをしなかった。

目指すは第十学区。100人近い傭兵を抱えた『ブロック』のいる少年院は、決して楽観できる状況ではない。

移動用の救急車の中で、土御門が少年院の情報を調べた。

「今の学園都市には反逆罪って罪はない。となると、結標の仲間たちは法的には裁けない状況にある。そんな奴らを普通の房に入れるわけにはいかないんだよな」

「となると……隠し部屋があるということですか？」

海原が結標の方を見るが、彼女は何も知らないようだった。

他にもいくつかデータを見たが、完全な見取り図は機密扱いになっているようだ。しかし、土御門と共に画面を覗いていた一方通行が声を上げた。

「この少年院、消火部門がねエぞ」

このような施設では火事が起こることが少ない。したがって、消防署の人が的確に動けるように見取り図を受け取っている可能性が高い。土御門はクラックの優先を変えた。

「あった。一部の機密区画は塗りつぶされているが、隠し階段があるとなれば構造的にはここしかない」

隠されていることから結標は『ブロック』が手を出せていないことを考えたが、一方通行はその甘い考えを一刀両断した。彼らの権限は『グループ』と同等なのだ。

少年院の警備は、まず看守がパワードスーツ駆動鎧を所持している。しかし、MP S-79という旧式のもので、『ブロック』を押さえつけられるほどの物ではない。しかし、対能力者用の装備はAIMジャマーを始めとして25ほどそろえてあるとのこと。もともと、集中力を散らす程度の物であって完璧に無効化できるわけではないらしい。

だが、下手に使うと暴走を起こしてしまうために、特に複雑な演算を必要とする結標や一方通行の場合は危険だ。

彼らは扉に囲まれていて中が見えない少年院の前に着くと、勢いよく救急車から降りた。その時点で煙の臭いが鼻についた。結標は歯ぎしりする。

そして中へと向かったが、そこで一方通行と土御門が気が付いた。

「音がない」

そう、本来『ブロック』と看守たちが交戦状態にあるならば、銃声くらいあるのが普通のはずだ。

4人が検問を兼ねたゲートをくぐるとそこは囚人護送専用のロータリーであった。そこへ来て一方通行はこめかみの辺りに小さな痛みを覚える。AIMジャマーが働いているのだ。

代理演算を使った能力使用モードは控えた方が良さそうだと考える。

せめて打開策を見つけているために機材を確認しようとした彼であったが、そこで思考を中断した。少年院全体を包んでいる違和感の正体に気が付いたからだ。

死体。

その武器は拳銃、ショットガン、ナイフなど様々であったが、その中で1つだけ、共通する項目を見つけた。

「ここいつら……全員、自分の武器で命を絶つてやがる……」

土御門の呟きを聞いて自殺かと考えた海原だったが、直後にその考えを否定した。

その時。

「見つけたぞ」

背後から聞こえた声に4人が振り返る。するとそこには、赤いセーラー服を着た小柄な少女が立っていた。しかし野の眼光には、単なる殺人者を上回るものを秘めている。

「ここにいるってことは、『ブロック』のクソ野郎か？」

「いいえ。私は『メンバー』。利用しているだけだから、別に所属に興味はないけど」

傷1つ追わずに50人以上の傭兵を撃破した少女は、それを誇示することもなく答える。

一方通行は『メンバー』という言葉聞いて考えた。というのも、衛星のアンテナを破壊するため（結局無駄足になったが）に移動していた時に、『メンバー』の1人である空間移動能力者、キルポイント死角移動の襲撃を受け、撃破していたのだ。

しかし『ブロック』と仲間意識を持っているようには見えない。いまいち目的や敵対関係が見えない組織だ。いずれにしても、敵対する以上は撃破するが。

そんな中、海原は1人だけその少女の顔を見て過敏に反応した。

「まさか、あなたは……」

「今更私に素性を訪ねるのか、エツアリ」

その少女の口から出てきた名前は『海原光貴』ではなかった。あるいは、それが彼の本来の名前なのだろう。

片手で少女が顔を拭うと東洋人らしい風貌は消え去り、浅黒い肌、堀の深い顔立ちをした少女がそこに佇んでいた。

『ブロック』には感謝しないと。能力者の力が半減されるここでも、貴様の『仲間』とやらに邪魔される心配も多少は減るだろうし」

一方、海原はその顔と声を確認してその表情を歪ませる。

「シヨチトルだと」

彼女はかつての仲間。しかし、それでも彼女はこういった汚れ仕事とは無縁のポジションについていたはずだった。

「理由は1つしかない。学園都市へ寝返った裏切り者め。貴様を処分するために、私は全てを捨ててここへ来た」

駿斗はどこかへと移動しようとする傭兵の前に立ちはだかつたものの、半分程度を無力化した時点で残りには逃げられてしまった。するとそこに、彼の幼馴染2人が駆けつける。

「駿斗兄ちゃん。どうやら、第十学区の少年院が何者かに超武力制圧されているようですよ。監視カメラからは、ローテクな武装をしたたくさんの男たちがいましたから、十中八九、例の傭兵たちでしょうね」「少年院？ また、どうしてそんな所を狙ったんだ？」

駿斗は首を傾げる。彼には結標の事情など知らないのです、分からなかったのだ。

すると、海鳥が口を開いた。

「それは知らねえけど、恐らくは重要人物にとって大切な人間が、そこに收容されているんじゃないか？ 暗部じゃあ、私たちがみたいに元から『闇』にいた人間ばかりという訳じゃない。何らかの取引材料で仕事をさせられているやつも少なくないんだ」

取引。

やはり、そのような方法によって暗部というものは成り立っているのか。

「じゃあ、そいつらの目的は、ある重要人物にとって『取引材料』となる仲間が收容されている少年院を……」

「だろうな。それを使って交渉するつもりだ」

くそ、と駿斗は吐き捨てる。

既に行動は決まっていた。

「その重要人物とやらも、黙って見ているとは超思えませんか？」
「すでにそこで戦っているんだったら、手助けをするだけだ」

彼ら3人は時間が惜しいのでタクシーを使った。さすがに暗部が行動しているすぐそばまで一般人を行かせるわけにはいかないので、それよりも数百メートル手前で降りたが。

3人は急いでその場所に向かう。最愛は既にオフエンスアーマー窒素装甲の展開を終えていた。

少年院に踏み込むと、そこに血を流して倒れている人間がいた。

「っ！」

駿斗は彼らが既に死んでいることに気が付くと立ち止まる。そもそも、このような死体を見たのは初めてのことであった。

「……駿斗兄ちゃん」

すると、その様子を見た最愛が言った。

「駿斗兄ちゃんはこのような殺し合いの場には慣れていません。自分の身を超守ることはできるかもしれませんが、それと『戦う』ということは別物です。ですから……」

この少年は、数か月前まで暗部とは無縁の状態だった。だから、彼が自分からその世界に踏み込むとうとする覚悟を持っているのは知っ
ていても、必要以上に踏み込むことはないのではないかと彼女は思
う。

「いや、いいんだ」

しかし、彼女の言葉を駿斗は遮って言う。

「やることは、いつもと同じだ。それに、俺も今まで何も経験してな
かったわけじゃない」

あらゆる幻想をこの世界で創造する。その力をもってしても、死ん
だ人をよみがえらせることはできない。そのことは前から分かって
いるし、妹達のシスターズ一件でその無力さを突きつけられてもいる。

だが、心からしっかりと割り切れるほど、駿斗は世界の裏側に染
まっているわけではない。

自分の無力さをかみしめながら、駿斗は前に進む。すると、そこで

1人の日本人の男が1人の褐色の肌を持つ少女と戦っていた。

女が持っているのは、見たことのない石で造った鋸のような歯を持つ剣だった。そして、男は左手で右手首を掴んでいた。その前には、彼の武器であろう黒いナイフが転がっている。

そして、駿斗は独特の感覚を感じ取った。

魔力。

「……誰が来たかと思えば、イマジン・クリエイト 幻想創造か」

少女は駿斗の顔を見てそう言った。海原は3人を驚きの表情で見ている。

「最愛、海鳥。お前らは周囲を回って他の戦力がないかを確認しておいてくれ」

駿斗は2人に向けて言った。つまり、暗にこう言ったのだ。

この少女の相手をするのは、自分の役目だ、と。

自分もここに残って戦う。そう言おうとした少女たちであったが、彼の真剣な目を見るとそれ以上は踏み込めなくなってしまった。なぜなら、そこには大きな覚悟が見えたから。

この2人を、『魔術』とは関わらせたくない。

だからこそ、駿斗はそれ以外の役割を押し付けることにした。

「……負けたら、超許しませんよ」

「デート、全部奢りで1回な」

りょーかい、と駿斗が苦笑して返事をする、少女たちは去って行った。

「さて、待たせてしまつてすまないな」

「私はその男さえ始末できればそれで良いのだが」

「悪いが、それは承服しかねる。俺がいる場所では誰も人を死なせたくねえし」

駿斗はいつものようにイマジン・コアロッド 幻想核杖を取り出すことができない。彼女の扱う術式の正体に気が付いたからだ。

「武器を使った自滅か。科学の街の内部で人間の文明を否定しやがって」

「貴様にはさすがに分かったか」

その様子を後ろで見ていた海原が言う。

「マクアフテイル……『死体職人』のあなたに、そういう武器は似合いませんよ」

本来のシヨチトルの仕事は、死者のアフターケアであつたらしい。死体の残留情報から、遺言が正しいかどうかの確認をしたり、葬儀の方法をまとめたりといったことが主な仕事の内容であつたようだ。

しかし、彼女は今かつての仲間に向けて武器を振るっている。マクアフテイル。アステカの剣士が使う、鋸のように『引き切る』ようにして使う武器だ。

「なら、そこにいる貴様は貴様らしいのか。『組織』を抜け出し、学園都市で安寧をむさぼっている貴様は」

「シヨチトル……」

「イエスというなら、貴様はやはり裏切り者だ。ノーだというならば、自分を偽る貴様にとやかく言われる筋合いはない」

下手に魔術を放つと、少年院に流れ弾が当たってしまうために威力が高いものは使えない。近距離戦闘に備えて、駿斗は身構えた。

崩壊のはじまり

少年院の運動場では、2人が対峙していた。

アステカの剣、マクアフテイルを握るアステカの魔術師、シヨチトル。

素手の状態で、いつでも能力や魔術を発動できるようにした駿斗。両者は互いに懐へ飛び込むために、同時に駆け出す。

「何!？」

シヨチトルが驚愕の表情を浮かべた。駿斗は武器を持っていない。ならば、少年院への被害には多少目を瞑った上で遠距離から狙撃をした方が、楽に決まっているのに。

しかし、そうしている間にも両者の距離が縮まる。そして、マクアフテイルと駿斗の腕が拮抗した。

そう、拮抗。フォースアーマー念動鎧を纏っていたのだ。

「チッ!」

彼の頭上に輝く魔方陣が出現したのを見たシヨチトルは、すぐに後方に跳ぶ。しかし、その次の瞬間には彼の拳が眼前に迫っていた。

(っ、今のは高速移動用の術式か!)

避けるのは不可能、そう思った彼女は反射的に頭を後ろへ降って威力を殺した。そして、手に持った剣を頭部めがけて振るう。駿斗はそれを屈んで回避するとアッパーカットを繰り返すが、それはやはり回避された。

「喰らえ!」

地面に魔方陣が輝き、そこから杭が飛び出す。それを受けたシヨチトルは宙を舞うが、やはり大したダメージを負っている様子はない。

(衝撃を殺しているわけではない……単純に防御力が強い?)

いや違う、と駿斗は否定した。

(人間のそれと異なる、もう1つの魔力の循環が感じられる)

そのことを感じ取った駿斗は、1つの結論を出した。

「お前……『原典』を持っているな?」

その言葉を聞いた彼女は、フツと笑う。

「さすがに気が付くか。その通りだよ。私たちの魔術結社では、すでに『原典』が実戦投入されている」

「実戦投入ですか!？」

海原が驚いて声を上げた。

「あんなもの、普通の魔術師が御しきれるものではありません！ その上、それを実戦で使用するなど」

「言ったはずだろう、エツアリ。私はお前を殺すために、全てを捨ててここへ来た、と」

焦るような声を上げる海原に対して、シヨチトルの口調は淡々としていた。

「シヨチトル……」

彼は彼女の名前を呟くと、少し目をつぶってからしつかりと見開いた。その眼には覚悟があった。

「神谷さん。あなたは下がっていてください。彼女は……最後くらい私がやります」

「海原、いや、エツアリ……分かった」

駿斗は彼の覚悟を見ると、大人しく下がる。

「増援を断るとは、私たちの組織を裏切ったくせに、学園都市の中で腑抜けたようだな」

シヨチトルは嘲笑するが、海原はまっすぐに彼女を見据えるだけであつた。

そして、シヨチトルがマクアフテイルを持って海原に肉迫する。そして、振り上げた剣を己の敵めがけて振り下ろした。

対し、海原は回避をしなかった。ただ、手首の関節もつながっていない右腕を自分の頭上に突き出したただけだ。それを見たシヨチトルは笑っていた。その程度の防御なら、手首ごと敵を切り殺せると踏んだのだろう。そして、その刃が海原のジャケットを裂き、肉を切る。

しかし、そこまですりこめた。

腕の肉は斬られたもののその中の骨までは斬られることなく、剣はそこで止まっていたのだ。

「な……」

海原は、驚きのあまり動きを止めたシヨチトルの腹に、思い切り蹴りを叩き込んだ。その小さな体が地面に倒され、彼女の手からアステカの剣が離れた。

マクアフテイルが海原の腕を切り裂かなかった理由は簡単だ。あの剣にはそこまで優れた切れ味はない。そもそも、あれは前述したとおり『引き切る』ための剣であつて、日本刀のように『叩き切る』ようなことはできないのだ。

だから、海原は自分の腕で剣を受け止めるといふ暴挙に出た。このままでは失血で追い詰められると判断したためだ。

「命まで奪おうとは思いません。どこへでも消えてください」

その様子を見ていた駿斗は、すぐに彼女の下へ駆け寄つた。『原典』を回収し、彼女を無力化するためだ。

しかしその時、褐色の少女の体が崩れ始めた。

生物学的な腐敗ではない。それはまるで、透明人間の体から包帯を外すような光景だった。指先から始まつたその変化は、あつという間にひじの辺りまで侵食を進めていった。

「シヨチトル……？ これは、一体——！」

「私の体が、限界を迎えただけだ」

その言葉に、2人の男が表情を変えた。

『原典』との融合だ?!? そんな無茶苦茶をやりやがったのか!」

「アステカの儀式では、人の肉を食うことで天国へ届ける……! あなたの肉体を粉末にして散布し、その粉がついた武器は魔術的には『あなたの体の一部』だから、あなたの手足として使用できる」

他人の武器を、自分の肉体の一部とする。それが彼女が使つていた、武器無効化術式の正体だった。

しかし、そんな己の体を削る術式はすぐに破たんしてしまう。常人が霊装などで補助できる領分ではない。だが、アステカには動物の皮に文字を記す『絵文書』という書物が存在しているのだ。

「ぐ、う、アアアあああああッ——」

「エツアリ! これ以上見るな!」

駿斗が絶叫を上げた海原の体を回した。

ほんの数文字。それも凝視したのではなくチラツと視界に入っただけであるにも関わらず、彼には脳が割れそうな痛みが襲い掛かった。常人向けに解釈を求めて純度を薄くした『写本』とは違う、正真正銘の『イマジナクリエイト原典』。

幻想創造を持つ駿斗はそれを相殺できるが、エツアリは一介の魔術師に過ぎない。

(く……描かれているのは『曆石』の派生系か)

しかし、それでも彼は少しだけ得た情報を解析していった。

「彼女からどうやってこいつを引きはがすか……！　俺が所持するベキか？」

駿斗が呟いてシヨチトルに近づこうとする。しかし、その時彼をエツアリが制止した。

「あの魔導書は、私が引き継ぎます……！」

「おい……」

しかし、彼はずんずんと彼女の下へ行ってしまう。

(死なせて、たまるか……)

シヨチトル自身のこと。『組織』のこと。彼女から聞くべきことが、海原には山ほどあった。だからこそ、彼は『原典』を引き継ぐという暴挙に出た。唯一の可能性——『自らの知識を広める者』だけに協力するというその性質を利用するために、彼は魔導書の判断能力を騙す。

シヨチトルが死亡すれば引き継ぎができなくなると判断させる。しかし、その前例はなく、失敗すれば『死』という形で報いることになる。

しかし、海原は迷わなかった。褐色の少女を助けるために、彼は全てを受け入れる。

浜面のピンチを助けたのは、スキルアウト時代の仲間であった半蔵だった。

彼と別れて『アイテム』の隠れ家に移動している浜面は、袖の中に

しまったレディースの拳銃のことを考える。それと共に、先ほどの会話を発した自分の言葉を頭の中で反芻した。

『認めるよ。クソみてえな生活だったが、まだあの頃は楽しかった』
『たとえばスキルアウトに戻ったって、それは「あの頃」じゃねえんだ。そこに価値があるとは思えねえ』

そんなやり取りの後に拳銃を渡された。そのことを考えていると、『アイテム』の隠れ家の1つの到着する。ここは、第三学区にある高層ビルの一角だ。

「遅いよー浜面」

麦野が彼を迎え入れた第一声はそれだった。

ここはスポーツジムやプールなど屋内レジャーだけを集めた施設である。建物に入るだけでも会員証の提示を求められることから、利用者のグレードの高さをうかがわせた。このような形でなければ、浜面など1度も入ることはなかっただろう。上流階級の人々が、まずステータスとして手に入れたいものがこの会員証らしい。

その中でも彼らがいるVIP用のサロンは、『二つ星』以上の会員ランクがなければ借りる資格すら与えられない、年間契約の貸切個室であった。

浜面はそこにいる面子を見て、怪訝そうに尋ねる。

「フレンドはどうしたんだ？」

「消えた」

麦野からはあっさりとした言葉が返ってきた。

「死んだか捕まったか。補充している暇はなさそうだし、いずれにしても『アイテム』は3人でやっていくしかないね」

『スクール』も1人減って3人だから、数はピッタリ合ってる、という麦野。数に入れられていない浜面はわずかに眉をひそめたが、そこに言及しても仕方がないので黙っていた。

「はまづら。怪我してる」

滝壺が浜面の顔を見てそう言うので、何でもねえよ、と彼は答えた。

『スクール』には『ピンセット』を奪われてしまった。その反撃をするために、滝壺の『^{AIM}能力追跡』を使用する。

「検索対象は未元物質データマターでいい?」

「だらりと手足を投げ出している滝壺が言った。

「誰だそりゃ」

「第2位の超能力者レベル5。『スクール』を指揮しているクソ野郎だよ」

「麦野がそう言っている間に、滝壺はポケットから白い粉末の入った小さなケースを取り出した。霧丘は不思議そうな顔でそれを見つめている。

「大変、だね。体晶がないと、能力を、発動できないなんて」

「別に。私にとっては、こっちの方が普通だったから」

「滝壺が白い粉末を少しだけなめると、彼女の眼に光が戻る。そしてそちらのほうに正常であるかのように背筋をぴんと伸ばした。

「A I M拡散力場による検索を開始。近似、類似するA I M拡散力場のピックアップは停止。該当する単一のA I M拡散力場のみを結果報告するものとする。検索終了まで残り5秒」

「機械のように放たれる声の後に、結果は出た。

「結論。『未元物質』はこの建物の中にいる」

「なに!? とその場にいる全員が愕然とする前に、次の動きがあった。

「個室サロンの扉が蹴り破られ、1人の男が入ってきたのだ。

「『未元物質』……!」

「名前と呼んでほしいもんだがな。俺には垣根帝督って名前があるんだからよ」

「その男の手にあるのは、機械でできた奇妙な『爪』だった。

『ピンセット』。素粒子工学研究所で『スクール』が奪ったものだった。

「カッコイイだろ。勝利宣言をしに来たんだぜ」

「ハッ。アレイスターに選ばれなかった『第二候補スベアブラン』にはしゃがれてもさ。ついさっきまで散々逃げ回っていたくせに、態度ががらりと変わってくれたね」

「いやいや。素粒子工学研究所では世話になったし。おかげで4人し

かない『スクール』の正規メンバーの1人を失っちゃった」

「忘れてない？ 少し前にはスナイパーも殺しているはずだけど。交換したんだ？」

2人の超能力者の会話が、そこで途切れた。

原因は霧丘愛深。彼女は懐から取り出したナイフを全力で垣根に向かつて投げる。すると、それに追従するように近くにあった、ごてごてとした装飾のついていて数十キロは重さのありそうなテーブルがものすごい勢いで飛んでいく。

バガン！ という轟音が響いて垣根にテーブルが激突した。

しかし、粉々に砕けたのは垣根ではなく豪華なテーブルだ。

「痛ってえな。そしてムカついた」

矛先を自分に向ける垣根にかまうことなく、彼女は自分が座っていたソファを掴むとそれでソファの壁を叩き壊す。浜面と滝壺の手を引きながら、彼女はその奥へ飛び出して行った。

これが彼女の能力、座標^{セトルポイント}確立であった。自分を中心に半径約40メートル以内にある周囲の物体を、合計質量にもよるが最大で6つまで、自分の体、あるいは近くにある物体に対する相対座標でその位置を固定できる。今ソファを掴んで壁を叩いたのも、怪力であるからではなく、彼女の手に対しソファの座標が固定されているからだ。

「急いで、車を確保して」

霧丘は浜面に向けて言った。

「多分、『スクール』が狙っているのは滝壺だから。彼女の能力を使った追跡を振り切るために、襲撃してきた」

「こいつのサーチ能力が？」

浜面は言った。

確かに、一見すれば見た目の破壊力が高い麦野のほうが優先度が高いように見える。

しかし、滝壺さえ潰してしまえば『アイテム』の活動はかなり制限できる。そのため、彼女1人の存在で『追跡する側』と『追跡される側』が違ってくるのだ。逆に言えば、彼女がいる限り『アイテム』にも逆転の目が出てくる可能性はある。

浜面が何か言う前に、霧丘は彼らを置き去りにして走り出した。爆発による衝撃で、ビル全体が頼りなく揺れている。騒ぎを知った上客は、慌てた様子で逃げ惑っていた。

(……『スクール』は、狙撃手を雇っていた。なら、彼が配置されている可能性のある場所は)

彼女が目に向けたのは、近くにあるビル。600メートルほど離れているが、スナイパーにとっては特に遠い距離ではないだろう。

霧丘はガラス越しに自分の体を見せると、そのガラスに穴が空いたのを確認した。後ろにある壁に小さな穴が空いたのを確認すると、その穴の深さと位置から彼女は狙撃手の位置を推測する。そして、懐から武器を取り出した。

それは、携行型対戦車ミサイルの弾頭だ。

弾頭の尻に着いた紐を引っ張ると圧縮空気力で飛び、途中で自然に着火するようにできているものだ。彼女は狙いを定めると、ためらいなくその紐を引いた。

複数の弾頭がビルの側面を爆破する。耐震性が優れているのか、ビルは崩壊しなかった。

「おーおー、スゲエな。砂皿の野郎、磁力狙撃砲と一緒にグチャグチャになってんじやねえか？ ま、急いで補充した人員だからあの程度が限界って感じかもな」

そこへ、彼女の後ろから陽気な声が飛んできた。

霧丘が振り向くと、垣根が通路から出てきたところだった。

『暗闇の五月計画』。それにすら参加させられずに、中途半端に能力をいじくり回された『不適合者』だっけか。当初は一方通行アクセラレータの防御性をぶち込まれる予定だったはずが、あまりにもお粗末な能力となっちまったんだっただけか？」

「……、」

「んで、結局お前が得たのは座標確立……元は空間移動系の能力だったはずなんだろうけどな。だが防御性というものが出た結果、他者の座標に干渉するのがやっとなつちまったと聞いているが。ま、それでも大能力者レベル4になれただけマシか？」

「別に」

霧丘はあつきりと答えた。

『プロデュース』の被験者に比べれば、まだマシ。あの実験、パーソナルリアリティ『自分だけの現実』が脳のどこに宿るのかを調べるものだったけど。人の脳味噌をクリスマスケーキのように切り分けたって、話だから」
そうかい、と垣根は興味なさそうに相槌を打った。

「麦野は、どうしたの?」

「ああ、大したことなかったな」

そつけないその言葉で、彼の実力がはつきりと示された。また、学園都市でも四番目に強力な超能力者レベル5をそんな風に扱える人間に、霧丘ではとても太刀打ちできないことも。

「で、『能力追跡』はどこにいる? こつちが知りたいのはそれだけだ。場所を教えりゃ見逃してやってもいいんだぜ」

「そんな交渉に、応じるとでも?」

「応じるやつもいるんじゃないの? 例えば、『アイテム』のフレンドとか」

その言葉に、霧丘は少し黙った。

1つの選択肢が突きつけられる。そして、それを拒否する権利がないことも。

だから、彼女は迷わずに懐のナイフを取り出すと全力で投げつけた。そして、近くにあったベンチが高速で垣根に迫る。

ゴア! という爆発音と共に、ベンチは粉々に吹き飛ばされ、そして霧丘の体も後方へ吹き飛ばされた。

彼女が動かなくなったことを確認すると、垣根は下部組織の人間に回収しろ、と簡単に告げた。

「回収って……まだ生きていますか、あれ」

「死んでいたら、ゴミ箱にでも入れておけ」

『ブロック』による少年院への襲撃は、『グループ』及び騒ぎを聞いて駆け付けた駿斗、最愛、海鳥の手によって解決がなされた。

少年院に平穏が戻ったことを確認すると、面倒なことになる前に駿斗たちは撤収。再び他の組織の同行を追い続けることとなった。だから、

「第三学区のある高層ビルで、能力者が暴れる事態となっているそうです。しかし、警備員アンチスキルへの連絡が不自然に超遅れていますね」

「まったく、何が起こっているんだよ……」

駿斗は最愛からの報告に頭を抱えつつ、移動した。

少年院での戦いを終えた後、彼らは合流した。そして、各々の報告を行った後に再び情報収集ということになったのだ。

「監視カメラの情報も既に改竄がなされている。これ以上の情報は、行ってみなければ分からねえな」

彼らは第三学区に入った。すると、そこで駿斗が立ち止まった。

「このAIM拡散会場……1回だけ見覚えがある？ 数は2人。他にももう2つ。超能力者相当のものと大能力者相当のもの……」

彼は自分が感じ取ったものを解析していく。そして、結論を述べた。

「お前ら、いいか……ここで、『アイテム』2人に対して、超能力者と大能力者2人が加わって戦っている。他にも、無能力者などの人員もいる。能力があるにもかかわらず能力を全く使っていない人間もいることから、恐らく暗部の人間以外にも、巻き込まれた一般人もいるかもしれない」

「——っ！」

2人の表情が変わる。特に、以前『アイテム』に所属していた最愛は過敏に反応していた。

「俺は止めに行く。お前らはどうする？ 特に最愛は、『アイテム』の

連中とは顔を合わせるの危険かもしれない。だから、バックアップに徹してくれると嬉しいが」

「……そんなことを聞くとでも思っているんですか？」

「だよな。まあ、無理はするなよ。特に、超能力者2人を相手するのは俺の役目だ。いいな？」

彼らは走る。そして、1人の少女を背負った男を発見した。

「あいつ……10月3日のスキルアウトか！」

駿斗が声をかけると、彼は警戒するような表情を見せる。

「お前……あの時の！」

「ああ。その後ろに背負っているのは、『アイテム』の能力追跡……確か名前は、滝壺、だったか」

より一層警戒を深めた浜面に対して、駿斗は慌てて言葉をかけた。「そんな警戒しなくても大丈夫だ。大方、『体晶』の使い過ぎで動けなくなっただってところだろう？」

『体晶』というのは、意図的に拒絶反応を起こさせることで能力を暴走させるものだ。副作用が強いために危険極まりない代物であるが、かつては木原幻生が木山春生の教え子たちを利用した『暴走能力の法則解析用誘爆実験』を行い、その上、幻生の孫であるテレスティーナⅡ木原Ⅱライフラインというマッドサイエンティストが、絶対能力者を生み出すために、彼らを利用してしようとしていた。

すると、浜面は言った。

「ああ……『スクール』とかいう連中に言われた。あと1回か2回の使用で『崩壊』するって」

崩壊、という不穏なワードが聞こえた駿斗は、思わず浜面の顔を見つめた。

「絶対にそんなことはさせねえが、今は時間がねえんだ……麦野のやつを何とかしないとイケねえ」

「麦野が、どうしたんですか？」

最愛が警戒した様子で訊く。

彼らは垣根に追いつかれた後、まずは浜面が滝壺を逃がそうとした。しかし、その過程で滝壺は浜面をエレベーターに押し込めるようにして彼を1人で逃がし、そして1人で第2位の超能力者に立ち向かったらしい。そして彼女を助けに戻ってきた浜面は、男に言われた。

滝壺はもう限界に近い。あと1回か2回の『体晶』の使用で、間違いなく『崩壊』する。

しかし、垣根に負けて逃げ出した『アイテム』のリーダー、麦野は

自分の反撃のために滝壺を使うことを決定。そのため、彼女から滝壺を守るために浜面は警備員に預けることにした……。

その話を聞いた駿斗は、すぐに決断した。

「分かった。じゃ、俺が行ってくる」

「お前1人に行かせるかよ。ただでさえ、お前と一緒にいたあのツンツン頭のやつに、借りが膨らむばかりだっつうのによ」

そして、彼らは最愛と海鳥に滝壺を任せると、駆け出した。

すると、前方で光の筋が煌めいた。

「あれは……」

「原子崩し……探す手間が省けたな！」
マルチタウナー

そこでは、麦野が1人の金髪の少女を追いかけていた。名前は確か……フレンドだったか。

フレンドは爆弾を使って相手をかく乱しようとしているようであるが、しかし確実に追い詰められていく。

「全く、『スクール』に私を売るなんて考えちゃダメじゃない？ ふーれんだあー」

彼女は迫ってきた爆弾を気にせずに、光線で打ち抜いた。

原子崩し。

粒子でも波でもない『曖昧な状態』に固定された電子。本来『留まる』性質を持ったそれを、高速で打ち出す能力。1発が御坂の超電磁砲レールガンさえも上回る威力を持つ。

しかし、その後フレンドに向けて撃ちだされたそれは、不自然に軌道を変えて外された。

未元物質

フレンドの体が吹き飛んだ。しかし、彼女は自分がまだ生きていることを知る。

先ほどの原子崩しの光線は、確かに自分に狙いを定めて放たれたはずだった。そしてその威力は、フレンドの体を一瞬で（麦野曰く、油がくどい感じの）肉塊にするには十分なものだったはずだ。彼女は序列こそ第4位であるが、純粋な威力だけで言えばその一撃は、第3位の超電磁砲すらも上回るものを持つものだから。

麦野の一撃は直撃しなかった。だが、彼女に手を抜く理由はないはずだ。フレンドは、少し前まで仲間であった麦野たち『アイテム』を裏切ったのだから。

「まったく、だめじゃないフレンド。『スクール』のクソ野郎共に私を売ろうとするなんて」

『スクール』に捕まったから、逆らいようがなかった。そんな言い訳が通じるような世界ではない。

すぐに殺さなかった理由は簡単だ。いたぶるだけいたぶってからフレンドを殺さなければ、麦野の気が済まないから。そして、それをアピールすることによって、これ以上の裏切り者が出なくなるから。

ただそれだけだった。

超能力者である麦野が、ただ爆弾の扱いに長けているだけの少女に負ける要素はない。また、彼女をみすみす逃がしてしまうこともない。

「ま、こんなもんかな。そろそろとどめを刺していいわよね？」

麦野はそう呟くと、地面に転がっている少女のもとに歩み寄っていく。

フレンドは綺麗な金髪をしていて、足も細く、ファツションもおしやれなものを常に着ているために、普段は西洋人形のような可愛らしさがあるのだが、体が泥に汚れ、ところどころではやけどを負っている今は、その影はなりを潜めている。

「じゃ、バイバイ。フレンド」

麦野はその指の先をフレンドダに向け、狙いを定めた。そして、光がほとばしり、高速でまっすぐにフレンドダへと向かって行く。

(……ごめんね、フレメア。こんなお姉ちゃんで)

彼女は最後に、長い間会えていなくて、そしてもう2度と会えないであろう妹のことを考えた。

目をつぶって、自分の意識が途切れるのを待つことしかできない。だが。

「……あん？」

彼女に向けて放たれたとどめの一撃は、途中でその軌道が捻じ曲がった。

原子崩しは、その軌道を途中で曲げるような使い方はできない。そもそも、麦野にはフレンドダに対して容赦をする理由が存在しない。そしてフレンドダは、そのような都合の良い能力は持ち合わせていない。だとすれば、理由は1つに絞られる。

「久しぶりだな」

路地裏の向こうから、1人の少年が姿を現した。

「デメエ……」

その顔は、麦野にとって見覚えのあるものだった。そして、もつとも憎らしい顔だった。

「8月に、絹旗をさらって行った……」

「さらうって言うのは語弊があるんじゃないのか？ そもそも、彼女は汚い『取引』などなくて、チャイルドエラー置き去りっただけでふぎけた『計画』に巻き込まれた上に、闇に落とさされていただけなんだから。本来いるべき場所に戻っただけだ」

駿斗はすました顔で言う。

そして、フレンドダは混乱していた。

(え？……こいつって、いつか研究所で超電磁砲と一緒にいた、デュアルスキル多重能力者よね？ 何で私をかばっているの？ え、え？ いや、これはひよつとするとチャンス……)

そんな混乱に陥って、何も動けなくなるフレンドダ。その横で、駿斗と麦野は勝手に話を進めている。

さらに、そこにもう1人現れた。

「フレンダー！ こつちだ！」

フレンダは動こうとするが、足をやられている彼女は聞き覚えのあるその声に振り向くことしかできなかつた。

「浜面……」

「俺とあいつで麦野を何とかする。だから、お前はさっさと逃げろ。どちらにしろ、もう『アイテム』はまともに機能していねえ。だったら、暴走を始めた麦野を何とかするのが得策だ」

彼はそう言いながらフレンダを抱き起した。

その時、光線の雨が3人に降り注いだ。間一髪で駿斗が危機誘導^{ハームガイド}を発生させ、その光線をすべて逸らす。

「くそ、フレンダだっけか？ お前は俺が背負っていく」

「了解だ。能力を使えるお前なら、1人背負っても何とかなるか？」
「任せろ」

彼らは走り出した。しかしその後を、麦野は追ってくる。

「このままじゃ、颯ごつこだな。あいつを倒す必要があるな」

「倒すって、そんなに簡単に言っていない言葉じゃないと思う訳よ……」
幸い、駿斗には彼女を一度撃破しているという実績がある。その上、あのころに比べれば能力、魔術と共に大幅に強化されており、駿斗は今ならばあまり苦戦せずに勝てるだけの自信があつた。

しかし、すると浜面が言った。

「いや、あいつの相手は俺がやる」

「お前……」

それは、非常に危険な行為だ。彼には、駿斗のようにその能力を隠しているわけでもなく、そして当麻のようにその右手に隠された力が測定できない訳でもない。真正正銘の無能力者なのだ。

武器は持っているだろうが、彼の服装を見る限りには持っているも拳銃がせいぜいであろう。軍隊1つと対等に戦えるとされる超能力者を相手取るには、装備も戦闘能力も圧倒的に不足している。

「だけど、それでも浜面は言った。」

「どちらにしろ、黄泉川に頼んだ警備員の応援が来るまで誰かがやら

なければならねえんだ。だけど、フレンダを放っておくわけにもいかねえ。それに」

浜面は一度言葉を区切って言った。

「滝壺を、俺は守らなけりやならねえからな」

彼はそう言っただけで笑った。

「そうか」

駿斗は、その決意を見た。浜面は笑いながら言う。

「ま、黄泉川の奴も応援を寄こすって言っていたんだ。それまでに、生き延びているか、あるいは倒すか、どちらかが達成できればいい」

「……死ぬんじゃねえぞ。死んでさえいなければ、俺が応急処置した上で冥土返し（ヘウンキヤンセラー）の下へ運んでいくから」

名医とも知り合いとか、本当におまえって何者だよ。

そんなことを言っただけで、彼らは拳を重ねると各々の目的地に向かって行った。

ゴン！ という衝撃が、初春のこめかみの辺りを突き抜けた。

殴られた、ということに気付くよりも早く、彼女は座っていた椅子からアスファルトの地面の上に転がり落ちていた。オープンカフェで注文した大型甘味パフェが、潰した果物のように路面に散らばっている。

周囲からは悲鳴が聞こえた。

初春はなかなか見つからない打ち止めラストオーダーの人探しに付き合っていたのだが、友人たちに忠告された通り、全く見つかる様子はなかった。そのため、長時間歩いて疲れたこともあり、休憩を取ることにしたのだ。

初春がパフェを食べ始めると、打ち止めは近くで歩いている少女たちが持っていた、チェーン系の喫茶店のセットについて来るキーホルダーが欲しいと言い始めた。そして、初春が打ち止めにタクシーのお釣りを持っていることを指摘すると、少女は一目散に駆け出して行った。

その直後のことだ。ガラの悪いこの少年が来たのは。

『失礼、お嬢さん』

そう言った彼は風貌に似あわない柔和な笑みを浮かべていたが、右手には機械でできた爪のような怪しいものも付けていて、危険なおいがした。

『こういう子がどこに行ったか知らないかな。最終信号ラストオーダーって呼ばれて
いるんだけど』

垣根帝督と名乗った彼がそう言って差し出してきた写真の中には、先ほどまで一緒にいた少女の姿が映っていた。

その写真と垣根を何度か交互に見比べた後、初春はその言葉を選んだ。

『いいえ。残念ですけど、見ていないですね』

彼からは危険な感じがした。彼女は主に後方からのサポートが主な仕事であるが、ジャッジメント風紀委員としての経験などから分かったのだ。

『どうしても見つけられないというのであれば、「警備員」の詰め処に届け出を出した方が良いと思いますけど』

『そうだね。その前にもう少し自分で探してみる。ありがとう』

すると、意外にも少年はあっさり引き下がった……かのように見えた。

しかし、その次に言われた言葉は違っていた。

『テメエが最終信号と一緒にいたことは分かっているんだよ、クソガキ』

そして殴られた。

起き上がろうとした初春の肩を、垣根の足が踏みつける。

『だから俺はこう尋ねたんだぜ。『こういう子を知りませんか』ではなく『こういう子がどこに行ったか分かりませんか』ってな』

垣根は足に体重をかける。グゴキツ！ という鈍い感触と共に、強引に関節を外された。激痛が走る。

初春を助けようとする人間はいなかった。なぜなら、彼女には風紀委員であることを示す腕章がつけられているからだ。実際には、基本的に校内の揉め事に対処するだけの組織であるし、その中でも実際に

悪質な能力者を実力で取り締まる人は一部だ。

しかし、何も知らない人からすれば『治安維持組織の腕章を付けた人』がいつも簡単にねじ伏せられている状況を見て、それを助けるために飛び出そうなどは考えないだろう。

「最終信号はどこだ。それさえ言えば、解放してやる」

最後に、暴力という牢獄の中で唯一の出口が示された。

風紀委員としての矜持や、初春飾利としての人格が、その言葉に塗りつぶされて行く。

だから、初春はその言葉を呟いた。

「なに……っ？」

信じられない物をみたような顔をする垣根に対して、初春はもう一度その言葉をぶつけた。

「聞こえ、なかったんですか……。あの子は、貴女が絶対に見つけられない場所にいる、って言ったんですよ。うそを言った覚えは……ありません」

彼女が人をバカにするように舌を出してまで言った、その言葉を聞いた垣根は、その靴底を初春の頭に向けた。

「俺は一般人にや手を出さねえが、自分の敵には容赦をしないって言ったはずだぜ。それを理解した上で、まだ協力を拒むって判断したのなら、それはもう仕方がねえ」

だがその時、垣根は初春から遠ざかった。

理由は簡単。その直後、垣根が先ほどまで立っていた場所へ、道路標識が槍のように突き刺さったからだ。

「初春！」

その言葉に、彼女は2度驚いた。

1度目は、こんな状況でも、自分に声をかけてくれる人間がいたことに。

そして2度目は、その声が良く知った友人のものであることに。

「絹旗さん……黒夜さんー！」

思わず彼女はその名前を呼んだ。

「何があったのかは知りませんが、すぐにそこを超離れますよー！」

「つーか、こいつ……まさか」

慌てて初春の下へ駆け寄る最愛だったが、海鳥はそこでそばに立っている男に気が付いた。そして、初春はその次に彼女が発した言葉に驚く。

「学園都市第2位……未元物質」

超能力者。

最悪だった。

2人の大能力者が現れて、正直少しほっとした面もあったのだ。しかし、彼は強度レベルにおいて彼女らよりも上。さらに、その序列は友人の超能力者、御坂美琴よりも上。

「誰が出てきたかと思えば、『暗闇の五月計画』、かよ」

やれやれ、といったように彼は首を振る。

「悪いが、お前らの空素装甲オフエンスアーマーと空素爆槍ボンバーランスじゃ俺には勝てねえよ。工夫でどうにかなるレベルを越えちゃまっている」

「別に、勝つ必要なんて超ありません」

最愛は即答した。

「すぐに、あなたを倒す人がやってきますから」

その直後、膨大な烈風が吹き荒れた。粉々に砕けた壁やガラスの破片が、膨大な烈風に巻き込まれて垣根に叩き付けられたのだ。垣根は初めて後ずさりした。

徹底的に破壊されたATMの中から、紙幣が天使の羽のように宙を舞う。

「……つたく、シケた遊びでハシヤいでンじやねエよ、三下」

白熱し白濁し白狂した、学園都市最強の悪魔のような超能力者の声が初春の耳に聞こえた。

「もつと面白いこととして盛り上がろうぜ、悪党の立ち振る舞いってのを教えてやるからよオ」

一方通行が、その場に現れた。

「痛つてえな」

垣根は視線を最愛から一方通行へと移す。

「そしてムカついた。さすがは第1位、大したムカつきぶりだ。やつ

ばテメエからぶち殺さなくちゃダメみてえだ」

彼らが言葉を交わしている間に、最愛と海鳥は店の外まで初春を運んだ。

「ちよ、あの、絹旗さん!？」

「あなたにもいろいろあるんでしようけれど、あの場所に戻ることは超ダメですよ！ ツートップの超能力者が戦っているところに首を突っ込むなんて、普通に考えてただの自殺行為です!」

「それでも」

「悪いがああ状況じゃあ、あいつらはどうやっても止まりはしねえよ。思考の一部を植え付けられている私が言うんだ。間違いない」

海鳥にそう言われると、初春は彼女たちの境遇を思い出して黙ってしまった。

「すまん」

海鳥は言った。

「少々卑怯な言い回しだったかもしれないが、お前を巻き込みたくないんだよ。あいつらの相手は、駿斗兄ちゃんがするって言った。あとから来るって」

「神谷さんが……?」

初春は呟いた。

親友を通じて知り合ったあの少年には、その能力についていくつかわからない点があった。無能力者といいながら、明らかに超常現象を起こしていたので何かの能力があることは間違いない。

しかし、彼の能力がああ2人に及ぶかどうかなど知らない。むしろ、ああ2人に対してどのような能力があれば対等に戦えるのか、彼女には分からなかった。

だが、目の前の2人の少女、彼の幼馴染には自分の言葉に自信があるようだった。

そしてその一方で、怪物どうしの戦いは決着を迎えようとしていた。

垣根帝督の能力、未元物質ダイクマターはこの世に存在しない素粒子を生み出し、それから創り出される物質を操る能力だ。そして、それはこの世

にもともと存在していなかった以上、この世の物理法則を受け付けない。

彼の背から生えた翼、その隙間から回折を起こした光は殺人光線に変わった。軽く翼を振るうだけで、凄まじい烈風が発生した。

そして、それらは一方通行の反射を突きやぶった。2万5000種類のベクトルから『一方通行が反射するベクトル』と『生活に必要な光や音など、無意識に受け入れているベクトル』を判別し、『受けて入れているベクトルに偽装されたベクトル』を利用してその攻撃を叩き付けたためだ。

『これが「未元物質」。異物の混ざった空間……ここは teme の知る世界じゃねえんだよ』

垣根帝督には自信があった。一方通行を倒す自身も、そして彼を殺すことで、アレイスターの第一候補メインプランとして君臨し、統括理事長との直接交渉権を得ることも。

しかし、一方通行が言った。

『三下だな。美学が足りねエからそんな台詞しか出てこねエンだよ、オマエは』

『あ?』

『そもそも、どうして俺とお前が第1位と第2位に分けられているか、知っているか』

彼は、ゆるやかに両手を広げて行った。

『その間に、絶対的な壁があるからだ』

垣根帝督の頭が沸騰しかけたが、そこで彼は気が付いた。

——周囲には『悲劇』が足りない。

彼らの戦いで、高層ビルの窓ガラスは砕けた。信号機はへし折れて歩道に倒れかかった。街路樹が吹き飛んでコンクリートの壁に突き刺さっていた。

しかし、そこに人がはいなかった。

烈風は人々に降り注ごうとしたガラスの雨を吹き飛ばした。逃げ

遅れた人をかばうように飛んできた看板が盾となった。奇跡のようなその所業によって、けが人は1人も存在しなかった。

(ま、さか……)

垣根の喉が干上がった。

『守ったっていいのか……』

しかし、一方通行は退屈そうに告げた。

『ムカついたかよ、チンピラ。これが悪党だ』

それでも、彼にとつてはまだ悪党だった。ならば、彼の思い描く善人とはいったいどれほどの物なのか。

そして、決着はついた。

——この世に『未元物質』という素粒子及びその物質が存在すると再定義して、演算式を組み直す。

口で言うのは簡単だが、実際に行うのは不可能であるそれを、一方通行はいとも簡単にやり遂げたのだ。

スクランブル交差点のど真ん中には、垣根帝督が自分の血で描かれた複雑な魔法陣のような中に倒れていた。それでも、彼はまだ死んでいなかった。

一方通行は悪党だ。

8月の時の『善人』ならば、更生のための足掛かりを残すような世話まで焼いて立ち去るのかもしれないが、彼はベルトから拳銃を抜いた。自分の目的のために一般人を、何より打ち止めを巻き込もうとした彼を見逃すつもりはなかった。

「あばよ、三下。……ま、善人にやられるよりかは惨めじゃねエだろ」
彼はハンマーを起こして引き金を引こうとした。1人の死によって平和が築かれようとする。

しかし、その直前だった。

「待っじやんよ、一方通行!」

信じられないほどセンスのない緑色のジャージに、化粧つきの顔をした体育教師がやってきた。黄泉川愛穂。警備員であり、そして打ち止めが芳川と共に同居している相手だ。

彼女は銃を渡すように要求してきた。ただの野次馬たちは、彼女を

馬鹿だと思っただろう。あれほどのことをした暴走能力者相手に、素手で立ち向かっていくなど。

しかし、警備員として働く彼女は、そこら辺にいる野次馬よりもよっぽどそのことを理解していた。その上、彼女は止めると言った。倒す、ではなく、止める、と。

「一方通行。お前が善人か悪人かなんて関係ない。お前がどんな世界に浸っているかなんて関係ない。重要なのは、そこから連れもどすことじゃないよ。どれだけ暗い世界にしようが、どれだけ深い世界にしようが、私は絶対にお前を諦めない。そこから必ずお前を引きずりあげてやる」

彼女は、その時確かに一方通行と同じフィールドに立っていた。

一方通行は彼女を撃とうとした。守るべきものを敵に回してでも、闇から彼女たちを守るために。だが、彼はそれでも撃てなかった。引き金を引けないまま、黄泉川によって自分の手から拳銃が外されて行くところを見ていた。

だから、それが決定的な隙になった。

黄泉川が意識を取り戻した垣根によって刺され、そして一方通行は激昂した。

右脳と左脳が割れて、その中から何かが飛び出して行くような感覚があつた。そして、彼の背から発生した黒い翼が噴き出す。

「は、スゲエな。やれば出来んじゃないか、悪党」

そして、ついの末元物質の本質を垣根は理解した。

『神にも等しい力の片鱗を振るう者』と『神が住む天界の片鱗を振るう者』。これで条件は互角だった。だから、我を忘れていない垣根が暴走している一方通行に負けはしない。

そう思ったその矢先、彼は叩き潰された。

その直後。

「一方通行！」

1人の少年が、その場に現れた。

少年は赤、青、黄、緑の4色の翼を生やしていた。そして、それは苦しげにうごめいていた。

(A I M 拡散力場と天使テレスマの力の間で干渉が起こっているのか……ヴェントみたいなのに、循環不全が発生してないだけマシだろうな)

次の瞬間、2人は激突した。

「くそ、我が盾となりその幻想からわが身を守れ——『幻想防壁』!」
ぶつかり合った2種類の力が爆発しそうになるが、駿斗は周囲に防御壁を展開して余波がもたらす被害を防ぐ。

(ダメだ、押される!)

彼は慌てて黒い翼の上に受け流した。しかし、さらに数を増やした翼はあらゆる角度から駿斗に迫る。

防ぎ、弾き、そしてさらに出力を上げて拮抗する。

(くそ、これじゃあただの消耗戦だ……誰か、これを止められるやつはいないのか!?)

その一撃のあまりの重さに、彼は弱音を吐く。

一方通行から放たれる黒い翼は留まる事を知らず、そして駿斗の操る天使の力は削がれて行く。

「一方通行、もうすぐ打ち止めがここに来る! だから、暴走なんかしている場合じゃねえだろ!」

駿斗は叫ぶ。彼にはもう、それしか方法が残されていない。

「一方通行アアア!」

そして次の瞬間、彼の技が強引に突破された。

無防備になった駿斗の体に、黒い翼が迫ろうとする、その直前。
最後の希望ラストオーダーが舞い降りた。

(ハハ、今日のノルマはこれでクリア……かな)

黒い翼が自分の手前で停止した。そのことを確認した駿斗は、意識を手放す。

最後に、彼を呼ぶ幼馴染の声が聞こえた気がした。

全ての騒動が終わった後、『グループ』は再び終結した。

垣根帝督を倒した一方通行。

シヨチトルとの決着をつけた海原。

かつての『仲間』を助け出した結標。

そして、土御門はいつの間にか『ピンセット』を回収していた。正式名称は『超微粒子体干渉吸着式マニピュレーター』。磁力、光波、電子などを利用して素粒子を掴む（正確には吸い取る）事ができる代物だ。

それが掴んだのは学園都市中に5000万機ほど散布されている70ナノメートルのシリコン塊『滞在回線』アンダーライン。それによってアレイスターは、常に学園都市中を観察することができるのだという。

『ピンセット』を使用して『滞在回線』を解析していくと、1つの新たな単語が出てきた。

『ドラゴン』。

戦いの果てに得た小さな突破口を鍵として、『グループ』はさらに動き出す。

天草式の来訪

この日の4時間目の授業は、とある事情で異様に長引いた。

平凡（笑）な高校生である上条当麻や神谷駿斗を含むクラスの面子が、購買や食堂に走った時にはすでにあとの祭り。これも、日本史の授業中に当麻が放った一言『へー。じゃあもしも織田信長が織田幕府を作っていたら、日本はどうなっていたんですか？』によってすべてが脱線してしまったからである。

責任を感じた当麻とその付き添いで駿斗が職員室に赴き、ヘルシーざるそばセット580円をほおぼっていた小萌先生に『なんなら調理実習室を開放してください！ 上条定食を開きますから！ 余り物の冷たいご飯とケチャップと粉チーズであら不思議！』と懇願するも、先生は苦笑するばかりで応じてはくれなかった。

そして、その横で豪華な海鮮丼を食べている数学教師・親船素甘や、もはや昼食とはあまり関係なさそうな肉まんを多数消費している体育教師・黄泉川愛穂のせいで、昼休みの職員室には無駄においしそうなにおいだけが充満しており、2人は自分を見失う前に職員室から逃げ帰ることとなった。

残されているのは自動販売機のジュース程度。その事実をかみしめていたのは、当麻や駿斗だけではなく、青髪ピアスや土御門、この日に限って弁当を作ったこなかった姫神や通販の健康食品が品切れ中の吹寄制理を始めとした21名。

ここぞとばかりに弁当組がおいしそうなシューマイやハンバーグをもったいぶってほおぼる中、彼ら空腹同盟はついに決意した。

「脱走だ！ 脱走してコンビニへ行くんだ！」

いったい誰が叫んだのかは分からないが、いつのまにか食堂&購買組の男女が円陣を組んで作戦会議を実行していた。そしてこういう時に力を発揮するのは、やはり吹寄だ。

彼女の指示と、土御門が不要なプリントの裏に描いた詳細な校内の見取り図を参考に、作戦が組み上がる。そして当麻、駿斗、土御門、青髪ピアス、吹寄の5人が実行部隊として選ばれた。

携帯電話を複数人数が同時に会話できるトランシーバーモードにして接続し、デジタル時計を秒単位で合わせる。

「——行くわよ。作戦開始！」

パンパン！ と吹寄が手を鳴らすと、彼らは蜘蛛の子を散らすようにバラバラに分かれて行く。そして、実行部隊の5人は急ぎつつも、『廊下を走っているのを見とがめられる』というイージーミスを防ぐために『早歩きにも見えない動作』で廊下を突き進む。

「この作戦は時間が勝負よ！」

数人の教師を笑顔でやり過ぎしながら吹寄が言う。

お昼のコンビニと言えば、圧倒的な稼ぎ時だ。折角外に出ても、コンビニの棚から弁当が消えていれば元も子もない。

彼らは下駄箱へ行って革靴と上履きを履き替えるようなことはせず、いったん別れて別行動していた仲間たちから体育用の運動靴を受け取り、代わりに運動靴を預ける。そして、校舎と体育館をつなげる『外にある通路』まで行くと、運動靴を履いて一気に外へと向かう。「ようし、このまま一気に脱走するぞ！」

当麻が意気込んで駆け出したその直後だった。

ブブブー、というけたたましいクラクションの音がした。何かと違って振り返ると、そこには今ファミレスで夕食してきたばかりですと言わんばかりの災誤^ゴ先生^ラがいた。

彼が乗っているのはファミリー用の4ドアだが、あれは人間様のために作られた物であって、無差別級のゴリラが乗ると公衆電話のように窮屈だ。

「チッ！ 教職員の車両用出入口にも裏口が使われている可能性を考慮すべきだったわ！」

吹寄は己の失態に舌打ちする。しかし、当麻はここで思ったことをそのまま叫んでしまった。

「卑怯だーっ！ よりにもよって外食かよ!? あの生活指導の筋肉猛

獣、俺たちにはあんなキャパ不足の食堂で骨肉の争いをさせておいて、自分だけくつろぎ空間満喫ずみーっ！」

「バ、バカかみやん。相手にすんな！　ここで捕まったらみんなのお昼はどうなるんや！」

青髪ピアスの叫びでハツとする当麻。すると、駿斗が言った。

「ああ、もう！　あのゴリラは俺が引き付ける！　お前ら、みんなの昼食を頼んだぞ！」

そして、ゴリラを引き付けるように近すぎず遠すぎずの距離で走り出す駿斗。彼の思惑通り、猛獣は一番手近な駿斗めがけて突進していった。

「は、駿斗ーっ！」

「行くぞかみやん！　はやとんの犠牲を無駄にするわけにはいかないぜい！」

彼らは後ろ髪を引かれる思いを胸に走り出す。

一方、駿斗はゴリラとつかず離れずの距離を保ちながら逃走していた。

(そろそろ、あいつらも学校からある程度離れたか)

天使の力を『再現』している彼は無駄に強化された足を使って跳び上がると、器用に学校と外を遮る塀の上に手をひっかけ、そして体を乗り越え外の地面に着地することに成功した。

「勝った！」

彼は勝利を確信した。回り込まれる前に距離を開けるため、駿斗は意気揚々と走り出そうとした。その直後。

ズドン！　という音が背後から聞こえた。例えるなら、天から降ってきたゴリラがアスファルトに着地したような音だった。

駿斗は、後ろを振り向くことなく全速力で駆け出した。

「あの巨体で塀を乗り越えるとは、やはり怪物か……い！」

地獄の鬼ごっこが始まった。

天草式十字凄教に所属している少女、五和は彼らの高校の近くにいた。

ふわふわした羊みたいなたレーナーの上からピンク色のタンクトップを着ていて、下は濃い目のパンツ……なのであるが、パンツには巻き付くような切れ込みが入っていて、布地が捲れないように透明なビニール素材が合わせてある。学園都市最新のデザインのそれが、彼女がこの街の中にも溶け込めるように細心の注意を払った衣服の選び方だった。

天草式では、周囲と溶け込むことを第一とする。ビジネス街ならスーツだし、繁華街ならミニスカート、というのが彼らのセンスだった。

本来イギリスに在るべき魔術師の彼女が、学園都市に在る理由は2日前にさかのぼる。

今から2日前に、学園都市の上層部とイギリス清教には同じ書面の手紙が届いていた。内容は、これより上条当麻と神谷駿斗の粉碎に赴く。止める気であれば全力で臨むようにされたし……という果たし状だった。そしてその差出人が『後方のアックア』——『神の右席』の3人目だったのである。

もちろん、それだけなら偽物という可能性もあった。しかし、それとは別にイギリス清教だけに送られてきたものが、信憑性を補足していたのだ。

すなわち、『左方のテツラ』の遺体。

『それ』は最高級のビロードに美しく包まれた上で、ほのかに木の香りの漂う桐の箱に詰められて郵送されてきた。そのような高級感は敵対者に対する敬意の表れか、あるいは嘲弄か。

唯一面と向かって彼と戦った五和は、遺体の確認のために聖ジョージ大聖堂に呼び出され……そして困惑した。

原因は2つ。

1つ目は、テツラは学園都市製の兵器によって、アビニオンで焼き尽くされたはずだが、遺体の死因は明らかに腰の切断面にある。

2つ目は、その学園都市製の兵器すら凌いでいたテツラを、こうも軽々と処刑してしまった『後方のアックア』の実力についてだ。

一撃必殺。切断された傷口が、それを語っていた。
だが、そこには疑問も残っていた。

これまでの『神の右席』の2名は、いずれも搦め手を使ってきた。前方のヴェントは、当麻と駿斗に限らず学園都市のゲートを破壊して侵入し、『天罰』を使ってその警備を無力化した。左方のテツラは、アビニオンで『C文書』を使用して世界中で学園都市に対するデモを発生させた。

しかし、対して後方のアックアは一転して、古風な果たし状を送り付けてきたのだ。

そのあまりにもストレートすぎるやり方は様々な憶測を呼び、イギリス清教と学園都市は罠の可能性も勘繰った。しかし、アックアの真意は結局つかめずじまいのまま、どちらにしろ2人を狙ってやってくるというのならここで叩いておくのが最良だと思っただらう。その結果、イギリス清教から天草式が派遣されることとなった。

天草式が学園都市に住んでいる上条当麻と神谷駿斗の護衛に来る——それはすなわち、魔術師の集団が学園都市に入ることを、上層部が容認したということだった。

科学サイドと魔術サイドの線引きを犯しかねない事態。それはつまり、『科学と魔術がラインを割ることで生まれるであろう世界的な混乱』よりも、『アックアが（恐らくは従来の「神の右席」通り「十二使徒」を3人率いて）攻めてくる』ことの方が脅威だ、と学園都市とイギリス清教の双方から判断されたということだ。

そこそこ常識と良識を持っている五和は授業中の学校に乗り込むようなまねはせず、今は彼ら2人が所属しているクラスが見える位置で待機し、放課後になってから実行する予定であった。

(……頑張らないと)

五和は自分に気合を入れる。

数日前のC文書の一件では、力量不足のために彼らを守ることができなかつたのだ。当麻とは共に戦ったものの途中で意識を奪われて

しまい、駿斗に至っては『十二使徒』の3人全員の相手を押し付けてしまう形となった。

その事実を払拭するためにも、今回こそプロの魔術師として民間人である上条当麻・神谷駿斗の両名には指一本触れさせない覚悟を決めていたりした。

(あの人たちは前方のヴェント、左方のテツラと、2人の『神の右席』を撃退し、その上、レビ、シメオン、ピエール、アンドレ、ジエームス、ヨハン、フィリペ、バルテルミと、8人の『十二使徒』を撃退、あるいは撤退に追い込んだという話ですけれど)

しかし、魔術というものに関わってから日が浅い彼らとは違って、自分はプロの魔術師だ。自分にも何かできることはあるはずであると、その時。

五和の目の前を見知った人物が勢いよく横切って行った。

「すまん、五和！ どうしてここにいいのかとか、後で聞かせてくれ！」

駿斗はそれだけ言い残して、速やかに去っていく。

そしてその後ろから、何やらゴリラのような怪人が追ってくるのが見えた。

何というか、その、アクの強い洋ゲーに出てくる悪党ホリゴンみたいな顔の怪人だった。

あんなのがまともな一般人であるはずがない。

どんなに強力な魔術師相手でも果敢に立ち向かってきた猛者・神谷駿斗は迷わずに逃走を選択していた。

やがて、彼女はこう判断した。

9月30日の報告書によると、どうやら後方のアックアは男性であるらしい。

(——早速現れたっ！)

五和は迅速に槍を組み立て、一気に洋ゲーへ向かって突撃を敢行した。

健康上の都合により、生活指導の災誤先生は早退されました。

「……………うはあ」

怒涛のお昼ご飯大作戦を2人は無事に完遂した。コンプリート放課後、彼らは下駄箱に行くと同麻はバシユ、駿斗はスニーカーに履き替えて校門を出る。そこには、今も顔を真っ青にしている五和が佇んでいた。

昼休みに突如として現れた五和（槍つき）はあの猛獣にタツクルを喰らわせて駿斗を守ったのだが、それは彼女の勘違いであり「あれ、後方のアックアじゃない!? ええっ、この顔で学校の先生なんですか!？」と、生徒が本人の前で口にしたらジャーマンスूपレックスでも喰らわせられそうなセリフを言いながらあたふたしていた。

その後、五和は災誤先生の巨体を担いで病院へと直行してしまったため、彼は結局彼女がここにいる理由を聞かずじまいであったのだ。「わ、私ったら、役立たずにも程があります……………」

病院から戻ってきた彼女は、どーん、と真つ暗に落ち込んでいた。駿斗としては、あの筋肉ゴリラからどうやって逃げようか決めかねていたところだったので、役に立ったかどうかで言えば確実に役に立ったと思うのであるが、五和の落ち込みポイントはどうやらそこではないらしい。

ようするに、プロが勘違いをしたとはいえ一般人を傷つけたのが許せないようなのだ。

（落石注意ゾーンで襲い掛かる岩盤を両手で受け止めた伝説があるゴリラが、一般に部類していいかどうかはすごく微妙に思えるんだけどな……………）

何はともあれ、どうして魔術サイドの住人が科学サイドの本拠地を平然と歩いているのかを聞いてみることにする。

「後方のアックア、という名前は覚えていてるでしょうか？」

恐る恐るといった感じに話を切り出した五和の言葉に、当麻が先に答えた。

「確か、『神の右席』の1人……………だよな。駿斗は9月30日に会ったん

だっけ？」

「おう。ヴェントをさらわれちゃったけどな」

本人の言と駿斗の感覚が正しければ、彼は『神の右席』であると同時に『聖人』としての素質を持っている強敵だ。彼がその身に宿していた莫大な力を、感じ取っていたのは少しの間であるが、駿斗は鮮明に覚えていた。

量こそ御使エンゼルフォール堕しの際の大天使には及ばないものの、その質はあの時に感じたそれに限りなく近い。その上、制御が難しいはずのその力を軽々と振るっていた。

これまでの敵とは、格が違う。

並の『聖人』を上回る力を出すことができる駿斗のアルヒヤイ権天使でも、良くて対等に戦うのが限界であろう。

「その、アックアがどうしたって言うんだ？ まさか、またどつかの外国の街で、妙なことを始めようとしているのか？」

「い、いえ。そうではなくて……」

五和はものすごく言いづらそうにしていたが、言葉を選んでからやがて言った。

「後方のアックアの狙いは、あなた方にあるようなんです」

「はっ……」

「ええと。イギリス清教と学園都市の双方に果たし状が届いているんです。そこには、数日内に上条当麻と神谷駿斗を……うーん、襲撃するから用心しろ、と」

彼女は困ったように、説明をした。そこには、まるで親が小さな子供に対してするような、刺激の強い部分をごまかす感じが見受けられる。

「2人も撃破しておいて、残りの連中も黙ってはいないと思っていたが……まさか、果たし状だとはな。随分と古風なやり方を使うもんだ」

駿斗はそんな危機感のなさそうなことを言ったが、その表情は真剣だった。

「まあ、こんなこともあるのかと、学園都市内に色々と準備をしておい

た。俺の力を強化できそうなやつ。だからまあ、今は警戒を怠らないようにした方が良いか」

「しつつかし、前方、左方と来て……今度は後方のアックアか」

『神の右席』は各々の立ち位置や服装の色などを、己が対応する大天使の属性に合わせている。『前方』は神の火、風、黄。ウリエル『左方』は神の薬、土、緑。ラファエル

そこから考えると、今回の『後方』は神の力、水、青。奇しくも、一度戦ったことのある大天使の属性だ。

「今、英国図書館の方で彼の身元を洗っていますが、今のところ、他の『神の右席』のメンバーの情報も含めて、それらしいものは何も出ていないみたいなんです」

「まあ、秘密組織の秘密メンバーだもんな」

「詳細を掴めない『神の右席』としての力はもちろん、『聖人』でもあるそうですから。女教皇様ブリエステスの協力を仰げれば良かったんですけど」

女教皇様というのは、神裂のことだ。かつては駿斗と共に本物の天使と戦って生き残ったこともある。彼女がいれば心強いのであるが、しかし、今の天草式と神裂の間には溝がある。その上、ステイルから聞いた話からすると、聖人というのは莫大な力を持つがゆえに、そうそう簡単には動いて良いものではないそうさ。

「……でも、私達にも策がないわけじゃないんです」

当麻と駿斗は、今までに絶大な力を持った『神の右席』と『十二使徒』を撃退、あるいは撤退に追い込んでいる。それはなぜかといえば、2人の実力以外に考えられる、双方に共通していることは『科学サイドからの大規模な介入があったこと』だそうさ。

左方のテッラの時には、駆動鎧パワードスーツと超音速爆撃機が彼らの計画を変更させていた。前方のヴェントの時には、科学の天使『ヒューズIIカザキリ』が出現していた。

魔術サイドで屈指の実力を持つ『神の右席』を揺るがしたのは、科学サイドからのイレギュラー反撃であったわけだ。

「とっ、とにかく！ 後方のアックアが襲って来たとしても、私が必ず守って見せます。私達も表から陰から全部ひっくるめて護衛にあた

るというのがイギリス清教の命令ですから、どうぞご心配なくっ！」
元氣いっぱいと言った五和だったが、今ちよつと聞き捨てならない言葉が聞こえてきた気がする。

「なあ、五和。今俺の聞き間違いじゃなければ『護衛』って言葉が聞こえたんだけど？」

「ええ。ですから護衛に来たんですよ。泊まり込みで」

天草式十字凄惨教皇代理・建宮齋字は物陰に隠れたまま、双眼鏡から目を話した。

『周囲に溶け込む』ことを得意とする彼らがいるのは、小さな映画館のすぐそばだった。近くにある細い横道を視界から遮るように宝くじの売店が設置されているため、人ごみの中にあるのに人目に付きにくい、奇妙なポイントだった。

「……つまらんのよ」

そう言った建宮の言葉に、隣で雑誌を読んでいるふりをしている男、牛深も頷いた。

「五和の野郎……さつきから業務連絡ばかりで、ちつともアタックしませんね」

「まったくよな。せつかく神谷駿斗にアピールできるチャンスを与えてやったというのに、アピールを開始しないどころか、あいつ、自分の武器にも気づいていないと見えるのよ」

「なんすか五和の武器って？」

ポップコーンをほおぼっている少年、香焼がそう尋ねると、建宮は傍らに置いたバッグの中からフリックボードを取り出し、クイズ番組の回答者のようにマジックペンを走らせる。

「——そう、それは『五和隠れ巨乳説』つつっ！」

クワア！ と建宮が目を見開いて宣言すると、周囲にまんべんなく展開していた初老の諫早や既婚者の野母崎といった男衆までもが、ガタガタッ！ とまんべんなく建宮に食いついてきた。

そんな男衆に、建宮は自分が決行した『マツサージ大作戦』から彼

女の肩こり指数の予測最大値37に対して実測値40という差が発生したことを説明する。つまり、この差、3こそが『隠れ巨乳説』の証明だ……!」

そんな解説を建宮がしている中、少し離れた場所で立っていた金髪の女性、対馬がバカにしたような息を吐いた。

「……くだらないこと言っていないで、護衛対象のマークに集中しなさいよ」

しかし、そんなことをいった彼女は、男衆に自分の体を頭の上からつま先まで見られたうえでこんな言葉を受けた。

「対馬先輩って、どっちつかずで必要なさそうすよね」

「なっ!」

「如何にも。せめて胸はデカくて背も高いか、胸は小さくて背も低いかな、だったらよかったものを。対馬はキャラ付けが固定されておらん。それでいったいどうしろというのだ」

口をパクパクさせている対馬の横で、建宮はさらに新しいフリップボードを取り出して、『対馬脚線美説』などという得体のしれないことを説明し始めようとする。対馬はそんな教皇代理の股間を蹴りあげて黙らせた。

「でも、いいんすか? 五和の野郎、まだおしぼり作戦続けるみたいすよ」

「確かに五和は奥手すぎる。これでは埒が明かな……」

香焼の言葉に歯噛みする初老の諫早。そこへ仲間の女性から大ダメージを喰らって涙目になった建宮が、再び会話の主導権をもぎ取った。

「そう、五和特大オレンジ説を最大限に発揮するためには、このままではいかんのよ」

「え……特大オレンジですか?! せいぜいリングくらいだと思っただのに!」

うろたえる牛深の横で、香焼は質問を重ねた。

「でも教皇代理。これって外野がわーわー言っただけな問題なんすか? 五和の奥手っぷりは、筋金入りすよ」

「ふっ、だからこそ、秘策を用意したつてのよ」

ニヤリと笑った建宮が、自分のバッグから白黒のボールを取り出した。

「……サッカーボール？」

「このフィールドの狙撃手・建宮斎字がフリーキック大作戦を提案するのよな」

そんな訳で、彼はアスファルトの地面にサッカーボールを置き、傍らの数人と頷き合つて2，3歩の短い助走をつける。そして、そのまま思いつきりフリーキックを放つた。鋭いスピンを受けたボールは、そのまま駿斗の側頭部に激突するルートを取っていた。

——しかし、それは駿斗本人によつてあつさりと弾かれた。

襲撃と敗北

その後、駿斗からOHANASHI（物理）を受けた天草式男一同は一旦『五和応援大作戦』を中断せざるを得ず、先ほどのように周囲に溶け込んで護衛を行っていた。

結局、五和の泊まり込み先は当麻の部屋に決まった（五和は何かと理由をつけて、駿斗の部屋にしたがっていたが）。駿斗は最悪自分一人でもある程度までは対処できるものの、当麻は『聖人』の脅威的な身体能力には対抗できないからだ。

その後、駿斗は五和が護衛をしやすいという理由で、制服から着替えると当麻の家に入った。それに、彼女が当麻の家に入ることは1つ問題があるからだ。

「……で、とうま。何で天草式のいつわが隣にいるの?」

本日最大のデンジャラスチェックポイント。

学生寮の一角にある当麻の部屋の扉を開けるなり、インデックスが放った一言に当麻の全身から脂汗が滲み出た。彼女の口が、かみつき準備完了と言わんばかりにその端からうっすらと白い歯がのぞかせているのがすごく怖い。

ちなみに、スフィックスは『誰この人。だれー?』と五和の周囲をぐるぐる歩き回り、鼻をひくつかせている。

「い、いや、それは、ええとですね。何から説明した方がいいのかなー……?」

当麻が噴き出る汗をぬぐいながらそう言うと、五和がキョトンとした顔で口を動かした。

「つまりですね。『神の右席』の——」

「でえやあ!」

当麻と駿斗は息ピッタリに五和の首筋にチョップを喰らわせて言葉を遮ると、駿斗が後ろから彼女の首に腕を巻き付かせ、彼女の肩を押す当麻と共にインデックスから急速に離れて内緒話を実行した。

「(……いつつーわサン! あのエえと、インデックスには黙っておいてはいただけないでしょうか!?)」

「わっわっ」

「(アツクアの狙いはどうやら俺たちだけみたいだからな。インデックスに変な矛先が向かないのだったら、その方が絶対にいい。だから、余計な情報は与えずにインデックスには今回も『神の右席』には関わらないでもらいますしょうしよう!)」

「わわわわわわわわわわわわわわわわっ!」

「……五和、人の話聞いている?」

「き、聞いていますですよ!? ばばばば、バツチリでえす!」

彼女は顔を真っ赤にして首を縦にぶんぶんと勢いよく振る。それを見た駿斗は、息が苦しかったか? と彼女の肩から首にかけて回していた腕を取った。すると、なぜか彼女が残念そうな表情になる。

「……、」

すると、いつの間にかインデックスが完全に無感情になっていた。大きく爆発するどころか、それを通り越して「……いいもん」と呟いてテレビの方を向いてしまった。

当麻と駿斗にとつては、これが一番気まずい状態なのだ。

せめていつも通りに当麻の頭に噛みつこうとするインデックスを駿斗が慌てて止める……というほうが、まだ精神的には楽である気がする。肉体的に楽であるかどうかは保証しかねるが。

当麻は土下座をしながら彼女に頭を差し出して「いっそのこと、完璧に爆発する前に一度噛んでくれ」なんて言っているのであるが、一向にインデックスは機嫌を直さない。

結局、最終的には五和が食材持参で作ってくれた夕食でインデックスの機嫌は直った。その過程で隣の部屋にいた土御門舞夏が乱入した拳句、土御門家の今日の夕食がスープから味噌汁に変わるといふ珍事があったが、駿斗たち4人は、比較的平和に過ごすことができたことを記しておく。

そして、今日は当麻の一存でインデックスが初めての風呂掃除係に任命されたりしたわけであるが。

「——何でスポンジと洗剤で掃除しただけでお風呂が壊れるんだよ、インデックス!」

「そ、そんなこと言ったって、私はどうまに言われた通りにゴシゴシやっただけなんだよ！」

夜の街に当麻とインデックスの声が響き、五和と駿斗はその隣で苦笑いを浮かべていた。インデックスが当麻の家の給湯機を破壊したため、「せつかくの機会だから」と近所の銭湯まで足を運ぶことになったからだ。

「ちなみにインデックスは実は上条さんの言う通りにゴシゴシやっていないに賭ける！　っていうか、バスタブの給湯口からプラスチックの溶けたみたいなお臭いがしたのはなぜか。それはインデックスが給湯口に思いつき洗剤の原液を注ぎ込んだからですどうだこの推理！」

当麻はそう言つて、インデックスにビシイ！　と人差し指を突きつける。

「え？　洗剤入れたら綺麗になるんじゃないの？」

「おっしやー！　ここで驚異の天然キョトンが出ました！　つつかおかげで給湯機内部が焦げ付いて火災寸前ですハイ！」

「あ、あはは。ま、まあ、たまにはお外のお風呂を使うのも気分転換になって良いじゃないですか」

五和がカミワザなフオローをすべり込ませ、2人の騒ぎが少し静かになった。すると、彼女は小さな手帳を見ながら公衆浴場やスパリゾートの情報をチェックしている。……明らかに彼女の手書きであろうもののだが、どうして護衛に関係なさそうなそんな情報までチェックしているか謎である。

そのことを駿斗が漏らすと、インデックスには聞かれないような声で五和が言った。

「(……え、ええと、周辺の地理情報を把握しておくことは、対象を護衛する際にも必要なことですし)」

しかし、あまりにも調べすぎると、『外』の人間である彼女のところへ警備員が機密保護条例を守るために襲い掛かりはしないか、少々心配である。

彼女の話によれば、そのレジジャー施設があるのは第二十二学区であ

るらしい。

「あの学区って……確か、地下市街だったか。ほとんど行ったことがないけど」

学園都市の学区の中では、およそ2キロ四方という面積が一番狭い学区だ。しかし、地下数百メートルまで開発が進められており、もともSFのような雰囲気を持つ学園都市の中でも、より一層未来都市というイメージがする場所である。

終電は過ぎていたが、彼らは2ドアのファミリーカーを借りると五和の運転するレンタカーで向かった。

「五和、バイクにも乗れるのか。ひよつとして、国際ライセンス？」

「まあ、それは、その。一応自動車と自動二輪、小型船舶と……飛行機は無理ですけど、ヘリコプターなら、なんとか……」

駿斗が訊くと、何だか肩身が狭い調子で五和は言う。彼女曰く、仕事によっては延々と砂漠や草原が広がっている地域に行くこともあるらしく、そのような時にはヘリコプターを使うこともあるそうだ。

駿斗たちが住んでいる学生寮は第七学区の中でも、隣の第二十二学区に近い、端の方にある。はつきり言つて、レジャー施設までは歩こうとすれば歩いて行ける距離であるのだが、彼女が車を借りたのは、単に湯冷めするかもしれないから早めに帰れるように、という配慮であろう。

第七学区から第二十二学区に入ったところで、車の窓から外を見たインデックスが声を上げた。

「わっわっ！　とうま、はやと！　ジャングルジムがあるよ、でっかいジャングルジム！」

第二十二学区の地上部分は、他の学区とは大きく異なる。主要な施設が地下に集中しているため、地上には一般的な家屋やビルが存在せず、風力発電のプロペラだけが並んでいるのだ。それらが普通の学区にあるような『電信柱の代わり』のように配置されているのではなく、ビルの鉄骨のように30階ぐらいの高さまで縦横に柱を並べたところに、大量のプロペラを立体的に配置している。だから、インデックスが表現したように巨大なジャングルジムのような風貌をしてい

るのだ。

地下市街で大量に消費される電力は、これらの発電で賄われるという訳である。

五和の運転する車が、四角く切り抜かれた地下ゲートをくぐった。この場所は巨大な円筒形になっていて、直径2キロの筒の外周を這うようにらせん状の道路を形成している。反対側の上り車線と合わせると、理髪店の回転する看板のような配置になるらしい。

「地下市街って、日本とは合わないよなー。地震とかめちやくちや怖いし。確か、どれだけ壁の強度を強くしても、地盤の断層ごとずれたら丸ごと引き裂かれちゃうんだろ？」

もちろん、学園都市の建設技術は地震対策も万全である。最も、「らせん状の道路がバネとなって衝撃を吸収・緩和する」……なんてものは、根も葉もないローカル都市伝説にすぎないのだが。

「そういや、レジャー風呂って第何階層にあるんだ？」

「ええと、第三階層だそうです」

「ねえ、かいそうって何？ わかめ？」

「『かいそう』間違いだよ。海の藻と書く『海藻』じゃなくて、建物に使う『階層』だ。第二十二学区は全部で10の階層に分かれていて、俺たちがこれから行くのは、その中で上から3番目の層なんだよ」

第三階層、地下90メートルへの入り口のゲートをくぐった瞬間、インデックスは思わず「うわあ……」と感激するような声を出した。

トンネル内をオレンジ色の照明が照らしていたのに対して、ここには薄い青の空間が広がっていた。直径2キロ、高さ20メートルほどの空間の天井が全てプラネタリウムになっているのだ。ここでは地上のカメラで撮影した『星空』をリアルタイムで映し出している。

さらに、街の色が全て同じ色で統一されているため、まるで海の中にでも飛び込んで夜空を眺めているような印象が得られるのだ。

ところどころには、プラネタリウムの天井をぶち抜く形でビルが建っている。もともとこの天井は、体育館のように鉄骨を張り巡らせて重量を分散させる形で支えているらしいが、いざというときのために、それらのビルは地下市街を支える柱としての役割も担っているの

だ。

「こんなの、本当に地下にあるものなの？ 川もあるし、森もあるみたいなんだよ！」

インデックスがそう言うが、ここは真正正銘、地下市街である。森は農業ビルで見られるような水栽培を応用して作られており、空気浄化装置としてだけでなく、精神的な面から地下での生活を支えることにも一役買っている。水は木々を育てたり生活で使用されるだけではなく、地上から各階層に落とす過程で水力発電をしている。

最も、これには莫大な電力がネットワークとなつているため、電気の大半を風力発電でまかなっている学園都市だからこそできる技だ。他国では電力のほとんどを化石燃料に頼っている場合が多いため、環境問題が声高に叫ばれる今日日、このような地下市街をつくるのは現実的に難しい。

もつとも、学園都市において地下市街が発達しているのは、東京の西部約3分の1という面積の狭さが1つの原因でもある。そのため、国土面積が十分にある他の国では、そこまでして大規模な地下開発に迫られていない。

そんな話をしていると、遠くの方にビルの電飾が見えてきた。

楽しいお風呂タイムが終わり、駿斗と当麻は外に出た。夜風を浴びたかったのだが、ここは地下市街であるため完全な無風状態であることに後から気が付く男2人。

彼らは、数時間前に五和から伝えられた、『神の右席』後方のアックアからの宣戦布告について考える。

駿斗をはじめ、様々な勢力がそれを大袈裟すぎるくらいに捉えていたが、しかし蓋を上げてみれば何も起こらない。

彼が宣戦布告を送り付けてから、イギリス清教と学園都市が動き出してその結果、天草式による護衛が決まった。それまでの時間があれば、アックアもすでに学園都市に入り込んできていいはずだ。科学一辺倒である学園都市の監視網では、魔術師であるアックアの侵入を防

ぐことができない。それは、今までに侵入してきた数々の魔術師が証明している。

そこへ、風呂上がりでなんだかいい匂いのする五和が近づいてきた。

「そんな所にいると湯冷めしてしまいますよ」

「どのみち、帰るときには湯冷めするから」

駿斗は笑ってそう言い返す。

「少し歩きませんか？」

そう言った彼女の申し出に、彼らは賛同して一緒に歩き出した。インデックスは現在、ビルの中にある『食べ物空間』の試食コーナーにいるらしい。それなら、当分の間出てくることはないだろう、と2人は判断した。

それに、アックアのことについて話すには、彼女がいない方が都合が良い。

青一色に統一された夜景の中を、3人が歩く。

「そういえば、天草式は日本からイギリスに引っ越したんだっけ？」

ふと思いついたように、当麻が言った。

「ええ、まあ」

「イギリスでの生活って、どんな感じなんだ？」

うーん、と彼女は少し考えるようなそぶりを見せた。

「ロンドンへ移住したと言っても、私達が住んでいるのは日本人街のブロックですから。そんなに変わらないですよ。毎日3食、食べるものも変わらないですし」

「え、そんなもんなのか？」

駿斗の言葉に、彼女は曖昧に笑った。

「そもそも天草式わたしたちはあらゆる環境を学習し、その環境に適した形で溶け込む集団ですから。『知らない場所』へ向かうときの反応は、普通の人は違うかもしれません」

つまり、彼女たちが日本人街にいる最たる理由は、そこが『日本人がたくさんいても不自然でない場所』だからであろう。

しかし、イギリス清教が彼女たちを日本人街の担当にさせたのも、

そして今回2人の護衛として派遣させたのも、いざというときはトカゲのしっぽ切りができるという理由かもしれない。

しかし、彼女がそんな話をしているとき、駿斗の様子が変わった。

「……全員、用意しろ。奴が来た」

その言葉に、3人だけでなく、周囲で護衛と観察のために散開していた天草式を含めた全員に、緊張が走る。

「——これに気が付くとは、確かに報告通りの実力はあるようであるな」

そして、闇の奥から声が聞こえた。

男の声で、流暢な日本語だった。

「——宣告は与えた。貴様らの前には、いくつかの選択肢があったはずである」

足音が聞こえる。しかし、それはまっとうな人間の出すものではなかった。一歩ごとにズン……！ と低い震動が地面を揺らしている。

それが示すものは、圧倒的な力の片鱗だ。

「——私の宣告を受け止めた上で熟考し、自分の命を預けるに足ると判断した選択肢が『これ』だと言うのなら、私は真つ向から立ちふさがるのであるが」

だが、と声は嗤った。

「——率直に言おう。もう少し、まともな選択肢はなかったのかね」

闇が拭われ、そこから声の主が姿を現した。ただそれだけで、辺りの色が変わった気がした。ライトアップの内容などは変わらないはずだ。しかし、闇が男から遠ざかっていくような感覚がそこにあった。

茶色い髪に、石を削り取ったような顔立ち。衣服は青系のゴルフウェアをほうふつとさせた。屈強な体つきは、スポーツマンのような健全さはなく、血にまみれた戦士のものだ。

その後ろから3人の『十二使徒』が現れ、その中には駿斗と当麻も知っている『アドリア海の女王』事件の時に現れたレビもいるが、凄腕の魔術師である彼らすらその存在感が薄れていた。

「後方のアックア、か……宣言通り、来たわけか」

『神の右席』にして、『聖人』としての素質も兼ね備えた者。

「策を練る必要性は感じられない。私はただ、この世界で起きている騒乱の元凶を排除しに來ただけである」

言ってくれる、と2人は心の中で毒づいた。

前方のヴェントは学園都市の機能を麻痺させた。左方のテツラは世界中の混乱を起こした。彼らの事情がどうあれ、実際に多大な被害と混乱を起こした『神の右席』から、騒乱の現況などと呼ばれる筋合いはない。

「話し合いはなし。最初っから、殺すつもりか」

当麻が鋭いまなざしで敵を睨みつけながら言う。

「ふん。確かに性急すぎたな。私の望みは騒乱の元凶を断ち切ることである」

「元凶があるならそつちだろ。テメエらが引き起こした『〇九三〇事件』に『アビニョン暴動』……忘れたとは言わせないぞ」

駿斗もアックアを睨みつける。

「それすらも、『上条当麻と神谷駿斗及び学園都市という危険分子を攻略するため』という原因が存在するのだがな」

話は平行線をたどっていた。

「全ての元凶は貴様たちの肉体の一部を起点とする特異体質にある。ならば、貴様については命まで奪わなくともよいであろう。——その右腕を差し出せ。そいつをここで切断するならば、貴様の命だけは助けてやる」

答えるまでもない、断られることを前提とした言葉だった。

駿斗は幻想核杖を構えた。その直後。

「行くぞ。わが標的」

2人が激突した。

彼らを中心に、莫大な衝撃波が発生する。その余波だけで当麻と五和が地面にひっくりかえり、周囲に展開していた天草式も防御に走った。

駿斗は、既に背中から4色・4枚の翼を生やしていた。権天使。アルヒヤイ自分を狙ってくる敵に対し、初めから全力で立ち向かったのだ。

アックアが自分の影から取り出したメイスを振るう。そして、彼はその後違和感に気が付いた。

(水が……神の力であるか……ッ！)

すると、駿斗の持つ翼が4色から1色に統一されて行き、そして1対、青色の巨大な翼だけになっていた。

8月の御使落し^{エンゼルフォール}で得た、神の力と同質の天使の力^{テレズマ}。それによって、彼が得意とする『水』の術式を力づくで封じたのだ。

彼は幻想核杖を中心に生み出した水の剣で、アックアのメイスと打ち合った。

彼がそれを扱えるのは、40分ほどが限界だ。それまでに彼がアックアを倒すことができなければ、結末は全て天草式にゆだねられることとなる。

そして、それ以前に天草式と当麻が『十二使徒』に敗れた場合は、完全なる敗北になるのだ。

天草式+当麻と、『十二使徒』との戦いが始まった。

レビの硬貨袋が飛び、天草式と当麻全体を囲むように魔方陣が形成される。そして、彼ら全体を覆うような雷撃が放たれた。

『女王艦隊』の旗艦で以前見た時に比べて、圧倒的にその威力が高い。どうやら、向こうで戦っている駿斗やアックアの魔術を視界に収め、『神の子との同席』をモチーフにした魔術で威力を高めているようだ。「建宮さん、防御を！」

五和は叫ぶが、しかしその必殺の魔術は彼らに有効打を加えることなく霧散した。

原因は当麻の右手。

彼が天草式の前に飛び出しそれを突き出すと、それは乾いた音と共に消えたのだ。

それを見たレビは、後ろにいるトマとジミーに目配せをする。

すると、3人が天草式という集団に向かって突撃してきた。それを見た天草式も、全員が戦闘準備にかかる。

天草式の集団から、たくさんの武器が振るわれた。フランベルジュ、槍、また東洋特有の鎖鎌や十手などといった武器もあった。

物理攻撃が来るかと思えば、そこから衝撃波が飛び出し、魔術的な光が放たれたかと思えば、それは攻撃ではなく仲間への支援術式だったりした。

これが天草式特有の『隠密性』。

隠れキリシタンを主体とする彼らは、分かりやすい魔術をあまり用いらない。生活の中にあるもの、ありふれた日用品——例えば、服や文房具などといったもので、さりげない形で魔術を組み上げ、発動してくる。どちらかと言えば、魔術的な記号をあらかじめ用意するのはなく、日常の中に隠れているそれを見つけて利用する、というのが彼ら特有のやり方だった。

そして、その中心に当麻はいた。

彼に向けて振るわれる武器が建宮に弾かれ、飛び出した魔術が当麻の右手に打ち消される。出会ってから1か月弱しか経っておらず、会った回数で言えば未だ4回程度しかない彼らであるが、それでも拙いながらもコンビネーションは悪くはなかった。

しかし、『十二使徒』の3人もまた強力だった。

レビの放った1つの魔術が天草式の複数人をまとめて吹き飛ばし、トマという青年は彼らの攻撃をまるで無視するかのように、その身に受けても平然としていた。ジミーが持つ縮絨棒しゆくじゅうぼうが振られると、それを受け止めようとした天草式の1人の剣が木端微塵になった。

次第に、彼らは疲弊していった。そして、『十二使徒』は依然としてその力を揮い続けている。

小さな差は、時間が経つごとに大きく開いて行く。そして、ついにその限界が来た。

上条当麻の体がジミーの持つ縮絨棒に吹き飛ばされ、そしてそれをきっかけに天草式は敗北を喫した。

決戦への準備

駿斗の『アルヒヤイ権天使』も限界に近付いてきたころ、『十二使徒』の3人がその戦いの側までやってきた。そのため、彼らは一度戦いをやめた。『1日待つ』

アックアは『十二使徒』の3人から当麻とその護衛をしていた天草式が撃破したことを聞くと、そう言った。

『麻酔もなくここで引き抜かれるのも酷だろう。義手の準備でもしておくが良い。期限までに騒乱の中心——その元凶たる右腕を自ら切断し、我々に差し出すというならば、上条当麻の命は見逃してやるのである』

第二十二学区の第七階層にある、救命救急病院。そこに、当麻は担ぎ込まれていた。

ジミーの持つ縮絨棒しゆくじゆうぼうに吹き飛ばされた当麻だったが、かろうじて生きているようなのである。

「……何とか、終わりました。正直、安定した容態とは言い難いですが」

手術室から出てきたストレッチャーが、集中治療室へと運ばれて行くのを見届けながら、若い男の医者はそう言った。

すでに病院の面会時間は終わっているため、他の場所に医者・看護師と患者以外の人影は見当たらない。

しかし、現在この薄暗い廊下には大勢の人影がいた。老若男女、合わせて50人前後が壁に寄り掛かったり、ソファに座ったりして医者の言葉に耳を傾けている。

『天草式』と名乗った彼らもまた、怪我をしていた。大半に人間が衣服のあちこちが割けており、包帯を巻いていた。ありていに言えばとても胡散臭い集団なのだが、スキルアウトの大物などが入院したりすると、集まった不良少年たちで待合ロビーがあふれかえることもたまにある。そのため、医者はあまり深入りはしなかった。

「おおよっぱに言うと、普通の人間なら絶対安静、といったところでしようか」

全身打撲に脳震盪。右肩と左足首の関節は脱臼していた。内臓も
圧迫されていた。

「……つまりは、予断を許さないって訳なのよな？」

建宮は、慎重に言葉を選びながら尋ねてきた。

医者が詳しい容態を話す。幸いにも長時間水の中に沈んでいたこ
とで発生する、酸素不足による脳へのダメージは少なかつたらしい。
「しかし……複数の目撃証言があるとはいえ、にわかには信じがたい
『原因』ですね」

ジミーの縮絨棒により吹き飛ばされた当麻は、人工的な川の水面を
跳ね返り、100メートル以上の距離を移動したうえで、ようやくそ
の動きを止めて水の中に沈んで行ったのだ。

本来ならば、死んでいてもおかしくない。未だに峠の途中でふら
らでること自体がありえない。

その理由は、ただ1つ。

「手加減されたんだ……」

その眩きがされた方向を医者は見たが、そこに並んでいる群衆のう
ち誰が言ったのかは分からなかった。

奇妙な集団だった。『50人近い包帯を巻いた集団』であるにもか
かわらず、誰もが『突出』していない。『群衆という風景』に見えるの
だ。

『突出』しているのは、このクワガタのような髪をした男と、もう1人
だけだった。

「インデックス……」

患者と同一年くらいの少年が、ガラス越しに集中治療室の中を見
た。そこでは、大量の機会に囲まれたベッドの上に、1人の少年が横
たわつており、そしてその横には彼のベッドに寄り添うように、ある
いは床に跪くように、白い修道服を着た少女が佇んでいた。

「……こいつは医者としての経験ですが、そつとしておくべきだと思
います」

その言葉に2人が頷くと、若い医者は去って行った。そして、そこ
には己の無力感を嘆く人々が取り残された。

建宮は、そこから1歩だけ身を引いた。

あの少年にできることは、彼らには何もなかった。右手が存在する限り、どんな回復や治癒の魔術も台無しにされてしまう。せいぜい無事を祈るくらいが関の山であるが、それにしたって祈る資格があるかどうか。

後方のアックアと『十二使徒』から身を守ると言っておきながら、実際には彼を巻き込んだの戦闘となった。しかも、『右手』を持つ護衛対象が共闘しなければ、正直に言っただけ戦うこともままならなかったはずだ。

そして、件のアックアと対等に近い戦いを繰り広げたのは、もう1人の護衛対象である神谷駿斗だった。

「……くそつたれが」

敵が指定してきた期限は明日だ。それまでに当麻の右腕を切断して差出し、そして神谷駿斗の身柄を引き渡さなければ、当麻の命までも容赦せずに再び狙ってくる。

右腕か、襲撃か。当然ながら、どちらも許せるものではない。

やるべきことは、分かっている。だが、誰も具体的な動きができない。

しかし、その時1人だけもたれかかっていた壁から背を離れた者がいた。

「……俺が、やる」

駿斗は、低い声でそう言った。普段の明るい声とは全く違う。ドスの利いた、低い声だった。

そこに込められているのは、怒りだ。それも今まで見せてきたような、他人を助けようとするためのものではない。

自分の大切な親友を傷つけた敵に対する、爆発するような、絶対に敵を許さないという怒りの渦だ。

「あいつらは、俺がやる。アックアは俺が決着をつける。正直当麻を吹き飛ばしたやつをぶん殴りたいが……天草式は悪いが、『十二使徒』の方に当たってくれ」

「おい、それは……」

「……そうじゃなきや、俺の気が済まねえんだよ」

その眼光はとても険しかった。

『聖人崩し』だっけか。だけど、それを当てるためにはある程度弱らせておく必要があるだろ。だったら、あいつをぶん殴るのは俺がやる。その後、すぐに互いの敵を入れ替える。俺が『十二使徒』を殴っている間に、お前らがとどめを刺せば良い」

彼の本音を言えば、親友にとどめを刺した『十二使徒』のジミーと一番戦いたいのだろう。しかし、それでも彼はアックアを優先した。彼が怒っているのは、自分自身なのだ。

今までずっと、互いに背中を預けてきた親友が今、生死の境目を彷徨っている。だが、自分自身の不甲斐なきや、憤りをすべて駿斗は飲み込もうとしている。

「俺がさっさとアックアを倒して加勢に行っていれば、天草式も『十二使徒』を倒せたはずだ。それができなかったのは、俺があいつを倒せなかったからなんだよ」

それだけ言うと、彼は「新しい術式の準備をしてくる」と言っている場から去ってしまった。天草式は、その背中を引き止めることもできず、その場に残される。

すると、その様子を見届けた建宮が言った。

「で、お前さんはそこで何を蹲っているのよ」

その言葉に、暗闇と化している廊下の隅で、何かが反応した。目を凝らさなければよく分からないが、ソファの上で縮こまっているのは五和だった。

その体にもあちこちに包帯が巻かれていたが、しかしその肉体以上に精神が打ちのめされていた。

「……わ、たし……」

嗚咽と共に、というよりはその合間を縫うように、彼女は声を出した。

「……私、守るって……そう言っ……神谷さんも、任せてくれて……なのに、何もできなかったんです。私……駿斗さんのことと共にあの人のことを聞いた時、なんてすごい力を持っているんだろうっ

て、思いました。でも違ったんですよ」

当麻は、どんな防御術式に頼ることもできない。どれほど優れた回復魔術があっても、かすり傷一つ治せない。それは、どれほど優れた魔術師が行っても変わらない。

彼は魔術の脅威を打ち消すだけでなく、その恩恵をも消し去ってしまう。

そもそもにおいて、その右手は数々の『幸運』——神の奇跡を打ち消してきたのだ。だから、本来その奇跡を人の手によつて起こすために生まれた『魔術』という技術を拒絶するのは、ある意味において当然なことなのだ。

そして、その力は本人や周りの人間の意思ではどうにもならない。それは誰よりも、当麻と駿斗の2人が今までに散々思い知ってきたこと。

「私、そんな人を見殺しにしたんですよ」

本来守るべき、護衛対象を巻き込んだの戦い。その状況下においては、まず何よりも先に彼の安全を考えるべきだったはずだ。

しかし、実際にはこのような結果となつてしまった。

どうしてベッドで眠っているのがあの人で、自分ではないのだ。そんな泣き言が、懺悔が、八つ当たりが繰り返された。

もはや、五和にも自分の感情が分からなくなつていた。

「立つ気はないのか」

しかし、建宮は彼女に向かってそう言った。

「お前さん、一体そこで何をやっているのよ？」

彼は五和の胸倉を掴み上げ、周りが何か言うよりも早く手近な壁へと叩き付けた。バゴン！ と凄まじい音がする。

しかし、五和は悲鳴も上げず、ただ喘ぐように酸素を求め、涙にぬれた瞳で建宮を睨み返していた。

「……さん、だつて……」

五和の口が動く。

「建宮さんだつて、負けたじゃないですか」

その言葉に、彼は少し黙った。

それが醜い言葉であることくらい、彼女も分かっているであろう。そして本来、建宮に怒りをぶつけるべきでないことも。

しかし、それでも彼女はその言葉を言った。言わなければ、とても自分の精神こころが持たなかった。耐えられなかった。きつと、五和という少女は、全力であるの2人を守り抜くことを決めていたはずだ。しかし、圧倒的な力はその想いを簡単に蹴散らしてしまった。

その感情を、建宮は理解しようとはしなかった。そもそも、それは五和だけに分かるものなのだ。

だから、代わりにこう言った。

「こんな女を助けるために、あいつらは体を張ったのか？」

その言葉に、五和の目が大きく見開かれた。

鋭い刃物のようなその言葉が、彼女に突き刺さった。

「テメエの身内を目の前で痛みつけられて、ボロボロになった命の恩人を前にして……まだ動こうともしない。本当に、そんな女のためにあいつは命を投げ出したっていうのか。だとしたら、そいつは犬死してやつなのよ。は、こりやあバカがバカのためにバカをやって犬死をしたっていうことなのよな？」

五和の頭が沸騰するような熱を帯びた。しかし、彼女が咆哮を上げて拳を振るうその前に、建宮は壁に押し付けていた五和の体を床に叩き付けた。

再び呼吸困難に陥った彼女に馬乗りするようになると、建宮はその視線を見据えて言った。

「良いか。分かんねえようなら教えてやるのよ」

低く。そして何よりも怒りが抑えきれない声で。

建宮は、事実をはっきりと述べる。

「――後方のアックアと『十二使徒』は、必ず来る」

ビクリと五和の体が震えた。

それはどうしようもない事実だ。彼らがこうして嘆いている間にも、約束の期限は刻一刻と近づいている。ただでさえ低い幸福の確率が、より一層引き下がっていく。

「お前さんはそれを許せるのか、まだ可能性は残っているのに、たとえ

どれだけ少なくても確実に残っているのに、そいつをつまんねえ後悔や罪悪感で全部捨てちまうのか!? そうやって勝手に勝手に諦められたあいつは、何も知らないままに右腕をぶちぎられちまうのか!? 笑顔を守りたければ立ち上がれ。自分の都合で他人の人生を投げ捨てるんじゃないってのよ!」

まだ可能性は残っている。しかし、その可能性に向けて動けるのは、今現在駿斗と天草式だけなのだ。『聖人』である女教皇様プリエステスが都合よく駆けつけたりしてくれはしない。そして、上条当麻は現在、戦えるような状況ではない。

五和の胸ぐらを掴み上げる建宮の手が、ギリギリと音を立てていることに五和はようやく気が付いた。彼女はようやく気が付く。怒りを覚え、己を恥じているのは自分だけではない。全員が上条当麻を守ろうとして、全員がそれに失敗してしまった事実を受け入れている。それはとつくに分かっていたはずのことだ。

特に、駿斗が先ほど話していた時の声は、普段のそれからは想像もつかないほどの、怒りの含まれたものだった。

だが、ここにいる全員が立ち上がるようとしている。少年の親友も、自分の大切な人を守ろうとしている。

ならば、彼女のやることは決まっていた。

「あいつらに謝りたいか?」

建宮が問う。

「あんな風にしちまった『守るべき者』を、もう一度陽だまりの中に帰したいか? そして、親友のありさまを見て怒りと屈辱にまみれているあいつの無念を、晴らしてやりたいか?」

五和は咳き込むことも忘れて、小さく頷いた。

「……だったら戦え。お前さんが最高に良い女であることを証明して、こんなやつのために命を張って良かったって思わせてやれ」

謝るにしても、笑うにしても、それは命がないとできないことなのよな。墓前で懺悔したくなければ、俺たちは戦うしかねえのよ——と建宮は言った。

そして、五和の胸ぐらをつかんでいた手を放す。そして、教皇代理

は立ち上がると周囲を見渡した。

「さてと、この中に五和と同じことを言う馬鹿はいるか？」

答えは分かりきっていた。

したがって、返事はなかった。しかし、覚悟はあった。後悔と無力感を抱えたまま、しかし戦う意思は何倍にも膨れ上がっていた。

覚悟はできた。あとは、全力を尽くすだけ。

ちようどそのタイミングで、自分の力の調整をしていた駿斗が戻ってきた。

彼は先ほどまでとは異なる様子を見て、短く問う。

「これからの方針は決まったか？」

「おうよ」

建宮が答えた。

「まったく、救われぬものが目の前にいて、これに手を差し伸べねえってことはねえのよなあ」

第二十二学区、第七階層。そこにある裏路地で、連絡が入った。

「第三階層の自然公園で、後方のアックアたちと学園都市の無人機甲部隊が衝突したようなのよ」

その結果は、誰が問わずとも分かるものだった。

すると、牛深がうかがうような眼で建宮に訊く。

「……行きますか？」

「いや」

建宮は携帯電話をパチンと折りたたんで言った。

「やみくもにつつこんだところで、結果は目に見えているってやつなのよ」

「だよな」

駿斗が首肯した。

だから、今は動かずにイギリス清教からの情報を待つ。最適の準備を整え、最適の作戦を練って、最適の時に、最適の戦いに挑む。

本気でヤルというのは、そういうことだ。

本心を言えば、いますぐにも当麻を叩きのめした彼らを倒しに行きたい。だが、たった一度の勝利をつかむために今はぐつとこらえて、建宮は『待つ』と判断した。

今できることは、準備しかない。

「オルソラからの連絡が来るまで待つしかないか……。今は、とにかく戦闘準備をしておくしかない。作戦を立てるのは、イギリス清教からの連絡を受けてから、か」

駿斗がそう呟くと、ジャリ、ジャリ！ と何かを削るような音が聞こえた。

「……3時間ほど、待ってください」

ボソリ、と五和が呟いた。

彼女は革ベルトを新選組のようにたすき掛けをしていた。そして、俯いたまま行っているのは、槍の補強——というよりは、全面的な改造に近いことを行っていた。

彼女の槍は持ち運びの都合上、アタッチメント接続器によって短い棒をいくつも繋げているため、どうしても強度は弱くなる。今はスプレー状の固定材を柄の全体に吹き付け、樹脂の塊で一回り太くしたそれを紙ヤスリを使って表面を丁寧^ニに磨いていた。

しかし、その時に鳴る樹脂を削る音にさえ殺意が込められているように聞こえて、建宮はちよつと背筋に寒いものを感じていた。なっている音や仕草から、夜中に包丁を研いでいる山姥を連想させられる。や、やばい。ちよつと調子に乗って追い詰めすぎたかも？

「……どうすんですか。焚きつけすぎて石油化学コンビナートに大引火って感じになっちゃってますよ、今の五和」

「……い、いや、そのお前さん、だって病院じゃ何か抜け殻みたいになっただけだから、ええとそのあれよ！ 元気づけるっていうの？」

「……この大馬鹿野郎！ やっぱ考えなしに焚きつけただけだったんですか!? 俺たち、これから恋する乙女の恐ろしさを目の当たりにするかもしれないですよ！」

「ええー俺のせいなのよ!? じゃあ、あの時いつたいどうすりや良

「かっただってのよ!?!」

そんな風に緊急会議している男2人であったが、そこに1人の声が割り込んだ。

「建宮さん、それに牛深さんも」

「彼らはビシイ! と直立不動になる。」

「大丈夫、私は大丈夫ですから——ちよつと集中させてもらえますか?」
のっぺりと、平坦な声だった。

バイオレンスな五和から離れ、建宮たちはこそこそ革ベルトをたすき掛けにして衣服の魔術的補強を行ったり、全員の手帳を確認しあつて周辺の地形を頭に叩き込んだりする。

駿斗も、感じ取れる魔力や天使テレズマの力からアックアの情報を集め、そして対抗策を立てていった。

すると、その時建宮の携帯電話が着信を鳴らした。

『あらあら、そちらは建宮さんでございませうか?』

「うわあオルソラ嬢! この声すごく癒されるのよーっ!」

結構心の重要なところが決壊しかけていた建宮が、その場に泣き崩れそうになる。そして、その電話から流れ出す声に、駿斗は聞き覚えがあった。

「オルソラ!? 何か情報が分かったのか!?!」

『こ、後方のアックアについての新情報でございませうよ』

天然マイペースなオルソラが珍しく、若干引きながら報告してきた。

後方のアックアの本名はウイリアムⅡオルウエル。イングラント地方出身の魔術的な傭兵で、所属はなし。生まれたときからローマ正教徒だったわけではなく、幼い頃にはイギリス清教の教会で洗礼を受けたという記録も残っているらしい。

そして、傭兵としては一匹狼で活動をつづけ、敵の拠点を叩くことを得意としていた——そう、敵の拠点を叩くだけではなく、数ある戦闘をやりこなし、その中でも特に得意だったのが拠点制圧だった、ということだ。

魔術師としても名乗りを上げ、Flere210という名を持って

いたらしい。

「……Flere……か」

その端的な意味は『涙』を表す。

敵は、それを魔法名に掲げる『聖人』だ。

「ウィルアムⅡオルウエルの傭兵時代の戦歴ってのは？」

『ロシア西部で繰り広げられた「占星魔術旅団援護」、フランス中部の「オルレアン騎士団殲滅戦」、ドーヴァー海峡近辺での「英国第三王女救出戦」……数え上げれば、キリがないのでごさいますよ』

オルソラは、その後もいくつかの戦績を羅列した。いずれも激戦として知られ、建宮にも聞いたことのあるものもいくつかあった。今の天草式でも乗り越えられるかどうか、悪夢のような戦場だ。

「強敵……いや、難敵ってレベルなのよな」

おまけに、相手は暴力一辺倒の脳筋というわけでもないらしい。医療設備の乏しい地域では薬品として使用できる薬草の知識を広めたり、飢えに苦しむ村ではその地域では食用にされていなかったゴボウの調理法を教えたりといった、戦闘以外での活躍も多かったそうだ。一部では、『賢者』とも呼ばれている。

このような活動は、実際に現地に行って戦場の空気を肌で感じ取り、そこにいる人々が何を求めているのかを理解し、その上で『彼らには何ができるのか』を示さなければならない。一時的な支援ではなく、恒久的に生活の質を向上させるのだ。

強靱な肉体と柔軟な思考を備えた、聡明な獣。

建宮がイメージしたのはそれだった。

オルソラの話は続く。弱点と呼べるようなものは存在せず、フリーの傭兵のころから『聖人』としての莫大な力を操っていたらしい。おまけに、今はそれに加えて『神の右席』としての力を振りかざしている。

(やっぱり、魔術の腕でも越えられているってことなのよな)

アックアは単に力の量が多いというだけではない。『聖人』に加えて『神の右席』としての力を併せ持っているということは、莫大な力を得ると同時にその負荷も倍になって返ってきているはずなのだ。

駿斗も、単に天使テレズマの力を『再現』し、操っているというだけではない。彼の場合、細かく感じ取ることができるので制御は一般的な魔術師に比べて非常に楽なのであるが、それでも彼なりに研究し、努力して、自分でその力を制御するための術を身に着けている。そもそも、彼の『四方天使』においては、その莫大な力を『相生』や『相剋』といった方法で制御し、そして、それを保つための機関として体の外部に『翼』という形の制御システムをつけているのだ。

「弱点までは期待しない。せめて、アツクアの戦闘スタイルぐらいは分からないのよ？」

しかし、それでも一抹の希望を探し出すために、建宮はオルソラに向けて質問を重ねる。

反省と再戦

主要武器は見たように全長5メートルを超える、騎士の扱うランスのような外観をした鋼の棍棒^{メイストック}。戦闘スタイルは、本人曰く『傭兵の流儀』^{ハンドイズダーティ}と言って、完璧に独学であるらしい。

『後は……戦闘中の移動方法が特殊で、走るのではなく、地面を滑るように動き回るそうでございます』

「……………」

建宮は首を傾げたが、駿斗は何かを思い出したような表情をした。「そういえば、俺が神の力の模倣をしたときから、あいつの動きが鈍くなったな。要するに、足と地面との間に薄い水の膜を張ることで、スケートのような感覚で移動しているのかもしれない」

そういえば、戦闘の時に地面を蹴る音がありませんでしたしな、と彼は付け加える。地面を蹴る音など、普通の人間ならば聞こえない。しかし、音速を超える速度を出す時には、割れるような大きな音がどうしても発生してしまうのだ。最も、その音が聞こえるよりも早く敵が迫ってきてしまう訳であるが。

「となると……奴は『後方のアックア』を名乗る前から水を使うのが得意だった、という訳なのよな……」

建宮の言葉に、駿斗も頷いた。

前方のヴェント、左方のテツラ、後方のアックア。

これらの言葉は、対応する大天使の配置と属性に由来するはずだ。となれば、アックアが扱うのは駿斗が睨んだ通り『神の力』であり、それは水を司る。

最も、先ほどは駿斗が早々に『神の力』と同質の天使の力^{テレスズマ}を使いたしたために、水の制御を全て掌握されてしまった。そのため、アックアはその本領を發揮できなかったのだ。

(……………さて、本当にどう作戦を練るか)

後方のアックアの戦闘能力は、まさに未知数だ。

しかし、未知数の実力を持つ者が、こちらにも1人いた。

「新しい術式の準備はできている。これなら、後方のアックアとも十

分にやりあえる」

「そう言ったのは駿斗だ。」

駿斗が前回使った『アルヒヤイ権天使』や『神の力』の場合、あまりに大きすぎる力であるために、それには使用時間制限が存在する。大きな力というのは便利なように聞こえるが、先ほども述べたように、実際にはその分使用による負荷というものが比例して増加する。

アックアと対等に渡り合うためには、力の質や量という点では駿斗は簡単に———というところ、少し語弊はあるが———肩を並べることができ

る。しかし、技術において彼は劣っていた。無理もない。そもそも、魔術と出会ってからまだ3か月と経っていない駿斗である。実戦レベルの魔術、それも並大抵の魔術師を凌駕しているという時点で、十二分に驚嘆に値するものなのだ。

だから、アックアにはないものを、駿斗は魔術と共に使う。

すなわち、科学。あるいは、学園都市。

「それを利用した、科学と魔術を組み合わせた、今までにはない全く新しい魔術ってわけだ」

科学サイドと魔術サイドの領分をぶつちぎって、下手したら両陣営の間で戦いが起こる火種となりかねない方法である。しかし、そもそも魔術サイドから科学サイド（の学園都市の住人だったはず）である駿斗や当麻が命を狙われている時点で、その区分はすでに曖昧、あるいはすでに戦闘は火種どころか狼煙まで立ち上っていると駿斗は考え、ついに開発に乗り出していたのだ。

その性質上、学園都市内でも限られた場所でしか使用できない魔術であるが、その威力は、予想通りならば権天使すらも上回る力を持つはずであり、その性質上まさにアンチ魔術師用の力になる。

「敵が何であれ、私達がやるべきことは同じはずです……」

その時、槍の補強をしていた五和が、ほとんど唇を動かさずにボソリと呟いた。

「そうですね、建宮さん」

ニゲルナヨ、と言外に宣告され、建宮は携帯電話を握りしめたまま

ガタガタと震える羽目になった。

深夜3時。第二十二学区、第三階層の鉄橋。

そこに、後方のアックアは佇んでいた。その側には、レビ、トマ、ジミー……『十二使徒』の3人も控えている。

しばらく前まで、彼らは学園都市からの刺客、無人機の集合と戦っていた。自走アンテナ8基によりコントロールされた『オジギソウ』、装甲車17台、駆動鎧^{パワードスーツ}38体を破壊した後に、実力差を見せつけられた上層部は軍事費の無駄遣いだと判断したのであろう。それ以降は、音沙汰なしとなっていた。

近代兵器には莫大な金がかかる。もっと上手な使い方をすればよいものを、と彼は考えたが、しかし、その一方で、

「……だが、案外馬鹿でもないようだ」
「はい」

アックアが呟いた言葉に、トマが応じた。それは、手際のよい撤退における彼の評価であった。

プロは、どのような分野位においてもそれなりにプライドというものを持っている。そして、軍人ならば、それはストレートに『力』というものに収束される。したがって、自分のプライドの象徴とも呼べる軍事力をあれだけ好き放題に蹴散らされれば、普通は黙っていない。

「彼らにも、優れた指導者というものは存在するようですね」

しかし、状況を理解し、他の者が納得できるだけの論理を組み立て、実際に撤退を促した指導者がこの学園都市には存在するという事なのだ。

もつとも、それを知ったところで彼らのやることに変わりはないのだが。

「ウイリ……いえ、アックア様がおっしゃった期限の時間まで、まだ19時間ほど猶予があると思いましたが」

トマが、横を見るとその闇の奥へ向かって言葉を放った。

『結果』は出たということでしょうか？」

闇の奥からザリ……という音が聞こえた。

1つではない。あわせて50ほど。イギリス清教所属、天草式十字
凄教のメンバーは、鉄橋を構成する鉄骨の合間合間からにじみ出るよ
うに姿を現した。

老若男女、誰もが一般人と同じような普段着をしている。しかし、
その手には剣、槍、斧、弓、鞭、といった武器が握られていた。中に
は、アツクアも見ることがない東洋特有の鎖鎌や十手といった武器も
あった。

その先頭には、2人の男が立っていた。

1人は、天草式の教皇代理である、建宮斎字。その手に握られてい
るのは、全長180センチを超え波を打つような刀身をしている大剣
フランベルジュだ。

もう1人は、今回の彼らの標的でもあり、そしてこの中では最も大
きな、そして無限とも呼べる可能性を秘めている、神谷駿斗。その手
には、己が生み出した武器である幻想核杖イマジン・コアロッドが握られていた。

そこから感じられるのは、前回のような警戒心ではない。

むき出しとも言える、怒りと闘気だ。

『結果』、ね。それは、今から俺たちがお前らをタコ殴りにするという
『結果』でいいか？」

駿斗の体から、ゾワリ、と何かが噴き出すような感覚があふれ出た。

あまりにも莫大過ぎて『十二使徒』の3人は一瞬その正体が分から
なかったが、それは間違いなく天使デレズマの力だ。

「刻限まであと半日以上あるのであるが、準備はもう済んだのか」

「ま、ここまで決定的な無理難題を押し付けられると、悩む必要もなく
なるつてのよ。おかげで決断するのは速かった。そいつだけは感謝
しておこうか」

建宮がフランベルジュを構えながら言った。化物サイズの獲物で
あるが、それでもアツクアからしたら子供の持つ木の枝程度のサイズ
にしか見えないし、それは駿斗の持つ幻想核杖イマジン・コアロッドにおいても、それほ
ど物理的な攻撃力があるとは思っていなかった。実際、彼の杖は物理

的に使用する道具としてはあまり考慮されていないのであるが。

幻想核杖の本領はむしろ、木において1本の太い幹から周囲へ枝分かれしていきその先に実を付けるように、あらゆる異能の力を生み出す幻想創造のための媒体として、その性質にこそ本領があるのだから。

「無理難題、か」

嘯き、笑い、アックアは足の裏で軽く地面をたたく。

そして、その影から出てきた自らの得物を掴んだ。怪物に相応しい、5メートルを超えるサイズの鉄の塊だ。

「それはローマ正教20億人を敵に回しているということを理解した上での言葉なのであるか」

「別に、ローマ正教徒全てを敵だとは俺は思っていないねえよ」

駿斗は片手で短い杖をいじりながら、軽い調子で答える。

「いくらローマ正教徒だと言っても、その全員が魔術と関わっているわけではないし、学園都市を敵だと思っている訳ではない……『C文書』の一件でそれを思い知った」

「敵っていうのは、真面目に神様を信じている一般の人間を食い物にして、好き勝手にふるまっているテメエらみたいな人間なのよ」

駿斗の言葉を、建宮が引き継いだ。

「では、交渉は決裂、という訳でよろしいのですか？」

「それ以外に何があるってのよ」

「別に私たちが困る問題ではありませんが」

トマが言う。

「唯一生き残る可能性のある選択肢を、自らの手で放棄してもよろしいのですか？」

アックアがメイスを構えると、レビは硬貨袋を、トマは腰帯を、ジミーは先ほど当麻を吹き飛ばした縮絨棒をそれぞれ構えた。

「念のために繰り返ししておく。私は聖人である。そして、『神の右席』としての力も有している」

「……、」

「それを理解した上で、なお守るべき者のために命を賭して戦うとい

うならば、私は期待するのである。人の持つ可能性とやらに。その大言が寝言でないことを期待し、貴様たちが持てる力のすべてを注いで用意したであろう切り札を、1つ残らず受け止めて見せよう」

ズン……とアツクアが半歩だけ動いた。

それは移動のための半歩ではない。鉄塊のメイスを構えるための半歩だ。

にらみ合いから戦闘へ。場の雰囲気は確実に近づいて行く。

しかし、突如それは破られた。

ドバン！ と。

しびれを切らした五和が、彼らの話を無視していきなり本気の一撃を放ったからだ。

無言で放たれた海上用戦闘銃フリウリスピアは、雷光の如き速さで一直線に、アツクアをも無視してジミーへと向かい、その刃先にある『冷たい夜気』を利用して作り上げた術式が発動、起爆した。

その衝撃が『十二使徒』と周囲にある地面を薙ぎ払い、味方であるはずの建宮齋字まで煽りを受けてひっくり返った。

「い、五和……ちやーん？」

しかし、彼女は舞い上がった土煙の向こうから再び姿を現したジミーを見て舌打ちをする。

「アツクア様が話していらしたのに……人の話は最後まで聞くものではないでしょうか？」

「……話なら、後で聞いてあげますよ」

五和は臆するどころか、逆に一步前へと踏み込んで告げる。

「さんざんさんざんさんざんさんざんグチャグチャのグチャにぶちのめした後に！ まだ顎が砕けていなかったら話ですけれどね！」
キレてる。

完つつつ壁に彼女はキレている。彼女の言葉を聞いた天草式の面々が、苦い顔で頭を抱えたり目を逸らしたりした。

「あばーっ！ 五和の野郎、カンペキに弾けちゃってますがーっ

！」

「……ほら、病院で教皇代理が『最高に良い女であることを証明して』とか不用意に言うから、五和もうファンナゴゴロ全開じゃないですか！」

「……馬鹿ね。恋する乙女は神様だつて敵に回せるのよ！」

騒ぐ男衆に対して、何だか妙に冷静なコメントを残す女性の対馬。そんなやり取りを無視して、五和とジミーは向かい合う。本来最大の敵であるアックアも、そしてジミーと同等の実力を持つトビとレマも、なぜか完全に無視されていた。

いつの間にか、天草式の中心点がガラリと変わる。

「勇ましい限りですが、それを現実的な実力として拝見したものですね」

「ご心配なく。私達は例え肉片の1つとなつてでも、あなたを徹底的にメキヤメキヤのメキヤにぶちのめして自分のしたことを後悔させてあげますから！」

ええ！ そこまですんのーっ！ という背後の声を無視して、五和はさらに一歩前へ。

決定的な射程圏へ踏み込んだ五和が、『十二使徒』のジミーに突撃した。

「ま、『十二使徒』のほうはやる気十分な五和さんたち天草式にお願いして……さて、1つ聞くが、撤退するつもりはないんだな？」

「貴様が、上条当麻の右腕と共にその身を差し出すというならば、その話をのまなくもない」

つまり、初めから分かっていた通り交渉は決裂だ。

両者が、お互いの得物を構える。2人の間で、殺気が爆発的に膨大する。

そして、その次の瞬間両者は再び激突した。

アックアのメイスと、駿斗の杖を中心として発生した暴風が激突する。駿斗の背中には、やはり青く輝く翼が生まれていた。

行き場を失った魔力と天使の力が爆発し、周囲の地面が捲れ上がる。しかし、その破片が飛んでいくよりも早く、両者の得物が振るわれた。

駿斗の周囲から生み出される水は、巨大なハンマーとなって彼に襲い掛かった。

「——っ！」

自らの常套手段である水の術式が使えずとも、しかしアックアは焦ることがない。『聖人』としての莫大な力を存分に行使して、力技でそれを突破できる。

しかし、それを破壊したところで変化が起こった。

「——殺したな」

ボソリ、とアックアの耳元で何かが囁いた。

「——私を殺したな」

(……っ、そうくるであるか！)

実は、先ほどの水の中には鋼糸が紛れていた。そして、アックアのメイスがそれを切り裂いたことをキーにして、隠された術式が発動したのだ。

もともとは、天草式がアックアと『十二使徒』を倒すために用意した術式。それを、彼らは惜しむことなく駿斗に教えた。

鋼糸を個人の生命線と定義し、それを破壊することを最も分かりやすい罪——『殺人罪』とする。それに対する『罰』が、アックアを襲った。それは、あらゆる文化圏に共通する宗教観を利用している。そのため、どのような術式をもつてしても防ぐことはできない『負の怨嗟』を意味する。

ワイヤーの切断面から噴き出した赤い霧が、アックアの全身を包み吞み込む。

そして、その内側で爆発が起こった。

その直後、駿斗は迷わずにアックアに向かって突撃する。その手に持った杖を中心として巨大な剣が生み出され、手負いのアックアに向けて迷わずにとどめを刺そうとする。

だが、その剣はメイスによって弾かれた。

(やはり、ダメだったか……)

「私の特性を教えよう」

アックアの特性は神の力。そして、受胎告知との繋がりから彼は聖母崇拜に関する術式を扱うことができる。

聖母崇拜の秘儀、それは『厳罰に対する減衰』。

信じる者は救われる。しかし、『神の子』は規律を守らぬものに相応の罰を下す。しかし、聖母はそれを減衰することができる。修道院を抜け出した女の代わりに日々の点呼を肩代わりして、女が戻ってくるまで監視の目をごまかしたように。

正真正銘、人の身に生まれながら、神の領域に深く踏み込んだ稀有な存在——それが聖母。そこから転じて、聖母は『圧倒的な慈悲の心をもつて、厳罰に苦しむ人の心を神へと届ける役割』を持つ。

「あらゆる罪と悪に対する罰則などの制約行為は、私に対して意味をなくす。『殺人罪』の払拭など、指一つ動かす必要さえない。『神の罪』すら打ち消すこの私に、そんなものが通じるとでも思ったのであるか」

その言葉を聞いて、駿斗は考えた。

「だから、ルーンなどの人間用の魔術も扱える、という訳か。あまりに自然すぎて、一瞬スルーしたままだったんだけどな」

『神の右席』に通常の『人間用』の魔術は使えない。だから、ポピュラー極まりない術式である『人払い』さえも彼らには使用できない。

しかし、駿斗たちに初めて接触するとき使用された『人払い』は、『十二使徒』ではなくアックアの魔力によって発動されていた。

そのような制約すらもなくするのが聖母崇拜。

この男は『聖人』と『神の右席』という2つの莫大な力を同時に扱うだけでなく、同時に人間と天使の術式を完璧に掌握してくる。

「この『後方のアックア』を、そこらの『神の右席』ごときと同列に見てくれるなよ」

「まったく、厄介極まりないな……」

駿斗は使用する術式を即座に変えた。

すなわち、あらゆる『罪』をモチーフにした術式を排除し、それ以

外の術式だけで対処することになったのだ。

アックアのメイスを駿斗の杖から生み出された水の剣が激突し、両者の間で拮抗した戦いが繰り広げられる。それと同時に、周囲の水がアックアに向かって襲い掛かった。

しかし得意の『水』の術式が使えずとも、アックアは時にそれをメイスで弾き、時には驚異的な動きで躲し、そして逆に攻撃にすら転じてくる。水の制御は完全に奪われているが、自らの属性である『神の力』の一端が秘められた『月』の光を取り込んだ夜気を吸収し、さらにその破壊力を増大させていく。

対し、駿斗は周囲の水を操り、それによってアックアを包み込もうとする。アックアがその檻から脱しようとするれば水が爆発を起し、あるいは剣が発生してその肉体を貫かんとばかりに襲い掛かる。

2人の実力は拮抗しているように見える。

しかし、実際の所、アックアが半永久的に『聖人』と『神の右席』の2種類の力を運用できるのに対し、駿斗の『神の力』はどんなに頑張っても連続しての使用は40分が限度だ。

だから、駿斗は再びその翼の色を変えた。敵に『水』を扱うことを許してしまうが、ここで有効打を与えるつもりなのだ。

「テメエの幻想は、ここでぶち殺す！」

「——良いだろう」

アックアもまた、必殺の一撃を投じるために動き出す。

その屈強な肉体が、一気に跳ね上がった。20メートルほど跳び上がった先にあるプラネタリウムのスクリーンに、その体を反転させて着地する。

するとその時、駿斗には感じられた。メイス、その一点に凝縮されて行く天使の力を。そして、そのシーソーのような力の傾きを。

今から放たれる最大級の一撃。それに対処するために、駿斗もその杖を構えなおす。

「——聖母の慈悲は厳罰を和らげる」

アックアのささやきに応じるかのように、その背後にある月の輝きが眩しいほどに放たれる。いや、それは正確ではない。光っているの

は、何かのエネルギーを受けてショートしたプラネタリウムのスクリーンだ。

本物の月の光は届かないのに、本物の月の加護を受けている。

普通の魔術師ならあり得ないこの理屈を、アックアの聖母崇拜は強引に押し通す。

「時に、神の理へ直訴するこの力。慈悲に包まれ天へと昇れ！」

一直線に落下するアックアが、その特大のメイスをただ一直線に振り下ろす。そこから生み出されるのは、斬撃でも刺突でも射出でも爆発でも破裂でも分断でも粉碎でもない。

ただ、重圧。小惑星の衝突をも凌ぐような、上から下へともたらされる圧倒的な破壊力だ。

しかし、駿斗もまた、歌うように自分の術式を紡いだ。

「——その樂園から追放されし墮天使よ。今こそ立ち上がる時。その手に持つべきは武器。その身に宿すべきは闘志」

駿斗の目の前に、光り輝く巨大な魔方陣が現れた。今までに彼が使ってきたものとは違う、直径数十メートルにも及ぶものだった。

そのすべてに、濃密な天使の力が込められている。

「創造の主に逆らいし者たちよ、ここに集い我が敵を撃て！」

そして魔方陣から、大量の光の矢が飛び出した。

あまりにも多すぎるその攻撃は、点攻撃ではなく面攻撃となっていた。そして、アックアによる必殺の一撃と衝突が起こる。

拮抗する。

アックアがそのメイスに力を集中させている中で、しかし彼は確かに言葉を聞いた。つまり、駿斗の口から紡がれる詠唱を。

「——そして、その者たちの先頭に立つ墮天使の長よ。今こそ反乱の烽火を立ち上げ、怨敵を撃つため、その剣をわが手に持たせよ！」

この状況で、新たな術式を使うつもりなのか。

そう考えたアックアであったが、それはある意味において正しく、しかしある意味において間違っていた。

後方のアックアの体が、1本の巨大な光剣により吹き飛ばされた。

(今のは、異なる術式を使ったのではない……！)

そう、駿斗が使った術式、『エンジェル・レピリオン幻想天軍』と、『ルシフェル・トリーズ幻想光剣』は2つで1つの術式。『幻想天軍』の詠唱の後に続けて『幻想光剣』の詠唱をすることで、魔術的な記号を補強、その威力を増大する。

分かりやすく言えば、『幻想天軍』の詠唱を「ABC」と発音するならば、『幻想光剣』の詠唱が「ABCDE」と発音することで発動するように、あらかじめ術式を組んでおく。そうすれば、「ABCDE」と発音するだけで、あとは天使の力の制御をするだけで2つの魔術が発動される。

しかも、前半で発動される魔術によって、後半の術式を構成する魔術的な記号が補強・強化されるといっておまけつきだ。

スヘルチエイズ
追跡詠唱。

それまでに存在しなかった技術で生み出された魔術を受けたアツクアの体が飛んでいくのを駿斗は確認する。彼は、すぐにその後を追いかけた。

魔術の才能

ジミーの持つ『縮絨棒』は、本来毛織物の折り目を密にするために使われた棒である。

ジミーとは、もともと十二使徒の1人であるアルファイの子ヤコブに由来する。彼は最期に『神の子』を讃える言葉を神殿の屋根から叫んだ後、十字教を迫害する者の手で突き落とされ石打ちにされ、そして縮絨棒で頭を叩き潰された。そのエピソードによって、彼の象徴の1つとして縮絨棒が用いられているのだ。

となれば、ジミーの扱う縮絨棒の破壊力のすさまじさの理由が分かる。

華奢な体つきの五和など、その槍ごと吹き飛ばされ、その肋骨が砕けてしまうだろう。

両者の得物が交わる。

だが。

「はあっ！」

「っ!？」

ガツキイイ！と。

決して受け止めることのできないはずの一撃を、五和は海軍用船上槍フリウリスピアで受け止めた。

ジミーの想定とは、異なる結果となる。

「その槍は……」

「ええ、樹脂を1500回ほど重ねてコートしています」

表現された象徴は樹木の年輪。そして、そのことよって発動された術式は『植物の持つ繁殖力』だ。五和の槍は術式が限界を迎えるその時まで、時間と共に文字通りその硬度・耐久力が“成長”する。

『雑草』の力を知れ、と五和は宣言した。

「しかし、他にも複数の術式を重ね掛けしていますね……」

「……古今東西あらゆる文明において、なぜ衣服が生み出されたのか。その隠れた術式の意味を説明する必要がありますか？」

見ると、彼女の着ているトレーナーの脇の辺りが不自然に弾け、白

い肌が露出していた。

『装着者の身を守る』。これが最も重要な意味だ。最も、あくまでダメージの一部を肩代わりさせる補助的な術式であり、どんな攻撃でも防げるような便利なものではない。

しかし、ジミーにはそれよりも驚いたことがあった。

(私たちには、天使テレスマの力による身体強化がはたらいているはず……)

そう、そのスピードについてきたことだ。

『十二使徒』はさすがに『聖人』には及ばないものの、それでも並の魔術師が対処できて良いものではない。当麻にしても、間一髪で避けるのが基本的で、あるいはその右手があるからこそ今までの戦いに対処できていたのだ。

しかし、彼女はその動きに正確についてきていた。

周囲から突き出されてきた攻撃に対処していると、硬貨袋から雷撃を放っていたレビが叫んだ。

『天草式』全員が、1つの生き物と化しているような……!」

その言葉を聞いて、残りの2人も気が付いた。

50人近い天草式のメンバーたちの動きには、一定の規則性がある。一種の独特の規則性に基づいて、『中心』が五和から別誰かへと動き、それを探そうとすれば全体に霧散し、そして探すのをやめて戦闘に集中すれば再び五和へと『中心』が戻って来る。

1つの組織の中を、まるで『中心』という生き物がぬるりと動いているような、奇妙な感覚だった。

(どうやら、互いが互いの動体視力や運動能力を補強しあっているようですね……)

まるで、驚異的な力を持つ者との戦闘に慣れているかのような挙動に彼らは眉をひそめるが、しかしすぐに気が付いた。

かつて、天草式十字凄教は『聖人』が属していたのだ。だとすれば、『聖人』よりも遅い彼ら『十二使徒』は天草式にとって、その速度はそれほど大きな脅威ではないのかもしれない。

だが、普通の人間には扱えない術式と天使の力こそが、『十二使徒』の本懐だ。

霊装に魔力を込めてそれを発動しようとするその時。

チカリ、と。彼らの周囲で何かが光った。

(鋼糸……！)

1人辺りが操る糸は7本。そして、天草式の50人から、それが放たれている。合計350本もの蜘蛛の糸が、全方位から『十二使徒』の3人に襲い掛かった。

しかし、その次に起きたのは『十二使徒』の悲鳴でもなく、その体が地面に倒れる音でもなかった。

「神より授けられし子は、復活ののち聖地の司教の下へと現れる！」

ジミーの詠唱の声。そして、爆発音。

明らかに、常人には使用不可能な量の天使の力による爆発が起きた。

それは彼らに襲い掛かろうとしていた鋼糸を引きちぎりながら吹き飛ばし、そして天草式の面々もその爆発によって周囲へ投げ出される。

(これは……)

地面に叩き付けられた五和は、海上用戦闘銃フリウリスピアを握りしめながら歯噛みする。

「既にご存知かと思いますが、ジミーという名は小ヤコブに由来するものです」

彼は、縮絨棒を片手で弄びながら言った。

「十二使徒には様々な伝説が存在します。むしろ、聖書よりもその他の書物に記載されていることが多いですが……その中で、復活した『神の子』が小ヤコブの前に特別に現れた、という話が存在します」

あなた方も十字教徒の端くれというのならすでにご存じでしょうがね、とジミーは言う。

「二度だけ、特別に『神の子』との面会を許されたわけですが、それはこう言いかえることもできますよね？ すなわち、『小ヤコブは特別に神の子から奇蹟を得ることを許された』と」

つまり、それがこの術式の正体。

小ヤコブという『十二使徒』の中でも、彼に対応しているジミーだ

けが使用できる術式。『通常では不可能な神の子の奇跡Ⅱ魔術を引き起こすことができる』。

だから、常人どころか他の『十二使徒』にも使用不可能な規模の莫大な力を行使できた。

「そして、この場にいるのは私だけではありませんよ?」
「ッ!?!」

その声に呼応するかのように、レビの硬貨袋が恐ろしい速さで五和に直撃した。その華奢な身体が、他の天草式の体を超えて飛んでいく。

「がっ、アアあああああああ!」

五和の喉から絶叫が漏れる。

要の1人である五和が吹き飛ばされたのを見て、完全に陣形が崩れた天草式に3人はとどめを刺すため魔術を発動しようとした。

しかし、その時。彼らの動きが止まった。

ゾン! と。

不意に、辺り一面に、得体のしれない殺気が充満する。

これは、満身創痍の五和どころか、どの天草式の面々から放たれたものでもなかった。

3人は、自分の霊装をそれぞれ掴み直すところ言った。

「命拾いしましたね。あなたの主に感謝することです」

そして、彼らはどこかへと消え去って行った。

「主に、感謝しろ……?」

明確に負けたのかどうか分からない曖昧な結果。

アスファルトやコンクリートが砕けている周囲の惨状の中で、自分たちが生き残ったことに戸惑いを隠しきれないまま、五和は眩いた。

その場所から200メートルほど離れた場所で、1つの影が3人の男と対峙していた。

「私の『仲間』たちが、世話になりましたね」

長身に2メートルを超える日本刀『七天七刀』を装備し、後ろで束ねられた黒い髪は腰まで届いている。服装は腰のところ絞ったTシャツの上から、右腕の部分が肩の所から切断されたデニム地のジャケットを羽織っていた。下はジーンズであったが、それも左足の部分だけ太股の所から切断されていた。

「そういうえば、極東には一撃必殺を信条とする『聖人』がいたのでしたね」

トマがそう言った。

国家や組織に所属する聖人は、そう簡単にあちこちで活動することができない。しかし、この聖人はそれらのリスクを承知の上で彼らの前に立ったのだ。

「しかし、天草式の聖人は戦闘を嫌う性根と聞いていたのですがね」「ええ」

ジミーの言葉に、神裂は肯定の返事を返した。

「私もそう思っていたのですが、どうやら私は自分で考えていたよりも、ずっと幼稚な人間だったようです」

彼女は自分の背負っている魔法名を自覚していても、『怒り』は7つの罪の1つだと分かっている、『十二使徒』の前に立ちはだかった。「グダグダと悩むのはやめましょう。彼らの決意を無駄にはしない。それだけで十分です」

理不尽な暴力を受けて倒れた少年のために。

その暴虐を止めるために立ち上がり、圧倒的な力によって蹂躪された仲間たちのために。

彼女は握りつぶすように、刀の柄へ手を伸ばした。

「おおおおああああっ！」

裂帛れっぱくの気合と共に神裂の手から放たれるのは、神速の抜刀術。特定の宗教に対し、別の教義で用いられる術式を迂回して傷つけることで、一神教の天使すら傷つけることのできる必殺の一撃。

十字術式にできないことは仏教術式で。

仏教術式にできないことは神道術式で。

神道術式にできないことは十字術式で。

互いの弱点をその都度適切な形で補い合い、あらゆるものを切断する唯一無二の攻撃術式——唯閃。

『十二使徒』は常人に比べれば優れた身体能力を有するものの、生身で音速を超える動きをする『聖人』の射程圏内からは逃れることができない。さらに『唯閃』使用时には、神裂は特殊な呼吸法で練り上げられた魔力によつて、その身体能力を人間の限界を超えたものへと高められている。

だが、何人にも受け止めることのできないはずの斬撃を受けても、トマはその意識を飛ばすことも、あるいは体が真つ二つにされることもなかった。それを見た彼女は知る。

彼らは常時防御術式を発動している。神裂を見てから術式を組み上げたのか、あるいは常にそのようにしているのかは分からないが。その上、彼らもまた、神裂と同じように多種多様な術式に精通している。

神裂が仏教術式、神道術式とその攻撃の型を変えていくのに合わせて、彼らもわずかに遅れが生じてはいるもののその防御の型を変えていく。音速を超える戦いの最中に別次元の『読み合い』という頭脳戦が並行して展開されていた。

物理と魔術。

肉体と精神。

騒乱と瞑想。

一般に、魔術を扱うのに才能は不要とされる。そもそも、魔術とは才能なき者が才能ある者に追いつくために生み出された技術なのだから。

しかし『聖人』という極めて稀な才能を持つ神裂と『十二使徒』という特殊なポジションに選ばれた3人、あるいは『聖人』であるアツクアとこの世に1つしかない『幻想創造』イマジンングクリエイトという力を持つ駿斗を見ても、はたして同じことが言えるのだろうか。

「すばらしいですね」

トマがそう言うと、ジミーもまた言った。

「2人の少年のためにこれだけの人員が駆けつけるとは、大した人望です。敵ながら見事、と言っておきましょう」

「しかし、我々の前に立ちふさがるのであれば、蹴散らすのみです！」
体に風を纏ったトマが、その拳を突き出しながら叫ぶ。

しかし、その直後ドバツ！ という切断音が聞こえる。彼らから発生していた水や土の塊が切り裂かれた。

ワイヤーを使った『七閃』だ。

「……この程度で全力と思われるのは心外です。」

その直後、あらゆる角度から細いワイヤーがすさまじい速度で彼らに襲い掛かった。

あるワイヤーを縮絨棒で弾き、横から迫ってくる斬撃を宙を舞う硬貨袋が防いだ直後——突如として彼らを紅蓮の炎が包み込んだ。

空中を引き裂くワイヤーの軌跡が、三次元的な魔方阵を描いたのだ。そう気が付いた直後には、爆炎が彼ら3人の体を包み込んでいた。さらに、立て続けに爆発が起きるが、それを鋭い斬撃が切り裂き、そして2本のワイヤーが『十二使徒』の腕や足を浅く切り裂いた。

3人の男たちが、危なげなく宙に浮いた肉体を制御してコンクリートの上へと着地する。

「やはり、あなたも結局は天草式の一員という訳ですか。基本的にやっていることは同じのようですね」

天使の力で傷ついた肉体の出血を抑えながら、ジミーが言った。

「だが、扱うものが聖人ともなるとここまで変わるものなのですから……つくづく、才能とは残酷なものだと思ひ知らされます」

「訂正をしていただきましょう」

神裂はそう言った。

彼らと同じように、才能あるものの立場でありながら。

「確かに、彼らに『唯閃』は扱えません。しかし、その土台となった剣術、鋼糸、術式、その組み立てと占術のパターンは、全て天草式の先達に教えていただいたものです。この結果は才能などというちっぽけなものではなく、彼らの歴史が創り上げた結晶」

自らの師である仲間たちを侮辱することなど許さない。ましてや、

それだけの力を自覚しておきながら、ただの高校生相手に容赦なく振りかざすような外道に、誰かを見下すような資格などない。

しかし、自分への戒めでもあるそれを言った神裂に対し、ジミーは平然と告げた。

「そこで怒りを覚えること自体が、手ぬるいと言えますね。歩兵が偵察に出かけたところ、不意に敵の戦車と遭遇した。……それが戦場というものです。逃げ道や対抗策など、あらかじめ用意されているものではありません。自らで何かの手段を持たぬものは、ただ砲撃を受けてその体が消し飛ぶのみ。あるいは、神に祈ればなんらかの慈悲を受けられることもあるでしょうが」

「それはあなたの論理です」

「だが、その領域に踏み込んできたのはあなた方です」

さらに、トマが付け加えて言う。

「いや、あの少年たちに関しては、誰かの手で引きずりあげられたのでしたか？」

何も言わず、神裂は動いた。抜刀から放たれた斬撃が『十二使徒』を襲い、しかし彼らはそれを躲し、あるいは弾き、受け流して攻撃に転じる。

縮絨棒を神裂が避け、炎を纏った拳を刀で受け止めた直後に左右から猛烈なスピードで硬貨袋が迫る。それを背後に跳んで避けたところで、雷の剣を生み出したレビが周囲から放たれてきた鋼糸を切り裂きながら神裂にその刃を突き立てる。

「それが分かっているながら、巻き込まれただけの一般人と認識しておきなから！　なぜ『聖人』の力を、『十二使徒』という力を叩き付けたのですか！」

普段では聞くことのできない、感情むき出しの怒号だった。

「戦う理由など、語ってどうするのですか？」

しかし、感情を爆発させる神裂に対して、彼らはどこまでも冷静だ。「己の行いに自信があるのであれば、それまでの道のりに言い訳など不要です。行動の結果意志が伝わることはありません。しかし、最初から用意された台本の如きものに、どれほど真実が含まれていると

いうのでしょうか」

硬貨袋から放たれた雷撃が、神裂を貫く。

一瞬その動きを止められた彼女に縮絨棒が叩き付けられ、神裂はそれを刀で受け止めようとする。だが、受け切れずにさらに10メートルほど吹き飛ばされた。

『十二使徒』の言葉には芯がある。しかし、神裂にはそれが見えない。それでも、彼女は彼らの持つ『理由』がああ少年たちになうとは思えなかった。

あの時、魔術に対しては全くの素人だったのにもかかわらず、インデックスを守るために迷いなく『魔女狩りの王』イノケンティウスを扱うスタイルに立ち向かった彼らに。そして、1人の修道女を守るために200人以上の完全武装のシスターにたった2人で喧嘩を売ったあの少年たちに。神裂火織は刃を振るいながら、思い切り奥歯をかみしめる。

今もベッドで眠っているであろう少年の想いを。そして、その少年の身を誰よりも案じているその親友の想いを。

こんな才能『しかない』卑怯者に、踏みにじらせはしない。

そして。

50人近い天草式十字凄教の面々は、治療のために巻いた包帯自体が引きちぎれ、その内側から赤いものが滲んでいるという状況にもかかわらず、戦闘によって破壊された第四階層の穴の淵から、第五階層で繰り広げられるその戦いの様子を見ていた。

そこで繰り広げられているのは、銀河と銀河のぶつかり合いだ。次々と繰り出される魔術は、そのどれか1つが現天草式にぶつかれば彼らを一撃で消し炭にするようなものであったが、それらもやはり圧倒的な魔術で迎撃されていく。

その銀河のうちの1つは、神裂火織だ。世界に50人といない本物の聖人である彼らの女教皇だ。プリエステス

彼女が戦っている。おそらくはターゲットとされてしまった一般人の少年を助けるために。そして『十二使徒』に襲われていた現天草

式の仲間たちのために。

だが。

「……、」

ガシャン、という金属音が鳴り響いた。最初の1つが鳴ると、次々に武器を落とす音が続いた。その武器は彼らの努力の結晶だ。しかし、それを落とした彼らはただ1つのことを考えた。

自分たちは、一体何をやっていたのだろう。

ただ圧倒的な無気力感が、天草式の間で広がっていく。

どれほど努力したところで、自分たちは神裂の掌の上から逃れることはなかった。『彼女』は愛らしいものでも見るような眼でそれらを見つめ、そしていざ危険が迫れば誰にも到達できないような高みで戦いを繰り広げる。

結局は、遊びにしか見てももらえなかったのだ。当人たちがどれだけ本気であつたとしても。

もちろん、彼女はそのような気持ちなど微塵もないのだろう。だからこそ、そのようなことしか考えられない自分たちの矮小さに、彼らは打ちのめされていた。

もしもあの少年たちがここにいれば、彼らはそのようなことにかまったりしないであろう。

仮にその右手に、あるいはその肉体に特殊な力など宿っていないくとも、目の前で『神裂』という仲間が戦っており、傷つけられていく様子を見ればそれだけで拳を握ってあの中へと飛び込んでゆくのだろう。

しかし、今の天草式にその信念は、その強さはなかった。

聖人の戦いは続く。あまりに圧倒的な力は見ているだけで人の心を抉っていくことも知らずに、彼女は何人にも追いつけない力を持って衝突する。

御坂美琴は、トボトボと深夜の街を歩いていた。

温泉のスタンプリリーの景品である『湯上りゲコ太ストラップ』を得るために外のお風呂施設を利用した彼女であったが、折悪く、なんか『無酸素警報』という第二十二学区特有のデンジャラスイベントに遭遇して、今に至る。

(だーちくしょう……結局、寮のユニットバスを利用する羽目になるのか)

そう考えた彼女であったが、どういう訳か第二十二学区の出入り口が封鎖されていた。どうやら、何らかのシステムトラブルであるらしい。

野次馬根性がどこぞの少年たちに負けず劣らず強い彼女であるが、しかしゲートを管理しているおじさんと話している途中でバチン！という音を立てて彼女の前髪から火花が飛び出してしまった。彼女にしては珍しい、能力の暴走だった。

学園都市特有の感覚であるが、自分の能力を制御できないのは恥ずかしいのだ。そのため、御坂は気恥ずかしさを覚えながら撤退するこ

とに。もしも彼女が魔術に精通していれば、今のは『人払い』という人間の感覚や認識に影響を与える術式が彼女の能力の制御法と競合を引き起こしたことに勘付いたかもしれない。

とにかく外に出ることができないため、彼女は第七階層にあるグレード高めのホテルに足を運ぶ。

しかし、らせん状の階段を降りた時だった。

「ちよ、アンタ何やってんのよ?」

前方の暗がりから街灯の下へと出てきた少年を見て、彼女は慌てて駆け寄った。

上条当麻だ。

だが、その様子はいつもの飄々としたものではない。青ざめた顔。着ているのは手術着か? 身体中にまかれた包帯はどこどころがずれていて、赤いものがその下から滲んでいた。歩き方も、頼りなく風に吹かれるろうそくを思わせる。

「御坂、か……う？」

街灯の柱に体を預けるようにして、上条は立っていた。さらに、その眼の焦点が合っていないことに気が付いて御坂はギョツとした。

当麻は唇を動かして何かを言ったが、御坂には聞こえなかった。しかし、それでも彼はゆっくりと、体を壁に預けながら歩いて行く。しかし、御坂の横を通り過ぎようとした時、ガクン、とその膝が落ちた。その手に持っていた、グローブのようなものも落ちた。彼女は慌ててその体を支える。

「バカ！ アンタ、その怪我どうしたのよ！ そっちについている電極のコードとか……まさか、どっかの病院を抜け出してきたとかじゃないでしょうね!」

「行か、ないと……」

しかし、その次に聞こえた言葉で彼女はさらに愕然とした。

「あいつら、多分、今も戦っている。だから、行かないと……」

その断片的な言葉で、御坂の全身に震えが走った。

この少年とその親友が、常々何かの面倒事に巻き込まれているのは知っていた。しかし、それはあくまでも喧嘩の延長線上のようなものだと思っていた。一度だけ学園都市最強の超能力者^{レベル5}と戦いはしたものの、それは人生で1度きりの物だと思っていた。

しかし、違ったのだ。この少年は、文字通り死闘の中を潜り抜けてきた。

それでも、この少年は自分の腕をつかむ御坂を不思議そうな顔をして見ていた。

それは、どうして彼女が立ち尽くしているのか、全く理解してない顔だった。他人に心配をかけるようなことは隠しているから、誰かがピンチに都合よく駆けつけてくれることなどありえないと、完全に信じ切っている顔だった。

あるべき場所へ

「何で……言わないのよ」

どうして、この少年は何も言わないのか。

助けてほしいとか。力を貸してほしいとか。いや、もつと単純な言葉で良い。怖いとか、不安だとか。

彼がそのような言葉を口にしたことは、思えば今までに一度も聞いたことがなかった。

「御坂、何言ってる……」

それでもとぼけようとしているのか、あるいは言葉の意味がよく分かっていないのか、そのように言う当麻に御坂はため込んでいた物を吐き出すように言った。

「知っているわよ！ 決して具体的ではないかもしれない。だけど、アンタたちが日頃から訳の分からない騒動に頻繁に巻き込まれていることくらい！ 誰かのために体を張って戦っていることくらい！

私は知っているわよ！」

彼女の言葉は止まらない。

これは、この少年が隠したがっていることに土足で踏み込むようなやり方だ。デリカシーのかけらもない、ともすればプライバシーの侵害にすらなるような意地汚い方法だ。

だから、どうした。

御坂は、かつてそのような方法で2人の少年に救われた。1万人の『妹達』^{シスターズ}と共に。

ならば、この少年もそのような方法で救われても良いはずだ。

「アンタの中にはそれくらい大きなものがあるってことくらい分かる。でも、それは全部たった2人で抱え込まなくちゃならないものなの？ 頼れる友人が1人いるからって、どうしてその2人だけで終わらせてしまうの？ こんなにボロボロになって、それでもまだ他の人には隠れて戦い続ける理由って何なのよ！」

当麻は、その言葉を黙って聞いていた。

「私だって、戦える。アンタの力になれる！」

彼女の言葉は、学園都市第3位の『超電磁砲』があるからではない。仮に、その力をすべて失ったとしても、それでも御坂は絶対に同じことを言えると思える。

「アンタたちばかり傷つき続ける必要なんてどこにもない！ だから言いなさい。今からどこへ行くのか、誰と戦おうとしているのか！ 今日私は私が戦う。私が安心させて見せる！」

「みさ、か」

「言いなさい！ どうしてアンタたちは人を助けておいて、自分たちは人に助けを求めないのよ！」

一気にまくし立てるように叫んだ御坂の言葉を聞いていた当麻だったが、そこではじめて、少しだけ笑った。

「……そう、か」

ようやく、当麻が唇を動かした。

しかし、その次に出てきた言葉は肯定でも拒絶でもなかった。

「でも、違うんだ」

ゆっくりと、しかし確実にその言葉を紡ぐ。

「でも、ボロボロになるとか、2人だけで戦うとか。俺たちばかりが傷つき続ける必要はどこにもないとかさ」

今まで誰からも言われなかったような御坂の言葉。だが、それでも当麻の芯は揺らがなかった。

なぜなら、彼の、いや、彼らの芯はそこではないからだ。

「違うんだ。今まで体を張って、2人で背中を預け合って……そうやって親友と2人で戦ってきたのは、そんなことを言うためじゃないんだよ。それが、俺たちにとっての信じるってことだから」

これが、彼らの関係だった。

友情だった。信頼関係だった。だからこそ、彼らは親友以外の人間に助けを求めようなことをしない。

確かに、助けてくれと言えば大勢の人が助けに来てはくれるかもしれない。だが、果たしてそれは正しい行動なのだろうか？

親友が勝ち残る可能性は上がるだろう。生き残る可能性は上がるだろう。

しかし、それはどれほどの『仲間』を呼べば良いのだ？

そして、そのような助けを求めたところで、本当に『何か』を残せるのか？

今まで戦ってきたのは、決してお涙ちようだいの自殺願望などではない。ただやるべきことの先にある種の終わりが待ち構えていて、それでも前に進んだのだという1つの結果だ。

信念があるからこそ、彼は後悔しない。たとえば、親友がどんな面倒事を2人の間に持ち込んだとしても、全てが終わった後には、笑顔で『ありがとう』と言える。当麻は、絶対にそう信じている。

「悪い、御坂。お前はもう帰れ」

誰かに任せればよいのではない。

絶対にやらなければならないなんて強制力もない。

しかし、それでも当麻は御坂の下を離れて進んで行く。

(どうしよう……)

その後姿を見ながら、しかし御坂は動くことができなかった。

彼女が言ったことは間違いではない。彼は重傷だ。すぐに病院に戻るべきだ。あるいは、彼女は付き添いでその現場に行くという選択肢もあるはずだ。

しかし、彼は自分の足で親友のいる戦場へ行くことを望んでいる。ならば、笑顔で送り出して無事に戻ってくることを願うのが正しい。なのに。

(どうしよう。全然納得できない)

知らず知らずのうちに、彼女は自分の胸に手を当てていた。そして、自分の内側に眠る感情にようやく気が付いた。

論理や理性や体面や世間体や恥や外間までもが関係ない、ただただ自分自身を中心に据え置いた1つの意見こそが、まさしく御坂美琴という人間の核なのだ。惨めで醜くわがままで駄々をこね——それでいてどこまでも素直なむき出しの『人間』なのだ。

彼女はこの感情の名前を知らなかった。

しかし、今日この時、この瞬間。

彼女は自分の内側に眠っているこの莫大な感情を知る。学園都市の中で7人しかいない超能力者^{レベル5}として、『自分だけの現実』という形で自分の精神の制御法を完全に熟知しているのにもかかわらず、それらすべてを粉碎するほどの、圧倒的な感情を。

上条当麻の背中が、闇の中へと消えていく。しかし、御坂は最後まで彼を止めることができなかった。

当麻の言葉に納得したわけではない。その行動に心打たれたからでもない。

気づいてしまった感情の片鱗に胸を圧迫され、指1本動かせなかったのだ。

後方のアツクアの体が宙を舞い、そして先ほどの現場からさらに離れた場所、第二十二学区第四階層の端に彼らは移動していた。

「ふう」

「？」

宙で追撃を警戒していたアツクアであったが、駿斗はアツクアに一定距離を保ちながら近づいてきただけで、それ以上の追撃をしないどころか、圧倒的な力を持った4枚の翼をひっこめて『^{アルヒキヤイ}権天使』を解除してしまう。

その行動に、アツクアは怪訝な表情をしつつも、警戒心を上げてメイスをもう一度構えなおした。

アツクアを追跡詠唱^{スベルチエイズ}という新技術で打ち破り、まともに与えたダメージは安いものではない。だからこそ、歴戦の傭兵は警戒心を上げたのだ。

並の『聖人』を上回る力を持つそれをやめたのは、必ず理由があるはずだ。

つまり、それは新たな切り札。

(ならば、一太刀をもらっても返す刀で粉碎する！)

相手はあらゆる力を生み出す^{イメージクリエイト}幻想創造。想定外の攻撃が来ても何

もおかしくない。むしろ、今までが既存の魔術のセオリーに忠実過ぎたのだ。

だからこそ、攻撃を防ぎすぎるのは不可能と考えた上で、確実に倒す。そう考えて攻撃を繰り返そうとした次の瞬間、駿斗から得体のしれない圧迫感が来た。

(何だ……これは?!)

アックアは魔術を繰り出す。巨大な水のハンマーが、槍が、駿斗の周囲から殺到してその体を貫こうとする。

駿斗が立っている地点で爆発が起きる。

「陰陽ノ鏡、発動」

だが、その中からはまるでダメージを受けていないような駿斗が現れた。

そして、その右手には先ほどまでの短い杖ではなく、鏡のついた腕輪のようなものが装備されている。

鏡。そして、駿斗が言った『陰陽』という言葉に、歴戦の猛者であるアックアはすぐに気が付いた。

(風水……陰陽道であるか)

占いを始めとして、魔術を使わない人にも非常にポピュラーなものだ。そして、魔術の世界にも陰陽道専門の魔術師というものは存在する。

若くして陰陽博士と呼ばれた土御門元春などが良い例であろう。

「行くぞー」

暴風が起こる。さらに、そこに水も加わって槍と化した十数本の激流がアックアに狙いを定め、襲い掛かってくる。

アックアもまた、やはり魔術でもって迎撃し、そして圧倒的な速度でメイスを敵に叩き込む。

駿斗は、敵のメイスを腕輪で受け止め、そして拳を突き出してきた。アックアがそれをいなすと、駿斗へ水の槍を襲い掛からせる。

だが、駿斗は今までのように魔術で迎撃することもなく、それらを無視してアックアへと攻撃を仕掛けてきた。傭兵がそれらの攻撃をいなし、そして駿斗の立っている場所が再び水に包まれる。

だが、それでも駿斗には傷一つ付かない。

「気づいたか？」

「相剋、であるな」

短い言葉で、答え合わせがなされる。

陰陽五行説、というものが、かつて中国で生まれた。西洋で発達した五大元素エレメンタルに似て非なるそれは、万物を『木』『火』『土』『金』『水』であらわそうとする『五行説』と、神羅万象、あらゆるものを『陰』と『陽』に分類しようとする『陰陽説』が合わさってできたものだ。

その中で、『五行』にはその5つの間に、『相生』『相剋』『比和』『相乗』『相侮』という5つの関係が考えられていた。

その中でも、駿斗がアックアの魔術を凌いだのは『相剋』である。これは、相手を打ち滅ぼして行く、陰の関係だ。

木剋土——木は根を地中に張って土を締め付け、養分を吸い取って土地を痩せさせる。

土剋水——土は水を濁し、水を吸い取り、常にあふれようとする水を堤防や土塁等でせき止める。

水剋火——水は火を消し止める。

火剋金——火は金属を溶かす。

金剋木——金属でできた斧や鋸は木を傷つけ、切り倒す。

西洋の五大元素エレメンタルにも相生などの考えは存在するものの、ここまで関係を考えられてはない。

(……それだけではないのである！)

そして『風水・陰陽道』ともかかわりが深いので、地脈や龍脈を利用しやすい。すなわち、周囲の力を徹底的に利用できるのだ。

だが、アックアが感じ取ったのはそれだけではない。

「疑問に感じているな？」

駿斗の問いかけに、アックアは沈黙を返す。

「確かに、ただ単に地脈・龍脈を利用するだけでは、足りなかった。俺が扱える範囲の魔力・天使の力を扱おうとしても、それでもこれからの敵と戦って行けるかどうかは不安だった」

しかし、そんな時格好のエネルギーを見つけた。

まるで未開拓の分野であり、そして駿斗以外に扱える人間はいないエネルギーを。

「学園都市にいる人口230万人。その能力者が、無意識のうちに出している能力の残滓」

AIM拡散力場。

アックアはその言葉を知らないが、それでも駿斗の言葉から想像がついたのであろう。

方や、偶像崇拜を用いて『神の子』の力の一端を握ることができるのは、偶像崇拜をするような人間が世界中にいるからだ。つまり、『聖人』の力は十字教徒によって支えられている。

駿斗の場合は、それが学園都市230万人によって支えられたAIM拡散力場だ。

だが、おかしい。

魔術を扱う上で、科学から生み出される能力者の残滓など、邪魔にしかならないはずだ。確かに目の前の男なら扱えても不思議ではないが、その2つが独立している様子がない。

同時に扱っているというよりは、一纏めにされている感じがする。いくら幻想創造でも、相反する2つを同じように扱えるものなのか……？

「2つを扱っているのではない。AIM拡散力場の質を変えているんだよ」

だが、アックアの疑問を呼んだように駿斗が答えた。

風水においては、土地によって『気』の良し悪しというものが当然ある。だから、悪い土地があつた場合その悪い『気』を良いものに変える術も、当然考えられている。

そして、駿斗はあらゆる異能の力を素で感じ取れる。

そんな彼にとって、『悪い気』を『良い気』に変える方法を創造するのは、知識さえそろえばそこまで難しいものではない。知識が欲しければ、インデックス禁書目録という最高の教師がいつも近くにいる。

「とはいっても、どこでも使えるような便利なものではないけどな。使用できる条件は限られているし」

彼はそう言うのと、その右手に力を集めた。そして、相手の懐へ一気に飛び込む。強力な一撃が、その威力でメイスごとアックアの体を貫通し、吹き飛ばした。

駿斗は、『権天使』のような速さはないものの強力な力を扱うことができる。対してアックアは、純粋な腕力に頼るしか方法がない。

学園都市230万人に支えられた力でもって、駿斗はアックアに立ち向かう。

「テメエの幻想は、ここでぶち殺す！ 親友の敵も取らなきゃならねえからなあ！」

駿斗の周囲から土や水が飛び出す。アックアはそれを迎撃しようとするが、しかし、量が多すぎる。間に合わない。

先ほどまでは物量においては対等であった。だが、駿斗の『陰陽ノ鏡』によって、それは覆された。

「分かったことがある」

さらに、その激闘の中駿斗はアックアに向けて語り掛ける。

「テメエは単に『聖人』だとか『神の右席』だつてわけじゃねえ。そもそも、『神の力』^{ガブリエル}を司る『後方』に身を置いているにもかかわらず、さつきから『水』を扱った一般的な魔術しか使おうとしない。並の魔術師には使用不可能な、『神の右席』特有の術式——ヴェントの『天罰』だとかテツラの『光の処刑』みたいによ」

駿斗の拳がその強靱な肉体を後ろへとのけぞらせた。カウンターでメイスが放たれるが、魔術的で増強された破壊力は全て相剋され、『聖人』としての腕力は『天使の力』による身体強化で対等に並ばれてしまう。

「それはなぜか、つて考えた時に思い出したのが『御使墮し』^{エンゼルフォール}。神の力っていうのはそもそも、ゴモラつて都市を丸ごと焼き払ったり、最後の審判では世界を壊すために活躍している。術式を組み立てようとするならば、そういった『分かりやすい』破壊能力だつて得ることができたはず」

駿斗が真実を述べていく。

幾重にもかけられた鍵が、次々と外されて行く。

「それをせずに、わざわざお前は『受胎告知』なんて迂回をしてまで『聖母』の属性を得ることを選んだ。普通に考えたら回りくどすぎる」

暴風がアツクアを襲い、そしてそれを切り抜けた直後にその下の地面から無数の杭が現れる。

「だが、そんな方法を選んだ理由として、最も簡単なものが考えられる——そう、お前は『神の右席』であるとか以前に、もともと『聖母』の素質を持っていたんだよ」

聖母崇拜。

『神の子』を産むという、十字教の中でも最高の奇蹟を起こした存在として、やはり強大な力を持つ。また、世界のルールとして厳正な『神の子』よりも例外的な慈悲を与えてくれる存在でもある。そのために、その『奇蹟』の報告が多く教会に寄せられた結果、当時のローマ正教上層部は『このままでは聖母崇拜だけで独立してしまうのではないか』と危機感を抱いた程だ。

神の子と聖母。その2つを兼ね備えた、奇蹟的な逸材。

それが、アツクアだった。

だが、その大きな力には決定的な弱点がある。

「聖人崩し……それを喰らえば、本来『聖人』は力の制御を失って硬直するはず。だが、お前の大きすぎる力なら……もっと大きな変化が起きる。そう、2つの力が競合を起こし、そして暴走となる！」

メイスを弾いて相手を大きくのけぞらせ、一時的にその動きを封じた直後、地面に変化が起きた。

そこから現れたのは、コンクリートが形を整えて出来た、いばらの冠、十字架、槍だった。

駿斗は叫ぶ。

「俺が抑えつける！ バトンタッチだ！」

第五階層では、未だに『聖人』神裂火織と『十二使徒』レビ、トマ、ジミーの戦いが繰り広げられていた。

しかし、『唯閃』という術式によってあくまでも一時的に力をブース

トする神裂と、偶像崇拜によって力を向上させ巧みな連係によってそれを防ぎ、確実に攻撃を加えてくる『十二使徒』との間では徐々に差が広がっていき……そして、ついに限界が来た。

「が、アアあああああああー！」

ジミーの縮絨棒を受け止め損ねた神裂の体が、ノーバウンドで80メートル近くも飛ばされて行く。その体が砲弾のようにコンクリートの壁を突き破り、粉塵をまき散らす。

それでも、神裂は『七天七刀』を握りしめ、構えようとする。

「まだ戦うのですか。ですが……ここまでやって逆転の目などないでしょう」

ジミーは感心したように、しかし他人を見下すような眼で告げた。

「それはあなたが一番分かっているはずですよ。努力や祈りで奇蹟が応じないからこそ、あなた方のような『聖人』は重宝され、もてはやされますし、そのような力・奇蹟に届くために我々も『神の右席』や『十二使徒』といったものを生み出しているのですから」

「……もてはやされる、ですか」

ぽつりと、吐き捨てるような声で神裂は言う。

「そうですよ。生まれ持った才能、用意した武器の性能、戦う人員の数。そう言う歴然とした違いが出てくるのが戦場というものです」

ジミーが、さも当然と言うように告げた。

「そういったものが嫌だというのなら、初めから戦場になど来なければ良いのです。武器などというものは手にせず、いつも通り、日曜には教会に通い、神に感謝しながら家庭と仕事に生きる日々を過ごしていれば良いでしょう」

トビの硬貨袋が、4色に輝きながら宙を舞う。砲弾のような速度で神裂にせまったそれは、ワイヤーを引きちぎって刀と衝突した。

「力なきものが戦う必要などありません」

トマの周囲の地面が隆起し、神裂の周囲を塞いでいく。

「戦うのは真の兵士だけで良いのです」

神裂は1人だけで閉じ込められる。

そう、1人だけ――。

彼女は1人だけで戦っていた。

それが正しいことだと信じていた。

かつては彼女も仲間と呼べる人間たちと共にいた。背中を預け合って戦っていた。

だが大きな力は、やはり大きな力を呼ぶ。そして、大きな力が衝突すれば、当然戦いの規模も大きくなる。仲間も巻き込まれる。

そして、そのような戦いの中で仲間を全て守り切れはしない。あちこちに散らばるリスクをすべて排除した上で、安全な戦場を用意するなどできない。

かつて、彼女はそれを未熟と評した。

だが。

(なんて……なんていう、傲慢な考えでしょう)

天草式の魔術師が弱いから死んでしまった。本当にそうか？ ならば、どうしてあの少年たちは、仲間と共に戦えているのだ。みんなと一緒に戦い、最後には笑いあっているのだ。

結局は、もつと単純な話——神裂は、天草式を信じ切ることができていなかった。彼らの人格や精神ではなく、その実力を。だからこそ、彼女は自分の背中を正直に預けることもできず、必要のない敗北を重ねていたのではないのだろうか。

本当に弱かったのは、どこの誰だというのか。

『聖人』と『十二使徒』——選ばれた者どうしの戦いは、どこまで傲慢であれば気が済むのか。

「私は……大馬鹿者です」

神裂は、吐き捨てるように言った。

神裂も、『十二使徒』も、あるいは後方のアックアも、同じ。『特別な誰か』が全てを管理し、『それ以外のすべて』はただ黙って管理される。凡人がどれほど努力したところで、結局は無様な姿をさらすだけなのだから、何もせずに従っていれば良い——自分は、そんなことを知らず知らずのうちに、仲間に対して要求していたというのか。

彼女は、血まみれの唇を手で拭いた。手の中にある七天七刀を、改めてつかみ直す。

自分がとるべき選択は何か。

(分かっている)

本当の意味で『仲間』たちを救い出し、彼らが正真正銘の『仲間』であることを認めるにはどうすればいいか。

(分かっている！)

『十二使徒』という強力な敵を戦うためにすべきことは何か。理不尽な暴力を受けた少年と、今も親友のためにアックアと戦っている彼のために、神裂はどうするべきなのか。

(分かっている!!)

そして、彼女は叫んだ。

その時、現天草式の間人たちは、呆然とした様子で彼女の戦いを見ていた彼らは、確かに聞いた。

「……、……を」

世界で20人といない『聖人』の声を。

「……、……してください」

かつて天草式を率いていた元女教皇プリエステスの声を。

「力を貸してください！ あなたたちの力を！」

最初、彼らは自分たちが何を言われたのか分からなかった。だが、その言葉をようやく理解した。

あれほどの高みにいた彼女が、自分たちとは遠い存在だった彼女が、助けを求めている。

そのことを知った彼らは、震えていた。あるいは、涙を浮かべていた。

あの女教皇様が認めてくれた。

単なる重荷としての仲間ではなく、共に肩を並べるための戦力という意味での仲間として。

五和は、一度落としてしまった槍を、もう一度拾い上げた。同じように、他の者も武器を手に取った。

雄たけびを上げて繊維を奮い立たせるものがいた。世界で最も明

るい涙をこぼすものがいた。誰にも悟られぬように、そつと幸福をかみしめる者がいた。戦うことに対する怯えはそこにはなく、喜びが彼らの中であふれていた。

教皇『代理』の建宮齋字は、肩の荷がおりたとばかりに息を吐いた。そして、彼は天草式十字凄教仮の指導者として、最後の指示を出した。

「行くぞ……」

一言では足りず、もう一度。

「行くぞ！ 我ら天草式十字凄教のあるべき場所へ！」

叫び声と共に、彼らは戦場へと飛び出した。

聖人崩し

(な、に……)

レビ、トマ、ジミーの3人は、神裂火織のとった行動を理解できなかった。

聖人と『十二使徒』の間での戦いに、かつての仲間たちを巻き込ませるわけには行かないからこそ、神裂は敢えて隔てられた場所へと戦場を用意して戦っていたはずだ。

なのに、

「おおおおおおおっー！」

ある者は剣を携え走り抜け、ある者は槍を手に大きく跳ぶ。死を恐れぬ者たちはあつという間に集合すると、満身創痍の神裂を守るように布陣を築きあげた。

彼らからすれば、それは非常にもろい壁だ。

「弱者に救いを求めるとは……それほどもでに、命が惜しいのですか」
「そう見えますか」

神裂は、血まみれの両手で七天七刀を握りしめながら言った。その口元には、笑みすらあった。

「確かに、私の側にいることで、傷つけられてしまった仲間たちがいました。私はそれを恐れて、一度は天草式十字凄教から離れようとした」

ただし、と彼女は力強く言葉を切る。

「その悲劇は、彼らが弱かったから起きたものではありません」

神裂自身の、彼らを信じ切れなかった気持ち。心のどこかで彼らを見下し、自分の背中を預けようとしなかったその行動が。自分の力を過信し、大切な『仲間』という戦力を放置して1人で戦っていた彼女の傲慢さが。『守ってやる』という優越感が。

それらが、全ての元凶だったのだ。

その弱さを自覚し、彼女は克服へと歩み出す。

「だから私は克服します。彼らを信じ、背中を預け、互いが互いの力を最大限発揮することで、私は私の天草式十字凄教を取り戻して見せま

す！ 我々のリーダーは我々であり、我々の仲間是我々です！ そこに『聖人』などというたった1人の上司トッパなど必要ありません！」

神裂には、先ほどまでにはなかった芯のようなものがあつた。それは、己の行動に自信を持ったものが持つもの。

だが、勝機がないことには変わらないはずだ。そもそも、現天草式など、1人の『十二使徒』でも十分に対処ができるような相手。手負いの神裂を相手するのは2人で十分であり、結局は彼らは共倒れするのみ。

「根拠なき希望は単なる妄想に過ぎません！」

縮絨棒が振るわれ、神裂の刀と衝突する。しかし、その衝撃を殺すために天草式の面々が防御術式を展開し、そしてジミーの体が力負けして押されていく。慌ててトマが炎弾を放ち、ジミーの硬貨袋が砲弾のように放たれるが、それでも彼らはそれらを防ぎ、時には反撃に転じて行く。

いかに精神論を持ち出そうが、互いの実力差は変わらないはず。しかし、ここにきて神裂たちは『十二使徒』と拮抗した。

『十二使徒』とは、『聖人』と同様に偶像崇拜の理論によって、神の子に付き従っていた12人の聖者の力の一端を畏れ多くも仮受けたものを指します……そうですね？」

情報では、神裂と天草式の間には数年のブランクが存在するはずだ。

しかし、彼女たちは言葉すら交わさず、たった一息で全てを克服する。

「したがって、あなたたちはその力を得るにあたって『神の右席』が絶対に必要なのですよ！」

そう。

十二使徒は、神の子とは異なりその生まれは人間の間から生まれた存在である。

神の子によって指名・任命された、神の子の復活の証人。宣教のために派遣された者であり、神の子を王とする王国の大使であり、まだ神の子を受け入れていない人への使者——それが、十二使徒の本来の

役割なのだ。

したがって、彼らを特別にしているものは何か……そう言われれば、神の子、と答えることも可能であるが、しかしもう一つ可能性がある。

天使。

そもそも、神の子にしても受胎告知の時には大天使の一角である神ガブリエルの力によってなされている。

神の子が存在するためには、神が必須であるように。

十二使徒が存在するためには、神の子と天使が必要となる。

「その反面、あなたたちには弱点があります」

そう、たとえどんなに優れた兵器があっても、それを運用するための燃料と、それらの供給源がなくてはならないのだから。

「そう——つまり『神の右席』。あなたたちが彼らと行動を共にしているのは、単にその直属の部下であるというだけではありません。あなたたちは『神の右席』から力の一端を供給してもらっているからです！」

看破する。

その正体を突き止める。

「であれば、『神の右席』を撃破すればどうなるか。答えは問うまでもありません。力の供給が絶たれ、『ただの魔術師』へと成り下がるのみです！」

彼らが特別な資質を持っているのは、『神の右席』の存在によるものだ。

であれば、近くで力を供給している『神の右席』を撃破すればどうなるか。

その時、最高のタイミングで、横から青い体が飛んできた。その後には、1人の少年も。

「俺が抑えつける！ バトンタッチだ！」

そして、周囲に配置されたのは、コンクリートが形を整えて出来た、いばらの冠、十字架、槍——神の子の処刑の象徴。聖人は、神の子の力の一端を持っているがために、逆に神の子の弱点がそのまま弱みと

なる。

最も、こんな即席のガラクタで聖人が倒せるといふのなら誰も苦勞はしない。実際、神裂のような『ただの聖人』には大した効果はない。しかし、アツクアは『神の子』だけではなく『聖母』の素質も持った『特別な聖人』だ。

「揺らいでいます」

神裂はきつぱりと言い放った。そして、駿斗は3人の『十二使徒』を抑えにかかる。

「準備は整った……槍ロンギヌスを持つ者よ、今こそ『処刑』の儀の最後の鍵を！」
駿斗の言葉に応じるように、五和がおしぼりを取り出して、その上から槍を掴み直す。

管槍。

本来は掌との摩擦を上げて槍を突き出す速度を上げるためのものであるが、彼女がそれを今使う理由は違う。

今から放つ一撃は、細工をしなければその術式で自分の手首が吹き飛びかねないからだ。

「……面白い」

しかし、それよりも早くアツクアが動く。

「天草式十字凄教であるか。その名は我が胸に刻むに値するものとする！」

その強靱な肉体が、上へと跳び上がった。途中で何十本、何百本もの鋼糸ワイヤが宙を舞ったが、それらを強引に引き裂いてアツクアは天井へと突き進む。

再び、その肉体が降下を始める。その時、背後にある、第四階層にぽっかりと空いた円形のクレーターから洩れる光が、月のように見えた。

その人工的なつきの加護を受けながら、アツクアはメイスを構える。

「聖母Tの慈悲Hは厳罰Mを和IらSげSるP」

『権天使アルヒヤイ』状態の駿斗が放つ中で最大級の面攻撃を誇る『幻想天軍エンジェル・レピリオン』と拮抗するその一撃。今の天草式を含め、神裂でもそれには耐えきれ

ない。第五階層ごと、吹き飛ばされるだろう。

「アツクアあー！」

駿斗の叫び声が聞こえるが、『十二使徒』に足止めを食らって動くことができない。彼ら4人は自分の身を守ることができのかもしれないが、少なくとも神裂と天草式は助からない。

「時に、^{TCTCDBPTTRG}神に直訴するこの力。^{BWIAMAATH}光に包まれ天へと昇れ！」

莫大な速度で、青白い尾を引きながらメイスが落下してくる。

(まずい！)

だが、神裂があらゆる術式を組み上げても、それを食い破ってアツクアは落下してくる。だが、あの一撃を受ければ、間違いなく天草式は全滅してしまう。

頼みの綱は『聖人崩し』。彼女は思わず五和の方を振り返るが、しかし五和が頭上に槍を掲げても周囲の準備が終わらない。

だから、神裂は刀を抜くとそれを水平に構えた。

天草式の正面に立ち、そして古今東西あらゆる記号をかき集めて術式を組み上げる。

(諦めて、たまるか！)

しかし、その時。

フツ、と微かに笑う声が聞こえた気がした。

「……全く、世話のかかる親友だ」

そんな言葉の直後、全ての五感が真っ白に塗りつぶされた。

静寂。

しかし、完璧な破壊とはこれほどまでに『何もない』のか。

だが、その中で1人の少年の声が聞こえた。

「本当に、おいしいところをもっていきやがるな。当麻」

最後に放たれた言葉に、神裂は目を見開いて、前方にいつの間にか立っていた少年を見た。

上条当麻。

アツクアの魔術攻撃を正面から押さえつけ、握りつぶすような勢いでメイスを掴む少年がいた。

アックアが放ったのは、純粹な魔術による攻撃だ。そこに、『聖人』特有の強力な腕力は存在しない。

だからこそ。

善悪強弱問わず、あらゆる魔術を打ち消す打ち消すなどというバカげた力を持つ右手は、容赦なくその一撃を無効化させる！

「な……ッー」

アックアの驚愕の一瞬をついて、駿斗は『幻想防壁』^{アイギス}を張ると同時にアックアに飛びついた。同様に、神裂もその肩に食らいつく。

倒れるとようにメイスに覆いかぶさった当麻が無効化できるのは、あくまで魔術のみだ。したがって、その腕力を封じる人間が必要となる。

『十二使徒』が『幻想防壁』をこじ開けてくるまでには、まだ時間がかかる。そして、アックアはその動きを、腕力を、魔術を、完全に封じられた。

青い傭兵の動きを封じている3人の視点が、1点に集中する。

つまり、ただの魔術師である五和へと。

「任せておいてください……必ず当てます！」

咆哮と共に、五和が爆走する。複数の術式の加護を受けた少女の体が、一気に加速しアックアへと迫る。

「お、おおおおおおおっ！」

対し、アックアは雄たけびを上げた。

恐怖によるものではない。必殺の一撃に対し、なお己の信念を揺るがせずに、むしろ突撃してくる五和に対して、さらに一步踏み込もうとしているのだ。

『聖人崩し』。

五和の槍が分解され、雷光へとその姿が変わる。そして、それは一直線にアックアへと襲い掛かった。力の弱まった『幻想防壁』を突破した『十二使徒』が走るが、しかし遅い。

ドパン！ という空気の震える音と共に。

雷光はアックアの体を貫き、背中から飛び出し、全身を蝕む。

直撃の衝撃に押されて、3人の体が地面に投げ出された。

雷光を受けた聖人の背中から飛び出した十字架、その中心を突き破るようにアックアの体が飛んでいく。そして、その体が巨大な人工池の中に落ちて行くのを、彼ら全員が見ていた。

そして、その体が完全に沈んだ直後に、爆発が起きる。

後方のアックア。その『聖人』と『聖母』の力が競合を起こして暴走したのだ。

そこから放たれた光は昼間よりも明るく地下街を照らし、そして大量の水がそのエネルギーによって爆発のような蒸発を起こす。視界が真っ白に塗り潰され、思わず誰もが目をつぶった。

そして、彼らが再び目を開けた時、アックアは存在しなかった。

ただ、人工の湖の中にある水は全て蒸発しており、その代わりにその場所からは巨木のような蒸気がまっすぐ上へと伸びている。そして、アックアの暴走のすさまじさを表すようなその光景を前に、『十二使徒』は崩れ落ちるように膝をついた。

神谷駿斗は、病院のベッドで目を覚ました。

（えっと……アックアの爆発を見届けた後、『アルヒヤイ権天使』を使った疲れが出てきて、安心してそのまま眠っちゃったんだっけ……）

そんなことを考えながら体を動かそうとすると、すぐそばに人の気配がした。

「わっわっ、気づかれましたか？」

駿斗がゆっくりと首を回して声の主を見ると、彼のベッドの右側には見舞客用のパイプ椅子に腰かけた五和がいた。そして左側を振り返ると、そこにはきちんと親友が白いベッドに寝かされている。

その様子を確認して胸をなでおろした彼は、五和に話しかける。

「アックアは……倒せたってことでもいいのか？ あの後、体の負担が限界でそのまま倒れちゃったけど」

「倒せたんですよ！ もはや、これは歴史的な瞬間であって、その上味方の損害がゼロなんていうのはそうサンタクローズが転んでプレゼントを空からばらまいちゃうような大判振る舞いであって……」

五和が、自分たちがアックアを倒せたということ。その後、『十二使徒』は撤退していったということ。そして、民間・天草式の両方に死者が出ていないことなどを話していく。すると、その隣で当麻も目を覚ましたようだ。五和がごちゃごちゃと話している最中に悪いが、駿斗は当麻に話しかける。

「おはよう、当麻。んでもって、アックアの打倒お疲れ様」

「ああ……駿斗。アックアはどうなったんだ？」

その質問に、駿斗に答えた内容をそのままコピペするように話す五和。だが、どうやら本人はなんとなく受け流すようにその話を聞いている。

五和は気が付いていないようだが、これは病院を抜け出して奇襲をかけたあたりのことは、意識がもうろうととしてあまり覚えていないのではないかと想像を立てる駿斗。

「……しかし、その、スゲエな。アックアって『神の右席』で『聖人』でもあるんだろ。その上『十二使徒』が3人も伴っている中でそいつを倒しちゃうなんて……」

「い、一番二番の立役者が何を言っているのですか!?! というか、世界で20人といかない『聖人』を打ち破るということ自体が奇蹟であって……」

リアクションの薄い当麻に、顔を真っ赤にした五和がわたわたと身振り手振りを交えながら話し始めたのだが、当の本人は、アックアに勝利した天草式と駿斗スゲーみたいな超アバウトな感じに事態を把握しているようだ。

……ちなみに実のところ、後方のアックアにとどめを刺したのは五和がカギを握る『聖人崩し』なのであるが、五和も五和でそのことについてまるで自覚がないようである。

すると、そこで駿斗がそういえば、と言った。

「今日何日だ？ アックアを倒した翌日だよな!?! まさか既に1日以

上立っていましたとか言わないよな!」

学校の出席日数とかが心配な駿斗は、思わず起き上がろうとするが、そこで五和が「あ、だめですよ起き上がっちゃー!」と抑えにかかったところ、2人の顔が急接近する。

「……と、すまん」

思わぬハプニングに一瞬頭が真っ白になった駿斗であったが、すぐに体の力を抜いてベッドに横になった。

「すすすす、すみません!?!?!」

だが、そのような事態に慣れていない五和はとんでもなくテンパってしまい、顔を赤くしてゴニョゴニョと独り言をつぶやき始めた。

すると、その後ろにある病室の扉が開いて、インデックスが入って来る。

そして、駿斗と当麻がインデックスの相手をしている頃。神裂もまた、彼らの病室の前に立っていた。彼女も彼女で見舞いに来たのであるが、五和とインデックスに何だかタイミングを外されてしまったのだ（先を越されたとも言える）。

「ねーちーん……そうこうしている間に、日が暮れちゃうぜーい!」
すると、そこに土御門が話しかける。

神裂はビクウ! と肩を震わせると、後ろを振り返った。

「せっかく激務の中で日本にやって来る機会に恵まれたんだから、ここらで今までインデックスや天草式がお世話になったお礼を言わなくっちゃいけないよにゃー!」

「そ、そんなことは分かっています。しかし、一対二でも気恥ずかしいのに、今は五和や『あの子』までいるので、もう少しだけ待っていたらとありがたいというか……!」

「で、墮天使メイドセットは持ってきたんだろうな?」

「ぶふげば!?! も、もも持つてくるわけがないでしょう!」

自分が『それ』を着た様子を思い浮かべて、慌ててぶんぶんと首を振る神裂。おまけに、今は完全記憶能力持ちのインデックスまでいるので、実行してしまっただらかなりまずい状況になること間違いなしだ。

しかし、土御門はさらにゲテモノメイド服を取り出す。

「そんなねーちゃんのために……じゃーん！ 今日さらさら進化した墮天使エロメイドセットを持ってきたにゃー！」

唐突に何かの布地を広げようとした土御門の手を、神裂は渾身の力で押さえつける。しかし、土御門は『聖人』の握力で握りつぶされそうになる自分の両手に気をつけながらも、ビツカア！ とそのサンダラスの奥から閃光を放つ。

「じゃーどーすんの？ まさかねーちゃん、ここまでひっぱっておいでフツーにつこり微笑んでちよつとほつぺた赤くして小首を傾げて感謝してますとかで終わりとかじゃねーだろうな。気づけよ馬鹿ねーちゃん！ そんなんじゃあもう収まりがつかないとこまで話は進んでんだ！ 焦らしに焦らしして肩すかしなんて許されると思うなよーっ！」

その後も、まくしたてるように話す土御門の言葉に、自分の信念が色々と揺らいでしまつていく神裂。

結論から言えば、当麻と駿斗はミーシャⅡクロイツェフとも風斬氷華とも違う、第三の天使の影にしばらく頭を悩ませることになるというだけだった。

「くそー！」

イギリス清教から連絡を受けたローマ教皇は、降参するためのプランを並べ立てていく戦後交渉人からの話を絶ち切った。

憤る。アックアが敗れたことには2つの意味があった。1つは、それだけ重大な戦力を失ってしまったということ。そしてもう1つは、敵側にそれ以上の戦力が存在するということ。

(考えられるとすれば、イマジナクリエイト 幻想創造だが……)

上条当麻も稀有な力の持ち主であるが、それだけで後方のアックアと3人の『十二使徒』が敗れるとは思えない。したがって、無限の力を秘めている神谷駿斗に、その原因があると考えるのが筋であろう。

しかし、その少年にしたって、複数の場所に同時に存在することが

できるわけではない。だとすると、あの少年たちを守るために、多くの人間が自然と集ったのだ。単純な仲間や友人による、彼らの勢力が。

しかし、真剣な表情で考え込むローマ教皇の耳に、1つの足音が聞こえてきた。

「いかなあ、アックアが倒れたって?」

その声の主を見て、ローマ教皇は苦渋の表情を浮かべた。

バチカン、聖ピエトロ大聖堂の奥から出てきたこの男こそが、『神の右席』の最後の1人にして実質的なリーダー、右方のフィアンマであつたからだ。

「どうする……つもりだ」

ヴェントの、学園都市への奇襲。テツラの、世界的な集団操作。アックアの、圧倒的な才能……それらが、『十二使徒』と共にことごとく倒されて行った。これ以上の、学園都市の台頭を防ぐような手が残されているとは思えない。

「まずはイギリスを討つ」

しかし、フィアンマがそつけなく言った言葉に、ローマ教皇は眉をひそめた。確かに学園都市とイギリスの間には強いパイプがある。しかし、イギリスに与えたダメージが、そのまま学園都市に対する有効打になるとは思えなかつた。

だが。

「違うなあ。それは違うんだよローマ教皇さん。学園都市なんて、こっちは眼中にないんだよ」

今度こそ、ローマ教皇にはその言葉の意味が一切分からなかつた。しかし、フィアンマは続けて言う。

イギリスには『あれ』がある、と。

『あれ』とは何だ……」

その正体は……。

.....

ガタン、とローマ教皇の体がよろめいた。

「貴様、本当に十字教徒なのか……」

「さあな、どっちだと思う？」

「くそー」

「いかな。ローマ教皇ともあろうお方が、そういう口を利くのはとてもいかなよ」

嘲笑するようなフィアンマの言葉を、ローマ教皇は無視した。

天使以上の力を手に入れ、『神上』となつて世界を救うことを目的とする集団、『神の右席』。それは傲慢とも言えるが、しかし人として理解できない部分もあることは認めていた。

だが違う。

この右方のフィアンマだけは決定的に違う。

この男が起こそうとしているのは、正真正銘の戦争だ。

「させると思うか。右方のフィアンマ……貴様にはしばらく黙っておいてもらおう。あるいは、永遠にな」

ローマ教皇の魔術が発動し、フィアンマを束縛する。十二使徒の象徴によって構成された魔方陣が、裏切り者のユダがかつて受けた、暗く深く寒く苦しい、どこを見まわしても一縷の希望すら見えない精神の空転、『傷つけぬ束縛』を再現する。

そのはずだった。

「ふん」

しかし、その中でフィアンマの唇が確かに動いた。2000年の時を経て、20億人の信徒を導く神聖な力。聖ピエトロ大聖堂及び、バチカン全体がローマ教皇のその力を補強しているにも関わらず。

その右肩から現れた光は、大聖堂の3分の1を含めた周囲のものを巻き込んで吹き飛ばす。

光は、歪な形をとっていた。できそこないの翼のような、不格好な5本の指を備えた巨人の腕。

右腕。それは奇蹟の象徴。

人々はそれで十字を切り、洗礼の聖水を振り分ける。神の子はそれをかぎすだけで病人を癒し、死者をよみがえらせた。『神の如き者』の右腕には、『光を掲げる者』すら斬り伏せる最強の武器が備わっていた。

石畳に体を預けるローマ教皇と、講釈を続けるファイアンマ。

「だがそんな莫大な力を持つ『聖なる右』ってのは、ただの人間にやあ扱いきれんのだよ」

これほどの力を持っていながら、『ただの人間』と彼は言った。

だから、その力を引き出せる『右腕』と『肉体』が必要であるとも。報告書でなら読んだことがある。あらゆる魔術を打ち消す右手と、常人には使用不可能な魔術を自在に生み出し操る少年のことを。そして、その『材料』を十分に使いこなすには、圧倒的な知識も必要になる。

禁書目録。

だから、こいつはイギリスに用がある。

「やら、せるか……」

20億人の未来を背負って立ち上がるローマ教皇に対して、しかしファイアンマは嗤った。

「楽しいな。圧倒的な勝負というのは、馬鹿馬鹿しくもやはり楽しい」
ただ圧倒的な力がローマ教皇を貫き、その体を吹き飛ばした。

英国騒乱編 Curtana
騒乱の最中へ

学園都市にあるとある高校の教室で、神谷駿斗と上条当麻は放課後の雰囲気の心地よさに浸っていた。

この時期、学園都市は11月に控えている超巨大な文化祭『一端覧祭』の準備に向けた動きが始まっており、街全体が少し祭りに向けて浮き足立っている感じがする。また、いろいろあつて中間テストが中止になり、心に余裕があることも拍車をかけているのかもしれない。

その証拠に、駿斗たちの教室の中でもあちらこちらで一端覧祭の話が聞こえていた。そして、普段はエロトークをしている青髪ピアスや土御門元春なども、グダグダと話を展開している。

「つつか、高校の一端覧祭って中学の時とは何か違うんかいな。予算とかいっぱいもらえると色々やることの幅も広がったりするんやけど」

「にゃー。ぶっちゃけ学校見学会やオープンキャンパスも兼ねたりしているから、そういうことに積極的なトコじゃないと予算はいっぱいでないにゃー。ウチの学校はそういう欲が全然ない平凡学校だから思い切り地味そうだぜい」

すると、そんな男たちを尻目に、黒髪でおでこで巨乳で実行委員に目がない生徒（別に実行委員の男の子を見ると飛びかかるといふ訳ではない）、吹寄制理は腕組みをするとフンと鼻を鳴らした。

「世界最大の文化祭である一端覧祭が近いということは、ようやくこの私の季節がやってきたという訳ね。貴様たちも時間を無駄にしているようなら、少しは有意義な使い方をしてみたら？ 自分の新しい一面を見つけられるかもしれないわよ……特に消しゴムのカスを丸めて遊んでいるツンツン頭の貴様！」

指摘された当麻はビクウ！ と肩を震わせた。

「えっ、ええー!? 新しい自分とかいいっすよ。どうせあれだよ、今までメイド好きだと思っていいたら実はウエイトレス好きだったという

ことが判明するくらいだよ」

当麻はめんどくさそうに言うが、『メイド』というその言葉に反応しない土御門ではない。

「にやー、それは超重要なことですよ！ メイドはウエイトレスの仕事もできるけど、ウエイトレスにメイドの仕事は務まらないという事実を忘れてないかにやー！」

「ふっ……馬鹿やね。メイドが好きだからってウエイトレスを好きになつてはならないという法則はどこにもあらへんのに。まあ、たった1つのフェイバリットジャンルに操を立てようとするその純粋さが悪いとは言わへんけど」

「……この会話の内容、どこからツッコめばいいんだか」

例によつてデルタフォース特有のバカトークが目の前で繰り広げられていく様子に、駿斗はぼそりと呟いた。まあ、今は別に真面目に一端覧祭の出し物について相談をしているわけではないので、駿斗はそれを止めようとはせず会話に加わるのだが。

「それでも、有意義な時間の使い方と言われたところであらう。そのたぐいって、結局いろいろあつてなああのまま終わっちゃうことが多いか？ っていうか、2人が言っていた通り、大して力を入れようともしないこの学校の場合、そうなりそうな気がするんだけど」

ま、特別突飛なことをしなくても、それなりに準備や本番に参加するだけでも結構楽しいもんだとは思うけどな、と駿斗は付け加えて言った。

しかし、と彼は呟いた後で教室を眺めてみる。

このクラスだけでも、ロシア正教に『敵』として認識されているイマジンプレイカー 幻想殺しとイマジンクリエイト 幻想創造、イギリス清教と学園都市の両方に所属している科学サイドと魔術サイドの二重スパイ、イギリス清教から力を借りてその『原石』の能力を封じている吸血殺し……本当にこの学校は『平凡』と言っているのかなあ、などと駿斗は考えるのだった。

そして何より、とそのタイミングで教室に入ってきた影を見る。

「はい、それではホームルームを始めますー。今日は一端覧祭に向けて、各自の役割分担を決めるのですよー。部活や委員会の関係で優

先順位のある人は先生に申告してくださいー」

すると、姫神秋沙の動きがピタリと止まった。

身長135センチ、見た目が12歳前後でランドセルが似合いそうな外見をしているのにもかかわらず、その中身はビルやたばこに目がない女性。専攻である発火能力バイオキネシスの他にも多種多様な学問に通じ、学者の間でも扱いが分かれるAIM拡散力場関連の研究にも余念がないという……個性が1つや2つあるかないかではなく、もうどこからどう見ても個性しかない幼女教師、月詠小萌を目の前にした姫神は、自分の没個性な状況と彼女を比較すると、

「……はう」

「ひ、姫神？なんで真っ黒に絶望しているんだ？ 姫神っ、姫神イイいいいいいいいい？」

当麻ががくがくと肩を揺さぶり呼びかけるが、彼女は返事をしなかった。

「やれやれ、学園都市の外ではユーロトネルの爆破。まったく、この街で大きな事件が起こってなくても、外では起こるみたいだな」

背中まで延ばした黒い髪を持つ少女、黑夜海鳥は、放課後に『学舎の園』の中にある喫茶店の中で、アイスコーヒを片手にそんなことを呟いた。その傍らでは、茶色の髪をボブカットにした同い年の少女、絹旗最愛がC級映画のパンフレットを広げて眺めている。

しかし、今回はあまり興味の惹かれるタイトルがなかったのか、最愛はパンフレットをテーブルの上に放り出すとアイステイラーのストローの先を口に持っていく。

「ユーロトネルはイギリスとフランスを超結ぶ、唯一の陸路。所謂生命線というやつですね。それが爆破されたということは、おおよそ今回もフランスが超きな臭いでしょう」

一見すれば、フランスにも被害が及んでいるのだから、彼らも被害者のように見える。しかし、イギリスというのは日本と同じで島国なのだ。

大陸と島を結ぶ唯一の陸路であるユーロトンネルを爆破すれば、残りは時間のかかる海路か、輸送費がかさむ空路。そのどちらかしかなくなってしまう。被害の度合いで言えば、圧倒的にイギリスが不利というわけだ。

仮に、何かしらの要因で空路も潰されてしまった場合には、イギリスは完全に孤立してしまうことになる。

「まったく、ついこの間フランスでもアビニオンで学園都市に対する暴動があつたばかりだというのに」

ここ最近——具体的には例の『〇九三〇事件』の日から、学園都市の様子が次第におかしくなっていくのを彼女たちは感じ取っていた。街中で『暗部』の匂いのあるものを見かけることも、少しずつ、しかし確実に多くなっている。(もともと、幼馴染の『お兄ちゃん』とともに巻き込まれたあの日を除いて、彼女たちはその方面には関わらないようにしていたが)

学園都市の『外』がおかしくなっているから『内』もおかしくなっているのか。

それとも、『内』から何か行動を起こしたことで、『外』が反応して何かが起こっているのか。

『闇』から離れて基本的には普通の(とは言っても、今までの雰囲気とは似合わないお嬢様学校であるが)中学生生活を送るようになった彼女たち。以前と比べて平和で退屈な日常を送ることができるようになっていたが、逆にそれは今までの『情報源』が失われたということでもあつた。

この街で何が起きているのか。

彼女たちが知らない『外』の世界は今、どうなっているのか。

そして何より——自分たちが大好きな少年は、それにどのような形で関わっているのか。

「9月30日。アビニオン暴動。そしてつい先日に来た、第22学区の壊滅……その全てに駿斗兄ちゃんと上条が関わっている。それは間違いなさそうだな。そして、この間、10月9日、独立記念日の暗部間抗争は、おそらく」

「超準備ですな」

最愛は話す。

「例の『スクール』と『ブロック』の連中。『メンバー』は別の目的だったようだけれど……精鋭部隊とはいえ、学園都市との超交渉ができるという時点で異常です」

しかし、あの時は学園都市の一部の人員がアビニョン騒動の収束のために、『外』に出ていた。そのため、『内』の警備が甘くなり、彼らの暴走を後押ししてしまったのだ。

あの時、3人は何かを守ることができたのであろうか。

最愛や海鳥も、下っ端を何名か昏倒させたものの、結局エツアリたちの戦いは魔術に詳しい駿斗が担当し、特に最後の場面は第1位の^{アクセラレータ}一方通行と第2位の^{ダークマター}未元物質、垣根帝督との戦いでは間に入る余地などなかった。

そのことを考えて、彼女たちははあ、とため息をつく。

「……で、結局あのはどうなったんだっけ？ あの後、第4位が元スキルアウトの連中に倒されたとか言う話は聞いたけど」

黒夜が憂鬱そうに聞くと、最愛も残りのアイステイーを飲み干してからめんどくさそうな表情で返事をした。

「話に限る限りでは、滝壺さんはあの無能力者……浜面でしたっけ？ に保護されて、今は病院で超治療を受けているそうです。とは言っても、完治とまではいかないようですけどね」

滝壺理後の使用していた『体晶』は、学園都市の『闇』から生まれたものだ。一般の病院では、完治させることは難しい。

「今は、時々お見舞いに超行つてますよ。最も、うざったいことにあの男がたいてい一緒ですが」

「……ま、珍しい奴もいたもんだな」

珍しい奴、というのは当然、『暗部』という世界の中では、という意味だ。滝壺のように、ぼーっとしている人間など普通いない。というか、索敵や追跡専門であっても、普通は生きていけない。彼女が特別なのだ。

「しかし、^{AIMストーカー}能力追跡、ね。話には聞いていたが、あんな奴だったとはな」

A I M 拡散力場干渉系の能力というのは、非常に珍しい。というか、彼女たちが知っているのは『能力追跡』である滝壺理后と、ジャッジメント風紀委員に所属しているらしい木原那由多だけである。

「とりあえず、注意だけはしておく必要があるそうですね」

「門限は破れないけどな」

……実際のところ、彼女たちは一度だけ門限を過ぎてしまい、その能力を使用する前に寮監に意識を刈り取られたことがあったりする。

食蜂操析は、落ち着かない日々を送っていた。

というのも、彼女はこの1か月少し前の大覇星祭のときに、あの少年……神谷駿斗に救われてしまったのだ。

木原幻生の1件に関しては、御坂美琴や彼の幼馴染である『暗闇の五月計画』絹旗最愛と黒夜海鳥が絡んだことは、全てを1人で片づけるつもりであった彼女としては少々不満ではあった。

しかし、それを上回るものを得ることができたという思いもまた、彼女は抱いていた。

そんなある種の満足感と共に、再び退屈な日々に戻った第五位の超能力者^{レベル5}であるお嬢さま、心理掌握^{メンタルアウト}の使い手である彼女なわけであるが、近ごろ再び面倒なことが起こっているのを彼女は知っていた。

「報告を頼めるかしらあ」

「了解しました、女王」

食蜂操析を『女王蜂』だとするのであれば、彼女の『派閥』に属する少女たちは『働き蜂』である。

精神系最強の能力を持つ食蜂からすれば、学園都市で生活している、それも『暗部』に所属しているわけでもない1人の少年のことを調べ上げることなどわけもない。それだけの働き蜂^人は、いくらでも手に入る。

しかし、食蜂は不思議と必要以上に彼のことを調べ上げようという気にはなれなかった。結局、現在駿斗について入手している情報は、彼の年齢、通っている高校、出身、そして、『表向きの』能力値だけで

ある。人の心へとダイレクトにハッキングできる彼女からすれば、異常な情報量の少なさだ。

それは、彼が『特別』であることの明確な証明であるために、食蜂はそうしていたのかもしれない。実際、今『派閥』の少女たちに調べてもらっていたことも、彼に関するのではない。

それは、学園都市内外で発生している『事件』のことであった。事務的に次々と目の前の少女の口から、彼女の『派閥』の少女たちが集めた情報が告げられていく。しかしそれは、普段何かの調査を依頼した時の情報量の半分にも程遠いものだった。

(これで、独立記念日に起きたことは、残りは『裏』の方から情報を仕入れるしかなくなっちゃったわねえ。だけど、結局〇九三〇については、学園都市の情報力でも難しいのかしらあ?)

9月30日の事件。表向きには、『学園都市外で科学的な能力開発を受けた人間が、学園都市のゲートを破壊して襲ってきた』ということになっている。しかし、都市の大部分の人間はその情報を鵜呑みにしようとはしていない。そして、『闇』との関わりを少しでも持ったことのあるものは、その情報に感じるきな臭さに気が付いている。

そしてその後、世界各地で発生した、ローマ正教による学園都市に対する大掛かりなデモ。その解決策として、なぜか学園都市の空港から最新鋭の爆撃機H s B—02が出されていること。そしてその日のある時刻を境に、あっさりデモが収束に向かって行ったこと。その日には、H s B—02の前にも統括理事会の力によって超音速旅客機が出されていたらしい。(この辺りは『派閥』の少女だけでなく、かつて『エクステリア』計画に関わっていた連中の調査も含めているが)そして極め付けには、第二十二学区が半壊した謎の事件。

独立記念日に起きたツートップの超能力者^{レベル}同士の戦闘においても、あそこまでの破壊は生じていなかった。何しろ、あの学区の階層が丸ごと一つ、破壊されていたのだ。

そして、その痕を調べた警備員^{アンチスキル}は有用な情報がかめず、すぐに上層部によって専門家のチームによる調査が決定していた。しかし、実際にはただ修復作業がされただけであり、調査と呼べるような調査は

まるでなされていなかった、らしい。

それ以上の情報は出てこなかった。しかし、食蜂はあまり残念そうな表情をしていない。

『あの人』も相変わらずなのねえ。駿斗さんと一緒に、本当にいいコンビだわあ」

そんなことを呟くだけで、満足そうな表情を浮かべていた。

駿斗の部屋へその電話があったのは、当麻と駿斗は帰宅してからあまり時間が経っていないころであった。

『はやとん、ちよつと俺に頼まれて今すぐイギリスへ行ってもらえないかにやー?』

「電話に出たら最初の言葉がそれか!?　　というか、今すぐって急すぎるだろ!？」

大方、目下話題の渦の中にあるユーロトンネルの爆破に魔術的な事情が絡んでいるのであろうが、と駿斗は考えるが、いくらなんでも急すぎる。日本にある学園都市に住んでいる身としては、そんな「ちよつと買物に行ってきたりしてくれる?」みたいなノリで頼まれるようなこととは、断じて違う。

しかし、どうせ行かされることになるのだから、と駿斗は思い、じつくりと話し合ったうえで、今後の動きを考えるか……などと悠長に考えていたのであったが、土御門の次の台詞によってその思考は遮られた。

『ちなみに、かみやんとインデックスはもうすでに第23学区の国際空港にいるぜい。パスポートとか必要なものは全部向こうに用意してあるから、はやとんは手ぶらで2人を追いかけてくれれば構わないにやー』

土御門はそれだけ言葉を言うと、通話を切ってしまった。

本音を言えばすぐにでも2つ隣の部屋に駆け込みたい駿斗であったが、しかし親友と少女のことが心配であったため、仕方なく彼らを追いかけることにした。

「まったく……毎度毎度、やってくれるぜ」

駿斗はそう呟きながら運動靴を履いて玄関から外へと出ると、寮の外へ出ると同時に高速移動術式を発動し、即座にその姿を消した。

『イギリス・フランス間をつなぐユーロトンネルの爆発事故の影響が、空路の方にも広がっています。両国間で物資・人員を運搬するために多数の飛行機が動員されているため、通常のスケジュールが遅延する可能性があります。詳しい発着予定については、各受付カウンターにて——』

「……きろ、当麻。起きろ」

アナウンスと、聞き慣れた少年の声。当麻は肩を揺さぶられながら、目を覚ました。

「いつの間にか、空港のロビーにあるベンチの上で眠っていたのだ。」

「……あ？ あ、サンキュー駿斗。しかし、ちよつと今回はいろいろとダイナミックすぎねーか……」

「俺も、いきなり土御門から『当麻とインデックスは第二十三学区の空港にいる』とか言われたからさ。おまけに、いつの間にかポケットに入れてあったはずの財布がなくなっているし。多分、下校するときにも取りやがったなあいつ……」

土御門の性格を考えれば、大方3人が出発した後で部屋の郵便受けにでも入れてくれてあるのだろうが、それでもやり方というものがあ
るはずだ。

「今からでも、取りに行けないことはないけど……、まあ、どちらにせよ、結局はイギリスに行かなきゃならないはめになるんだろうからな。このまま行っちゃった方が、いろいろと楽かもしれん」

「つつーか、学園都市の『外』に出るのつて、発信機機能のついたナノデバイスを体内に入れたり、保護者を同伴させなきゃいけないんじゃない？ なかったっけ？ なんか最近、いろいろと裏技だらけな気がするぞ……」

とりあえず彼らはインデックスを起こすと、指示のあった第3受付

へと足を運ぶ。

「上条当麻様ですね。3293番の荷物をお預かりしております。こちらでよろしいですか?」

受付のお姉さんがそんなことを聞いて来るが、2人に荷物の内容が足りているかどうかなど分かるわけがない。とりあえず頷いておくと、中身を確認する。

その中にはイギリスのお金がいくらかと、いつの間に持ちだしたのか、土御門が言った通りパスポートが入っていた。他にはフライトチケツトや、いかにもな指令書っぽい紙束。あとは激安チエーン店で買ったと思われる着替えが数日分である。

「……マジかよ。本当にロンドンの空港の名前が書いてあるぞ」

「というか、そもそも何でこれからイギリスに行かなくちゃいけないの?」

「ええつとー……なんかゴチャゴチャ書いてあるなあ」

どうやら当麻は、土御門から喰らったガスの効果がまだきちんと切れていないらしい。駿斗は彼から紙束を受け取ると、その内容にぎつと目を通していく。

「あー……やっぱり、この間起きたユーロトンネルの爆破が、何やら魔術がらみである線が濃厚なんだと。だから、魔導図書館であるインデックスを国家公式に招待する……」

駿斗は、ものすごく面倒くさそうな表情でその内容を眺めていく。正直なところ、彼としても今回の呼び出しは緊急性があまり感じられない上に(自分の身近で起こっていないせいもあるが)、わざわざ3人で火中の栗を拾うような真似はしたくないのが本音だった。

「で、インデックスの保護者役である俺たちも一緒に呼び出された、と」

「とうまとはやとに保護されているというのは心外な評価なんだよ」「そういうのは、他人の飯を食って生きている人が吐ける台詞じゃねえよ」

インデックスの抗議をばっさり切り捨て、3人は搭乗の手続きを済ませていく。

「で、俺たちが乗る、土御門が用意した飛行機ってのは？」

「ああ。えつと……」

当麻に訊かれ、駿斗はチケットをもう一度取り出して確認した。

「4番ゲートで待っている、0001便、らしいな」

しかし、そちらを見た3人の顔が、ピタリと止まった。

最大時速7000キロオーバー。

日本と西洋の間をおよそ2時間で突っ切る、例の怪物飛行機だ。

その瞬間、3人の脳裏にはキオツジアから日本へ緊急帰国する際に受けた、強烈なGと内臓を圧迫する不気味な苦しみとその状況でインデックスが機内食を注文したため全てを後ろ方向へ吹き飛ばしたあの悪夢だった。

「なあ、2人とも」

「ああ、俺も多分同じこと考えてた」

「……あの便はわざと諦めて、キャンセル待ちでもいいから次の飛行機に乗ろう。もつと普通で、人体の害にならない飛行機に」

「私はとにかく、ご飯が後ろへ飛ばないひこーきなら何でも良いんだよ」

はくじょうもの、という三毛猫の叫びが聞こえた気がした。

空の上でも

スカイバス365。

3人が三毛猫を見捨てて乗り込んだのは、極めてゆつたりとした大型旅客機だった。2階建ての構造で座席部分が分かれている上に、エコノミー席であっても足を延ばせる程度の広さがあり、おまけにマッサージチェアとしての機能まで有していたほどであった。

「いやあ……まさか、ロンドン行きの飛行機が1機もなかったなんてなあ」

「全くだ。どうして今更、騒動の中心になっているイギリスに行こうと思えるんだか。まあ、会社の出張とかで仕方なく、なんだろうけどよ」

当麻の言葉に、駿斗も同調しながらそう言った。

ロンドン行きの飛行機は予約で席が全て埋まっていたのだった。したがって、空港のサービスカウンターの受付のお姉さんのアドバイスの通りに、スコットランドのエンジンバラ行の飛行機に一度乗って、そこから国内線の飛行機に乗り換えてロンドンに行こう、という計画を立てていた。

イギリス南部にあるロンドンに対して、スコットランドはイギリス北部に存在する。そのため、さすがに電車では時間がかかりすぎる。

唯一の懸念材料だったのはお金の問題であるが、それも携帯電話のおサイフケータイの機能を使って事なきを得た。もともと、クレジツトカードのようなものなので、後で送られてくる請求書を見て悲鳴を上げないかどうか不安であるが。

しかし、保護者2人が家計のことで頭を悩ませている一方で、インデックスは『ひこーき』というイレギュラー空間に興味津々のようである。

「と、とうまー！ はやとー！ この椅子にはピコピコがついているんだよー！」

「確かにボタンはいっぱいについているけど、それはゲームじゃないっの。つつーかただのテレビだろうが……じゃねえ!! 今すぐその

手を放せインデックス！ お前が操作しているのは有料チャンネルだ！」

「ビーフオアフィッシュュ！ ビーフオアフィッシュュ！」

「今から機内食が心待ちなのはわかったから！ うわ、最新映画チャンネルとか超高そう！」

「このボタンはなーに？ わひゃあ！ 紐のついた透明なカップが出てきたんだよ！」

「それは緊急時用の酸素マスクだー！」

そんな騒ぎを聞きつけたのか、金髪ナイスバディのフライトアテンダントさんが慌てたようにやってきた。駿斗はボタンを押すのに夢中になっていいるインデックスの両手を拘束し、当麻はその横でペコペコと頭を下げる羽目になった。

駿斗は彼女の動きを拘束したまま、機内でのマナーについて一通り教えていく。インデックスはそれでも無料チャンネルの方に挑戦してみるが、有料サービスに目を向けさせるためなのか、おっさんたちが経済の動向について論議を交わしているような番組ばかりしかなかった。どうやら、ユーロトンネル爆破の影響で経済にもいろいろな影響が出ているらしい。

そんなつまらない番組しか出てこない飛行機のテレビに早くも飽きたのか、インデックスはリモコンから手を放しておもむろに背筋を伸ばした。

「ところで、ひこーきのご飯はいつになったら届くの？」

「機内食？ 夕食の時間はとつくに過ぎていいるし、次の食事は9時間くらい後だろうな。遅めの夕食はないプランだから安上がりなんだよ」

ガシイ！ と今度は、駿斗がインデックスにアイアンクローを決めた。なぜなら、インデックスが再びその牙を剥こうしたからである。

だが、インデックスの思いも2人は分からなくもない。そこで、まずは当麻がフリードリンクのコーナーでコーヒーだけでも手に入れてくることになった。

スカイバス365の中には、外国人が思ったよりも大勢いた。NA

SAが作ったらしい厚さ3ミリでテカテカした素材の毛布を体の上に被せて眠っている。恐らく、学園都市での営業を終えて帰るビジネスマンなのだろう。

最近の飛行機は、液化爆薬対策のために基本的に飲み物を機内に持ちこむことができない。そのため、航空会社はフリードリンクのサービスをすることによって、『自由を奪われた』お客様を宥めようという訳である。

フリードリンクのコーナーには、ファミレスなどの飲食店ご用達のドリンク用の機械が置いてあった。例の、ボタンを押すと機械の中にあるドリンクが下に置いたコップに注がれるものである。ただ、種類はコーヒーと紅茶、オレンジジュース、そして世界で一番有名な炭酸飲料の4種類だけであった。しかも、コーヒーに至っては『コーヒー』と書いてあるだけで、産地はおろか、ブラックなのかどうかとか、そういうものは一切書かれていない。

しかし、その横には予想外のものがあった。縦に合体した紙コップタワーの横に、四角いクラツカーのようなものがたくさん置いてある。おまけに、バターとかブルーベリーとか、その上に乗つけるものもたくさん揃っていた。

（へえー、最近の飛行機はこんなのもタダなんだな。海外旅行は燃料費だなんだで結構伸び悩んで、今はサービス競争になっているって話は前に聞いたことがあるけど、こういうトコでも頑張っているんだな）

そんなことに感心しつつ、実際に食べ物を目の当たりにしたことで空腹を訴え始めた胃袋を感じながら、当麻はクラツカーに手を伸ばし始めたのだが……そこでふとその手の動きが止まった。

なぜなら、クラツカーの箱の横にはフライトアテンダントさんの手書きらしき可愛らしい字で、こんな言葉が書いてあったからだ。

——『有料』。

9時間後。

結局有料のクラッカーには手を出せず、3人を乗せた大型旅客機スカイバス365は、一度フランスの空港に着陸した。

ポーン、という柔らかい電子音の後に、女性の声のアナウンスが流れる。

『ユーロトンネル爆破事故の影響で、当機もフランスーイギリス間の物資運搬サービスに協力しております。乗客の皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、荷物の追加積載が完了するまで、今しばらくお待ちください』

そんなアナウンスを聞いて、駿斗はテレビのチャンネルを切り替えた。

「そういうえば、ユーロトンネルが今は使えないからその分の輸送を空路や海路に負担させているんだっけか。まったく、陸路に比べれば大幅にコストがかかると思うのに、大変だな」

「ねえ、まだ出発しないの?」

「まあ、困ったときはお互いさまだからなー」

恐らく、彼らが待つている間に、機体の中に荷物が次々と運び込まれているはずだ。闇に包まれた窓の外では、飛行場の灯りに照らされながら作業する人々が見えた。

日本とイギリスの間には9時間の誤差があり、イギリスに到着した時は、時間をその分巻き戻すことになる。そのため、彼らはたつぷりと『夜』を体験することになりそうだ。

「ビーフとフィッシュはまだなの?」

「機内食はどちらか片方を選ぶのであって、いつの間にか両方を食べることを前提にしているんじゃないやねえよ。まさか、俺たちの分まで食べる気満々じゃねえだろうな……」

「んんっ! あそこで作業服着たおじさんがサンドイッチ食べてる!」

「メシ食いながら作業するなんて、空港の人たちも大変そうだなあ……って、おいインデックス! 飯にもシスターなんだから1食の食事の時間が後ろに伸ばされたくらいでぎゃーぎゃー騒いでいるんじゃないやねえ! お前が暴れたところであのサンドイッチがこっちに来

るわけじゃね……」

3人がバタバタしていると、ふとそこで窓際に座っていた当麻のひじが何かにぶつかった。

見ると、窓際の内壁の一部が四角く切り取られ、そこから何やらたくさんのケーブルが出てきている。

おや。

へんなものがかつてにひらいたよ？

「……、」

当麻と駿斗は一瞬考えた後、阿吽の呼吸で頷き合い、ボタン！ と一斉にその蓋を閉めた。

すると、彼らの話を聞いていたのか、通路を歩いていた金髪ナイスバディのフライトアテンダントさんがやってくる。

「申し訳ありません。お客様のご予約について最大限に配慮させていただきます。いただいているのですが」

「だ、大丈夫ですよ。別に、クレームとかそういうのじゃないので」
駿斗は弁明しつつ、さりげなく話題を変えるために話を振った。

「それにしても、飛行機で輸出っていうのはコストがかかりそうですけど。やっぱり、イギリス国内では調達が難しい、というわけですか？」

「え、ええ……」

フライトアテンダントさんは言いづらそうな調子だった。

「海底鉄道トンネルが封じられたことで、現在は船舶と航空に割り振っているようですが……。英国は島国ですが、魚介類の半分近くは輸入に頼っています」

そうしたものは、船でのんびり運んでいると傷んでしまうため、スピードを重視して航空機で輸送するのだという。あとは、この便のコンテナの場合、流動食オートミールなども含まれるようだ。フランス国内のメーカーでしか作られていない製品であるらしい。

すると、そこでインデックスがボソリと呟いた。

「……しよくひん……食べ物……ひこーきのご飯……きないしよく……ビーフ……ビーフオアフィッシュユ！」

「ぐおおっ！ インデックス、夕飯抜きで空腹がマックスになっているのは分かったからとりあえず気を鎮めろ！ ご飯の時間まであとちよつとだ！」

「あとちよつとって、どのくらい？」

「……1時間ぐらい？」

「——ッ!？」

ガッシー！ と再び駿斗がインデックスにアイアンクローを決めた。その様子を見たフライトアテンダントさんが「す、すぐにお持ちします！」と叫んで走り去るのがとても心苦しい。

空腹のインデックスに襲われそうになった当麻は思わず叫ぶ。

「こらインデックス！ お前が大暴れするから迷惑かけちゃっただろ！ というか機内食を1人だけ早弁状態って、相当のクレマーですよ!？」

「そんなことを言われたところで私の空腹はすでに限界点を3周くらい回っているんだよ！ もう1分1秒すら待てない切迫した状況を理解して欲しいかも！」

「それでも状況が状況なんだから仕方ねえだろ!? 文句言う前にお前が素敵なアイデアでも出してくれよ、インデックス」

彼女はフライトアテンダントさんから去り際にもらった笛のオモチャをピーピー鳴らして気を紛らわせているが、いつ限界がくるものか分かったものではない。

今回ばかりは、次に会ったときにその顔をぶん殴ってやるぞ、土御門。

駿斗はそんな決意をしてから、はあ、とため息をついた。

スカイバス365は無事に離陸し、飛行も安定した状態に入った。今は、シートベルトの制限も解かれている。

そんな機内で、駿斗たち3人を、少し離れた通路から観察していた男がいた。

いや、呆然としていた、という方が正しいかもしれない。

本来、その男は3人のいるエコノミークラスの乗客ではない。余計な疑いを持たれないように、ビジネスクラスのチケットを取っていた。そして、その両者を隔てる『壁』のエリア、すなわち機内トイレを経由して、自然な挙動でエコノミークラスの席までやってきたのだが……。

(どういうことだ?)

なるべく見るな、と念を押されていた手帳であるが、それでも緊急事態だと判断した男は、ポケットから取り出したページを開いた。しかし、座席番号を確認しても、やはり少年少女たち3人が占拠しているその場所で間違いない。

だが、そこは本来ならば空席でなければならぬ場所だ。なぜなら、男の仲間が偽名でチケットを取っているはずなのだから。

(くそ、キャンセル待ちで座席が埋まったのか……ッ!?)

予約された席であっても、搭乗締め切り後にも予約客が来ない場合、その座席はキャンセル待ち扱いとなって、他の乗客に移されてしまう場合がある。そのため、あの3人は空席であるはずの場所に座っているのだろう。

状況は分かった。

しかし、打開策までは思い浮かばない。

(どうする……あの座席が使えなければ、『計画』を実行に移せないぞ)
男は怪しまれないために、一先ずゆっくりと通路を歩いて階段で別の階層に移動することにした。

機内食の時間は延び延びだ。

機体の傾きが安定したのに、いつまでたってもフライトアテンダントさんはやってこない。……そもそも、機内食を前倒しすることなんて可能なのだろうか?

「やっぱり、心配だな。俺。ちよつとフライトアテンダントさんのところまで行ってみるわ」

「私だって、ビーフオアフィッシュが心配なんだよ!」

「ややこしくなるから、インデックスはそこでじつとしてろ」

「悪い。頼むな、駿斗」

そもそも、ガチで彼女が説教を喰らっていた場合、『や、やっぱりいいです！ 大丈夫です！』と止めに入る予定なのだ。そこへ白い悪魔が、ビーフオアフィッシュユ！ ビーフオアフィッシュユ！ と怒涛のスローガンを放ったら、状況がメチャクチャになるに決まってる。

駿斗は席を立ちあがって通路に出る。行き先は、エコノミーとビジネスの間にある『壁』の区間……機内トイレやフリードリンクコーナー、機内食用のエリア、他階層への急な階段など、複数の設備が整った場所である。

(マジで説教されてないだろうな……そうじゃないと願いたい)

しかし、『壁』の区間に入っても、フライトアテンダントさんは見つからなかった。

「うーん、やっぱり難しいのかなあ。まあ、あの人たちには別の仕事もあるだろうし」

機内食を取り扱っているらしき場所も見つけるが、そこには人がいる様子はない。それを確認した駿斗は一度、2人の下へと戻るために踵を返して歩き出そうとした。

「きやあつ!?!」

いきなりかん高い声が聞こえたかと思ったら、ドン、と何かがぶつかるような感触があった。どうやら、駿斗は自分のすぐ横を通ろうとした何者かを、ぶつかって床に倒してしまったらしい。

「す、すみません！ だいじょ……」

そこに倒れていたフライトアテンダントさんはそう言いかけたが、床に散らばった書類を見るなりババツ！ と慌てた様子でそれをかき集める。

「み、見ました?」

「いえ、見ていません。すみませんでした」

駿斗は謝罪の言葉をかけてから、彼女と別れて自分の席へと戻っていく。しかし、その途中で気が付いた。

(あれ? どうして「見ました?」なんだ? そもそも、フライトアテ

ンダントって、機内であんな書類を抱えているものなのか……)

駿斗は素朴な疑問と共に、エコノミークラスの通路で立ち止まって後ろを振り返るが、彼女の姿はすでにそこにはいなかった。

(あんな質問をしたってことは重要な書類なんだろうけど、そんなもの機内で抱えたフライトアテンダントがうろろうとうろついているはずないと思うんだけどな。それとも、何かトラブルでも発生した、とか?)

しかし、駿斗はそれ以上の詮索をやめて、自分の席へと戻っていった。どうやら、彼女は何やら仕事で忙しそうで、機内食どころではないようだ。

インデックスの空腹がマキシマムだ。

「きーないーしよくー。きーないーしよくー。びーふおあふいーつしゅー……」

「……すぐ横からひしひしと感じるこのプレッシャー。隣の席にかしこまった顔のライオンが座っているニュアンスなのですが、上条さんはいったいどうしたら良いのか、教えてくださいませんか駿斗?」

「現状維持、あるいはインデックスをどうにかして眠らせる……この2択かな」

うーむ、と声をうならせて当麻の質問に答える駿斗。

「それとも、空気中の塵や二酸化炭素と水分から、ゼラチンかブドウ糖みたいな炭水化物でも作ってみるか? いや、やるだけ無駄だろうな。疲れるし、微々たる量しか用意はできないから、むしろ何かを口に入れた分、食欲が増していくだけだと思うし」

「現状維持でお願いします」

これ以上、この白い悪魔の食欲を増進させてどうしようというのか。

当麻が即答でその提案を断ると、駿斗は苦笑いをしながら、有料のクラッカーをボリボリと食べている、すぐ近くのブルジョワジーを見、ふと言った。

「……そういえば、この飛行機ってイギリス行きなんだから、ひよつとしたら土御門からもらった荷物にある、イギリスの通貨も使えるんじゃないね?」

「ツツツ!」

「ノォー！ インデックスさんのお怒りはごもつともですが、ここで俺の頭蓋骨を噛み砕いたら有料のクラッカーはいつまで経ってもやってこないぞー!」

ガバーン！ と目の前で大きな口を広げたインデックスを、土壇場で牽制する当麻。駿斗は素早く、彼女の顎を拘束しにかかる。

親友に空腹少女の面倒を任せると、今度は当麻が席を立ててフリードリンクのコーナーへと向かった。

（つつーか、さつきからウロチョロしてるよなー俺たち。不審者と思われてないだろうか）

しかし、実際に他の乗客の様子を見ると、席を立てて通路を歩いている人は結構いた。所詮は一番安いエコノミークラスであるため、長時間のフライトの間、ずっと座っていられるほど乗り心地の良いものではない。一応マツサージチェアとしての機能も有してはいるが、それでも全身をくまなくほぐしてくれるほど優秀なものではないようだ。

駿斗は気が付かなかつたが、よくよく見ると有料クラッカーの横にある透明な箱の横には、いろんな国の紙幣が収められていた。その隣にある小さな黒板には、各国の通貨レートが書かれている。

（えーと……3ポンドで10枚もらえるのか。つつか、3ポンドって何円だ?）

外国のお金と学園都市の紙幣との間の為替など、当麻は知らない。高いのか安いのかも分からないまま、とりあえず箱に紙幣を突っ込むと、透明なフィルムでパッケージされたクラッカー10枚セットを手にとった。

と、

「……、あれ?」

2人の下へ引き返そうとした当麻は、ふと足を止めた。

『壁』の区画にあるのは、フリードリリンクのコーナーだけではない。機内トイレや掃除用具入れなどのスペース、機内食を保管したり温めたりする小部屋なども備えられているのだ。

しかし、その小部屋の扉が開いていた。

(……)こういう飛行機のドアって、半開きにしててよかつたんだっけ？)

当麻は、ドアに近づいて行った。

だが、まあ、閉めるだけなら怒られないだろうし、などという悠長な考えは、すぐに霧散した。

見たのだ。

半開きになったドアの向こうに広がる光景を。

機内食を温めるためであろう、複数の電子レンジがボルトで固定されていた。それだけなら普通なのであるが、そこに何か赤黒いべつたりとしたものがこびりついていたのだ。幅が15センチ、長さは40センチほどもあった。

まるで『何者かが液で汚れた手を壁につけて、立ち上がろうとしている』ような印象を受ける。

何の液体なのだろうか。場所を考えれば、何かシチューのようなものでもこぼれたのかもしれないが……。

「見てしまいましたね」

不意に、背後からそんな声が聞こえてきた。

女性のものであった。その声に振り返ると、そこには金髪ナイスバディのフライトアテンダントさんが立っている。

申し訳なさそうに、彼女はもう一度言った。

「その血痕、見てしまいましたね」

当麻の知らないことまで、フライトアテンダントは告げてきた。

「これは——」

思わず返事を口走る当麻。しかし、その声は途中で遮られた。

理由は単純。フライトアテンダントがいきなり当麻の腕をねじ上

げ、床にその体を倒したからだ。

「テロリストです……」

「フライトアテンダントさんが!?!」

ちっ違います! と彼女は慌てて否定した。

空港の管制から、先ほど連絡があった。その内容は最悪だ。

ある要求が呑まれない場合、犯人はスカイバス365の構造的な欠陥を突いて、この機の着陸を失敗させる——つまり、墜落、炎上させる。

そして、その対応を始めたときに、フライトアテンダントの同僚の1人が急に背後から襲われた。もつとも、彼らはさすがに犯人を当麻だとは考えてないらしい。

「しかし、こういった情報を他のお客様へ伝えられては困るんです」
もしもそんな情報が伝搬してしまったら、逃げ場のない機内はパニックに陥る。それだけでどれだけのけが人が出るかもわからない。上に、最悪、機内のどこかで一般客に紛れ込んでいる犯人たちを刺激してしまう可能性がある。

協力の謝礼としてフライト料金はタダにしてくれるらしいが、当麻は機内食の加熱スペースに放り込まれ、外から鍵をかけられた。

そして飛行機は落ち始める

上条当麻が帰ってこない。

『あー、また何か不幸に巻き込まれている気がするな、あの親友。悪いインデックス、ちよつくら当麻の様子を見に行つてくるわ』

そんなことを言つて、神谷駿斗も当麻を探しに席を立つて行つた。

2人の少年と、有料のクラツカーを待つていたインデックスは、ついに空腹に耐えきれずに席を立つ。

しかし、彼らを探し出すつもりで『壁』のエリアに向かうと、そこには誰もいなかった。

「？」

首を傾げつつも、来た道を彼女は引き返して歩き始める。すると、後ろから声をかけられた。

「インデックス」

「あ、はやと」

振り返ると、駿斗がそこにいた。しかし、その横に当麻はいない。

「……とうまは？」

「それが、どこにいるかイマイチ分からないんだよなあ。すれ違つているのかもしれないし、俺一応別の階も見てるわ。悪いけど、席に戻つて待つてくれるか？」

駿斗の言葉に承諾の返事を返し、彼女は再び自分の席へと戻つていった。

しかし、ここでも足が止まる。

上条当麻の席に、誰かが座つていた。

地味な色合いのスーツを着た、色白の男だった。年は20代前半だろうか。背丈はそこそこ、フランス語で書かれた新聞を大きく広げているため、顔の下半分が隠れていて、人相まではよく分からない。

しかし、確かに言えることは、この男が、さつき別れた神谷駿斗でも、いつまでも戻つてこない上条当麻でもない、別の人間だということ

とどった。そして、完全記憶能力を持つているインデックスが、自分の座席を間違えているという可能性は、まずない。

「そこはとうまの席だよ」

その声に、新聞男の肩がピクリと動いた。

改めて男の様子を見てみると、彼は片手で新聞紙を広げ、空いている方の手で新聞に隠された、黒っぽい色のケータイデンワールを握っていた。同じく新聞に遮られていた男の膝上には、デンワールのパーツなのだろうか、細井ケーブルのようなものや、爪切りのようなものまである。

「……くそ、なんで120秒も待てねえんだ」

男はフランス語で何かを吐き捨てるように言った後、新聞紙を畳んで膝上に乗せ、さりげない調子で手を差し出した。

いや、厳密には違う。その手に握った刃物を、インデックスの脇腹に押し付けたのだ。

「空港のセキュリティは、基本的に金属探知をメインに行う」

男はフランス語でそんなことを言った。

「だから、意外に気づかない。……動物の骨を削ってつくったナイフだって、内臓も刺せるし動脈を切ることもできるっていう、簡単な事実がな」

しかし、ひとまず目撃者を封じたものの、男は焦っていた。

（……最悪だ。一番最初の一手で間違えてから、何一つ計画通りに進まない！）

彼はインデックスを刃物で押さえてはいるものの、実際には彼女に対して何もできないのだ。

そればかりか、少女が騒ぎ出していることが露呈すれば、それで終わり。ナイフを振り回せば数人は刺し殺すこともできるだろうが、結局は正義心というよりは恐怖心からパニックを起こした人々によって、数の蹂躪にさらされるだろう。マシンガンでもあれば別であろうが、少なくとも今持っている小さな刃物一本でどうにかできるものではない。

「……何してるの?」

インデックスは、彼が片手でいじっているケーブルや携帯電話を見

て言った。男にそれを応える義理はないが、ほとんど独り言のような形で告げる。

「プログラムを流す。携帯電話のデータ通信機能を使って、不時着安定装置に干渉できるようにするためのプログラムだ」

「ふじちやくく？」

眉をひそめる少女を無視して、男は窓のすぐ下にある壁に目をやる。丸めた引き金を引き延ばし、壁に空いた隙間に滑り込ませると、そのまま横へと動かしだした。すると、まるでカッターで切り取ったような一直線のラインが生まれる。そして、そのまま手前に引いた。

すると、自動車のダッシュボードのように蓋が開き、20本以上のケーブルが出てくる。

「要求が無事に飲まれれば、こいつを使う必要はなくなる。そうだ、俺だって別に好きでこんなことをしているわけじゃ……」

言いかけた男の声が、ふいに途切れた。

原因は、その視線の先。ケーブルとケーブルをつなぐためのコネクタだ。携帯電話の下部コネクタから伸びたケーブルを、旅客機の壁の中にあるメンテナンス用ケーブルに接続する手はずだったのだが、それになぜか亀裂が生じていた。そのため、うまく接続ができないでいたのだ。

ケーブルはつながらない。つまり、プログラムは流せない。

「あれ、それはとうまが」

隣の少女が何か言ったが、男は聞いていなかった。

「くそっ！」

男がフランス語で上げた怒鳴り声に、周囲の乗客の視線が集中した。これ以上注目を浴びるのを防ぐために、男は壁から開いた扉を乱暴に閉めると、隣の少女に刃物を突き付けたまま天井を眺める。

(どうする)

エコノミークラスの座席からプログラムを流すことはできないということは、すなわち構造的な欠陥を使った『交渉』はもう続行できないことを意味していた。

次なる手を考える必要がある。

それは、貨物室の中にある『アレ』だ。しかし、そこへ続くハッチをこじ開けるには、フライトアテンダント以上のセキュリティ権限を持つカードキーを手に入れる必要がある。

だが、それよりも前に、隣で身を強張らせている少女を完全に黙らせる必要がある。

「立て。少しでも逆らえば殺す」

たくさんの電子レンジが壁際に並ぶ機内食の加熱スペースで、当麻はピクンと顔を上げた。

足音が聞こえてきたからだ。

(1人ではない……)

恐らくは、最低でも2人。そして、その後には追加で聞き覚えのある音まで聞こえてくる。

ぴーぴー、という笛のような音だ。

(……これ、インデックスの?)

フライトアテンダントさんから、彼女はいつまでたってもやってこない機内食にイライラしていた時に、安っぽいボールのような笛のオモチャをもらっていたはずである。しかし、聞こえてくる音からして、恐らくは自分で鳴らしているのではなかった。恐らく、服のポケットに入れた状態で歩いているため、おもちゃが体とこすれ、体の動きに合わせて勝手に鳴っているだけなのだろう。

あのオモチャが、必ずしも彼女だけが持っているとは限らないのだが、それでもなんとなく簡素なワンピースを着た少女のことを思い出してしまう。

(……待てよ)

しかし、唐突にその楽観的な意見に冷や水を浴びせるような考えが浮かんだ。

そもそも、自分自身がどうした理由でこんな場所にいるのだ。そして、戻ってこない自分を心配して、駿斗が彼女の下を離れている可能性は、十分にあるではないか。

(いや、そんな訳が……)

当麻が否定しようとした時、2つの足音が止まった。同時に、ぴーぴーという笛の音もやむ。

どこかの扉が開くような音が聞こえた。どうやら、当麻が閉じ込められているのと同じ『壁』のエリアにある扉のようだ。つまり、他の乗客から目撃されるようなことはない。

そして、

「入れ。刺されたくなかったらな」

声はフランス語で、当麻にはその意味が分からなかった。

しかし、どう考えても添乗員の物ではない野太い男の声が、笛の持ち主に対して命令しているのは感じられた。

(ふざけんなッ！)

思わず動き出そうとした当麻であったが、しかしドアには鍵がかかっていて、それも電子ロックだ。しかし鍵がダメならドアそのものはどうなのかというと、金属製ではないようだが、一撃で蹴破れるようなものではなさそうである。一撃で外に脱出できなければ、単に犯人を刺激するだけで終わってしまう。

(駿斗は来ないのか、くそ！)

親友がどこにいるのかは分からない。だから、とにかく目と鼻の先にいるであろう少女の下へ駆けつけることを考える当麻。

今は硬化手袋フリックグローブも貨物室にある荷物の中で使えない。そこで目についたのは、機内食を運ぶための四角い乳母車のようなカートだ。

ためらいなく、そのハンドルを乱暴につかみ、その矛先をドアへと向ける。弁償など考えている余裕はなかった。

「おおおおおおおおおおおおおつー！」

渾身の叫びと共に前進、激突する。

グツンチャア！ というすさまじい音と共に、アルミ製のカートの全面がつぶれる。しかし、それと引き換えにドアのロック部分も大きく弾け、蹴破るように大きく開かれた。当麻は、壊れたカートごと外に

転がり出る。

すぐに周りを見渡すと、『壁』のエリアにある複数の小部屋の内、閉じているドアは1つしかなかった。

迷わずに開く。

そこにいたのは、1人の男とインデックスだった。男の手には用具入れにあつたのであろうゴムホースがあり、それが少女の首に巻き付いている。

何をしているのか。

考えるよりも先に、手が動いていた。

「っ?」

男は目の前のインデックスに夢中になっていたのか、自分の襟の後ろを掴まれるその瞬間まで、当麻の存在に気付けなかった。

当麻は、男の襟をつかんだまま上半身を回し、遠心力を利用して男の体を掃除用具入れの外へと放り出す。

ゴトン! という轟音が炸裂した。

絶叫を上げる男を無視して、当麻は振り上げた自分の足を敵の胸板めがけて振り下ろそうとする。

男が避けると、その真横の床に足がめり込んだ。どうやら、コスト削減のためなのか床が薄いようだ。そこへ、男が腕を振るう。

熱いような痛みが走った。見れば、敵の手にはナイフが握られている。金属探知機対策なのか、それは動物の骨でできているようだ。それを確認すると、機内食用の壊れたカートから、ハンドルに使われていたアルミ製のバーを引き抜く。

互いに凶器を手にした状態で、男があとずさりを始めた。

そこへ、ドタドタと連続した足音が近づいてくる。恐らく、当麻がドアを破った轟音にフライトアテンダントたちが気が付いたのでろう。それを聞いた男は逃走を始めた。

「当麻!」

聞き慣れた親友の声に振り返ることもせず、掃除用具入れの中でグツタリとしているインデックスの下へと向かった。首に青黒い痕が残っているが、命に別状はないようだ。

「インデックス！」

駿斗が万象再現リブロードクシヨシで治療を始めるその横で、当麻は大声で彼女に呼びかける。

すると、少女の唇が微かに動いた。

「なに？　不時着、安定装置……？」

聞き慣れない単語、それも、機械音痴のインデックスから出てくるとは思えない単語だ。

そのタイミングで、機長がやってきた。彼は当麻の顔や壊れたドアを見ると不機嫌そうな表情をしたが、ぐったりとしたインデックスの姿や当麻の切り傷を見ると、ただ事ではないと察したようだ。

「不時着安定装置っていうのは何のことだ？　インデックスが犯人から聞いた可能性がある」

「……胴体着陸って知ってるか」

テレビなどでは時折見られるもので、名前だけなら知っている人も多いであろう。

それが危険なのは、直接燃料に引火するわけではない。なぜなら、飛行機の燃料というものは胴体ではなく翼の中に入っているからだ。

最も問題なのは、エンジン。

スカイバス365は設計上、胴体着陸時にもエンジンが地面に接触することはしない。しかし、それでも強い震動がその内部へと伝わってしまう。そして、回転中のエンジン内部は、ただでさえ燃えやすい航空燃料を空気と反応させているため、爆弾のような状態となっているのだ。

「そんなところに、強い振動が加わったら……」

「エンジンでの出火から火が回って、主翼のタンクまで火が回ったらドカンだな」

そのため、スカイバス365には不時着安定装置が組み込まれている。胴体着陸時の衝撃をセンサーが自動で検出すると、全てのエンジンが自動停止する上に、燃料パイプを完全に塞いでエンジンからの出火と燃料タンクへの引火を阻止するものだ。最後には、慣性力だけで滑走路を進みながら減速していく。

「全てのエンジンを、自動停止させる……?」

その言葉に、2人の全身に嫌な予感が駆け巡った。駿斗はそのまま、その内容を口に出す。

「じゃあ、もしもこの状態でその装置が、誤作動なんか起こしたら……」

その先は言わなかった。そして、誰も答えなかった。

その代わりに、機長がわずかにうめいたあとで言う。

「……事情はだいたいわかった。お前の知り合いが傷つけられたこともな。こちらの力が及ばなかったのは残念だったが……」

「何が分かったんだ」

当麻が言葉にしなかったことを、駿斗は口に出して機長の台詞を遮った。

睨みつけてくる男を無視して、彼はそのまま言葉を続ける。

「何が乗客の命を預かる、だ。結局、これがアンタらのした行動の結果だろうが！ もう、遅かったんだよ。被害は既に出た。今更マニユアルをなぞったところで、それは何一つ変わらないんだ」

駿斗は、同じような憤りの表情を浮かべている親友の肩を叩くと、インデックスを抱え起こした。

隣にいる当麻はというと、今にでも拳を機長の顔面に叩き付けそうである。

「駿斗、俺は」

「当麻。悪いけど、こいつを殴るのは後だ。それよりも先に、やらなくちゃならねえことがあるからな」

その言葉を聞くと、当麻は拳を腰の横で握りしめたまま肩を震わせて言った。

「偉そうなセリフを吐くだけ吐いて、失敗しても反省もしねえっつーのはどういう理屈だ！ こっちは知り合いが手を出されてんだ！ 500人の命を預かるとか言っておきながら、すっかり漏れてんじやねえか！」

「他の乗客に知らせるようなことはしねえよ。こっちもパニックなんてごめんだからな。だが、アンタに指図されもしない。俺たちは俺た

ちのやり方でやらせてもらう！」

駿斗まで怒りを叩き付けるようにそう叫ぶと、フライトアテンダントにインデックスの介抱を任せ、当麻と共に男が消えた急な階段の方へ足を向けた。

別のフロアにあるビジネスクラスとファーストクラスの間の『壁』のエリアに着くと、すでに日没後の機内が明かりに照らされていた。しかし、『壁』のエリアである階段のある場所は、他の場所に比べても薄暗い。

「当麻、クソ野郎の顔は覚えているか？」

「いや、スーツを着ていたことと、ある程度の人相は覚えてるけど、座席に座っている人間から見分けるとなると難しいな……」

おまけに、夏休みでも冬休みでもないこの時期に飛行機に乗っている人間は、やはりビジネスマン（ウーマン）が多いのか、大半がスーツを着用している。どうやら、1人1人座席に座っている人間をチェックしていくわけにはいかなそうだ。

さらに、相手はナイフを持っている。うかつに突撃するのは危険で、最悪他の乗客が巻き込まれる可能性もある。

「となると、相手から出てきてもらうしかないか」

駿斗がそう言うのと、当麻も同じことを考えていたようで笑みを返した。

相手の目的は、イギリスとの交渉だ。すなわち、その決着がつかないうちに大きな問題が生じた場合、テロリストはそれを解決するために行動を起こす可能性が高い。

当麻は先ほどと同じ『壁』のエリアに向けて歩き出した。駿斗は、他の『壁』のエリアへ魔術を構築しながら歩き出す。

ビイイイイ！ というかん高い電子音が鳴り響いた。

緊急用の警報であり、全ての座席の下へ酸素吸入用の透明なマスクが一齐にこぼれ出す。それを見た乗客たちは一瞬キョトンとしたが、それからまるで火が付いたかのような騒ぎを起こす。

テロリストは焦るはずだ。

なぜなら、彼らの目的は『マスターレコーダー』の破壊により、イギリスの空路を完全に封鎖することである。そのためにスカイバス365の構造的な欠陥について墜落させることができると示すことで、その交渉を持ちかけることにした。

しかし、この飛行機の墜落が『単なる航空事故』になってしまったら、すべてがおじゃんになってしまう。

テロ事件そのものが消えてしまうのだから。

(まずい、まずい、まずい！ くそ、どうにかしねえと！)

男は慌てて座席から立ち上がった。しかし、その頭の中に具体的な策は思い浮かんでこない。

一方で、機内で『アーチエリー』を手にした機長はかん高いブザーの音に顔をしかめると、壁にかけられたマイクをつかみ取った。

荒々しい口調でコックピットと連絡を取るが、これは機体のバランスなどは関係なく、計器類の自動警報ではない、機内の手動スイッチによる警報であるという。

そのことに苛立ちながら誤報のアナウンスを流すように命じると、マイク兼通話スピーカーを床に叩き付けた。しかし、そのまま東洋人の少年たちを探しに行こうとした時、再びスピーカーから切羽詰った副操縦士の声が飛んでくる。

『きつ、機長！ 緊急です!?!』

なりふり構わない様子その声は、続けて告げる。

『とつ、とにかく、コックピットまで戻ってきてください！ ねっ、燃料メーターがっ！ この減り方はおかしい！ タンクに穴が空いているとしか思えません!』

「マジか……」

熱くなっていた機長の頭に冷や水を浴びせるような言葉だった。

ただ機内のブザーを押しただけで、そんな変化が訪れるはずがない。すると、本当に不時着安定装置が関わった何かが発生している……?」

『機長、指示を！ このままだと空港まで持ちません！ 最悪、幹線道

路に不時着するための準備を進めておく必要があります！」

「ちくしょう！」

その言葉で、機長は『アーチェリー』を届けに来た副操縦士と、まっすぐにコックピットへ向かって走りだした。

ガクン、と機体が大きく傾くのを、男は感じた。つまり、機体がその先を下に向け、高度を急激に下げ始めたのだ。

それはつまり、

(不時着？　まずい！)

男の目的であるマスターレコーダーの破壊のためには、イギリスがその決断を下す前に不時着をされるわけにはいかない。

そして、万が一『どこかへ不時着した旅客機』があった場合、大型の警察機関が周囲を完全に包囲するだろう。そうなれば泥沼の籠城戦だ。また、最近の飛行機の壁が軽くて薄いのは、原油高によるコスト増大への対策の他に、大型ライフルで確実に狙撃を成功させるためだという噂もある。

イギリスの空港や幹線道路など、敵地のだ真ん中なのだ。

しかし、なすすべのないまま飛行機の高度は下がっていく。エレベーターが下がっているときのような浮遊感に、男は苛立ちを抑えきれない。

彼は近くの『壁』のエリアに飛び込んだ。そこには、他の『壁』のエリアと同様に、フライトアテンダント用のマイクが壁にかけられている。それを手に取ると、震える手を抑えながらコックピットへとつながるように調整し、開口一番にこう叫んだ。

「不時着はやめろ！　今すぐこの機を落とすぞ！」

『?!?』

男の恫喝に、向こうで息が詰まるような音が聞こえた。

「俺はスカイバス365の構造的な欠陥を掌握している。いつでもこの機は墜落させられる！　500人以上の乗客を殺されたくなくなったら、今すぐ高度を元に戻せ！」

当然ながら、エコノミークラスの座席から不時着安定装置へ干渉ことはできなかつたし、最後の頼みの綱である貨物室にいる仲間たちも、ハッチの鍵が手に入らない限りには使い物にならない。完全なハツタリであつた。

しかし、それを受けても返答は予想していた物とは異なっていた。『ダメだ。どういう訳か、燃料メーターの数字が急激に減っている。おそらく燃料が漏れているんだ。このままじゃエンジンバラの空港までたどり着けない。ロンドンの空港に引き返すのも無理だ！ somewhere、下手をすると燃料に火がついて、エンジンそのものが爆発するかもしれない！』

そこまで言われても、男の考えは変わらなかつた。そんなことはどうでもいい。機体が爆発しようが、男には関係ない。

重要なのは、これがテロ事件という形で華々しく結末を飾ることなのだ。

「クソつたれ。殺してやる。良いか、3分だ。3分以内に高度を元に戻さなければ、乗客を1人ずつぶつ殺してやる！」

『事態が分かつてんのか!?!』

「そつちこそ分かつてるんだらうな！ 乗客の命を握っているのは俺なんだ！ 人質は500人以上いる。半分くらいぶつ殺したって、人質のストックは十分に保てることを忘れるな！」

空の上での戦闘

男は顔を上げた。

機体の向きが変わったのだ。先ほどまでと反対に機首の方が上になった——すなわち、機体の高度が上がったことを確認すると、わずかばかり胸をなでおろした。

(不時着は……回避された?)

はあはあ、と荒い息を吐き出しながら、男は周囲を見渡した。すると、機内に様々な言語で『今は誤報なので心配ない』といった旨の自動アナウンスが流れだし、乗客たちのざわめきも収束に向けて動き始める。

(何とか……なったか)

初めの計画とはかなり離れてしまっており、今はほとんど手詰まりの状態であると言えた。しかし、まだ決定的な『失敗』ではない、と思えるのは、貨物室にある準備であった。そこへつながるハッチを開ける方法さえ手に入れば、十分に挽回できる。

するとそこへ、声が聞こえた。

「ここにいたのか」

それも1人ではなく、2人分の男の声だった。

そのことにギョツとした男は振り返ると、自分が『壁』のエリアの中で完全に両方を塞がれていたことに気が付いた。

片方は、ツンツン頭の東洋人の男。

もう片方は、少し短めに髪を切りそろえた、やはり東洋人の男。

一方で、当麻と駿斗の2人にしても、特に正確に状況を掴んでいるわけではなかった。

緊急ブザーを押したのは当麻であるが、その後、旅客機の高度が急激に下がったことについては、はつきりとした原因は分からなかった。駿斗は何か魔術的なものを感じ取ったらしいが、機内からは魔力を感じなかったということなので、外部からどのような干渉があった

のか、結局ほとんど不明のままであった。

しかし、とにかく犯人はその心を揺さぶられ、その結果としてイレギュラーな行動を起こした。

男はほんの数秒、自分をはさんで対峙している2人を見比べた。どちらとも細見な体をしているが、だからといって両方とも腕つぶしが弱いということにはならない。

そして、そのわずかな逡巡の間に、2人は男の肩越しに目と目で通じ合い、やるべきことを決めた。

両者が同時に男に向けて突っ込んだ。男は迷わずその懐のナイフへ手を伸ばしたが、急にその腕が重くなつたことに戸惑つたその瞬間、頭とみぞおちに拳と蹴りを喰らつた。

「ぐふっ!?!」

肺から空気が洩れ、そのまま床に倒される男。

(……ナイフだ)

しかし、その状態でもなんとか懐のナイフを引き抜こうとする。最悪、片方だけでも刺し違えることができれば、2体1でも勝率はグンと増す。どちらかを刺した後で、そいつを人質として交渉するという選択肢もあるのだ。

そう考えた彼は、床に倒されたまま懐のナイフへと慎重に手を伸ばす。そして、後ろ首の襟をつかまれたその瞬間に、ナイフを取り出して思い切り相手に突きつけた。

フランス語で2人には分からないが、それでも勝ち誇つた口調で告げる。

「文句はねえよな!」

そして凶器がその姿を現す。

……はずだったのだが。

問題の動物の骨でのナイフは、当麻の膝蹴りを受けて根元から折れていた。

「……、マジかよ」

男はグリップだけになったナイフを、未練がましくにらみつける。その直後にはつとして顔を上げると、そこには2人の男が拳を握り

しめていた。伝わらないと分かっているながら、あえて日本語で。

「文句はねえよな？」

その後、ガンゴンバキン！ という拳を振り下ろす音が連続した。2人とも、この男に対しては容赦などするつもりはない、ということについては一致していたのだ。

ビジネスとファーストクラスの間にある『壁』のエリアにある小さな部屋で、テロリストの男は手足を縛られて転がされていた。

また、燃料地のメーターが急速に減じていた、というのはどうやら機長たちの誤読であつたらしく、問題はなかつたようだ（という話は、不機嫌な機長に代わってフライトアテンダントさんがしてくれた）。

「ビーフォアフィッシュ、ビーフォアフィッシュ！ 問題が解決したならあとはひこーきのご飯を食べるだけなんだよ！」

そんな平和な台詞を叫ぶインデックスは、その首にテロリストによつて首を絞められつけられた、青黒いあざのことなど何の気にもしていない様子である。

しかし、その隣にいる当麻と駿斗は考え込んでいた。

「やっぱり、当麻も引つかかるのか？」

「ああ……そういえば、どうしてあいつらは、こんなタイミングでテロを起こそうとしたんだ？」

「それは、反イギリス系のグループらしいですから、イギリスの上空で問題を発生させたかったのでは？」

当麻の疑問に対し、フライトアテンダントさんは怪訝そうな顔でそう言った。もしかしたら、乗客である彼らには、これ以上動き回ってほしくないのかもしれない。

「でも、あいつらはイギリス国内で不時着されたりすることを恐れているみたいだった」

「そうだな。あくまでも『墜落』させることにこだわっていたし、だけど、もっと早くに行動を起こしていれば、もっと余裕を持ってこを運ぶこともできたはずなのに……」

彼らには、わざわざイギリス上空で行動を起こす理由がないはずだ。フライトアテンダントさんの言ったことも考えられなくもないが、それなら『イギリス行きの飛行機』が襲われた、というだけで十分な気がする。

そもそも、このテロはかなり計画的な行動のはずだ。実際に、他の便でエンジンを短い時間止めて、不時着安定装置が使い物になるのかどうか確かめているくらいなのだから。

つまり、わざわざこのタイミングで行動したからには、そこに何かしらの『理由』があつてしかるべきだ。しかし、彼らの目的が『マスターレコーダーの破壊』である以上、それは『目的』ではなく『手段』の可能性が高い。わざわざイギリス上空になるまで計画の実行を待つ理由は、そうとしか思えない。

となれば、これが失敗した場合の第2、第3のプランを用意している可能性がある。

「……10時間の内、わざわざ最後の1時間を狙ってテロが起こされた理由」

そのとき、駿斗はふと隣でビーフオアフィッシュ！ を連呼している少女を見、そして思い出した。

そもそも、どうして彼女に機内食が届けられることになっていたのか。

「流動食……いや、機内に積み込まれた荷物だ！ パリの空港に立ち寄った時に、追加で入れられたその中に……」

「貨物室か！」

テロリストがこんな空港に着く直前になって行動を起こしたのは、彼の仲間が荷物に紛れて潜り込んだからだ。普通の乗客という形で飛行機に乗ると、あのナイフのような武器しか機内に持ち込むことができない。そのため、本格的な武装をした仲間を、コンテナの中に紛れる形で潜り込ませたのだ。

もしも何かあつた時のために、外側からハッチを開けて発動する第二プラン。

通常のチェックを潜り抜ける形で彼らは潜入しているため、敵は銃

や爆弾で武装している可能性が高い。

そうなれば、飛行機など簡単に落とされてしまう。飛行機というものは飛んでいるとき、外側の気圧の低さに比べて地表に近いように機内の気圧を調節している。そのため、一か所小さな穴をあけられただけでも危険だ。機内の空気が気圧の低い外へと一斉に流れだし、やがては小さな穴を内側からめくりあげて機体そのものを大破させてしまうのだ。

「貨物室の入り口は、あそこしかないのか？」

「え、ええ。ロックを解除するには、副操縦士以上のカードキーが必要になりますけど」

機長に助けを求めるのは無理であるが、副操縦士に事情を説明すれば、何とかなるかもしれない、とフライトアテンダントさんは言う。「それから、スカイバス365の貨物室は3つのブロックに分かれています。フランスで積んだ荷物は全て、真ん中のブロックに集中されているみたいですね」

となると、そこにいる可能性が一番高いということだ。

「こういう時は、俺の出番だな。当麻はインデックスと、ここで待っていてくれ」

「すまん、駿斗。しくじるんじゃないぞ」

「そんなこと、少しも考えてないくせに」

親友2人は軽く笑うと、拳を打ち付け合った。

フライトアテンダントに先導されて、駿斗はテロリストの潜む貨物室へと向かう。

扉越しに、駿斗は貨物室の様子を感じ取っていた。

(敵は1人。さすがに、怪しい恰好はしていないか。どうやら、空港の作業服の中に銃や手榴弾を忍び込ませているみたいだな)

そのことを確認すると、フライトアテンダントさんにはここで下がってしてもらい、駿斗は手渡されたカードキーで中を開ける。

扉を開けると、彼は決して慎重には開けなかった。むしろ、大き

な音がするくらいの勢いで開けた。

テロリストは、当然ながらその音にすぐに反応して銃口を向ける。

しかし、思わず彼、エーカーが銃口を向けたのは、扉とは正反対の方向だった。

音の発生源を誤認させられた。

そのことに彼が気づいた直後、その銃が砂のように崩れ落ちた。

ウェーブインターフェース

波動干渉による光学迷彩と、音の操作。そして、自在変換によるマテリアルハンド銃の破壊。

その一連の動作を流れるように行った駿斗は、自分の身に起こった超常現象に思わず呆けたテロリストへと肉迫し、拳を突き出した。

「っ——！」

それでも、すぐに首を振ってその拳を避けたのはさすがというべきか。そして、エーカーはそのまま頭突きを一撃食らわせ、その胸ぐらを掴み上げた。

少年の体が宙に浮く。しかし、駿斗もすぐに対応した。

自分自身にかかる重力を下げると同時に、上向きに重力を発生させる。その体を床に叩き付けようとしたエーカーの腕が、不自然な負荷に拮む力を緩めた。

駿斗は身をひねって体を180度回転させると、機体の天井に足を着ける。

「なっ……!?!」

その物理法則を超えた動きに、思わず体の動きを止めてしまうエーカー。そして、その隙を逃さず、駿斗は天井に足を着けたまま拳を大きく振りかぶる。

その直後、バキン！ という子気味良い音と共に、その体が後ろへと吹き飛んだ。

「やったか……?」

慣れない姿勢ではあったが拳を相手の顔面に喰らわせた駿斗は、警戒を緩めないようにしながらも、少しずつエーカーの下へと近づいて

行く。この他にも何か仕掛けてある可能性はないか。そんなことを考えながら。

だが、その動きは少し慎重すぎた。

倒れていたエーカーが起き上がった。そして、床に落ちていたバッグの中から手榴弾が抜き出される。

「……ッ！」

すぐに駿斗はその爆発物を粉々にする。しかし、男はその直後バッグを駿斗に投げつけた。

思わずそのバッグを中身ごと粉々にしてしまう駿斗。しかし、その粉で視界が塞がったその直後、粉塵の向こうに手榴弾を持っている男のシルエットが浮かび上がった。

（視界が!?!）

バッグやその中身を分解して発生した粉塵など、数秒経てば消え去ってしまうものだ。しかし、自在変換で粉々にするためには、対象となる物体を正確に把握していなければならないため、その数秒間は使用できない。

考えられる手は、ウエーブインターフェース波動干渉で空間を把握してから自在変換を使う方法であるが、そんな余裕はない。

つまり、エーカーが手に持っている手榴弾に対処することは不可能だ。

「くそっ！」

ダメもとでも、駿斗は防御術式の結界を壁一面に張り巡らせようとする。しかし、それよりもエーカーがピンを抜く方が早いだろう。

この時の駿斗には、スカイバス365の外壁にダメージが加わるのを止める手立ては持っていなかった。そして、そのような事態になれば、この飛行機は落ちる可能性が高い。理論上は駿斗の自在変換で修復が可能であるが、航空機の壁の構造など彼は詳しくないし、それに一度起きた『破壊』がどれほどの被害へと拡大していくのかなど分からない。

その時だった。

『まったく、君たちは殺すことを迷うから、周りまで危険にさらすんだ

よ』

声が、聞こえた。そして、飛行機の外からある魔力を感じた。それらは、よく知っているものだった。

その時、コックピットで操縦桿を握っていた機長はまず音に気が付き、そして怪訝な顔でレーダーを見た後に視線を窓の外に移し、それからビクリと肩を震わせた。

ステルス性能でもあるのか、真つ黒で巨大な輸送機が10メートルもない間隔の場所を飛んでいたのだ。戦闘機と異なり80メートルクラスの巨体を持つ大型旅客機においては、自殺行為としか思えないものだった。

その時、機内にいた人々は、窓の外を見て驚いていた。輸送機の後部が開き、そこから何かがばらまかれていた。紙吹雪のように高空を舞っているものを見て、多くの人は無邪気にもきれいだと思った。

しかし、その一方で、魔導書図書館インデックスは、周囲の騒ぎに引き寄せられるかのように窓の外へ目をやり、愕然としていた。彼女の持つ10万3000冊の知識は、その紙吹雪の正体がルーンのカードであることを看破していた。

そして、貨物室では、エーカーのすぐ近くの壁で異変があった。

ズン！ という音と共に、炎の剣が機体の壁を貫通してきたのだ。それはエーカーの服を多少焦がしただけにとどまったが、その直後に剣が引っ込んだ。

それと同時。

ゴッ！ と機内の空気が荒れ狂った。

壁に穴が空いたことで、一気に空気が外へと飛び出したのだ。しかし、小さな穴であったために、すぐに機体の崩壊が起きるようなことはなかった。

その代わりに被害を受けたのはエーカー。

外へ飛び出す空気に引っ張られる形で、エーカーの体が穴を塞いだ。

高度1万メートルの上空では極端に空気が薄く、人間では呼吸が難しいほどである。そのため、航空機の内部では人工的に気圧を調整す

ることで、人間がすごしやすいように工夫されている。ちょうど、風船の中に空気を入れて膨らませているような状態になっているのだ。

したがって、普通であれば、空いた穴から噴き出る空気が、その断面をきっかけに機体の壁を内側からめくりあげ、航空機を破壊してしまう。しかし、エーカーという蓋を得たことで、スカイバス365は崩壊を免れているのだ。

「ぐぐぐぐぐぐおがががあああっっっ！」

そして、エーカーは絶叫を上げていた。

常時穴に肉体を吸われ続けている彼には、文字通り腹の肉をむしり取られるような激痛が付きまとう。そして、これは外の大気圧が機内の気圧と同じになるまで続くのだ。

『エンジンバラ空港まであと10分だ。それぐらいなら、そいつの命も持つんじゃないかな。……まったく、曲がりなりにも「あの子」の管理業務を負っているんだから、これぐらいの覚悟は見せてほしいものだね』

炎の魔術師の声はそれだけを残し、通信が途絶えた。

目の前の状況に思わず呆けていた駿斗であったが、気を取り直して未だにエーカーが手に持ってピンを抜こうとしていた手榴弾を粉々にする。その他、体を調べて武器となりそうなものは破壊すると拘束術式をかけ、その後壁の修復へと取り掛かった。

「まったく、デカイ借りが付いちまったな」

そんなことを、駿斗は作業しながら安堵のため息交じりに呟いた。

そして、訳の分からない拘束を受けて呆然としている男へ話しかける。

「目的はイギリスの孤立か？ 確かに、イギリスとフランスの仲は決して良好とはいえない。そして、ユーロトンネルの際にはいろいろあったらしいからな。だけどよ、それでも善良な一般民を巻き込むお前らが賞賛されるとは思えないな。それは世界中に、というだけじゃねえ。お前らの、フランスの人々にもだ」

「何がだ」

男は、わざわざ日本語に合わせて話した。

「貴様は知らねえかもしれないが、ユーロトンネルは過去に建造中止になったことがある。軍事や政治の問題でな」

つまり、未だにその有効性を認めようとしないう人間もいる。

そして、フランスは友好の証としてユーロトンネルの管理業務を共同で行うことにした。にも拘らず、それは先日壊されたのだ。

確かに、イギリス国民のすべてが悪いわけではない。だが、

「善良な市民の中に混じっているからといって、その馬鹿を見逃してやるつもりはない」

彼はそれだけ言い捨てると、その口を閉じた。

駿斗はそれを黙って聞いていたが、ようやく口を開いた。

「確かに、一口にイギリスと言っても、その中にはいろいろな人たちがいる。俺はイギリスじゃなくて学園都市の人間だから、その中にフランスに対して悪い感情を持っている奴がいない、とは言い切れねえ」
「だけだよ、と一息ついて続けた。」

「馬鹿が混じっているからと言って、善良な市民も巻き込んでいいってことにはならねえだろ」

駿斗はそう言い捨てると、速やかに男を昏倒させた。

そんなこんなで、エジンバラ空港に到着である。

エジンバラは、イギリス北部のスコットランドにある街だ。そのため、そこから南部にあるロンドンへ行くには、国内線の飛行機に乗るしかないのだ。

「しかし、いっぱいテレビカメラが来てたな。やっぱりテロがあったからか？」

出入国ゲートを片言の日本語で乗り越えた当麻は、携帯電話の画面で時刻を確認しようとしてからそれをやめた。時差があることを思い出したからだ。その代わりに、壁にかけられている時計を見る。

「ちなみに、日本とイギリスの時差は9時間だったと思うぞ、当麻。携帯の時刻から―9すればいいんだよ」

そんなことを解説しながらも、駿斗も壁の時計が夜の8時を指して

☆☆!!」

すでに言葉にできないほどの、ものすごい笑顔をしていた。

彼らは、迷わずに入り口となっているガラス扉へと突き進む。

が、その時、後ろから当麻がポン、とその肩を叩かれた。

そこにいたのは、1人の女性だった。いわずと知れた、『必要悪の教会』^{ネセサリウス}所属の『聖人』であり、片足だけ大きく切り取ったジーンズに、ヘそが見えるほどに片側の裾が絞られたTシャツに、同じく片腕だけ露出するように切り取られたジャケット。

そんな左右非対称な魔術的な服装に加え、何よりもベルトで腰に下げられた2メートルを超す日本刀『七天七刀』が、全部をかつさらってしまっている。

お久しぶりです、と丁寧にあいさつをする彼女を見た、当麻と駿斗は思わず声を揃えてこう言った。

「な、なぜ墮天使エロメイドがこんな所に……ッ!?!」

その言葉を聞き、思わずブフォオ!? と咳き込む神裂火織。

彼女の苦労はこれから始まるようである。

王族との謁見

英国第三王女、ヴィリアンは広い部屋に佇んでいた。

テニスコート半分くらいの広さを持つこの私室が、国内外どころか自宅の内側でさえ権謀術策が繰り広げられる英国王室において、唯一全てを締め出して1人になることができる『安全な場所』である。

「……そうですか。はい、はい、何にしても、旅客機が無事にエンジンバラ空港に到着できたようで、何よりです」

ヴィリアンは表面が陶器でできた、アンティークな電話の受話器を握っていた。実際にはその外見とは反対に、バツキングダム宮殿の中にある最新鋭の交換器によって、嚴重なセキュリティを施しているのであるが、そんなことに彼女は詳しくなかった。

それよりも重要なことは、彼女が今話している相手が、エンジンバラ空港の責任者であるということである。

彼女は、荷物の中の流動食が、一刻も早く各家庭へと配られるように配慮するように頼むと、ゆつくりと受話器を置いた。

イギリスは、複雑な国家である。

というのも、文化においては、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北部アイルランドの『四文化』に別れている一方で、政治においては、王室派、騎士派、清教派の『三派閥』に別れているという事情があるのだ。この2つの相関図は複雑に絡み合っており、同じ『騎士派』でも出身の違いでいがみ合ったり、あるいは逆に『王室派』と『清教派』でも同じ出身地であるということでパイプが築かれていたりする。

その中で、第三王女であるヴィリアンが所属しているのは、当然ながら『王室派』だ。しかし、実際に彼女が持っている権限は、まるでないと言っても良い。

英国女王の娘である3人の王女は、こう評されているのだ。

長女は『頭脳』。

次女は『軍事』。

三女は『人徳』。

……つまり、人から尊敬を集めることはできるものの、実際に国を動かすことはできないのが、彼女であった。先ほどの空港の職員にしても、『こんなにも気を配ってくれるなんて、お姫様はなんと優しいのだろう』と思うことはあっても、『じゃあ忠誠を誓って一生仕えよう』とは考えない。

彼女の最大の武器は、その派閥を増大させることはできない。

結局彼女は、王室にとって本気である気もない政略結婚の餌にされる役割しか担っておらず、相手国の重鎮がそれによって油断したら、あとは彼女の姉たちがイギリスにとって有利な条約を締結させる、というだけのことなのだ。

そして、ここ最近のイギリスとフランスとの諍い。それは、彼女に『最悪の切り札』を連想させ、憂鬱な気分を与えるには十分なものであった。

その時、彼女の部屋にノックの音が響く。

「——ヴィリアン様」

分厚い扉の向こうから声を放ったのは、若い使用人の一人だった。民間出身の女性で、魔術にも疎い素人だ。王室の補佐役には『聖人』シルビアのように王権神授（王の力は神から授かったもの）という伝統にのっとり『巫女』としての力を持っている『近衛侍女』という特別な役職もあるのであるが、ヴィリアンは敢えて民間出身のメイドを従えていた。

「——『騎士派』『清教派』それぞれの長と、日本の学園都市より訪英した『ゲスト』の少年たちが問う宮殿に到着いたしました。まもなく『謁見』です。ヴィリアン様も、ご準備のほどを」

「……わかりました」

準備、とは言っても、彼女は私室でも公務の服装を解かない。そのため、緑色のドレスのまま広い部屋を歩いて廊下へと出ると、そのまま緑色のメイド服を着た使用人を従えて歩き出す。

その廊下には、盾の形をした紋章——エスカッションと呼ばれるものが、等間隔で壁に並べられていた。このバッキンガム宮殿にあるのは『騎士派』の紋章だけであり、この廊下にそれが飾られることは『名

門』の第一歩であるとされ、英国のために剣を持つ者の憧れであるという。

そんな中に、1つ不自然な場所があった。
空白。

等間隔に並べられた盾の紋章エスカッションの中で、1か所だけ、何も飾られていない場所がある。それは当然ながら、揭示や装飾のミスなどではない。本来ある『傭兵』に送られるはずであったその紋章は確かにかつて存在し、しかしそれを受け取らずにこの国を去ったその男に対して、『騎士派』のトップは敬意を示して今でもそこを空白にしているであった。

「ウイリアム……」

ウイリアムが思わずつぶやいたその名前を聞いても、使用人は何も語ることができなかった。

駿斗たちを乗せたヘリコプターが、バッキンガム宮殿に到着した。

広すぎるその場所は、何も知らされていなければ国立公園の中と勘違いしてもおかしくない。しかし、彼らはその眺めを悠長に楽しむ暇はなかった。

なぜなら、

「ゴオオはアアンウウウンンンンンンン！」

「落ち着けインデックス！ あと少し、あと少しだから！」

インデックスの空腹が限界点突破どころの話ではなくなっているからだ。もしも駿斗が拘束していなければ、今頃当麻の頭はかみつきどころか咀嚼が始まっていただろう。

それを横目に見ているにも関わらず、神裂は平然とヘリから地面に降り立つ。

「……向かい風の影響で到着予定時刻を過ぎてしまうとは、我ながら失策。急ぎましょう。もう皆様お集まりのほうです」

「ねえ、この惨劇を目の前にして何かコメントねえの!? 例えばサンドイツぐらいならありますが的ない！」

「ほらほらインデックス！ 仕事が終わったら何か食べに行こう、だからいい加減当麻の頭に噛みつくのはやめようそうしよう、な！ な！」

「うふふ、禁書目録はあなたの領分でしょう。その様子だと想像以上にそつなくこなしているようで安心しました」

「やっぱキレてるよね！ 墮天使エロメイドの件でぶちギレてるよね!? でも、そもそもあんな格好で病室へ飛び込んできたのは神裂じゃ危なあっ!?!」

と、当麻の言葉が途中で途切れたのは、神裂がその聖人の握力でそのツンツン頭にアイアンクローを喰らわせるべく伸ばされた手を、駿斗が掴んで止めたからである。

「ダメだからね!?! 聖人の握力で一般人の顔面わしづかみとか、人の頭がい骨から変形させるつもりかお前!?!」

「(チツ……と、とにかく、パイロットや他の皆がいる場所でその会話は禁止です。分かりましたか?)」

ふむ、とその言葉を聞いて、改めて自分たちの状況を客観的に見つめ直してみる駿斗。

そして、いきなりイギリスに呼び出されたこととか例の金髪グラサン野郎、いい加減どうしてやろうかとか考えているうちに、ちよつとイライラしてきた。

「神裂火織18歳の正体は、墮天使エロメ「黙って下さい!」」

聖人と対等に顔のわしづかみ合戦を繰り広げる駿斗。

そんなやり取りをしながらも、なんだかんだで彼らは小さな扉へとたどり着いた。どうやら、表にあるデカイ門ではなく、この裏口から出入りするらしい。

「そ、そういえば、この宮殿に俺が入っても大丈夫なんだよな？ 足を踏み入れた途端に国宝のアレやコレやが片つ端からぶつ壊れて不幸な弁償ライフとかじゃないですよね!?!」

「……何だ、そんなことですか?」

駿斗は、魔力的なものは人間のもの以外にあまり感じないから大丈夫なんじゃないかなー、とか思いながら、神裂の言葉を聞く。

「それについては大丈夫ですよ。イギリスは魔術の発達した国ですが、現在、このバッキンガム宮殿はその手のセキュリティ機構がすべて撤去されていますから」

この宮殿は他国との階段などにも使われるため、下手に魔術的な機構を組み訳にはいかないらしい。要するに、相手の重鎮を魔術だらけの中に招き入れるというのは、罠の中に誘い込むような構図になってしまうため、外港としては非常によろしくないのだ。

しかし、一方で王室の別宅であるウィンザー城などは、『英国女王クイーンレグナントは我々を罠にかけない』という信頼を持つ者だけを招き入れるため、イギリス最強クラスの魔術要塞となっている。

そこまで説明した神裂だが、その次には意味深げな言葉を放った。「それに、あの女王についてはそのようなセキュリティは必要ないでしょう」

ドア自体の大きさは、どこにでもありそうなものであったが、その先に見えた景色は半端ではなかった。そもそも、室内の光景に『景色』などという言葉を使う時点でいろいろとおかしいのであるが。

幅の広い廊下。その上を歩かずに眺めていたくなるような美しい絨毯。壁には鮮やかな絵画が飾られており、メイドがその合間を慌ただしく動いている。

「来たか」

その時、日本語が聞こえた。

その言葉に振り返ると、耳に届いた言語に反してそこにいたのはイギリス人の男だった。その着ているスーツは、素人の彼らにも格の違いが分かるほど上質なものであることが分かる。

そして、駿斗はその男から感じられる力も、尋常ではないことを理解した。

「騎士団長ナイトリーダー。移動手段の供与には感謝します」

「へりのことなら気にすることはない。我々にとっても必要な支出だった」

神裂にそう答えた彼は、それから視線の先を日本人2人へと移した。

「ふむ。君たちが禁書目録の管理業務を負う者か」

「え、ええ？ 管理業務とかつて言われると微妙ですけれど……」

どのような言葉を使えば良いのか、うまく分からずに戸惑う2人。「あの10万3000冊を保全する人物とは、どのような者かと興味を抱いていたのだが……まさか片手で頭を掴んだ状態で管理していたとはな。恐るべし東洋の神秘」

「やっぱ変ですよね!? このようなイレギュラーに陥った原因はズバリ空腹一本勝負！ もしよろしければ、会議の場で暴れ出す前に食パンなどをいただけないでしょうか!？」

はしたないですよ、と当麻のその言葉に神裂が目で注意しようとしたが、騎士団長は片手でそれを制すると、紅茶のセットを運んでいたメイドを引き止めてくれた。

彼らのもとに、スコーンが運ばれてくる。

「えっ、タダなの？ そうと分かれば遠慮はしねえ。インデックス！ 思い切りやってしまいなさい!」「こちとらハナから手加減する気はないんだよ！ スコーンスコーン!」「そうだ、次はいつになるのか分からねえから全部食っちゃえ!」

「そうか、しかし今は事態も進行しているからそろそろ行こう……」「バターをつけるとさらにレベルアップだな!」「ブルーベリーもいけるんだよ!」「ハチミツもいいな!」「だがあえて何もつけずに食うね! 素材の美味しさを堪能するね!」「じゃあバターとブルーベリーとイチゴジャムとハチミツは全部わたしのだからね!」「それとこれとは話が別だこのクソ馬鹿シスター!」「はははははははは!」「うまアハうま!」

騎士団長は少し無言になると、ボソリと呟いた。

「……剣を抜くが構わんか?」

「説得ならこの私が! なんとかしますからご安心を!」

いつもならストップパーである駿斗さえ土御門とか空腹とかで暴走しているこの現状を、神裂は力技で解決にかかる。

「……というかき、神裂。いい加減に、俺たちを呼び出すときはもつとまともな方法にしてくれよ」

スコーン天国が終了した後。駿斗が文句を言うと、神裂は怪訝な表情になった。

「学園都市の案内役は、土御門に一任していたのですが……どのよう
な方法を使ったのですか？」

「いきなり変なガスを喰らって俺が空港に置き去りにされた後、駿斗
が電話で呼び出された」

「あの野郎……」

当麻の返事に、思わず目をつぶって歯を噛む神裂。しかし、彼らからすれば、アビニヨンの時に大空からパラシユートとセットで突き落とされたので、今更何を、といった感じである。

すると、その話を横で聞いていた騎士団長が口を開く。

「今から行うのは作戦会議のようなものだ。王室派、清教派、騎士派のメンバーが集まった、な」

王族との『謁見』であるため、本来なら正装で来るべき場所であるが、あいにく放課後慌てて呼び出された彼らは、学ラン姿のままであつた。

自分たちの服装に目をやっていた2人であるが、するとそこで、当麻が神裂に目を向ける。

「神裂もあんな感じだし、意外に大丈夫か……？」

「何か失礼な評価をしていませんか。私の場合は術式の構成上必要と認められています」

彼女は言葉では否定しながらも、当麻の視線から逃れるようにやや身をよじる。確かに、魔術を知らない素人がみたら、露出きよ……イケない人だと思われそうな服装であるのだが。

すると、そこまで黙っていたインデックスが尋ねた。

「作戦会議って、そもそも一体何の作戦について話し合うの？」

「ふむ。禁書目録を正式に招待したのは女王のご判断だが、その程度には重要度の高い案件だ」

そんなことを騎士団長は言うが、それがどの程度すごいのがイマ

イチ当麻たちには分からない。へー、女王様直々のご招待なんだな、程度である。

騎士団長は説明を続ける。

問題はイギリスとフランスをつなぐ、ユーロトンネルの爆破についてだ。3本並んで走っているはずのその全てが、使用不可能となり、唯一の陸路をつながれたイギリスは、国内経済に大きな打撃を受けている。

そして、その事件に魔術がからんでいる可能性が高いらしい。

そんな説明を受けているうちに、一行は大きな扉の前に辿り着いた。この先に、女王様がいるのだろうか、と2人は緊張した面持ちでそれを見つめるが。

「ぐおおー……。ドレスめんどくさいな。ジャージじゃダメなのかこれ……」

聞こえてきた英語に、首を傾げる日本の男子高校生2人。駿斗も英語は苦手ではないのだが所詮は学校英語、本場の人間の、それも独り言のようなものになるとまるで聞き取れなかった。

しかし、その言葉の意味が分かる3人を見渡すと、騎士団長はピタリと動きを止めており、神裂は戸惑ったような表情を浮かべている。インデックスに至っては、頭に『?』マークを浮かべている。

「……しばしお待ちを」

ボソツと放たれた言葉と共に、扉の隙間に身をはさむようにして室内に入り込む騎士団長。

「ぬぐお!? 入ってくるときはノックくらいせんか貴様!」

「謝罪はしますがその前に一言を。——テメエ公務だつってんのにまたジャージで登場しようとしたらボケ馬鹿コラ!」

「いえーい騎士団長が一番乗リー」

「部屋に入ってきた順番とかはどうでもいいんです! いいから、女王らしく! いや、いいです。意外なキャラクターとか誰も求めていませんから無理にエレキギターとか持ち出さないでください!」

そんな言葉が扉の外へと漏れているが、駿斗も当麻も理解できない。しかし、インデックスは眠そうにしたままだし、神裂は苦笑いするばかりで翻訳をしてくれなかった。

再び騎士団長が姿を現し、ようやく彼らは扉の奥へと入る。

その場所は、テレビなどで見る国連の会議場などを思わせた。そして、その中央に1人の女性が立っている。

女王エリザード。

彼女はつま先が見えなくなるほどの長いドレスに身を包んだ、50歳ほどの女性だった。しかし、肌や髪などがその年齢をうかがわせるのとは対照的に、その風格は10代であるはずの当麻や駿斗を凌駕している。

そして、その風貌以上に気になるものが、その右手にあった。

1本の、鞘にすら収まっていない抜身の西洋剣。片手用直剣、ロングソードとでもいうのかもしれないが、詳しいことは分からない。だが、駿斗にはそれでも2つだけ分かることがあった。

1つは、その剣には切っ先がないこと。そしてもう1つは、その剣が霊装として絶大な力を持つこと。

その剣をみた当麻が、真っ先に感想をもらした。

「意外なキャラクター……ッ!? う、ウチの女神があれだけ努力しても手に入らなかつた強大な個性を、こんなにも簡単に……!?!」

「いや、違う! あれで正常だ! エレキギターやサッカーボール、剣玉、サーフボードなどのいらぬ道具は全て撤去してある! なじみがないかもしれないが、あの剣こそが英国女王エリザードクイーンレグナント様の象徴なのだ!」

騎士団長は悪夢を振り払うように首を横に振ってそう答えるが、対照的に英国女王は大口を開けて笑顔をつくる。

「これはカーテナと呼ばれる、王族専用の剣だ」

「カーテナ?」

当麻は首を傾げるが、インデックスから魔術を教わっている駿斗はその答えを言った。

「確か、国家元首だけが手にすることのできる、戴冠用の儀礼剣だっ

たっけ？ 天使長である神の如き者の力の一端を手にするこ
きるとか」

「厳密には、同質の力、と言った方が正しいですが」

神裂が、駿斗の言葉を訂正する。

「てんし、ちよう……？」

当麻がその言葉に反応していると、眠そうなインデックスが簡潔に説明した。

「あらゆる天使の中で一番強くて偉い存在のことなんだよ」

天使というだけでも、彼らにはろくな思い出がないのであるが、その中でも一番強いヤツときた。

なんだか、争いの火種とかになりそうだなー、と駿斗が若干うんざりしたところで、女王が説明を再開した。

「使えると言っても、イギリスという限られた土地の中だけだな」

カーテナというのは、王と騎士に莫大な力を与える剣であるらしい。

イギリスには『四文化』中だけに存在する特殊ルールがあり、それを守るために『三派閥』に別れている。そして、カーテナは『イギリスの中だけで成立するルールを束ね、イギリスを守るものに莫大な力を分配する剣』として機能している。

「特殊ルールってのは……？」

今度は、女王の説明を騎士団長が引き継いだ。

「この国には、イギリス清教という独自の十字教様式が存在する」

これは、1500年代にヘンリー八世という王が、自国の政治を他国に干渉されるのを嫌って生み出されたものだ。そのため、『イギリスはいかなる外部勢力からも絶対不可侵であること』と『イギリス清教の最高トップは国王であり、イギリス国王はローマ教皇の言葉を聞く必要はない』ことを確立させた。

そして、『ローマ教皇よりも偉いもの』というために選ばれたのが『天使長』という地位。その国王に従う騎士団を『天使軍』に対応させ、イギリスの民を導くことにする。そのために、『4』は大地を示す数字であるため、4つに分割されたイングランド、スコットランド、ウェー

ルズ、アイルランドを束ねて『全英大陸』という魔術的な意味を生み出した。

イギリスが連合王国としてあるのは、そういった魔術的・政治的な意味合いがあった、というわけだ。

「私のような『清教派』の場合、天使長や天使に対応することはありません。これまで通り『人間として十字教の力を振るう者』という扱いですから、カーテナの恩恵を受けることはないんです。カーテナは『王様』と『騎士』に莫大な力を与えるものとお考えください」

そこへ、横から神裂が付け加えた。そこで、再び女王に会話の中心が戻る。

このカーテナは、『カーテナⅡセカンド』……すなわち、2本目ということらしい。最初のオリジナルは、どこかへ行ったのか不明であり、そこで急きよつくられたのだそうだ。

「仮にこいつが折れても、新たなカーテナが生まれるだけだ。そう気負わんでも良いよ」

すると、そこで後ろから声がかかった。

「まったく、そんな訳がないわ。現在ではその2本目をつくる製法ですら失われているもの」

音源は、出入り口の扉。

そこから入ってきたのは、30代前半ほどの美女だった。青いドレスに身を包んだ彼女は、知的というべきか、あるいは冷淡とでも言うべき雰囲気漂わせていた。

「……第一王女、リメリア様です」

神裂が2人に舌打ちしてくるその横で、騎士団長は驚いて声をかける。

「言ってくださいれば部下の者を……いえ、私が直接出迎えに上がりましたが」

「ああ。いけません、いけません。そんな、他人を従わせるなど。みすみす背中を刺される危険を増やしてどうするの」

その言葉に駿斗は啞然とするが、それに対し騎士団長は深くため息をつくだけだった。どうやら、彼女の人間不信はいつものことである

らしい。

「まあ姉上はジメジメしてるの？」

すると、今度は別の赤いドレスを着た女性がやってくる。あねうえ？ と首を傾げる当麻に、彼女はじろりと見て言った。

「第二王女のキャーリサ。歴史くらは学んでおいたら、少年？」

そして、そこに第三王女のヴィリアンも加わる。他の二人とは異なり、彼女は第二王女がかける言葉にも委縮するように身を小さくするだけだ。

「そろそろみんな集まってきたな」

主要人物がそろい、これからこの会議場に並べられた椅子いっぱい、100人以上の大規模な会議が始まるのだろうか……と少年2人が思ったところで、女王は続けて言った。

「さて、それじゃ適当にトンスラするか」

作戦会議

当麻と駿斗はポカンとした表情になり、インデックスもキョトンとする。神裂は呆れたようにため息を吐き、騎士団長も苦い表情で疑問顔の彼らから目を逸らした。

大きすぎる議場の場合、全ての発言が記録されるために思うように発言ができなかったり、あるいは大勢で意見を出し合うために無駄な時間を浪費して非効率になってしまうことも多い。そのため、時には少人数短時間で話を決めてしまったほうが効果的な場合もあるのだ。

「……女王陛下の場合、その事例が多すぎる気もしますけど」
騎士団長がボソリと言う。

その一方で、面食らった男子高校生2人が質問した。

「でも、ええと、そのいいんですか？ 少人数でやるのは良いけど、仲間外れにされた方は快く思わないんじゃない？……」

「なあに、その場合はこう言ってやればよい。……文句を言って横やりを入れたがるのは結構だが、貴様の製作通りに事を進めて失敗した場合、全ての責任を貴様が追っても良いのだな、と」

「……うわあ」

まあでも、確かに『意見』を言いたがる人は多くても、その『責任』を負うまでの覚悟がある人って少ないよなあ、と納得する駿斗。

すると、女王の言葉にキャーリサが頷いた。

「最低でも『王室派』『騎士派』『清教派』の各代表がそろっていれば構わないの。……私としては、『禁書目録』を召集した『清教派』のトップがここにいないのが気に食わないけど、まあ『聖人』が代理に現れたのなら許容しよーか、といったところか」

「す、すみません。うちの最大主教は例によって、裏でコソコソやっているようです」

神裂が頭を下げる。

インデックスの『首輪』の件といい、本当に食えない人間のような、と駿斗が怪訝な表情で考えているその横で、当麻はこの部屋の人々の比率が気になっているようだ。つまり、『王室派』が多すぎるのであ

る。

「うふふ。良かれ悪しかれ、この国は『王国』……王様の国ということなのよ」

当麻が漂わせている視線の意味に気が付いたのか、第一王女のリメリアがそんなことを言った。要するに、3つの派閥の中で最も発言権が高いのは、実質的に『王室派』である、ということだろう。すると、なぜかヴィリアンが申し訳なきように無言で頭を下げてくる。

すると、そこでキヤリーサが少年2人を指さした。

「ところで、『王室派』『騎士派』『清教派』の代表はよしとして……そのこの小僧たちはどーいう役割なの？ 会議に出席させる上での立場を明確にしておきたい」

どうやら、不要な人員は省きたい、とでも言いたげであった。実際、イギリスの政治に学園都市の少年が絡むのはあまり良いとは駿斗も思わない。

すると、女王はニヤリと笑ってこんな言葉を口にした。

「彼らは旅客機に乗ったフランス系テロリストの排除に無償で尽力し、わがイギリスの国益と国民の命を救った、いわば勇敢なる功労者だ。その功績と経験を認め、意見を拝聴しても構わんと思うが？」

「ふーん。なるほど、そーくるの」

キヤリーサは笑みを深くする。

「勇敢、か。なら問題ない。悪くない言葉だし」

ずいっと顔を近づけられた駿斗は、思わずううつ、と引き気味の表情になってしまった。しかし、そんな彼にお構いなしに、女王のエリザードは話を締めくくる。

「それでは、適当に会議を始めるか。このまま時間を浪費してしまっていては、なんのためにトングラするのか分からなくなる」

会議場のある1階から階段を使って3階まで上った上で、広い廊下の曲がり角にある、応接用の簡素なスペースに彼らは集まった。こんな豪華な面子が1か所にそろっているためか、時折そばをメイドが通

りかかると、彼らがビクリと肩を震わせている。

イギリスの女王様に王女が3人、騎士団長に聖人、禁書目録とくれば、本当にここが21世紀の現代社会なのか疑うような光景であった。

当麻も駿斗も、このような場面での振る舞いなど心得ていない。そのため、基本的には大人しくしているだけだ。ただ、普段通りではなく、ポケットから携帯電話を取り出して時計を確認してしまうのが、現代の一般人の癖であった。

「……なあ、駿斗。俺たちってどうすればいいんだ？」

「(さあ？ 適当に物静かに時間を潰すしかないな)」

駿斗はそう答えると、適当に窓から外の景色を眺めている。

本当に時間を浪費するつもりなんだなあ、とか考えながら再び手元のケータイに目を向けると、そこに小さなカメラのレンズが付いていることを思い出した。

「……うーん、女王様にお姫様か。どいつもこいつも思わず1枚撮りたくなってしまいうほど有名人だけど、こんな派手派手な宮殿の中で携帯電話を構えるっていうのは相当にアレだよなあ……)」

小さくブツブツと呟きながら、当麻は携帯電話を折りたたもうとする。

すると、なぜか第二王女のキャーリサが当麻へと異常接近していた。つい先ほどまではその前で向き合っていたはずなのに、今はドレスから露出している肌が触れるか触れないかの位置にいる。そして、その視線の先は彼の持つている携帯電話に注がれていた。

「……フィルムが貼ってあるので、横からじゃ見えないっすよ」

「馬鹿者、王女はコソコソそんなことはしない。そーではなく、撮影がしたいのではなかったの？」

王女様はそう言うと、当麻から少し離れて正面(当麻の持つケータイのカメラの方向)に対して体を斜めに傾け、軽く顎を引いてここ一番の笑顔をつくり出した。

うわあ、と当麻がそのつくられた表情に軽く引いているが、こんなものは民衆から注目を集める者としては基本的な必須技能である。

何しろ、直接話すことはほとんどないのだから、写真の映りが良いだけでも好印象を与えることができるのだ。

ついでに言えば、これはキャーリサだけのものではない。彼女曰く『ほとんど条件反射のようなもの』であるとのこと、そんな訳だから、いつの間にかその反対側には第一王女のリメリアがおり、第三王女ヴィリアンでさえも、その撮影範囲の隅にしっかりと映っていた。(待ってくれ。他の2人とは違って、この人はおしとやかなお姫様とお見受けしたのに！)

そんなことを考えるが、助けてくれるものはや誰もいなさそうだ。さらに、リメリアの乳が当麻の腕に密着しているのであるが、気づかれると堅物の騎士団長が剣を抜くとの警告を受けているので、当麻はもはや背中にくっすらと冷や汗すら浮かび始めていた。

すると、そこで待ったをかけたのは女王エリザードだ。

「……まったく、お前たちはここがどこだか分かっているのか？」

刃も切っ先もない剣、カーテナⅡセカンドをぐるりと回した後その先端をどかりと床に押し当てた女王は、呆れたようにため息をつく。そして、その言葉を聞いた神裂と騎士団長はうんうんと頷いていた。そうだそうだ、言ってやれ言ってやれ、という感じに。

だからエリザードはこう言った。

「ここは連合王国、女王の国だぞ？ 主役の私を置いて撮影開始とはどオいう事だぁー！」

「ああもう馬鹿め！ 今は作戦会議の時間です！」

当麻と自分の娘たちに向けて突進する女王を、騎士団長が全力のタックルで阻む。ドタンバタン、と転がる様子に当麻は冷や汗をかくが、するとその横にいるキャーリサが肘で彼をつついた。馬鹿はいいからさっさと撮れ、とその眼は語っている。

バチーン、という撮影音にガバア！ と絶望的な表情で顔を上げる女王。

そのショックから抜け出したところで、ようやく会議が始まる。

忘れそうになるが、彼らはユーロトンネルの爆破に魔術が関わっているのではないかという話でここに呼ばれている。

「問題の発端は今から5日前に起こった、ユーロトンネルの爆破事故だ」

イギリスとフランスの間にあるユーロトンネルは、3本が並行して海底を走っている。それが全て吹っ飛ばされたのは、フランス政府による破壊工作である可能性が高い。

「証拠はあ・る・の・か・な？」

キヤリーサは、さつさと戦争をしたいとでもいうような、物騒な口調でそう言った。

今現在はずすがに誰も騒ぎ立てることなく真剣な表情で臨んでおり、駿斗も会議に加わっている。

「そのために招集したのが禁書目録だ」

つまり、インデックスの10万3000冊の知識を持ってそれを正確に判断するわけである。

フランスに原因があるとわかれば、証拠が集まり次第行動を起こすのであるが……そう簡単にはことが運ばないらしい。なぜなら、フランスは完全にローマ正教の支配下にあるわけではなく、一部にはその干渉を嫌う勢力もあるからだ。その連中とうまく協力できれば良いのであるが、それができれば苦労はしていない。

「フランス……ってことは」

当麻が眉をひそめて言う。

「今日起きた旅客機のハイジャックも関係しているのか？」

フランスのグループらしき犯人たちは、イギリスが一方的にユーロトンネルを爆破したと考えていた。

しかし、エリザードは首を振る。

「あれに関しては、おそらくシロだな。少なくとも、政府の息がかかっているとは思えない」

ただし、すると分かっている泳がせていた可能性は否定できんが、と続けるのを聞いて、駿斗は嫌そうな表情を隠しきれなかった。

現地の警察によれば、彼らは『銃器を使わないハイジャック方法の

ノウハウを教える代わりに、複数の組織から協力を得ていた』らしいが……その『複数の組織』が分からない上、フランスが『わが国の犯罪者はわが国で裁く』などと言って、身柄の引き渡しを要求してきているらしい。きな臭いことこの上ない。

しかし重要なのは、この1件のお陰で現在全ての旅客機が安全点検をしなければならなくなっているため、イギリスは陸路に加えて空路までも塞がれた形となっていることだ。

「しかし、仮にフランスを潰したところで、本当に解決するのは疑問の一言ね」

リメリアが言う。

今回の件は確かにフランスが手引きした可能性が高いが、その背後には真なる敵である『ローマ正教』が控えているはずだ。これはずでに、『イギリス清教&学園都市』VS『ローマ正教&ロシア成教』という構図になっている。

「しかも、問題はそれだけではない」

エリザードの言葉に、全員がそちらに注目した。

「先ほどの旅客機へのハイジャック事件の渦中で、1つ気になることが見つかった」

実は、あの事件では『清教派』の『必要悪の教会』^{ネセサリウズ}の手によって、コックピットの燃料メーターの表示が改ざんされているはずだった。燃料メーターの低下によって幹線道路への不時着を余儀なくさせ、後は『騎士派』が『ロビンフッド』という霊装によって壁ごとテロリストをぶち抜く予定であったのだ。

しかし、実際にはそんなことは起こらなかった。何者かによって妨害されたからだ。

「北欧系の術式だね」

目の前のテーブルに置かれた資料を見た魔導書図書館・禁書目録は、悩むそぶりも見せなかった。

北欧の女の術者が得意とするセイズ魔術の『酔い覚まし』の応用で、脳を騙す『幻影』と実際に映像を映し出す『幻像』の両方に対応させた術式。

何者かがこれによって妨害したために、この計画は使えなくなつたのだ。

「問題は、その『妨害』の出所が、同じ英国のスコットランド地方だったことだ」

苦い表情で言つたエリザードの言葉に、全員が苦い表情をした。

「敵は外だけではないのか」

しかも、ここで行つたのは幻術の妨害だけ。そんなことができるのであれば、その気になればあの航空機を落とすような攻撃もできたはずだ。もつとも、そこまでやれば駿斗が真つ先に飛行機の外へ防壁を張っていただろうが。

となれば、件の魔術師の目的は、『不時着に使われる予定だった幹線道路の封鎖を解除する』ことが目的であつた可能性が考えられる。

「……つてことは、その魔術師はなんとしても、近々その道を通らなければならぬ理由があつた……?」

当麻が呟くと、駿斗は頷いた。

「しかし、相手が『必要悪の教会』の魔術を妨害している』という認識を持つているのかいなのか……。もしも前者ならば、それは相当の覚悟がある奴ということになるが」

「イギリスとフランスの間の諍いだけでも頭が痛いのに、国内にも独立した危険分子が存在する、と。そういう訳ですか?」

「ふむ。私もそう考えている」

騎士団長が駿斗の言葉にそう答えると、女王は同意を示した。

問題の幹線道路は、スコットランドからイングランドへと続く道であることと、妨害魔術の発信地を考えると、敵はこちらへと南下してきていると考えるべきだ。

「念のため、『清教派』でもスコットランドを本拠地とする結社群を調べさせますが」

神裂が、『清教派』代表として発言する。

「何分、今回の混乱を好機とみなしている国内の魔術勢力も大小色々あります。すぐに特定できるかどうかは保証できないのが現状です」

「構わん。全力を尽くしてくれば結構」

エリザードの返答には余裕が感じられた。

すると、そこで第三王女のヴィリアンが、部外者の当麻や駿斗よりもオドオドしながら口を開いた。

「フランスにローマ正教、それにテロリスト……彼らにしても、伝えたいことがあるからこそ、行動を起こしているはず。その意見に耳を傾け、武力以外の方法で解決に導くことはできないのでしょうか」

「無理に決まっている」

キヤーリサが断じると、リメリアも続いた。

「私はキヤーリサほど物理的な方法は好まないけれど、この局面を手早く切り抜けることには賛成。なに、国家間の遺恨も最小限にとどめる術も存在するので、ご心配なさらずに」

その言葉を聞いたヴィリアンは、何か言いたげであったが黙ってしまった。

自分の言葉が理想論に過ぎないと突きつけられたように感じられたのであろうか。

ともあれ、イギリスがとるべき行動は大きく2つに別れた。

1つ目は、外的であるフランスに『応対』するため、ユーロトンネル爆破の原因を調べることに。そして2つ目は、内敵である魔術師の所属と狙いを探り、そして必要であれば撃破すること。

2つ目を優先するとエリザードが言ったことに『軍事』のキヤーリサは不服そうであったが、舌打ちをしただけでそれ以上は何も言わなかった。

「ここはセオリー通りに進めるか。外敵……対フランス用のユーロトンネル調査は『騎士派』に、内敵……イギリス国内の魔術結社については『清教派』に、それぞれ主導権を預ける。ただし、禁書目録は『清教派』の魔術結社の捜索ではなく、こちらの調査のために別行動とさせてもらう」

女王が、指揮官として必要なことを最低限の言葉だけで提示していく。

神裂はアニーゼからの報告を受けていた。

『ええ、はい、はい、そうです。一応、エジンバラを中心にスコットランドの魔術勢力について調べていますが、やはりこちらの組織構造は「結社予備軍」が主流のようですね』

アニーゼたちは現在『幻術を使って不時着を妨害し、幹線道路を使ってスコットランドからイングランドへ向かっている集団』を調べているらしい。

『結社予備軍』というのは、魔術結社と呼ばれるほど洗練されている訳でも大規模であるわけでもない集団のことだ。恋占いのようなクラブ活動、あるいは同好会と呼んだ方がふさわしい集まりが100〜200ほど確認されており、大抵は『瞑想』などの精神的活動に終始される。

しかし、中には金の卵が集まった、洗練された精鋭たちの集団も存在するのだ。

そして、今回の渦中にいるのが『新たなる光』。構成メンバーは4人であるが、その洗練ぶりは他を圧倒している。どちらかといえば、實力は足りているものの身軽な立場を確保するために『結社予備軍』という立場に甘んじているような組織であるようだ。

「本拠地は？」

『踏み込みましたが、遅かったです』

アニーゼの口調に苦いものが混じる。

『ただ、そこそこの霊装を製作できる環境は整っていました。北欧系の匂いがしましたね。それと、ある都市の詳細な地図もあります。単に道や建物の配慮だけじゃない。市内に数十万台あると言われる防犯カメラの位置まで含めた、相当に詳細な地図です』

数十万台のカメラ。

「……まさか」

そんな嚴重な防犯対策が都市単位でなされている街など、すぐに分かるではないか。

『ええ。ロンドンです。どうやら相手は、本当にそつちでコトを起こ

すつもりのようですね』

また、彼らはスコットランド地方で何らかの『発掘作業』を行っていた節があるらしい。主に城塞跡地で活動していたらしいが、資金と時間の比重のかけ方からして、掘り出した『それ』が計画の中枢を担う『何か』である可能性が高い。

『何か』——すなわち、霊装。それも、わざわざ掘り出したとすれば、『現代に残された技術では再現が難しい』レベルのもの。

さらに、1つ残されたメモにはこう書いてある。

『——「今日、イギリスを変える」だ、そうです』

「確かに、意味は分かりかねますが……とても平和的なものとは解釈できませんね」

神裂は声に一層の緊張感を含ませながらそう返事をする、各々の行動方針を話し合った後に通話を切った。

「……私は天草式と共に、これからロンドン市内の警備に当たります」その言葉に反応したのは駿斗だ。

「じゃあ、俺たちはフォークストーンからユーロトンネルに入るって感じでいいのか?」

「え? ユーロトンネルってドライバーってところを通っているんだろ?」

当麻はそう言うが、あくまでもドライバーは『通っている』というだけであって、イギリス側にとってのユーロトンネルの入り口はフォークストーンなのである。

しかし、そこで横やりが入った。

「いや、どうやらお前たちは、フォークストーンには同行できないみたいだ」

そう言って近づいてきたのは、女王キャーリサだ。

「二応報告は受けているが、そちらの少年の右手はあらゆる魔術を無効化するはず。それに、『彼』はあらゆる魔術を感じ取ることができるとだろうか?」

確かに、イマジンプレイカー幻想殺しはあらゆる魔術を無効化するうえ、現在のユーロトンネルは現場の状況を魔術によって保存されている。万が一、不慮

の事故によって何らかの障害が起きないとも考えられない。

そして、イマジナクリエイト幻想創造は魔力や天使テレスマの力、地脈や龍脈といった異能の力を敏感に感じ取り、それを利用して大抵の魔術は解析できてしまうし、その度合いによっては完全な再現、いや、それを上回るような効果に改造して使用できてしまう。

ただでさえイギリス国内、それもロンドンにいただけでもイギリスの魔術的技術が盗みだされてしまっている可能性があるにも関わらず、特に重要なユーロトンネルまで連れていったら、どこまで技術が解析されてしまうか分かったものではない。

「これから、わたしたち三姉妹と禁書目録の手でユーロトンネルの調査を行うため、ターミナルのあるフォークストーンへと向かう。護衛には『騎士派』の部隊をつける。騎士団長直属の部隊だ。それなら問題はないだろう」

その言葉に、駿斗だけでなく神裂も何も言えなくなってしまった。

「三姉妹ってことは、女王様は行かないのか？」

当麻が遠慮なく質問すると、キャーリサは頷いた。

「母上は別宅のウィンザー城で何やら作業があるらしいの。フランスに対する小細工の準備かもしれない。おそらく、『清教派』のトップが裏でコソコソしているのと同関係があるんだろう」

神裂たち『必要悪の教会』はロンドンへ向かう魔術師たちの搜索。

3人のお姫様と騎士団長及びインデックスはユーロトンネルで調査活動。

女王と『清教派』のトップはウィンザー城でコソコソ。

「……で、ぶっちゃけ俺たちは何をしたらいい？」

「どう嘛ー」

第二王女が答える前に、インデックスが腰に手を当てて叫んだ。

「事件が起きると行かなきゃいけない、っていうのはどうまとはやとの悪い癖だよ！ 2人は単なる一般人なんだから、全部終わるまで待ってればいいの！」

インデックスはそう言うが、それは女王の言葉によって否定された。

つまり、『国益を伴わない人員の滞在費用については、国民の血税で賄う訳にはいかない』という台詞で、当麻と駿斗は全力で協力をする
しかなかったわけである。

新たな光

牛乳かバターのCMにでもできそうな牧草地の中を横切る、一本の道。そこを、1台の自動車が走っていた。そのレンタカーの中には、4人の少女たちが詰め込まれている。

その全員が、青っぽい色のミニスカートに、スポーツ用のシャツか白いジャケツトを着ていた。

「だー、もうすぐこの緑の匂いともお別れですかあ……」

そう言いながら窓の外を眺めているのは、レッサー。長い黒髪を先端の方だけ三つ編みにした10代前半の少女だ。

「ちよつとレッサー。ケツが見えてるわ。あとあなたの尻尾がすごく邪魔」

不機嫌そうな調子でいるのは、ベイロップ。18歳ほどの少女で、そのスカートの下には青いレギンスが足首まで覆っていて、対照的にジャケツトを着ていなかった。

「引つ込めないといつこ抜くから」

「ベイロップのケチんぼ。というか、何をそんなにイライラしているんですか？」

彼女の言う『尻尾』とは、レッサーの尻から伸びている、透明なチューブの中を金属製の平べったい鎖のようなものが走っている形をした、小悪魔についてそうな『尻尾』……のような霊装だ。その言葉に従って、尻尾をみると自分の太ももの付け根の部分に巻きつける彼女であったが、その時の挙動なのか自らの尻を再び持ち上げてしまった。

顔の前にデカデカと白いパンツを突きつけられたベイロップの眉がピクピクと動く。

「だからっ！ 引つ込めろと！ 言っただわツツツ！」

「ぐわアアあああああ!? いきなり両手で鷲掴み!? フロリスも何か言っただきさい！」

「えー、ワタシは今運転で忙しいからなあ」

ハンドルを握った金髪の少女、フロリスがやる気なげに言い放つ。

15歳ほどの少女で、シャツの上からジャケットを羽織り、ミニスカートの下にはスパッツを着ていた。

「……それより、いつまで経っても景色が変わんねえなあ。迷うような道じゃないはずだけど。ランシス、本当にこの道で合っているんだよね？」

フロリスが話を振った先は、助手席にいる茶色い髪の少女である。「や、やめて……。くすぐった、あふあ、ま、魔力が、魔力を受けりゆと……」

「くそ、自分で作った魔力に当てられてぷるぷるしてやがる。生命力を魔力に変換する途中で、何がどうなったら、こんな『くすぐったさ』に襲われるんだ……?」

ランシスの様子に、思わず頭を抑えるフロリス。

彼女たちは、目下バツキングダム宮殿で話題となっている魔術結社予備軍『新たな光』である。

4人は現在、バツキングダム宮殿の会議で睨まれていた通りに、無事に『発掘作業』を終えて南下しているところである。

『ケース』『翼』『爪』『尻尾』『ハサミ』。

それらが、彼女たちが現在所持している霊装であり、そして要であった。

「さて、と」

ハンドルを握っているフロリスが、正面を睨む。

「そろそろ気を引き締める。これから英国っていう枠組みそのものをぶっ潰すんだから」

道路は分かれ道になっており、その手前に交通標識が立っていた。そこには英文と矢印の簡単な図面で、こんな表記がなされている。

——直進、ロンドンまで30キロ。

当麻は赤いオープンカーの助手席にいた。

ロンドンの持つ何百年単位の歴史的な街並みの景色をぶち壊しにするようなその車の所持者は、金髪爆乳のお姉さんである。

「しつかし、まさかここでアンタが出てくるとはなあ」

「あら、お姉さんとしても、意外な展開だったわよ？」

オリアナ「トムソン」。

『大覇星祭』において、リドヴィア「ロレンツエツティと共に
クローチエディエトロ
『使徒 十字』」を持ちだして学園都市を支配しようとしていた魔術師
の『運び屋』だ。

肉弾戦でも魔術戦でも優れ、当麻、土御門、ステイルに加え、周囲
の状況から能力を制限していたとはいえ駿斗の4人を相手しても逃
げうせていたという、戦闘面でも優れた魔術師である。

イギリスに囚われたものの、現在は取引によって彼らに雇われてい
る身なのだ。

「……つーか、ユーロトンネルの爆破って、フランスと、その背後にい
るローマ正教が関係してんだろ。アンタ、牙剥いちまって大丈夫なの
か？」

「一応断わっておくけど、お姉さんの本分は魔術系の運び屋。どこか
の組織に忠誠を誓っているわけではないわ。どの勢力に協力して誰
と戦うかは自由よ。……だから、報酬さえいただけるのなら、アナタ
個人のために汗を流してあげても構わないってワ・ケ」

甘い息を吹きかけられて、思わず当麻は体をガチガチにする。この
色っぽいお姉ちゃんは、思春期の男子高校生にとっては色々と刺激が
強いので苦手なのだ。

それはともかく、運び屋としての経験を生かして、『発掘』した霊装
を持つている魔術師を見つけ、撃破するのがオリアナに与えられた仕
事である。本人が言うには、逃げる技術と追跡する技術は全くの別物
であるらしいのだが、その辺りは本職の人でなければ分からないもの
なのだろう。

手がかりは、ロンドン市内に仕掛けられている防犯カメラ。そのう
ちの1つにわずかに映っている自動車の影があったのだが、その影を
生み出しているはずの自動車がなぜかこのカメラにも映っていない
かったのだ。

「こいつは数十万台あるはずのカメラの配置を全て把握したうえで、

その死角となるポイントを選んで移動し、車を止めた。……偶然で片づけるのは、ちょっと難しい状況ね」

「でも、それだけで、本当に魔術師って分かるのか？」

『分からないから調べに行くんだろ』

その時、カーステレオから聞き慣れた声が響いた。魔術的な通信をしている駿斗である。

『どのカメラにも映っていないってことは、逆に言えば、どのカメラにも映らないようなルートしか通っていない、ということだ。魔術的な「妨害」が監視カメラにされた様子はないらしいし。もつとも、そもそもロンドン市内で魔術なんか使われていれば、一発でイギリス清教にばれるだろうが』

イギリス清教と王室の監視下にあるこの街では『場所をすぐに特定する』とまではいかないものの、『魔術が発動した』ということはすぐにばれてしまう。

その駿斗の解説を聞いて、当麻がへー、と感心していると、オリアナは付け足した。

「それに、その途中で気になることがあつたら調べて確かめれば良いのよ。そうやって、ヒットするのを待つしかない」

後手になるようだが、事実なのだからそうするしかない。『新たな光』に駿斗が一度でも接触してしまえば、すぐに探査・追跡用術式で調べることができるのであるが、メンバーについてわずかな情報しかない現在では、そうやって地道に調査するしかないのだ。

そんなわけで、防犯カメラの死角に止められているという自動車のすぐ近くまでやってきた2人であったが、そこでオリアナは急に向きを変えた。カーナビからは、男の声で英語が聞こえてくる。

「連絡が入ったわ。奴らの1人がへまをしたみたい！」

「うわつと!?! 何だ、『必要悪の教会』^{ネセサリウス}からか!?!」

「今のは『王室派』から干渉を受けているロンドン市警よ。なんか、近くにある酒場でトラブった馬鹿がいるようね!」

赤と青のランプを光らせているパトカーの間を、法定速度を明らかに無視したオリアナのオープンカーが爆走する。ウインカーもつけ

ずに交差点を曲がったところで、その視界に『変なもの』が入ってきた。

具体的には、煉瓦の歩道の上を、分厚いジャケットにミニスカートをはいた小柄な女の子が、なぜか3つものカバンを抱えながら突っ走っていた。

「これでした！ くっそー、ちよつと持ち上げて重さを確かめればすぐに分かったのにッ！」

早口の英語は当麻には理解できないが、とにかく少女は2つのカバンを路上に放り捨て、残る1つのカバンを手に更に走る。だが、その様子だとか、深夜の道に少女が歩いていることよりも目を引くものがあった。

槍だ。

厳密には、1.5メートルほどの金属でできた、部分部分で太さを変えることで長さを短くすることのできるシャフトである。その先端には、40センチほどの刃が4本、人間の手から1本指をなくしたような感じで取り付けてあった。

「何だありや……？」

「何らかの霊装なんでしょう。明らかに怪しき爆発。あれが『新たな光』の一員で間違いなさそうね。まったく、魔術師は自分が変な格好をしているって自覚がないのかしら」

その言葉を聞いた当麻は無言でオリアナの全身を見たが、彼女はそのことに気が付かない。それよりも、胸元から単語帳のような紙束を取り出すと、それを歯で噛み千切り、少女とすれ違いざまに路上へと放つ。

「人払いよ」

彼女が放ったカードは2つ。

1つは人払い。そしてもう1つには、黄色い文字で『Fire Symbol』と書かれていた。

オリアナの魔術『速記原典』ショートハンド。カードの文字、文字の色、ページ数、

噛み千切るときの角度、といった魔術的な要素によって構成する、即席の『原典』だ。

ボゴツ！ という爆炎が歩道で炸裂する。

爆発を確認したオリアナは、ハンドルを切ってほとんど勢いを殺さずにUターンした。その遠心力に体を揺さぶられながら、当麻は慌てて声を上げる。

「おっ、おい！ ちょっとやりすぎじゃねえのか!？」

「いいえ、むしろまずそうよ！」

叫びながら、オリアナが運転席のドアを開け放ち、ほとんど転がるようにオープンカーから降りていく。すると、当麻の視界の外、ドアのすぐそばからジャツキン、という金属音が聞こえた。

かろうじて眼球だけを動かして見れば、例の少女がスカートから伸びている『尻尾』を従わせながら、その槍の先端を標的に向けていた。「文句はないですよね？」

槍の鋭い先端が自動車のドアを貫通し、当麻に向かって突き刺さろうとする。

「オッ……おおおおおおおおおおおッ!？」

当麻は車の構造を無視して、助手席のシートを踏みつけるとボンネットの上へと跳ぶ。跳んだその瞬間、槍の先端が当麻のバツシユの底を浅く切り裂いた感触が、足の裏から確かに伝わった。

だが、そのことを確かめる余裕もなく、当麻はボンネットからも飛び降りる。その背後から、グワツ！ という妙な轟音が鳴った。

そう、例えるのであれば、車から何かの部品を力任せにむしり取ったような。

振り返れば、『槍』の先端にドアが刺さったまま、強引にそれを振り回していた。

当麻はとつさに、硬化手袋フリックグローブをはめた左手を体の前に出して防御の姿勢を取った。霊装であるあの『槍』ならばともかく、それに突き刺さったドアで殴られれば、タダではすまない。

彼女はその『槍』の先端に着いたドアを振り下ろす。ただし、当麻に、ではなく、オープンカーに向けて、だ。

正確には、その後部にある燃料タンク。再び、爆音が鳴り響く。だが、それよりも驚くべき光景を、当麻は目にした。

本来なら四方八方に広がるはずの炎を。

少女の持つ槍の先端に取り付けられた、4本の刃が強引に『掴み取った』のだ。

爆炎の形状が変わる。刃の長さが最大で1メートルほどの、不自然な形状のブロック状の塊をしている。それを構えながら、彼女は地面にへたり込む当麻と笑いながら目を合わせていた。

思わずとつさに右手を掲げてしまう当麻であったが、彼女はその防御をかいくぐるような軌道で『槍』を振り回し、その先端にある炎をぶつけようとする。

その時、ボツ！ という衝撃が、少女を横へと吹き飛ばした。

オリアナの魔術によつてその体を吹き飛ばされた彼女であったが、それでもその手はしっかりと『槍』を掴んでいた。しかし、その先端にあった炎はあらぬ方向へとすっぽ抜け、空中で爆発を起こす。

そして、少女本人は魔術をその手に持った四角いカバンで受け止めており、その盾の奥から鋭い眼光を放つ。

ただし、

「おおおううああアアあああああああッ!? やっちゃった、思わずガードに使っちゃったけど、一番大事なのを盾にしちやいましたー!」

当麻にネイティブな英語はさっぱりなのであるが、どうやら彼女は慌てているらしい。その様子を見て、当麻は左手の『硬化手袋』を少しはめ直しながら、オリアナに言った。

「おいオリアナ、よく分からんが、あのカバンが最重要アイテムらしい。女の子をぶつとばすとか気が進まなかったんだ。四角い鞆を集中砲火してボッコボコにしちまおうぜ!」

「いいですとも。あれも霊装の一種なのだとしたら、あなたの右手で

殴つてみるのも面白そうじゃない?」

そんな作戦会議を耳にした少女は、ビクリと肩を震わせた。

「よっ、よくぞこの短時間で私の弱点を見破りました!　しかし、ここでやられるわけにはいかんです!　ベイロープに尻を握りつぶされないためにも、ここは戦略的撤退をさせていただきましょう。とうっ!」

一度、『尻尾』を振り子のように大きく動かすと、彼女は真上に跳ぶ。当麻は思わず頭を上に向けるが、その視線の先では、少女が隣のビルの3階の窓を突き破つてその中へと入っていくところであった。オマケに、彼女は周囲に騒ぎが起ることを何も考えていないようだった。いや、分かっている無視しているのだろう。オリアナが『人払い』をかけなければ、大騒ぎになって身動きが取れなくなっているところだ。

「くっそ……あんなの追えんのかよ!」

当麻は毒づく。しかし、プロの魔術師であるオリアナは冷静に相手の行動と霊装を分析していた。

「そうでもないわ。建物の中や屋上を移動できると言っても、限度はあるもの」

建物は道路に沿って立てられるため、片側三車線、四車線のような一定以上の広さを持つ道路にぶつかってしまえば、建物から建物へと飛び移ることはできない。したがって、彼女は道路に沿って移動するしかないのだ。

また、彼女の『尻尾』はある種の猿などについているものと同じで、空中でバランスを取るためのもの。すなわち、彼女にとっても『一定以上の高さ』は怖いものであり、軽々と飛び移れるようなものではない、というわけだ。

するとその時、空から1枚の紙が下りてきた。オリアナはじつとそれを見つめる。

「……通信用霊装ね。イギリス清教のやつよ」

『俺だよ』

そこから駿斗の声が聞こえてきたので、当麻は少し肩の力を抜い

た。

「駿斗。俺たちが遭遇した魔術師はとんでもない力を持つ槍みたいなのと、尻尾のような霊装を持っていた。そちらのほうはどうだ？」

『「天草式」からの連絡だと、向こうでは1人、イギリス清教の魔術的な施設を利用して捕まえたらしい。それで、あいつらが持っている霊装についても分かってきた』

その言葉に、2人ともに緊張が走る。

『あいつらの主武装の槍は、北欧神話に登場する、雷神トールが女巨人グリーズルから借りたものを分析、合体させて組み上げた霊装だそう
だ』

ある時、悪戯の神ロキが巨人ゲイルロズルに捕まり、トールを雷槌ミヨルニル・力帯・鉄の手袋を持たせずにゲイルロズルの元へ連れて来るといふ条件で解放される、という話があった。トールはゲイルロズルの屋敷へ向かう途中、ゲイルロズルを快く思っていないグリーズルから、彼女が所有していた、莫大な破壊力を生む鉄の棍棒、腕力を増強する力帯、鉄の手袋を貸してもらふことで、ゲイルロズルを倒すことができたという。

その逸話から生まれた霊装『鋼の手袋』。

『「新たな光」のメンバーは、全員女の子らしいからな。雷神ミヨルニルの槌では重すぎるんだろ。だけど、そもそもトールという神は「雷神」というには語弊が存在するんだ』

「……？」

「あらゆる天候を司る豊穰神、つてワケね」

タンングリスニとタングニョースト、という山羊をトールは所有していた。トールの戦車を牽くのに使役されるだけでなく、トールによって食べられてしまうのだが、骨と皮さえ残っていれば、次の日にミヨルニルを振るうことでよみがえらせることができたという。

そうした面から考えても、トールを『雷神』だけで終わらせるのは不自然なのだ。

『だから、危険なんだよ』

「危険？」

『あいつらの霊装はかなり高性能だ。それはすなわち、魔術師としてかなりの実力が存在するということになる。そしてあいつらは、北欧神話を中心とした霊装を用意している』

すなわち、と駿斗は一泊置いて言った。

『北欧神話は多神教だ。それはつまり、それだけ用意される可能性のある霊装の種類も多い。例えば、水中を素早く駆ける猪だとか、な』
そして、悪い予想ほどそれはよく当たるものだ。

駿斗が通信を取るしばらく前。

地下鉄の出入り口で、天草式十字凄教はベイロープを追い詰めていた。

「イギリス清教第零聖堂区」ネセサリウス『必要悪の教会』です。——よろしいですか？」

フリウリスピア海上用戦闘銃を携えた五和が、警官のような口調で、先陣を切って少女と対峙する。いつの間にか辺りからビジネスマンが消え、周囲は日本人ばかりになっていた。

「……もうここまでたどり着いたって訳？」

五和たち天草式十字凄教は、環境に溶け込むことを旨とする宗派だ。蛇の道は蛇と言うべきか、それゆえに、逆に不自然なものを見つけて出す術にも長けている。

「ロンドン処刑塔まで」一緒にいたいただきます。念のため、罪状を確認しますか？」

「いいえ、結構」

ベイロープは、懐から取り出したものをイヤホンでもつけるかのよう装着する。それは、真空管のようなものが左右に2本ずつつけられた、耳の後ろに引っ掛ける補聴器のような形状をしていた。

「このカバンを『起動』させるまで……捕まるつもりはないんだからっ！」

彼女は四角いカバンを蹴りあげ、それを片手でつかむ。それと同時に五和は槍を敵の右肩めがけて放つが、それは弁ロープの肩に下げて

あつた『包み』を破いて現れた『武器』に防がれた。

霊装『鋼の手袋』。

辺りにいた天草式が、一齐にその手に持った武器を構える。しかし、数十人の日本人に囲まれながら、それでもベイロープは不敵に笑っていた。

なぜなら、彼女たちにとつての『勝利』は『戦闘における勝利』ではなく、『逃走』にあるからだ。

振り回された見慣れない霊装に、思わず天草式が身構える中、彼女は今まで自身が背にしていたコンクリート製の壁を砕いた。

ベイロープは、瓦礫と共に地下鉄駅へとつながる階段へと急降下していく。

「五和！」

「分かっています！ 建宮さんたちは全ての出入り口へ人員を配置してください！」

五和は建宮へとそう叫んだ後に、五和は階段へと飛び込んで一息に最下層へと下る。そして、着地と同時に懐へと手を伸ばした。

取り出したのは、1丁の拳銃。

発砲音が炸裂し、それに反応した人々が一気に姿を消していく。『人払い』よりも迅速に民間人を排除した彼女は、そのままベイロープを追う。

到着した時は、ちょうどベイロープが無人のホームから飛び降りようとしているところであつた。どうやら、電車には乗らずに直接線路を走るつものようだ。

しかし、間に合わないことが分かったのであろう、彼女は攻撃をしかけてきた。

闘争から、速やかに戦闘へと移る。

巨大な看板を『槍』——『鋼の手袋』の先端でつかむと、それを勢いよく投げる。

しかし、それは五和には届かず、7本の斬撃によって裂かれた。見れば、いつの間にか彼女の周囲にはワイヤーが張り巡らされていた。

だが、しかし、ベイロープは自らの霊装の先端を床に刺し、思い切

り掬い上げた。

大量の破片が、五和に向かって散弾となって襲い掛かる。

「っ！」

彼女は身をかがめてそれをやり過ぐすが、その視線の先、『鋼の手袋』の先端がその形状を変えたことに気が付いた。

それは、何かを『掴んで』いる。

(空気中の——風？ いや、粉塵を……ッ!?)

そして、それは五和へと『叩き付け』られた。

普通に考えれば、ただの粉塵だ。しかし、圧倒的な腕力によって増強されたその威力は、ドツパアアアア！ という轟音と共に彼女の体を吹き飛ばす。

回避しても、再び粉塵を掴み、繰り返される攻撃。そして、五和はその体を地面へと叩き付けられた。それでも、すぐに体勢を立て直すことができたのは、とっさに跳んで衝撃を殺したからであろう。

しかし、ベイロープは跳んだ。『鋼の手袋』の先に、大量の粉塵を凝縮させた状態で。

(ま、ずっ……ッ!?! ただでさえ、腕力だけでも厄介だというのに……ッ!?)

その後、立て続けに打撃が叩き付けられ、五和は床へと倒された。

思わぬ遭遇と本当の配達物

「……まあ、だから一か所にまとまらずに別行動であいつらの取れる選択肢を狭めていくわけだが」

通信を切った駿斗は、ロンドン市内を駆けていた。正確には、建物の屋上から屋上へと跳んで移動していたのだ。

（その気になれば音速を出すこともできるけど、無駄に力を消耗する必要はないし）

そして、もしも相手が猪の霊装を使ってくる場合は、それなりの対応をするつもりだ。

そんなことを考えていると、1人の魔術師の少女を発見した。

「発見、と。あの槍の形をした霊装からして、間違いなさそうだな」

しかし、その少女は市内を流れる河川……というか水路の中に飛び込む。

（——まずい！）

駿斗は思いきり少女めがけて突進した。屋上の高さは7、8メートルほどあったのだが、天使テレズママの力で肉体強化を施し、そして落下の恐怖を歯を食いしばって耐える。

そして、駿斗が着水すると同時、ドッ！ という音と共に2つの影が水中を駆け抜けた。

スリーズルグタンニ。あるいは、グリンブルステイとも呼ぶ。

黄金に輝く猪なのであるが、豊穰神フレイの乗り物とされるそれは、水中や空中に限り、どんな馬よりも速く駆け抜ける。

（『ヒルデイスヴィニ（フレイの双子の妹である豊穰神フレイヤが持っていた猪）を持っていなかったのは、恐らく陸上だと道を封鎖されている可能性を考慮したんだろうが……この霊装、予想外に早いな！）
それに対して、駿斗は今まで水中での活動などほとんど経験がない。

もちろん、その気になれば神ガブリエルの力で水路の水を全て支配してしまうこともできるが、それには一定時間以上集中して万象再現リプロダクションを使用する必要がある。今回は、アックアの時のように前もって周到に準備をし

てあるわけではないのだ。

相手の行動を妨害するには……攻撃するしかない。
(水中なのだから本来は雷系統の術式を使いたいところだが、あいつらの使う武器は雷神トールの霊装だということだからな……だったら！)

駿斗の周囲にある水が蠢く。それが魔術的な意味のある形を成し、そして水中であるために視認不可能となった、水の刃が高速で発射された。

それに対し、敵の少女も慌てて霊装を操り回避する。どうやら、防御や反撃にまで気を回す余裕はないらしい。

(……唯一の幸いは、空を飛ばれる可能性がないことか)

現代の魔術師は、空を飛ばない。

正確には、飛行術式というものは山ほど存在する。箒に乗って空を飛ぶ魔女然り、空を舞う魔法の絨毯然り、他にもドラゴンやペガサスなど、空を飛ぶ架空の生き物というものも多く存在するので、空を飛ぶための霊装であるならば、それこそインデックスの知識でも借りれば数百種類、いや、下手をすれば数千種類は作れてしまうだろう。

しかし、仮にそれらを作ったところで、敵の前で飛んだら視界に入った瞬間に落とされるのがオチだ。

十字教における有名な話の一つ。

聖職売買で有名な魔術師シモンIIマグスと対決した十二使徒のペテロは、ただ祈るだけで敵を落として見せた。その上、地に墜ちたシモンIIマグスはそのまま息絶えたと言われている。

そのために、シンプルで強力な撃墜術式が広まっているのだ。つまり、魔術師は簡単に空を飛ぶことができるものの、簡単に地に落とされてしまうという不毛な運命を課せられることとなった。

第十位の『聖人』は、例外的に宙を舞うことが可能らしいが……駿斗は実際に会ったことがない。

それはともかく、彼女はそのまま水路を移動するしかないのだ。地面になど出れば、一発で追いつかれてしまうのだから。

(……曲がり角！)

水路は当然ながら、どこまでも一直線、という訳にはいかない。したがって、時々その方向を変える必要がある。さすがにイギリスで暮らしているためか、敵は駿斗のスピードに少し顔を引きつらせながらも、自由自在に曲がっていく。

しかし、当然ながら限界はある。

そもそも、魔術師はどのようにして魔力というものを持っているのかと言えば、何らかの方法で体のパラメータ（脈拍とか）を強引に引くことにより、自分の生命力を魔力に精製して得ている。

方法としては、瞑想や食事制限など様々なものがあるが、その中でも最もポピュラーで多くの魔術師が使っているものが、特殊な呼吸法なのだ。

水中移動術式を使用すれば、当然ながらある程度息も苦しくはなくなる。しかし、流石に陸上と同じように、とまでいくのは、それによほど慣れていなければならぬ。

要するに、彼女たちは水中に入ってから、魔力の精製ができないか、あるいはその質が落ちてしまい、陸上と同じような実力を発揮できない、ということだ。

対し、駿斗は万象再現一つで魔力から天使の力まで生み出すことができる。

ドドドドドッ！ という音が連続し、少女の体が空中へと放り出された。

駿斗もまた水中から跳び上がり、宙を舞う少女へと、拘束術式によつて輝く右手を伸ばす。

五和はベイロープに敗れたものの、それはある意味作戦に織り込み済みであり、彼女をきちんと確保することができた。

というのも、ロンドンという町はイギリス清教『必要悪の教会』のおひぎ元であるわけであり、かつて新米者の試験に使われていて、難易度の調整に失敗した結果、死者が続出したという魔術試験施設を利用したのだ。

「すみません。こんな時間にお呼びしてしまつて」

「あいにくと、私は規則正しい修道女じゃないんでね。既定の就寝時間なんざ存在しないわよ」

謝る五和に対してぶっきらぼうにそう答えるのは、シエリー・クロムウエル。ライオンのような金髪に小麦色の肌が特徴的な、ゴスロリの黒いドレスを着た魔術師だ。

かつて『虚数学区の鍵：正体不明』カウンターストップ風斬氷華を狙い、9月1日に学園都市を襲ってきた彼女であるが、これでも正式に『必要悪の教会』所属の魔術師なのであった。

あの事件のせいで、当麻や駿斗たちにはゴーレム使いという印象が強いが、寓意画や宗教彫刻などの美術・工芸・霊装の中に隠された魔術的記号を解読する専門家である。

彼女は、ただでさえ乱雑な金髪を、適当に片手でかきあげながら、「……つつつても、『清教派』の魔術師はともかく、『騎士派』のクソどもの利益にもつながるつてのは気に食わねえけどな」

「はっ。」

事情を知らない五和は、その言葉に頭上に疑問符を浮かべたが、シエリーは「何でもねえよ」と返した。

20年ほど昔に学園都市とイギリス清教のそれぞれ一部で起こつた、『新たな能力者を作り出す』実験の被験者であるその少年。『能力者に魔術は使えない』という常識は今でこそあるものの、それが明確になった実験がこれだった。

魔術と超能力を共に使いこなす者を作り出そうとしたが失敗は続き、最終的には『騎士団』の乱入により被験者はシエリーを除き全滅。その際、エリスは彼女を逃がそうと魔術を行使するも、拒絶反応を起こし自爆、直後に騎士のメイスで殴打され死亡した、という壮絶な過去があるのだ。

だからこそ、彼女と『騎士派』の間には大きな溝がある。

気を取り直して、彼女は解析に取り掛かった。細かく解説してくれるのだが、五和にはイマイチ分からない。

「……ええと、つまりどういう事でしょうっ。」

「変形を前提に作られたカバンということよ」

正確には、元になった『何か』を折り紙のようにして『カバン』という形を作り出しているらしい。

『新たななる光』の得意分野は確か北欧だったな、となると……」

「へえ、折り紙ですか」

その時、五和が何気ない手つきで四角い鞆の表面に手を伸ばす。すると、パチンという音が聞こえた。試験場で『タコ殴り』にされた影響で壊れかかっていた鍵が、ひとりでに開いたのだ。

「わ、わわわわわわわわわわわわっ!?!」

ボンツ！ と四角いカバンが膨らんだ。何倍、というレベルではなく、何十倍、というか……自分が乗っていた棚を爆砕させ、図書館のように並んでいた棚を倒していく。

いや、それはもはやカバンではなかった。

大きなカヌーのようなデザインの船だ。

スキーズブラズニル。

北欧神話に登場する、主神オーディンを含むアース神族全員が乗ることができ、折り畳み式の船。しかも、それが複数見つかった。

単なるビックリ箱ではなさそうだ。

『新たななる光』の1人を速やかに拘束してイギリス清教送りにした駿斗は、再び搜索に移ろうとしていた。

サウザンズ・アイ
「幻想千眼」

最強の探知魔術により、ロンドン市内一帯が駿斗の探知範囲内に収まる。

(北欧系の術者……いや、豊穰神トールの記号を探した方が早いかな)

トールの中でも『豊穰神』という魔術的記号を使用している者は少ない。そのため、それを使えばすぐに見つけられる。

しかし、その中で奇妙な……というか、見たことのある魔力を感知した。

いや、ここはイギリス清教なのだから、単に『見たことのある魔力』

というだけならば無限に存在する。ステイル、神裂、オルソラ、シエリー、アニーゼ……しかし、この魔力は異なっていた。

そもそも、この魔力と並の魔術師とはかけ離れた天使デレズマの力を持っている魔術師は、本来イギリスにいるべき者ではない。

駿斗はその場所へと急ぐ。

その人物は、やはりいた。

格好は、以前と同じだった。その手に持っているのは、棒だ。それも、単なる棒、霊装ではない。

縮絨棒と呼ばれる、十字教徒ならば重要な意味を持つ棒。

ある十二使徒の象徴物。アトリビュート

「ジミー……だと?！」

「また、お会いしましたね。神谷駿斗」

アルファイの子ヤコブから発生した名前を冠するその若き青年は、駿斗の顔を見てもさして動揺も見せずに挨拶をした。

(どうして、こいつがここに!?)

この男と会ったことがあるのは、つい先日、学園都市最大の地下街である第二十二学区で繰り広げられた戦闘だった。

後方のアックアに、他2名と共に率いられてきた彼は、当麻の右手と駿斗の肉体、というかその命を狙い、わざわざ学園都市とイギリス清教に古風な果たし状を送りつけてから襲撃してきた。

わずか3人で50人規模の旧天草式を蹴散らし、その後やってきた神裂火織さえも追い詰める。

警戒心を高める駿斗に対し、ジミーは肩をすくめて言った。

「気持ちわかりますが、そんなに警戒なさらないでいただきたいものです。現在は『十二使徒』を抜けておりますので」

「抜ける、だと?！」

「ええ。厳密には『十二使徒』に所属はしていませんものの、学園都市とあなた方を攻撃する気は今のところありません。ウィリアム様が『神の右席』から実質的に離れている状態ですので」

そう言えば、今までの『十二使徒』と比べて、この男はローマ正教というよりも後方のアックアという男に対して忠誠を誓っているよ

うな口調であった気がする。

しかし、今、聞きのがせない言葉を彼は口にしていた。

「ちよつと待て、アックアが『神の右席』から離れているってことは、あいつはまだ生きているのか？ あの時、確実に天草式の『聖人殺し』を喰らっていたし、俺もあの時あいつの力が離れていくのを確認していた！」

「あの方がおっしゃることには、とっさにバイパスを築いて、自分の持つ力を外へ放出することで被害を最小限にとどめたようなのです」

もつとも、そのせいで『二重聖人』から並の『聖人』にまで力が落ちていくことですが、と彼はこともなげに言う。

一方で、駿斗は内心で冷や汗をかいていた。

（おいおい……あの時は正直、体の限界まで天使の力を行使して、翌日は五和たちが出て行ってから身体強化を1度切った後、体のあちこちが肉離れになるやら関節が痛むやらで大変だったんだぞ。目が覚めてから、さらに翌朝になるまで、使い慣れたはずの万象再現さえ使用できなかったくらいなんだから）

駿斗がそれだけ全力を尽くして死闘を繰り広げたにも関わらず、天草式の奥の手である『聖人崩し』すらも、ダメージは受けたものの凌いで見せたということか。

改めて『二重聖人』アックアの化物っぷりを見せつけられた思いであった。

「……だったら、どうしてお前たちはここにいるんだ？」

「騒乱の元凶を絶つこと。ウィリアム様の目的がそれである以上、私の行動も全てはそれにございます」

すなわち、『現在の』彼らにとって当麻と駿斗は『騒乱の元凶』とはみなさなくなつたということなのだろうか。

（信用、できるか……？）

先ほどからジミーが「ウィリアム様」と言っている辺り、ローマ正教『神の右席』の一員『後方のアックア』としてではなく、1人の魔術師（あるいは傭兵）『ウィリアムⅡオルウェル』として行動しているような感じはする。

しかし、万が一のことも考えると、完全に仲間と考えることもできない。駿斗はとりあえず、偶然利害が一致しているだけ、と考えておいた。

「ウイリアム様は知り合いのところ、注文していた『武器』を預かってからいらつしやるとのことでした。私が一足先に、騒乱の中心となるここに来てきたのです」

「『武器』、か」

つまり、『並の聖人』レベルになってしまった分、力を補うための行動と考えることができる。彼の言う『武器』というのは、十中八九『霊装』と考えることができるからだ。

『聖人』と『聖母』の両方の性質を併せ持ち『神の右席』という地位でそれを完成させている『後方のアックア』は、本来特別な霊装など必要がない。この街には水路が張り巡らされているため、彼が得意とする水の魔術も使い放題であるし、5メートルほどの鉄の塊である武器のメイスは、音速を超えて振り回されるだけで何よりも恐ろしい凶器となるはずなのだから。

しかし、1つだけ疑問があった。

「だったら、どうしてお前だけがここにいるんだ？ レビとトマ、だっけか……そいつらは？」

アルファイの子ヤコブから派生した名を冠する彼はここにいるものの、硬貨袋を象徴物とするマタイに位置するレビや、腰帯をつけたトマはこの場にはいない。

やはり別行動をしているのだろうか……と駿斗が思ったところで、ジミーは驚きの答えをした。

「はい？ 彼らならイギリスにはいませんよ。『十二使徒』として再びバチカンに戻りましたので」

「……どういふことだ？」

「ローマ正教を抜けたのは、ウイリアム様と私だけ、ということですが、それなら理由が分かるが、と駿斗は適当に考えた後、共に動き出した。

思わず武器を手に立ち話してしまったが、彼は『新たなる光』と追

いかけつこを繰り広げている最中なのである。じつとしている訳にはいかないのだ。

しかし、すぐに通信が入る。

『駿斗さん！』

「その声……五和か？」

『はい！』

なんだか彼女の声が非常に慌てている雰囲気を出している。というか、緊張感を持っているかのような……。

「何かあったのか!？」

『い、いえ！「新たな光」の目的の一部が分かりました！彼女たちの最終的な標的は、現在ユーロトンネルの調査のために、フオークストーンのトンネルターミナルへ赴いた、英国の王女たちです！』

その言葉に、駿斗はギョツと体を強張らせた。

「マジか……だとしたら、あいつらにとってはそれも計画のうちか!？」

バッキンガム宮殿には魔術的な施設はないものの、それでも王女たちを護衛する騎士や魔術師が多数存在するし、何より『カーテナⅡセカンド』を持った女王がいる。

しかし、それらから離れた場所にいることは何よりも暗殺の好機となるだろう。さらに、五和は悪い情報を加えてくる。

『問題はそれだけではないんです。王室は公式には否定していますが、彼らには1つの噂があるんです。「王家の者」を発動キーとする大規模術式の存在ですよ』

その問題の大規模術式とやらは、様々なうわさがあるが、その中でも最も過激なものが『王家の者の死』を引き金にして発動される大規模術式。16世紀あたりに配備されたものらしいが、当然ながら、その標的はヨーロッパ諸国となる。

しかも、その反動でイギリスにも地殻変動や天変地異が襲い掛かる。文字通りの『最後の一撃』により、その反動でイギリス国民の大半も命を落とす。

今までの王家の者の死には『終油の秘蹟』という儀式によって、それが阻止されていた。しかし、下準備なしに突発的な死を迎えた場

合、その術式が発動する……。

その言葉を聞いて、駿斗はすぐに調査にかかった。

（『幻想千眼』プラス事象解析！）

アナリーゼ

探す。

ロンドンがだめなら、初歩的な使い魔を召喚する術式を利用して、さらに探知範囲を伸ばす。

（捜せ、捜せ、探せ……！）

見つからない。

これだけ大規模な、『聖人』にすら不可能な広範囲・高精度で探しているのにも関わらず。

これはどういうことだ？

発見されないように、魔術的な妨害がなされている？ ——否。どんな術式を用いようが、それが魔術である以上『何らかの魔術で何かを隠している』ことは必ず駿斗にばれるはずだ。

そもそもロンドンやその周辺に存在しない？ ——否。国家のすべてをささげる規模の魔術というのだから、ウインザー城などの主要な施設を中心として魔術が構成されていなければおかしい。

それは、つまり。

「ブラフ、という訳でしょうね。かつてリドヴィアⅡロレンツエツティが、『ペテロの十字架』を学園都市に持ち込もうとしたことを、架空の対聖人用霊装『スタブソード刺突杭剣』の取引であると思わせたように」
かつては自分と同じローマ正教の一員だった人間であるにもかかわらず、他人ごとのように言うジミー。

そのことに目を細めるが、すぐに気がついた。

『新たな光』の目的は『今日、イギリスを変える』。

それはすなわち、ローマ正教の支配下から脱するということを大前提としているだろう。

探すことはできるではないか。『神の右席』にさえも太刀打ちできる可能性を秘めた、真正正銘英国最高の霊装を。かつての捜査が全て失敗しているからと言って、今回も失敗するとは限らないのだから。そして、彼らは恐らく成功した。

「まさか、『カーテナリオリジナル』……！ となると、それを実行しているのは絶対に、『軍事』に精通した……」

駿斗の脳裏に、赤いドレスの王女が映った。

『新たなる光』のレッサーを追い詰めたところで、当麻とオリアナの目の前で彼女は言った。

「受け入れましょう。口封じをするなら、今がベストです」

当麻が思わずその肩を掴むと、そこから真っ赤な鮮血が噴き出した。

「狙撃!? 伏せなさい!」

オリアナが叫ぶが、当麻は身動きがとれない。

口封じ。

その言葉が真実だとするならば、これは断じて何かが当麻たちを援護したわけではない。明らかに、害意のある攻撃だ。

「くそー!」

当麻は辺りを見渡すと、コピー用紙の束をグシャグシャに丸めて傷口へと押し付ける。しかしレッサーには、出血量が多すぎてシヨック症状が起こり始めていた。

「救急車を呼べ、オリアナ! いや、お前の扱う魔術の中に回復系の術式はないのか!」

「残念だけど……」

しかし、その時オリアナが、スチール製のデスクに刺さっている物に気が付いた。レッサーの体を貫き血がついているそれは、30センチほどの棒の先に矢じりのようなものを取り付けた、変わった形をした飛翔体だ。

ロビンフッド。

吟遊詩人たちに紡がれた物語の中で、アウトロー集団の首領で義賊でありながら弓の名手である、という設定が、物語の登場から何世紀も経った19世紀あたりから描かれるようになった主人公と同名の霊装だ。

そして、この霊装を使用しているのは……『騎士派』。その上、この霊装の開発したのは第二王女『軍事』のキャーリサの直属部隊なのだ。

「……私たちが輸送していたのは、『カーテナー||オリジナル』……」

血まみれの顔に笑みを浮かべながら、レッサーが言う。

「……かつて歴史の中で失われた戴冠用の儀礼剣にして、王家の物しか扱えない慈悲の剣。……当然ながら……後世に作られ、現在の女王が持つ……カーテナー||セカンドなど、はるかにしのぐ、英国最大の霊装……。正真正銘、イギリスを変えるのにふさわしい剣です……」

叛逆者たち

午前12時。

日付が変更する時刻であるその瞬間から、第二王女キャーリサ率いる『騎士派』によるクーデターは起こった。

イギリス国内においてロンドンを中心とする都市に配置された数々の重要な拠点は魔術的・政治的なものを問わず占拠された。

イギリス清教及びその中の精鋭である『必要悪の教会』^{ネセサリウス}は、当然ながら対処を図ったが、次々と騎士たちによって倒されていった。

理由は簡単。キャーリサを『女王』とすることによって、『全英大陸』という魔術は騎士たちに莫大な力を与えていたのだ。

イギリスという国内において、選定剣^{カーテナ}を持つ女王は天使長であり、それに使える騎士は天使となる。

したがって、並の魔術師など彼らの敵ではない。
そんな中。

「全く、騎士団つてのは自分の国を守るのが仕事だとばかり思っていたんだが？」

駿斗は、そんな騎士たちと対峙していた。

「ウィリアム様が懸念していたのは、このことでしょうか」

その隣では、ジミーもその手に縮絨棒を持ち、並び立っている。

それに対峙する騎士たちは、貫通^{フリュウナグ}の槍と呼ばれる量産型霊装を携え、その先を2人に向け先端に光を灯した。

強化された彼ら7人の攻撃など、通常の魔術師ならば1撃で葬られるだろう。

しかし、今回は相手が悪かった。

ジミーが棒を地面に叩き付けると、ドバツア！ という大きな音と共に、半径7メートルほどの地面が陥没したのだ。

思わず、足元に注目する騎士たち。

だが次の瞬間、その上に巨大な影が発生した。跳び上がった駿斗が

イマジン・コアロッド
幻想核杖を中心にして創り上げた、巨大な槍だ。

「おらああああああ！」

気合十分に、その槍を突き出す。すると、そこから大量の棘が降り注いだ。

「ちよつと眠ってる！」

その棘を騎士たちは凌ぐが、全てが地面に散らばったその瞬間、棘に刻まれたルーン文字が爆発した。そして、そのまま立て続けに暴風が吹き荒れる。

「よし、このままあいつらの元に向かうぞ」

イマジンブレイカー
「幻想殺しの方は良いのですか？」

「あいつなら、他の仲間を捕まえて自力でやってくるさ」

駿斗は、確信めいた口調で言い切った。

「それよりも、アックア……いや、ウイリアムⅡオルウエルはどのタイミングでやって来るんだ？」

「そろそろ、フォークストーンに到着している頃合いだと思いますが」
「真つ先に元凶の下に向かったのかよ」

まあ、それがあの傭兵らしいやり方なのかもしれないな、と駿斗は思う。何しろ、今までの2人と違って果たし状まで送り付け、真正面からやってきたのだから。

「しかし、あいつが万全な調子で力を揮えるならともかく、俺たちと戦ったおかげで、というか、正確には天草式の『聖人崩し』のせいで、力はだいぶ弱まっているんだろ？ 並大抵の騎士は敵わなくとも、そのトップなら……」

「そうですね。しかも、騎士団長という人物は、ウイリアム様とは旧知の間柄であり、昔に使っていた魔術は、互いの手を知り尽くしていると言えます」

ジミーは、淡々とした調子で話す。

「ですが、ウイリアム様も新たな霊装として『アスカロン』をロシアの『占星施術旅団』から受け取っていらっしやいましたので」

「占星施術旅団……」

聞き慣れないその言葉に駿斗は眉をひそめる。いや、正確にはどこ

かで聞いたような言葉ではあるのだが……。

「ウイリアム様は以前、彼らがロシア成教に追われているところを助けられました」

ああ、と駿斗は思い出す。

主にロシアを活動地域とした、十字教系の魔術結社だ。他者から相談を聞き、状況に合わせてこつそり魔術を発動する、といった活動を行っていたのだが、それが逆恨みを買ったのか、ロシア成教の一部門に追っ手をかけられ国外逃亡を余儀なくされたとか。

この時の戦いは『占星施術旅団援護』という名で、激戦として魔術業界に広く知られている——という、つい先日聞いたばかりの情報を頭の中から引っ張り出す駿斗。

(なるほどな。ローマ正教に入る前から傭兵として活動していただけあって、いろんな方面に顔がきくって訳か)

そんなことを考え、その後に『アスカロン』について考える。

(聖ジョージ^{ゲオルギウス}が、悪竜を退治して王女を助け出したときの剣か)

確かに、霊装としては強力なものではある。おそらく3メートルを超えるサイズの武器になるであろうが、元は5メートルほどのメイスを振り回していたのだから、何も問題はないだろう。

しかし、水の魔術が使えないのは、正直痛手だと思う。

『新たな光』については知っているのか？」

ウイリアムのことは気になるものの、とりあえず彼らと情報をやり取りするために、駿斗は尋ねた。するとジミーは、あくまでも事務的に答える。

「詳しいことは、そこまでは。ただ、魔術結社予備軍としてはかなりの実力を持つ、くらいのことです」

「そうか。とりあえず、あいつらの霊装であるらしい『鋼の手袋』について教えておこうか？」

「いえ、現状では結構です」

あっさりと、彼は断る。

「この状況では、おそらく彼らはしっぽ切りにされているでしょう。要するに、もはや用済みなのですよ」

「……『カーテナⅡオリジナル』さえ手に入れば、あとは何も要らないってことか」

「そうですね。彼らの保有しているであろう、北欧系魔術を使った霊装探知技術についても、もはやいらぬものです。これ以上何を掘り出したところで、『カーテナⅡオリジナル』以上の霊装が出てくることはありませんでしょうから」

要するに、キャーリサを止めないことにはどうにもならない。

インデックスのことが気がかりだが、そんなことを考え続ける余裕もなく、次々に騎士たちはやってくる。

ドーバー海峡の下を走るユーロトンネルの爆破跡地に、インデックスはいた。彼女がいるのはフォークストーンという街であり、多くの幹線道路がここに集約し、そこから3本の海底トンネルに再分配されるのだった。

しかし、インデックスはトンネルの下り坂を20メートルほど進んだところで止まってしまう。海底を走るトンネルであるため、流れ込んだ海水がここまでせり上がっていたのだ。

しかし、それでもインデックスはすぐに自分の仕事をやり遂げた。

『『ロレートの家』の伝承を元にした、ローマ正教系の術式が破壊の象徴に使われているね』

サントウナリオ・デツラ・サンタ・カーザとも呼ばれる、イタリヤのとある町にある家屋で、聖母マリアの住居と言われている。この家は『ひとりでに消え、ひとりでに現れる』ことで有名であり、伝承では過去に2度ほど瞬間移動をした。

しかし、このトンネルでは『建物が移動する』という半端な効果だけを付与したために、一部分だけが『動いた』ことで、トンネルに亀裂が入る原因となった。

しかも、術式のところどころに『フランス国内を移動するように』する設定を変更しており、その上、オリジナルの『ロレートの家』はフランス国王ルイ九世が訪れたことでも有名なのだ。

「なるほど。これでフランス系ローマ正教の派閥が関与したのは、ほぼ決定だな」

騎士団長ナイトリーダーを従えている第二王女キヤリーリサは、そう言って笑う。

「……フランス製の術式のみならず、よりにもよって王家が分析に関与した術式を持ちだしてきたか。その辺の魔術師程度では扱えないはず」

しかし、キヤリーリサの顔色は悪くはなかった。むしろ、当然の結果だ、と言っているようにすら見える。

「しかし、本当に良かった」

「？」

「お前が『今回の件にフランスは関わっていない』と評価を下してしまわなければ、私としては問題なしだ。——お前が望み通りの解答をしなければ、ここで斬らねばならなかったからな」

間近に迫るその笑みに、思わずインデックスが身構えた。しかし、その背後には水没したトンネルが彼女の退路を断っている。

そこに騎士団長がやってきた。本来第二王女だけでなくインデックスの護衛もしているはずの彼の手には、古ぼけた四角いカバンがある。

『大船の鞆』スキーズブラズニルを開放します。本格的に参戦する前に、剣の調子を確か舞ておいた方が良いでしょう」

カバンが膨張し、巨大なカヌーへとその姿を変える。そしてその中には、鞆に収まった一本の剣が置かれていた。

カーテナⅡオリジナル。

現存するカーテナⅡセカンドを上回る、英国最強の選定剣。

キヤリーリサは鞆を掴み、片手で刃と切っ先のないその剣を抜きながら鼻で笑った。

「英国の伝統を嫌うなら、むしろ率先して折るべきだが。せいぜい、利用できる内は利用させてもらおうとしよう」

「英国全域の支配権の確率は完了しています」

キヤリーリサは、禁書目録からの報告をフランスへ通告するように騎士団長へ言いつけた。そして、それが最後通牒であることも。

「……『王室派』と『騎士派』の間接的な働きかけで、軍を動かせるな？ ドーバー海峡に駆逐艦を配備しろ。返答次第では、いつでもヴェルサイユヘミサイルを撃ち込めるように、だ」

おまけに、学園都市への配慮はない。

イギリスの軍事力の手綱を握るのはイギリスであるべきで、学園都市に配慮する方が不自然だ、と切り捨てた。

イギリスの独立。

国として支配されているのではないが、それでもローマ正教やロシア成教の支配が多いヨーロッパという地域の中で、確実にイギリスは追い詰められている。それを、覆すのだ。

「弾頭についてはいかがいたしましょう？」

「英国独自技術で開発したバンカークラスターを使うの。地中50メートル級のシェルターを貫通させるための特殊子弹を200発ほどばらまく弾頭だ」

それは、本来クラスター爆弾の禁止条約に抵触するもの。しかし、それすらもキャーリサは無視する。

「しかしまあ、ちよーど良い。現在、他国と結んでいる全ての条約を再確認し、不要なものは残らず破棄する。手始めにバンカークラスターから、な」

さらに加えて、アメリカからのドル関係の支援も断つ。

そこまで徹底的に命令してから、キャーリサは苦々しく呟いた。

「何が『イギリス清教・学園都市』と『ローマ正教・ロシア成教』の戦争だ……」

それは一見、2つずつの勢力が互いに手を結んで戦っているように見えるが、その実は異なる。

イギリス清教は魔術サイド、そして学園都市は科学サイドなのだ。したがって、この戦争で仮に勝利しても、両者の間が完全な調和をすることははない。今まで通り、互いに利用し利用される関係なのだ。

加えて、イギリス清教は魔術サイドの中では、三大派閥の中の一角に過ぎない。対して、学園都市は科学サイド唯一の親玉だ。『イギリス清教・学園都市』という連合で敵に打ち勝ったところで、世界は科

学サイドが優勢に傾いてしまう。反対に『ローマ正教・ロシア成教』が勝った場合のイギリスの行く先は、いわずもがな。

したがって、この戦争は二大派閥のものではなく、『イギリス清教』と『学園都市』、『ローマ正教・ロシア成教』という三つ巴の戦いにする必要があった。

「……EUからの孤立は、経済や物資を中心とした国内の孤立を誘発させる懸念もあります」

「確かに、一時的な混乱はある」

騎士団長からの指摘を、キヤリーサは否定しなかった。

否定しないうえで、しかし続ける。

「だが、この世界を揺るがす戦争に勝利することで、世界の図式は大きく変わる」

ヨーロッパから、ローマ正教の支配を追い出し、イギリス清教としての支配を確立させる。アメリカがかつて『世界の警察』という形でめざし、学園都市がひそかにほぼ成功させたように、『世界がイギリスという国なしでは成り立たなくなる』という図式を完成させればよいのだ。

キヤリーサは獯猛に笑った。

すると、騎士団長の視線の先が変わる。

「……魔導書図書館はいかがでしたでしょうか」

「少なくとも、フランスへ送る最後通牒の正当性を、周辺諸国へ認めさせるまでは生きてもらわなければな」

「公式の場において、発言を覆す可能性は？」

「こいつの完全記憶能力は、自らの発言をも完全に記憶しているはずだ。そいつを読み取らせれば、信憑性については疑いよーがないだろう」

インデックスは、価値があるまで使われる。したがって、まずは騎士団長の拳で無理矢理眠らされた。

駿斗は急ぐ。

『全英大陸』……まさか、ここまで強力なものだとはな！』

騎士たちを薙ぎ払い、インデックスのいるフォークストーンへと進もうとするが、その行く先々を騎士たちが阻む。

貫通の槍から放たれる光線を防御術式で受け止めながら、駿斗は毒づいた。

かつてローマ正教十三騎士団の一員で、『法の書』をめぐる争いで駿斗が倒したルーも、同じ種類の霊装でかなりの天使の力を操っていたが、彼らは1人1人が全員、それよりも上だ。

おまけに、光線が次々と屈折して曲がってくる。

それでも駿斗とジミーが倒れないのは、その実力が本物だからであろう。

ジミーが縮絨棒で叩いた地面から土砂が槍となつて敵を襲い、その後一気に地面が陥没する。跳び上がった退避するものを駿斗が『神よ。なぜ私を見捨てたのですか』の赤い光線で撃ち落とし、続けて出現させた悪魔の赤い翼を振るって敵を戦闘不能へと追い込む。

そんな中、周囲の状況がおかしかった。

『人払い』すらまともに機能してねえな……。もはやその限界を超えているらしい』

無意識下に干渉することで興味を逸らし、無関係な人間はその地点へ立ち寄りなくなるものだが……。それが機能していないという事は、ロンドンからずっとフォークストーンまで、このような騎士たちによる制圧が続けられているということなのだろう。

イギリスには魔術的な事件が多いために、それを隠す手段も多数用意されている。しかしそれすらも許容量を超えて飽和状態なのだ。すると、駿斗たちは1人の少女を発見する。

厳密には、その少女はどこかでよく見たラクロスのユニフォームのような服装をしており、例の『鋼の手袋』という霊装を他の騎士に取り上げられた状態で、さらに別の騎士にあっさり拘束され、『封の足枷』という霊装をつけられてどこかへと運ばれているところであった。

（あの服装は、『新たなる光』の一員……？　つて、あいつは俺が捕ま

えたやつじゃねえか)

確か、ランシスとか名乗っていたような、と彼は思いだす。霊装である『爪』『鋼の手袋』『スリースルグタンニ豊穰神の猪』『スキースブラズニル大船の鞆』を所有していたのだが、それらは全て取り上げられているようだ。

しかし、彼女の様子がどこかおかしい。いや、厳密には以前からおかしかったのだが。

「うえひひ、く、くしゅぐった……くしゅぐったひ……魔力は、やめれ」
どうして、あの少女は体をくすぐったそうに身をよじっているのだろうか。そもそも、騎士たちにたいして抵抗する意志が微塵も感じられないのであるが。

また個性的な魔術師が出てきたなー、とか駿斗は遠い目をしつつ（主にジーンズ切り裂き聖人の姿や、体を拘束具で締め付けたロシア成教の少女などを思い出しながら）、それでも明らかに強引に拘束されているっぽい女の子のことは放っておけないのが駿斗である。

とりあえず、彼は『マジック・バレット幻想魔弾』を展開し、彼らの一瞬の隙を狙う。百発百中を誇るその狙撃術式は、その少女が騎士から別の騎士へと渡されるその瞬間、騎士の横腹に命中した。その後、立て続けに一方向から魔術でできた銃弾が彼らを叩く。

「なんっ………!」

「敵襲か!」

それでも、『体内の力が強すぎる』ために、『魔術的機構を壊してしまふから』鎧に霊装としての効果を加えられない。それほどに『全英大陸』で強化された彼らは、その程度の攻撃で倒れることはなかった。だが、それに集中している間に、彼らの腕から少女は消えていた。

「あ、あれえ? た、たしゅけて……くりえた」

「はいはい。とりあえず、まともに話ができるようになってからにしような」

駿斗は、適当な調子で地面を叩くと、周囲に模様と文字を刻んでいく。外側からも内側からも、魔力を感じ取れなくなる特殊な結界だ。

適当に^{アナリーゼ}事象解析で『診た』のであるが、どうやら彼女は自分の物にしても他人のにしても、魔力の動きを感じ取るべくすぐたくなつて

しまうようなのだ。

駿斗は万象再現リブロダクシヨの使用をやめ、結界の維持に不要な魔力と天使テレズマの力を一度全て幻想千眼サウザンドアイで使い果たすと、彼女に向き直る。

「これで大丈夫か？」

「ふ、ふう……あれ？　今魔術使っているよね？　なのに、どうして私の体がくすぐったくならないんだろ？」

駿斗の言葉を聞いて途中から英語を日本語に直した少女は、キョトンとした表情で言った。

「状況は分かっているか？　あいつらの目的とか……まあ、クーデター以外にないだろうけどさ」

「そ、そうよ！　『騎士派』のあのクソ共、せっかく私たちのおかげで『カーテナールオリジナル』を手に入れ立っているのに、必要なものが手に入ったら素早くどこかその場で切り捨てやがって……！」

周囲で倒れている騎士たちを親の仇を見るような眼で睨みつける彼女であるが、駿斗からすれば、自業自得だと言いたいようがない。

「とりあえず、知っていることを話していただきたい。今は、少しでも敵の情報が必要です」

「了解。私はランシス。日本語って、こんな感じで合っているよね？」

「大丈夫だぞ。俺は神谷駿斗。学園都市から来た『幻想創造』……って言っても、イギリス清教に所属しているわけでもないお前らでは分からんか？」

そう尋ねると、彼女が首を傾げたので駿斗は自分と当麻、そしてジミーの事情から現在までの騒乱を適当に解説していく。

「……で、お前らと追いかけてっことをしていたら、いつの間にか第二王女キヤーリサ率いる『騎士派』のクーデターが始まりました、とさ」
ちゃん、ちゃん。

なんて擬音語がつきそうな感じで最後をまとめた駿斗であるが、話している内容は超過激でシリアスである。

しかし、『新たなる光』とはともかく、ランシスとは利害が今のところ一致している。全よりも個を重視するというのが魔術師の基本である以上、彼女が味方になってくれる可能性はある。

少なくとも、彼女が完全に『騎士派』のいる場所から遠ざかるまでは大丈夫だろう。

「で、これからアンタたちはどうするの?」

「キヤーリサと『騎士派』を止める。キヤーリサ以外の『王室派』や、『清教派』と一緒にな」

その言葉に、ランシスは駿斗を見る目を変えた。具体的には「コイツ馬鹿だったの?」という感じだ。

「……アンタ、自分が何言ってるのか分かってるの? アタシたちが発掘した『カーテナオリジナル』は真正銘の本物。あれが第二王女の手にある限り、それこそ天使長を相手に戦うって言っているようなものよ。最低でも、イギリスの外に出なければ勝ち目はないわね」

しかし、イギリスの外に出るわけにはいかない。連中が望んでいるのは神谷駿斗の討伐ではなく、クーデターの成功、すなわち英国の完全掌握なのだから。

「まあ、学園都市に住んでいるアンタが気にするようなことじゃないわよ。いくら禁書目録の管理を任されていると言っても、彼女に当たってすでに『騎士派』の手に落ちていくということ。アンタは確かに並大抵の騎士には勝てるのかもしれないけれど、そのトップである騎士団長はそんなに甘い相手じゃないわ」

「問題ありません」

「ウイリアム・オルウェルが来るから?」

ジミーがすぐに反論したが、すぐに彼女は笑い飛ばした。

「確かに、あの傭兵は第三王女にとっては最強の懐刀となるわ。だけど、逆に言えばそれ以上の戦力はでてこないのよ。いくら伝説とも呼べる数多の功績を打ち立ててきた傭兵でも、キヤーリサには勝てない。あの剣が彼女の手に入った時点で決着はついたのよ」

戻ってくる戦士たち

ランシスはそう言った。

既に勝敗はついている。何をやったところで、イギリスはキャーリサと『騎士派』によって掌握されるという未来が変わることはない、と。

しかし、その言葉を受けても、駿斗とジミーの表情は変わらない。

「……『カーテナルオリジナル』は、女王に天使長と同質の力を与え、その配下で動く『騎士』に天使の力を与える者だ」

駿斗は、唐突にそんなことを言った。

「だが、あくまでもそれだけだ」

「それだけ……」

「要するに、だ。天使長を倒す力があればいいのだろうか？ 現状『ない』というのだったら、いくらでも『創って』しまえばいい」

そして、駿斗にはそれだけの力がある。

イマジックリエイト
イマジックリエイト
幻想創造

そして、当麻の幻想殺しは、どんなものであろうとそれが純粋な『異能の力』である限り、その性質を問わず無効化できる。

その言葉を聞いたランシスは、呆れたような表情をした。

それを見た駿斗は、ニヤリと笑うと彼女の手を掴んで動き出す。

「そんな訳で、連中と戦いに行くぞー！」

「ええ!? ちょっと、私まで戦いに行くことはな——」

ランシスの言葉をあつさりとは無視して、駿斗はずんずんと進んで行く。最も、彼女にしてもしっかりと自分の霊装である『爪』『鋼の手袋』スリーズルグタンニ『豊穰神の猪』を掴んでいた。もつとも、『大船の鞆』スキーステラスニルは用済みなので放置していったようだが。

「戦いに行くって言っても、ここからフォークストーンまでは1000キロあるのよ? 電車は多分掌握されているけど、どうするつもり?」

「当然、魔術を使う」

「……私は『聖人』みたいな音速挙動はできないわよ」

その言葉に、駿斗は再び笑って言った。

「そりやそうだ。普通の人間が、超音速の移動を生身でできるわけがない。だけど、お前をそう簡単にほいほいと放り出しておくわけにもいかねえ。とりあえず、こんな事態を引き起こした手前、少なくとも俺たちの邪魔だけはしてもらっちゃ困るからな」

そこまで言うと、駿斗は足で地面をトン、と叩いた。そしてその次の瞬間、地面が隆起を始め、1つの大きな槍を形成する。

「……なにこれ？ あんたの霊装？」

「まあ、簡単に言えばそんなところだ」

駿斗は説明を省くと、彼女を連れてその中へと入っていく。

中に入ったランシスは、その中にある座席の1つに気が付いた。

「記号は……何よこれ？ 北欧だの、ケルトだの、加えてアステカや東アジア圏まで……あらゆる槍……それも投げ槍に関する魔術を集合させたような……」

そう呟いたあと、1つのことに気が付いた彼女は顔を真っ青にする。

「あ、あんた、まさかとは思うけど……」

「その『まさか』さ。これでも、学園都市製の超音速旅客機よりは遅いんだぜ？ だから大丈夫だ」

どこが大丈夫なのか教える。

と、座席に（無理矢理）固定されたランシスが叫ぶ前に、地面から隆起した岩の腕が槍を音速で投げ飛ばした。

フォークストーンは、ロンドンから約100キロ。そして音速とは時速1200キロオーバー。5分と経たずに、彼らはフォークストーンに到着するだろう……無事に、と呼べるかどうかは別だが。

ちなみに、しっかりと天使テレスマの力で身体強化していたジミーは、駿斗から最低限の保護しか受けなかったランシスとは違って、平気であった。

「どーした？」

「航空機です」

キャーリサの問いに、騎士団長は短く答えた。

姿は見えないものの、騎士団長は無言で自分の耳を指した。どうやら、本当に音で聞き分けているらしい。

これは、本来あり得ないことである。なぜなら、滑走路は民間、軍用を問わず全て『騎士派』によって取り押さえられているはずであるからだ。そして、キャーリサからそのような命令を受けたことはない。

「いた。低空飛行だな。地面すれすれを飛行している。……レーダー避けのつもりか？」

キャーリサが持つ双眼鏡の中には、確かに巨大な輸送機がアスファルトから5メートルほどの高さで飛んでいた。

しかも、それは機体の下部にフロートが取り付けられていた。水上機なので、滑走路を使わずとも川面や海上から離着陸できるのだ。

「落としましょう」

「遅い。もー来る」

その海難救助用のレスキュー機は、弾丸のように『騎士派』一団の真横を通り抜けた。ただし、その側面のスライドドアが開いた状態で。

そこから、飛び降りた者がいた。

時速500キロは出ているはずだが、しかし『彼女』は地面に激突などすることもなく、むしろ羽毛のようにふわりと柔らかく着地する。

その動きだけで、その者の持つ技術が並ではないことを知らされる。

慌てて剣を抜く騎士たちの中で、しかし襲撃者はただキャーリサだけを睨みつけていた。

「聖人か」

視線を受けたキャーリサは静かに言う。

「となると、あれを動かしているのは残りの天草式だな」

しかし、彼女の代わりに騎士団長が出た。第二王女はそのまま第三

王女を追い、そして騎士団長だけが『聖人』である神裂と対峙する。「私をしつこく勧誘していたのは、こういう結果を知っていたからですか」

「貴婦人として過ごして欲しかったという願いは嘘ではない。だが、どうやらそれも手遅れだったようだ。敵として目の前に立った以上、容赦なくねじ伏せさせてもらおう」

両者が対峙する。

神裂火織は『聖人』だ。その速度は音速を超え、たいていの魔術師には遠く及ばない技術を持っている。

(鞘で昏倒させ、速やかに第二王女を拘束する！)

しかし、『全英大陸』によって『天使』の座席を手に入れた騎士たち、そのトップである騎士団長は予想のはるか上を行った。

神裂の視界から、彼の姿が消える。

『聖人』の動体視力すら上回る速さで、騎士団長がその後ろに回り込んだのだ。

放たれたのは、ただの蹴り。しかし、その蹴りだけで神裂の体が遠くへと吹き飛ばされる。その体は、複数の霊装で守られているはずの馬車を粉々に砕き、さらに地面を滑った。

(これは……っ！)

彼女を蹴り飛ばし、叩きのめしながら、騎士団長は失望したような表情すらしている。

「何を意外そうな顔をしている。私は三派閥の長、『騎士派』の一角だぞ。聖人とはいえ、たかだか『清教派』の一員如きが、対等に戦えるとも思っていたのか？」

実は彼女には、この間のアックア戦の後、駿斗に指摘されたことがあった。

『神裂、確かにお前の持つ力は強大なものだ。「聖人」っていうのは、世界にも20人といない希少な力だからな』

だけど、とその上で彼は付け加えて言った。

『だけどよ、魔術ってのはそもそも、才能のない人間が才能のある人間に追いつくためのものなんだろう？ つまり、努力次第で「聖人」を超

える魔術師を生み出すことは、十分にできる。実際に、北欧系統じゃ天然ものの才能だった「ワルキューレ」を人工的に生み出す実験まであったそうじゃねえか』

つまり、彼はこう言ったのだ。

『聖人』だから、たいていの敵など倒せる——そんな甘えた考えは、捨てろ。

今、まさに彼に言われた状況が発生している。

特に神裂は『救われぬ者に救いの手を』という魔法名を持っているために、敵をどうやって『倒すか』ではなく、『無力化するか』ということに重点を置いてしまう節がある。

しかし、それでは今の神裂よりも強くなることはできないし、これ以上の力を持った敵とは戦えない。

実際に、彼には『幻想創造』という希少な力があつたとはいえ、わずか2か月で『聖人』と同格かそれ以上のフィールドに立った。

ならば、自分にはこれ以上に何ができるのか。

(『唯閃』は、すでに完成された術式)

これ以上手を加えようとすれば、どこか別の場所が崩壊してしまう。

彼女は別の切り札を用意する必要があつた。

『七閃』は もはや時間稼ぎにもならないだろう。

それでも、彼女は強くなる必要があつた。

だから、到達した。

『隠密性』という天草式の特性を十全に生かし、そして一撃必殺を突き詰めた神裂火織という『聖人』が『天草式』と強いつながりを持つからこそできる、新たな必殺の一撃。

「唯閃、——陽炎ノ太刀」

抜刀術によって放たれた一撃。

聖人の力の源たる『聖痕』ステイグマを全て開放して放たれた、渾身の一撃。

それに対して、騎士団長は思わず放っていた蹴りを中断して防御の姿勢を取った。

両者の間で、攻防が一瞬だけ逆転する。それまで悠然と構えていた

騎士団長が、わずかに眉を寄せた。

日本には、世界と同じく聖剣や妖刀などの伝説が数多く存在する。『唯閃』は、その集大成とも呼べるものだ。

しかし、駿斗はそれ以外のもの——人を『斬り殺す』妖怪や、『斬る』ことによる神罰などにも注目した。すなわち、天使だけでなくそれ以上の相手にも対応できるようなものとしようと考えたのだ。

言葉で言うだけならば、簡単である。だが、『唯閃』とはそもそも強大すぎる聖人の力を制御する為に組み上げられた技法であり、体捌きからバランスまで、各種術式を綿密な計算の上で組み合わせて作られた『結晶』だ。

本来、術式に遊びや余裕がない『完成された魔術』であるため、神裂にとつてはある種の限界であるとも言えた。

それを可能にしたのは、駿斗の『科学的な』考えだ。

簡単に言えば、処理の分散。1つのパソコンに全ての作業をやらせるのではなく、いくつかに分散させて同時並行に計算させたうえで、再びまとめ上げて処理する、というスーパーコンピュータのような考え方。

真説の『唯閃』と共にわずかな時間差で放たれる、不可視の、それでいて『唯閃』さえも魔術的な記号として取り込むことでさらに強化された不可視の斬撃は、騎士団長を確かに押し返し、そのスーツを数十センチほど切り裂いていた。

(一矢、報いましたか)

しかし、これ以上の技が神裂から出てくることはない。そして、騎士団長は彼女に対して剣を抜こうとした。

その次の瞬間。

ドオオオオン！ という轟音と共に。

『何か』が彼らがいた場所に『着弾』する。

「げほっ、何ですか!？」

着弾の一瞬前に気が付いた神裂はその場から飛び退くと、土煙が立

ち込めるその中を警戒した様子で見ると、その中心から風が渦巻いているのが確認できた。

そのつむじ風は、やがて暴風となり騎士団長を襲う。その攻撃を一瞬で下がって再び回避した騎士団長は、その中心を睨みつけた。

「神裂！ とりあえず撤退するぞ！」

1人に攻撃するには過剰とも呼べる魔術を展開して騎士団長を牽制しながら、その中から出てきた駿斗はなぜか『十二使徒』であるはずのジミーと共に、彼女の腕をつかんで音速で走って行く。

突然の出来事に、神裂は慌てて叫んだ。

「ちよ、ちよつと待つてくださいー！」

「話なら後で聞く！ 今は、『清教派』が一筋縄ではいかないと相手に危機感を抱かせて、時間稼ぎをするだけで十分だ！」

駿斗は全速力で駆けるのであるが、ようやく彼から腕を離されて自分で走る神裂は、こんなことを言った。

「現在、ヴィリアン様が霊装の馬車で『清教派』の集まるカンタベリー大聖堂まで移動中なのです！ 騎士団長が私の相手をしてキャーリサ様がこの場を去ったということは、確実にヴィリアン様が……」

「そういうことかよっ……！」

第二王女キャーリサは、どうやら『カーテナⅡオリジナル』を手に入れるだけでは気が済まないらしい。

自分の『軍事』による支配体制を万全なものとするために、他の方が絶対に同等の力を扱うことがないよう、『カーテナ』の力を扱える『女王』とその『候補』を消すつもりなのだ。

つまり、次の標的は『人徳』の第三王女ヴィリアン……！」

「カンタベリー大聖堂を頼るなら無駄だ。分かっているだろう？」

『移動鉄壁』を呼ばれるほどの霊装を、しかしキャーリサは軽々と倒した。そしてその中から転がり出てきたヴィリアンを見下ろしながら、彼女は悠然と言い放つ。

「護衛用の馬車の自動操縦が制御を失ったのは、私達が細工をしたか

らではない。目的地であるカンタベリー側が、座標情報を見失わせるよーにジャミングを仕掛けたため。……理由は分かるな。お前は見捨てられたんだよ」

「……ッ!? そんな……そんな、まさか……ッ!」

『王室派』と『騎士派』は私の手中にあるの。『清教派』もお前を庇うつもりはないらしい。どーやら、話は決まったな。お前の見方はもはや1人もいない。1人も、だ」

第二王女の後ろから、複数の光源が近づいて来るのをヴィリアンを確認する。しかし、本来ヴィリアンたちを護衛するはずの騎士たちは今、キャーリサの掌握している『力』に過ぎなかった。

そして、その中のトップである騎士団長が、キャーリサから『仕事』を頼まれる。すると、騎士団長は部下にこう命令した。

「……剣で首をはねては切断面を潰してしまふ。王侯貴族の処刑に使う斧を持ってこい。可能な限り重く、綺麗に切断できるものを。死したところで姫は姫。汚い仕上りの首を見せて、民の前で恥をさらすわけにはいかん」

その言葉に、ヴィリアンの喉が限界まで干上がる。

完全武装の騎士が、1本の斧を持ってきた。長さは1メートル程度で、片方にしか刃がついていないものだ。しかし、その鉄に染み込んできた血が、重々しい『何か』を感じさせる。

騎士団長の手に、斧が渡る。しかし、彼はそれを受け取った後、なぜか一度だけ周囲を見渡した。

暗い道の左右は森であり、そこには何も無い。それを確認した彼は、静かに目を閉じて息を吐く。

それは、何かを期待するような顔色だった。

そして、何かに失望するような顔色だった。

「始めるぞ」

瞼を開けた騎士団長が呟くと、ズン……という鈍い音と共に、斧が天へと上がっていく。

「う……うああああああああああっっっ!」

もはや、恐怖で雄たけびを上げることしかヴィリアンにはできな

かった。その彼女を冷徹な目で見つめながら、キヤーリサは鬱陶しそうな調子で告げる。

「助けを求めても構わないし、聞いている者もいるだろう。しかし、応じる者がいると思うなよ」

その言葉は、今までの中で最もヴィリアンに突き刺さった。

今までに、優れた力を持つ人間というものを、ヴィリアンは何人も見てきた。それだけの人材が、このイギリスという国に知っていることを知っていた。

しかし、今まで見てきた、そして彼女が言葉をかけてきた彼らは、今この瞬間、誰一人として彼女の側にはいなかった。何よりもその孤独さが、ヴィリアンの心をどん底へと突き落とす。

「……お別れです。最後に1つだけ、約束しましょう。切り落とした後の首の扱いについてはお任せください。筋肉や皮膚に手を加え、生前と同じく……いえ、生前よりも美しいお顔となるように演出させていただきます。その首を見た多くの民が、あなたを偲べるように」

その最後の言葉と共に、斧は振り下ろされた。まるで、余計な痛みを与えないようにと、一切の迷いがそこにはなかった。

そして。

ドツパアア！ というすさまじい衝撃が、取り囲む『騎士派』へと襲い掛かった。

それは居並ぶ『騎士派』たちをなぎ倒し、騎士団長ナイトリーダーの持つ処刑用の斧を粉々に打ち砕く。

その瞬間。

吹き飛ばされた騎士の中の数名が、呆然とした調子で呟いた。

「……戻ったか」

その瞬間。

馬上にいた第二王女キヤーリサは、カーテナ||オリジナルを手にしたまま、余裕の態度を崩さずにこう言った。

「戻ったか」

その瞬間。

砕けた斧の柄を適当に放り捨て、正面を睨みつける騎士団長は、目の前に現れた強敵に対し、笑みすら浮かべて大声を張り上げた。

「戻ったかつ！」

「二「ウイリアムⅡオルウエル！」」

第三王女は、地面にへたり込んでいたはずの自分がいつの間にか、ある男に抱えられていることに気が付いた。屈強なその男を、ヴィリアンを抱える片腕とは別に、もう片方の手に巨大な剣を握っていた。3メートル以上もの長さを誇る、あまりにも巨大すぎるその剣を、軽々と。

その側面に刻まれている剣の銘は『A^アs^スc^カa^ロl^ン』。

さらに、その根元にはある紋章がつけられていた。

青と緑。そして、ドラゴンとユニコーンとシルキーが三つ巴になった、盾の紋章^{エスカッション}。それは、本来英国の騎士となるはずだったある傭兵に与えられたもの。

「ご無事ですか。王の国の姫君よ」

最低限の礼節だけをわきまえた、短い言葉だった。多くを語ることを好まぬ傭兵の言葉だった。

『王室派』『騎士派』『清教派』、その全てに見捨てられても。

この傭兵だけは、駆けつけてくれた。

「遅い、です……」

ヴィリアンの瞳から、涙がこぼれた。しかし、それは先ほどまでとは違う、暖かい涙であった。

すでに、涙の理由は変わっていた。

彼女は、自分の中からこみあげてくる思いにしたがって、ありったけの力をこめてこう叫んだ。

「遅いんですよ！ この傭兵崩れのごろつきがあー！」

上条当麻は、どうにかイギリス清教の女子寮の入り口までやってきた。

初めて入る建物であるが、その中には案内などは存在せず、むしろほとんど人がいなかった。最低限必要なものは持ち運ばれており、残っているのは殿をして『騎士派』の追撃に対して時間稼ぎ（間違っても『迎撃』ではない）をするための戦闘要員である。

彼女たちに本来敵である『新たな光』のレッサーの治療を頼むのは心苦しくもあったのだが、

「おやまあ、お久しぶりなのでございますよ」

「あれえオルソラ!? 真っ先に逃げるべき戦闘力ゼロのお前がなぜここに?」

「なんか皆さんバタバタしていて、ついていけなかったのでございますよ」

しかし、彼女は当麻の腕の中でぐったりとしているレッサーを見ると「いつも通りの展開でございますね」といろいろと否定したい台詞を放ってから、しかし二つ返事で回復魔術を了承してくれた。

「その代わりと言っては何でございませうけど……」

「分かってる。殿の1人として、脱出の手助けくらいはしてやるよ。俺も、親友に負けてられないからな」

当麻はその左手に今一度『硬化手袋』フリックグローブをはめ直しながら、照明が落ちて暗くなっている通路を歩く。すると、再び他の修道女と出会うことができた。

「あなたがこっそりと入ってきた裏口も含めて、ほぼ全てのルートが『騎士派』に固められつつあります」

「強行突破しかないってわけか」

こういうのは、本来駿斗の得意分野なんだけどな、と少し考えたが、気を取り直して修道女から説明を聞く当麻。幻想殺しはむしろ、何も知らない敵を奇襲して霊装を破壊したり、あるいは一か所を守るだけの防衛線で最も活躍するものであるが、今はそんなことを言ってい

れる余裕はない。今攻めているのは敵であり、こちらは守りなのだ。

作戦としては、ありつたけの遠距離攻撃で『騎士派』を攻撃して揺さぶりをかけ、その一瞬のタイミングで一斉にバラバラの方向に逃げ出す、というものだ。誰が『ハズレくじ』を引くことになるのかは分からないが。

そして、その後当麻はインデックスと出会うためにフォークストーンへ行かなければならないのであるが……肝心のユーロスター路線は、その高架と電線が戦闘の余波でちぎれていた。

「そうとも限りません」

しかし、修道女は言った。

いかに『カーテナリオリジナル』を手にしているとはいえ、キャーリサは特定の要塞に入らずにフォークストーンで丸裸の状態だ。しかし、これから起こるであろう『清教派』との総力戦に備えるため、『騎士派』はなんととしても人員・物資を輸送し、速やかに防護体制を固める必要があるのだ。

そして、そのために使われるのが恐らく緊急時に列車をけん引するためのディーゼル車両。クレーンで高架がちぎれたところを乗り越えようとするのだろうが、そこへこっさりと乗り込むことができれば、フォークストーンへの道が開ける。

「……それもこれも、まずは無事にここを脱出してからということになりますけどね」

「上等。目的さえハッキリとすりゃあ、あとは勝ったも同然だ」

第二王女と『騎士派』によるクーデターを前にして、あらゆる人々が動き出した。決戦は、これから始まる。

傭兵の戦い

10月18日。午前0時30分。

第三王女ヴィリアンを助けるために、精銳の騎士43名とそれらを束ねる騎士団長ナイトリーダー、そしてクーデタークーデターの首謀者であり、カーテナカーテナ||オリジナルを握るキヤーリサを前にして、第三王女ヴィリアンを抱えながらウィリアム||オルウエルは立ちふさがった。

かつて騎士になるはずだった、傭兵崩れのごろつき。その片手には、理論上なら50フィートの悪竜を斬り倒す大剣アスカロンを携えている。

ウィリアムは、ただその剣をまっすぐに振り下ろした。

それだけで、地面が爆発し、衝撃波が周囲を襲う。

それと同時に発生した莫大な粉塵が、騎士たちの視界を遮った。また、それによつてもたらされた衝撃で、屈強に訓練された軍馬さえも怯えのいななきを上げる。

「チッー」

敵の意図に気が付いた騎士団長が舌打ちし、その部下たちが爆発の中心地に矢を放った。しかし、粉塵が夜風に払われた後、そこには亀裂しか残っていない。

「なるほど。まず第一にヴィリアンの安全を考えたの。この場で乱戦となれば、まとめて死にかねないしな」

第二王女キヤーリサは、自分の軍馬を宥めながら呟いた。

彼女は知っている。

確かに、『二重聖人』であるウィリアム||オルウエルは、強力な戦力だ。しかし、その実力があれば、本来アスカロンなどという分かりやすい霊装は必要がない。この近くには水源も豊富であるのだから、彼が得意とするはずの水の魔術には事欠かないのだ。

しかし、今は学園都市での戦いで手負いとなっており、満足に水を扱うことができない。だからこそ、彼は竜殺しの聖剣を用意する必要

があった。

だが……『ただの聖人』程度の実力であれば、今の騎士団長にも十分に退けられる。実際に、先ほど幻想創造イマジネクリエイトの少年が助けに入らなければ、神裂火織はあの場で騎士団長に撃破されていたはずだ。

（——今なら、殺せる。あの忌々しい傭兵を、我らの手で）

キヤリーリサは、冷静に考えた上でそう結論付けた。

「いかがいたしましたよう」

騎士団長の問いかけに、キヤリーリサはつまらなさそうに息を吐いた。

「首を2つ持って来い。旧知の『敵』になるが、手を抜かないように」
「敵兵の知り合いなど、心当たりはありません」

騎士団長はそれだけ言うと、軍馬には乗らず、直接闇の方へと足を向ける。

敵は近い。

この距離ならば、己の足で進んだ方が早く着く。

駿斗とジミーは、何とかウイリアムⅡオルウエルと遭遇することに成功した。神裂は、ランシスを拘束したまま一度『天草式』と合流し、他の騎士たちから『清教派』の魔術師たちが逃げるための手伝いをする事になった。

神裂も反撃したいのは山々であったが、『全英大陸』の恩恵を受けた騎士団長の実力を目の当たりにして、この方が良い、と判断したのだった。

「ベイヤード、か」

第三王女をその鞍に乗せた金属製の馬が走り去っていくのを見て、駿斗は呟いた。どうやら、魔術的なサーチをかくぐるような造りをしているようだ。

この傭兵が指定した行き先ならば、ヴィリアンを預けても大丈夫だろう、と駿斗は心の中で結論付ける。

「ウイリアム様」

ジミーは、大剣アスカロンを担いだ傭兵に言葉をかけた。彼は『聖人』のような音速挙動ができないが、そもそも傭兵がヴィリアンを担いでいたためにそこまで速度は出ておらず、高速移動術式でギリギリ間に合った。

「このまま、ベイヤードの護衛をいたしましょうか」

「不要である。ベイヤードには、『必要悪の教会』^{ネセサリウズ}の隠れ家の座標がセツトされている。カンタベリーの馬鹿な老人共と違い、実戦的な魔術師たちであるならば、第三王女が見捨てられることもないであろう」

ベイヤードが見えなくなったところで、会話は止まった。その代わりに、3人の視線が一点に集まる。

「第三王女はそちらか」

後ろから声をかけたのは、追いついてきた騎士団長だ。

「ウィリアム様……」

「貴様らは、『必要悪の教会』の魔術師と合流しろ」

ウィリアムがぞんざいに命令したその言葉に、ジミーは一礼するとその場を去っていく。そして、駿斗はその場で地面を隆起させると、そこから何かを取り出した。

『アスカロン』に取り付けるものだ。使うかどうかは、好きにしてくれ」

魔力を流すだけで発動する、簡単な霊装だった。それを受け取ったウィリアムは、一度見てからその効果を理解すると、その柄に巻き付ける。

それを確認した駿斗もまた、ジミーと同様に高速移動術式を発動するとその場から消えた。

「なぜ貴様がここで立ちふさがる。『神の右席』の一員である『後方のアックア』には、わが国の第三王女のために命を懸ける理由などないはずだが？」

すると、傭兵は言葉ではなく行動で返事をした。

その背後から爆音が鳴り響き、土砂が第三王女へ続く道を遮るとともに、ウィリアムの退路を断つ。大剣を裏返し、背の部分の根元近く

にある鋭利かつ分厚いスパイクで、手近にあつた巨大な岩を打ち飛ばしたのだ。

驚く騎士たちとは対照的に、旧知の男だけは静かに頷いた。

「なるほど、自分がどこに存在する何者であっても、やるべきことは変わらない、か。実に貴様らしい考え方だな」

40人ほどの騎士たちが、傭兵を中心に半径30メートルほどの円形で敵を囲い込む。その中心に立つ騎士団長に対して、ウィリアムはわずかに唇を動かした。

「……人死にが増えるのであるな」

その一言で周囲の騎士たちの殺気が膨らんだが、騎士団長だけは率直に頷いた。

「カーテナの力である程度増強しているとはいえ、貴様のレベルに付き合えるものはそう多くはいるまい」

決闘だ、と騎士団長は言った。

「ここは本物の戦場である。お上品な貴族の礼儀作法に興味はない。本気でくるなら全員来い。無駄死にが嫌なら速やかに退け」

「心配はするな」

軽い調子で言う騎士団長の片手には、3センチほどの刃幅を備えた一振りのロングソードがあつた。軍馬に乗りながら振るうことを考えられた、長さが80センチほどのものだ。

「殺し合いという意味での、古い決闘だ」

鋼の色に光るその表面が、赤黒いざらざらとしたもので覆われている、そしてその表面からポゴツ！ と泡立った。バスケットボールほどの大きさの赤い球体が、その表面を覆い尽くしていく。

新たにできた剣は、元の剣の5倍近くにまで達していた。

霊装フルンテイング。

巨人を仕留めた勇者ベオウルフが、その仇を取りに来た巨人の母親との戦いに備えてある国の廷臣から受け取ったと言われる魔剣だ。その剣は斬り伏せた敵の返り血によって鍛え上げられ、強敵を倒すこ

とにその強度と切れ味を増していったとされる。

フルンテイングを手にした騎士団長と、アスカロンを手にしたウイリアム・オルウェルが対峙する。同じ場所に立つことすら、彼らにとっては10年ぶりであった。

「貴様の10年がどれほどの実を結んだか、我が10年で試させてもらおう」

それが合図となった。

音は消えた。

光は飛んだ。

ただ、互いに正面から敵に突進し己の武器を叩き付ける。それだけの動作で、衝撃が周囲を襲った。そして、その衝撃が過ぎ去った後には、2人の姿は消えている。その場には他に40人弱の騎士がいたが、剣を交えることができたのはこの2人だけであった。他の騎士たちは、悲鳴を上げようが身がかがめようが、その衝撃波で地面にたたき伏せられるのみである。

ウイリアムは強い。

騎士団長は強い。

剣と剣のぶつかり合いは、ただ純粹な剣術だけによるものではない。馬鹿正直に肉体だけを強化したところで、すぐに限界を迎えてしまう。あくまでもその本質は魔術。

そして、そのような超音速下での戦闘には通常の数とは異なり、常に何百、何千もの『弊害』が生じる。この世界ではコンマ1秒の遅れが命取りとなり、わずかに姿勢を崩すだけでも、大きな被害が発生する。それら弊害を全て魔術によって被害が生じる前に摘み取るのが、彼らの真髄なのだ。その難しさは、『聖人』である神裂が抜刀術という形で短期決戦を挑んでいることを考えれば分かるであろう。

駿斗にしても、純粹な戦闘技術では彼らに劣る。駿斗の場合は『科学』及び『能力』という他の魔術師にはない特権を利用することにより、常に自動の安全装置を何重にもかけることで超音速の域に踏み込んでいたのである。駿斗が自動に頼っているところを、彼らは全て手動でこなしているということだ。

したがって、彼らの魔術のどれか1つでも妨害に成功すれば、間接的に術者を倒すこともできるのであろうが……今ここで戦っている2人には当てはまらない。

ウイリアムは『聖人』という生まれつきの資質や、『神の右席』で磨き上げた術式群。

騎士団長はカーテナと『全英大陸』、さらには騎士として効率化された魔術。

魔術のキーとなるものは簡単に奪えるものではなく、そして数々の戦場で戦ってきた2人にとつて、例え手足の1本や2本失ったところで魔術が暴走することはない。

「ふん……確かに、聖人としては優れた方だが……貴様の本領は発揮できていないようだな」

剣を交えれば、それは分かる。

彼が得意の『水』を使わずに、そして滑るような高速移動を使わないのを見れば、それは分かる。

「やはり、学園都市での敗北が尾を引いているのか」

傭兵は答えずに、ただアスカロンを構えなおした。

「そうまでして、第三王女を守る理由があるのか」

騎士団長は語る。

『軍事』と『人徳』。どちらが今のイギリスを守ることができるのかと聞かれれば、間違いなく『軍事』だ。別にカーテナが全てとまでは言わないが、有効な戦力であるのは事実。だから、今のイギリスのために『騎士派』はその政策を支持した。

しかし、そこまで話してからウイリアムは返事を返した。
失笑。

「言葉が多いな、わが友よ。そうやって、自分にも他人にも言い訳を重ねなければ、自らの手で剣を取って戦うこともできなくなったのであるか」

応じる声はなかった。

両者は、ただ上空で再び激突を起す。

あまりの脚力に、足場にした木が砕けた。

空中で初撃が衝突し、その後2人がそのまま真下に落下していく。しかし、彼らは落下の間にも、武器の衝突により生まれた力で体を回転させ、様々な角度から次々に斬撃を繰り出し、剣を交わらせていた。

再び拮抗。そして、それが終わる瞬間は、着地のその時。

ドバツ！ という轟音が炸裂するとともに、両者の体が爆心地から50メートルほど吹き飛ぶ。

既に、戦闘の余波で多くの騎士が倒れた場所から、彼らは移動していた。ウイリアムの背は、すでに自らが退路を断つために土砂崩れを起こした、幅数百メートルに広がるその斜面に触れそうになっている。

ウイリアムはこれ以上下がることはできない。物理的な意味ではなく、この先に騎士団長を行かせるという事は、第三王女とつながるルートを明け渡すことと同義であるからだ。

ウイリアムは一度その大剣を掴み直し、新たに取り付けた霊装に軽く触れてその調子を確かめると、これからの衝突に備え、体重を前に傾けた。

「怒れる理由は第三王女か。戦場で多くの人間を『敵』と定めて屠ってきた我々が、今更そんな理由で剣を取って何になる！」

「軽いな、上っ面の言葉では軽すぎるのである！」

「ふん。戦場に立つ者でも、降伏勧告に従うような人物まで斬るのは気に食わんとでも言うつもりか！ 貴様らしいと言えばそれまでだな！」

両者の剣が衝突し、爆音と衝撃をまき散らす。

(……恐らくこの傭兵は軍事的、政治的な理由など考えずに戦っている。第三王女が一国の姫であるか否かすら、こいつの前では意味をなさない)

その涙の理由を変える者。

掲げる魔法名の通り、冷たい涙を暖かい涙へと変換することこそが、武器を取る理由なのだから。

両者の斬撃が、一時的に止んだ。互いの目が、互いの武器を見据える。

ウィリアムが握るのは、霊装アスカロン。16世紀末の作家が、聖ジョージの伝説を元に紡いだ物語に登場する聖剣を元に、本物の魔術師が手掛けた『理論上では全長50フィート級の悪竜を殺す性能を持つ』剣。

各々の部位は角度や厚みが調整され、斧、スパイク、ワイヤーまで備え付けられたそれらは、全て竜の鱗、肉、骨、筋、腱、牙、爪、翼、脂肪、内臓、血管、神経……といった部位を切り裂く。正真正銘、『これ1本で悪竜の全てを切断する』ための剣である。

一方で、騎士団長の手にあるのは霊装フルンテイング。彼の場合、『返り血』を『天使の力』と対応させ、大量に圧縮封入することで破壊力を増している。また、カーテナとフルンテイングが英国を象徴する剣であることから、イギリス国内において『力を制御する能力』を増強させているのだ。

(並の聖人を上回る天使の力をどのように運用しているかと思っただが……剣と国家に命を預けるとは、相変わらず騎士のセオリーに忠実な男である)

しかし、騎士団長の次の攻撃は異なっていた。

「惜しい。一生で一度の勝負なら、万全の貴様と戦って見たかったよ」

騎士団長は一步も動かずにその場で剣を振るった。しかし、明らかに剣の間合いから外れた場所に立っているはずの左肩を、5センチほど斬撃が切り裂いた。

10メートルほどのその間合いを、騎士団長が動いた形跡はない。再び赤黒い剣が振るわれる。

不可視の斬撃に対して、しかしウィリアムは素早く動いた。身をかがめ、後ろへと飛び、腕を振るって剣でそれを受け止める。

『射程距離』に細工を施したところで、安易に私を殺せるとは思っていないのであるな」

「……これも早々に勘付かれたか。相変わらず、憎らしいほど必要なこと以外は口にしない男だ」

剣の個性、そのパターン。

騎士団長が扱っているのは、それだ。

フランスの聖剣デュランダルやエクスカリバーなど、何でも切り裂く『切断威力』。

絶大な破壊力を生み出す『武器重量』。

ケルトのアロンダイトなど、絶対に破壊されない『耐久硬度』。

何物にも追いつけない『移動速度』。

アスカロンやバルムンクなど、特定の怪物を殺す性質を持つ『専門用途』。

北欧のテイルヴィングやフレイの剣など、ひとりでに動いて急所へ向かう『的確精度』。

そして……主神グングニルの槍や雷神ミョルニルの槌、空飛ぶ剣フラガラツハ、貫通の槍ブリューナクなど、武器の間合いというものを無視する『射程距離』。

そして、それを可能にするものは……

「ふっ！」

再び真横からこめかみにむけられた攻撃を、ウィリアムはアスカロンで弾き飛ばした。それは、糸鋸のようにはられたワイヤーに当たり、手近な木の幹に突き刺さる。わずか数ミリの、赤黒い錆のような刃だ。

「剣の欠片だよ」

あつさりど、騎士団長はトリックを開示した。

優れた武器の中には、欠片となってもその力を誇示するものがある。実際、シャルルマーニュの王が所持していた剣ジヨワユーズには、聖槍の破片がその柄頭に組み込まれていた。

剣の間合いを無視したその武器に対し、ウィリアムのアスカロンが輝きを放った。

様々な色に変化するそれは、『どこの武器を使うのか』によってその輝きを変える。斧のような刃なら赤、剃刀のような刃なら青、缶切り上のスパイクならば緑、糸鋸的なワイヤーならば黄……といったよう

に、その時使用する刃だけに魔力を集中させ、その瞬間に最大限の破壊力を持つようにリアルタイムで調整がされるのである。

そして、その柄には常に青色の輝きを放つものがあった。駿斗が渡した、騎士団長にも用途不明な霊装だ。恐らくは、駿斗とウィリアムにしか分からないように細工がなされているのであろう。

「可能なら、使わずに済ませられたらと思っただのであるがな」

「らしくないな。悪竜が示すものに遠慮でもしているのか」

十字教において、悪竜が示す意味は1つではない。

例えば、異国、異民族からの侵攻勢力。

そして、悪に染まった墮天使。

「……ウィリアム様と騎士団長の戦闘が始まったようですね」

彼らは音速に匹敵する速さでその場を後にしたものの、ある程度の距離で一度立ち止まった。すると、後ろからは爆音が響いていることによく気が付く。いくら天使の力で聴力を強化しようが、音より速く動いている以上、耳に届かない音波は聞こえないのであった。

「勝てる見込みは？」

「一筋縄ではいかない相手でしょうが、ウィリアム様なら」

ジミーが彼に向ける信頼と尊敬心は、並大抵のものではなさそうだった。

「お前らの予定は？」

『『必要悪の教会』の魔術師たちと合流します』

「じゃあ、途中までは一緒か。とりあえず、当麻と連絡を取るかな……なんにしても、インデックスをどうにかして取り戻さないと」

彼女はクーデター発生時にキャーリサや騎士団長と行動を共にしていたはずだ。

しかし、そのために必要なのは恐らく……その護衛をしている騎士たちを蹴散らすことであらう。

「俺単独で倒してもいいけどなあ……下手に戦闘に入ることではできないし」

戦闘になれば、一番危険が及ぶのはインデックス本人だ。彼女も
スベルインターセプト
強制詠唱などの対魔術師の技術は持っているものの、詠唱よりも武
器による戦闘をメインにした騎士たち、それも多くの人間が相手では
あまり護身もできないだろう。そもそも、あの場所にいた時点で、そ
のようなことに対しては完全に対策がとられていると考えるべきだ。
「じゃあ……とりあえず、サウザンズアイ幻想千眼」

駿斗が、懐から取り出した幻想核杖に天使の力を通す。術式が発
動し、駿斗の目に大量の情報が流れ込んできた。
イマジン・コアロッド

探すのは、インデックスの魔力と、当麻の幻想殺しだ。その距離を
はかり、まずは近い方から優先する。
イマジンブレイカー

(……やはり、近いのはインデックスか)

しかし、馬車の形をした霊装に入れられている彼女の近くには、騎
士たちが警戒のためについているようだ。まあ、彼女の10万300
0冊の知識を用いれば、この形成が逆転する可能性もあるのだから、
無理もないであろう。

「あつちだ。行けるか」

「当然です」

ジミーを引き連れ、彼らは再び高速で移動する。

すると、その途中でそう言えば、と駿斗が切り出した。

「なあ、どうしてお前らはイギリスに来たんだ？ とりあえず、敵意が
なさそうだったから、協力してもらっているけど」

「ウィリアム様は『騒乱の元凶を絶つ』とおっしゃいました」

ジミーは、そう話し始めた。

その通りである。彼らは『騒乱の元凶』だった当麻の右手と駿斗の
肉体を粉碎するために、学園都市に乗り込んできたのだから。

「しかし、親玉があなたたちを狙うということこそが元凶であり、あな
たたちは真の元凶に寄り添う付属品に過ぎないと判断されたのです」
「真の元凶……？」

駿斗が眉をひそめて尋ね返すと、ジミーは説明してくれた。

『神の右席』は、駿斗やイギリス清教が予測しているように『前方』『左
方』『後方』『右方』の4人が存在し、そしてそれぞれが『神の火・風・
ウリエル

黄』『ラファエル神の薬・土・緑』『ガブリエル神の力・水・青』『ミカエル神如き者・火・赤』に対応している。

そして、残るただ1人の男こそが、ローマ正教とロシア成教を束ねている。その男の名は『右方のファイアンマ』。

ファイアンマは、自分の野望のために『インデックス禁書目録』の知識と当麻の右腕『イマジンブレイカー幻想殺し』、そして駿斗の肉体『イマジンクリエイト幻想創造』を狙っているらしい。

しかしその前にクーデターが発生してしまったため、ウイリアムたちはファイアンマの行動に歯止めをかけるために、この諍いに参戦してきた。

「じゃあ、とりあえず、目的は一致しているということで大丈夫なんだな。じゃあ、まずはインデックスのところまでよろしく頼むぜ」

「ええ。必ずや、この騒乱を収めましょう」

ジミーが自身の霊装に天使の力を通し、そして駿斗は敵を重力で引き寄せた。

不死鳥とソーロム

貨物列車に忍び込んだら、当麻がそこで遭遇したのは両手両足を拘束された少女だった。

駿斗やインデックスがこの光景を見たら、「いつも通りの展開だ」と思われてしまいそうであるが（というか実際に同じことを、先ほどレッサーを見たオルソラに言われてしまっているのだが）、とにかく遭遇してしまったのだから仕方がない。

「……こんなゴツイのはめられるなんて、お前一体何をやったんだ？」
「いやあ、悪いことなんて何もしてないと思うんだけどねー」

彼女は、悪いことをしたから、つまりクーデターに協力したために『清教派』に捕らえられたのではない。カーテンを手にしたキヤारीサと『騎士派』は、口封じとして彼女を拘束しているのであった。

「つつか、そっちも似たような境遇じゃないの？ 『騎士派』の不興を買って連行中とか」

「俺はフォークストーンに行くために、この列車にもぐりこんだんだよ」

当麻の台詞も十分に意味深げであったのだが、フロリスは取り合わなかった。『騎士派』の人間でないのであれば問題はないらしい。

「とにかく、ほれ、こいつを外すの手伝えって」

フロリスにはめられている霊装は、彼女の行動を指定された2メートル四方に制限するものだ。しかし、肝心の鍵はその外にある壁にかけるられている。

その鍵に手を伸ばしかけた当麻は、ふと自分の右手を引っ込めた。

「どしたの？」

「いや、俺の右手はイマジンプレイカー幻想殺しと言いましたね。手取り早く言っちゃうと、この鍵が魔術の一品だったら触った途端に砕け散っちゃうわけだ。そうになると、お前の枷を取り外す方法がなくなるという訳なんだ」

と説明した当麻であったが、そこでふと気が付く。

「あれ？ だったら、鍵とか面倒なことしなくていいじゃん。俺の右

手で拘束具を直接壊してしまえばいいんだから——」

その言葉を聞いて慌てたのはフロリスだ。

「は？ え、ちょ、待て待て！ 何をするつもりか知らないけど……ッ！？」

しかし、彼女にかまわず当麻はその足にはめられている拘束具を右手でつかんだ。

バキン、という音と共に、枷が粉々になる。

「ほらな。最初からこうしてりや良かったんだ」

「あ、あ……」

声にならない言葉を上げるフロリスを無視して、当麻は続けて彼女の両手を拘束している霊装を破壊する。

「これでよし、と。はっはー、死ぬまで感謝したまえフロリス君——」

「ちよっ、ぐわー!? そんな雑な方法で枷を壊したら、アンタ……ッ！」

びー、と。

当然のように貨物列車に警報が鳴り響いた。

当麻たちのいる車両の前と後ろから、ざわざわという気配と共に、鎧が鳴るようなガチャガチャという音が近づいてくる。

「ど、どうすんの？ 試合開始10分でどん詰まりですけど！」

「い、いや、諦めるのはまだ早いぞー！」

貨物車両という事もあり、壁は荷物搬入用の巨大なスライドドアとなっていた。当麻は強引に金具を外し、両手を使ってスライドドアをわずかに開ける。

「どこだこの辺は？」

「そろそろフォークストーンに着くんじゃない？」

しかし、外に広がるのは緑色の平原であった。

「飛ぶしかないな」

「バツカじゃないの自殺なら1人でやれ！」

「そうじゃない、もうすぐ川に差し掛かる！ 手袋からワイヤーを出

して橋にひっかければ、あとは水面をクッションにする」

「ちよ、本当に死ぬつつつてんだろオオおおおおお！」

それだけ言うと、当麻はフロリスの腕を強引につかんで飛び降りた。そして同時に、ワイヤーを射出してその先についている鉤爪を橋にひっかける。

水面まではおよそ10メートル弱。この程度なら、学園都市製のワイヤーが切れなければギリギリ行ける、と思っていた当麻であったが、

「その川は水深1メートルないんだよオオおおおおお！」

当麻の目が点になった。

ワイヤーに引っ張られて体が円弧を描き始めるが、ふと上を見上げれば、長弓を手にしている騎士たちさえ、どこか呆気に取られているように見えた。

「だあーもーちくしょうー！」

すると、フロリスがその背中についていた霊装を展開する。蝙蝠の羽のような『翼』を見た当麻は、頬を引きつらせながらこう思った。

えーつと、俺の右手の説明聞いてた？

魔術を使つて速度を落とすつて、なんかものすごく不幸な予感がするなー、と。

駿斗は、インデックスがいるらしき場所に、順調に近づいて行った。

(ここ、どこなんだろうな?)

……目的地を探し出すのを探索術式『幻想千眼』サウザンズアイに任せている上に、例え高い壁が立ちはだかろうと、幅の広い川が行く手を遮ろうと、ジミーも駿斗も魔術であっさりそれぞれを無視して行動できるので、駿斗は自分の場所がだんだん分からなくなってきたりする。

何しろ(あの場所からこの通りを進んできたから……)という考えができないのだ。自分の場所を確かめるには、ケータイのGPS機能が

を使用するか、あるいはもつと探索範囲を広げて出発地のバッキンガム宮殿を確認するしかないのである。力を得たがゆえの弊害であろうか。

とにかく、自分の場所を確認するのは後にして、今はインデックスのことに専念しよう……と駿斗が考えると、ようやく超音速で動いている2人の動きが遅くなってきた。

「そろそろ、インデックスのいる場所に着くな
「はい」

そして、彼らはその先にある金属製の馬車を見つけた。どうやら、あの中にインデックスが拘束されているらしい。

当然ながら、その周辺には人質を監視しつつ護衛するための騎士がいるわけであるが。

「行きましよう」
「おうー」

駿斗とジミーが、一斉に魔術を発動する。

ジミーの縮絨棒から炎が噴き出し、そして駿斗がそこに形を加えた。厳密には、駿斗の持つ『幻想核杖』イマジン・コアロッドの形状が変化したのだ。

形は杖から、小さな樹へ。

『幻想命樹』セファイロト・レブリカ

その名の通り、楽園に生えていて食べたものに無限の命を与える『生命の実』が生っていたとされている、十字教に関わらずとも、誰でも知っている『生命の樹』セファイロトである。

すなわち、本来はあらゆる怪我を治す回復術式なのであるが、莫大な生命力マナを与えるもの、と考えれば、異なる使い方も可能だ。

そう、すなわち、2つが合わさり、永遠の命を持つ炎——不死鳥フェニックスへと変化した。

術者が解除しない限り決して消えることのない炎が、騎士たちを襲う。

しかし、彼らも一流の騎士の集まりでありながら、『全英大陸』によって強化された戦力である。魔術1つで、そう簡単に倒れるような相手ではない。

だから、2人は突撃した。

「インデックスは返してもらおうぞー！」

駿斗が、超音速で金属製の馬車に突撃する。

馬車には魔術的な拘束効果と防御効果が付与されていたため、そんなに簡単に壊されるものではなかったが、駿斗はそのまま馬車の側面に張り付いた。

「敵襲だー！」

騎士の中の誰かがそう叫び、慌てて剣を引き抜く。しかし、その後からジミーが縮絨棒を叩き込むと、その体制を崩した。そのチャンスを逃さず、駿斗は素早く魔方陣を展開する。その判断は普通に見えるが、唯一『数』だけが異常だった。

辺り一面の地面を埋め尽くさんとばかり、合計で100を超える数の魔方陣が、わずか半径20メートルほどの中に刻まれる。

ところどころで重なっているところもあるが、それすらも駿斗にとっては織り込み済み。むしろ、記号が重なったことによる追加の増強効果すら発生し、立て続けに騎士たちに攻撃が襲い掛かった。そして、その間に魔術の馬車が空中に浮く。

『飛行する』魔術は即座にペテロ系統の撃墜術式で地面に叩き付けられてしまうので、『衝撃で宙に飛ばされる』という方法を選んだために多少乱暴な飛翔……否、発射になってしまったが、それでもしばらく距離を稼ぐと、地面から簡易なゴーレムを発生させて、その腕で馬車を掴んで地面に降ろす。

馬車が無事に地面に着地したのを確認すると、その上に乗っていた駿斗とジミーが地面に飛び降りた。

「インデックスー！」

駿斗は魔術的な鍵に無理矢理魔力を流し込み、循環不全でその霊装を完全に破壊すると、その中をのぞき込む。すると、そこには少女が眠らされた状態で押し込められていた。

「魔導図書館の回収は、これで完了ですね」

「あ、ああ。良かった……」

とりあえずこの少女が無事であったことに、大きく安堵の息を吐く

駿斗。当麻に連絡しようか、とも考えたが、彼の場合、隠れていた時にうっかり携帯電話が鳴っちゃいました、なんてことになりそうだしヤレにならないので、とりあえず報告は後回しにすることにしました。「しかし、インテックスの救出ができて、気は抜けないな……」

「ええ。それに、ウイリアム様との戦いで騎士団長が敗れば、第二王女もそれに対して『対処』するでしょうしね」

対処？ と駿斗がジミーの言葉に尋ね返すと、彼は気軽な調子でとんでもないことを言った。

『騎士派』のトップが敗れるような事態ともなれば、クーデターに参加している騎士たちの間でも、その信念に揺らぐ者が出てくるはずで、そのような兵士を、キヤーリサが敵に寝返る前に『粛清』する可能性はあります」

「なっ……!」

粛清。

その言葉の意味から考えて、そういうことなのだろう。

「そもそも、キヤーリサはここまでしてクーデターをする必要があるのか……?」

駿斗は、最悪の想像をした後に、ふとそんな疑問を漏らした。

確かに今の選定剣を上回る力を持つ『カーテナカーテナ||オリジナル』は強力な戦力だ。仮に、『神の右席』が直接ロンドンへ乗り込んできても、1人で十分に対処できる可能性はあるだろう。実際、配下の人間に手負いであるとはいえ、ウイリアム||オルウエルの対処を任せているほどなのだから。

しかし、後方のアックアを除く『神の右席』は今まで、直接的な『破壊』をあまりしてこなかった。テツラは『C文書』を用いて世界的な学園都市反対運動を展開させたし、ヴェントも学園都市を襲撃はしたものの、直接破壊したのはゲートくらいなもので、他は『天罰』による精神的な攻撃を主としていたのだ。

つまり、分かりやすい力を手に入れたところで、最後の『神の右席』に対処できるのかどうかはまた別なのだ。

それに『全英大陸』はあくまでも『イギリス国内』において力を増

強するもの。攻めてくる敵には使用できても、こちらから迎え撃つために国外に出ることはできない。

「カーテナの機能制限解除装置でも発明しているのか……それも、合わせて確認したいところではあるが」

「そんな余裕はもらえないようにで」

通信でも聞きつけたのか、さらに騎士たちが駿斗とジミーの周りを取り囲もうとしている。2人は馬車に背を向けると、天使の力を自らの霊装に集中させた。

轟！ と、四方八方から騎士団長の『射程距離』の長距離斬撃がウイリアムを襲う。

対し、ウイリアムは右手一本でその大剣を振り上げ、手首を返してその背の部分を前面に出した。

その光は赤。それが示すのは斧。

それが地面に叩き付けられると、ドッ！ と大地そのものが震動した。その絶大な破壊力で、半径20メートルほどの領域が騎士団長の立っている場所も巻き込んで陥没したのだ。

「なっ」

騎士団長は必殺の攻撃を外されたからか、あるいは足場が不安定になったからか、その動きがわずかに鈍った。そして、その一瞬を突いて傭兵は屈めていたその両足を大きく伸ばし、一気に敵の懐へと飛び込もうとする。

アスカロンの色は、赤から青へ。それが示すのは、剃刀のような薄い刃だ。

『射程距離』の長い短いなど関係ない。その程度の小細工で勝敗が翻弄されるような相手ではない。

青く光る刃が騎士団長の胴体へと迫る。

しかし、

「扱える『パターン』は『射程距離』だけだと言った覚えはないぞ、傭

兵崩れ」

消えた。

騎士団長が、傭兵の動体視力をもつてしても追いつけない速度で動いたのだ。

「移動速度」

次の声は真後ろから聞こえた。

無理な体勢でありながらも、ウィリアムはなんとか剣を動かして敵の攻撃を相殺する。そして、体を回転させて追撃を放ったが、

「武器重量」

予想外の衝撃に、傭兵がバランスを崩す。

剣の『パターン』……それらすべてを手中に収めた、武器としての究極の形。

その斬撃を避けることはできない。『射程距離』は剣の間合いを無視し、『的確精度』は確実に急所を突く。そして、その『移動速度』からは逃れることができない。

その斬撃を受け止めることはできない。『切断威力』は敵の武器さえも切り裂き、『武器重量』は受け止めきれない威力をもたらす。そして、どんな防御策を用いようが『専門用途』に合わせた攻撃が放たれる。

その斬撃を壊すことはできない。絶大な『耐久硬度』は、どんな名刀を使っても傷一つ付けることができない。

「剣を捨て、英国より立ち去るか。剣と共に、英国の土の一部となるか」

その長大な剣の先を、騎士団長はウィリアムに突きつける。

「選ばせてやる。どちらが望みだ」

「……選ぶ前に、尋ねておくのである」

ウィリアムが放った言葉に、騎士団長は眉をひそめた。

「貴様は本当に、第二王女を擁護して第三王女を斬れば、この国が救われるとも思っているのであるか」

多くのことを語らないこの傭兵の言葉に、意味のないものはない。

しかし、『軍事』を選んだ騎士団長が揺らぐことはなかった。最良と
はいいがたいことは分かっている。

「いずれかの陣営につくしかあるまい。この国にとって、最も高い利
益を生み出す陣営に、だ」

そうか、とウイリアムは血まみれの手でアスカロンの柄を握り直し
た。その柄から青い輝きが放たれていた。

そして、自身の回答をした。

「選択は次の2つ——貴様を斬るか斬らぬか、の問題である」

「どうあっても退かぬようだな」

「語ることに、意味などない」

しかし、騎士団長の意志もまた、変わることはない。『頭脳』『軍事』
『人徳』——イギリスのためにそのどれかを選ぶとなれば、この状況で
の選択肢は1つに決まっているからだ。

「そうやって、要らぬ台詞を重ねれば、正義という言葉で己の蛮行の溝
を埋められるとでも思ったのであるか」

「かくいう貴様は、この期に及んでまだ語らぬか」

「我が理由は、すでに示されているのである」

その言葉に、騎士団長は思わず聞き返した。

「なに？」

「ふん。それこそ、語る必要もないのである」

勝算など不要。

傭兵の鋭い眼光を見つめながら、騎士団長は究極の一撃を放つた
に、一度剣を上に掲げた。

「ならば——退かぬのなら、ここで死ね」

ウイリアムは、敵の懐へ入り込むために駆けだした。

騎士団長は、必殺の一撃を放つたためにその足を前に踏み出した。

不可視の長大な斬撃と、竜殺しの聖剣が交わる。そして、

ゴツキイイーン！ と。

必殺であるはずの騎士団長の攻撃が相殺された。

（鋭く、重く、速く、長射程の必殺。……本当にそんなものが放てるのなら、左肩を抉られる程度で終わる訳がないのである！）
そう。

今までも、複数の『パターン』を同時に扱ったことはなかった。そして、真の戦場において戦力の出し惜しみをする理由など存在しない。

単純に、そんな都合の良い必殺技など存在しなかったというだけのこと。『射程距離』だけを優先した一撃なら、傭兵の手でも受け止めることは可能！

「おおおおおおおおおおおお！」

ついに、ウィリアムが騎士団長をその間合いに捉えた。

『移動速度』！』

「甘い」

騎士団長の手は高速で動き、防御は間に合った。

だが、そこまで。そこに重さも硬さも存在しない。それが、わずかにその体をのけぞらせた。

一瞬の隙。しかし、ウィリアムにとっては十分な時間。

アスカロンが白い閃光を放つ。『近すぎる間合いではその威力が落ちてしまう』という大剣の弱点を補う、悪竜の太い神経を抉りだすために、剣の根元近くにあるスパイクが、騎士団長の右胸へと迫る。

『耐久硬度』だ！』

「遅い」

全ては。

軍事的クーデターに翻弄され、咎なく処刑されようとしていた第三王女を救うため。

爆音が野原に響いた。

それまで音速を超える速さで動いていた彼らは、ピタリと静止した。

ウィリアムの持つアスカロン、その杭のような巨大なスパイクは、確かに騎士団長の防御をかくぐってその右胸へと突き立てられていた。

1人が苦悶の表情を浮かべ、もう1人は超然とした様子をしていく。
る。

ただし。

苦悶の表情を浮かべているのがウイリアムで、
超然としているのが騎士団長だった。

そのスパイクには、騎士団長でも確実に行動不能に陥らせる程度の
威力は会ったはずだ。にもかかわらず、実際には傷一つない。
まるでスポンジのような不自然な感触に、ウイリアムの不審な表情
が浮かぶ。

「ソーロルムという北欧の戦士を知っているか」

それは、どんな切れ味を誇る名剣をも、何一つ斬れない鈍^{なまくら}へと変え
てしまう魔術を使ったとされる剣士。

今騎士団長が使う術式は、彼が認識した『武器』そのものの攻撃力
を科学・魔術問わずにゼロへとしてしまうのだ。実際に、必殺の抜刀
術である『唯閃』は完全に無効化された。

術式の有効時間はおよそ10分。しかし、真の戦場で10分という
のは長すぎる時間だ。

「昔、ドローバーでひどい不意打ちを受けたからな。こういう対策を講
じたくなるものだ」

ウイリアムは、その手で剣を掴まれるよりも先に距離を取ると、
次々の種類の異なる斬撃を放つ。

光の色は赤——悪竜の筋肉を斬るための斧のように分厚い刃。

「ゼロにする」

光の色は青——悪竜の脂肪を切り取るための剃刀のように薄い刃。

「ゼロにする」

光の色は緑——悪竜の鱗をめくるための剣身中ほどにある缶切り
状のスパイク。

「ゼロにする」

光の色は黄——悪竜の内臓を取り出すための剣身に寄り添う糸鋸

状のワイヤー。

「ゼロにする」

光の色は紫——悪竜の骨格を切断するために背側にある巨大な鋸。

「ゼロにする」

光の色は桜——悪竜の歯牙を抜くためのある柄尻に取り付けられたフック上のスパイク。

「ゼロにする」

光の色は白——悪竜の神経を抉りだすためにある背側の根元近くにある接近戦用スパイク。

「それは先ほどゼロにしたぞ！ そろそろ品切れか!？」

騎士団長がアスカロンを素手でつかんだことにより、ウイリアムの動きは完全に止まった。それを確認した騎士の長は、赤黒い長剣を掴み直す。

「終わりだ」

現在ウイリアムは、魔術を充分に使用することができない。『並の聖人』レベルに力が落ちた今では、騎士団長の動きについてこれていたこと自体が驚異的だったのだ。現状で、両者が同等のスピードであるこの勝負においては、肉体制御用の術式に全てを注ぎ込む必要があった。

そして、彼の弟子であるジミーが助太刀に現れることもない。仮に戻ってきたところで、ウイリアムの足手まといになるのがオチであるからだ。

「第三王女と共に、天に上れ」

フルンテイングと呼ぶことのできる範疇に納まっているのかも分からない魔剣を、騎士団長はウイリアムの目の前で振りかぶる。

「……まだ分からぬであるか」

しかし、そこで目の前の傭兵が吐き捨てるように言葉を漏らした。「こんなもの、わざわざ口に出すほどのことでもないだろうに」

ウイリアム＝オルウェルは楽観主義者ではない。むしろ、傭兵として戦場を駆け巡った彼ならば、イギリスに留まり続ける騎士団長よりも、戦争の悲惨さを分かっているはずだ。それならば、騎士団長の選

択肢である『軍事』が、他の『頭脳』や『人徳』と比べて最適であることくらい分かるはず。

だが、この男には芯があった。

騎士団長の視線の先が、アスカロンに取り付けられた盾の紋章を^{エスカッシャ}とらえる。

(まさか)

青地の盾を4つに分け、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北部アイルランド。

そして、緑のドラゴン、ユニコーン、セルキーという3匹の動物が、『王室派』『騎士派』『清教派』。

——その紋章が示すのは、英国という国の完全なる調和。誰を殺して誰を擁立するのではなく。第一王女、第二王女、第三王女、そして女王。彼女たち全員の力を合わせたイギリスを望んでいることを示していた。

武器の正体

ウイリアムの示すものは、冷静に考えれば理想論に過ぎない。しかし、そのことを指摘されても彼は平然としていた。

「上つ面の言葉を重ね、万人に理解してもらおうために用意した『理由』ではない。貴様がさんざん語って聞かせた通り、元よりくだらん傭兵の個人的な感傷である。言葉で分かれとは言わん貴様は貴様が信じられる行いを、ただ無言のままに実行すればそれで良い」

「――、」

奇しくも、ここに来て騎士団長^{ナイトリーダー}は言葉を失った。しかし、それで刃が止まることもなかった。

互いの理由は提示され、それでもやることは変わらない。

どちらかが負け、どちらかが勝つ。

ならば、ウイリアムⅡオルウエルという強敵が武器を取り戻すよりも先に、ソーロルムの術式の効果が持続する10分間のうちに決着をつけなければならぬ。

「決着、つけさせてもらうぞ」

「そうであるな」

率直な返答に騎士団長が怪訝な表情をした後に、動きがあった。そして、ついに騎士団長がその体制を崩した。

なぜなら、ウイリアムが全力でアスカロンの柄を手前に引くと、それが不意にすっぽ抜けたからだ。

（っ？ 自壊させたか）

そう思った騎士団長であるが、それは正しくない。

ウイリアムは、その大剣の中に納まっていた1メートル以上の刃、最後の名剣を引き抜いたからだ。

アスカロンという霊装は、その柄へ潜り込む鋼に寄り添う形で、大剣の中にさらに細い剣を収納していた。さらに、ウイリアムはその巨躯で剣を隠すように、一度騎士団長にその背を向ける。そして、その

勢いのまま高速で身を捻り、騎士団長の胸板を確かに切り裂いた。

「っ!？」

初めて騎士団長の顔色が変わった。しかし、この場面では彼の力不足とも呼べたかもしれない。いや、ウィリアムが一枚上手だったと言ふべきか。

そう。北欧神話に登場するソーロルムを殺したのは、袖の中から飛び出した隠し刃だったのだから。

その傷口の痛みが。

ウィリアムⅡオルウエルの正当性を証明するように思えて、騎士団長は思わず咆哮した。

「おおおおおおおおおおおおおッ!」

叫んだのは、騎士団長だけではない。ウィリアムもまた、最後の名剣を手にして大地を駆ける。しかし、その体は青い何かを纏っていた。

(あれは……!?)

その輝きは、剣の柄——否、そこに取り付けられた小さな霊装から発生していた。駿斗が傭兵に託した霊装だ。

その直後、傭兵の動きが急加速した。

(馬鹿な!)

それは、騎士団長も今までに見たことのある術式だった。そう、水を得意とするウィリアムⅡオルウエルの、滑るような高速移動術式。

駿斗が託したその霊装は、わずかな間だけ、傭兵の『水』の力を取り戻す力を有していたのだ。

即席の霊装であるがために、すでにそれには亀裂が少しずつ生じ始めている。しかし、一時的に力を取り戻した彼は続けて、そのまま彼に肉迫した。

『パターン』など、もはや扱う余裕すらなかった。

「っ!」

ウィリアムの斬撃をとっさに剣で防御した騎士団長は、それでも冷静に一度鏢迫り合いの後に剣の力を小爆発させ、再び距離を取る。これなら、わずかにではあるが余裕はできる。

彼には2つの選択肢があった。

赤黒い長剣の攻撃力で、剣ごとウィリアムの肉体を切断するか。

ソーロルムの術式を使って、ウィリアムの剣の攻撃力をゼロにするか。

（剣を潰す。抵抗の象徴たる武器を粉碎してから傭兵を斬らねば『勝利』にならない！）

即断したその次の瞬間には、ウィリアムは再び騎士団長へと迫っている。だが、ソーロルムの術式ならば、最悪刺し違えても勝ちを掴むことはできる。

「ゼロにす——ッ!!」

言いかけたその口が止まる。なぜなら、ウィリアムの手の中に、刃はなかったからだ。ソーロルムの術式では、認識していない武器に干渉することはできない。

しかし、すぐに気が付いた。柄からきらりと光る細いワイヤーのようなものが伸びている。つまり、ウィリアムはそれでソーロルムの術式をやり過ぎた後に、ワイヤーを巻き取って柄に刃を再接続し、そのまま二撃目を放つつもりなのだ。

（気付いてしまえばそれまでだー！）

騎士団長は再び視線の先を移そうとするが、その目に映るのは傭兵の体のみ。すなわち、再び彼は身を捻り、その巨躯で己の武器を隠したのだった。

（同じ手を喰らうかー！）

その手から繰り出される武器を認識するために、その場所を睨みつけ——しかし、そこからは何も握られていない右手が現れた。

（持ち替えた!?）

ならば、左手か。

時間差攻撃に対し、騎士団長はもはや刺し違えるのではなく、ソーロルムの術式のことだけを考えていた。あの霊装も、この攻撃の後に使用不可能になることは間違いない。ならば、敵は武器さえ失えば、攻撃手段をなくすことになるからだ。

だが、さらにそこで動きがあった。

ウィリアムの持つ剣の柄から出ているワイヤー。厳密にはマイクロサイズのチューブの内側から、樹脂の液体のようなものが噴出している。それは水と共に1つの形を成した。

武器の長さは3メートル半から5メートルへ。

傭兵が最も愛用していた武器。原始的な棍棒^{メイス}へと。

「ッ!!」

(間に合うか)

これが、最後の一撃。

凌ぎきれば騎士団長が勝利し、押し切ればウィリアムが勝利する。目前に迫ったメイスへと、騎士団長はその意識を集中させた。

(ゼロにするー)

傭兵崩れは、全身の力を込めて己の武器を振り下ろした。

騎士の長は、防御を考えずに赤黒い長剣を振るって応じた。

ドッ！ という、人肉を潰す嫌な轟音が、辺り一帯に響き渡った。

その時。

土壇場で、騎士団長の術式は効果を発揮していた。

ウィリアムⅡオルウエルの握るメイスは攻撃力をゼロにされ、たとえ『聖人』の持つスピードとパワーをもつてしても、騎士団長に傷一つ与えることはできない状態にあった。

闇の中で、静止している2人の男の勝敗は明らかだった。

「……ふん」

最後の勝負で『切断威力』を選択した彼が、先に口を開いた。

「全く、つまらん結果だな」

「……、」

傭兵は騎士団長の言葉に答えない。

そして、騎士団長の体が地面に倒れた。

メイスではない。剣の柄にある、射出した機構の一部としてわずかに飛び出している小さな留め金が、その首元にめり込んでいたのだ。

ソーロルムの術式は、あくまでも『認識した武器』に対して効果を

発揮するものだ。しかし、最後の名剣、即席のメイス、という立て続けに現れた新たな武器に対して集中していた騎士団長は、1つの可能性に気が付かなかつた。

小さな留め金に、莫大な天使の力が流れ込んでいることに。その留め金に、わずかに水が纏っていることに。

ピシ、と小さな音を立てて、駿斗の霊装が砕けた。

「貴様と別れて10年……さんざん、己を鍛えてきたと……思っていたが、結局はあの時のドーバーと同じく、不意打ちで決まった、か……」

騎士団長の赤黒い長剣は、ウィリアムの一撃を受けて軌道がそれ、そのまますっぽ抜けて離れた場所の地面に落ちていた。

「それに、しても……騎士も……顔負けの、気障な男だ……。よもや、その三派閥四文化の調和を示す……紋章の中に、私の名まで加えるとは……」

決着は、ついた。

「……思えば、昔から……貴様はそういう男だったよ……」

その言葉を最後に、騎士団長の体は地面に倒れた。死んだのではない。日本刀の峰打ちと同様に、首を討たれて気絶したのだ。

「所詮はあさましき傭兵のごろつき。お堅い騎士に比べて自由奔放に戦う身ではあるが」

たった1人で、傭兵はぼつりと呟いた。

「……あいにくと、古き友を斬る刃までは持ち合わせがないのである」
彼にしては珍しい、無駄口だった。

上条当麻はフォークストーンに到着した。

川の水でびつちよびちよになった彼はガチガチと身を震わせているが、今はそんなことに不満を漏らしている余裕はなかった。駿斗がいれば、すぐに水を蒸発させたうえで火を起こして暖を取ることもできるのであるが、そんなことを考えることすらしなかった。

（くそ、ユーロトンネルのターミナルってのはどっちにあるんだ!?

インデックスがそこから運び出されていなければいいけど……あるいは、もしかしたら駿斗がもう救出してくれているかもしれない）
しかし、電話をかけても駿斗の性格を考えると、きつちりケータイの着信音どころかバイブレーションまで切つてあるだろうな、と考え、当麻はポケットにある自分の携帯電話から意識を外した。こんな状況なら、むしろ親友は探知術式で自分の右手から位置を割り出してくるに違いないからだ。

とりあえず、途中で協力してくれそうな人間を……と思ったら、川に落ちた直後に第三王女ヴィリアンと遭遇し、そこから行動を共にしたらさらに新生天草式と合流することができた。どうやらアニエーゼから『上条当麻たちがフォークストーンにいる』という情報を受けていたらしく、水上レスキュー機で現れたことには助かった。……ちなみに、フロリスは天草式を見るなり『だつ、騙しやがったなこの野郎！』と絶叫したが、当麻本人はその理由がさっぱり分かってない。
その後、当麻はインデックスを救出しているであろう駿斗と速やかに合流するために、今は一人で駆け回り、天草式はレスキュー機で一度神裂と共に退却した。

ともあれ、今の彼は1人である。

「……………」

しかし、そこで何かの音が彼の耳に届いた。

思わず両手を構える彼であったが、暗闇の向こうには何の光も見えない。

（落ち着け……駿斗が普段やっていることと同じように）

まずは、現状把握から。

そう考えて、ゆつくりと慎重に音源へ向かって、舗装された道を歩く。しかし、ある地点から地面に亀裂が走ったり、あるいはアスファルトの下から黒い土か掘り返されているような状況になっていた。

戦闘の痕。

そのことに気が付いた当麻が次に見たのは、戦場だった。

打ち合う刃と刃に、鋼の鎧と共に砕ける火花。

10メートルほど先にある、カンテラが外に付けられた壊れかけた

馬車は、4つある車輪の1つが壊れていて、不自然に傾いていた。

その先で起きているのは、戦闘……というよりは、蹂躪に近かった。なぜなら、3メートル以上の武器を持つ1人の男が、周囲に騎士たちを次々と一方的になぎ倒しているだけであるからだ。

屈強な肉體。

青系の装束。

巨大な武器。

それらは、いつかの戦闘を思い出させた。自分たちは、確かにこの男とその部下から襲撃を受け、そして実際に死の直前にまで追い詰められたのだから。

その元凶は、当麻の顔を見ながらこう言った。

「ふん。忌々しい顔と出会ったものである」

「後方の……アックア!」

思わず叫ぶ当麻。

(生きてたのか!?)

当麻は、駿斗が彼らと遭遇したことを知らない。彼が知っているのは、学園都市の地下街での戦闘で、最後に天草式の『聖人崩し』によって力を暴走させられ、大爆発を起こしたことのみである。

「(……くそ、ただでさえクーデターだの何だのいろいろ大変なのに。なんつー不幸な偶然がおこっちゃうんだよ!)」

「偶然ではなからう」

思わず小さな声で口走った当麻であったが、小さなその声さえも『聖人』の耳には届いていたらしい。

「貴様の目的が長期的にはクーデターの解決、短期的には禁書目録の再回収というなら、我らの行動基準はいくつか合致する点があるのである。もつとも、禁書目録については幻想創造が回収したようであるから、安心しろ」

それだけ言うと、彼は馬車の中身をぞんざいに確認した。すると、そこからは武器だの、よく分からない機械だの、恐らくはクーデターの中で回収したであろうものが、どさどさと出てきた。

「どうやら、イギリス国内の機器や霊装を集め、クーデターの後に起こ

す戦争に備えるつもりであったようだな」

しかし、事態はそれだけに収まらなかった。

「ふん。この調子だと、騎士団長は撃破されたよーだな」

突然の声。

当麻とアックアがそちらを振り返ると、木々の合間から1人の女性がやってくるところだった。赤いドレスをまとったその女性の手には、刃も切つ先もない儀礼剣が握られている。

言うまでもなく、カーテナⅡオリジナルを持った、第二王女キヤーリサだ。

思わず当麻は身構えるが、しかしキヤーリサが見据えているのは隣にいるアックアであった。

「面倒なことをしてくれたいし。露払いがいなくなると、私が自分で雑魚共に対処しなければならなくなるのに」

「面倒事はもう消える。ここでクーデターの幕は下りるのであるからな」

「あまり私をなめるなよ。この手にカーテナⅡオリジナルがあることを忘れたの」

キヤーリサが動くその直前に、アックアは動いた。

キヤーリサを迎撃するためではない。剣を振り下ろそうとしたキヤーリサの斬撃上から、当麻を衝撃波で弾き飛ばすために、手近な巨木を大剣の側面で殴ったのだ。

「これは本来、地球という惑星から英国という領土を切り離し、その内部を管理制御するための儀礼剣だが——その特性を応用すれば、こんなこともできるんだぞ？」

対し、キヤーリサが行ったことは単純。頭上に剣を掲げ、そっけなく振り下ろしたただけだ。しかし、その行動に対して、その直後に起こった現象は常軌を逸していた。

射程はおよそ20メートルほど。カーテナⅡオリジナルの剣の幅の分だけ、何か帯か壁のようなものが展開されている。そして、その

『切断面』から、まるで色を塗る前のプラモデルのような白い物体が発生し、そしてしばし空中に留まった後に落下した。

「さっきの『手慣らし』の時にも感じたけど……霊装それ自体は古臭いものだが、使用者の私が最新の『軍事』知識を基に振るうと、ちよつと毛色が変わるようだし」

3次元の物体（立体）を切断すると、2次元の切断面（平面）が現れる。

ならば、4次元以上の高次元を切断した場合、その切断面は3次元などの1つ低い次元として現れるはずだ。その『切断面』こそが、この白い物体『残骸物質』。実際には、残骸物質は全ての次元において発生しているのであるが、あくまでも人間が感知できるのは『3次元』の範疇に納まっているというだけのこと。

（何だ、これ……？）

当麻も、次元という概念は知っている。いや、現に学園都市の空間移動能力者は1次元という高次元を用いて移動しているし、『外』にいる人よりは『次元』という言葉になれているはずだ。

しかし、当麻は恐怖を感じることにすらなかった。スケールが違いうぎるのだ。ちようど、宇宙が膨張し続けていると言われても、それを具体的に自分の五感で実感している人間がないことと同じように。『全次元切断術式』。私も扱うのはこれが初めてだが……思つて以上に使い勝手は良さそーだし。ただ1つ欠点があるとすれば、あまりにも簡単に決着がつくから、面白みに欠けるといったところか」

そこまでキャーリサが話してから、当麻はようやく驚愕状態から思考能力を取り戻していた。

第二王女キャーリサ。バッキンガム宮殿ではまともに会話することも、一緒に話し合うこともできた相手であるが、現状、もはや話し合いに関する解決は難しそうである。

当麻はちらりとアックアを見た。

信用できるか。

しかし、『騎士派』と戦っていたところを見た以上、共通の敵であることは間違いがなさそうだ。

「おい、時間を稼げるか」

当麻が話しかけると、アツクアは案の定顔をしかめた。

「あのヤベえ切れ味は剣のエッジの部分だけみたいだ。側面切りは普通の鋼だろ。あそこにテメエの刃をぶつけて、一瞬でもいいからよめかせろ。後は俺の右手で霊装をぶっ壊す」

「おー怖い」

キヤーリサは丸つきりふざけた口調で遮った。

「確か、お前の専売特許は幻想殺イマジンプレイカーと呼ばれていたようだな」

彼女は、くるくると回していたカーテナⅡオリジナルを、切っ先の無い平らな先端が地面に向いた状態で止めた。

「ならば、そいつに適した応用技をお見舞いしてやろう」

言つて、その先端を思い切り地面に突き刺す。

直後、ドツ！ という衝撃波と共に半径500メートル級のドーム状の破壊の渦が巻き起こされ、その莫大且つ連続的に放たれる力は当麻の右手でも消しきれず、その体が宙を舞った。

轟！ とジミーの縮絨棒から炎が吹き荒れた。それらが鈍重に見える鎧に身を包んだ『騎士派』の人間たちに襲い掛かる。しかし、その程度で倒れる彼らではない。

その炎が消えても、数名が負傷しただけで戦闘には差支えがなさそうであった。そして、今度は『貫通の槍フリュウナック』や『アロンダイト』などの量産型武器・霊装を携えて迫ってくる。駿斗は念動鎧フォースアーマーを纏うと、身体強化術式と共に次々に騎士たちの鎧を碎きながら手刀を首に当て、そして全員を速やかに無力化した。

魔術的な拘束をかけながら、駿斗は考える。

（そもそも、『騎士派』の連中というのは、全体でどのくらいの規模なんだ？ このまま戦っていても、はつきり言ってキリがないぞ）

しかし、そこで爆音が響いた。

「あちらの方角のようですね」

ジミーが見つめている視線の先を追うと、明らかにその方角から、

何か莫大で異質な力を感じ取ることができた。

(天使長『神の如き者』と同質の天使の力か……)

つまり、その爆発はキヤリーリサが起こしたものであるということだ。

「分かっていることとは思いますが」

「行くわけねえだろ。もつとも、親友はあの爆発に巻き込まれたみたいだが……いっしょにアックアがいることも確認したから、問題ねえよ。一応、標的でない今ならあいつも当麻を救ってくれるだろうし」
多分、な……と、駿斗はそれでも心配そうな表情で、ジミーに言った。

理屈の上では、アックアが当麻を襲うことはないと思っっている。しかし、感情的な面では、未だに納得しきれてはいない。

「それよりも、あんたはどうするんだ。アックアと騎士団長の戦いは、いくら互いの実力が拮抗していても、さすがにもう決着がついているだろ。合流はしないつもりか？」

「必要とあれば合流しますが、無理にする必要もないでしょう」

そもそも、ジミーはウィリアムⅡオルウェルが『神の右席』に入っただから、偶然素養のあった『十二使徒』の一員になったとのことで、そのしばらく前から、彼の下で弟子としてその後ろについて行って回っていたらしい。

しかし、師匠と弟子という関係ではありながらも、特にウィリアムが直接何かを教えたわけではない。どちらかといえば、勝手に学ばせてもらうから、勝手にあなたの後ろを歩かせてくれ、みたいなことをジミーがウィリアムに言ったことが初めだそうだ(もつとも、当時は『十二使徒』ではなかったのだ、おそらくジミーという名前の魔術師ですらなかっただろうが)。

そんなわけで、結構彼らの間はドライだったりする……という。

「ウィリアム様の邪魔をせず、ただ目的達成のために協力をする……いわば、露払いのようなものです」

ジミーは、自分と師匠との関係性をそんな言葉で表現した。

まあ、駿斗としてもつい先日、命を懸けた戦いをしたばかりの相手

と一緒にいるのはあまり良い気分ではないので（といっても、結局ジミーと共に行動しているのは変わりないが）、アックアと一緒にではないのはありがたかったりもするのであるが。

「露払い、ね。イギリス清教から聞いた話では、『十二使徒』というのは『神の右席』と同様に適した『素養』を持つ魔術師を集め、それに最適な魔術的な地位を与えることで、『神の子』の12人の弟子たちの力の一端を分け与えたという話だったと思うが……それにしても、お前は『ローマ正教』よりも『ウイリアム・オルウェル』みたいだな。敬虔な十字教徒ではあるようだが」

駿斗は、ジミーの言葉とそれまでに得た情報から、そんな感想をもらした。

すると、ジミーは頷く。

「そもそも、私は『十二使徒』の中では少々特殊な経緯がありますからね。他の11人とは違って、ローマ正教から見出されて『十二使徒』になったのではなく、たまたまウイリアム様について行った結果、『十二使徒』になったようなものですから」

使徒の師

『神の右席』というのは、以前にリドヴィア・ロレンツエツティが処刑塔で話したように『神の右席』……すなわち神と同等の地位に立つことを目指し、その結果天使や『神の子』の術式を使用するまでに術的素養を上げた、ローマ正教の者たちのことを指す。

しかし、彼らは肉体が『天使』に近いものとなってしまっているために、逆に『人間』が使う術式が扱えなくなってしまうという欠点があった。そのため、ローマ教皇などを一々介することなく、彼らがいっでも扱える『普通』の魔術を使用することが出来る『人間』が必要となった。

だが、単なる魔術師如きを『天使』の側にいつも置くわけにはいかない。したがって、『神』と同一視されている『神の子』の弟子となつた12人、『十二使徒』の素養をあるものを集め、魔術的な地位を与えることによってその力を特別なものとした……。

それが『十二使徒』という存在である。

『硬貨袋』アトリビュートを象徴物とするマタイの座にいる、レビ。

『鋸』を象徴物とするシモンの座にいる、シメオン。

『鍵』を象徴物とするペトロの座にいる、ピエール。

『X字型の十字架』を象徴物とするアンドレの座にいる、アンデレ。

『ホタテ貝』を象徴物とするゼベダイの子ヤコブの座にいる、ジエームス。

『蛇の巻いた杯』を象徴物とするヨハネの座にいる、ヨハン。

『十字架』を象徴物とするフィリポの座にいる、フィリペ。

『ナイフ』を象徴物とするバルトロマイの座にいる、バルテルミ。

『腰帯』を象徴物とするトマスの座にいる、トマ。

『縮絨棒』を象徴物とするアルファイの子ヤコブの座にいる、ジミー。

そして……『槍』を象徴物とするタダイの座にいる、タデー。

『鳩の首飾り』を象徴物とするユダの座にいる、ジユダ。

彼らの名前は『前方のヴェント』『左方のテッラ』『後方のアックア』『右方のフィアンマ』と同じように役職名のようなものであり、その時

に応じて必要な人間がその名をつけられる。

そんな組織であった。

ジミーもまた、『縮絨棒』を象徴物とする小ヤコブの場所を担う存在として『十二使徒』の一員となっている。しかし、彼には1人だけ、決定的な違いがあった。

彼は、元はローマ正教徒ではなかった、という点だ。

『十二使徒』は原則的に以下のような過程で構成メンバーを選んでいた。

まず、バチカン及びローマ市内にある、ローマ正教の教会が運営する孤児院を、ローマ正教の中でも魔術に関わっている重鎮、司教や枢機卿といった人々が、回っていく。これは、表向きにも公式のイベントとして行われる。

その最中に魔術をひそかに発動し、それに気が付いた様子がある子供たちを選び出す。こうすることで、まずは魔術という分野に素養の高い子供たちを洗いだすのだ。

最後にそのような子供たちを何らかのイベントのたびに魔術的な調査を行い、『十二使徒』としての素養があるかどうかを確かめる。そして、最後に『十二使徒』としてローマ教皇だけでなく『神の右席』に仕え続ける覚悟があるかどうかを確かめる試験をする。

もちろん、孤児院育ちでなくても『十二使徒』になった人間は過去にもいるし、そのような場合はその時の『十二使徒』及び『神の右席』、あるいはローマ教皇が推薦するという形になる訳であるが……：そのような例は極めて少ない。

しかし、ジミーはその『例外』にあたる人間だった。

推薦者は『後方のアックア』である。

これは極めて珍しいことであった。後方のアックア、あるいはウイリアム・オルウェルという人間は多くを語ることを好まず、そして他者と行動を共にすることを好むわけでもなかった。

当時から唯一の弟子であったジミーを、特別扱いしているのだ、と当初はローマ正教暗部の誰もが思っていた。そして、実際に尋ねてきた人物もいた。

しかし、ある時左方のテツラが尋ねた時に、このようなやりとりがなされたという。ジミーは、アックアの横でそれを聞いていたので、それをよく覚えている。

『彼が、新しい「十二使徒」の一員ですね』

テツラは、当時からあの場で命を落とすまで、全く性格が変わっていなかった。

『しかし、後方のアックアともあろう男が、「十二使徒」の選定に口を出すなんて珍しいですねー』

テツラから粘つくような笑みと共にそんなことを言われても、アックアの様子は変わることはなかった。そもそも、彼が『処刑』したときからも分かるように、テツラという男はアックアにとつて敵対するほどの人物ではなかった。彼からすれば、その気になればいつでも瞬殺できるような相手ではない。

『やはり「二重聖人」で「後方」を司る男であっても、傭兵崩れのごろつきからすれば、弟子は特別……といったところなのでしょうか』

『貴様がどのような考えを巡らせようが、私がこの男を推薦することには変わらん。私は、私が最適と思った人物をその座に置くことになっただけである』

これ以上の無駄話は不要だ、と言わんばかりにアックアはその場から歩き始め、ジミーもその後について歩いた。

ジミーという男は、それまでウイリアム・オルウェルという男についてあまりよく分かっていなかった。自分を唯一弟子にした理由でさえ、である。多くを語ることを好まない師にいちいち尋ねるのは失礼だと思っていたが、しかし、それでもイギリス清教で洗礼を受けたこともある彼が、なぜローマ正教に改宗して『神の右席』にいるのかよく分からなかった。

自分がローマ正教の支配下、イタリアという国で生まれ育ったからではないかと考えもしたが、その考えもすぐに否定した。彼は、別に『ローマ正教』という枠組みに特にこだわっているわけでもないし、この自分に対してそこまでこだわっているならば、彼が独自に編み出した『傭兵の流儀』(ハンドイズ・ダーティ)と呼ばれる戦闘方法を、もつと丁寧に教えているは

ずだ。しかし、実際には彼の戦闘を後ろや横から見て、見よう見まねで覚えていくのがやつとであった。

しかし、ある時、これだけははっきりと言われた。

『むやみやたらと、語るな』

彼にしては珍しい、いや、初めての『命令』だったと思う。

『貴様が、どのように考えようが私はいっこうにかまわん。ただし、口で語るだけの言葉にどれほどの意味がある』

突き放すように聞こえるが、その口調は淡々としていた。

『貴様はただ、自分の信じるところを成せばよい』

その言葉を受けて、彼は少し変わった。

自分の師が言わんと——否、行動で示そうとしていることが、少しだけ分かった気がするのだ。

もちろん、自分が勝手に推測したものであることには変わりなく、本人に確認も取っていないのであるが、それでも彼は変わることができた。

そこまで行って、始めてジミーは本当の意味でウィリアムⅡオルウエルを『師』と思うことができた。少なくとも、彼はそう考えている。

当麻はキャーリサの爆発に巻き込まれた後に、そこにやってきたアックアに偶然助けられた。

当初は当然ながら警戒したが、それでも彼が戦闘を始めることなく立ち去るのを見届けると、そのまま周辺を適当に移動しはじめ、結果として天草式と無事に合流することに成功した。

しかも、そこに一緒にインデックスを抱えた駿斗までやってきたのだ。ジミーとは、少し前に別れたところである。

3人は、天草式が暫定的な拠点としているレスキュー機の中へ案内され、機体は細い川を無理に利用してプロのパイロットでも青ざめるような勢いで夜空へと飛んだ。

その中で、3人に話しかけてきたのはやはり元教皇代理の建宮斎字

であった。

「第二王女キャーリサは、一足先に空軍のヘリを使ってバッキンガム宮殿の中に入ったようなのよ」

なんか、飛行機の奥の方から、『五和、このチャンスに行けってーっ！』『む、無理です、まだ酒臭いです私！』『気のせいだっ！』何時間前の話をしてんだお前！』などと言う声が聞こえてくる気がするのであるが、建宮が良い感じに通せんぼをしている。

「クーデターを抑えるためには、やはり第二王女をどうにかするしかないのよ。幸い、キャーリサは女教皇様プリエステスと違って、生まれつき肉体そのものが『聖人』のように特別なわけではない」

クーデターの核は、カーテナ^{II}オリジナルただ一つ。したがって、それさえ破壊できれば、キャーリサの持つ力を全てセカンドの方へ奪うこともできるのであるが、それが一番難しい。

しかし、騎士団長はすでに撃破されており、それによって『騎士派』を崩すことはそう難しくなくなっている。だが、残るカーテナ^{II}オリジナルを持つキャーリサという戦力は、それが最もやっかいだ。

「今、キャーリサは『騎士派』によって警備を固められたロンドンの、しかも最重要拠点であるバッキンガム宮殿の中だ。そんな場所だと、たとえキャーリサ本人が出てこなくても、警備をしている『騎士派』の連中の相手をするだけでも拘束されちまう可能性がある。それについては、何かできないか？」

「それについては、ロンドン市内だけなら潜り込むこともできるかもしれないのよ」

ロンドン市内にはいくつもの地下鉄が走っているが、その中にヴィクトリア線というものがある。この電車は、バッキンガム宮殿の真下を通るルートを持っているので、それを利用する。

そもそも、キャーリサがバッキンガム宮殿に入った理由としては、1つの可能性が考えられる。それが、『カーテナ^{II}オリジナルに対応した、万が一の暴走を抑えるための安全装置』なのだという。カーテナ^{II}オリジナルが一度歴史から消失した原因はピューリタン革命にあると言われているらしいのだが、そもそも、本当にカーテナの力が

万全なのであれば、革命などイギリスで起きるはずがない。

「過去に一度、カーテナIIオリジナルは暴走したことがあるのか……」

この施設が『地下鉄』であるのは、その魔術的な仕掛けを施した特殊車両をバツキンガム宮殿の敷地内の『外』に搭載しておくことで『バツキンガム宮殿の敷地内には魔術的な設備がない』という、外交上必要なもの……というか屁理屈を成り立たせるためだ。

「要するに、これからそいつを利用するために行動しているってことか。だけど、その特殊車両にも魔術的なセキュリティが存在するだろうか？」

「特殊車両の存在する枝分かれした路線には、魔術的な隔壁が下りているのよな」

建宮が駿斗の疑問に答えると、当麻は納得したように自分の右手を見つめた。

「だから、俺の右手でそれをぶっ壊すってことか」

「だけど、そこで1つ問題がある訳なのよ」

「？」

それは、第二王女キヤリサを迎えたロンドンが持つ、新しい警備体制のことだ。しかも、これは魔術に対して特に過敏に反応してしまいうらしい。

「……となると、自分の力で魔力を生成できる魔術師はこの作戦に参加できない、ということになるんだが」

「え、それって……」

当麻が『聞き間違いか』というような表情で建宮と神裂を見返すと、建宮だけでなく神裂までもが思わず彼から目を逸らした。だから、駿斗はその説明役に買って出ることにする。

「つまり、魔力がゼロ、あるいは民間人レベルの非常に微弱な人しか、この作戦で戦える人間はいない……ということになるな。当然ながら、戦闘時用に常に魔力や天使デレズマの力を備蓄している俺も無理、ということになる」

え……という感じで駿斗を見る親友に、彼は非常に気まずそうに言った。

「要するに、この作戦に参加するのは当麻とインデックス、そして特殊車両への干渉が可能な『王室派』の人間であるヴィリアン。この3人ってことになるんだよ」

「そんな感じで、選ばれし3人はロンドン西部にある高級住宅街・ケンジントンの辺りから東へと進んで行った。移動手段は、ヴィリアンの運転する車である。当麻は彼女が運転するということに違和感覚えまくりだったのだが、

「……いくら何でも、そこまで箱入りじゃありません……」

というのが、24歳ヴィリアン様の弁だった。

しかし、目指す先である地下鉄は、キャーリサの本拠地であるバツキンガム宮殿の間近だ。もつとも、これに関しては、ロンドン市内に設置されている数十万台の防犯カメラが機能していないことが唯一の幸いだろう。これは、キャーリサが市内の主要警備会社3社に無理矢理命令したらしい。

「まあ、いちいちここそこ動くよりは、いつそのこと堂々と出歩ける方がいいんだろ。魔術で簡単に誤魔化せるとしても、結局は手間がかかることには変わらないんだしな。それに、この方が《騎士派》に対してのアピールにもなる」

魔術師というものは、一般の人間たちに悟られないように行動を起す。しかし、それすらも破っているということは、それだけで味方の士気を高めることにつながるのだ。

「でも、こんな風に誰もいない街でエンジン音を鳴らして車で進んだりしたら、『騎士派』の連中にバレないもんかな？」

「大丈夫だよ」

そう答えたのは、後部座席に座っているインデックスだ。

現在『騎士派』は魔術を使って警戒に当たっている。体の五感に頼らず、術式で五感を増強した魔術的な警備網である。しかし、禁書目録の手にかければ、魔術的に逆手にとって、目の前を通過しても大丈夫だったりするのだ。

しかし、当麻はひとつ気になったことがあった。

「ちよつと待ってインデックス、お前どうして今の『騎士派』の魔術を

知っているんだ？」

「え？ だってそっちのビルの屋上にいるから」

うわっ?! と慌てて当麻が彼女の指さす先を確認すると、確かにそこには黒い人影があった。しかし、銀色の鎧を着たシルエットは彼らに気が付かないまま別のビルへ飛び移って消えてしまった。

現在、魔術を使用できない軍や警察も『騎士派』は掌握しているものの、彼らは民間人の対応をさせているようだ。実際、訳の分からない霊装を突きつけたところで、民衆の間に広がるのは『恐怖』ではなく『困惑』になるだろう。彼らに対しては、銃口を突きつけた方が手っ取り早いのだ。

(しかし……)

当麻は、窓の外から視線を横でハンドルを握っているヴィリアンへ移した。いかにも『お姫様』という言葉が似合いそうなこの女性は、当麻が今まで見たことがないタイプの女性だったのだ。

と、彼女が当麻の視線に気が付いた。

「いかがなさいましたか？」

「い、いや……そういえば、魔力を練ることができないヤツじゃないと、キャーリサたちの感知にひっかかるって話だったけど」

「え、ええ」

ヴィリアンは気まずそうに答えた。

彼女曰く、王家の物として必要な教養であっても、武力に応用可能な知識や技術を学ぶことに抵抗があるらしい。そのため、彼女の技量は『すでに発動している霊装に触れて操作する』程度のものでしかないようだ。

したがって、今回の作戦にあたって、バツキングム宮殿側からも一般の使用人や料理人、庭師などが地下鉄トンネルに向かっているらしい。クーデター下において直接的な戦力を提供できないことに、どうやらヴィリアンは負い目を感じているようだ。

なんだか暗い雰囲気になってしまった車内を変えるために、当麻は慌てて話題を変える。

「しっかし……一口に裏通りって言っても、やっぱり学園都市とは違う

もんな」

「とうま。裏路地の違いが分かる男つて、別に何の自慢にもならないかも」

別に自慢してるわけじゃねえよ、と当麻は返事をした。

それから話は『キヤーリサー人を倒したところで、本当にイギリス全土に広まってしまったクーデターが収まるのか』という当麻の疑問が中心になったのだが、ここで返事をしたのは予想外にもヴェリアンだった。

「おそろく、姉君のキヤーリサさえ封じられれば、クーデターは終結すると思います」

先ほど『騎士団長の敗北によって「騎士派」を崩すことは難しくなくなってきた』という話を天草式にされたが、つまりはそういうことだ。

このクーデターは『カーテナ||オリジナル』を手に入れた第二王女キヤーリサ』と『騎士団長』の2人が中心となって行っている。つまり、キヤーリサは『騎士派』の協力を取り付けているものの、騎士団長が敗北したことで、軸を失った『騎士派』は大幅に戦意を削がれているのだ。

2本ある大きな柱のうち、すでに片方を失っているクーデター勢力は、もはや『カーテナ||オリジナル』しかなく、それが全てなのである。

しかも、イギリスは『清教派』『王室派』『騎士派』の3派閥で各々役割分担をしている。『騎士派』は全てクーデター勢力にいるが『清教派』に属する人間はおらず、『王室派』にいる人もキヤーリサのみである。この中で外交ができるのは『王室派』のキヤーリサだけであり、彼女が倒れてしまえば、これ以上は『イギリスのためにならない』ということだ。『騎士派』の人間たちも矛を収めるのだ。そもそも、彼らは『クーデターを起こすことがイギリスのためになる』と信じているからこそ、行動を起こしたのだから。

そんな説明をしていると、インデックスが車を停めるように指示を出した。ここから先は、さすがに車の音を響かせるわけにはいかない

らしい。

現在の時刻は午前2時近い。それだけでなく、『騎士派』と『清教派』の市街地戦も一応『清教派』の敗走という形で決着がついているので、住民たちの動きも制圧されている以上、ロンドンのあちこちに配置された騎士が異常を発見して増援を呼ばない限り、人はいない。地下鉄駅どころか、その向こうに見えるバッキンガム宮殿にも人の気配というものがしない。

すると、当麻の右手をヴィリアンの手が包み込んだ。

「……くれぐれも敷地内には入らないでください。魔術に疎い私には分かりかねますが、木々に泊まる羽虫の数まで正確にサーチできると、以前姉君のキャーリサが豪語していたのを聞いたことがあります」

そんな説明をしてくれたが、当麻の方はと言えば、野郎のゴツゴツしたものは異なる、柔らかいマシユマロの表面のような感触にドギマギしまくりである。

その後は『騎士派』の走査を潜り抜けるように、何もない空間を不自然に迂回して動くインデックスの跡を、慎重にたどっていく。しかし、どうやらうまくいったようで、何事もなく3人は地下鉄の駅へとたどり着くことができた。

「ここまでくれば大丈夫そうだね」

何がどうなったから大丈夫なのかさっぱり分からないが、とりあえずはインデックスに感謝する当麻。しかし、その次に現れたものを見て、インデックスが言った。

「なんか、ピコピコのついた壁みたいなのが下りているんだよ」

「……、」

それじゃあみんな、インデックス語を翻訳してみよう☆

目の前に電子ロックのついた隔壁シヤッターが下りて出入り口を塞いでいるけど、どうするの？

カツン、という足音が聞こえてきたのは、御坂美琴の助けを借りて

電子ロックを解除した後トンネル内の線路へと飛び込んだ、その直後だった。

当麻は思わず『騎士派』だろうか、と警戒した。

その瞬間、『新たななる光』に所属しているレッサーという少女を狙撃した魔術が思い出された。使用された場合、右手でうまくタイミングを合わせることができるとは分らない。親友によれば、イマジネーションレイカー幻想殺しの使い手である彼には、『異能の力』に対しては何かしらの『前兆』を感じ取って自動的に対処する能力が備わっているらしいが、それはあくまでも『仮説』に過ぎず、駿斗も「だから大丈夫」とまで断言はできないらしいのだ。

当麻は慎重に、闇の奥をみつめる。しかし、その時ヴィリアンが声を上げた。

「お、お待ちください！ 彼らは敵ではないようです。バツキングム宮殿から合流する予定だった使用人たちですよ！」

「……そのお声は、ヴィリアン様ですか……？」

闇奥から、ヴィリアンよりは少したどたどしい、しかしそれでも十分に分かりやすい日本語が返ってきた。どうやら、彼女の言葉に合わせて、彼らも日本語を使ってくれたようだ。

続けて、20人近い男女の集団が現れる。色あせた作業着の初老の男から、中にはメイド服を纏った少女までがいた。

紙の巨人

この時間にバッキンガム宮殿に退避していた人々の内、民間出身の人員はこれで全員であるらしい。彼らは本当に、魔術にも科学にも詳しくない、一般の人々なのだった。

「アンタたちは、これが終わったら俺たちと一緒にロンドンを脱出する……ってことで、良いんだよな？」

「はい。本来ならヴィリアン様のお手を煩わせることなく、我々だけで地下鉄のトンネルに細工を施せば良かったのですが……民間出身の我々だけでは魔術とやらの不可思議現象の仕組みも分かりかねますし、『王室派』特有の機密情報にも詳しくありませんので、危険を承知で、こうしてご協力願おうという訳です」

そうか、と当麻は頷いた。

（だったら、こんなつまらない仕事はさっさと終わらせて、早く安全な所へ連れて行ってやらないとな）

そんなことを考えると、当麻は目的地である、バッキンガム宮殿とは反対方向のトンネルに足を向けた。目的地は、ほんの数メートル進んだところにあるらしい。

20人規模の大所帯でありながら、しかし『騎士派』に見つかることは許されないという状況の中。彼らは、息を潜めながらそこへ足を進めた。

ヴィリアンは不安そうな面持ちで、周囲へキョロキョロと目をやっている。

「この辺りにあるのは間違いないのですけれど」

「分かるのか？」

「いえ、ええと……そのはず、なんですけれど」

当麻が尋ね返すと、ヴィリアンはますます弱々しい口調になってしまった。すると、そこでインデックスが口を挟む。

「この辺り、あらかじめ魔力を利用したマーキングが施されているよ」

たとえば、霊装を整備する担当になった魔術師であっても、万が一場所を正確に把握できなかったら大変である。そのため、このような設

置型、かつカモフラージュが施されている霊装には、外部の人たちにばれないような目印をつけるのは珍しくないのだ。

ヴェリアンは、傍らにいたメイドから、上質そうなレターセットと羽ペンというめんどくさそうな文房具を受け取った。そして、眉を寄せて迷いながらもペンを動かしていく。

「そう、確か、こう……こうです。こんな感じのマークが目印になっているんです。魔術についての知識が乏しいため、これが何を意味しているのかまでは分からないんですけど」

当麻もそのマークを見てみるが、確かに一見してさっぱり意味が分からない記号であった。日常生活ではまず見かけないものの、得体的しれない魔法陣というほどの分かりやすい異物感もないため、度合いとしては『レアな地図記号のマーク』と言われれば納得してしまいそうなレベル、といったところだろうか。

しかし、ただ1人だけ魔術知識の塊であるインデックスだけは、ヴェリアンが記したその記号を見て眉をひそめていた。

「どうしたインデックス？」

「ううん。……でも変かも。『心臓』を警報の象徴に使うって、どういう応用なんだろう」

ブツブツと言っているが、当麻にはとりあえずインデックスが妙に思っている、ということしか分からなかった。

（駿斗なら、こうしたことに対してもすぐに推理してくれるんだけどな……）

インデックスの場合、魔術知識に秀でているがそれ以外の知識に乏しいがゆえに、どうしても偏りが出た見方をしてしまうことが多い。しかし、科学と魔術の両面に対して知識が豊富な駿斗ならば、いろいろと柔軟な思考も望めるのであるが、このトンネルでは携帯電話の電波は届かない。

当麻はぶつぶつと呟いているインデックスの横から離れ、とりあえずトンネルの壁にそれらしき模様がないか調べてみることにした。20人ほど来た使用人たちも、ただ隠れているマークを探すだけなら……ということ、手伝っている。

トンネルの中は等間隔に蛍光灯が配置されているので歩けないほど暗いわけではないが、それでもやはり小さなマークが探しやすいほど明るいものではない。しかし、ともかくマークを見つけてしまえばイマジンプレイカー幻想殺しで一撃粉砕できるので、焦ることはなかった。

すると、しばらくして当麻の右手の指が何かカサリとしたものに触れる。

「?」

壁から指を離し、改めて壁を凝視してみると、何やらポスターのようなものがあつた。縦2メートル、横1メートルほどの大きさの紙が、テープがはがれたのか、上からぺらりと捲れ、お辞儀をするような姿勢で垂れ下がっている。

しかし、当麻はその向こう側にあるものに対して疑問を抱いた。

トンネルの壁や質感とまったく同じような壁紙が、貼り付けてあつたのだ。

「これ……」

当麻が思わずつぶやいた瞬間、バシユ! と音を立てて壁が——正確には、壁一面に張り付けられていた大量の壁紙が、動き始めた。壁から離れたそれらは、幻想殺しによつて魔術的機能を失った何枚かの紙が枯葉のように落ちる一方で、その大部分は力強く宙を舞い新たな形を作っていく。

「魔術なんてもんには、俺たちの常識が通じるわけはねえと思つていたけど」

当麻は思わず笑いそうにさえなりながら、一定の法則を持つて集合したその紙の束を睨んだ。

「壁が人に変形して襲い掛かってくるのか、常識はずれにも程があるだろー!」

全長3メートル前後。

人の形を創る魔術があることは、当麻だつて知っている。シエリーⅡクロムウエルのゴーレムⅡエリス然り、女王艦隊の氷の兵士たち然り。しかし、これまでとは少し勝手が違う。

「ッ!?!」

横に回すように振るわれた巨人の拳が、当麻へと振り下ろされる。コンクリートの塊の如きその重量に、当麻はすぐに右手での迎撃を諦めた。魔術的なつながりを分解することはできても、紙そのものを消せるわけではないことは、先ほど『壁』に触れていたことでよく分かっている。

ほとんど後ろに倒れ込むような格好で、どうにか一撃を回避したが、その直後、短く、甲高い悲鳴が聞こえた。その主は民間出身のメイドか、あるいはヴィリアンか。しかし、当麻には確認する余裕はない。あの一撃では、親友から与えられた『硬化手袋』^{フリックグロップ}であっても、気休めにしかならないだろう。

拳は進行上にある柱をやすやすと砕いた。いくら学園都市製の素材をフル活用しているとはいえ、仮に左手が無事であっても、手袋に覆われていない部分は無事では済まない。

（ただの紙であっても、あれだけ集まると逆に重量感が出てくるわけか！）

いわば、分厚い本を満載した本棚を振り回しているようなものなのだ。

すると、そこで解析を終えたインデックスから言葉が飛んだ。

「とうま、離れて！ あれはモックルカールヴィの作り方を参考にした霊装なんだよ！」

北欧神話において、剛腕で知られるトールと戦うために設計された組み立て式の巨人。しかし、最後の最後で『心臓』に使う材料を間違えたために貧弱な結果に終わってしまった。

しかし、この場合はイギリス式の理論で『心臓』を一から設計し直し、この場を守るために最適化した、いわばカスタムモデル。ヴィリアンが描いたその記号こそが『心臓』の新たな記号だったのだ。

（また由緒正しい物騒なやつだな！）

当麻は、紙の巨人と対峙する。

幻想殺しは、あらゆる魔術に対して文字通り一撃必殺の力を持つ。先ほどの壁と同じように、巨人が紙を束ねて構成されている以上、右手で触れた部分から崩壊が始まるはずだ。

拳を振りかぶる巨人に対して、当麻も同じように右拳に力を込めた。

(ビビるな——いけ！)

轟！ と2つの拳が飛び、そして衝突した。

衝突の瞬間、巨大な拳がその動きを止め、右腕から発生した大量の紙の洪水が当麻をトンネルの壁際まで押し流す。

「ぐ……ッ！ くそ、やったか!？」

大量の紙に埋もれて手足が動かない状態となったが、それでも巨人が崩壊したのは見ていた。当麻は焦らず、ゆつくりと紙の山から這い出ようとする。

しかし。

クシヤクシヤ、と紙を丸めるような音がその耳に届いた。

「嘘、だろ……」

全ての紙の魔術的機能が失われた訳ではなかった。その右腕の拳はほとんど失われ杭のようになっていたが、逆にどがっている分、破壊力が増しているようにも思える。

(やばい、動つ、逃げられねえ！)

その杭が、壁ごと当麻をぶち抜こうとした時だった。

突然横合いから、人影が割り込んだ。

バツキングダム宮殿の使用人の1人だった。色あせた作業服を着た中年の庭師は、紙の巨人の腕にしがみつくようにして、何とか杭の照準をずらす。

おかげで、その杭は当麻の頭ではなく、そのすぐ横のコンクリート壁へ深々と突き刺さった。

ただし、庭師はその腕の威力で弾き飛ばされていた。彼の作業服は強引に削り取られ、決して少なくない量の血も流れている。

「馬鹿野郎！ 無茶なことをしやがって……!」

紙の山を払いのけながら、当麻は叫ぶ。すると、倒れた庭師はうつすらと笑った。

「……すみません……。俺にやあ魔術とか言われてもさっぱり分かりませんが、とにかく、あなたの力があれば、こいつに対抗することも

できるんでしょう……？ だったら、お願いします。こいつを何とかしてください。こいつの馬鹿げた杭がヴィリアン様に向かう前に、早く！」

ヴィリアンは、再び嫌な予感がした。

そして、第三王女の直感が正しいものだど証明するかのようになり、体を強張らせる彼女の方へ、若い女の使用者が振り返ってこう言った。「ここは我々にお任せください、ヴィリアン様」

「……ッ！」

「あの少年が復帰するまでの時間を稼げれば、状況を覆すこともできるようです。ろくに格闘の術も学んでいない我々ですが、それでも20人がかりで押しつぶしてしまえば身動きを封じることがもできるでしょう」

確かに、一般的ならそういう風に考えることもできるかもしれない。い。

だが、魔術というものに対しては、例え詳しくないヴィリアンでも、その結果が分かっていた。この不可思議な現象には、そういう『普通の考え方』は通用しない。何の力も持たない民間人が20人突っ込んで蹴散らしてしまうはずだ。

使用人たちも馬鹿ではない。クーデター発生当初から肌で感じ取ってきた経験によって、それぐらいは推測できていることだろう。

だが、彼らはそんなことには一切触れることはなく、各々上着を脱いだり、ネクタイを拳に巻いたり、あるいは一瞬出口に視線を向けてから、改めて紙の巨人に目を向けていた。その一方で、同時に顔は青ざめており、足だけでなく全身を震わせていた。

「なぜ、ですか……」

ヴィリアンには分からなかった。怖くないはずがないのに、自ら死地へ向かおうとするその思いが。

「理屈などありません」

しかし、若い女の使用人は即答した。

「人が立ち上がるのに必要な理由は、それほど特別なものではありません。あなたのために戦いたいから集っている。理由なんてそんなものですよ、ヴィリアン様」

その時、紙の巨人に新たな動きがあった。当麻の顔のすぐ横に刺さっている杭は抜けないと判断したのか、その先端をバラバラと崩したのだ。崩した分の体積を犠牲にして、巨人は再び自由を取り戻した。

巨人に対抗する右手を持つ少年を排除すべく、その先が狙いをつける。それを見て、使用人たちは再び動こうとした。

すると、その時ヴィリアンは若い使用人の肩へそっと手を置いて、今までにはない力強い声で言った。

「あなたたちの気持ちは理解できました。ですが、それはあなたたちが死んでも良い理由にはなりません。あの霊装が『隔壁としての自己を踏破する危険因子を優先的に排除するためにある』なら」

——囿の役割は、私が一番適任でしょう。

言葉を言い終えると同時に、今まで誰よりも後ろにいたヴィリアンは、今この場で誰よりも前へと飛び出した。

「待——ッ！」

使用人の制止の声が聞こえたが、彼女を追いかけようとするものはいなかった。そもそも、恐怖で足を動かすことすら精一杯なのだ。

怖くて当たり前だ。

逃げ出したくて当たり前だ。

しかし、ヴィリアンはそれでも歯を食いしばってトンネルの中を駆ける。レールを手動で切り替えるための、緊急時用のモップほどの大きさのスパナを、壁から外して手に持った。そして、さらにその先——巨人の下へと突き進む。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

スパナを振り向くとともに、公務では一度も発したことのない雄た

けびを上げるヴィリアン。

対して、巨人もその杭の標的を当麻からヴィリアンへと変更する。勢いよく射出された杭とスパナが衝突し、ヴィリアンは、杭の直撃は避けられたものの、スパナは途中で折れてしまった。

ベギン、と折れたスパナの先端部分が、彼女の顔にぶつかる。

（——恐らく、姉君のキャーリサにとってはこんな仕掛けも、彼女の持つカーテナに比べたら雑魚戦力に過ぎないのでしよう。私達がこんなふう努力しているところを見ても、その無能さを嘲笑うだけでしよう）

しかし、自分に集ってきてくれた人々が、彼らが『ちつぽけ』とも思われるほどの圧倒的な力で苦しめられようとしているのであれば。

（——私は抗う！）

必要な術式は、天草式の間からレクチャーを受けていた。

ヴィリアンは突きつける。この紙の巨人に、自分こそが英国王室の一員、第三王女キャーリサであると。

紙の巨人は声もなく、その杭の先を動かし、再び彼女の頭に狙いを定める。しかし、その杭が飛ぶと同時に、インデックスの音が響いた。

「軌道を変え！^C ^A ^O ^M ^A ^R ^A ^T ^T ^R 右腕を右へ！」

スベルインターセプト

強制詠唱によって、紙の巨人の腕が不自然にその軌道を逸らした。そしてさらに、インデックスの詠唱を参考にして、今まで一から十まで丁寧な詠唱を行っていたヴィリアンが高速詠唱に切り替える。

「正しき血を継ぐ者の命に従い、速やかに開門せよ！」^O ^A ^G ^P ^A ^A ^C ^O ^T ^P ^O ^T ^R ^B

最後の言葉と共に、紙の巨人の大半が砕け散った。

しかし、最後に残ったその杭が、なおもヴィリアンへと崩れかけたその先を突き出そうとする。

第三王女は目をつぶらなかつた。そこへ、一人の影が割り込んだからだ。

「悪い。助かったよ、ヴィリアン」

背後からケンカを止めるかのようにその腕を掴んだ当麻は、その右手で巨人をさらに原型をとどめない姿へと変えていく。

「後は任せておけ。今度こそ仕留める」

ゴバツ！ という音と共に。

今度こそ、紙の巨人モツクルカールヴィーは、完膚なきまでにバラバラに粉碎された。

第三王女ヴィリアンは、しばらくその光景を呆然と眺めていた。生まれて初めて明確に敵を倒すために行動し、その結果として大量の羊皮紙が舞い散る光景を。

その様子を後ろから無言で見っていた当麻であったが、彼のポケットから携帯電話の着信の震動が伝わってきた。駿斗か？ とも思ったが、画面を見ると知らない番号だ。しかし、出ると耳慣れた声が聞こえてきた。

『あつ、良かった、繋がりました！』

元気いっぱいな声の主は、天草式の五和だった。

彼女が言うには、無事に遠隔地から特殊車両の動力源にアクセスすることに成功したらしい。

しかし、それをバツキングダム宮殿に配置するため、現在特殊列車が当麻たちのいる方へ向かって猛スピードで走行している。

ギョつとする当麻に、五和は告げた。

『と、とにかく、これから特殊車両を経由して、空中要塞カヴンIIコンパスの心臓部とカーテナIIオリジナルをリンクさせます。力の「逆流」に伴い、大規模な魔力放出が発生することでしょう。おそらく異変を察知した「騎士派」がそちらへ調査に赴くはずですし、そこにいると「爆発」に巻き込まれるリスクも高いんです！ 大至急こちらへ戻ってきてください！』

10月18日、午前2時30分。

カーテナIIオリジナルは暴走した。

「……やべえな」

「そんなに酷いのか？」

その呟きを聞いた当麻が尋ねると、駿斗は真剣な表情で頷く。

「ああ。知つての通り、お前らのお陰でカーテナ||オリジナルを暴走させ、その力の一部を削ぐことができたわけであるが……その削いだ力、つまりは天使テレスマの力だが、それがキヤारीリサを中心に爆発するように放たれることとなった」

いわば、現在のロンドン市内は、街全体の空気中に火薬が漂っているような状況なのだ。それも、かなりの高濃度で。

「あの中じゃ、もはや魔術は使えないな。下手すると、ロンドン全域の天使の力に『着火』して爆発しかねない」

当麻たちは、あの後急いで避難をして、今はロンドン近郊にある平原へと集まっていた。彼らだけでなく、『清教派』のメンバーは『必要悪の教会』も含めてほぼ全員がそろっている。(ほぼ、というのは、ここに最大主教であるローラスチュアート以下数名がいないため)

「絶好のチャンスだと思っただけだな。カーテナ||オリジナルの力が削がれているってだけじゃない。『騎士派』もその頭である騎士団長ナイトリーダーが敗北したことで、全体の統制が揺らいでいるはずだ。もちろん、キヤारीリサもそれを放っておくほど馬鹿じゃないが、それでもこのまま勝負すれば、一気に『騎士派』を瓦解させることもできたんだが……今はもう、戦闘どころじゃないってのが正直な話だ」

当麻は駿斗の話をふんふんと頷きながら聞いていたが、はたと思いついた。

「なあ、暴走した力をこの間にキヤारीリサが取り戻すってことはねえのか？」

「ない」

駿斗は、彼の疑問に即答する。

「カーテナ||オリジナルが持つ力は、莫大な上に扱いが最も難しい部類に入る。そうだな……ほら、簡単な構造の昔の機械よりも、複雑な最新の精密機械のほうが、一度壊れると修理が大変だろ？ まあ、物

凄くざっくり説明すると、そんな感じかな」

「はあ、と当麻が納得しているその横で、駿斗はさらに「完全回復には、少なくとも見積もっても1か月はかかるな」と説明した。

そんなわけで、決戦前最後の晩餐になる。

もつとも、大小無数のシスターさんたちが修道女らしからぬ暴飲暴食モードに入っているのだが……駿斗は彼女たちを尻目に、呆然としている友人の分も含め、テキパキとほどほどの量を取り皿に載せていった。

その一方で、戦いのことを未だに考えている者も少なからずいる。

例えば、親友を『騎士派』の手によって殺されたシエリー・クロムウエルなどは、その筆頭だ。

どうしたものか、と彼女にかける言葉を駿斗が頭の中で考え込んだまま動かないでいると、サンドイツチが載せられた皿を持ったオルソラ・アクイナスが彼女の下へと歩いて行った。

(そういえば、あまり意識したことがなかったけど、2人とも同じ職場なんだよな。専門分野もそうだし)

シエリーは芸術、オルソラは言語(文字)という違いはあるものの、両者揃って暗号解読のスペシャリストなのである。性格はまさに正反対と言っても良いので、あまりそのようなイメージが沸くことはないが。

そんな時、駿斗の携帯電話が鳴った。

折り畳み式のそれを開くと、画面に映っているのは『鳴護アリス』の文字。

『駿斗くん、大丈夫!?』

「大丈夫だよ。ってことはやっぱり、そっちでもニュースになっているんだな」

彼女の言葉に力強く答えたが、そこで気が付いた。

「学園都市では、どんなふうにもニュースになっているんだ? っていうか、そもそもどうして俺たちがこっちにいるって」

『絹旗ちゃんと黒夜ちゃんが、2人が寮にいないくて、携帯電話も繋がらないって騒ぎ出して、それで調べたみたいで……』

「あいつら……」

今まで『新たな光』との追いかけてこと、その後のクーデターに集中していたので気が付かなかつたのだが、どうやら着信履歴がかなり溜まっていたようだ。

(ていうか『調べた』って、絶対に『裏』のアクセス使っただろ)

2人は現在、学園都市の暗部からは友人が巻き込まれない限り一切手を引いている。しかし、彼女が『闇』の中で生き抜いてきた過去が変わることはないため、そこで培った情報入手経路などは、ある程度まだ使用可能だったりする。

特に、特定の組織に属していなかった海鳥よりも、『アイテム』に所属していた最愛は、今でも結構まだ接触を取ろうと思えば取ることができたりするのだ。

全次元切斷

学生が『外』に行ったかどうかなど、普通は直接本人、あるいは知らされている人に確認を取らない限りには分からない。しかし、あの土御門がわざわざ彼女たちに説明するとは思えないので、十中八九『裏』のアクセスを使用したのだろう。

駿斗は内心でため息をつきながらも、アリサとの通話に戻る。

「ああ、インデックスがイギリス清教に呼び出された関係で、保護者としてこつちに来てるんだけどな？ まあ、クーデターには巻き込まれなかったと言えは嘘になるが、俺は特にこれといったケガもしてないよ。まあ、当麻は相変わらずだから身体中土だらけだけど、大きなケガはなくて、今は夕飯にがつついてるし」

『あはは……うん、なら良かった』

電話越しに、彼女が苦笑いしている様子が伝わってくる。

『駿斗くんは、大丈夫？』

「俺はどちらかというと、半分はサポートの方に回っていたから。全然平気さ。どちらかというと、これらの方が忙しいだろうな。クーデター側も、ケリをつけるために一気に攻撃を仕掛けるだろうし……まあ、皆で行動しているから、大丈夫だよ」

少し話し過ぎただろうか、と駿斗は暗い言葉が増えてきたので慌てて言葉を足した。

「とりあえず、周りには信頼できるやつらが揃っているから。ほら、

『エンデュミオン』の時に協力してくれた奴もいるし」

『え？』

「ああ、あの時イギリスの人たちが呼ばれていたんだよ。えっと……レディリーの奴が、そっちの方出身かもしれないって話でさ」

彼女は十字軍の存在していた1200年から生きていたはずだが……実際のところ、どこの国の出身なんだろうか？ やっぱり、ローマ帝国なのかもしれないが。

そんなことを頭の中で考えながら、駿斗は何とかアリサをごまかした。

通話を終わると、自分の手に『幻想核杖』イマジン・コアロッドを握り、霊装の手入れを始める。

（うーん、聞いたところでは、女王様だけじゃなくてイギリス清教の最大主教も一緒にいるという話だったけど……だけど、そんなチートクラスの2人が、いくら強化されているとはいえ、たかだか数名の騎士相手にずっと大人しくしているもんなのか？ 案外、魔術的な拘束を逆手に取っていたりするのかもなあ。あの最大主教はインデックスの『首輪』の一件で気に入らない相手ではあるけど、それでも実力はかなりのものであるはずだし）

そんなことを考えている彼は、件のその最大主教が拘束から逃れるために、無理矢理自分を中心に爆発を放って、力づくで拘束霊装を壊していることを知らない。

午前3時。

駿斗たちは『清教派』の人たちと共に、ロンドンへと突入した。

移動の方法は大型トラックであったが、突入までに妨害らしい妨害は存在しなかった。そのことに、駿斗、当麻、インデックス、神裂といった同乗の面々は、逆に不気味な印象を抱いていた。相手の戦力を割くために遠距離からの援護射撃をしながらの上陸をする予定ではあるが、全くここまで攻撃が来ないのだ。

「最後の確認をします」

神裂が口を開いた。

今回の目的は、一刻も早くバッキンガム宮殿へと急行し、クーデターの首謀者であるキャーリサを抑えることだ。そのために一番手っ取り早く、また不可欠であるのが、キャーリサの持つ『カーテナIIオリジナル』の破壊である。

核ミサイルを利用しようとするテロリストがいても、計画の要である核を失ってしまえば、もうテロを起こすことはできなくなるのだ。しかし、天使長『神の如き者』ミカエルの如き者と同質の力を持つ彼女は、正攻法で倒せるような相手ではない。

「ですので、規格外の敵に対しては、規格外の人材に頼ることにしましょう」

「や、やっぱ、そうなるのか」

一同の視線は当麻に集まった。

彼の右手であれば、世界最高の霊装であろうが一発で破壊できるのだ。

「でも、今のキャーリサって神裂とかアツクアより強いかもしれないんだろ。あんなもの凄い速度でビュンビュン飛び回られたら、触ることもできないぞ」

「その通りだな。超音速の領域での戦いに参加しろって訳じゃない。だが、確実な破壊ができるのは当麻だけなんだ。つまり、とどめを刺すまでは、俺と天草式がガイドをする」

イギリス清教には優秀な魔術師がかなりいるが、速度という点で言えば『聖人』の所属する新生『天草式』が最も優れている。そのため、直接的に対峙するのは駿斗と当麻に加えて、神裂率いる『天草式』であり、その他の術者は援護射撃に回る予定だ。

「難しく考える必要はありませんよ。最後まで残って下さい。それがあなたに与えられた、一番大きな役割です」

「全員に、な。……そろそろ始まるな。耳を塞いでおけ」

その言葉に、当麻は頭の上に疑問符を浮かべたが、分からないまま耳を塞ぐ。

次の瞬間。

ゴッ！ という爆音が、辺りのビルのガラスをまとめて砕いた。

「何……ッ！」

当麻が何か言いかけたが、すぐに気が付いたようだ。

空中要塞カヴンIIコンパス及び、潜水型のセルキーIIアクアリウムによる魔術砲撃である。

その攻撃は十二分に強力であり、わずかな余波だけでもトラックがわずかに横滑りを起こしていた。運転手の五和は、それでもなんとか

してハンドルを操作し、うまく車体を制御して道を突き進む。

「こういう事だったのかよ?」

「ええ、キャーリサ側には砲撃の防御に徹していただければ、その間に我々が戦場に駆けつけることも可能となります。遠距離からの砲撃支援は、上陸戦の基本ですよ」

100や200を超える光弾の軌跡を見ながら、神裂は平然とした顔でそう告げた。

「……正直、あんな状態のバツキングム宮殿に入ったら、すぐに死ぬかもよ?」

「むしろ、あれだけの大規模砲撃を使っても、キャーリサが倒れない事実を留意した方が良いでしょう」

これから戦う敵は、それほどの脅威なのだ。怪物どもめ、と当麻は吐き捨てたが、並の魔術師から言わせてみれば、竜王ドラゴンプレスの吐息と対抗したこともある彼の方も、よほど怪物である。

ちなみに、民間人を巻き込まないか、という心配については、あまり問題ないようだ。キャーリサ側でも、管理のしやすいようなホテルや映画館などの大規模な施設に集めているために、民家に誤爆しても犠牲者が出る可能性は低い。

しかし、バツキングム宮殿については破壊されてしまう可能性が高いであろう。そのことを考えた当麻はちらりとヴェリアンの顔を見ながったが、

「……構いません」

彼女はしっかりとした口調で言った。

「ロンドンのみならず、イギリス全土で皆が痛みを分かち合っているのに、我々英国王室だけは無傷で済ませてほしいというのも無視の良話です。……それで国中の騒乱が収まるのなら、あんな宮殿など木端微塵にしてしましましょう」

意外だった。

彼女であれば、もう少し貴重なものが破壊されるのに戸惑いを覚えると思っていたのであるが……。

「気付かされたのです」

彼女は、木製のアンティークなボウガンをチェックしながら口を開いた。

彼女が思い出すのは、2つの出来事だ。

何の魔術も使えない人たちが、戦いを恐れる自らを逃がすために戦ってくれたこと。

そして、1人の傭兵が彼女を逃がすために、騎士の集団の中へ飛び込んできてくれたこと。

「私が戦いから逃げることで彼らを守れるというのなら、私はどこへでも逃げましょう。ですが、もしもそんなことをしても彼らの窮地が変わらないのなら……後は戦う以外道などありません」

彼女は相変わらずの緑色のドレス姿であったが、その上から矢筒のベルトをたすき掛けにして、控えめながらも強い芯のある視線を当麻へと返した。

「あなた方のほうは……どうなのですか？」

前々から、ヴィリアンはこの少年2人のことを不思議に思っていた。

特殊な力を有している、という程度ならば知ってはいたが、それ以外は学園都市の学生である、ということ、そして、駿斗が『置き去り』チャイルドエラーと呼ばれる親がいない子供であること……彼女が知っているのは、その2つくらいなのだ。あとは、インデックスを預かっていることか。

今は友人も安全地帯にいるはずなのに、どうしてこの期に及んで死地へ赴こうとするのか。

「大層な理由なんかねえよ。みんなそれぞれ、死ぬほど重いものを抱えて、そいつを失わないように走り回っているんだろうが。……だったら、そんな簡単に切り捨てられねえよ。大それた理由とか債務の問題じゃない。立ち上がりたいと思ったら、もう立ち上がっても良いと思うぞ」

「そういうことなんだ。俺たちは、何かが『やるべき』だからやるんじゃない。『やりたい』からやるんだ。今までも、ずっとそうしてきた。少しでも、都合の良い幻想を求めて……ただひたすら、突っ走ってきただけなんだ」

その言葉を聞いた彼女は、しばし2人の顔を見つめていた。
やがて、彼女はこう言った。

「……自分の中に完成された主義や思想はなくとも、その場その場で皆の声を聞き、どんな状況であつても最良の選択を採るための手段を惜しまない……」

「？」

「あなた方は……ウイリアムとはまた違った種類の、傭兵なのですね」
ういりあむ？ と当麻が訊きかえそうとしたその時。

「来るぞー！」

駿斗が叫ぶと同時に『幻想核杖』を掲げると、『幻想防壁』を展開する。バタタタタタタタ！ という風を切る連続した音が、彼らの頭上から響き渡った。

(ダメだ、分散しているところまではどうしようもない！)

魔術の遠距離攻撃。及びキヤーリサが蹴とばした残骸物質。その2つが砲撃として襲い掛かる。

なんとかして近隣のトラックまでは防護したものの、他の方向へと放たれているものについては防御が回らない。

「くそ、五和！　トラックを止めるんだ。徒歩でバツキングダム宮殿へ向かう！」

『このまま、トラックの防御に回った方が良いのでは!?!』

「直接攻撃されたということは、こつちを狙われているということだ。下手すると、ここにウイリアンがいると分かって攻撃を集中させている可能性すらある！」

全員がトラックを捨てる決断をして転げ落ちるように離れた次の瞬間、駿斗の『幻想防壁』が軽々と切断された。そして、その後白い砲弾がウイリアンへと向けて襲い掛かる。

(いつの間に……!?!　超音速で走ってきたのか！)

どうやら、駿斗が感知して判断するよりも早く、キヤーリサが襲いかかってきたようだ。

「させるか！」

残骸物質を天使テレズマの力で強化された拳で思い切り蹴り飛ばすと、その

直後に彼女へと向けて白い斬撃が襲い掛かった。

「ヴェリアン！」

しかし、その直前に当麻がヴェリアンを背中から覆いかぶさるようにして突き飛ばす。全長100メートルにも渡って不自然に白い物質が帯のように生み出され、そしてその『切断面』は数瞬遅れてゴトンと地面へと落ちていく。

駿斗の杖が4色のきらめきを放ち、周囲一帯に魔方陣が生じた。

「キヤリーサ、テメエ！」

「おめでとう、表彰もののファインプレーだったぞ。ウチの弱腰な騎士共に見せてやりたいぐらいだし。まったく、妹の『人徳』は思わぬところで発揮するから侮れないの」

本来は闇の中に埋もれそうになる宮殿を照らし出すためであろう、無数のライトが、今は第二王女キヤリーサを浮かび上がらせていた。

「ところで、他はどうしたの。お前の友軍は皆、瓦礫の下か？」

「ちよつと遅れているだけだよ。せめて、パーティーはあいつらが集まっただけから始めようぜ」

駿斗は、あえて強がって見せた。実際に彼の感知能力で他のメンバーの安全はある程度把握しているのであるが、いつここに来てくれるのかは分からない。

「そーか。ならば、わざわざ大それた準備をしてやった甲斐があるというものだし」

「準備……これは、霊装か？」

その直後、彼らの頭上を巨大な影が通り過ぎた。

全幅80メートルほど。大型旅客機スカイバス365に匹敵するサイズのもので、20機ほど飛行している。

攻城戦用移動要塞グリフォンIIスカイ。

無人式の霊装であるためにカヴァンIIコンパスよりも柔軟性・応用性にはかけるものの、連携戦闘行動ではイギリスの中でも随一である。

「愚鈍だが従順。実に『軍事』の私好みのテイストだな」

さらに、そこで当麻は辺りを見渡した。駿斗が何も言わないので気が付かなかつたが、本来一緒にいてもおかしくない『騎士派』の人間

がここには存在しない。

しかし、キヤリーリサはこんなことを言ってきた。

「伏兵などはいないの。まーちよつとしたライブ中継に使ってしまったし」

「……!? テメエ、まさか仲間を斬ったのか」

駿斗の言葉に、ギョツとする当麻。

一方で、彼女は平然としている様子だ。

「騎士団長ナイトリーダーを撃破した上で、カーテナⅡオリジナルの暴走させることで『騎士派』にわたしの国家元首としての資質を疑わせる……。いくつもの偶然に助けられたとはいえ、なかなか鮮やかな心理戦だったと評価できるの」

「殺したのかよ、仲間を！ 答えろキヤリーリサ！」

駿斗が大声で吠えると、隣にいたヴィリアンの方が小刻みに震えた。恐らく、その時の様子を思い浮かべてしまったのだろう。

しかし、第二王女の返答はさらにその上を行く。

「その点は心配するな。なまじあつさりと殺してしまうと、想像力が追いつかなくなるよーだし。最小の消費で最大の演出を施すためにもー少し楽しいことになってるの」

死より恐ろしい生。

小説などでは時折見かける言葉であるが、現実世界であつてはならないもの。

「テ、メエ……」

「彼らは実に役に立ったの。お陰で浮き足立っていた臆病者共が寝返るのを防げたんだし」

キヤリーリサは、手のかかる可愛げのない子供を評価するような口調で、平然と話した。

そして、衝突が再び始まる。

当麻が第三王女を守るようにその前に立ち、駿斗がキヤリーリサをその真正面から見据え……そして、先ほどから準備していた100を超える魔術が、立て続けに爆発を起こす。

それらの魔術はどれも『神』あるいは『天使』を攻撃することに特

化したものであった。

しかし。

「死ぬぞ」

その爆発の中から、キヤーリサが姿を現した。全く、という訳ではないようであるが、やはり大したダメージは負っていない。

駿斗と当麻は同時に動いた。

当麻が前。駿斗が後ろ。

強力な魔術に対する『防御』なら、イマジンプレイカー幻想殺しを持つ当麻の十八番だ。

当麻は駿斗に頭を掴まれて斬撃を避けると、そのままカウンターで右手を前に伸ばす。

しかし、ゴキ、という異音と共に、それは白い残骸物質に阻まれた。

(消せない……!?)

全次元切断術式は、あくまでも『切断』を引き起こすだけ。その後
に生じる『切断面』は、あくまでも自然な物理現象なのだ。

不自然にのっぺりとした、鋼よりも重量のありそうなその物体は、
当麻へとそのまま落下しそうになるが、その後ろから駿斗がそれを両
手でつかんだ。

だが。

「——遅いぞ、豚。そんなことでは切断だし」

当麻の胴体を切り分けるルートで振りかざされたそれに対して、当
麻はほとんど反射的に右手をかざした。シツパアアン！ という鞭
を撃つような音と共に、生み出された斬撃が途中で消失する。

(くそ、打ち消すための条件が分からねえ！)

だが、のんきに駿斗と相談している暇もない。彼も全次元切断術式
のことは知っているが、その詳細まではまだ解析が終わっていない
……というか、そもそも、そんな余裕があるとは感じられない。

次の瞬間、当麻の体が後ろへ引つ張られるのと同時に、キヤーリサ
の蹴りが放たれた。不発に終わったそれに対し、駿斗はカウンターで
天使の力を魔術現象に変換せずにそのまま放つが、キヤーリサはそれ
を体を捻って回避する。

だが、そのコンマ一秒にも満たない間に展開された数多の神殺しの

術式で、キヤーリサは一度距離を取った。

「くそ……早すぎて術式の同時創造が間に合わねえ。物理現象と魔術現象の両方となると、解析して対抗策を練り上げる暇がねえ」

思わずこぼれた駿斗の言葉に、当麻は驚愕した。

その傍らで、キヤーリサは自分自身を狙ってきたカウン||コンパスの大規模閃光術式に対して、カーテナ||オリジナルをくるりと一回転させた。そのことによって新たに残骸物質が生み出され、それが盾となって閃光を完全に防いでしまう。

(マジか……)

当麻は、思わず少しの間呆然とした。

(あれだけ派手な攻撃をしても傷一つ付かず、駿斗さえも対抗策を見いだせずにいる……)

「驚くよーなことか」

彼女は手首のスナップで回転させながら、

「天使長を殺せる人間など、どこにいるの?」

さらに、その盾に剣を突き刺した。そして、半径20メートルの円盤が刺さった状態のまま、横薙ぎにそれを振るう。

ゴバツ! という轟音が炸裂した。

円盤の下半分が地面に刺さった状態で、強引にカーテナ||オリジナルを振り回したのだ。巨大な重機で掘り上げられるように、地面が一気に崩れた。

そして、それが数多の弾丸の雨となって彼らに襲い掛かる。

前方に結晶が発生し、そしてさらに魔術的な意味が付加されていく。しかし、その直後結晶がまるごと蹴り飛ばされ、それを消した次の瞬間には再び衝撃が襲い掛かった。

斬撃は当麻が打ち消したものの、その直後に放たれる残骸物質の円盤には駿斗が自分の体を強化して盾となる。

そのまま、2人も吹き飛ばされた。

弾丸のような速度で飛ばされて行く途中、それでも空気を圧縮してクッションを創ったのは、駿斗の意地とでも言うべきか。

バツキングダム宮殿の壁の手前でようやく地面に転がった2人は、そ

れでも足に力をこめて立ち上がる。

その直後、駿斗の背中から4色4枚の翼が生じた。

『^{アルヒヤイ}権天使』……この状況で駿斗が放つことが可能なものでは、最強の切り札だ。

しかし。

「なるほど、自分の身に天使の力を余すところなく満たし、再構成することで結果として天使とほぼ同格の魔術的な地位を手に入れる。その上、その翼が術式補助装置としても、偶像崇拜の対象としてもはたらく、とゆるわけなのか。確かに、よく考えられた術式だし」

かつて全盛期のアックアと打ち合い、尚且つ上回りそうになるほどの力を持ったそれを見ても、キャーリサは獰猛な笑みを浮かべるだけであつた。

「だけど、霊装ではなく自分自身を天使の力の中心に据えているせいとか、かかる負荷が大きすぎるようだし。瞬間的な出力では上回ることはできても、長期戦になればなるほど不利になるのは簡単に分かるの」

駿斗は、それに返事をせずに飛び出した。

全次元切断術式に対し同様の『あらゆるものを切断する』術式を生み出すことで『術式上に起こる法則の齟齬』を利用し拮抗する。そして、その武器の形状を剣、槍、曲刀、鎌、斧と様々に変化させていくことで、相手に己の『間合い』を掴ませないため、純粋に劣っている『剣』の技量をカバーしていた。

ガガガガガガガガッ！ という連続音と共に、駿斗の右手に宿る光とキャーリサの持つ切っ先のない剣が無数の衝突を引き起こす。

だが、高速の戦闘において重要なのは手札の数だけではなく、純粋な技術が重要だ。最終的に駿斗は武器を使った攻撃を諦め、手にガンレットをはめると最も手慣れている『拳』で対抗することにした。

相手の攻撃を躲し、カウンターの一撃を交わされ、横薙ぎに払われた剣をしゃがんでやり過ぎし、その直後に生じた残骸物質を逆に蹴り飛ばして攻撃に利用する。

天使長神の如き者と同質の力を操る剣を持つ、第二王女キャーリ

サ。

天使長と同質の力を得られずとも、神ガブリエルの力と同質の力を持ちその他の天使の力も丁寧に振り分けた上で総合力で拮抗しようとする駿斗。しかし、その攻撃にも限界が近づいてくる。

「死ね」

その『限界』にめがけて、キヤーリサが駿斗に向かって前進する。当麻がそこに右手を伸ばそうとするが、間に合わない。そして、

ゴバツ！ という音と共に、大規模に全次元が切断された。

駿斗の姿は、もうそこにはない。

なぜなら、その攻撃は横合いから突っ込んできた女性に向けて放たれたからだ。

「……ようやく、まともな方法で借りの1つを返せましたね」

涼やかな女性の声が聞こえた。

その隣には、インデックスもいる。その後ろには『天草式』もやはりいた。

戦いへの参加者は増加し、再び剣が振り抜かれる。

孤高な暴虐

「すまん、助かった神裂。……最初から全開で行けよ。出し惜しみると、ぶった切られるぞ」

「分かっています」

神裂が『唯閃・陽炎ノ太刀』を繰り出す。対し、キヤーリサはただ剣を上下に振るっただけ。しかし、その動きすら当麻には捉えることができなかった。

かん高い音と共に、2つの斬撃が衝突を起こす。

「この全次元切断に拮抗する、か。先ほどの小僧もそうだが、あらゆるものを切断する必殺同士、どーやら2つの法則の間に齟齬や矛盾でも生じているのかもしれないの」

「……先ほどまでの動きとは違いますね。かくいうあなたこそ、出し惜しみをしていると足をすくわれますよ」

出し惜しみ、という言葉を聞いて、当麻は心の中で否定した。

直感で分かる。『軍事』に通じるあの王女は、調節はしても加減をするような人間ではない。実際その通り、余計な消費をせずに、最小限で最大限の力を引き出すために調節しているのだ。

七天七刀とカーテナⅡオリジナルの斬撃と斬撃がぶつかり合い、キヤーリサの攻撃から生み出される残骸物質を神裂のワイヤーが切り裂く。

「当麻は天草式と合流して、キヤーリサの斬撃を消すチャンスを狙ってくれ！」

駿斗は制限時間が来たのか『アルヒヤイ権天使』の状態を解除してしまうが、それでも神裂に対して補助的な魔術を施しつつ、自分自身も防御魔術と攻撃魔術を同時展開する。

その間にも、援軍は来た。

——フランベルジュを握る建宮斎字や海上用船上槍を構える五和を中心とした、ロータスフンド新生天草式十字凄教が。

——『蓮の杖』を携えるアニーゼや巨大な車輪を持つルチア、4つの硬貨袋を持つアンジェレネたち、元アニーゼ部隊が。

さらにゴーレムⅡエリスを従えるエリスなど『必要悪の教会』の面々が集い、その戦闘の激しさに驚きながらも、次々に身を投じていく。

対し、キヤリーリサも四方に残骸物質を生み出しながら、それは砲撃とし盾として活用していく。さらに、上空のグリフォンⅡスカイが地上すれすれを飛行してゴーレムⅡエリスに体当たりをしてその破片を飛び散らせた。

「対キヤリーリサ班と対グリフォン班に別れましょう！ 移動要塞の高度は20〜50メートル程度……ペトロ系の撃墜術式が通用する高度です。牛深、香焼、野母崎！ あなたたちで、あれを落とすための術式を構築できますか!？」

「やってはみませんが、向こうもデカイシールドで保護していることでしょう。削り取れる保証はありませんよ!」

そう言いながらも、彼らは迅速に行動した。

グリフォンⅡスカイは、機体から伸びる影を『要塞』と連動して動く真つ赤な『馬上槍』に変え、それによる攻撃で対象を破壊する……というシステムを持っているのであるが、それは逆に魔術的な意味が地上にもある以上、細工しやすいということでもある。

したがって、『馬上槍』の墜落と同時に上空のグリフォンⅡスカイもその高度を下げたが……立ち直り、天草式へと攻撃を加えようとする。

「ヤバッ……!」

「いえ、ここまでやれば十分です!」

牛深の叫びを神裂が打ち消し、彼女は『聖人』の身体能力を存分に発揮した。すなわち、馬上槍を側面から掴み取り、魔術的な妨害によってその破壊力と制御を妨害しつつ、それを思い切り振り回したのだ。

要塞の『影』である馬上槍は、上空のグリフォンⅡスカイとその動きを連動させている。それを逆に利用し、グリフォンⅡスカイを同型機を4機ほども巻き込みながら、それをキヤリーリサめがけて叩き付けた。

ゴバツ！ という轟音が炸裂する。

しかし、それはグリフォンⅡスカイの墜落によるものではなく、それが一撃で『カーテナⅡオリジナル』に両断されたときに生じた音であった。

「くそっ！ 移動要塞5機分の鉄槌だぞ!？」

初老の諫早が叫ぶ。キャーリサとカーテナⅡオリジナルの力は、文字通り常識外れであった。

駿斗が身体能力を増強すると同時に『天草式』の身体能力を増強させ、全体を『調整』するように魔術を行使することで、どうにかキャーリサと拮抗する。その間、神裂はスタミナ回復に努めながら、当麻に話しかけていた。『唯閃・陽炎ノ太刀』は『唯閃』に比べてさらに強力なものであるが、その分スタミナの消費も激しくなってしまう。

「心苦しいのですが、やはりあなたの右手に頼る必要があるようですね。キャーリサの斬撃——全次元切断攻撃そのものを打ち消すことはできますか？」

彼女の全次元切断術式は、強力な攻撃であると同時に防御用の壁であり攻撃用飛び道具でもある『残骸物質』を生み出す効果も併せ持っている。逆に言えば、それを考慮した戦術が組み立てられている以上、それを打ち消すことによつて勝機が見えてくるのだ。

「中国には三種の剣の伝説があります。中でも最高の剣は、人を斬つても斬つた感触がなく、斬られた方も自覚がなく、何事もなくいきっていくそうです。……まあ、思想教育のためのたとえ話に出てくるものなんです。どうもカーテナはそのたとえ話を本当に実現してしまつたものみたいです」

すなわち、本当に鋭すぎる斬撃は物体を切断してから現象が表出するまでにラグが生じるということだ。今回の場合は、斬撃から『切断面』である残骸物質の形成までに約1.25秒ほどの時間がかかつている。

ここにおいて、『斬撃』は魔術現象であるが『残骸物質』は二次的に発生する物理現象にすぎない。したがって、当麻の右手では消すことができないのだ。逆に言えば、1.25秒以内であれば斬撃を消して

残骸物質の形成を食い止めることができる。

「……失敗すれば即座に窮地に立たされるクロスカウンター、か」

「必ず決めろとは言いません。仮にカーテナⅡオリジナルが長距離・大規模に次元を切断して巨大構造物を生み出そうとした際、手が届けば伸ばしてもらおう……程度に考えてください」

その時、ドバン！ という大きな音が響いた。

「おいおい、大事な護衛対象を残して作戦会議か。狙い撃ちにしてほしーみたいだし」

キヤーリサが飛び、神裂と駿斗はとっさに当麻を庇う位置に立った。

「違う、俺じゃない！」

キヤーリサが空中で足場となる残骸物質を生み出し、第三王女の下へと突撃する。ボウガンを構えるよりも早く、彼女は妹を地面に押し倒し、その先を喉元へと突きつけていた。

「そもそもろくに魔術も扱えないお前が、どーしてこんなところにいるの。妙な正義感にでもかられたか？ それとも主戦力のみんなに置いてかれて、1人ぼっちで待っているのが怖くなったの？」

彼女は今、『清教派』からの助言でもあったのか、ボウガンに四大属性の色に対応したマジックの線を引いているが、カーテナⅡオリジナルを持つキヤーリサからすればゴミ同然だった。

「他人が起動した霊装を動かすのではなく、生まれて初めて自分の力だけで他人を害する魔術を発動し、地下鉄を利用して私のカーテナⅡオリジナルを暴走させたことで、有頂天にでもなっていたの？ ……」

たった一度の偶然で無邪気にはしやぎやがって。所詮、この辺りが無能なお前の上限じゃないか、お・ひ・め・さ・ま？！」

馬乗りのようになりながらせせら笑うキヤーリサであったが、その表情がすぐに止まった。

なぜなら、ヴェリアンが彼女へとまっすぎに見つめ返していたからだ。

「……私を逃がしてくれるために、使用人やウィリアムが突きつけられていた物は、こんなにも恐ろしいものだったのですね。ならば、い

い加減に私も立ち上がりましょう。一国の姫として、このような多大な恐怖から、皆を守るための屋根となれるような人物になるために！」

彼女は叫ぶと同時に、喉元の剣を無視してボウガンを構えた。相討ちも覚悟すると言わんばかりに迷わず引き金を引く。キヤリーサは首を振ってそれを回避したが、そこに余裕は見られなかった。

しかし、ボウガンに新たな矢をつがえる余裕はない。

「眠れ、夢想家」

これまでとは違う、恐ろしいほどの無表情で、キヤリーサは告げる。そして。

「パガツ！ と。」

ヴィリアンの放った矢は、カヴンⅡコンパスの大規模閃光術式に直撃した。

閃光は数十トンもの水の塊へとその姿を変え、夜空で不気味にうねる。大質量のそれはしなりながら、空中を旋回するグリフォンⅡスカイをも巻き込んでキヤリーサへと落ちていく。

（コンビネーション攻撃!?!）

ヴィリアンには、具体的な魔術を扱うだけの知識はない、まったくの初心者と言っても良い。しかし、知識を他者から借り、そして火力をこうして補えば、彼女自身は起爆剤を用意し、使用するだけであると連続的に爆発が発生する。

まして、『清教派』には禁書目録と幻想創造という最強タッグが存在する。2人が助言するだけで、素人であってもこれだけの、いや、これ以上の魔術が用意されている可能性もある。

「くそ、小細工をー！」

ヴィリアンは吐き捨てるように言いながら、巨大な水の塊を回避する。その間に、ヴィリアンは微かに震える手を強引に抑え、ショットガンのようなスライドを引いて次の矢をつがえていた。

「ご存じありませんでした？ 姉君が『軍事』に優れているように、私

は『人徳』に優れていると言われていることを」

再びボウガンの矢がカヴァンⅡコンパスの閃光に衝突し、ゴルフボールくらいの球体が辺り一面に降り注ぐ。そして、まっすぐにキャーリサへ駿斗が正面から衝突し、刃を交えてヴィリアンへの道を塞ぐ。

しかし、キャーリサはそれでもジグザグと小刻みな挙動で豪雨を回避しながら、少しずつヴィリアンへの距離を詰めて行った。

「これが他力本願の限界だ！」

「ええ、これが他力本願の限界です。姉君」

ドバツ！ という轟音が炸裂した。

それは大量の足音だ。ヴィリアンは神裂によって再び奥へと下がり、入れ替わりに新生天草式を中心とした近接戦闘のメンバーが、今までの3、4倍の速さで飛びかかってきた。

（まさか、先ほどの豪雨の正体は——攻撃ではなく、身体能力増強用の術式か！）

ならば、100メートル級の巨大な残骸物質を生み出し、丸ごと地面を耕して、地面に埋まっている術式の核を取り出してしまえばよい。

そう考えたキャーリサは、全力で体を回転させて剣を振り抜く。

しかし、全次元は切断させなかった。

残骸物質が生み出されるまでの、1.25秒の空白。

大きすぎる斬撃は、その間に当麻の右手で打ち消される可能性を高めることを意味する。

シツパアアン！ と鞭うつような音と共に、半端に裂かれた次元が元に戻った。

その『不発』と併せるような形で。

第三王女ヴィリアンが夜空に向けてボウガンを放ち、

同時に駿斗がその杖に莫大な天使テレズマの力の光を宿らせる。

『軍事』に優れているはずのキャーリサは、一瞬迷ってしまった。

単純な戦闘能力なら、ヴィリアンよりも駿斗の方が驚異的だ。しか

し、ヴィリアンがあのような小細工をしているのに彼が関わっているならば、そのような思い込みすらも危ない可能性がある。

結論から言えば、今回もヴィリアンの『人徳』が働いた。ただし、キヤーリサの想定の外をかく形で。

「軌道^Bを歪曲^A、下方向^Cへ変更^D！」

インデックスの『強制詠唱^{スベルインターセプト}』が響く。ただし、それはキヤーリサの持つカーテナに向けられたものではなかった。彼女ですらも、まだ完全に解析が終わってはいなかったのだ。

その代わりに手にしていたのは、カヴンⅡコンパスとつながる通信用霊装。

巨大な光の柱が、直角に折れた。それは間にあるグリフォンⅡスカイを容赦なく貫通すると、構えたカーテナⅡオリジナルの死角を縫うように、一直線にキヤーリサへと突き刺さる。

同時に、駿斗はその天使の力を解き放つ。ただし、彼がいる場所からでは防御されてしまい、逆にカヴンⅡコンパスの攻撃を妨害しかねない。彼が行ったのは、その衝撃に備えるための防御術式を周囲を覆うように発動することだった。

爆発。

駿斗の庇護をうけることができた魔術師はよかったものの、その外にいた魔術師はその衝撃で地面に転がった。

直撃か所には半径20メートル以上のクレーターが出来上がっていた。

やりすぎたんじやないか、と当麻は一瞬考えるが、駿斗が再び天使の力をその杖に集約したこと、そして続けて聞こえてきた声で、その考えを改めさせられる。

「……流石に、今のは効いたし」

爆発の中央から、キヤーリサが姿を現す。ドレスにはところどころ破けている箇所もあり、肌には赤くにじんんでいるものがあることも確認できる。しかし、キヤーリサは膝を突いてはおらず、カーテナも折れてはいない。

(マジかよ……)

駿斗も、今までに見たことがないほど険しい表情をしている。

あれだけの攻撃を受けてなお、未だに戦闘に支障が出るようなダメージを負っている様子が、キヤリーサには見受けられなかった。

「……やはり、カーテナⅡオリジナルを破壊しない限り、どうにもならないようですね」

神裂が苦い表情で呟く。

対して、キヤリーサはぐるりと自慢の剣を肩に担ぐと、軽く夜空を見渡した。

彼女の用意したグリフォンⅡスカイは、カヴンⅡコンパスやセルキーⅡアクアリウムによる遠距離砲撃と、『清教派』による地上からの攻撃によって、ほとんど全滅状態であった。そして、全員が見ている目の前で、最後の1機が墜落していく。

「やはり、無人機ではこの辺が限界だし。いや、攻城用に設計されていた物を真逆の迎撃に使ったのだから、単にスペックの問題だけではないのかもしれないが」

しかし、彼女には余裕があった。駿斗は警戒しながら話す。

「さすがに、これ以上大型霊装を用意しているとは思えない。莫大な魔力も感じない。アンタ以外にはな。このまま押ししていけば……」

「おやおや、雑魚を倒してレベルアップしたつもりにでもなっているの？」

彼女はドレスの開いた胸元に手を伸ばすと、そこから小型の無線機を取り出した。

その理由に本当の意味で気が付いたのは、やはり駿斗。

「あれを使わせるな！」

ウェーブインターフェース

駿斗は、すぐに波動干渉を発動しようとするが、キヤリーサは気楽な様子で残骸物質を彼に向かって蹴りあげると、その対処に追われているのを尻目に無線機に向けてこう告げた。

「ドーバー海峡で哨戒行動中の駆逐艦ウインブルドンに告ぐ。バンカークラスター弾頭を搭載した巡航ミサイルを準備するの。弾頭の起爆深度をマイナス5メートルに設定、ミサイルの照準をバツキング

△宮殿に合わせ——即時発射せよ」

その意味をすぐに理解したのは、科学サイドの2人だった。

「ばっ、バンカークラスターだって!」

軍用のシエルターを破壊するために開発された特殊弾頭だ。空中で分解を起こして1発から200発ほどの小弾をばらまく。1発で半径3キロ四方が吹き飛ぶような代物なのだ。

「そんなもの使用したら、宮殿どころじゃない! ロンドン市街が吹き飛ぶぞ!」

「わめくのは結構だが、巡航ミサイルは速いぞ? 100キロ程度の距離など1分ももたないはずだし」

特にイギリスは、ローマ正教圏の国からの圧力で、コンコルドやユーロファイターなどの旅客機・戦闘機の共同開発という名目で開発費をねだられていたという経緯がある。そのため、イギリスの超音速関連の技術はヨーロッパの中でも強いのだ。

「やらせはしません」

神裂は、空中に半径100メートル単位でワイヤーを張り巡らせた。聖人の領域にいるからこそ可能な、街のブロック1つを覆う防護魔術。

「無防備だな。思惑通りだし」

しかし、それをあっさりとかやーリサが切り裂く。

「神裂は、魔術に専念してくれ! あいつは俺が!」

駿斗は『神の力』^{ガブリエル}を模倣する翼を生やすと、かやーリサに向かって水翼を放った。しかし、彼女はそれごとまとめて防御術式を切り裂く。例え四大天使の一角であっても、天使長の前では無力であると言わんばかりに。

その直後、バンカークラスターの小弾頭が降り注いだ。

起爆深度はマイナス5メートル。つまり、あえて地上近くで爆発するようにしているのだ。

その直前、恵みの光を一身に受けるように両手を広げたかやーリサを、当麻は見ていた。その視線に彼女は気がつく、顔を正面に戻し、

今までには見たこともなかった、笑顔という名前の全く違う表情を顔全体で表現しながら、何かを呟いた。

何を言ったのか、当麻には聞こえていなかった。そして、必死で防御術式を再構成する駿斗は、それを見ていなかった。

直後、バツキングダム宮殿に暴力的な雨が降り注いだ。

視界は真っ白に塗りつぶされた。

意識の断絶があった。当麻が覚えているのは、体が投げ出されるような感覚だけだった。しばらく呻き、指を動かし……ようやく、当麻は自分が生きているという事を何とか自覚した。

一方で、駿斗は自分の体が『天使の力』でかなり強化されていたために、さほどダメージを受けずに済んでいた。また、とっさに念動鎧フォースアーマーを発動したことも、幸いだったのだろう。天使の力による強化が主になってから使用しなくなっていたが、思わぬところで役に立った。

2人は立ち上がると、まずお互いの無事を確認した。しかし、すぐに周囲の惨状を見渡す。

以外にも、ロンドン市街には火災や倒壊は広がっていないなかった。神裂が途中まで張っていた防護結界は、切り裂かれていない部分が機能していたのだろう。こぼれた分にしても、魔術師たちは各々で防御策を取っていたはずだ。

「イン、ゲックス……？」

当麻の呟きに、答える声はなかった。

「神裂！ 建宮！」

駿斗の叫びが、静寂の中に響いて消えた。

「シエリー、アニエーゼ、オリアナ！」

「オルソラ！ ルチア！ アンジエレネ！ くそ……」

かすかにうめき声のようなものが聞こえたが、はつきりとした返事はなかった。すぐに駿斗は万象再現リテロダクションを周囲に施すが、しかしそれでも未だ反応するものはいない。

その中で、1人超然とした様子で立っている者がいる。

「さあーと、と。希望はまだ残っているの？」

ニヤリと笑い、彼女は見せつけるように再び無線機を口に寄せる。

「――駆逐艦ウインブルドンに告ぐ。バンカークラスター、続けて発射準備せよ」

バツキングダム宮殿から離れたビルの中では、第二王女キャーリサの護衛の任に就いていた騎士たちは皆、倒れていた。彼らは、カーテナ
|| オリジナルの暴走の後に『騎士派』を統率し続けるために『見せしめ』を受けた者たちであった。

その中で、1人の騎士が起き上がった。彼は他にも『生き残り』がないか確かめようとするが、その時通信用の霊装から声がした。

『聞きなさい。私は英国王室第一王女・リメリアです』

本来ならば、通信用の霊装に割り込みをかけられたことに警戒を抱くべきであるが、彼はあまりの激痛にただ呆然と流れてくる言葉を耳にしていた。

『エンジンバラに放っていた密偵からの報告により、クーデターの首謀者キャーリサの真の狙いが分かりました。これは恐らく、あなた方「騎士派」の者にも伝えられなかったであろう、わが妹キャーリサが胸に秘めた本当の狙いです』

騎士は話の内容よりも、自分の現状に疑問を持っていた。

自分たちはバツキングダム宮殿において『見せしめ』にされたはずであった。筋肉も内臓も骨格も神経も痛めつけられたうえで殺されたはずだったし、何者かの手によってここに運ばれたことに対しても謎だった。

しかし、圧倒的な無気力感、彼から考えようとする気力を奪っていた。

それでも、リメリアの言葉は続く。

『彼女はこの国の「軍事」を司る代表者として、ローマ・ロシア勢力からイギリス国民が脅威にさらされていることに、誰よりも責任を感じていました』

その時、金属音がした。

騎士が振り返ると、彼と同じように同僚の1人が鎧を動かして起き上がるようにしていた。

『このままでは、イギリスという国家そのものの価値や尊厳が奪われてしまう、とキヤリーリサは結論付けました。戦争によって激変する時代そのものにイギリスの民が滅ぼされぬようにするためには、武力によって国家の価値や尊厳を守るしかない、と』

彼らは、彼女の言葉をそれまであまり聞いていなかった。今更キヤリーリサを庇うような言葉を聞いたところで、これまでの横暴から考えれば、全てが欺瞞に思えてしまうのだ。

『そして、同時にキヤリーリサは悩みました。……もしも国家元首の手に絶対的な力カーテナがなければ、ローマ正教との戦争がここまでひどくなる前に民の言葉に耳を傾けて、国家の舵取りを修正する機会があつたのではないか、と』

しかし、彼らは気が付いた。

あれだけの暴力を受けてなお、彼らは動ける。

行動不能に陥っている者はいなかった。一生引きずるような後遺症が残っている者はいなかった。

あれだけの暴虐の中で、死者は1人もいなかった。

第二王女の姿を見た。嵐の中心にいるようなその姿は、なぜか寂しそうに見えた。

騎士団長と傭兵

『結論を言います。キヤーリサの狙いは2つ』

1つ目は、圧倒的な暴君として君臨することで、フランスおよびローマ正教・ロシア成教からのイギリスへの影響力を排除し、後世にこの国の汚点と言われるようになってでも、イギリスを守ること。

2つ目は、カーテナを封じ、無能な王政を排除することで、国家の暴走を民衆の考えで止めることができるようにすること。

『キヤーリサはそれらの目的のために、「カーテナという極悪な兵器を振るい、国の内外にいる多くの敵を虐殺してしまった罪」を、暴君としてたった1人で背負おうとしているのです』

騎士たちは考える。

もしもキヤーリサが、自分へ失望の目すら向ける部下であっても殺さないような人物でいてくれるとしたら。

これ以上、道を踏み違えさせられるわけにはいかない。

カーテナ²オリジナルの力を使わなくても、ローマ正教との危機的状況を乗り越える手段はあるはずだ。

そう。

キヤーリサをも含む、英国王室の女王と三姉妹全員が全ての力を合わせることできたら。

その頃、騎士団長^{ナイトリーダー}は第一王女リメリアと同じビルの屋上で、彼女の言葉を聞いていた。

「私はあなた方の行動を強制しません。あなた方にも国家の他に守るべき家族がいて、友人がいて、恋人がいる事でしょう。彼らを悲しませないため、逃げ出すことを否定はしません」

最後に、彼女はこう締めくくった。

「ですが、もしもわが妹キヤーリサを哀れに思う方がいるのであれば、第二王女という立場に関係なく、1人の女を助けたいと思う騎士がいらっしゃるのでしたら、今一度、剣を取ってはいただけませんか。おそらく、それだけで救われる女がいるはずです」

どれだけの力を揮えるかではなく、本当の意味で自分のために戦っ

てくれる人物がいる、という事実が伝わるだけで、救われる女が。

(もはや、イギリス全土に命令を飛ばす必要すらあるまい)

騎士団長は音もなく頷くと、どこからともなく1本の剣を抜いた。それ自体は先ほどウィリアムと戦った時に使ったロングソードだが、すでに赤黒く変色した『フルンテイング』は使用できなくなっている。しかし、その銀色の輝きを放つむき出し鋼は、今までよりも力強く見えた。

(言葉に出さずとも、我らのなすべきことは決まっている)

騎士の長が、ビルからビルへと高速で飛んでいく。そしてついに、リメリアは一度も背後にいた騎士団長へ振り返ることはなかった。

彼女は、自分を第一王女だと知っている者を信用しない。そして、そのようなものに自分の後姿をさらしたりはしない。

(……民を思い、クーデターを実行するほどに変わってしまったキヤーリサに、そのクーデターで苦しめられている民を見て成長したヴィリアン。……同じように、今度の件で私も少しは『強く』なれたのかしらね)

地面に倒れたままのヴィリアンは、朦朧とした視線を2人の少年の背中に向けていた。バンカークラスター爆弾によってほぼ壊滅状態となった『清教派』残存勢力の中で、必死にキヤーリサに抗い続ける2人の少年の背中に。

彼女もまた、通信用霊装から流れるリメリアの言葉を拾っていた。

あの少年2人は、今の言葉を聞いていただろうか。

ただ1つ言えることは、彼らは全く揺れていなかった。キヤーリサの真の意図を知って揺らぐ『清教派』残存勢力の中で、彼らだけが。

「さーどーする?」 2発目のバンカークラスターは発射されたし!

先ほどまでとは違い、今度は魔術師共も防御結界を張るだけの余力はないだらうなあ!

「まだだ! セルキー! アクアリウムの弾幕を借りれば!」

「そんなことができるなら、先ほどの1発目も迎撃されているはずだ

し。この私が手掛けた巡航ミサイルは、そこ簡単には撃ち落とせないの！」

「当麻！俺がなんとかバンカークラスターを迎撃するから、キャーリサからの防御を頼む！」

ウイリアムⅡオルウェルとは違い、完成された主義や思想など持っていない傭兵。確かに彼らは、常に正しい選択はできないだろう。実際、キャーリサや『騎士派』に騙され、クーデターの発生を止められなかったのだから。

だけど、あの2人はそこに留まらない。

たとえ間違えたとしても、絶対に諦めない。どれだけ状況が悪化しても、そこからきちんと逆転できる最良の策を、どうあっても掴み取ろうとする。

だから、この2人は揺らがない。笑って迎え入れることはあっても、驚いて迷うようなことはありえない。

最初から完全に正しくあろうとする者と、最後にはみんなで笑えることをしようとする者は、果たしてどちらが尊いのだろうか。

「ほーら、バンカークラスターのご到着だし」

リメリアに胸の内を暴かれてもなお、暴君として君臨しようとするキャーリサは、両手を広げて夜空を見上げた。

暗い空の一点に、星とは異なる光が存在した。

「吹き飛べ愚民ども！これが我が『軍事』の本領だ！」

そして、駿斗の迎撃用の魔術が全て次元ごと切り裂かれたその時、バッキンガム宮殿の上空にまで巡航ミサイルが迫る。

そこへ、

「——ゼロにする！」

遠方から、新たな声が届いた。

直後、ミサイルは誤作動を起こした。既定のポイントに到達しても小弾がばらまかれることはなく、そのまま地面へと落下する。しかし、落下しても爆発しないどころか、かなりの重量を持つ金属の塊で

あるにも関わらず、地面を傷つけることなく、何度もバウンドしながら転がっていった。

兵器の攻撃力をまるごと奪ったかのような、不自然な現象。

呆然とする第三王女に向かって、キャーリサがさらに残骸物質の塊を蹴りつけた。その杭はまっすぐに彼女の顔を打ち抜かんと迫るが、駿斗が対処するよりも早く、それを真横から現れた影が右拳で殴り飛ばす。

その拳からは、赤黒い血が流れていた。

「……やはり、カーテナⅡオリジナルとそこから発生する諸現象には通用せんか」

「騎士団長……？」

大勢の『騎士派』の男たちを連れて現れた男は、震える声でヴィリアンに呼ばれても振り返らなかった。

「罰には応じます。このクレーターが終わったら、私の首は処断してもらって結構。ですが、せめて処断を受けるまでの下準備程度は、我らの手で。なおかつ、願わくば……再びあなたたち『王室派』が力を合わせ、フランスやローマ正教と正しく向き合ってくれることを」

騎士の長は、血まみれの手で銀色へ戻ったロングソードを構えた。

そこで、明らかに不利な状況で死地に赴こうとする彼に、ヴィリアンが言った。

「待ちなさい」

今までとは異なる、ヴィリアンの芯の通った言葉に、騎士団長は思わず足を止めた。

「身勝手な死を押し付けられても、迷惑なだけです。本気で償いをしたいと思うなら、喜ぶようなことをしていただきましょう」

その言葉をしばし噛みしめた後に、彼は迷うことなくキャーリサと当麻・駿斗の間に足を踏み入れた。

「班を2つに分ける。1つは辺りに倒れている『清教派』の回収と回復を。1つはキャーリサ様を直接止めるための攻撃を」

傷だらけの鎧をまとった男たちは、その短い指示に対しても迅速に動いた。

「……必ず勝つぞ。これ以上キヤーリサ様を一人きりにさせるわけにはいかん」

騎士団長は、駿斗と当麻が並ぶその横に立つ。

「すまない。わが国と王女の行く末を、君たちに預けっぱなしにしてしまったな」

その言葉を聞いた2人の言葉は、短かった。

「頼むぜ。イギリスの騎士さん」

「おう。あいつを止めるために、協力してもらおうぞ」

3人が同時に動いた。

当麻は全次元切断を打ち消すために。騎士団長は直接的に切り込み、カーテナⅡオリジナル自体の動きを食い止めるために。そして、駿斗はカーテナⅡオリジナルを抑えると同時に、キヤーリサ自身に攻撃をするために。

騎士団長はちらりと己の武器である銀色のロングソードを見た。カーテナⅡオリジナルからの力の供給が絶たれてしまったために、フルンテイングへ変化させることはできなくなっていた。使用が可能なのは、自前で用意したソーロルムの術式と高速移動用の補助術式のみであるが、ソーロルムの術式はカーテナⅡオリジナルには通用しないし、頼みの剣術にしても、カーテナⅡオリジナルからの供給がない今では、その力も大幅に削がれている。

しかし、そのような状況の中でも、騎士団長はいつもの調子を取り戻したかのような気障ったらしい笑みを浮かべた。

「(……半分の速度を出せれば良いところ、か。だが、殺さずに止めるにはこの状況の方が有り難い!)」

「なるほど、『人徳』のヴィリアンに続いて、『頭脳』の姉上まで来るとはな!」

騎士団長は剣の鎧の部分を正確にたたき、カーテナⅡオリジナルを弾く。

キヤーリサは自らの姉の演説を狡猾、と評した。

確かに、全員がカーテナリオリジナルの力に心を折られかけたそのタイミングでのあの演説は、辛い食べ物を食べた後に甘い飲み物を口に含んだかのような、特別な効果があった。

さらに、あの演説の対象は『騎士派』全員であるかのように見せかけておきながら、その実は騎士団長個人に向けられたものだ。なぜなら、組織のリーダーを制御した方が、結果として組織全体の行動を統率しやすいのである。

しかし、そのことを指摘されても、騎士団長は表情を崩さなかった。「構いません。どれだけ演出されたものであっても、あなた様をお助けする原動力となるならば、『頭脳』のリメリア様に踊らされるのもまた一興でしょう！」

「チツ、気持ちの悪い男だな！」

さらに『騎士派』の闘志がより苛烈になっていくのを、キャーリサは感じた。それだけでなく、倒れていた『清教派』の人たちも、駿斗が戦闘と同時並行で発動している回復魔術や『万象再現』リフレクタクションにより十分に復帰が可能となっており、加えてイギリス各地から次々と騎士たちがこの場所へ集まってきている。

（忌々しいが、巡航ミサイルの出し惜しみはなしだ！）

ゴバツ！ と大きな音が響いた。

彼女は大きくカーテナリオリジナルを振るって牽制すると、一度彼らから距離を取って通信機を手にする。それを見た駿斗は目を細めた。

「またバンカークラスターか？ 悪いが、騎士団長が協力してくれている以上、単なる弾の無駄遣いにしかならねえよ。それに、俺も徐々に似たような魔術を同時構成しつつある。今この時は使えなくても、この後使われたところで、俺はロンドン全域の武器を無効化するようなことだって可能になる」

「ならばこゝろ指示しよう」

彼女はそう言うと、指示を出した。

駆逐艦7隻から、総勢100発のバンカークラスターを発射する。バッキンガム宮殿に照準を合わせ……そして、それらを幻術で隠す。

「一発でも逃せば全員が死滅する状況で、わが剣を押し返すことができるかどーか、英国の騎士の真髓をテストしてやろう」

「チツ、止めるぞー!」

駿斗と当麻、騎士の長が同時に前へと駆け出そうとするが、すでに遅い。駿斗や騎士団長が万全の状態ならば間に合ったかもしれないが、仮定の話でしかない。

「該当する五隻の駆逐艦に次ぐ。バンカークラスターを発射せ——」
そこまで言った次の瞬間、キヤリーサは怪訝な顔をした。そして、すぐにその場から飛び去る。

ドツパアア! と。

軍用を使う巨大アンテナが、先ほどまでキヤリーサが立っていた場所へと勢いよく突き刺さった。

その残骸の上には、1人の男が立っていた。

「なるほど、余計な真似をしてくれるし……ッ!」

今まで以上に、いや、クレーターが始まって以来、一番忌々しそうな表情で低い声を放つキヤリーサ。

男は、アンテナから騎士団長の隣まで飛び降りるところこう言った。

「遅れたか。科学については少々見聞きする程度でな。付近の軍用アンテナを片っ端から探し出して破壊するのに、少々手間取ってしまったようである」

個人の戦闘はおろか、集団の戦闘においても戦い慣れたあの傭兵が、ついに戦線に加わった。

相変わらず、憎らしいほど最高のタイミングで。

「……よもや、この人生でもう一度、お前に背中を預ける時が来るとはな」

騎士団長は、旧友に話しかけているとも独り言とも取れる声で呟いた。

「フルンティングへの移行は不能、であるか。せいぜい足は引っ張らぬようにな」

「ぬかせ」

2人の間に言葉は必要なかった。かつて共に数々の強敵を打ち破ってきたときと同じように、彼はぞんざいな調子で信頼を預けるように、こう言った。

「行くぞ。互いの10年の研鑽を、それぞれ点検してみることにしよう」

ゴバツ！ と大地が裂けた。2人の脚力に、地面の方が耐えきれなかったのだ。

アックアは右から、騎士団長は左から、回り込むような挙動で彼らはキヤーリサの元へと突き進み剣を振るう。

「チツ」

キヤーリサはアスカロンを回避し、残骸物質の盾で騎士団長の攻撃を受け止め、

「――斬り飛ばすぞ、首」

剣と剣が衝突した。

しかし、全次元切断によってアスカロンごとアックアが斬られることはなかった。鏢の部分をぶつけ合うように、叩き付けたのだ。

(……痛つつ……ッ!?)

予想外の反動に、今まで一方的に押ししてきたキヤーリサが押し返される。そして、そこに生まれたわずかな空白に、駿斗と神裂が突撃する。

彼女は、何かの布を左右非対称の服装の上から着ていた。

(産着……神の子である『聖人』専用の霊装!?)

恐らく、神の子の出生の伝承から創り上げられた霊装で、『聖人』の能力を強化するものだろう。しかし、世界に20人しかいない『聖人』専用の霊装を、現在使用している霊装を妨害することなく機能する形で創り上げるなど、普通はできないはずなのに……。

(まったく、厄介な相手だし！)

神裂とは反対側から回り込んで杖を打ち付けてくる駿斗を忌々しそうに睨みつけながら、キヤーリサは残骸物質を蹴りあげて駿斗の妨害に当てると、今までよりもさらにスピードを増した神裂の刀へと剣の軌道を変更し、これの防御に当てる。

さらに、そこに生じた隙にアックアに加えて騎士団長もダメ押しとばかりに動いた。

「おおおおおおおおおおおッ！」

アックアの足を蹴ってそのバランスを崩し、神裂の刀を弾き、体を回転させて駿斗の氷の剣を押し返し、騎士団長の攻撃から逃れるべく、大きく後ろへと跳んだ。

これまでとは違う、全力の回避だった。

4人の超人は、それを黙って許すはずがない。

火花の嵐が、それに伴って移動する。カーテナ||オリジナルの斬撃から残骸物質が生まれる1.25秒の猶予が遅く感じられるほどの速さで、5人の斬撃が続く。

「っ!？」

駿斗の攻撃にわずかによるめいたその瞬間、キヤーリサは強引に、発生した残骸物質2つをシンバルのように打ち付けた。

ドツパアアアアン！ という衝撃波と共に、打ち上げ花火のように破片が散った。その勢いを利用して50メートルほどの距離を取ったキヤーリサであるが、それは彼らにとって一瞬で詰めることができる程度のものだ。

彼女の額からは、一筋の赤い血が垂れていた。

「……なるほど……。そろそろお手玉も許容量を超えたか。いかに特別な力を手に入れていたとはいえ、さすがに聖人級の怪物が4人も集まるのは面倒だし」

『特別な人間』だけで、全てを成し遂げられるとは思わないことです」

神裂は特殊な呼吸法で体力を取り戻しながら、静かに告げる。

実際に、周囲にいる魔術師からの攻撃を意識しているからこそ、キヤーリサの選択できる手段も限定されてくる。それがさらに、神裂

たちに戦闘をやりやすくさせているのだ。
しかし。

「だが、だからこそ——そこに勝機があるとは考えなかったの？」

第二王女から、これまでにはなかった嗜虐性のようなものが感じられた。

その直後、残骸物質が彼女の蹴りによって砲弾のように放たれる。標的は4人のうちの、誰でもない。

後ろで倒れている『清教派』の手当てのために動いていた『騎士派』の集団だ。

(間に合え！)

駿斗は全力で天使の力を体に漲らせ、残骸物質の砲弾を弾き飛ばす。さらに、立て続けに現れた竹とんぼのような残骸物質が、集団に向かつて放たれると、騎士団長がそれを弾き飛ばすために動いた。

しかし、そこヘドツ！ という衝撃が入った。

キヤーリサによる攻撃ではない。『清教派』が迎撃のために放った魔術が、騎士団長に命中したのだ。

「……………」

悪意はなかった。

だが、結果だけは訪れる。

騎士団長は辛うじてロングソードで防御したが、そのまま地面に叩き付けられた。そして、中途半端に弾かれた残骸物質が『騎士派』の集団に落ちてこようとするのを、駿斗が迎撃する。

その間に新たな残骸物質が生み出され、それを迎撃しようとした神裂がキヤーリサによって吹き飛ばされる。

アックアはキヤーリサに向かって攻撃を放つが、こうなつては集団での戦いではなく個と個の戦いへと劣化してしまっている。鏢のところでわずかに拮抗したものの、いくつかの斬撃の後でアックアの体が後方へと吹き飛ばされた。

「数千だろーが、数万だろーが、集まったところで揺らぎはしないの」

敵の人数が増えても、それを逆に切り口が増えたとみなして攻撃を続けるキヤーリサは、そう言い放った。

「私が英国王室の中でも『軍事』に優れた者であることを忘れたの」

そんな戦いを眺めている者がいた。

魔術師でもなく、しかし全く無関係な一般人と割り切ることができない者でもなかった。彼らはバッキンガム宮殿で英国王室のために働いていた、下働きの使用人や料理人、庭師などだった。

本来王室の者に接近を許されるのは、主に近衛侍女や武装側近と呼ばれるいわゆる護衛をする者たちであるが、彼らは違った。第三王女ヴィリアンによつて招かれた、本当に王室とは関係のない民間出身の者なのだった。

彼らはロンドンまで来ることはできたものの、洗浄の中心地であるバッキンガム宮殿まで突入することはできなかった。しかし、その逡巡こそが彼らの素人臭さを露呈していた。彼らが立っているその場所は、キヤーリサの気まぐれでいつでも吹き飛ばせる位置であったからだ。

軍事的なクーデターという意味でも、物理法則を超える『魔術』の大規模内戦という意味でも、もはや使用人たちの心のキャパシティを軽く凌駕してしまっていた。

キヤーリサの心情が暴露されようが、それでも彼女は絶望の象徴であつた。

行けば一瞬で絶命するかもしれない。あるいは、足を引っ張つてプロが倒れてしまうかもしれない。

そう考えると、彼らは立ち尽くすしかなかった。

自分たちは民間人なんだ。魔術なんて訳の分からないものが出てきたら、出番などあるわけがない。民間人でも戦っている2人の少年だって、何か特殊な力を持っているらしいじゃないか。スカイバス365を乗っ取ったテロリストと戦ったりすることができるよう人間だったら、自分たちだって迷わず駆けつけられる。でも、自分たち

にはそんな特別な力などありはしないのだ。

だから、仕方がないじゃないか。

「本当に、そう思っているのか」

その言葉に顔を上げると、そこには見知った顔があった。

「あの少年たちとお前たちとの違いは、単なるその肉体に宿る力の性能の差だけと、本気でそう思っているのか？」

「……、」

他人の口から改めて質問され、使用人たちは黙り込んでいた。

本当は、分かっていた。

彼らはたとえ特別な力がなかったとしても、それでもあの場所に立っていただろう。むしろ、最前線にいるあの2人にたまたま特別な力が宿っていた、と考える方が自然な気さえした。

つまり、この内戦に参加できるか否かは、度胸や勇気によって決まるのだ。

「お前たちには、それがあるか？」

その質問に、顔を上げた。

俯く必要はなかった。気持ちの部分だけでもあの少年たちには負けない、と彼らは思った。震えあがるほどの恐怖を感じていても、戦いたいと思っていたからこそ、彼らはかろうじて逃げずに踏みとどまっていたのだから。

だから、彼らはこう言った。

自分たちも、一緒に戦いたいと。

「よろしい。ならばいっしょについてこい。足りない分は全部私が埋め合わせてやる」

英国女王エリザードは、大型船の船長のように力強い笑みを浮かべる。

必要なものはすべてそろった。

ここから先は、逆転劇だ。

連合の意義

ゴバツ！ という衝撃波と共に、2つの選定剣^{カーテナ}が衝突した。

その相手を見て、キャーリサは今までで一番大きな声を張り上げる。

「よーやく顔を出したの、元凶たる母上よ！」

これまで押され気味だった駿斗や騎士団長、アックアといった面々との間に割り込むように、真の国家元首はカーテナⅡセカンドを握っていた。

「好きにやるのは構わんが、やるなら徹底的に、そう、私以上の良案を示してもらわなければな。どうやら私以下の展開になりそうだったから止めに来たぞ、という訳だ」

「ほざくな元凶、そーまでして玉座が惜しいの！」

ズツ……という嫌な音が響いた。

2つの剣の力の質は全く同じものだ。したがって、総量の8割を握るオリジナルと残りの2割の力しか残されていないセカンドが衝突したところで、結果は見えている。

オリジナルの刃が、セカンドへゆつくりと沈み込み始めていた。

1センチほどまでそれが進んだとき、エリザードは再び剣を振るい、キャーリサはそれに応じた。剣と剣の衝突のたびに、柔らかい金属が削られて行くように、カーテナⅡセカンドから火花が散る。

「……どれだけお膳立てをして、組織と組織がぶつかり合ったところで、最後はカーテナどうしの激突となるか。難しく考えてきたところが馬鹿らしくなるよーな展開だし」

対して、カーテナⅡオリジナルには傷ひとつなかった。それが、歴然とした互いの力の差を示していた。

しかし、それを見て笑みを浮かべるキャーリサを見て、エリザードは小さく笑った。

「……意外と小さい女だな、わが娘よ」

「なに？」

「愚劣な王政の責任を取り、そしてイギリスの国民を守るため——暴

君と化してヨーロッパ中の敵国を丸ごと粉碎し、その後は政治のかじ取りを民衆に明け渡す。何やらスケールの大きな話だが、その端々にお前の小心が見え隠れしていることは気づいているか？」

母親として、女王としての言葉を投げかけるエリザードに、キャーリサは剣で応じた。カーテナⅡセカンドにはさらに大きな傷がつくが、それに気を止めず女王は言葉を続ける。

「本当にこの国を変えたいか。政治を形作る巨大な柱をへし折ってでも、民を守りたいと願うのか。それなら既存のシステムになど頼るんじゃない。やるならせめて——これぐらいやってみせろ」
言うて。

女王はカーテナⅡセカンドをキャーリサに向かって投げつけた。

並の魔術師ならそれだけで真つ二つに切り裂かれてしまうのかもしれないが、当然ながら、キャーリサはカーテナⅡオリジナルでそれを弾き、セカンドはどこかへと飛んで行ってしまふ。

それを分かった上で、彼女は剣を手放した。

「何を……考えているの？」

「変革だよ」

これから、彼女はそれを為そうとしている。しかし、キャーリサにはそれが分かっていないようだった。

だが、悔るな。カーテナを軸とした政治体制停滞するセオリーを覆そうとするならば、そのセオリーにとらわれることなく、行動するエリザードが正しいのだから。そして、その後の手札も用意してある。

「こ、れは……」

カーテナⅡオリジナルの調子がおかしい。

その様子を見て、駿斗は一瞬何が起こったのか分からず、しかしすぐに気が付いた。

（これは、『全英大陸』によって集められた力が、拡散している……？）
そんなことができるのは、1人しかいない。

「だから言っただろう。これが変革というものだ」と

エリザードは1枚の大きな布を広げた。

表には、見慣れたイギリスの国旗があり、そしてその裏には、白と

緑を基調にしたウェールズの国旗があった。

表の国旗は、イングランド、アイルランド、スコットランドのものを併合したデザインをしているが、ウェールズはその時イングランドに吸収されてしまっていた。したがって、彼らの文化にも敬意を示すために、このような形をとっているのだ。

英国を構成する四文化の象徴。

それは、カーテナ^{II}オリジナルの力の基盤となるもの。

「もちろんこれがあれば誰でも『できる』ものではないが……私の抹殺を最優先にしなかったのは間違いだったな。英国王室専用を設定された国家レベルの魔術の中には、こんなものも含まれているのだよ」その言葉を聞いて、インデックスと駿斗はまさか、という表情になった。

その予想を肯定するかののように、夜空に大きな一枚の旗が、一つの魔術の名と共に広がる。

ユニオンジャック
連合の意義。

「命じる」

女王の言葉が、全土へと響き渡る。

「カーテナに宿り、四文化から構築される『全英大陸』を利用して集められる莫大な力よ！ その全てを開放し、今一度イギリス国民の全員へ平等に再分配せよ！」

カーテナ^{II}オリジナルから、力が失われていく。

いや、一か所に集まっていた力が、イギリス全土へと広がっていくのだ。

「この力に上乘せして、クイーンレグナント英国女王エリザードから全国民に告ぐ」

カーテナの力は、王様と騎士を中心にしたピラミッドに力を与える。

だが、そもそも『王様になれる権利』とは何か？

「クーデターの発生によって、今日一日で色々なことがあった。軍の出勤、都市の制圧、ドーバーに放たれた駆逐艦、騎士たちによる戦闘

行為、おまけにバンカークラスターによる首都への爆撃。多くの者は本質として何が起きているかも分からないまま、しかしそれでも異様な被害にあっていることだろう」

それは、イギリス国民なら誰でも持っていたはずのものだった。

「だが、今のお前たちには抗う力がある」

『IF』のことを考え出したらキリがない。なぜなら、イギリス王室は数々の戦いの中で成立したものであり、少し歴史がずれていただけで、別の誰かが『王の血筋』になっていた可能性が否定できないからだ。国外との政略結婚や移住なども視野に入れると、無限に可能性が広がっていく。

ならば。

重要なのは……『イギリスを愛し、故郷としたいか否か』。ただそれだけではないか？

「詳しい理屈は明かせないが、今宵この一夜に限り、お前たちは平等にヒーローになれる。その上で、お前たちには選んでほしい。誰のために、誰と戦うかは、お前たちのその頭で判断しろ！」

女王は、国民に投げかける。

自分に協力してくれれば、感謝する。

クーデターに協力するのも、一向にかまわない。

全く異なる第三の道を提示するのも、問題ない。

『戦わない』という選択肢すらも許容する。要らなければ『返す』と念じれば力を返せる。自分よりも信頼のできる者に戦ってもらいたければ『渡す』と念じればそれで済む。

彼女は自分自身の言葉すら否定して、国民一人一人が自分で選んだ道を進んでくれることを望む。

そしてそれは、民主主義において最も基本的であり、最も大事なものであったとも言えた。

「……いい加減に、お偉い人間に好き勝手やられて振り回されっぱなしなのも飽きただろう？」

ちっぽけな一票が、国を変える。

「さあ、群雄割拠たる国民総選挙の始まりだ！」

——あるところでは、1人の少年が顔を上げた。

彼は映画館に監禁されていた。そこから体を起こし、出口へ向かう通路の途中で、両親と出くわしたが、彼らは驚かず、ただ1度小さく頷いただけだった。

(戦いたい！)

同じことを考えていた少年たちは、出れば射殺すると警告されたその中から、飛び出した。

——あるところでは、1人の軍人が拳を握りしめていた。

目の前を次々とヒーローたちが過ぎ去っていくのを見つめる。彼らは英雄になるのだろう。しかし、クーデターに参加していた木偶の自分には、その資格がない。すると、1人の父親が話してきた。「あんたの力が必要だ。確か、装甲車を運転していたな。そいつで戦場まで連れて行ってくれ」

彼はその言葉を反芻した後、ポケットから装甲車の鍵を出した。

——あるところでは、1つの魔術結社の妹が、勝手に飛び出して行った。姉である結社のボスは、妹を連れもどすように部下に怒鳴りつけた。

——あるところでは、『新たなる光』の少女たちが通信用霊装で相談していた。

『ぶっちゃけ、どうします?』

「どうしますって言われてもね……」

ベイロープは自分の頭を軽く搔きながら、ゆっくりと立ち上がる。

「はあ。ま、クーデターの共謀者が何を今更って感じだろうけど……一番イギリスのためになることをやるのが私たちの流儀なのよね。それならやつぱり、恥も外聞もなく動くしかないか」

——あるところでは、バッキンガム宮殿に勤めていた使用人や庭師たちが、我先にと戦場へ飛び込んで行った。そして、彼らは第三王女の下に集う。

「自分の頭で判断し、自由に使えと、女王陛下はおっしゃいました。な

らば、使わさせてはいただけませんか。クーデター発生時、そして地下鉄のトンネルでも、力及ばず示すこともできなかつた勇気を！」

彼女はその言葉に自らを恥じ、そして自らを慕ってくれる者たちと共に行く未来を思いながら、その手にあるボウガンを握る両手に力を込めた。

「……それなら、私も自分のために使わせていただきましょう」

「お、のれ……」

低い声を上げる第二王女キャーリサに対し、英国女王エリザードは自らが一代で築き上げた大企業を誇る社長のような笑顔でこう言った。

「大した変革だろうか？ どうせ歴史を変えるなら、国民みんなに活気を与えるようなものでなければな。特権階級だけが喜ぶやり方では、誰もついては来ないぞ。今から私が本物の国政を見せてやる」

「ふざけるな！ お前がやっているのは、何の力もない国民に武器を与えて戦場に送り出し、自分だけは安全な玉座の上で享楽に耽溺するよーなことだし！ 身に余る力を押し付けるだけ押し付けておいて、守るべき国民を盾にしてでも己の利権が惜しーのか!？」

「……そういう風に考えることこそが、王の傲慢だとなぜ気づかない？」

普通の民にはカーテナの力が使えぬなどと、誰が決めた？

カーテナⅡオリジナルを持つ新女王だけが英国を治め続けなければ国家が崩壊するなどと、誰が決めた？

結局そのやり方は、カーテナの力を自由に振るうことができる特権階級……『国家元首』という呪縛に囚われたままなのだ。

「なん、だと……ッ！」

「ガキの下らん自殺願望に説教をしてやると、1人の母親が言っているだけだ。後は……そうだな。お前があっさり絶望したほど、この国は安くはない。9000万人もの民が、ヒーローになる決意をしてくれませんか？」

女王のその言葉と同時だった。

ドツ！ という爆音が鳴った。それが大勢の人が生み出した足音だと気が付くまでに、キヤリーリサは少し時間を要した。その直後、魔術を知らない、使用人や庭師といった人々が、立派な脅威として襲い掛かってきた。

そう。

イギリス中の人々が、ユニオンジャック自らの旗の下に集い、この国を守るために。

（『連合の意義』……この国にはこんな隠し玉があったとはな）

駿斗は宙を舞う大勢の人々を見ながら、驚嘆していた。

『連合の意義』によってカーテナの力を受ける条件は『イギリスを愛し、故郷としたいか否か』。彼はイギリスという国自体は好きになったが、それでも故郷は学園都市だ。もつとも、無意識に『幻想創造』で勝手に割り込んだようだったので、力はインデックスに渡してしまっただ。

そのため、現在は戦闘よりも魔術の解析に重点を置いている。

（そろそろか）

カーテナの方はインデックスに任せることにして、駿斗はこのハロウィン・パーティーに参加することにした。

明らかに魔術を知らない風のメイドが10メートル以上上空からキヤリーリサを狙い、残骸物質でできた巨大な杭をスーツの社員が叩き落とす。

『普通』と『魔術』が混ざり合い、今まで誰も見たことがなかった空間が生み出される。

そんな一般人の様子を見たからか、『騎士派』による介抱を受けていた『清教派』の人々も立ち上がり始めた。『連合の意義』によるテレマ天使の力の供給だけでなく、素人に任せて自分が寝転がっているという事は、プロとして許せない矜持もあるのだろうか。

そんな様子を見ながら、女王は笑って娘を挑発する。

「ほらほら、どうしたキヤリーリサ、顔色が悪いぞ！ 確かにオリジナル

とセカンドの力の奪い合いでは負けを認めるが……9000万対1の綱引きでも力を保ち続けられるか!？」

「ほぎけ！ このっ、程度で、カーテナⅡオリジナルの力が揺らぐと思うな！ 地下鉄の暴走である程度の力を失っているとはいえ、現に今も、わがカーテナには……残された総量の8割強の力を維持し続けているの！」

「そうかもしれないが、わずか一瞬の『何か』だけで、その力は9000万人によつてそぎ落とされるぜ？」

母娘の間に、駿斗は割つて入った。彼もまた、エリザードのように余裕を見せた様子で、その場で杖を構える。

「貴様！」

「例えるなら、精密な儀式魔術を行っている神殿の中に、大量の義勇軍がなだれ込んできたような状況だな。力の制御を失った分だけ、こちらの力は増強する。あと、面白いものを見せてやるよ」

駿斗は笑うと、カーテナⅡオリジナルを振るうキャーリサの目の前で、堂々と『イマジン・コアロッド幻想核杖』を構えた。

「知つての通り、神仏を祀る行事というものは、世界各地にあつてな……それはつまり、『神様や天使に干渉する方法』もたくさんある、と考えることはできないか？」

慣れていないため少しとどしく、しかし優雅に駿斗はその体を動かす。

『幻想舞踊』。

即席であるが、しかし魔術的知識をギリギリまで活用して、『全英大陸』のつながりを通じて一気に術式を展開する。

その直後、キャーリサは思わず一瞬、手元のカーテナⅡオリジナルを見た。

さらに力が失われて行く。

いや、散つていくのだ。

駿斗が行っているのは『取引』。

人類が生まれてすぐ、はるか昔から、人々は神仏や天使の存在を考えると同時に、彼らに向けて祈つてきた。時には供物や生け贄すらさ

さげて、その力を借り受けようとしていたのだ。
それと同じ。

『舞踊』という『供物』を捧げることで、天使長の力を借り入れ、そして民に分配していく。

当然ながら、駿斗であっても1人ではこんなことは不可能だ。『連合の意義』という同種の魔術が発動しているからこそ、その『特例』は認められる。

(しかし……女王様はインデックスとは方向性が違うな)

かつて、インデックスは駿斗たちの教師である小萌に、魔術を教えただことがある。

正確には、彼女を誘導するような形で、間接的に回復魔術を使用させたのだ。だが、それは一対一の関係であつたからこそ、できた芸当だと彼女は思う。

イギリス国民9000万人もの人間を同時に誘導し、なおかつたった1人も暴走を巻き込ませない安定性を維持し続けることなど、自身の10万3000冊を活用しても可能であるとは思えなかつた。

だが、真に恐ろしいのはそこではない。

この戦いに参加している彼らたちは、この現象を自分なりの方法で解釈しようとするだろう。

——人体に秘められた不思議な力が覚醒したと考える人もいるかもしれない。

——占いの結果が最高過ぎてこうなつたと信じる可能性もある。

——エリザードは実は宇宙船でやってきた異星人の女王様だと思う人もいるだろう。

——ネス湖に潜む謎の恐竜パワーを借りているのだと判断する場合だつてある。

しかし、恐らくその中で『魔術』という答えを導き出せる者はいない。

女王はその臭いを徹底的に隠すことによって『魔導書の知識で民間人の脳を汚染する』というリスクすら回避しているのだ。

インデックスは宙を飛び交うメイドや料理人たちを見回す。

彼らは自分が扱っているものの正体には気づかないだろう。しかし、彼らはそんな状態でも今宵一夜限りのパーティーに全力で挑むはずだ。

これがエリザード。

様々な魔術に溢れ、そしてイギリス清教の総本山がある国を治める、本物の女王様。

「民だけには任せられん。なに、私も元々玉座よりは現場向きでな。

——正直、純粹に手合せする楽しさも感じてはいるんだ」

「ツ!? お前、その力……ツ！ カーテナⅡセカンドは自ら捨てただろーが！」

「阿呆が、女王としてイギリス国民の一人、清き一票を投じる権利くらいは持っているぞ。もはや生身の拳くらいしか振るえぬ身だが、僭越ながら花の部隊の最前線に立たせてもらおうか！」

その中で、インデックスはふと思った。

（もしかして……禁書目録わたくしが作り出されたもう一つの理由は、これをサポートするためのなのかも……?）

当麻は、目を輝かせていた。

この場にかけてつけた大勢のヒーローたちに、驚嘆していたのだ。

（あまりにも主人公が多すぎて、俺も、駿斗も、インデックスも、神裂も、アックアも、みんな霞んじまっているじゃねえか。何だよこの国。全員が主人公ってどういうことだよ）

おそらく、この光景の核は女王エリザードや連合の意義などではない。力はあるくまでも手段に過ぎない。真の核は、それを掴み、自らの遺志で立ち向かうことを決めた国民たちだったのだ。

カーテナⅡオリジナルを振るい、戦場の中にただ一つの台風の目として君臨する今のキャーリサは、しかし当麻にはなぜか寂しげな印象を与えてきた。

きつと、キャーリサは本当は知っていたのだ。この国の民の中に、どれほど輝くものが眠っているのかを。

だからこそ、それを守るために必死になった。しかし、その過程で1人になってしまった彼女は、自分の『軍事』ばかりに頼るようになってしまった。

守ろう、と当麻は思った。

こんなふざけた負の連鎖から、必ずキヤारीリサを引きずりあげてみせると。

「カーテナの軌道を上にも！」

斬撃を停止、

余剰分の『天使の力』を再分配せよ！」

彼が再びその戦場の中心へと足を踏み入れたその瞬間、インデックスの声が鳴り響いた。彼女の強制詠唱によって、キヤारीリサの剣が不自然に跳ね上がった。

その瞬間を逃さず、当麻は叫んだ。

ここからキヤारीリサの下まで走ったのでは間に合わない。だから、この最高の一夜へ、本当の意味で全力を注いで参戦するために。

「アックア！」

叫ぶと、屈強な傭兵は応じた。当麻が跳んだその足の裏に、さながらサーフボードに乗るような形になるかのごとく、大剣アスカロンを差し込んだのだ。

2人の間には、作戦会議どころか言葉を交わす余裕すらなかった。しかし、言わなくてもやることは分かっていた。

そう、それこそ傭兵のいつもの口癖のごとく、上っ面の言葉など必要なかったのだ。

「——ッ！」

アックアは短く息を吐くと、かつての敵対者に乗せた己の武器を、横に振り回すような軌道で思い切り薙いだ。負傷しているとはいえず、世界に20人といない聖人の全力でもって。

当然の結果として、剣の側面にいた当麻が聖人アックアの膂力を受け、キヤारीリサめがけて砲弾のように射出された。

着弾まで0.1秒あったか否か。しかしその一瞬の間に、キヤारीリサは確かに見た。

強く強く拳を握る当麻の顔は、力強く笑っていたことを。

ズツドオオオオオ！ と。

まっすぐに30メートルほどの距離を突き進んだ当麻の拳が、まっすぐにカーテナ||オリジナルに直撃し、一撃で砕いた。

キヤリリサには、それを確認している暇すら与えられなかった。剣を砕いた拳はそのまま直進し、キヤリリサの顔面に容赦なく突き刺さったのだ。

キヤリリサの体は宙を舞い、遠くへと吹き飛ばされて行く。

一方、当麻の体は地面で何度もバウンドしながら、最後によく着地した。キヤリリサを殴った時に肩と肘、手首の3点で嫌な音がしたが、それよりも目の前に突き刺さったものをしっかりと確認する。

折れた剣の先端が、彼の目の前の黒土に突き刺さっていた。そして、イマジンフレイカー幻想殺しによって霊装としての力を失ったそれは、ボロボロと風化するように崩れていき、そして当麻の見つめる中で完全に夜風に流され消えていった。

カーテナ||オリジナルは失われた。

こうして、第二王女による長いクーデターは、完全に終結する。

戦争の火種

「……我ながら、随分とド派手にやったものだな」

クーデター終結後の風景を見て、女王エリザードが言った。

カーテナ^{ユニオンジャック}|| オリジナルの破壊と同時に『連合の意義』によつて民間人に与えられていた力も失われ、彼らは『普通の人』へと戻つていった。力がなくなつて冷静になつたのか、会社員や学生たちがようやく目の前の光景に疑問の視線を投げかけている。

エリザードは一度は投げ捨てた『カーテナ||セカンド』を拾い上げる。いつそあの右手でスツキリと砕いてもらおうかとも考えたところで、騎士団長^{ナイトリーダー}が彼女に近づいてきた。

「そもそもの発端が私にもあるため、心苦しいのですが……これから、いかがなさいますしょう」

「いつまでも終わつたことを前にくよくよするな、馬鹿者め。貴婦人の前では死ぬほど強がるのが我が国の騎士道精神ではなかつたの？」
そういう姿は、とてもクーデターの主犯格を前にした一国の女王だとは思えなかつた。

この先、ほとんどの人は魔術というものの正体に気付きはしないだろう。後世に伝える良き思い出として、自分の心の中に残るだけだ。
しかし、その中から魔術について思い至る者が出てくる可能性までは、否定できない。

「その時はその時だ」

だが、エリザードはそのことまできちんと考えた上でそう言い切つた。

「もしそうになったら、認めてやればいい。この世界には魔術というものがあり、それは日々お前たちを影ながら守っているとな。魔術国家イギリスの新生とでも言うべきか」

歴史など、すぐに変わるものだ。魔術がそのまま永遠に人目につかない場所にあるという保証もない。実際に、アフリカの部族の一部では、魔導士の一種が部族の意思決定——政治のかじ取りを任されたりもする。決して不可能なものではない。

歴史にちよつとした『もしも』が起これば、いつでも実現するかもしれない変革程度のものなのだ。そのことは、先ほどのクーデターではつきりと示されている。

エリザードが言うからこそ、その言葉はおそろしく現実味を帯びていた。

「……さて、吹っ飛ばされたキャーリサを回収しに行かなくてはな。ん？ 表彰モノの少年2人はどこに行つた？」

第三王女ヴィリアンは、クーデターを収めた『清教派』や『騎士派』の集団から少し離れたところで、きよろきよろと辺りを見渡していた。人を探しているのだが、どうやら見つからないようだ。

「……やはりウィリアムは、一言も言わずに去ってしまったのですね」その表情には、落胆が明確に見て取れた。傍らにいた騎士団長が、頷いて言う。

「ローマ正教圏に大きな動きがあるようです。今、魔術と科学が正面からぶつかり合っている、この大きな戦に関わる重大な動きが。ウィリアムと共に『神の右席』を抜けた仲間からの情報を基に、イギリス清教とは別の方向からこの争いを止めるために行動するそうです」

「仲間、ですか」

その言葉に、彼女は反応した。

10年という歳月の中で、他の人々は色々なものを手に入れたいたのだ。先ほどの『仲間』というものが、特にそうであろう。自分だけが取り残される感じが、ヴィリアンの心にのしかかった。

そんな表情を見て、騎士団長は顔色に苦いものを混ぜる。

「……まったくあの野郎。傭兵という身軽な立場を利用して、この私にこんな厄介な役目を押し付けやがって……」

「？」

独り言が途中から口に出ていたのか、小さく首を傾げるヴィリアンに騎士団長は慌ててかしまった表情を作り、それから改めて口を開く。

「とある傭兵から伝言があります。他の者に聞かれぬよう、必ずヴェリアン様が一人の時に伝えてくれと前置きされたものですが」

「なん、でしょうか……？」

ヴェリアンは、かすかな期待と共に、その内容を尋ねた。

——いつか、この戦争が終わって世界が平和になったら、イギリスに帰りたい。願わくば、その時にバッキンガム宮殿の廊下に飾られるはずだった盾の紋章を、改めて飾ってほしい。自分はそれまで必ず剣と共に紋章を守り抜くので、あなたにはバッキンガム宮殿の修復と、障害となるであろう様々な事柄に打ち勝つだけの強さを手に入れてほしい……

「まあ、あの傭兵が誓いを立てるに足る姫君に成長してほしいという、あの男なりのプロポーズではないでしょうか？」

「……ッ」

第三王女ヴェリアンは目をまん丸にして驚いていたが、実はこのセリフには、騎士団長が勝手に、本人が告げてない台詞を織り交ぜてしまっていた。

内心で、彼は考える。

(この私の人格を熟知した上で、なおクサイ伝言を頼んできたのだから、どういう風に伝えられるかは分かっているだろう、ウイリアム?)

第二王女キヤーリサは、ロンドンの路上にぶっ倒れていた。

夜明けまでにはまだ少し時間があるのだろう。それに加えてクーデターが終結したばかりであることもあつてか、大通りにも車はなかった。最も、バッキンガム宮殿から2キロ離れているのか、3キロ以上離れているのか。派手に吹っ飛ばされたので、そのあたりも曖昧だった。

右手を握りしめれば、その手の中には柄があつた。未練がましく握られているそれは、折られたカーテナ||オリジナルだ。

考えるのは、9000万人の国民たちの力だ。それを実際に目の当たりにした彼女は、何が国民を守るだ、と吐き捨てた。結局、目の前

の状況に対して最も怯えていたのは、キヤリーサ自身だったということだ。

と、その時だった。

「ハハッ、こいつはすごいな。お前がそんな風に血と泥にまみれて地面に転がっている様なんざぞ、なかなか見られんものだと思っていたが……実際、目の当たりにしてみると予想以上に異様な光景だ」

男の声が聞こえた。

赤を基調にした服装の男。見た目からは対して鍛えているとは思えないが、その印象以上に不自然なまでの異様な重圧を与えてくる人間だ。

「誰だ……?」

剣の柄を握りしめてから、折れていることを思い出してそれを放り捨てた。

「お前は誰だ……?」

「右方のファイアンマって言えば分かってくれるかな? ここまでヒントを出しても分かんのなら、諜報系の部門を一度解体して組み直した方が賢明だ」

「っ」

右方のファイアンマ。

ローマ正教の暗部『神の右席』の最後のメンバーにして、最大の力を振るう者。記録によると、たった一撃で聖ピエトロ大聖堂を半壊させ、矛先を向けられたローマ教皇は今も予断を許さない状況にあるらしい。

「対応している天使は『神の如き者』……。カーテナが操るものと同質となると、狙いはこの剣か!」

「んー? そつかそつか、そういうやり方もあったかもしれないなあ」

ファイアンマはふざけた様子だ。

キヤリーサは挑発を放ち、相手からの反応を見る。

「だが、ここにあるカーテナオリジナルは、すでに機能を失ったし。クーデターの混乱を機に奪いに来たのなら、期待外れだったな」

「いやあ、そいつは純粹に惜しかったな。もしかすると、そっちのほう

が楽だったかもしれない」

彼は適当に呟いているようにも、真剣に感心しているようにも見えた。

「まあ、やっぱり無理か。無理だよな。力の質という部分ではクリアしているもの、おそらく容量の方がもたんだろう。俺様の力の移したとたんに剣の方が爆砕するのがオチだろうなあ」

「何を……言ってるの?」

「くだらん世間話だよ」

彼の言葉からすれば、この混乱を機にイギリスを訪れたのは間違いないようであるが、その狙いはカーテナ＝オリジナルではないらしい。

しかも、フランス政府をせつつかせて、このクーデターを誘発したこと自体、フィアンマの仕業であるという。

「なん、だと」

「ま、フランスとイギリスをガチで戦争させて、焼け野原になったロンドンから回収するって方向でもよかったんだが、その点ではお前は優秀だったぞ? 現実に、お前のくだらんママゴトのおかげで、この首都是略奪と凌辱の嵐にならずに俺様の目的を達せられることになったんだから」

カツ、とキヤリーサの頭に血が上った。

カーテナがあつたとしても、同質の力を自在に振るうフィアンマに勝てるという保証はない。ましてや、カーテナを失った今のキヤリーサには、勝てる見込みなど、ゼロと言っても過言ではなかった。

その通り、飛びかかるキヤリーサに対し、フィアンマは指も動かさなかった。ただ、轟音と共にキヤリーサの体が100メートル以上吹き飛ばされた。

フィアンマの右肩から、何かが生えていた。不格好な翼のような形をしている『右腕』だった。

「チツ、やはり空中分解か。我ながら扱いにくいじゃや馬を手にかけているもんだ」

わざと靴底の音を立てながら近づいてくるフィアンマを、キヤリー

サは睨みつけた。

「カーテナすらも霞むほどの物品だと。わざわざ戦争を起こしてまでして隙を作り、その間に何を盗みだそーとしてたの!？」

「分からんか？　ちよつとした『お宝』だよ。お前たち『王室派』がコソコソ作っていた、な」

その言葉に、キャーリサは心当たりを感じてギョツと身を強張らせた。

「實在……したのか……ツ!？」

「バツキングダム宮殿の中にポンと置かれていたから、俺も驚いたぞ。まあ、何しろ本当の意味で秘密の品だからな。いざというときに重要なものだけを持ち出すように指示されていた魔術師たちも、知らなかったのでは持ち出せないわけだ」

軽い調子で呟きながら、フィアンマは右肩を動かした。

「で、どうする？　諦めて生き延びるか、それともちよつと頑張つてみて死んじまうか」

「ぬ、かせ……」

体を傾けながらも起こし、それでもキャーリサの眼光は衰えていなかった。

「ローマ教皇が、どうして最後までお前に抗ったのか……分かるよーな気がするの……」

「そうかい。なら同じようにくたばるがいい」

足を引きずり、ボロボロになりながらも前に進もうとするキャーリサに対し、フィアンマがとどめとなる一撃を放つ。

そして。

ゴツキイイイ！ と。

突然横から飛び出した2人の少年が、フィアンマの一撃を防いだ。

正確には、1人の少年の右手が攻撃を受け止め、もう1人の少年が吹き飛ばされそうになるその右手と体を支えていた。

「何やってんだ、テメエ……!」

「当麻、この感じ……『神の右席』だ。気をつけろ」

駿斗の忠告に、ギョツとした様子で赤い男を見る当麻。その右手からは、動かすたびにゴキゴキと妙な音が生っていた。あまりの威力で、関節の様子がおかしくなったようだ。

「ファイアンマだ……右方のファイアンマ。『神の右席』の実質的なりーダーだし」

「おいおい、自己紹介ぐらいは自分でさせてくれよ」

今まで以上に拳を握りしめる当麻。駿斗もまた、警戒心を最大限に引き上げている。

「しかし、さすがは俺様が求める希少な右手。近くで見ると、改めてその特異性に驚かされる」

『求める』……?』

今まで、当麻を殺害しようとした魔術師はいたが、イマジンプレイカー幻想殺しそのものを狙った奴はいなかった。どちらかというと、駿斗の力の方を欲している可能性の方が高いと思っていた。

すると、ファイアンマの第三の腕が独立した蛇のように蠢き、のたうちまわり、今にも空気中に溶けて消えそうになっている。

時間切れか、とファイアンマは呟いた。

「驚くなよ。お前が持っている『右手』だって似たようなものなんだからな。俺様もお前も、その隣の貴様も未完成であることまでそっくりなんだが」

その時、ファイアンマの右腕が再び蠢いた。それを見て、彼は初めて顔をしかめた。

「しかしまあ、欲を張るのは良くないな。今日はこの辺にしておくか。ここで殺すのは簡単だが、万に一つでも奪った霊装を破壊されてしまいうリスクを負ってまで拘泥することでもない」

「霊装だ?!」

その言葉を聞いて、駿斗は一瞬カーテナ―セカンドのことを考えた。対応する大天使が一致している以上、その可能性が高いと思ったのだ。

しかし、ファイアンマの懐からでてきたのは、全くの別物だった。

見た感じは、金属製の錠前だ。ダイヤル錠の数字に当たる部分に、26文字のアルファベットが強引に埋め込まれている。

その形を見て、駿斗は嫌な予感がした。そして、キャーリサの叫びがその考えを肯定していた。

「まずい、あれを使わせるな！」

しかし、その言葉を聞いた2人が行動に移すよりも早く、ダイヤルを回した。そして。

ドツ！ という轟音と共に。

何か白いものがアスファルトの道路の下から飛び出してきた。

駿斗の背筋を、嫌な汗が流れた。

『自動書記』……だど!?』

襲いかかってきた彼女は、インデックスだった。そして、その姿はかつて自分たちの担任教師のアパートの部屋で見たような、あの姿をしていた。

「……イン、デックス……?」

驚く面々を見て、フィアンマが自慢げに説明した。

『自動書記』の外部制御霊装。『王室派』と『清教派』のトップが持っている秘蔵の品だ。

冷静に考えてみれば、10万3000冊を誇る禁書目録を、あの『首輪』のシステムを創り上げた最大主教が、科学の街に何の保険もなく預けるわけがない。

そして、インデックス自身も言葉を発した。

「はい、私は、イギリス、清教内……第零聖堂、区『必要悪の教会』……所属の魔導、書図書館です。正式名……称はIndex—Librum—Prohibitumで……ですが、呼び方は略称の……ジジザザガガガガ」

無表情に言葉を発していたインデックスの体が、その場に倒れた。

「インデックス！」

当麻と駿斗が叫ぶが、その様子を見てもフィアンマは首を傾げるだ

けだった。

「おや、もしかして『自動書記』にダメージでも入っているのかな。まあ、肉体の完全制御ができないのは残念だが、この程度ならなんとかなるか。……ちよつと霊装を細かく調節して『出力』を上げれば、10万3000冊の中から自由に魔導書の知識にアクセスできるだろうしな」

フィアンマの声色から感じられるのは、軽い失望だった。

それこそ、手に入れたおもちゃが思ったよりも面白くなかった、とでも言いたげのものだ。

「何をした……インデックスに何をした！」

大声で叫ぶ当麻に、フィアンマは両手を広げ、肩をすくめて答えた。

「知らんよ。整備不良はそっちのミスだろ」

「ダメエ！」

「待て、当麻！」

走り出そうとする当麻の体を駿斗が抑えつけ、空気を圧縮して肩を固め、強引にその右腕をまつすぐに突き出させた。

その直後、フィアンマの『第三の腕』から莫大な閃光がほとばしった。

「そうだな。ちよつとロシアの方に行つて天使を降ろした『素材』の方も回収しておかなくちゃならないし、それまでその右腕と肉体の管理は、お前らに任せておくか」

閃光が晴れた時、既にその先にフィアンマの姿はいなかった。駿斗は自分の方へ振り返った親友に対して、何も言わずにゆっくりと首を横に振った。

路上に倒れているインデックスを、その傍らで駿斗が屈み込んで診ていた。

「呼吸や脈拍、その他ホルモン分泌に異常はなさそうだ。……分かりやすく言えば、意識だけ他所に持ってかれているような状況だな」

しかも、自分自身の意志すらなくした状態で、と駿斗は付け加えて

言った。

「……どういふことだ」

「そう言つて最大主教ローラースチュアートに詰め寄つたのは、ステイルだった。」

「どういふことだ！ 一体……一体、どこまで他人を騙して、あの子を傷つければ気が済むんだ！」

上司と部下という立場を殴り捨ててローラの胸ぐらを掴み上げるステイル。そんな彼に横から口をはさんだのは、女王エリザードだった。

「やめておけ。禁書目録に複数の安全装置を取り付けることは、その子の基本的人権を保障する上でも必要な処置だった」

遠隔操作でロンドンから操ることができる仕組みを作つておかなければ、『禁書目録が何者かにさらわれる危険性』を考慮しなければならぬ。極端な話、ロンドン処刑塔の一室で永遠に幽閉したり、逃走を封じるために四肢を切断したり……といった処置が必要になった。

いざというとき、『これは制御できる安全なものだ』ということにしておかなければ、『禁書目録は危険だから殺してしまつた方が安全だ』という意見が出た時に反論ができなくなる。そのような極論を封じるためにも、安全装置を複数用意することが必要だったのだ。

「くそっ！」

ステイルは吐き捨て、ローラを乱暴に突き飛ばした。

エリザードが言葉を続けようとしたが、それよりも先に、それまで黙つて話を聞いていた駿斗が口を開いた。

「だが、『自動書記』を構成する中でも最も重要な因子である『首輪』が、当麻の『イマジンプレイカー幻想殺し』によつて破壊されるといふことは全くの想定外だった。その場合にインデックスに生じる負荷までは、考慮されていなかった……ということか？」

今までになく厳しい視線を投げかける彼に、エリザードは頷いた。「そうだ。この状態でフィアンマが禁書目録の知識にアクセスしようとするれば、そのたびにこの子の体に重大な負荷がかかるだろう」

イギリス側も、可能な限りフィアンマからの影響を遮断するように

努めるが、しかし簡単にはいかないだろう。そもそも、そんなに容易く妨害が可能ならば、わざわざ霊装をつくった意味がないのだから。「ステイル」

当麻は、赤い髪の魔術師に声をかけた。

「俺たちはファイアンマを殴りに行ってくる。その間、インデックスを任せられるか」

「……本気で言ってるのか？ この子をこんな風にした人間を、このまま何もしないで見過ごせよって言うのか、この僕にッ！」

しかし、殴りかかるような勢いで言ったステイルを、駿斗はその胸倉を掴んで引き寄せた。

「……結局、女王様も最大主教も、いざというときは組織のトップとしての行動をしなければなくなる。そこに、インデックスに対する愛情も何もないんだよ！ つまり、これから先に『いざという時』が起こった場合、一体誰がインデックスを守るんだ!?!」

その言葉に、ステイルは歯を食いしばった。

続けて、当麻も小さな声で叫ぶ。

「俺には魔術的な詳しい仕組みは分からないから、四六時中インデックスに張り付いていても、小細工を見逃す危険性がある。この右手があるから魔術的な施設には入らないでください、なんて言われたら、本当にお手上げだ。駿斗は逆に、どんな魔術も分かっちゃおう以上、『清教派』の魔術的施設には入れてもらえない可能性も高い！」
だから、彼らはステイルを選んだ。

たとえどんな状況に陥っても、組織の思惑だとか、どんなものにも振り回されずに、ただインデックスを守ることに全てを捧げてくれるようなこの魔術師を。

2人はステイルの元を離れると、女王の前へを歩み出た。

「……もちろん意図的な攪乱の可能性もあるけど、ファイアンマの言葉が本当なら、あいつの次に狙いはサーシャ・クロイツェフらしい。『神の右席』ってのは天使の術式を扱う連中なんだから。だったら、サーシャは旨味がありすぎる。……何しろ、かつて本物の大天使をその身に宿したんだからな」

「それに、一度その身に『神の力』^{ガブリエル}を宿したという事は、必ず魔術的な痕跡が残っているはずだ。それを利用すれば、再び『神の力』を呼び下ろすことすら可能かもしれない。……下手したら、世界中が火の海になるぞ」

その言葉を聞いた彼女は言った。

「禁書目録の制御を奪われかけているという情報は、可能な限り隠しておきたい。となると、あの子を助けるため、という大義名分は成立しない。つまり……」

「必要ねえよ」

移動手段の提供でもしようと思ったのだろうが、2人はそれを乱暴な言葉で遮った。

ふつつと胸の内から湧いてくる怒りの感情を、明確な形へと変えながら。

「アシは自分たちで確保する。ロシアまで行って来て、フィアンマのクソ野郎を殴り倒してきてやる」

「俺にも参加させるよ、親友。あの野郎を、そのプライドから顔面までボコボコにしてやらなきや、気が済まねえんだからよ」

大戦前暗部編 Dragon

暗闇の戦いを生き抜いた者たち

10月17日、午後6時。

ある病院の売店には、少年少女4人がやってきていた。基本的にはお菓子やジュースなどの軽食メインのラインナップだが、退屈しのぎのための小説やら、病院のどこで使うのか分からない水鉄砲やらも豊富にあった。

メンバーは浜面仕上、霧丘愛深きりおかめぐみ、絹旗最愛、黑夜海鳥、フレンド。学園都市の『暗部』に所属していた者たちである。

彼らの内、フレンドと最愛はかつて『アイテム』と呼ばれる4人組に所属していた。しかし今年の8月、ある少年に助けられたことで、奇跡的にも海鳥と共に『暗部』から『卒業』して光の当たる場所に戻ったのだ。

そして、浜面はその『アイテム』において最愛が脱退した2か月ほど後に、その下っ端として雇われた。しかし、かつての正規メンバーであり、今はこの病院に入院している滝壺理后レベル4（大能力者）を助けるために、『アイテム』のリーダーである第4位の超能力者レベル5、麦野沈利を撃破したのだった。

そのため、『アイテム』は事実上の活動停止状態となっていた。

霧丘は売店の床に直接置いてある花を、品定めしている。

「浜面は、お見舞いに来たのに、花を忘れるの？」

「おい、そのぶかぶかのパーカーで、あまり前かがみになるなよ」

彼女のそのパーカーの襟元から、大胆にその肌が見えそうになっているのにも関わらず、平然とした様子であった。

「……別に。下にシャツを着ているから、平気。浜面が、頑張っても。ブラは見えないよ?」

「雑すぎるだろ!?! そういう問題なのか? っっていうか、俺は何を頑張るって言うんだ!?!」

ナチュラルの変態のレッテルを貼られている、世紀末帝王浜面。う

ろたえるその様子を見て、最愛と海鳥はため息をついた。

「まったく、こんな変態が『アイテム』の下っ端になったなんて、滝壺さんが超不憫ですね」

「俺のせいなのか!？」

「結局、浜面は女心が分かってないってわけよ」

一応、心配して注意してあげたのに！ と叫びをあげる浜面。しかし、彼女たちが必要としているのは、そんな恥ずかしいことをはつきりと申し上げてしまう、デリカシーのない言い方ではなく、もつと気の利いた注意の方法であるらしい。

女三人寄れば姦しい、などと言うのが、霧丘が非常に静かである上に、海鳥もそこまでおしゃべりを好む方ではない。フレンドさえ話していなければ、病院内はそこまで騒がしくなかった。

病院内をエレベーターを使って移動すれば、目的の部屋に彼らの『戦友』はいた。

滝壺理后。

いつも眠たそうにしている少女だった、と浜面は記憶している。それは彼女の性格もあるのかもしれないが、実際のところは『体晶』と呼ばれる、正体不明の薬品(?)が原因であるとも言えた。

彼女はいつも通りのピンク色のジャージ姿であり、部屋着にも寝間着にも使っているようだった。

「体の具合は超どんな感じですか?」

最愛はそんなことを聞いたが、それは形式的なものに過ぎなかった。実際に彼女は明らかに顔色が良くなっていたし、最愛も海鳥も霧丘も、そのことを分かっているのか適当な調子で花瓶の中身を入れ替えたり、見舞いを持ってきた品を彼女のベッドの傍らにある棚に移し替えたりしていた。

事実、滝壺も特に深く考えることなく、

「放っておいても大丈夫みたい。今夜には出て行けるように、もう退院の準備もするし」

「うおい！ 何でそういうことを早く言わねえんだよ!」

「こりゃあ、見舞いの品は余計だったか?」

海鳥が余計なことを言ったので、病人の滝壺が「ごめんなさい。お土産の品はちゃんと持って帰るから」と頭を下げてきた。浜面は海鳥の頭のとっぺんを早押しクイズのように叩きつつ、

「そういうことじゃねえよ。それなら退院祝いの準備もできないじゃないかって言っているだけだ」

「おい、クソ金髪野郎。あとで一発殴るからな」

俺のポジションも変わんねえな！ と浜面は心の中で絶叫した。

「しっかし、『体晶』の使い過ぎで超ぶつ倒れた、なんて話でしたから、結構心配したんですよ。何しろ、風邪とかと違って説明されても具体的にどんなもんか、全く想像が超できないもんですからね」

体晶、というものについては、『闇』にいた彼らの方が良く知っているはずである。

実のところ、8月の初旬にも『体晶』をめぐる事件が発生しており、やはり『置き去り』チャイルドエラーの子供たちが危険な被害に巻き込まれそうになるといふ事件が発生しているのだ。

滝壺は『体晶』を利用した能力使用を禁止されてしまっていた。もつとも、当然のことではあるのだが。

「……ああ、そうだ。これ、退院するなら必要ないかもしれないけど、暇つぶしの道具だ。ジグソーパズル」

「バニースーツじゃあ、なかったんだ？」

「俺は目を丸くして驚いているお前ら3人を一度本気で泣かしてやりたいんだが、いいかいよな？」

「その貧弱なテクじゃあ超無理ですよ。そうそう、私達からは超こんなものを。じゃーん、ウサギの超ぬいぐるみです」

と言いながら最愛が箱から取り出したのは、全長50センチくらいのウサギのぬいぐるみだった。しかし、全体的にはモコモコとしてファンシーなのに、なぜか口元からは人間の髪の毛のようなものもつさりと生えていて、『……今、何食った?』と思わざるを得ない一品だった。

シユール系マスコットは人を選ぶぞ、と思った浜面だったが、「かわいい」

「私と一緒に選んだから、結局センス抜群ってわけよ！」

「なにイ！ 俺は絶対『実用性がない……』のリアクションだと思っていたのに！ これが元『アイテム』正式メンバー間だけにある強い絆そして性格不一致の傾向ありかー!？」

そんなふうに騒ぎ出す下っ端浜面をボディブローで黙らせる霧丘。彼女は見た目こそ華奢であるが、その能力である『座標確立』セトルポイントでものを動かす時には、その速さは彼女の身体能力に依存する。そのため、外見に反して体の中身はそれなりに鍛えられていたりするのであった。

そんな彼を、海鳥は冷ややかな視線で見つめつつ、

「そもそも、バニーガールマニアの変態である貴様が、私達に対する敬意と畏怖を一瞬でも忘れそうになること自体が罪なんだよ。分かったか？」

「……そこいらの箱入り高飛車お嬢さまなら身もだえする台詞なんだが、数か月前までバリバリ裏稼業で物理攻撃力マックスの女に言われると洒落にならないな。そもそも、俺は別にバニーガールだけが好きという訳ではないぞ？」

ほほう、と最愛は言うのと、滝壺が抱きしめていたウサギのぬいぐるみを手に取った。そのまま滝壺の後ろへと回ると、ちょうど彼女の頭に重なる形でウサギのぬいぐるみを配置する。

すると、無表情の滝壺の頭からぬいぐるみの耳だけが彼女の頭から飛び出している形に見えるわけで。その状況を演出した最愛が、とどめの一言を言い放った。

「じゃーん。当店自慢のウサギちゃんです。人恋しくて寂しいと死んじゃうタイプの理后ちゃん。ご指名のバニーはこの子でよろしいですかー？」

直後。

うかつにも、浜面仕上の鼻から何かドロツとしたものが流れ出てきた。

それが鼻水でないことに愕然とする浜面。そんな彼を、仕掛け人であるはずの絹旗最愛と、勝手に仕掛けられた滝壺理后、そしてその様子を傍らから見守っていた黑夜海鳥と霧丘愛深、フレンドがドン引きしている。

「……浜面……あなた、そこまで超バニーですか……？」

「ち、違うー！ こんなタイミングで鼻血なんか絶対におかしい！」

全力で言い訳する醜い男代表浜面であったが、そんな彼に向ける冷ややかな視線は止まらなかった。

その中で、唯一動いたのは無表情癒し系少女・滝壺。

「大丈夫。はまづら、ここは病院だから。鼻血が出ても大丈夫。すぐにお医者さんが治してくれるからね」

「う、うう……ッ！ こんな時に俺の身を心配してくれるのはお前だけだーッ！」

小さな優しさを前に、本当に崩れ落ちそうになる浜面だったが、「大丈夫だよ、はまづら。確かこの病院は心の病気もケアしてくれるはずだから。バニーで鼻血を出しても全然心配ないからね」

今度は、別の意味で崩れ落ちそうになった。

彼ら（二元）『アイテム』と同じような学園都市内の暗部組織は、他にも複数存在する。最も、10月9日の独立記念日に発生した抗争の影響で、かなりの人員編成がなされることとなったのであるが。

『グループ』は、その中でも唯一人員編成がなされなかった組織であった。つまり、主要メンバー4人の中で欠けた者がいなかったのだ。それはつまり、彼らの実力が、数ある暗部組織の中でもひとときわ高い、と示しているということに他ならないのであるが。

一方通行。土御門元春。結標淡希。海原光貴。

彼らは現在、キャンピングカーの中に集まっていた。

「事件を起こしたテロリストは、^{スパークシグナル}迎電部隊と呼ばれているらしい。俺たち『グループ』と同じ、学園都市の裏方の一つが暴走したようだ」
迎電部隊というのは、学園都市の情報を守るために設置された集団

だ。

学園都市の外周を囲む壁には、電波で情報を送受信できないように、極めて指向性の高い妨害電波が上級に向けて発せられている。そして、あらゆる情報は一度外部接続ターミナルを介して通信がされるようになってきているのだ。

しかし、それでも上層部は独自の通信手段を持っているし、いろいろ手を回して、学園都市内部の情報を外部へ漏らそうとする連中は出てくる。それほど、学園都市の情報は有益なものなのだ。

そんな奴らを、専門に潰そうとする部隊が『迎電部隊』。

その説明を聞いた結標が、不快な表情をした。彼女も『残骸』^{レムナント}の一件で『外』とコンタクトを取っていたことがあるため、その過程で『迎電部隊』と戦ったことがあるのかもしれない。

そんな連中が占拠したのは、世界最大の粒子加速装置『フラフープ』。学園都市の外周を囲う形であるそれは既に制御装置を乗っ取られた状態で、現在陽子を光速の30%程度まで加速している。

そして、もし気に入らないことがあれば臨界オーバーまで出力を上げ、装置もろとも学園都市の3分の1に放射線をばらまくという。

話を聞きながら、海原は首を傾げた。

「その加速装置はよほど大きな電力を使うものなんでしょう？　なら、発電施設から送電を切ってしまえば良いのでは？」

「緊急停止時にも対応の電力を消費するからな。そのための自家発電施設も完備している」

「……建物を占拠しておきながら、すぐに暴走を起こすわけではない。ということ、何らかの『要求』がある訳よね？」

結標からの質問に、土御門は首を横に振った。上層部には伝わっているものの、あくまで下の暗部組織である『グループ』には伝えられていないらしい。

「余計なことは考えず、刃向う者を皆殺しにしろ」ってことだろ」

「解決までのタイムリミットを設定されてねエってことは、そこまで切羽詰った状況じゃあねエってことみてエだな」

一方通行の言葉を聞きながら、土御門はさらにリモコンを操作し

た。車内にある大きなスクリーンの中の映像に、学園都市全体を囲む大きな円とは別に、もう一回り、二回りと小さな円が二つほど追加される。それらは、1つの点で交わっていた。

「そうともいえないぜい」

『フラフープ』は内側の小さなファーストサークルから、外側にあるセカンド・サードサークルへと粒子を移動させることで、さらに加速させることが可能である。現在は既にサードサークルへ移行しているのだが、それは最低でも光速の70%以上で使用されるものなのだ。

「……どうやら全ての情報が開示されているという訳ではないらしい。それが単なる『見栄』なのか、ヤバすぎてパニックを起こしかねない情報を隠すためなのかは知らんがな」

「実際にはもつと深刻な状況なのにもかかわらず、それを俺たちに伝えてねエってのか」

いかにも下らなそうな調子で、一方通行は吐き捨てた。正直な話、『なりふり構わず泣きつくような事態』って訳には思えないので、上部がそうしてくるまで放置しておきたいそうさだ。

すると、土御門は再びスクリーンのリモコンを操作した。

「やる気が出る情報が1つだけある」

そこに映し出されたのは、前輪がパンクしてドアが強引に破壊された1台のスクールバスだった。

元迎電部隊の連中は『フラフープ』を襲う前に、課外授業で天体観測を行う予定だった小学生30人ほどと引率の教師、運転手を拉致している。使い方としては『交渉アイテム』——要求をすぐに呑み込ませるために、一定時間ごとに1人ずつ殺していくためのものなのだ。「人質は『フラフープ』の職員でも良い訳だが、職員には『フラフープ』の操作を強制する必要があるからな。時間と共に消費していくやり方だと、長期戦に持ち込めなくなる。そういった事態を避けるために、わざわざ別口の人質を補給してきたらしい」

しかし、『フラフープ』のリミットについて上層部が慌てふためくことはあっても、子供の命まで考える人間が一体どれほどいることか。「くだらねエな、付き合う義理が見当たらねエ」

一方通行は、遮断するように言い放った。
そこに一切の同情はない。

彼は悪党なのだ。

「……目障りだ。くだらねエことはさっさと終わらせるに限る」

浜面仕上と絹旗最愛、そして黑夜海鳥とフレンドアの4人は、夜の繁華街に来ていた。

……当然ながら特に色っぽい展開が待っているわけではなく（最も、最愛は相手が『お兄ちゃん』であればやぶさかでもないのであるが）、単に滝壺理後の退院祝いパーティーの準備を進めるためだ。常盤台自慢の寮監が心配ではあるものの、事情を知っている御坂と白井が2人がかりでカバーしてくれているはずであるため、そちらの方は心配していない。

それよりも、今は準備のほうが重要だ。

「つていうか、退院祝いつて具体的にどうするんだ？」

「第三学区の個室サロンを一室取ってありますので、パーティーグッズを一通り超揃えたら病院まで戻って滝壺さんを超回収。そのまま会場へ超向かいますよう」

個室サロンというのは、簡単に言えばカラオケボックスを豪華にしたような感じだ。学生の住居の大半が学生寮という学園都市では、『大人の監視の目が完全でない場所』というのは重宝されていたりする。

ただし、一歩間違えると性犯罪の温床になったりもする危険性を孕んでいるので、教師だの保護者代表だのは割とピリピリしていたりと、良いことだけではないらしい。

すると、隣を歩いている最愛が唐突に質問をした。

「浜面は、これから超どうするんですか？」

「あん？ そうだな、食い物関係は個室サロンの内線で注文できるだろうし、なんか大人数で遊べるジョークグッズ系でも見て回——」
「そうではなく」

彼女が求めていた『これから』というのは、『これからのパーティー』ではない。

「私がかつて所属しており、そしてフレンダや滝壺さんがいた『アイテム』は事実上壊滅しました。したがって、浜面もその下で働く必要は超ありません」

つまるところ、浜面は自由なのだった。『アイテム』という組織が壊滅した今、元スキルアウトの彼をわざわざ雇う暗部組織などありはしない。ここから再びかつての居場所に戻っても、誰かが襲撃しに行くことすらないだろう。そのような重要な機密事項には、触れることもできていないのだから。

「質問を質問で返すけど、お前らはどうすんの？」

浜面が訊き返すと、海鳥とフレンダがそれぞれ答えた。

「絹旗と私はそもそも、もう『暗部』には所属していないからな。この間みたいに分人たちのすぐそばで厄介ごとが起これば話は別だけど、当分の間は一般的な中学生生活に逆戻り、かな」

「結局、私の方は『アイテム』というくくりがなくなっただけで、たいして変わらないってわけよ。じきに新チームが発足するはずだしね。ちなみに、滝壺はもう『戦力外』って思われているだろうから、その心配をする必要はないはず」

海鳥はともかく、フレンダも自分の境遇については、特に反感を持っている様子はなかった。

「浜面はどうするの？」

フレンダの問いに対して、彼はビルの隙間から見える星空を見上げた。

「……そうだな。半蔵のやつには悪いけど、当分スキルアウトに戻る気はねえな」

今の自分に何ができるのか、それすらも分からない。しかし、滝壺はもう『体晶』を使うことができず、そしてその能力が使えなくなれば、今までどうにか凌いできたものも凌げなくなるのは彼に分かっていることだった。

「だから、何をするかを考えねえとな」

結局、彼はきちんと成立した答えを返すことができていない。しかし、一度は駿斗の介入があったにしろ、自らの力で超能力者を撃破した彼の原動力は『これ』だった。そのため、その言葉にはしっかりとした重みがある。

そのことを考えながら、一度その超能力者に殺されかけたフレンドは浜面の横顔を眺めていたが、

「……結局、浜面はいかにして滝壺のあの実用性抜群のジャージを脱がせて、バニースーツを着せることができるかに、全ての情熱を捧げるって訳？」

「なあ、俺もうそのキャラなの？ 固定？ この際だからバニーさん好きなのは認めるけどよ、違うんだって。一番重要なのはだな、水着みたいな格好が、いかにも水着の見合わない場所で見られるところのアンバランスな所の素晴らしさであって、別にモーターショーのコンパニオンとかでも俺は大丈夫——」

そこから先の言葉を、浜面は続けることができなかった。

その背後にいた黑夜が、全力でそのボディブローを華麗にその体に決めたためである。

人質事件の現場である『フラフープ』へと向かうキャンピングカーの中で、海原は土御門に尋ねた。

「警備員はどうしています？」

「対テロ専門の部隊を突入させるって名目で、出動事態を禁じているみたいだな」

彼は己の拳銃のチェックをしながら答えた。そして、それから話は具体的な突入方法に移る。

地下200メートルに設置された『フラフープ』は、破裂事故が起きた際にガンマ線が放出されないように、核シールド並みの防壁を用意されている。エレベーターシャフトなどについても同様で、下手に突入してもたつけば、その間に人質の頭がいくつか撃ち抜かれてもおかしくない。

おまけに、ガンマ線が届かないということは、当然ながら電磁波などの類も一切届かない。部屋の見取り図はあっても、今、どの部屋に何人いるのかも分からない。

そして……

「例の『ナノデバイス』はどうなのよ？」

結標が言うとおりに、この街には『滞在回線』アンダーラインと呼ばれるナノサイズの機械がばらまかれており、学園都市中がどこも絶えず監視の目からされているはずであるが。

「非常扉を完全に封じると、ネットワーク構築用の電子ビームも完全に阻害されると考えた方が妥当だな。……まあ、さらに裏技があったとしても、俺たちのところまで回ってくることはないだろう」

「……何人殺せば作戦成功なのか分からないのは辛いところですね。一安心したところで背後から撃たれてはたまりません」

「なら、撃たれても構わないやつを突っ込ませれば良い」

一方通行。彼はあらゆる攻撃を『反射』できる。

「だが突入手段はどオする？ 200メートルの地盤と防御壁を直接ぶち抜くってのか」

「……そもそも前提を覆すような発言であるが、それを可能とするのが第1位である。」

しかし、その方法は人質や稼働中の加速装置まで巻き込むリスクが存在する。ここは、セオリー通り結標の『座標移動』ムーブポイントによって3次元的な制約を無視する。

ところが、当の結標が眉をひそめた。

「人間大の質量を、見取り図でしか見たことがない場所の、見えない地点に、200メートル単位の距離で正確に移動させる？ 多分50%くらいの確率で壁か地面に埋まるわよ」

だが、実際には壁や地面を通した直線距離であれば、それなりに接近できるとのことだ。地上のほとんどを滑走路に用いて、かなりの施設を地下に入れている第23学区であるからこそ、である。

こうして、作戦は決行される。

暗部の仕事風景

「ご苦労様。なかなかの活躍だったわよ、ヒーロー」

結標淡希にそう声をかけられ、一方通行は危うく拳銃の引き金を引くところだった。

彼は彼女の能力である『座標移動』^{ムーブポイント}によって、突入場所である空軍関係の兵器実験場の地下に戻ってきた。そこには、結標の他の土御門と海原も揃っていた。

「ひとつだけ気になることがある。クソツタレのテロリスト共が、上層部に何を要求していたかってトコだ」

そう言った一方通行に、土御門がピクンと眉を上げた。

「……お前が暴れている間にこつちも調べてみようと思っただんだが、予想よりもガードが堅い。どうやら、上の連中にとつてはとつぽど好ましくない内容だっただけのことくらいしか分かってねえな」

「無能の言葉は期待しちやいねえ。黙って人の話を聞いてろボンクラ」

一方通行は吐き捨てる、改めて話を戻す。

「どうやら、彼は『フラフープ』内で元『迎電部隊』^{スパーキングナル}を肅清している間に、彼らの叫び声の中からその『要求内容』を聞いていたらしい。」「『ドラゴン』の情報を速やかに開示せよ。クソツタレのテロリスト共の要求は、どオやらそれだけだったらしい。俺たちは上層部の口車に乗せられて、みすみすその糸口を自ら潰してしまったというわけだ」

そんな訳で。

彼らは自分たちの仕事の結果に、大きな不満を抱えた状態で、報告することとなった。

『そうか』

キャンピングカーのスクリーンに映し出されているのは、統括理事会の重鎮の1人、潮岸だった。

『まあ、「フラフープ」の方も大きな被害もなく解決することができたようだなにより。……というか、転送してもらった交戦記録のレポー

トを見たが、君たちは相変わらずとんでもないスペックだなあ』

半ばあきれたような口調でそう言うが、一方通行たちにとっては、お前だけにはそんなことを言われたくない、と珍しく全員の意見を一致させていた。なぜなら、そのスクリーンに映し出されている潮岸の姿は、タキシードの似合う柔和な老人などではないからだ。

いや、中身はそうなのかもしれないが、少なくとも外見は違っていた。

パワードスーツ
駆動鎧。

『気になるかね』

彼は4人の向ける奇異な視線に対しても、不快感は抱いていないようだった。

『ちよつと考えてみれば分かるのだがね、人間を死に至らしめる要因などこの世界には溢れかえっているよ。よく人は「こんなことになるなんて」「恨まれるような人じゃありませんでした」なんてことを言うが……とんでもない』

ようするに、人は誰に恨まれていて、いつ、どんな攻撃を受けるのか分かったものではないから、常に気を張っているのだということだ。

『今も、この部屋の内側に爆弾を放り込まれないかビクビクしているところだ』

「……同じ統括理事会でも、親船さんとは大分違う印象ですね」

海原が言った。

彼女は潮岸とは対照的に、まず人を信じることから始め、融和や協調によって事を進めようとする、腹黒い権力者の集まりである統括理事会の中では珍しい人物であるのだが。

『いや、親船クンのあれも一種の防衛機構だよ』

いわば、日本の自衛隊のように『自分は他に攻め入るための戦力を持っていない』というアピールをすることで、逆に他者から攻め込まれる口実を封じるといふ方法なのだ。

しかし、潮岸の話は次第に自分の駆動鎧に対するこだわりについての話に移り変わり始めたので、みかねた土御門が彼の話を遮った。

「わざわざごこちらにコンタクトを求めてきたのは、交戦記録のレポートを提出させるためだけではないのでは？ それなら『電話の声』を経由した方が手っ取り早いはずだ」

『薄々勘付いているとは思いますが、今回は君たちを指揮する「エージェンツ」には席を外してもらっているよ。学園都市で起きている事件は一つではないからね』

不穏な言葉が聞こえた気がする。

「……何かが立て続けに起こっている？」

かつて、学園都市の独立記念日に起きた『グループ』『スクール』『アイテム』『メンバー』『ブロック』という5つの組織が繰り広げた死闘を思い出し、土御門が改めて質問した。

しかし、潮岸は駆動鎧の首を横に振った。

『そんな深刻なことではないよ。ようは、残党を叩いてほしいというだけだ。「フラフープ」を襲った元「迎電部隊」^{スーパーシグナル}の仲間が、まだ学園都市内に潜んでいるようですね。放っておくと、おかしな第二プランを考案しかねない」

あれを乗り切った君たちなら、あっさり対処できるレベルだと思う、と潮岸は言って、通話を切ろうとしたので、一方通行が言った。

「……『ドラゴン』って言葉に聞き覚えはあるか？」

『有名な単語だね。テレビゲームのタイトルに、世界に誇るべきものがあつたはずだけど』

チツ、と彼は舌打ちした。

ここで方が「知らない」とでも答えてくれれば、そこから切り崩すこともできたのであるが、機を失った。

潮岸は鋼鉄の両手のひらをパンパンと打ち鳴らして、こんなことを言う。

『君たちだつて学生なんだからさ。こんなつまらないことはさっさと済ませて、君たちなりの日々へと帰りたいまえ』

今夜は滝壺理後の退院祝いだ。

急ぎよその準備に追われる羽目になったのは、浜面仕上、フレンダ、絹旗最愛、黒夜海鳥、霧丘愛深である。

そんなわけで、彼ら4人は第七学区にある繁華街でジョークグッズなどを買い込んでいたのだが、

「……おい、訳分かんねえぞ。なんでいつの間にか俺たちは映画館に
いるんだそしてこの映画館は上映2分前でも俺たち2人しかいない
んだ黒夜とフレンダはどうしたんだ」

「ショートフィルム専門ですから超大丈夫です10分間の映像作品と
5分間の休憩を延々と超繰り返す奴です計算なら2本は見ても滝壺
さんとの合流時間に超間に合うはず黒夜とフレンダは近くのフアン
シーショップでぬいぐるみを見て時間を潰しています」

最愛の趣味はB級C級映画なのである。本当は駿斗と来たかった
のであるが、彼は最近非常に忙しい様子であるので、誘っても断られ
たことに不満があるのは、彼女だけの秘密だ（海鳥にはばれている
が）。

「ぐわーダメです。たった今上映が始まったこの作品ですけど、開始
2分でもうクソ映画の雰囲気……」

そんなことを言う最愛に、げんなりとする浜面。

しかし、最愛曰く、彼女が求めているものは、初めから馬鹿馬鹿し
いものを作るつもりで撮ったC級映画ではなく、本気でハリウッドと
戦うつもりでつくったものが、いろいろあつてC級映画となつてし
まった『天然モノ』であるらしい。

「俺は近未来系の話なのにヒロインが何の説明もなく中世っぽいドレ
スを着ているのは『そういう世界観』として納得できるんだが……真
冬の物語のはずなのに、撮影時期が夏だったせいか、みんな妙に汗だ
くな所については、気になって仕方ねえんだよ」

「浜面、画面の左端の方を見てください。海岸の対岸に火力発電所の
煙突らしきものが超見えるのですが……」

「マジかよ。今まで頑張つて作ってきた、SFっぽい雰囲気が一発で
台無しに……ッ!? たまに、撮影中に飛行機が飛んできてNGに……
なんて話は聞くが、建物に関しちや下見をすれば一発で分かるもんだ

ろうがよ……ッ!」

特に映画にこだわりがあるわけでもない浜面すらも、頭を抱えてしまふほどの出来だった。

最愛はそのままトイレへと行ってしまい、この駄作C級映画を見続けるのは浜面1人となってしまふ。

しかし、そのタイミングで彼は気が付いた。

(……あれ? このお嬢さまの後ろの壁に張ってある地図。火星のクレーターと山脈マップ?)

どうして普通の世界地図じゃないんだ、と考えて彼は、そして理解し、電撃に撃たれたかのような衝撃に襲われた。

(これ、真冬の物語って言っても『地球の』ものじゃなかったんだ!

実はそういうフリしていたけど、異様に発展していた火星における、現代IF世界の話だったんだ!)

そうなれば、キャストが暑そうにしているのも、煙突が画面に映っていることも、テラフォーミングの仕様次第では、不自然であると断言はできなくなる。

そして、後半5分で一気にめくるめく物語。前半のつまらなさすらも、乾ききった喉に水を与えるために、監督が意図してくすんだ時間を与えたものだったのだ。まさに、ショートフィルムだからこそ使える作戦だった。

(うわーっ、うわーっ! なにこれ、C級なんかじゃねえ。こいつら100%ハリウッドを叩き潰す気でカメラ回してやがる! おいふぎけんな、これ10分間の作品だろ。おざなりな三部作どころの世界じゃねえぞ! どんだけ密度高くしてなおかつそれに気づかせないつくりしてやがるんだーっ!)

そうかそうだよ、こういう新人発掘が低予算のショートフィルムをたくさん上映する意義だよなー、と人生の経験値をたつぷり積んで笑顔が止まらない浜面だったのだが……。

ふと、ゾクリとした悪寒を感じ取って、彼は振り向いた。

そこでは、無類の映画好き少女が、シヨックで言葉にならない絶叫を上げていた。

そんな頃、2人でファンシーショップで大小のイルカのぬいぐるみと戯れていた2人であったが、そんな時霧丘の携帯が軽快な着信音を鳴らした。

海鳥は、怪訝な表情で短く問いを発した。

「……『仕事』か?」

「うん」

それだけ言葉を交わすと、霧丘は携帯電話に応答する。

会話を終えた彼女は、いつも通りのんびりとした様子でそれをポケットにしまった。

「テロリスト、だって。じゃあ、もう行くね」

「……分かった。パーティーの準備は、こっちで進めておく」

「……そんな訳で、秘密の集合場所に、行ってきたけど。5分でいやになって、戻ってきた」

「お前がか!? よっほどだな!?!」

一度霧丘と別れた後に、浜面及び最愛と合流した海鳥であったが、3人が病院へのんびりと移動している間に、彼女とフレンダが追いついてきたのである。

住民の8割が学生である学園都市では、完全下校時刻が過ぎればあまり時間が経たずに、終電・終バスの時間となってしまう。そのため、彼らは徒歩での移動を余儀なくされていたのだ。

「おい、一体何があったんだ。確か新チーム作ってテロリストたちと戦うって話じゃなかったのかよ」

「うん。こんな感じ」

霧丘はそう言うと、自分の経験してきた一部始終を語り始める。

薄暗い地下空間にやってきた霧丘は、そこで待っていた複数の顔を見渡す。常に冷静な表情をしているクールビューティーな彼女であるが、珍しく眉をひそめながら、タイミング良くなった携帯電話越し

にこんな声を聞いた。

『やーご苦労さん。この間の戦いで「アイテム」「スクール」「ブロック」「メンバー」って壊滅したよね、こいつときたら☆ そいつらの残存勢力集めて新チーム作るから、昔殺し合ったお仲間同士仲良くしてねー』

「おい待てちよつと待てダウトだろ今の！ 思い出話の一番最初から変なものが混じってなかったか!？」

「私も、冗談だと、思っていたけど。でも、マジみたいだったから。逃げ帰ってきた。『心理定規』^{メジャーハート}の子が、浜面によろしくって」

その言葉に、嫌な顔をする浜面。

「どうやら、その能力を一度使用されたことで、彼女のことがかかなり苦手になってしまったらしい。」

「でもお前ら、大丈夫なのか？ 『電話』の声の連中ってけっこうな権限持つてそうだけど。オーダーぶつちぎっても平気なのかよ」

「ダメだろうねー。だから、ちよつと手伝って欲しい訳よ」

フレンダはそう言うと、彼を引き連れて勝手に歩き始めた。

「お、おい、どこに行くんだよ」

「はあ、まったく浜面は超察しが悪いですね」

最愛がそう言うと、海鳥が適当な調子で説明を付け加えた。

「ようするに、新しい『仕事』があるから仲間を協力してやれって話なんだろ。つまり、先にその『仕事』を終わらせてさえしまえば、チームは必要なくなるって訳だ」

結果さえ出せば、『裏』の連中はそれだけで満足するだろうからな、と言う。

「えつと、つまり……」

「浜面は、車を用意！ このまま、『迎電部隊』の連中をぶちつと潰しに行くって訳よ。滝壺も待たせたくないから、結局、さっさと済ませちゃったほうがいいだろうしね」

「待てコラ。お前らついさっき、俺はもう『アイテム』に従う必要はな

「いみたくない雰囲気になっていたんじゃないかな？」

浜面がそう言うと、2人の鋭い視線が彼を射抜いた。

「じゃあ、浜面は弱い女の子が戦地に行くのを放っておいて、勝手に滝壺のところに行けば良い訳よ」

「……多分、滝壺はいつまでたつても来ない私たちが不審がるだろうけど。勝手にみんなで楽しんでいけば？」

「ちくしょう！ せっかくの退院祝いだつーのに、そういうところだしこりを残すような真似するかお前ら!？」

結局、彼は路上駐車されているファミリーカーの元へ向かって行った。

一方通行たち『グループ』の4人を乗せたキャンピングカーは、セブ達の集まる第三学区へとやってきた。その中にあるスクリーンには、これからの『仕事相手』である『迎電部隊』の情報が映し出されている。

残党の数は20人。その人数分の、サブマシンガンとグレネードが用意されているらしい。

しかし、そんな戦力でも彼らの取っては『簡単な仕事』でしかなかった。

「こいつらの仕事は、主に『フラフープ』でことを起こした連中のサポートだったみたいだしな」

「殺すのは簡単だがよ」

一方通行は簡易ベッドに腰掛けたまま、ジロリと土御門を睨みつけた。

「このままクソツタレの統括理事会共の命令を素直に聞くだけかよ。立ち回り方によっては『ドラゴン』の片鱗に迫るチャンスかもしれないねエってのに」

しかし、彼らに元『迎電部隊』と共闘するという選択肢はない。赤の他人である一般人を巻き込むことは、それぞれ『守りたい人』を抱えている彼らの信条に反するからだ。

そのことを土御門に指摘された一方通行は舌打ちした。

戦略兵器として扱われ、時として爆撃機から投下されるほどの極悪な超能力者であるが、ある少女が平和に暮らす世界に被害が及ぶことを、極力嫌う傾向がある。そして、その範囲は彼女に直接的でなくても、『平和な表の世界』に支障が出ると判断すれば、絶対に防ぎに行くのだ。

一方通行が黙ると、今度は結標が口を開いた。

「その元『迎電部隊』の残党っていうのは、一体どこに潜伏しているのよ」

「駅の真下にある地下街を移動中。すでに閉店して人はいない。わざわざそんなところを通っているのを見ると、セキュリティを突破することをそれほど労力と思っていないらしいな」

大半の繁華街は夜遅くまでやっている。しかし反対に、この街では駅に関する施設は、大半が終電と同じように、完全下校時刻に合わせて早くから店じまいをする。これもまた、学生が多い学園都市の特徴であった。

土御門は、リモコンを操作するとスクリーンに地下街の見取り図を示す。

「連中は地下街を移動して別のところに止めてある車まで移動し、そこから次の行動に移ろうとしているらしい。単純な逃走なのか、より高威力の兵器を携えて第二プランに移ろうとしているのかは定かではないがな」

海原が、土御門に『逃走車両』の場所を質問すると、彼はキャンピングカーの壁の方を指さした。

「そこ」

「……はい？」

「運転手には先回りするように指示してある」

まずは、車を先に潰す。

そして、そこにアンカーを1人残して、他の3人で地下街を一掃する。

「なあと、結標の『座標移動』でピンポイント狙撃して、混乱する元迎

電部隊どもを俺と海原で1人ずつぶち抜いて行けば、手早く終わらせられるだろう」

唯一名前を出されなかった一方通行は、ピクンと肩を動かした。彼に睨まれた土御門は、薄笑いを浮かべながら自分の首筋を軽く叩く。電極のバッテリーは温存しておけ、ということだった。

特に従う義理はないが、自ら進んで協力する必要も感じなかった。バカが勝手に雑用を済ませてくれるというなら、放っておけばよいだろうと一方通行は判断する。

キャンピングカーが動きを止めると、土御門はそのドアに手をかけた。

「さて行くか。ありきたりな殺し合いだ」

元迎電部隊がいるエリアは、すでに閉店していて人はいなかった。様々な有名スポーツブランドが多数取り揃えられている場所っていて、その手の品物が好きな人には眉唾物なのかもしれないが、解らない人には、なぜそこまでの値段がつけられているのか分からない、そんな価値観で埋め尽くされている場所であった。

そんな中で、土御門と海原が潜んでいた。

「……片手で使える軽量サブマシンガンに、わざわざ重たいグレネードを取り付けて、台無しにしているな。予想よりも簡単そうで、何よりだ」

「(……一応、密閉された空間でグレネードを使われる危険性について考慮してあげるべきでは?)」

2人は標的を確認すると、携帯電話で結標に連絡を入れた。

そして、通話を切ってから5秒後。

トンツ、と。

ほとんど音もなく、武装した者たちの内の1人の肩を、コルク抜きが貫いた。

本来、三次元を無視する空間移動系テレポルトの能力である『座標移動』には音など発生しない。しかし、物体の移動先にある人肉が押し広げられたことにより、このような音が生じたのだろう。

絶叫が響いた。

何が起きたのかもわからないまま、次々とコルク抜きが彼らに突き刺さっていく。そして、前後左右にいた男たちが、一斉に絶叫と共に倒れた。そのことによって、彼らはどちらの方へ逃げればよいのか、その判断に迷い、棒立ちの状態になる。

混乱による硬直時間は、約2、3秒。

だが、土御門と海原はそれを逃さない。

「行くぞ」

土御門の合図とともに、2人も彼らの前に躍り出ると拳銃を構えて発砲する。すると、銃声という分かりやすいものに反応したのか、倒れる仲間を尻目に残る標的が一斉にサブマシンガンを使って2人に反撃を始めた。

徐々に後退していくが、しかし正面からは土御門と海原の銃撃、そして結標の『座標移動』によって次々と敵を倒していく。

だが、その数が半分までに減った時だった。

「……まずい、グレネードだ！」

サブマシンガンの引き金のすぐ近くに、その引き金があった。しかも、彼らは投擲手が狙われないように、残り10人が一斉に息を合わせてその矛先を土御門たちにむけたのだ。

「……跳べ！」

土御門はそう叫ぶと、通路横にあるウィンドウを叩き割ってその中に飛び込んだ。

しかし、海原は壁際にある防火シャッターのボタンを押すことを選んだ。彼の考え通り、爆発によって生じた爆風はそれに阻まれ、彼の体を傷つけることはなかった。

「馬鹿野郎！」

だが、土御門は声を上げた。

シャッターは自分を守る防壁になると同時に、彼らを狙うための射

線を妨げる障害物にもなるのだ。そして、純粋な火力では、サブマシンガンとグレネードで装備している元迎電部隊の方が高い。

彼らは、窓の割れた店内を迂回することで、シャッターの向こう側へ再び戻ろうとする。しかし、彼らがたどり着くよりも先に、ドバ！と爆音が発生した。

それは、2人を攻撃するために放たれたものではない。

慌てて土御門が確認すると、先ほどまで元迎電部隊がいた場所には、天井に大きな穴が開けられていた。崩れ落ちた瓦礫が階段のように積み上げられていて、地上までのルートを完成させてしまっている。

まんまと逃げられてしまった。

敵襲と人質

浜面仕上の運転するファミリーカー（盗難車）は高架道路のバイパスを通り、第七学区から第三学区に進んでいた。しかし、

「おい、何だよ。オイ！　なんか後ろからスゲエのが追って来てんぞ!?!」

バックミラーにちらりと映った影を、首を後ろに回して確認した彼の表情は、啞然としたものになっていた。

無理もない。

「……H S A F H — 11 『六枚羽』。無人戦闘用攻撃ヘリだね」

「結局、あれってかなりの火力を持っていなかった!?!」

霧丘が冷静に、そしてフレンダは軽くパニック状態になりながら、後ろを確認した。

胴体の左右からミサイルなどが搭載された羽が伸びている軍用ヘリコプター……のように見えるのだが、そこは学園都市の最新兵器である。予想を裏切りというか、予想通りというか、ごちゃごちゃした羽根が3対に別れると、6枚の羽根に姿を変えてその照準を合わせてくる。

「ふざけんなっ!?!　確かにアシを確保するために車盗んだけどよ、それだけでここまでヤバイの出てくるか普通!?!」

「あれが警備員アンチスキルのオモチャに見えるわけないでしょ!?!」

「じゃあ何か。2人の追っているテロリストってのが反撃してきたってことか!?!」

「……いや、違う。『六枚羽』は、学園都市防空部隊所属の、無人兵器だから。使えるのは、犯罪者如きじゃなくて」

「結局学園都市そのものってことなのかよ!?!　しかも上層部から狙われてんのか!?!」

浜面は、上層部からの電話での呼び出しを受けたにもかかわらず、勝手に逃げ出してきた2人を恨むが、しかしそれだけで短絡的に、ここまでしてくるとは思えなかった。

だが、こうしている間にもヘリは迫ってくる。

軍用のへりならば、その速さはすさまじい。しかも、学園都市の科学技術が詰め込まれた『六枚羽』は、搭載されているロケットエンジンを使用することで、最高時速で3000キロをたたき出す。ここまできると風圧で羽の関節を痛めてしまう可能性があるため、今ならば300、400キロ程度の速度だ。

「どつちにしろファミリーカーじゃ話にならねえな！」

霧丘の解説を聞いている間に、へりは一定まで距離を縮めると、相對速度を合わせたのかピタリと停止しているように見えた。どうやら、正確にロックオンされたようだ。

「どうすんだっ！ ミサイルなんか撃ち込まれたら、一発でおしまいだぞー！」

「……短距離対装甲車両用ミサイルなら、なんとかなる」

助手席の霧丘がそう言うと、後部座席に座っているフレンダに、足元にあるなにかを拾って渡した。

それは、発煙筒である。

「そんなもん撃ち込まれたら、一発で終わりだろうが！ 発煙筒程度じゃ目くらましにもならねえし！」

「……結局、浜面は私たちが何をしたいのかさっぱり分かっていなかったってわけよ」

フレンダは呆れたように呟くと、発煙筒に火をつけた。

「あのミサイルはSRM21だったはず。だったら、発煙筒でも十分に防げる」

彼女はそう言うと、窓の外から発煙筒を投げ捨てる。その直後、へりから比較的長い長さのミサイルが放たれた。しかし、それが向かった先はファミリーカーの排気口ではない。

フレンダが投げ捨てた、ダミーの熱源となる発煙筒だ。

「……フレアって形で使用できるってこと」

霧丘がそう言ったその直後、バガツ！ というすさまじい爆裂音と共に、路上に投げ捨てられた発煙筒にミサイルが直撃した。その爆風にハンドルを持っていかれそうになるり、窓ガラスが割れて飛び散る。

しかも、『六枚羽』はその爆風をローターの烈風で薙ぎ払うようにしながら、なお浜面のファミリーカーを追跡し続けた。

「どうする？ 発煙筒って確か1つしかねえだろうし、演算機能が対応を学習して機銃に兵装変更しちまったら、フレア的な防御は一切通用しねえぞ」

「……浜面、次の分かれ道を左に行つて」

「は、え？ 何言つてんの。ビュビュ風吹いて聞こえ」

すると、霧丘は助手席からいきなりハンドブレーキのレバーを引き上げた。

ガクン！ と急減速したファミリーカーがドリフトのように横滑りを始め、分かれ道の左へ突入する。

「うおおああああああつ!？」

慌ててハンドブレーキを元に戻し、ハンドルを動かす。スピンを防ぐためにあえてブレーキを踏まずに、ハンドルさばきだけで見事にベクトルを流し、車の挙動を取り戻してみせた。

「どうしたいんだお前！」

「生き残りたいんでしょ？ だったら、このまま大通りを直進してほしい訳よ。あいつに、一発強いのをぶち込むから！」

フレンドはそう言うと、彼女は窓を全開にしてそこから身を窓の外に乗り出した。そして、霧丘が『座標確立』セトルポイントを使用し、その体をしっかりと固定する。

フレンドとしては珍しく、ぬいぐるみに入った爆弾ではなく拳銃を向けていたが……

「すごっ！ すごいつ！ すごいパンツ！」

「ごすつ、と鈍い音がした。」

フレンドではない。彼女は顔を真っ赤にしているものの、霧丘の能力によりその下半身をほぼ完全に固定されているのだ。殴ったのは、その言葉を後部座席で聞いていた霧丘愛深である。

ちなみに、彼女は姿勢が辛いためか両手でしっかりと拳銃を握っていた。

「……前を向いて、集中」

「イエス！ でもパンツ！」

「浜面、あとでぶち殺すから」

フレンドはそう言つて拳銃を構えるが、浜面は抗議の声を上げた。それもそうである。なにしろ、フレンドの構える拳銃の口径は9ミリだ。軍用ヘリの装甲を撃ち抜けるようなものではない。

しかも、彼女たちの拳銃に使われている弾丸は粉碎式弾頭と呼ばれるものである。跳弾を防ぐために紙粘土のような素材でできているため、一層装甲とは相性が悪い。

ただし。

フレンドが狙い撃ちした場所は、エンジンの吸気口エアインテークであつた。

ヘリコプターのエンジンの吸気口には、当然ながら不純物が吸い込まれるのを防止するための対策が講じられている。ヘリのローターが生み出す下向きの風によって砂埃の侵入を防いだり、不純物が入らないように目の細かい網目を取り付けてあるのだ。

しかし、今回彼女が用いたのは粉碎式弾頭だ。

弾丸は吸気口の入り口にある金網にぶつかった瞬間に細かな粉末へとその姿を変えた。砂粒よりも細かな粒子となったその破片は、吸気口を守るための金網の隙間を容赦なく潜り抜けた。そして、エンジン内部に取り込まれた不純物によって、エンジンはその内部から黒煙を上げる。

「結局、日頃の行いの違いってわけよ！」

得意げに言うフレンドであるが、しかし彼女が車の中に戻ってきた直後、先ほどの短距離対装甲車両用ミサイルとは比べ物にならない衝撃が、ファミリーカーを襲った。ハンドルの制御が効かなくなり、今度こそ完全に車体がスピンを始めてしまう。

「くっそ、霧丘はフレンドも一緒に『座標確立』を使い！ それで衝撃は防げるはずだ！」

「ちよ、浜面は——」

フレンドが抗議の声を上げる暇はなかった。

完全に制御を失ったファミリーカーが、高速道路の側壁へと勢いよく激突する。

その衝撃を喰らった直後、浜面には一瞬の意識の断絶があった。それは、能力に守られていた霧丘とフレンダも同様である。浜面がゆつくりと意識を起こすと、そこは水を詰めたバルーンの上だった。道路わきに、交通事故の衝撃を和らげるために並べてあるものだ。

(霧丘と、フレンダは……?)

浜面は壊れたファミリーカーの方へ視線を向けたが、そこには2人の少女の姿はなかった。どうやら、彼女たちは浜面のことを発見できず、2人で行動を始めたのかもしれない。

体を起こしてみると特に異常はなかったので、浜面は立ち上がった。標識を見ると、どうやらへりから逃げ続けている間に第三学区まで移動していたらしい。

2人を探すか、それよりも先に滝壺のいる場所へ戻るべきか、と考えていると、携帯電話の着信音が鳴った。非通知ではあったが、それでもこのタイミングでかかってきたことに薄気味悪いなにかを感じた浜面は、ほとんど直感で電話に出た。

『あらお久しぶり「心理定規」^{メジャーハート}って言えば、顔ぐらいは思い出してくれるかしら』

それは、悪魔の知らせだった。

最愛と海鳥は、霧丘愛深及びフレンダと共にいた。

というのも、滝壺のいる個室サロンまで戻ってきた最愛と海鳥は、そこで元『迎電部隊』の残党に占拠されていることに気が付いたのだ。

その状況を目の当たりにして、まずは情報収集を始めようとしたところで霧丘&フレンダと偶然合流を果たし(あまりにもちようどよいタイミングであったので、2人は窒素コンビに盗聴器疑惑をかけられた)、そして今は個室サロンのビルが見える路地裏で作戦会議だ。

「個室サロンの周辺は、警備員^{アンチスキル}の連中に完全に超包囲されているようですね」

最愛は、事件現場を示す黄色いテープを見つめながら、そう話を切り出した。

「よりによって、ここなのかよ……どうする？　具体的な突入の方法は？」

海鳥が眉にしわをつくりながら、これからの行動について意見を仰ぐ。

「警備員の話を盗聴したところによると、元『迎電部隊』の連中は全員がサブマシンガンとグレネードを装備しているみたいなのよ。……結局、絹旗は能力があるから大丈夫だけれど、その恩恵が受けられない私たちは危険」

「……私の能力でも、さすがに複数人のサブマシンガンを対象にするのは無理。拳銃のような、ハンマーを固定すればよいものなら別だけど」

サブマシンガンであれば、霧丘の能力が先に発動しても、一度に全員の銃を『固定』して無力化するのは困難だ。一応裏技として物質を形状の座標情報ごと『固定』することで、変形も含めてその場から一切動かさなくすること（＝硬化）も可能なのであるが、これはむしろ、複数の対象相手への同時使用は不可能なのである。

しかし、そんな中、突然屋上から近づいて行く影があった。

「……ヘリ？」

どうやら、ヘリはテロリストたちの要求の1つのようなのだ。屋上に複数の影が出てきたのを、彼女たちは確認する。

しかし、突如としてその中から1人の影が飛び降りると、立て続けに起きた発砲音と共に、テロリストたちが次々と倒れていた。

「……何があったの？」

遠目で、どのような人物がヘリから飛び降りたのかは分からない。しかし、その者の手によって『迎電部隊』の残党が次々に倒されて行ったのは事実だ。

（……プロではありませんね。恐らく、暗部の連中の超独断行動でしょう）

その状況を見た絹旗がそう判断したのは、その人物の行動があまり

にも賭けの要素が大きすぎたからだ。テロリストの内の1人が、少し判断が早ければ彼はサブマシンガンでハチの巣にされていたはずである。

「じゃあ、まずは私と絹旗で飛び込むとするか」

海鳥がそう言うと、最愛も頷いた。

そして、彼女は自分の両手のひらを後方斜め下へ向けながら、一気に駆け出した。最愛もまた、その背後から駆け出す。

そして、警備員の背後から一気に飛び出した。

普通に考えれば、大勢の大人たちに行く手を阻まれて終わりだ。

しかし、海鳥は大人たちに捕まるその一歩手前で、一気に跳躍した。それと同時に、彼女の能力により窒素の塊が手のひらから噴射され、その勢いで少女の体が宙へと高く跳び上がる。

さらに、全員が海鳥の姿に気を取られたその一瞬の間隙について、最愛と霧丘、フレンダがその体を警備員が立ち並ぶその隙間にもぐりこませ、一気にその壁を潜り抜けた。

「あー」

「待てー!」

無謀な突撃に見えるその行動に対し、彼らは防御力に優れた最愛と霧丘を壁にしながら、その後ろに海鳥とフレンダが並ぶという形で病院の中へと突入する。

病院の入り口を抜けると、その直後に最愛が一気に前へと躍り出した。

そのようなことをすれば、当然ながら『迎電部隊』の残党たちが持つサブマシンガンによつてハチの巣にされるだろう。しかし、サブマシンガン程度では窒素装甲オフエンスアーマーを打ち抜くことはできない。

華奢なその体が、弾丸の嵐を受け止める。さすがに衝撃まで完全に防ぐことはできないのか、最愛は地面に倒された。しかし、そのことを気にせず海鳥がその手に発生させた窒素の槍を『噴射』する。

彼らの持っているサブマシンガンごと、その腹に穴が空いた。

それと同時に、霧丘がナイフを投げ、そしてフレンダが小型の爆弾を投げる。

爆弾によってサブマシンガンがはじけ飛び、そしてナイフは不自然にその軌道を曲げて男の手首を切り落とす。その後、その首をはねた。入り口にいる男たちを速やかに排除した4人は、さらに前へと進み、階段を駆け上がる。

その時、上の階からガラスが割れるような音がした。

(発砲音はしなかった？ とすると、手や鈍器で割った？)

彼女たちはそこまで考える。しかし、

(いや、『迎電部隊』の連中がそのような破壊行動をする理由は、超ありません)

(むしろ、ガラス片なんて飛び散らせたなら、籠城している自分たちが危ないってわけよ)

つまり、他の暗部の連中が何かしらの形で事件の解決に来たのだろう。ひよつとすると、窓ガラスをぶち破って外から突入したのかもしれない。

しかし、彼女たちもさすがに、今の音が一方通行の手で破られた28階であるとは気づかなかった。

「……どうしますっ？」

最愛が階段の上を警戒しながらそう呟くと、霧丘が答えた。

「このまま、慎重に進むべき。滝壺の無事が確認できるまでは、行動続行」

「それがいいだろうな」

彼女たちの目的は、あくまでも滝壺理後の安全の確保だ。彼女の無事さえ確認できれば、それでよい。

彼女たちは、滝壺がいる28階を目指して階段を上り始めたが、その先にいたのは抱き合っ泣いている浜面と滝壺であった。

浜面が屋上の男たちを排除した時、その音を聞いて、個室サロンの28階にいる迎電部隊のメンバーは思わず顔を上げた。

「屋上には要求通りヘリが来るかどうか、様子を見に行っている班がいるはずだが」

「ステファニーとはいっ合流する。あいつの出方次第では——」

「あるいは、空間移動系の能力者について考慮するべきか？」

しかし、だからといって全員で音源に向かうようなことはしない。

人質の動きを完全に封じるために必要な最低限の人数を残す必要があるし、そもそも屋上から聞こえる銃声は罠であるという可能性もある。そのため、7人のメンバーはすぐに班を3つに分けようとした。

迅速な対応だったと判断できるだろう。

ただし。

『災厄』とは、そんな規格を無視して唐突に襲い掛かってくるものだ。

28階であるはずの窓の外から、それはやってきた。

学園都市の夜景を映す窓が、一斉に砕け散った。

そこからやってきたのは、赤い目をした白い悪魔だ。

(に、28階だぞ……!?)

これだけの異常現象を前に、そんな当たり前のことを一瞬考えてしまいう元『迎電部隊』。しかし、彼の前ではその一瞬が命取りになった。

超能力者がとった行動は、極めて単純だった。

一番近くにいた迎電部隊の1人を片手でつかみ、それを別のメンバーに向けて放り投げる。それだけであるが、そこに『あらゆるベクトルを集中制御する』という能力が加わることで、砲弾レベルの破壊力を生み出す。

3人の男たちが、なすすべなく吹き飛ばされた。

そのことに、他の男たちは慌てて遮蔽物の陰に隠れると、サブマシンガンを構え始める。しかし、その時予想外の方向から、バンバンドガン！ と銃声が鳴り響いた。

明らかに、元『迎電部隊』が使っているものよりもはるかに大きな口径の銃を、彼らの頭にぶち込んだのだ。断末魔の絶叫を上げること

すらもできずに、彼らは地に伏せる。

一方通行は、発砲したスーツ姿の男に声をかけた。

「誰だ？」

「杉谷だよ。本気で街を守りたいのなら、これくらい丁寧によれ」

男はそれだけを呟くと、倒れている男たちに次々と弾丸を打ち込んでいく。その上、念入りに死体をひとつひとつ蹴飛ばして、反応がないことを確かめた。

「二度と出会わないことを祈っている。そのための努力はお前がしろ」

それだけ告げると、スーツの男は拳銃をしまつてフロアの出口の方へ向かって行った。

それを確認した一方通行は、やがて電極のスイッチを能力使用モードから通常モードへと戻した。経緯はどうあれ、個室サロンの危機はひとまず去つたのだ。彼は携帯電話を取り出すと、土御門に報告してからパーティー用の大広間なのであろう場所へ赴いた。

そこには人質が集められており、彼がざつと見たところでも300人以上はいた。

一方通行は大広間に入ろうとするが、そこで足を止めた。そして廊下を歩いたところで、出くわしたのが――柱の影から転がり出ている、滝壺だったのだ。それも、明らかに具合が悪化していることが分かる様子であった。

本当に客観的な目で見ていれば、彼が治療かそれに準ずる行為をしようとしていたことが、浜面にもわかったのかもしれない。しかし浜面には、かつて自分が所属していたスキルアウトのリーダー駒場が、一方通行の手によって殺されていたという出来事があった。

そのような事情がある以上、彼が早まった判断をしてしまったというのも無理はないだろう。

結果的に、彼は一方通行にボロボロにされた上に情けをかけられ、その上滝壺の身を狙っていなかったことまですっかりと突きつけられた、非常に情けない姿となってしまったのだった。

「さんざんお前を助けるとか言っておいて、結局できたことって、これ

だけかよ。ははっ、情けねえ。よりもよってお前の命の恩人だったかもしれないやつに、牙を剥いちまうだなんてよ。情けねえにもほどがあるよな……」

「そんなこと、ない」

滝壺は、苦しそうにしながらも懸命に言う。

「はまづらは、たった1人でここまで来てくれた。警備員ですらも攻めあぐねるようなビルの中に、はまづらは飛び込んできてくれた。だから、情けなくなんかない」

「そうかよ……」

浜面はそう言って笑ったが、心の中ではこう思っていた。

(……だったら、なんでお前が泣いているんだよ)

彼は勘違いをしていたのだ。別に、彼がボロボロにされたのは、学園都市最強の超能力者が現れたからではない。仮に、一方通行が現れずにあのテロリストたちと戦っていたとしても、果たして彼が滝壺を助けることはできただろうか。

彼は、確かに前に第4位の超能力者を倒したのかもしれない。

しかし、そこから何かを得たわけではない。何かの主人公みたいに、隠されていた才能が開花したとか、あるいは天から素晴らしい能力を与えられたとか、そういったことがあるわけではないのだ。積み上げてきたものが崩れたのではない。

麦野沈利という第4位の超能力者と死闘を繰り広げておきながら、その実、そこから何も得られていなかったのだ。

そのことを突きつけられた彼は、再び強く思う。

あんな第一位のような悪の力リスマになれなくても良い。

三流のチンピラのままでも結構だ。

だから、せめて。

ただの浜面仕上として、この少女の笑顔を守れるような男になりた
い。

悪党に相応しい戦い方

「……結局、潮岸の野郎の思惑通りだ」

『グループ』の面々が集まるキャンピングカーの中で、一方通行は吐き捨てるように言った。

『ドラゴン』のことについて知ろうとする人間は、片っ端から消されてしまう。

「杉谷って言ったか」

土御門がその名前を呟いた。確か、統括理事会の潮岸と連絡していた時に、彼がそのような名前で部下を読んでいた覚えがある。

「それにしても……結局、『ドラゴン』ってのは何なのかしらね」

結標が髪をかきあげながら、疲れた様子でそう言った。その質問に答える者がいれば苦労しない訳であるが、質問せずにはいられないわけだろう。

海原は同じ魔術師である土御門の顔をちらりと見たが、彼が特に反応を示さなかったので、自分も話に加わることにした。

「……あなたたち科学サイドと違って、自分のような魔術サイドの意見ですと、『ドラゴン』というのは宗教的な暗喩をイメージさせますね。例えば……『天使』とか」

「――、」

その言葉にピクン、と反応を示したのは、一方通行だった。

『〇九三〇事件』……あの日に、彼は打ち止めという1人の少女を巡って、一方通行と『ハウンドドック猟犬部隊』の木原数多が死闘を繰り広げた。その際、彼は全長数十メートルに及ぶ光の翼の乱舞を目撃していたのだ。

結局、あの翼の正体については未だはつきりと分からない部分も多いのであるが、彼なりに調べて分かったこともある。

あの光の翼の出現には、木原数多や打ち止めが関わっているということ。

そして、その時に木原が使用したウイルスの名前が『ANGEL』であること。

海原の意見が全くの見当違いであるという可能性もある。しかし

仮に、『天使』と『ドラゴン』が1つに結び付けられるものだとした場合、そこから打ち止めにも結び付けられてしまう。

(……何が隠れている?)

本来、妹達シスターズという存在は、一方通行の『絶対能力進化実験』において、彼の手で殺されるためだけに用意された存在だったはずだ。しかし、現実にあの実験が終了させられた日から2か月以上経過した今になっても、彼女たちは何らかの形で利用されている。

つまり、あの実験は最初から失敗を前提とした立案だったのだ。そして、知らない間に彼と打ち止めは、謎の計画に関わらされていた。

しかし、『ドラゴン』にもつながるその謎の糸口に迫ることができたかもしれない先ほどまでの状況で、彼らはそのヒントを片っ端から奪われてしまっていた。

「ひとまず、『フラフープ』から続いた一連の事件は終わりましたので、これで解散……という形になるんですかね」

「『ドラゴン』の方はどうする」

海原の言葉に、一方通行は突き刺すような調子で言った。

「このまま何も掴まねエでベッドに潜り込めつてのか」

「……なら、潮岸のアジトまで乗り込むのか?」

彼に反論したのは、土御門だ。

四六時中駆動鎧パワードスーツを着込んでいる潮岸の警戒心は、本物である。ならば、彼がいる本拠地の方も、防御力はシエルターに匹敵するはずだ。そもそも、暗部組織が暴走した場合のことも考慮して警戒しているに違いないのだから。

さらに、結標が付け加える。

どんな方法にしたとしても、潮岸が学園都市に12人しかいない『統括理事会』という重鎮であるということには変わりない。つまり、彼に刃向うという事は『フラフープ』を乗っ取った『迎電部隊』と同様にテロリスト扱いされるといふ事なのだ。

「……同じ規模の、つまり統括理事会の正式メンバーが味方についてくれれば、あるいは政治的観点からスムーズに突入、または開城させることもできるかもしれませんけどね」

海原はそう言うが、そんな都合の良い味方がいればの話ですけれど、とさらに付け加えた。

彼ら4人には、守るべき者がいる。そのため、安易に上層部に刃向うこともできない。自らも小さな少女のことを考えながら、何気なしにキャンピングカーの窓から外へと目をやった一方通行は、それからポツリと呟いた。

「――そんな、のんびりと構えている暇もなさそオだぜ」

そんな言葉に、他の3人は彼が見たものを自分も確かめようと、同じように小窓に目を向ける。

直後。

ゴバツ！ と。

携行型の対戦車ミサイルがキャンピングカーへと直撃し、爆炎と共に鉄くずと化する。

当然ながら、彼はその程度では死ななかった。

キャンピングカーに複数ある出口を使い、土御門と海原はそれぞれ別の扉から飛び出し、結標は座標移動ムーブポイントを使用して脱出した。一方通行は、その能力を使用して強引に扉を破壊すると、ミサイルが飛んできた方向とは逆方向へと逃れていく。

彼ら『グループ』は、一致団結して新たな敵に立ち向かうようなことはしない。

それぞれが、勝手に自分なりのルートでバラバラに逃走していた。

この攻撃の原因は分かっていた。4人が事件を通じて『ドラゴン』について迫りすぎたために、潮岸が口封じに動き出したのだ。

一方通行は、狭い路地に飛び込みながら、適当に予測を立てた。

(……だとすると、俺の『弱点』を知った上で襲撃部隊を編成している可能性が高い)

つまり、彼が持つ制限である首にある電極のバッテリーを消耗させるような戦い方だ。つまり、このまま正面切って襲撃部隊に戦いを挑んでも翻弄されるだけだ。

しかし、だからといって馬鹿正直に逃亡を続ける必要性も彼は感じなかった。敵が明確になったことで行動に移しやすくなったので、これから相手の戦力を分析してその『盲点』を突けばよい。

そこまで考えた一方通行であったが、

ギイン、と。

唐突に、彼の電極がその機能を失った。

ベクトル操作能力によつて脚力を調整していた一方通行は、いきなりそれを失って路上に倒れ込んだ。失われたのは能力だけではない。彼の電極がその機能を失ったという事は、一方通行にとつて、ある意味ベクトル操作能力をも上回る『思考能力』を奪われた、という事を意味しているのだ。

恐らく遠隔操作作用の電波を、路地裏にまで届くように広範囲にまき散らして、電極のスイッチを操作したのだろう。しかし、彼はそんなことも考えることができずに、倒れたままの右手にある杖を見つめるだけだった。

彼は自身の手で様々なモーターやセンサなどを組み込んでいたのだが、やはり能力を奪われた一方通行を適切に運ぶだけの機能は維持できていないようだ。

そして、そうこうしているうちに、路地の闇から複数の足音が近づいてくる。

その時、路地の出口の方からも足音が近づいてきた。はさみうちにされたことに危機感を覚えることすらできないまま、一方通行は何者かにスポーツカーの助手席に放り込まれる。そして、急発進する感覚があった。

しばらくすると妨害用の電波が弱まってきたのか、一方通行の感覚が元に戻ってきた。彼は電極のスイッチを元に戻すと、運転手の顔を確認する。

「……オマエ」

第三学区の爆発に巻き込まれた高校生ぐらいの少年だった。怪我

を負っていた、妊娠している少女に付き添う形で、第七学区の病院に向かったはずだった。

「いきなりなんで驚いたよ。おかげで命の恩人を……いや、それよりも大切なものを守ってくれた人を死なせずに済んだ」

彼はそう言いながら口に笑みを浮かべるが、一方通行は拳銃を突きつけた。

「……こんな下らねエ世界でも、それなりに学べることがある」

——タイミングが良すぎる。

今回の襲撃をしたのは、学園都市統括理事会の中でも『軍事』を担当する潮岸だ。そんな男が立案した襲撃計画の近くに、知り合いが『偶然』居合わせるなどということはあり得ない。

だから一方通行は拳銃を突きつけたのだが、それでも彼は笑っていた。

同じ『闇』に生きる者であることを知られても。

「確かに、アンタは俺と同じ匂いがする人間だ。つつつても、グレードは全然違うがな。こつちの仕事は、アンタみたいな大物をサポートするための下っ端さ。ワゴンセールみたいに大量消費される雑魚キャラってやつだな」

ただし、と彼は付け加え、

「……俺がどんなに汚い人間だろうが、アンタが俺の命よりも大切な人を助けてくれたってことに変わりはない。そして俺は、そんな人を見殺しにするほど腐っちゃいない」

恩を返させてもらう、と彼は言った。

突きつけられる拳銃に大して、彼は見向きもせず運転を続けた。撃たないことを確信しているようだ。

しばらくすると一方通行は、舌打ちをしながら拳銃の先を高校生から外した。

「このまま進め」

「どこまで行く気だ」

ハンドルを握り、笑いながら尋ねてくる高校生に対して、一方通行はこう言った。

「潮岸のヤツを、ぶち殺さねえとな」

向かう先は、統括理事会の潮岸のアジト。

一方通行の電極が操作されたのは、潮岸が彼に対して用意した切り札のひとつであったはずだ。しかし、彼の動きを制限するためには、もつと効果的な方法がある。

すなわち、打ち止めという人質だ。
ラストオーダー

彼女がすでに確保されている可能性は低い。そのカードが先に斬られているのであれば、襲撃などせずに一方通行の動きを牽制することが可能であるからだ。

潮岸が第二プランを実行する前に、勝負をつけなければならない。守るか、攻めるか。

しかし、彼女と共に逃亡生活をするということは、彼女の命は無事であるかもしれないが、彼女が愛する世界——芳川桔梗や黄泉川愛穂といった周囲の人々まで守ることができない。

だとすれば、やることは簡単だ。一方通行は、獰猛な笑みを浮かべる。

先手必勝。

やられる前にやれ。

一方通行は思わず笑みすら浮かべながら、腹の奥でそう思った。

(……こんな血みどろの俺には、そっちのほうが相応しいよなア！)

夜の街を走るスポーツカーの中で、一方通行は携帯電話を使って土御門と連絡を取った。

『そのまま第二十一学区に行くんだ。山中に天文台がある』

「ああ？ 潮岸のシエルターは山の中にでもあるのか？」

一方通行がそう言うと、彼は否定した。

そこにいるのは、海原が言っていた『必要となる味方』だ。土御門曰く、貝積継敏あたりも善人ではあるが、その側に控えているブレインの雲川芹亜が手が付けられないほどの天才であるため、却下したらしい。

『親船最中。「フラフープ」の件で誘拐されていた子供たちと、チャリティーで天体観測会を開いている……統括理事会ナンバーワンの善人だ。こういうやり方は好まないが、あいつは俺たちに借りがある。生涯一度くらいなら、交渉の余地があるかもしれないな』

この学区は学園都市唯一の山岳地帯であるが、標高は極めて低く、最も高い山頂であっても200メートルあるかどうかといったところだ。水源や動植物の研究施設が立ち並ぶと同時に、天文系の学問でも知られた場所である。

直径1メートルほどの小さなパラボラアンテナが、斜面に沿って一定の間隔で並べられていた。意図的に人工の光が抑えられているため、科学の街である学園都市の中としてはとても暗かった。

その天文台は、山の中腹にあった。

そこまでたどり着くと、彼はスポーツカーの少年を追い返した。名残惜しようにされたが、これ以上深く関わられて先ほどの妊婦にまで被害が及んだ場合、寝覚めが悪い。

そして、一方通行は施設の中へと入っていった。交渉するうえでは、2つの貸しがある。

1つ目は、先ほど土御門が言った通り、『フラフープ』の子供たちを助けたという事。

2つ目は、かつて『グループ』『スクール』『アイテム』『メンバー』『ブロック』という5つの暗部組織による殺し合いの中で、彼女への狙撃を未然に防いだということだ。

(……面倒臭エことになりそうだ)

彼ほどこういった交渉に不向きであることを、一方通行自身も自覚していた。しかし、誰かがやらなければ始まらないので、それでも直接顔を合わせに言ったわけであるが……。

「帰ってくれ」

一発目からこれかよ、と一方通行は思った。

親船最中本人ではない。彼女の秘書らしき男だ。神経質そうな彼

は、親船への道を自らの体で阻みながら、一方通行に向かつてこう言った。

「そりゃ、親船さんだって昔は相当の手腕だった」

親船の本領は、武力を用いない交渉術にあった。しかしそれは、『平和的な侵略行為』などと言われるほどに、諸外国の外交官から恐れられていた。

「でも、あの人はやめたんだ。そういう闇と光の間を行ったり来たりするような生き方はもうやめたんだよ。アンタには分からないか？

闇側の視点から平和な世界を眺めてきたアンタなら、それを捨てて生きていくのがどれほど難しくくて大切なことなのか理解できるんじゃないのか。それとも、そんなことも分からないくらい、アンタは染まってしまったのか」

チツ、と彼は舌打ちした。

苛立ちの矛先は、目の前にいる秘書の言葉に対するものではない。親船を薦めてきた、土御門に対するものだった。

「邪魔したな」

「……諦めて、くれるのか」

「そオ仕向けたのはテメエだろうが。それとも何か、ここで殺し合いでもした方が良かったってのか？」

「だとしても、私のやることは変わりがない」

そう言いながら、その男は震えていた。しかしそれでも、道を譲ろうとする気はなさそうだった。

「最後に質問しよオか。親船の野郎には、何があった？」

「娘さんだよ」

きっかけは、『外』への武器輸出に対する条項を統括理事会の中で決めることになった時、親船は自前の交渉術で有利にことを進めていた。彼女はそのことに全力を尽くすほどに、戦争が嫌いだったのだ。

しかしそんな折に、親船の事務所に差出人不明の、一通の封書が届いた。

入っていたのは、親船の娘の写真と、一丁のマグナム拳銃。

結局何も起こらなかったものの、軍需推進派の潮岸を怪しみなが

ら、結局彼女はその刃を引き下げるほかなかった。

話を聞いた一方通行は一言、そオかよ、と小さく呟く。すると、彼が背を向けるよりも先に、その姿に気が付いた親船が一方通行に近寄ってきた。秘書の顔色が変わるが、彼女は気づいていないようだ。

「あの、そちらの方は？」

「……何でもねエよ」

かつて、彼ら『グループ』は秘密裏に狙撃犯から彼女の命を救ったことがある。しかし、彼女はそのことを知らないし、そして一方通行は土御門からそれを利用してと言われていても、あの厚顔無恥は一度地獄に落ちた方が良いと思っていた。

「ちよつと道を尋ねていただけだ」

踵を返して立ち去る彼に、今度は男の方から尋ねてきた。

「……アンタの方は、どうなんだ。まともに話が進まないことくらい、なんとなく予想はついていたはずだ。にも拘わらず、アンタは来た。最後に尋ねたい。何があつた？」

「知つてどオする」

彼は言った。

「拒否しておいてから事情を尋ねても、重荷が増すだけだ。俺と潮岸とのクソ野郎との間にどんなトラブルがあるオが、オマエは知らない方がいい」

潮岸の名前が出てきたことで、秘書の小男の顔色が変わった。そのことよって、大まかな事情は分かったのだろう。彼は、思わず視線をそらした。

「……すまない」

「俺の問題だ。オマエが深入りすることじゃねエ」

潮岸との戦いが終われば、彼はテロリスト扱いになるだろう。これまでの生活はできなくなるし、打ち止めともそう会うことはできなくなる。今は仲間である土御門元春や海原光貴、結標淡希とも争うことになるかもしれない。

だが、彼はそもそも自分で決めたのだ。

たとえ守るべき打ち止めを敵に回すことになっても、その打ち止め

を守るために戦い続けると。だとすれば、やることは変わらない。

邪魔したな、と一方通行は背を向けた。

その時。

「何してるの?」

子供の声が聞こえた。

チャリティーの天体観測会に参加していたのであろう、10歳にも満たない少年だ。彼は、テロリストに人質にされて、間一髪のところまで一方通行に助けられた少年だった。

「あの時のヒーローでしょ? ところで何をしているの?」

「……何でもねエよ」

「さつき話しているのを聞いた」

彼はそう言うと、恐れることなく第一位の怪物に近づいて行った。そこに警戒心というものは、まるでなかった。

「あの時の僕みたいな人を助けるために、また行くんでしょ。——
だったら、僕も行く」

……冗談じゃねえぞ、と一方通行は頭を抱えそうになった。

「ふざけんなクソガキ。誰が、誰と一緒に戦うだど?」

「だって、あの人たちは見捨てるって言った!」

突然指さされたことに、親船最中は面食らった。秘書の男は心当たりがあるせいか、わずかに奥歯を噛んでいる。

それでも、少年は言葉を続けた。

自分と同じように困っている人がいるのだったら、自分も一緒に戦いたい、と。

一方通行は、その少年を引きはがした。

「良いか。目の前で誰かが凶漢に苦しめられていたとしても、そこで迷わず武器を握って凶漢をブチ殺すよオなヤツは、似たよオな悪党だ。人の気持ちも考えず、更生の機会も与えず、理に適っているってだけで人を殺せるようなヤツは善人なんかじゃねエ」

それは、かつて自分を倒した者と、今の自分との間にある違いだ。

その意味が伝わっていないのは分かりながら、一方通行はそう告げた。

しかし、少年は抗うようにこう告げた。

「僕だって、戦いたいんだ」

最強の超能力者の顔を見上げ、こう叫んだ。

「あんな卑怯者たちに、学園都市を渡したくなんかないんだ！」

彼は複数の男たちに囲まれると、優しいな举措ではあったが、親船から引きはがされるように連れていかれた。しかし、彼はその間も、そして引率の教師がやって来るまでずっと、一方通行から目を逸らさなかつた。

その行方を見ていたのは、親船も同様だった。

「……先ほど、潮岸と言っていましたね」

「親船さんっ！」

秘書の男が慌てて止めるように言ったが、親船はまつすぐに一方通行の顔を見ていた。

彼女は、娘の一件で潮岸の政治的な恐ろしさを知っているはずだ。しかし、先ほどの少年の言葉を聞いて、自分の判断に疑問を持ってしまった。

この街の闇を知りながら、自ら戦うことをやめてしまった自分は、少年が言うような『卑怯者』に当てはまるのではないかと。

「……私は、どうすればいいんでしょうかね」

「知るかよ。オマエの人生だ。オマエが決める」

親船の呟きに、一方通行の突き放すような言い方を聞いて、ふっと彼女は笑った。

そして、ゴッソーン！ とその拳を黒塗りの防弾車に叩き付ける。

「……ようやく目が覚めました」

「ふぎげんなよ。こっちはようやく一人でやるって決めたところだぞ」

「私の人生です。私が決めます」

娘の写真と共にマグナム拳銃が送られてきたとき、彼女は自らの刃

を引つ込めることによって解決を図った。しかし、彼女はこう考えなかったのだ。

悪の根を絶たなければ、大切な物はいつまでたつても危機から脱することはできないのだ、と。

ここに来て、学園都市最強の超能力者の隣に、彼女は並び立った。

一方通行は、似たような眼をした人間を知っていた。

例えば、警備員アンチスキルの黄泉川愛穂。

例えば、研究者であり、かつて『レディオノイズ量産型能力者計画』
『レベル6シフト絶対能力進化実験』に関わっていた芳川桔梗。

「潮岸の所へ乗り込みましょう。それが最善策です。彼の本拠地は単純な武力の他に政治的な意味でも難攻不落ですが、同じ統括理事会としての権限を持つ私が参戦すれば、後者の問題については解決できます」

しかし、ここで慌てたのは秘書の小男だ。

彼は一方通行をきくと睨みつけたが、親船に諭されると、慣れない手つきで自らの拳銃を用意する。

「全力で守れよ！ もしも親船さんを死なせてしまったら、私はアンタを鉛玉のスポンジにしてやる！」

「良いなア、オマエ。実は悪党向きだろ？」

「誉め言葉みたいな調子で、とんでもないことを言わないでもらえるか」

3人が、黒塗りの防弾車の中に乗り込む。

行先は、今度こそ統括理事会の黒幕、潮岸のアジトだ。

史上最強の悪党を引き連れて、統括理事会の交渉役、親船最中はどう一度立ち上がる。

新たな敵たち

テロリストが病院から排除されると、警備員たちによる現場検証が行われた。アンチスキル

入院患者であった滝壺は問題ないが、病院への突入を強行した浜面、フレンダ、霧丘、最愛、海鳥はこの場にいると少々まずいことになる。そのため、彼らは滝壺の連れてこっそりと抜け出した。

「これからどうする？ ひとまず、あの危険地帯から抜け出すことはできたけどよ、結局、あのへりに関する謎は全く解けてないぞ」

浜面の言葉に、全員が思案顔になった。

彼の言うとおり、結局なぜ浜面たちが学園都市から襲われたのかは不明なままだ。

「ひとまずは、安全な場所を超目指しましょう。とりあえず、『アイテム』が使っていた超隠れ家がありますから、そちらに移動するべきです」

最愛の言葉を聞いて、その場の全員が賛成した。そして、彼らは地下街を経由して移動を始める。

『暗部』の人間が6人、それも『アイテム』正規メンバーが3人というのは、かなりの戦力だ。大能力者レベル4が4人いる時点で、たいていの相手は敵にならないだろう。

しかし、彼らとて物量で攻められれば、どうなるか分からない。しかも、大能力者が4人いてもその中の1人は能力がまともに使用できず、その上病人という明らかな足手まといだ。

だから、安全を確保するべきであるという絹旗の意見はまっとうなものであった。

最も。

彼女たちはまず先に、自分たちがこの瞬間狙われているということ
を失念していた。

ドバツ！ という音と共に、先頭を歩いていた最愛の体が吹き飛ばされた。

霧丘と海鳥はすぐさま反応し、一步遅れて浜面も地面に伏せた。

周囲の人々が一齐にパニックに陥るが、それでも銃弾を受けた本人である絹旗は冷静だった。

（一発あたりに二十発の散弾。一発あたりの大きさは5ミリ強——）

その判断能力は、暗部で生きてきた彼女だからこそそのものだ。

（これなら能力を超使わなくても、その場にあるもので盾にできるはずです！）

受けた攻撃から威力を逆算した彼女は、近くに路上駐車してあった自動車の影に隠れる。同様に他のメンバーも他の車の影にそれぞれ隠れた。

しかし、襲撃者の方はちらりとそれを確認すると、霧丘のいる車へ向かって銃口を向けた。

そして、『フルオート』の弾丸が、車を貫いた。

「何!？」

自動車はあつという間に遮蔽物としての役割をなくし、穴だらけの金属くずと化した。一番手前にあるドアを彼女の能力で硬化していなければ、その華奢な体はハチの巣にされていただろう。

それぞれが武器を取り出しながら、彼女たちは慎重に相手を見定める。

「やっほー。霧丘愛深ちゃんはいいんですよね？」

陽気な声が、地下街に響き渡った。

その女は、ふざけたように大きな銃を持っていた。全長は1メートル以上あるだろう。150発から200発は入りそうなボックスマガジンが備わっている。人間というよりは陣地の制圧のために使用されるようなものだった。

しかし、使用されている弾丸は明らかにカスタムの散弾銃のものだった。本来接近戦で使用されるべきその弾丸を、明らかに接近戦に不向きな大型の銃に搭載しているのだ。

この女は、それを押し通すだけの速度と技量があるということ。

「砂皿緻密と言えば分かるんじゃないですか？ あなたが爆殺しよう

としたんですから」

ね？ とキョートな様子で同意を求める彼女は、

「私はステファアニー・ゴージャスパレス。砂皿さんの仇討ちに来たんですけれど、覚悟を決めた方が良いんじゃないですか？」

アクセラレータ
一方通行達は、再び集合した。

場所は第二学区。自動車や爆音など、とにかく実験の過程で大きな騒音が発生する分野の研究施設ばかりが立ち並ぶ施設だ。研究施設の建物に施されている防音設備だけでなく、学区の周囲を取り囲むように壁が建築されており、逆位相の音波を出すことで騒音を打ち消す設備まで備え付けられていた。

軍事部門を司る潮岸にとっては、ホームタウンのようなものなのだろう。

結標は、黒塗りにされた防弾車に背中を預けながら、

「その潮岸つてやつのお隠れ家は分かったのかしら？」

「親船の話によりやあ、この学区で試験的につくられているシエルターのひとつだと」

爆薬を扱う学区である以上、その耐久施設を行うためのシエルターもある。その中のひとつに、紛れ込ませているのだという。

一方で、潮岸はシエルターの中で顔をしかめていた。

彼にとっては『安泰』こそが最大の贅沢であり、そのために最大限の努力と時間を費やしてきた。その中でも最大たるもののひとつが、このシエルターである。

しかし。

ここにきて、その『安泰』が根底から覆されようとしていた。

「……同じ統括理事会のメンバーによる、同権限者視察制度の執行だと……？」

彼ら12人の間には、確かにそのような取り決めがあった。

統括理事会メンバー12人は、その力が均等でなくてはならない。

誰か1人が余計な力をつけるようなことがないように、極めて民主的

に議会を動かしていくために必要なのだ……という建前で設定されたものだった。

こんなお飾りの制度など、本来使われることはない。それぞれのメンバーは、各々の得意分野で他のメンバーを出し抜こうとするのが普通だからだ。

当然、それを突きかえすための策を用意していた。

しかし、それは叶わなかった。

改めて12人のメンバーそれぞれに確認をとってみると、個人間や少人数の中でそれぞれどうでもいい小さな条約が結ばれていた。それら1つ1つは大したことはないが、不思議と『同権限者視察制度』に干渉するようになっていたのだ。

条約Aを用いて拒否しようとすれば条約Bが邪魔をし、その枷を取り払うのも条約Cが許さない、といった具合だ。

「あの女狐め……！」

最も恐ろしいのは、ここに来るまでそれに一切勘付かせなかったことだ。軍需推進派の潮岸としては、それに反対する者の筆頭である彼女の動向は常にチェックしてきたにも拘わらず、である。

「いかがでしたしょう」

杉谷がそう尋ねる。

カメラの情報が正しければ、今の親船は一方通行たち『グループ』を手駒・もしくは共闘関係を築いている。視察を拒んでシエルター内に立てこもったところで、核兵器をも凌ぐその戦力で破壊されるのがオチだ。

杉谷は、彼らがそこまで強硬的な手段にでることはないのではないかと口にするが、潮岸はその樂觀的な意見を否定した。

「ことは『ドラゴン』に関わるからな」

『グループ』4人ならともかく、親船最中にその意思はないのでは？」「あの女こそ、行動理由の面では何より恐ろしいのだよ」

彼女が見くびられているように見えるのは、今までは牙を抜かれていたというだけのことだ。もともと、名も知らぬ幼子が泣いているというだけで、国家にも立ち向かえるような女性なのだから。

「ヤツが動き出したのなら、こちらでも武力で応じるしかあるまい」

「娘の親船素甘を取り押さえますか？」

「親船はともかく『グループ』には通用せん。余計なことに時間を潰している場合か」

彼の主義としては、人質を取ったところで自分の喉元に刃がつけられることは良しとしないらしい。彼は、ここで迎え撃つことを決断した。

そして、表にいる『グループ』の前には高さが7メートル近くもある大型の駆動鎧パワードスーツや、砲塔を備えたアーム付きの遠隔操縦車が立ち並んだ。

その様子を見た土御門は、思わず笑う。

「さすがは軍需部門の潮岸。手駒に配る兵器にも遊び心が溢れているな」

さらに、ドーム状のシエルターの頂点部分からは、AIM拡散力場に干渉する装置が搭載されているということ、一方通行が知らせる。今の対象は、三次元的な制約を無視することができる結標だろう。

「戦闘結果から俺のAIM拡散力場のサンプルを入手すれば、そこからデータを算出して妨害電波みてエなものを放てるかもしれないエ。データ算出が進めば、最低でも俺と結標の2人は『能力の暴走』で吹き飛ばせるって寸法だ」

「どうするのですか？」

「戦闘とは無縁の親船が緊張した面持ちで質問してきた。

「決まってるんだろ」

一方通行は、首のチョーカーのスイッチに手を伸ばす。

「正面突破だ」

学園都市最強の能力者が、ここに君臨する。

「強度が足りねエンじゃないのか。……核を撃つても大丈夫っていうキャッチコピーは、こオいうチカラに使うんだよ」

学園都市の中でも特別製のシエルターが、一撃で砕けた。

一方通行がやったことは、単に近くにあった乗用車を片手で掴んで

投げ飛ばしたただけだ。しかし、そこに『あらゆるベクトルを集中制御する』という異物が混じるだけで、それはシエルターを粉碎するほどの力となる。

「行くか」

彼は電極のスイッチを切り替えると、杖を突いて歩き始めた。すなわち能力使用モードではなくなっているのであるが、先ほどの攻撃によって生じた衝撃波により、目の前にあった防衛力は全て無力化されている。

「面倒ね。そんな大技を連発できるのなら、さっさと遠距離から圧殺してしまえば良いのに」

「潰すのは『ドラゴン』について聞いてからだ」

結標の言葉に、一方通行は舌打ちして言った。

新手に対する足止めのために、土御門だけを外に残して一方通行と結標は施設の中へと踏み込む。親船は土御門が1人で残ることを心配しているようであったが、他の彼らは気にしなかった。もともと、戦術的な価値でしかつながない集団であるからだ。

これでも一応は『視察』ということになっているので、潮岸とサシで話をつけることができるのは、権限的にも親船だけである。

しかし、その時天井からギロチンのようにシャッターが下りてきた。そして、それは親船と一方通行・結標の間を隔ててしまう。

「結標！」

一方通行が叫ぶよりも早く彼女は懐中電灯を振るうが、しかし何の現象も起きなかった。隔壁が落ちた直後に、親船の場所を移動させられたのだ。

そして、そこに1人の男が現れた。

「手合せ願おうか」

スーツの男、杉谷だった。

第三学区で個室サロンを占拠していた元『迎電部隊』スーパーキングナルの連中を大型の拳銃で皆殺しにした男だ。彼はスーツのポケットから葉巻を取り出すと、口に啞えた。

「二度と会わないことを祈っている、と言ったんだがな」

「オマエの方から仕掛けてきたんだろオガ」

「そのための努力はお前の方でやれ、とも言つたはずだ」

タバコに火をつけるために、彼は葉巻の箱と入れ替えにライターを取り出した。雰囲気からして高級なオイルライターでも出てきそうな感じであつたが、彼の格好や印象とは裏腹に、それは百円均一でも売っていきそうな安物だつた。

「オマエは『ドラゴン』について知っているのか」

「あればな」

口に加えた煙草に火をつけるために、ライターを近づけながら彼は言う。

少なくとも、一方通行にはそう見えた。

しかし、パシュ、というガスの音と共に、結標の体が床に倒れた。

恐らくは、封入しておいた高压のガスで、小さな麻醉針を発射したのだろう。

「潮岸からのオーダーでな。単純に高破壊力の一方通行より、あらゆる壁を素通りできる結標の方が破壊の優先順位を高く設定されていた」

「何なんだ、オマエ」

「甲賀だよ。その末裔だ」

自嘲するように杉谷は答えた。

彼は大型の拳銃を取り出したが、それを一方通行に使うのかどうかは不明だ。いや、その思考の裏すらも突いて、あえて真正面から弾丸が来るのかもしれないが。

油断せぬよう手足の先まで観察する一方通行に、杉谷は言う。

「親船は終わりだ」

統括理事会2人による面会という場面は、完成してしまった。

しかし、そこには護衛というものが一切ないのだ。したがって、何の装備も持たない親船と、学園都市特注の駆動鎧パワードスーツに身を包んでいる潮岸との戦いは、火を見るよりも明らかである。

「統括理事会の親船さえ排除できれば、政治的な対等関係は排除できる」

あとは、学園都市の総力を動員して『グループ』という反逆者をここからつまみ出し、そしてしかるべきルートにおいて打ち止めなどの『切り札』を確保してしまえばいい。

すでに、勝敗は決したのだ。

対し、一方通行が発した言葉は短かった。

「ここで殺すが、構わねエな」

「構わんよ。寝言一つで憤慨するほど、小さな器ではないのでな」

2人は同時に前に出た。

ベクトルを操って猛スピードで迫る一方通行に対して、杉谷はポケットから複数の改造ライターを取り出すと、タバコと共に前へ投げ

る。爆炎が通路を塞ぐが、そんなものは一方通行の壁にはならなかった。

しかし、視界は封じられる。

(いない?)

炎の壁を突破したその先で目標を見失い、一方通行は靴底で急ブレーキをかけた。

「確か、木原数多はインパクトの直前に拳を引くことで『反射』の壁を破っていたな」

後ろから聞こえた声に、彼は慌ててそこから飛び退くが、その声と拳はピタリとその動きに追従してきた。

「そして、垣根帝督はこの世には存在しない物質を使って、この世界に存在しないベクトルを生み出していた」

ゴツキイ！ という大きな音と共に、一方通行の顔面にビリビリとした痛みが走った。

「なるほど」

対し、杉谷の手もねん挫したようにその手首が大きくはれ上がっている。しかし、素手で一方通行にダメージを与えることができたという事実が、彼が一流の技術を持っていることを示していた。

しかし、そこまで冷静に分析して、一方通行は告げた。

「三下だな。そこそこの腕を持つていたとしても、実行できるのは腹黒ジジイの命令に従うだけか。潮岸の野郎が、善人に見えんのか」

「……確かに、善なんて言葉はいつでも権力者に利用される」

杉谷は一方通行の糾弾を一度受け止め、そして認めたくえでこう告げた。

「だからと言って、全てを悪に委ねれば、地球上の問題は一つ残らず丸く収まるのか？」

悪の視線を真正面から受け止め、善は糾弾する。

「お前たちがやっているのは、善がとりこぼした残飯を漁っているだけだ。二、三の悲劇を食い止めた程度で、百、千の悲劇と常に立ち向かっている我々に勝っているつもりなのか？」

「クソ野郎が。その残飯を卑しいと思っている時点で、オマエの善は本物なんかじゃねエよ」

一方通行は、こう返した。

彼からしてみれば、8月15日や8月31日に、あの少年少女たちや、1人の女性研究者に見せてもらった善に比べて、彼のそれは陳腐すぎる。

数じゃない。質でもない。

その結果、誰かの日常にある笑顔を守れているのかどうか、というそれこそが、本人にとって最優先事項だという事を、この男は忘れていたのだろうか。

「お前のような悪党が、本物の善を知っているとでもいうのか」

「……、」

驚くような潮岸の問いに、わずかな沈黙をはさんで一方通行はこう答えた。

「知っているさ。……思い出すだけで頭にくるぐらいにな」

「そうか。……だが、その善人とも会うことはもうないだろう。ここで死ぬのだからな」

直後、一方通行の体が崩れ落ちた。

潮岸がポケットの中にあるボタンで、一方通行の電極を遠隔操作したのだ。

統括理事会2人は、間にテーブルをはきんで座っていた。

その雰囲気は、上級階級らしい和やかな雰囲気に含まれていた。紅茶とお茶菓子が無いのは減点だが、それでも一方通行が天井に空けた穴から除く星空すらも、インテリアのひとつとして許容できそうなくらいではあった。

親船と潮岸。

「ええ。私から要求したいことは本当に簡単なものなんですよ。それは、お金でも、権限でも、ましてやあなたの生命でもありません」

それは、今後潮岸が実行する全ての計画・作戦から『潮岸自身以外の生命を勝手に組み込み消費する』という条項を永久削除してほしい、ということだ。

しかし、口で言われているだけにとどまらず、親船はそれは『徹底』するはずだ。つまり、口約束に留まらずに、それが実行可能になる戦力である、潮岸の持つ部隊なども含めて、完全に解散させるのだ。

それは、潮岸の力のすべてを丸ごと奪うことと同義だ。

「そうそう、『ドラゴン』についてもお聞きしましょうか」

「君にそれが必要かね？」

「私にとりより、協力者である『グループ』の方々から頼まれていますね」

潮岸はわずかに沈黙し、そして口を開いた。

「親船クン。君は『ドラゴン』についてどの程度知っている？」

「知りませんよ。私の権限が書類通りなら触れる機会もあつたでしょうけどね。そうでなかったのは、あなたが一番分かっているはずですよ」

「あれは人の目に触れてはならないものだ」

潮岸は自分が非難されていることにも気づかず、そう言った。

あるいは、本当にそれだけの危険性が『ドラゴン』にはあるのか。
「私は学園都市を守るために必要な事を果たしているにすぎないのだよ。君は私を野蛮と称するだろうが、それは『ドラゴン』について知らないからだ」

「私もまた同様ですよ」

潮岸の言葉に対しても、親船は柔和な笑みを崩さなかった。

必要とあれば、『野蛮』と称されるような行動だって起こす。大切な人々を魔手から守るためには、危険な『ドラゴン』の真相に迫ることもやむなし。

「決裂かね」

「私たちの守りたい『学園都市』とは、別のものを指しているのでしょうね」

そうか、と潮岸はヘルメットの中で言った。

これで、言葉による交渉は平行線のまま終わりだ。そして、それが終わったならばやることは決まっている。

轟！ と。

直後に、駆動鎧の全出力を費やして、潮岸は親船へ超合金の拳を放った。

潮岸のつけている駆動鎧は、学園都市で軍用に採用されているものを、他の兵器との相性を下げる代わりに防御力や耐久性を中心にグレードアップした特注品だ。それはつまり、その拳がどれほど頑丈であるのかを示していた。

建設重機とも比べ物にならない力で、老女の体など粉みじんになっ
てしまう。

それが、正しいはずだった。

しかし、

「……少しは考えなかったんですか？」

親船の顔には、傷一つ付かなかった。なぜなら、潮岸の拳がその途中で不自然に停止していたからだ。

そう、彼はその考えを思いついていなかった——駆動鎧に身を包む潮岸と同じように、親船もまた、自分の命を守るための策を用意していた可能性について。

老女の手握られていたのは、黒曜石のナイフ。

トラウイスカルパンテクウトリの槍。

アステカ神話由来の魔術。そんなことができるのは、当然彼しかない。

親船の顔がはがされていき、そして一瞬だけ褐色の肌を見せたものの、次の瞬間には別の顔が貼り付いている。

「海原、光貴……！」

「おや、その名前がいいんですか？ てつきり、エツアリと呼ばれるものかと思っていましたか？」

駆動鎧のあらゆる歯車やモーター、ネジといった部品がバラバラになって床に落ち、礼服姿の老人が現れるまで、そう時間はかからなかった。

「親船は……結局、あの腰抜けは安全地帯から高みの見物をしているということか……！」

「どうなんでしょうね」

彼の魔術はあらゆる人物に姿を変えることが出来るが、その条件として、まず人間の皮膚を切り裂いて護符とする必要がある。しかし、親船は10センチ大の皮膚を必要とされることを聞いても、一瞬も迷わなかったそうだ。

『ドラゴン』についてお聞きしましょうか。それとも、腰抜け呼ばわりのした親船さんが、どれほどの痛みに耐えたのか試してみます？」

「……ッ！ 美濃部！」

潮岸は叫ぶと、礼服の中に入れていたボタンのスイッチを押した。隔壁が上がり、そこから2人の大男が現れる。

彼は手駒の警備組織を常に『杉谷班』と『美濃部班』に分けている。そうすることで、片方に裏切られたときにもう片方を殺し合えるようにするのだ。そして、今は予備戦力として残りの半分を機能させたということだ。

しかし、出口の辺りで彼は立ちどまった。

それこそ、彼は逃げることも忘れて振り返った。

「なぜ、お前たち2人以外の警備が皆殺しにされている!」

大男は、その疑問に答えることなく、海原にこう言った。

「割と早かったな、エツアリ」

どす、という鈍い音と共に、潮岸が黒曜石のナイフによって倒れた。

投げた本人である大男は、魔術による変装を解除する。そして、その隣にいる男も。

現れたのは、1人の男と1人の少女。

「テクパトル……それに、トチトリ!」

戦いの終わりと逃亡の始まり

テクパトルは、アステカの『組織』を実質的に動かしていた男だ。しかし、部下であるトチトリは彼とあまり折り合いの良い方ではなかったはずだ。もつとも、組織に属している以上、そこには上下関係があるので、そこまで気にすることではないのかもしれないが。

海原は、思わず自らの武器を確認する。

トラウイスカルパンテクウトリの槍。

金星の光を反射させることで、あらゆる物体をバラバラに分解する不可視の光線を放つことが可能だ。一方通行の攻撃によって天井に空いた穴から、この室内にも光は降り注いでいるので、魔術の使用は可能である。

できるのだろうか、と彼は思った。かつての仲間にも、その刃を向けることを。

「おいおい」

しかし、テクパトルはこう言った。

「そんなチャチなものでもいいのか？ 俺はてつきり、『こういうものが飛び出してくるのかと思っていたぞ」

彼がトチトリから受け取ったのは、厚さ数ミリの石板だった。

アステカ特有の記録媒体。

(まさか……)

その途端、彼の頭を激しい痛みが襲った。知ってはいけない知識によつて、頭が汚染されたのだ。

「そう。『原典』だよ」

海原の予想を肯定する言葉を、テクパトルは笑顔で言った。

「シヨチトルに『改造』を施し、『原典』を埋め込んだのは知っているだろう？」

尖兵にさえ配布するようなものであるので、幹部である彼が持つていても不思議ではない。そんなことを彼は言ったが、『原典』は単なる

武器や霊装とはけた違いなはずだ。

「出せよ、お前の『原典』を。シヨチトルが生きていることは知っているし、そうであればお前が『原典』を抽出したはずだ」

その言葉を聞きながら、未だに痛みが抜けない頭で彼は考えた。

おそらくは『暦石』。

アステカ世界における複雑なカレンダーであり、同時に世界の破滅と再生の仕組みを記述した、円盤状の巨大な石。その中で、シヨチトルが持っていた派生系と彼が持っている派生系は、別々の箇所である。

彼は顔を上げ、なるべくその中身を見ないようにしながら言う。

『月のウサギ』の記述ですか……」

「わざわざいっつを『読んだ』のか？ 存外、命知らずの奴だな」

その言葉からして、彼はこれを読まずとも運用ができるような手段を施しているであろう。

月のウサギ。

それは、5つ目の太陽が作られたとき、その時つくられた月は神々の予想を上回るほどに輝きすぎた。そのため、神々は月にウサギを投げつけることでその光を弱めたのだ。

ならば、この後に生じる現象については分かり切っている。

ゴバツ！ と。

テクパトルの手から何かが放たれ、シエルターの壁を内側から粉々に砕いた。

学園都市製の、戦略兵器にも耐える頑強なシエルターの壁があつさりと破れ、外で戦っていた潮岸の私兵へと直撃する。

「避けるなよ。今ので外の私兵が2、30人は死んだんじゃないか？」

しかしそれでも、テクパトルは火力不足だという。素材となる『ウサギの骨』がまずいのだそうだ。だが海原は、その威力よりも傍らのトチトリに驚いている。

彼女の指先が、ぷらん……と、イカの足のように揺れていた。

「……何をしたんですか」

海原は、震える唇を動かした。

「トチトリに、何をした!」

『ウサギの骨』だよ。一から十まで説明しないと分からないか?」

テクパトルはそう言った。その言葉から、魔術の内容を想定するのはそう難しくはない。

(トチトリは、なぜ従っている……?)

海原が褐色の少女を睨みつけていると、彼女は初めて口を開いた。

「……う……あぐ……うぐ……」

その瞬間、今度こそ海原の全身から温度が消え失せた。彼女は、その苦しみを言葉にすることすら叶わないのだということに気が付いたから。

そして、絶句する海原を見てテクパトルが笑い出す。

なぜ2人が協力しているのか、と彼は先ほど思った。しかし、そんな難しい理屈はなかったのだ。

まともな人間が、自分の骨を犠牲にする作戦など承諾するはずもない。

「ははっは! そいつを見ていると楽しいだろう?」

さらに、なくなった部分の骨は黒曜石と交換されるらしい。その作業には、相当な激痛が伴うことを、テクパトルという男は笑いながら説明した。

「テクパトル……」

そして、海原の怒りは頂点に達した。

「テクパトルうううううううううううううううううううう!」

彼は、自分の顔を覆い隠していた別人の皮膚をはがす。エツアリのその怒りに、懐にしまわれていた『原典』が呼応した。巻物状に宙に広がるそれを、彼は自らの意志で掴み取る。

『原典』と『原典』との衝突。

もはや、まともな魔術師の戦いとは呼べなくなっていた。しかし、

エツアリはそこに忌避を覚えなかった。それ以上に、テクパトルが踏み込んではいけぬ領域に踏み込んでしまっていたからだ。

「いいね。これでこそ俺たちの戦いだ。叡智を尽くし、アステカの舵を奪い合おう」

テクパトルは石板をかざしてそれに応じた。

テクパトルの中から複数の閃光が生じ、それをエツアリの巻物が大きく広がって受け止めた。返す刀で巻物の表面から粉末の嵐が発生し、それをテクパトルの石板が大きく扇いで吹き飛ばす。

衝撃波だけで、シエルターのドームがミシミシと揺らいだ。

その外側の戦いの一方で、エツアリの内側でも、原典の持つ汚染との戦いが待っていた。

『原典』は、自らの知識を広めようとする人に対して助力する。しかし、今の所有者よりも適した者が現れた時には、その『用済みの所有者』を抹殺してでも乗り換える。

試されている、と海原は感じた。

彼は10万冊以上の『原典』を記憶した禁書目録ではないし、あるいはあらゆる『原典』を解読し、その魔術のすべてを使いこなせると言われている『イマジナクリエイト幻想創造』でもない。

(構わない……)

だが、それでも海原は突き進む。

しかしついに、テクパトルの手から生じた数発の弾丸が、巻物の防御をかくぐって海原の体に突き刺さった。『原典』の補助があったためか手も足もちぎれていないが、ついに彼は地面へと倒される。

「場数の違いだな。それに、そもそも『原典』に対する保護も甘い」

テクパトルは、新たな骨を光へと変えながら彼に近づいてくる。

ひとつの大きな戦いが終わっても、何も変わらなかった、とテクパトルは言った。自分たちの戦いで守られたものは、自分たちの上にいる老人たちの利益しかなかったのだ、と。

そして、その老人たちを粛清して残ったものは、何もなかった。指針も目的も失われ、彼らは迷子になった。

だから、まずは裏切り者を倒す。

そのための必殺の閃光が、テクパトルの手から放たれた。

男の腹に、大きな穴が空いた。

エツアリではない。

その手から放たれた閃光は孤を描き、テクパトル自身を貫いていた。

「知っていますか？ 『原典』は単なる道具や武器ではありません」

それは、その知識を最も広めようとするものに見方をする。必要とあれば、現在の所有者に牙を剥いてでも、その目的に沿って行動するのだ。

自らの血で床に原典を書く——すなわち、『写本』を書いていたエツア리를攻撃することなど、許すはずがない。

しかも、彼はその知識の逆流を防ぐような措置を取っている。

「他人に知識を広めようとするどころか、自分でも読もうとしない。そんな『死蔵』を、魔導書の『原典』が許すとも思っていたんですか……?」

勝敗は決した。しかし、そこまでで終わりではなかった。

テクパトルの鞆の中にある複数の石板。そこから、不自然に黒い影が伸びていたのだ。

受け取れ。さもなければ殺す。

まるで、そう告げているようだった。

(どうやら、自分はよほど『原典』に気に入られているようですね)
「……良いでしょう。ただし、その前に手伝ってもらうことが一つあります」

エツアリの視線の先には、倒れているトチトリの姿があった。

一方通行は、その能力の重要な要である電極を操作され、うつぶせで床に倒れていた。

そして、そんな彼に杉谷は発砲した。

火薬のにおいに、血のにおいが混じる。

しかし、血を流しているのは、電極を操作されたはずの一方通行ではなく、杉谷の腹だった。

「な、ぜ……?」

「俺の杖に細工がしてあることには気づいていたな?」

自律走行を補助するための脚やモーター、センサといったたぐいのものは、全てがダミー。そして、その本命は『遠隔操作の電波を防止するためのジャミング装置』なのだ。

「単なる妨害電波だけだと、ミサカネットワークに使っている電磁波も乱れて本末転倒になる。だから、オマエらが妨害電波を使うのを待っていた」

この日に一方通行が妨害電波を受けたのは、今回で2回目だ。つまり、1回目に潮岸からキャンピングカーへの襲撃があった時にデータを採取しておき、ジャミングする電波を割り出していたわけだ。

これで、一方通行は歩くことも能力を使用することもできるようになってしまっている。

彼は、杉谷に拳銃を突きつけた。

「これが悪のやり方だ」

一方通行も、杉谷も、何一つ変わりない。暴力をもって暴力を制しようとして、悪党なら容赦なくその命を奪うことも考える。そして、その相手を善へと導くようなことはない。

2人が引き金を引いた。

杉谷の撃った弾丸は全て一方通行の『反射』で弾かれ、そして一方通行の弾丸は杉谷の体に突き刺さる。

それでも、電極のスイッチを元に戻す一方通行の前に倒れる杉谷は、まだ息を吐いていた。

「……つまねエな。善人を名乗るのなら、もオちつと気合を入れてくれよ」

ステファニー＝ゴージャスパレスという女は、霧丘にとってこれまでに見たこともないほど、強力な戦士だった。

拳銃は通用しない。

そんなものを使用する前に、カスタムの軽機関銃で打ち抜かれてしまふ。

能力は通用しない。

自動車を投げ飛ばそうとすれば、相手は正確に彼女が持ち上げた（？）自動車の燃料タンクを打ち抜いて、彼女の攻撃を自分のものへと変えてきた。

(……この女、能力者との戦いに慣れている?)

ステファニーは、かつて霧丘が殺した砂皿緻密という『スクール』が雇ったスナイパーの仇討ちにやってきた、と言っていた。

しかし、あの男は外部からやってきたはずであるし、そしてステファニーも仇討ちするために学園都市に来たらしい。

おかしい。

能力者の犯罪を取り締まる『警備員』アンチスキルでさえ、『暗部』で育て上げられた大能力者^{レベル4}の霧丘を手玉に取ることができる人間など、いないはずなのに。

「まさか、あなたは……」

「いい加減、気づいたんじゃないですか?」

そう、ステファニーは、かつて学園都市の『警備員』だった。そして、数々の兵器に対する怯えと恐怖の中で暮らしている『外』の人たちに引け目を感じて、彼女はそんな人々を助けるために動き出したのだ。

「警備員の捕縛術を殺しに応用していたので、砂皿さんは奇妙な目を向けていたんじゃないですか?」

だからこそ、彼女は能力者の殺し方を熟知している。

「どうやら、あなたは『座標を固定する』という能力を応用して『物体を硬化』しているみたいじゃないですか」

すると彼女は、霧丘ではなく周囲にある地下街の飲食店にその銃口

を向けた。

その先にあるのは、プロパンガスのボンベだ。

「ならば、硬い物体では防げないような……そんな攻撃をすればよいだけではないですか？」

「ボバツ！」と。

周囲から生じた爆風が、霧丘を襲った。

少女の華奢な体が宙を舞った。

ステファニーの弾丸はプロパンガスを爆発させ、その時に生じた爆風によって、彼女が硬化して盾としている自動車のドアを貫通して衝撃波が襲った。

そして、その隙間を縫ってステファニーの持つ軽機関銃から散弾が飛ぶ。その攻撃力は、10メートル以内ならば、並の装甲車を数秒で薙ぎ払えるだけの威力があった。

しかし、そのような派手な戦いを繰り広げながらも、あくまでも彼女の戦闘技術は『警備員』のものが土台になっている。すなわち、人間が長い時間をかけて追及してきた、最も効率の良い戦い方なのだ。

その積み重ねが、そして彼女の持つ並外れた技量と能力者に対する知識・柔軟性が、どれほどの脅威であるかなど明らかだろう。

「きつ、霧丘あああああああー！」

浜面が叫んだ。

まるで、本人の代わりに断末魔の悲鳴を上げているようだった。

しかし、ステファニーの顔色は優れなかった。

「……ふざけてんじゃないですか」

彼女は叫んだ。

「もつと苦しめ！ もつと命乞いしろ！ 立てよ、立って殺される！」

あまりの散弾の勢いに、空気が膨張したような気配がした。

だが、あまりの爆風と銃弾の嵐の中に、絹旗でさえ入って割ることができない。一応拳銃で狙いを定めようとはするものの、彼女の大型銃器を使用しているとは思えないほどの格闘性能に、ついていけな

かった。

それでも、ようやく自分が発生させた煙を吸って咳き込んだときに、ようやくその指が引き金から離れた。この程度で終わりかよ、と彼女は吐き捨てる。

その様子を見ている浜面はおろか、最愛と海鳥も何もしなかった。ただ、その場に立っていた。

そんな彼らを見て、ステファニーは、自分自身の勝利を確信する。

そして、ズツ、という鈍い音と共に、その腹を鋭利なナイフが貫通した。

まるで、手に持ったナイフを至近距離で相手の腹に突き刺したようであった。

しかし、そのナイフの持ち主である霧丘愛深は、しばらく離れたところで横になったまま、ただ握った拳だけを突き出している。

「私の能力『セトルポイント座標確立』は、確かに、元は座標移動系の能力が一方通行の『パーソナルリアリティー自分だけの現実』を埋め込まれたことにより、変化したもの。『自分が指定したものの座標を、相対座標で固定する』というその性質上、『硬化』などの裏技を使用しても、指定しにくい『空気』などの物質は、確かに固定しにくい」

だけど、と彼女は続ける。

「だけど、要するに『固定』することが可能な物質であれば『硬化』することはそう難しくない。それができるその応用性こそが、レベル4大能力者なの」

彼女の周囲には、淡黄色の液体が水たまりを作っていた。そして、その周囲には、複数の割れた大きな金属缶のようなものが転がっている。

(……消火器?)

強化液消火器。

炭酸カリウムなどの強アルカリ性の濃厚な水溶液を使用することで、油脂と炭酸カリウムの鹼化によって高温の油を瞬時に不燃化する

——要するに、てんぷら油の火災などが想定されているこの飲食店街なら、多くの店に導入されている物だ。

しかし、彼女は当然ながら、本来の仕様方法とは異なる方法で使用した。缶の中身を自らの体に浴びせ、それが皮膚に届く直前に能力で『硬化』する、という形で。

要するに、最愛が空気中の窒素を用いてやっていることを、消火器の中身で代用しただけにすぎない。

ステファニーは、確かに能力者との戦い方を熟知していた。

しかし『暗部』に生きている連中は、大能力如きの能力で満足することはしない。そして、自分の欠点を見抜かれてもそれを補い、必死で生き抜く『人間』であることを、彼女は忘れていた。

彼女は自分の周囲を液体の鎧で包んだまま、倒れるステファニーに近づいて行く。

そして、その鎧がはがれると同時に、ステファニー愛用の大型カスタム機関銃が彼女の能力によって持ち上げられた。

「私にとって怖いのは、どこから来るのかもわからない、対処できない攻撃。その点では、砂皿緻密の方が、よっぽどの的を射ていたけど」

その大型銃器が、本来の用途は異なる鈍器という形で、ステファニーの体に叩き付けられた。

地下街での戦いの勝敗は決した。

あれだけの重量のものを叩き付けたにも拘わらず、それでも彼女は意識を保っていた。撲殺せずに尋問するために、加減をしてはいたのだが。

「……それにしても、随分と騒ぎを起こしたね」

「いやあ、砂皿さんのために戦うのでしたら、これでもまだ控えめなレベルですよ」

本当にタフな女だ、と霧丘は呆れた。

しばらくすると、戦いの終わりを感じ取ったのか、最愛たちが近づいてくる。

「しかし、軽機関散弾銃は自前で用意したんでしようけれど、攻撃ヘリの『六枚羽』に関しては超どうやって仕向けたんですか？」

他にいる協力者をあぶりだすための質問だった。

しかし、ステファニーの返事は、不自然な沈黙だった。それに、その場にいた誰もが嫌な予感を感じ取る。そして、彼女はキョトンとした様子でこう返事をした。

「何のことですか？ こんな街中で攻撃ヘリを用意できるなら、アウトレンジから一方的に砲撃するに決まっているじゃないですか」

その場にいた、全員の動きが止まった。

『六枚羽』を用意したのは、ステファニーではない。『電話の声』の女でも、『心理定規』^{メジャーハート}のドレスの女でもないと言っていた。

すると、そんなものを用意できるのは、それ以上の権限を持つ『誰か』。

「絹旗、逃げるぞー！」

海鳥の叫び声と同時に、彼らは一斉に駆け出した。

そして次の瞬間、周囲のコンクリート壁が吹き飛ばされた。

そして、そこから黒服の特殊部隊たちが一斉に流れ込んでくる。

間一髪で、間に合った。

海鳥が辺りのコンクリートを窒素爆槍^{ボンバーランス}で切り裂き、その瓦礫を障害物にして稼いだ時間で、彼らはその場を走り去る。

「ど、どういふことだよ!？」

「つまりは、上層部ってことだよ。アレイスターの野郎の命令なんだろう」

混乱しながらも、滝壺の手を引いて走る浜面に大して、海鳥は苦い表情をしながらも冷静に答えた。

「アレイスターの野郎は、何らかの『プラン』を計画・実行しているらしい。それに伴うイレギュラーも当然ながら計算済みなのかもしれないが……浜面だけは、別だった」

この街で起こる、大きな事件の大半は、あの男が計算した可能性の

範疇で起こるものだ。だから、その影響はあらかじめ予想だつてできるし、逆にそのイレギュラー要素を利用することもできる。

しかし、ただのスキルアウトの1人に過ぎなかったはずの浜面仕上がここまで生き残ることは、アレイスターにとって完全に計算外だったのだろう。

(……何の力も役割もないはずの無能力者、浜面仕上。こいつが、『プラン』の範疇にあるのであろう一方通行や麦野沈利といった超能力者……いや、それに加えて駿斗兄ちゃんや上条といったイレギュラーまでその範疇に加えていたとしても、その盤面を大きく崩しかねないほどの『何か』を手に入れているのか?)

だから、学園都市は全力をもって『ただのチンピラ』であつたはずの浜面を抹殺にかかる。

「これから、どうする?」

「……逃げるにも、限界があるはず」

浜面の問いに、霧丘は冷静に分析する。

「学園都市の中じゃあ、いずれは見つかる。そして、その間に彼らと交渉できるだけの『何か』を得られるとは思えない」

「——第二十三学区」

すると、黒夜が答えを出した。

「駿斗兄ちゃんたちも、この街の外にいるっていうんだ。だったら、私たちもそこに行こう。外じゃあ戦争が始める頃合いになるから、ちようどいい!」

彼らが外に無断で出ることは、学園都市にとってかなり頭の痛いことになる。学園都市の中でも有数の高位能力者であり、しかもその大半が通常的能力者とは異なる『実験』を受けている。

しかも、今はロシアと戦争が始まろうとしている。そんな国を相手に『自分の街の人が勝手に国外逃亡したから、捕まえて送り返してほしい』などとは言えないだろう。

目的地は、ロシアの地だ。

だが、そこに至るまでに捕まらないかどうかだけが、気がかりだ。すると、列車を降りてしばらく歩いた時、急に、浜面が立ち止まっ

た。

いや、違う。

彼が支えている少女、滝壺に限界が訪れたのだ。

「浜面、滝壺さんは私が背負います！ 能力を使えば、大したこと超ありません！」

絹旗が叫び、彼女の元へと向かう。

しかし、そうしている間にも複数の黒い影が迫ってきた。彼らが列車に乗っているときから、その影は追いかけて続いていた。もしかすると、中に『発条包帯』ハードテーパーピングの改良版でも仕込んでいるのかもしれない。

そして、その影に少年少女たちは囲まれた。

超能力者の戦い

「逃げて、はまづら、みんな」

滝壺は、話すのも辛そうな様子で言った。

「このままじゃ、みんな捕まる。だから、逃げて」

ふざけんな、という浜面の小さな呟きが、海鳥の耳に聞こえた。

「はまづら」

「黙ってろ」

彼はそれだけ言うと、彼女の体を担ぎ直した。

絹旗も黒夜も、自分の能力で再び空気中の窒素を集め始める。霧丘もナイフを取り出し、それまでずっと黙って逃げ隠れていたフレンドもまた、携帯式の小型ミサイルを取り出した。

だが、彼らの体力もあまり残されていなかった。

体調不良の滝壺はもちろん、浜面だって、今日1日でかなりの疲労が蓄積している。また、他のメンバーにしても、暗部暮らしが長いために体力こそあるものの、ここまで波乱万丈な一日など、そうそうあるわけではない。基本的に仕事があるときだけ呼び出され、その場で仕事をすることが普通なのだ。

その間、後ろからはカチャカチャと、銃器の金属音が近づいてくる。「最初は私が一気に爆弾を仕掛けるから、他のみんなはその後の隙を狙ってほしい訳よ」

「了解。拳銃以外のまともな中距離攻撃ができるのは、このメンバーじゃアタシとフレンドだもんな」

フレンドと海鳥がその手に各々の武器を構える。

そして、ついにその銃口が彼らに向けられる。

戦闘向けの大能力者^{レベル4}は3人。それだけでいえばかなりの戦力だ。しかし、彼らの様子からして、どんな能力者相手でも確実に暗殺できるとような訓練を積まされているはず。

(良くて五分五分……最悪、超全滅でしょうか)

最愛と海鳥は一度だけその手首のミサンガに視線を落としたが、しかし改めて目の前の相手を見据えた。

狙うなら、最高のタイミングで。

この状況ではもはや、相手が一齐に撃とうとするために集中力を高めるその直前に、一気に畳みかけて動揺を誘うしかない。

絶体絶命。

そのはずだった。

しかし次の瞬間、無数の閃光が追手たちを薙ぎ払い、彼らの脅威を払い去った。

その光景を見て。

浜面は安堵した。何者か分からないが、とりあえず目の前の敵を葬ってくれたことに。

フレンダと霧丘は啞然とした。援護が入ったことではなく、使われたその能力と、その持ち主の存在に。

最愛と海鳥は警戒した。これから再び始まる、泥沼の如き死闘を予感して。

「……はーまづらあ……」

一言。

それだけで、その場にいた全員の背筋に寒いものが走った。

『マルチタウナー原子崩し』。電子を波でも粒子でもない状態で操る能力で、使用者は学園都市にも1人しかいない……貴重な第4位の超能力^{レベル5}であった。

そして、その使用者は……かつて浜面仕上が、単独で撃破しているはずであった。

その女の右目はなかった。

その女の左腕はちぎれていた。

そして、失ったその赤い眼窩の奥から、その左肩からは凶暴な光がほとばしっていた。その莫大なエネルギーが、不気味な音を立てる。

浜面は、枯れ切った喉からその名を呼んだ。

「麦野、沈利……ッ！」

「こんなチンケな野郎どもに命狙われているんじゃないわよ。お前はこの私が上下左右に裂いてブチ殺すって決めているんだからさあ！」

ぞわり、と浜面の全身を嫌な予感が襲った。
先ほどまでのものを凌駕する、真なる絶望が彼らを呑み込んでいく。

『グループ』の彼らの前には、打ちのめされた潮岸がいる。

自慢の駆動鎧パワードスーツは、海原のトラウイスカルパンテクウトリの槍によつてバラバラにされてしまったのだ。

「俺たちの身内を守るためにできることは、2つある」

アクセラレータ
一方通行が告げた。

ひとつは、ここで『ドラゴン』について知っている限りの情報を吐いてしまうこと。もうひとつは、その腹に刺さっているナイフで、さらにハラワタを抉りだして交渉を起こすこと。

『ドラゴン』か……推測はできているかね」

「まさか、『実は私も知らないのだよ』などと抜かすつもりじゃねエだろオナ」

「だとすれば、気が楽だったんだがね」

潮岸は、その正体を知ってしまった。そして、だからこそ悩んでいた。

彼の言う「知らない方がいい」というのは、安っぽい脅しではなく、心からの言葉であるという。

それを聞いた上で、一方通行は尋ねた。

『ドラゴン』とは何だ？ いったいどこにいる？」

土御門と海原の話では、それは『天使』の隠語であるという。そして、そこから連想されるものは、9月30日に見たあの光の翼だ。

「……何を言っている」

しかし、潮岸はこう言った。

全く見当違いのことを真顔で語る者が、おかしくてたまらないといった様子だった。

『ドラゴン』はどこにでもいる。ほら、今は君の後ろにいるだろう」

一瞬の空白があった。

しかし、直後にゴツン、と鈍い音がした。

「土御門？」

返事はなかった。

彼だけではない。結標も、海原も、倒れていた。1人1人が並外れた戦闘能力を持っているはずの『グループ』のメンバーが、一方通行を除いて一瞬で倒されていた。

反撃の機会すら、与えられなかった。いや、そもそも彼らは攻撃されたことに気付く瞬間すら、あったのだろうか。

そして、一方通行は、見た。

「ビューズⅡカザキリではない。あれは、単なる製造ラインにすぎない」

そこまで言った潮岸は失血のためかそのまま気を失ってしまうが、そちらを振り返ることすら一方通行にはできなかった。

金色の長い髪。

光り輝くような長身と、その肢体を包むゆつたりとした白い布の装束。見方によつては女性に見えなくもないその者の顔つきは、喜怒哀楽のすべてを含んでいながら、それでいて人間の持つ感情とは異なるものが垣間見えた。

「——『ドラゴン』か」

その対象は、口を開く。

「その呼び名も間違いでない。天使という記号にも対応している」

地球外知的生命体だとか、聖守護天使、あるいはシークレットチーフの真なる者、などという仰々しい言葉に比べれば、ずっと本質には近い。しかし、そこまで認めておきながら、『それ』は異なる名を名乗った。

「かつて、クロウリーと呼ばれた変わり者の魔術師に、必要な知識を必要な分だけ授けた者——『エイワス』、と」

エイワス。

そう名乗った目の前の存在に対して、一方通行は注意深く観察し

た。

あれだけ追い求めてきたにも拘わらず、次のアクションへと思考が繋がらなかった。自分たち『グループ』はあくまでも情報を使って取引を行う方針で動いていたので、いきなり現物が目の前に現れるとは、全くの予想外だったのだ。

「不思議そうな顔をしているな。私がこうして現れたことが、そこまです不可解か?」

「当り前だ。」

今まで学園都市がひた隠しにしてきた存在が、どうしていきなり目の前に現れるというのだろうか。

「潮岸の使い走りか? 増援にしちや遅すぎだな」

「本気で言っているのか」

一方通行はいくつか考えた中で最も合理的な可能性を選んでみたが、即座に否定されてしまった。しかし、そのように明確な意思表示をされているにもかかわらず、何を考えているのかさっぱりわからない。

彼は黙ることで、自分の言葉を否定した。そして、今度はなぜこのタイミングで向こうから現れたのか、に思考を巡らせる。

「君に一定の価値を認め、それによって……ちよつと興味がわいたから、だよ」

彼は気軽な様子で言った。

少なくとも、『ドラゴン』、否、エイワスは統括理事会の連中にも操作できるものではないらしい、と一方通行は考える。潮岸の努力をこんなにもあつさりとは無駄にするように、出現したのだから。

そして、同時に警戒心を高めてもいた。その程度の認識で、他のメンバー3人の意識を一瞬で奪うだけの實力があるという事に他ならないのだから。

(どオする……?)

今まで殺意を持った人間なら何人とも戦って来たし、その中には木原数多や垣根帝督のような、実際に『反射』の壁を抜けて攻撃を通してきた猛者もいた。

だが、エイワスはそんな奴らとも異なっていた。そもそも、一方通行の前に突如として現れたのにも関わらず、そこに敵意も悪意もない存在というのは珍しいのだ。

まずは、目の前の存在がどのような役割を担っているのかを知ることが、先決だろう。

そんなことを考えていると、エイワスは初めて感情を見せた。そのフラットな顔に、驚いたような表情をつくったのだ。

「私の予想とは異なる結果だな。てっきり、仲間をやられた腹いせに突撃を行い、3秒で地面に付しているものだとばかり思っていたよ」
「……その一言の方が、引き金にはピッタリだがな」

一方通行は低い声で応じた。彼にとつて『グループ』というものは、利用価値だけでつながっている集団なのだ。

「オマエは何なんだ？ どうして『ドラゴン』なんてコードネームで匿われてやる」

「そこから説明しなければならぬのか。正体なんて、大したものではない。ちよつとしたh b o i e在a bというだけなんだが……」

エイワスの言葉が、ブレた。

それも、単に音にノイズが混じるようなものではない。そもそも、音源の方向そのものからブレが生じている。

「……しまったな、この程度の『意味』すらも表現できないのか、この世界は」

少々回り道をすることになる、とエイワスは言い、語り始めた。

ヒューズⅡカザキリ。

あれは人工的な『天使』などと呼ばれる存在であるが、その本質は少し異なり、エイワスを出現させるための製造ラインのようなものであるという。

『A I M拡散力場』という『塩水』に、『ヒューズⅡカザキリ』という『小さな塩の結晶』を入れることによつて、『エイワス』という『大きな塩の結晶』を生み出した……と、エイワスはたとえ話を持ち出しなから語った。

「生まれたと言うよりu y顕i d v i fが正しいか、くそ、言葉が追い

つかない。生まれたのではなく現出したとでも言っておこうか。厳密には違うがそれ以外に表現できない」

読めない。

この怪物の考えが、感情が。しかも、エイワスは自分が倒されることにすら恐怖を抱いていないようだ。たえこの地球上の全ての動植物が減んだとしても、1万年や10万年をかけて再び新たな生命がこの地球上を埋め尽くすことと同じように、たえエイワスは自分が消し去られたとしても、1万年でも10万年でもかけて再びこの地球上に現ればよい、否、現出することにすら、大した意味を感じていない。

何もしない一方通行に、エイワスはさらに言った。

「おや、それで良いのかね。先に行っておくが、君が負の意味でその実力を信じているアレイスターは、決して完全な存在ではないというのに」

「何だど？」

「彼の立てる計画には、すでにいくつかの綻びが生じているということだよ」

彼はプランにイレギュラーな現象が発生するたびに、それを逆手にとって自分が有利になるように計画を修正し、行動している。しかし、それでも少しずつ亀裂は大きくなっていることには変わらない。

そして、その行き着く先は……

「——そう、計画の要となっている打ち止めが、このままではいずれ必ず『崩壊』するだろう、とかね。ま、単なるクローンなんだから、同じ機能を持った個体を作り直せばそれで済む話なのかもしれないが」その単語だけで十分だった。

最優先事項によって全ての不安材料は取り消され、一方通行の行動は決定された。

かつて浜面の手によって倒されたとばかり思っていた、麦野沈利。しかし予想を裏切って再び現れた彼女の手から、恐ろしい光線がほと

ばしる。

逃げろ、と叫ぶ暇もなく、浜面はとっさの判断で滝壺を突き飛ばすと同時に、自身も横に跳んだ。

その判断は、正解だっただろう。なぜなら、その直後に2人がいたその金属製の通路には、オレンジ色の滝ができていたからだ。

滝壺を最愛が回収し、一斉に全員が走り出す。

「絹旗ー！」

だが、明らかに麦野は浜面を標的に定めている。そんな中で、滝壺を抱えている最愛と一緒に行動するつもりは、浜面にはなかった。

「どっか近くの、隠れることができるような場所を探しておいてくれ！ あとで連絡がついてから合流する！」

「ちよ、浜面は……」

一緒に行きたいに決まっている。だが、そんなことができるわけではない。

まずは、この化物を何とかするしかない。

「アタシが残ろう」

海鳥はそう言うと、浜面の近くに駆け寄った。

『攻撃性』に特化した私は、防御には決定的に向かないからな。逃走の中で、滝壺とアンタの次に足手まといになるのは、この私だ」

絹旗と霧丘は能力を発動するだけで銃弾を防ぐことが可能であるし、フレンダも爆弾をうまく使えば目くらましなどの応用が可能だ。

「……分かった。気をつけて」

「結局、こうなるのよ……」

霧丘はいつものクールな表情でありながらもエールを送り、そしてフレンダは疲れたような顔をしながら、背中を向けた。

「黒夜、超頼みますよ」

「安心しろ。第一位の人格を基にした開発は伊達じゃないさ」

海鳥は獯猛な笑みを浮かべ、そしてその両手を重ねて前方に出した。

「まずは、こういう使い方もできるってことを見せてやるよ」
その手に、窒素が集められていく。

そして。

ゴバア！ と、麦野に向かって暴風が引き起こされた。

海鳥のやったことは『窒素爆槍の生成に伴う気流の操作』を利用した、暴風の発生だ。彼女たちの能力は元々風力使用の系統であり、扱い方によってはこのような応用も可能なのである。

しかし、その暴風に完全に巻き込まれるよりも先に、麦野は2人の視界から消え失せていた。原子崩しを放ったその反動を利用して、ロケットエンジンを利用したかのように移動したのだ。

そのわずかな猶予を利用して、他のメンバーはその場から消え失せる。そして、浜面はまず物陰に隠れると、自分の拳銃の弾丸の残りを確認していた。

(くそくそくそくそ！)

どうして、この場面で彼女が出てくるのだ。

しかし、そのことに苛立ちと悔しさを感じている余裕すら、彼にはない。ちらりと後ろを確認すると、その場から飛び去った。

直後に、ゴバツ！ と灼熱の光線が、金属製の通路をオレンジ色に染めていった。

「がつー！」

足場を失った浜面は、下の通路へと落下していく。3メートルほど落ちたものの、そこは再び空中の通路だった。

かなり広大な空間。彼の下には、複数の小型の戦闘機が並べられていた。ぎつと見ても20機以上ある。恐らく、航空専門の第二十三学区に移動していたのだろう。

カツン、という足音が聞こえた。浜面が落ちてきた連絡通路の方向からだった。

そして、再びドバツ！ と閃光が走る。しかしその直後に、金属音が鳴り響いた。続いて、爆音も。

(麦野が俺を狙ったその瞬間に、一斉に攻撃をしかけたのか！)

彼女の能力は、攻撃力が高い反面、使用者も正しく使用しなければ

何らかの悪影響を被る可能性がある。そのために、狙いを定めるその一瞬は、かなり神経を集中させているはずだ。

その瞬間を狙って攻撃するのは、非常に正しかった。しかし、

「……殺されたいのは、1人だけじゃないみたいねえ！」

視界の隅で金髪の少女が跳んだその次の瞬間、灼熱の閃光が彼女が先ほどまでいた場所を貫通した。

「フレンダー！」

「置き土産つてわけよ！ 次からは期待しないよーに！」

彼女はそれだけ言うと、走り去っていった。

そして次の瞬間、麦野めがけて再び暴風が発生する。

「さっさと逃げろ、バカ！」

海鳥はそれだけ言うと、その場から跳んで姿を消した。

彼女の言うとおりで。今考えるべきことは、滝壺を安全な場所へ退避させるまでの時間を稼ぐこと。幸いにも、麦野の最大の目的は、無能力者であるにもかかわらず、撃破してきた自分であるのだから。

その戦いに、滝壺を巻き込むわけにはいかないのだ。浜面は駆けだした。

「どうして私が生き返ったか分かんなくてパニックってんのかしら？

サイボーグ、クローニング、それともナノデバイス☆ 当てることのできたらボーナスやってもいいけど、どうせお前にやわかんないわよね、馬鹿っぽいし」

麦野がそう話している最中にも、ゴバツ！ ドバツ！ と何回か光線が放たれる。その余波だけで、震えあがってしまうほどの恐怖がそこにはあった。

「ま、『冥土返し』^{ヘヴンキャンセラー}とかいう偏屈な医者が残した『負の遺産』の応用らしいけどさ。油脂系の『溶ける骨組み』を使って肉体のベースを整えたいんで、急速な細胞分裂を促しているんだと。ま、今はそんなことどうでもいいか」

今はあんたの泣き顔見る方が楽しいし、と彼女は気楽な調子で言った。

浜面は一気に空中の階段を一段飛ばしで駆け下りる。途中で自分の背後を打ち抜かれたが、その直前に空中へ跳び上がったために、なんとか当たらずにすんだ。

「おおおおおっ!？」

だが、それによって発生した炎が近くにあった燃料に着火したようで、爆風によって浜面の体は勢いよく放りだされた。爆炎と爆風によって麦野の視界が遮られたのは、不幸中の幸いだろう。どうする。

逃げながら彼は考えた。

以前、彼はなんとか彼女を撃退することに成功している。しかし、それはあくまでも彼女が油断していたことに加えて、様々な幸運が重なっていたことに助けられていたのだと、浜面は思い知らされた。そして、今の彼にそんな幸運が再び舞い降りる可能性は少ない。

「麦野沈利……」

浜面は立ち止まる。

諦めたのではない。もう一度、自分自身の力で立ち上がったのだ。

「どうやら、一度殺した程度じゃ足りなかったみたいだな」

正真正銘、無能力者のチンピラである男が、滝壺理后という少女を守るために。

浜面仕上は、第4位の超能力者の前に立ちはだかった。

一方通行はチョーカーの電極のスイッチを入れた。これによって、学園都市最強の能力がいつでも使用できるようになるのだ。

(……上等じゃねエか)

彼は、脚力のベクトルを操作して前に出た。彼の前では、あらゆる攻撃は反射され、ただの投擲も、いや、軽く触れることでさえ絶大な破壊力を持つようになるのだ。

(……AIM拡散力場の塊だが天使だが知らねエが、悪意を持ってあ

のガキの害になるってんなら、容赦はしねエ！)

そして、彼は逃げようとしないうエイワスの胸に自分の指先を突き出した。このままその胸に突き刺し、そしてベクトルを操って、エイワスの体内から破壊する。

そのつもりだったのだが。

ドバツ！ と。

直後に正体不明の攻撃が、一方通行の体を斜め一閃に切り裂いた。

彼がそのことを自覚した時には、その衝撃で体は後ろに転がされていた。信じられないほどの量の血が、上半身の傷口だけではなく、口や鼻からも流れている。理解ができなかった。

これは、今までの上条当麻や木原数多、垣根帝督のような、なんらかのトリックを用いて『反射』の壁をすり抜けているのではない。

明らかに異質で、攻撃を受けた後になっても、自分の身に何が起こったのかを理解できなかった。

「しまった。これはこちらの落ち度だな」

対して、エイワスはのんびりとした調子であった。その背中には、いつのまにか異様な翼が生えている。単純な金色とも違う、青ざめた輝きを持つプラチナ……言葉として成立していないのかもしれないが、一方通行にはこれ以上にうまい表現が思い浮かばなかった。目の前で見ているのにもかかわらず、理解できないことに強い違和感を覚える。

「アレイスターめ、sn構boz1用ウイルスに何か細工をしたな。打ち止めを経由した私のbeuo顕dnmに、自己防衛bseou能gbuを埋め込んだか。いやはや、すまない。自殺防止装置のようなものをnb spg加npisrしたらしい」

ますます言葉が支離滅裂になってきているエイワスであるが、その場に倒れている一方通行にも変化があった。

その瞳がまがましい赤に染まり、倒れたまま、その手が床を掴み取る。

「a b e o u g h a b a e o u g b a o 殺 w o b n o w e u f e r y
a……ッ！」

ブワッ！ と、その背中から黒い翼が出現した。

一方通行は、重力を無視した動きでゆらりと立ち上がる。

「――汝の欲する所を為せ。それが汝の法とならん、か」

しかし、それを見たエイワスは首を横に振った。

『法の書』を記した、とある魔術師の言葉を口にしながら。

「残念ながら、それは r g g 時 r i 代 p i r e g j が違うな。君のは
所詮、オシリスの頃の t s g 力 n o p h e d a 。その程度ではホルスを
生きる私に h o s e f 敵 q i e r d ないよ」

次の瞬間、二色の翼が交わり、そして黒い翼だけが一方的に断ち切
られた。

そして舞台は、北の戦場へ

「こんなものか」

エイワスの足下には、一方通行が倒れていた。

通常の間人ならば、間違いなく死んでいる出血量だった。しかし、彼は無意識に破れた血管から血管へとベクトル操作能力によってその血液を循環させることによって、自らの命をつないでいる。

しかし、それだけだった。それ以上のことは、何もできない。

「思った以上にあっさりしていたな。この程度の成熟度ではヒューズ
||カザキリにすら対応できまい。アレイスターめ、さては『今回も』
焦っているのかな? ……垣根帝督の方も気になるしな」

それだけ言うと、エイワスは踵を返して歩き出した。

その場から消え失せたり、空を飛んだりしないことに違和感を覚える光景だった。

その時。

バキリ! とエイワスの体の中心が細かく砕けるような感触があった。

エイワスの存在を司る、A I M拡散力場の集合体の結合にエラーが生じている。彼は一方通行を振り返った。

その手には、ジャミング装置を兼ねた杖が握られている。

「確か……オマエは、学園都市中のA I M拡散力場を、利用して……現出してるン、だったな。だとしたら——」

「考えたな」

エイワスが笑う。その間にも、その指先からザラザラとその形を失いつつあった。

チョーカーの遠隔操作作用の電波を遮断するためのジャミング装置。それを、ミサカネットワーク全体の電波へと設定し直したのだ。

この周囲の空間はミサカネットワークの電波であるA I M拡散力場を遮断されるようになり、その結果、結晶の核を抜き取って元の塩

水に戻すように、エイワスは崩壊を始めることとなった。

だが、一方通行の足はガクガクと震えていた。

「理解しているか？ それは君の命をつなぎとめるための命綱を、自ら切断するようなものだということに」

彼がエイワスの攻撃で大けがを負いながらもそのような行動ができたのは、自らの能力で失血を抑えていたからに他ならない。ベクトル変換能力を封じてしまえば、その行き着く先はひとつだ。

「……うる、セエよ……」

しかし、一方通行は震える唇を動かしてそう言った。

ジャミングは、時間と共に強力になるように設定した。今ならまだ辛うじて立つことも可能だが、次第にそれもできなくなる。

その前に、決着をつけなくては。

彼は拳銃を抜いた。それは、天使だの悪魔だのといった得体のしれない力ではなく、人として振るう力だった。

——ラストオーダー打ち止めという一人の少女を救うためであれば、こんなところで命欲しさにひれ伏すことはない。そんな小物は『悪党』ではない。

「汝の欲するところを為せ。それが汝の法とならん」

そう呟いたエイワスは、既に体が半透明に透けていた。その頭部に見えてきた三角柱、キーボードのように表面がガチャガチャと動いているその不可思議な物体に、拳銃の狙いが定められる。

「なるほど。ならば示してみたまえ、汝の法を」

その直後。

引き金が引かれ、乾いた音と共に、水晶が碎けるような音と、人が倒れる鈍い音が重なった。

麦野は溶けた連絡通路から、浜面がいる下層の金網の床まで飛び降りてきた。靴底が金属音を叩き、その音が辺りに響き渡る。

「一回殺した程度じゃ足りない、ねえ」

彼女は、失った片腕の代わりに自らの能力で生み出した電子の腕を、バチバチと鳴らしながら歩く。

「足りないね。全然足りないよ」

その電子の腕が、爆発的な閃光を放つ。しかし、その閃光が彼を貫くよりも先に、浜面が発砲した。

それは麦野を狙ったものではない。彼女に銃口を向けて狙いを定めようとすれば、それよりも早く閃光が浜面の体を貫く。

拳銃を握ったその手を、だらりと下げたまま引き金を引く。彼が狙ったのは、通路のところどころに置かれている中で、最も手近にあった消火器だった。弾丸に貫かれたそれは、ポバツ！ と煙を吐き出して視界を奪った。

「ナメてんのかあ、浜面！」

煙の向こうにうつすらと見えるシルエットに向けて、彼女はマルチダウナー原子崩しを撃つ。

だが、それは通路に積まれてあった段ボール箱に過ぎなかった。ダミーに気を取られている隙に、浜面は通路を飛び降りて先に進む。

「ハハッ、煙とダミーで逃走？ どの忍者だテメエは！」

麦野もまた通路から飛び降りた。すると、そこにはテスト用の戦闘機が並んでいる。

彼女はちらりと、戦闘機に装備されているミサイルやガトリング砲を見た。確かにこれらを使われれば、彼女でも多少はてこずるだろうが……

(流石にそれはないか)

チンピラの浜面に、そんなものを操作する技量があるとは思えない。仮に何らかの偶然で操作できたとしても、この狭い空間で移動することができない以上、むしろ格好の的になる。

彼女は、自分に余裕があることを確認すると、広いこの場所をぶらぶらと歩いた。

「どこにいるのーかなー、はーまづづらあ」

閃光のアームを揺らしながら、彼女は適当に歌う。

その時。

「どこだ」

と、不意に馬鹿正直な返事があった。

すぐ近くだった。

前回、彼女は不意打ちで拳銃を喰らっている。そのため、振り返ってその姿を確認するよりも先に『原子崩し』を放った。

だがその直前に、彼女は見た。

その先にあつたのは、整備用のトラクターと、それに積まれた大量の爆弾だった。そして、その上には無線用のヘッドセットと、機体のメンテナンスに使用するための、無線のファイバースコープ。

麦野がなにかを考えるよりも先に、その爆弾を中心に、周囲の爆弾やミサイル、航空燃料などが一斉に誘爆を起こした。

当然、離れた場所にいる浜面も無事では済まなかった。現場からは500メートルほど離れた上で、小型トラックを盾にしていたものの、その膨大な爆風に体を叩かれた床を転げまわる。

「ぐああああああつ!？」

轟音に鼓膜が破れるかと思った。さらに、打ち付けた全身を痛みが浜面を襲った。

だが、それ以上に滝壺のことが心配だった。彼女には一応駆動鎧パワードスーツを渡してあるはずだが、それでも彼女が爆風を受けていないことを願った。

浜面の中で幸いだったのは、一度敗北したはずの麦野が、それでも目の前の敵を隠したに見て油断していたということだった。恐らく、次はない。

何はともあれ、今は滝壺が優先だ。彼は周囲が爆炎に包まれているその中を、彼女の名を呼びながら探し始める。

その時、ガサリという音が聞こえた。

「滝壺?」

しかし、

「はーまづらあ」

ゾツと全身から体温が消えた。煙の向こうから閃光のアームが伸びてくるのとほぼ同時に、浜面は思い切り身を捻った。だが、耳の方

から嫌な音と匂いがまき散らされる。ジュウ、とフライパンで肉が良く焼けた時のような。

「うがあああああああああ!」

のたうち回る浜面を見下ろすように、麦野が現れる。

「この程度の量産兵器ごときで第四位が倒せるとでも思っていたのかな。浜面?」

「くそっ、くそくそくそー!」

浜面はその手にある拳銃を構えて発砲する。

しかし、その引き金がかかれる一瞬手前で、麦野の姿が消え失せた。『原子崩し』発射の反動を利用した移動だった。

移動先は、浜面の視界の外。そして、その次は彼の背中だった。足の先端が突き刺さり、浜面は宙を数メートルほど吹き飛ばされる。倒された先は床……ではなく、その亀裂から地下空間へと落ちて行った。

地面に背中から落ちたその瞬間、背骨に亀裂が入るような激痛が襲うが、悲鳴を上げる暇もなく放たれる閃光を避けることとなる。いくつもの床の破片を体に突き刺し、それでも浜面は身を捻って物陰に飛び込んだ。そして、その様子を見た麦野も亀裂から下層へと落ちてくる。

(……は……?)

物陰に隠れた浜面は、ようやく自分のいる場所を理解した。

ここは、戦闘機の試験場だ。浜面が今いる場所はその中でも空気摩擦に関する耐久試験室であり、コックピットを模した模型だった。その周囲の壁には、送風機が入った突起物が壁一面に並べられていた。

「はーまづらあ」

その声に、再び浜面の体がビクリと震えた。

彼は視線を動かして自分が脱出する出口の扉を見つける。しかし、そこまでたどり着くには距離があった。そこにたどり着くまでに、500回は打ち抜かれそうな気がした。

だとすれば、ここで決着をつけるしかない。

しかし、彼の手の中にあるのは小さな拳銃だけだった。相手は能力

をロケットエンジンのようにして移動が可能である以上、さきほどの二百キロ爆弾よりも効果的な、逃げる事が許されない範囲で防ぐこともできない攻撃をしなければいけない。

「つたく、それにしてもふざけた話だね。アンタも迷惑だったかもしれないけどさ、こつちもこつちで大迷惑なんだつもの」

麦野はカツコツと靴音を鳴らし、ゆつくりと話しながら浜面に近づいていった。その間に、浜面は周囲を見渡す。

そして……一縷の希望を見つけた。

「なあ、浜面」

しかし、ついに至近距離まで来た麦野は、こう言った。

「……………どうして、ここまでひどい怪物になっちゃったのかな」

くそ！ と浜面は毒づいた。

忘れてしまいそうになるが、麦野もまた超能力者^{レベル5}という怪物である前に、1人の女の子であるのだ。そのことを、容赦なくつきつける一言はてきめんだった。

「とか言っつてほしかったか？ はーまづらあ」

麦野の蹴りが、コックピットを回り込んで浜面の腹に直撃した。続けて、7発、8発と浜面の腹の中をかき乱してくる。

（俺の内臓、いったいどうなっちゃった……？ まだ、元の場所にあるのか……？ 腹の中で、シャツフルされちまってんじゃねえだろうな……）

「おいおい黙らないでよ。優しくさすつてやればもとに戻るのがにやーん？」

再び、容赦のない蹴りが浜面の腹に突き刺さった。

冗談のように彼の体が吹き飛び、ゴミ箱へ入れられる紙屑のようにコックピットの模型の中に放り込まれた。

「溶けた鉄と一緒に冷やして固めて、面白オブジェに変えてやる」

浜面は拳銃の引き金を引いた。弾丸は、麦野ではなく操作室のガラスを砕く。

麦野の笑顔がより凶悪なものとなったが、浜面の狙いは最初からそつちであった。砕けたガラスの破片が操作盤の上に降り注ぎ、ボタンを適当に捜査してしまう。

ゴウン、という鈍い音が辺りに響き渡ると、麦野が首を傾げて辺りを見渡すのとは対照に、浜面はすぐさまコックピットの中に入ってその風防キャノピーを閉ざした。

何かに気が付いた麦野が、浜面の方へ振り返った。彼女の唇が動いたが、何を言っているのかは彼の耳には届けなかった。

だが、麦野の瞳は泣き出す寸前の女の子のように揺らいでいるように見えた。

直後。

コックピットの周囲が、オレンジ色の爆風で埋め尽くされた。

彼らがいた場所は、戦闘機の空気摩擦用の耐久試験室だ。その莫大な摩擦力を再現するため、大量の砂鉄を混ぜた暴風を使用することで、音速を超えた空気の摩擦を再現しているのであった。

浜面は、コックピットの模型によって守られていた。

麦野には、そんな守りはなかった。

原子崩しの発射の反動を利用した、ロケットエンジンのような移動ですら逃れられない死の空間で、彼女の体が吹き飛ばされていくのを浜面は見た。その先でどうなったのかは、確認できなかった。強化ガラスの外側が、オレンジ色に染められてしまっていたからだ。

勝利の愉悦などなかった。

一刻も早く、この地獄が終わることだけを祈っていた。本当にこんな結末しか用意できなかったのか、そんな自問自答ばかりが頭の中で続いていた。

やがて現象が収まると、浜面は風防を開けて外に出た。蒸し暑い空気の中を歩き始めると、どこからか少女の声が聞こえてきた。

「はまづら。はまづらっー」

二百キロ爆弾によって破壊された天井の穴から、滝壺が顔をのぞか

せていた。浜面は彼女に向かって、大丈夫だ、と告げた。

滝壺理后を選び、そのために麦野沈利を切り捨てた。

その時、その場に4人の少女がなだれ込んできた。

「滝壺さん！ 浜面！」

最愛の声に、浜面は自分が無事であることを知らせるために、手を振って応じた。しかし、次の海鳥の声は緊張に包まれていた。

「いいか、すぐに移動するぞ！ 飛行場なら都合がいい。適当に飛行機を奪うんだ！」

何だつて、と浜面が声を上げることすら許さずに、最愛は続けざまに叫んだ。

「学園都市の別働隊が、あなたの身柄を拘束するために超こちらへ向かってきます。捕まれば命の保証は超できないような連中ですよ！」

訳が分からなかった。

滝壺や霧丘のために動く、というならまだ分かる。しかし、なぜ単なるチンピラである浜面のためにそこまで大規模なことが起こるのだ？

だが、そんなことを考えている時間すらも今は惜しい。

「おい、逃げるつつつても、どこに逃げるんだ？」

浜面の疑問はもつともだ。学園都市は、東京都の西部3分の1しかない、壁に囲まれた閉鎖空間である。潜伏しようにも、あくまで対立しているスキルアウトから一時的に逃れることができるような、小さな場所しか浜面は知らない。最愛たちも、潜伏する場所というのは、あくまでも暗部の工作上対立した相手から、不利な状況に陥った時に、一時的に身を隠す程度なのである。

しかし、そこで浜面の視線が近くにあるもので止まった。

「おい絹旗。学園都市の超音速旅客機には、自動操縦機能があったよな……」

その言葉に頷いたのは、最愛ではなく海鳥だった。

「そういうことか。じゃあ、私たちが操縦マニュアルを探してみる。だが、着陸の面倒までは見れないぞ」

「そつちは考えない。パラシュートで途中下車するから問題ねえ！」

全長80メートル近いその巨体に向かって、浜面は滝壺を連れて突き進む。爆弾の影響で斜めに落ちていた通路を伝い、ハッチを開いてその中に入り込んだ。

『浜面、聞こえていますか？ その格納庫は超スクランブル用の離陸機能を有しています。平たく言えば、超上り坂の電磁カタパルトになってるんです』

そのカタパルトの射出機構は、コックピット側とリンクしている。そのため、操縦用のコンピューターさえ起動できれば、あとは操縦画面をタッチするだけで自動的に射出されるらしい。

マニュアルを確認しながら話す最愛の指示に従って浜面がボタンを押していくと、カタパルトへの移動が始まった。

その時だった。地下格納庫の扉が大きく開かれると、そこから霧丘とフレンドが姿を現した。そして、その後が続いて、幾人もの黒服の男が姿を現す。どうやら、彼女たちは追手に後退を余儀なくされたらしい。

しかし、黒服の男たちは動いている超音速旅客機を見ると、即座に行動を起こした。2人を足止めするだけの戦力を残すと、残りの人員で作業用トラクターを回し、カタパルトを封じるように努めたのだ。

そして、黒服の男が下りたことで無人となったトラクターに、自動操縦の超音速旅客機はまっすぐに突き進んでしまう。フレンドが爆弾を一発食らわせたものの、トラクターの一部を破壊するにとどまっていた。

このままでは、直撃する……。

しかし次の瞬間、ズバァ！ と莫大な閃光がトラクターを薙ぎ払った。そして、障害物がなくなった超音速旅客機は、電磁カタパルトの力を受けて大空へと飛び出す。

「麦野……」

その閃光は、間違いなく彼女のものだった。

彼女がなぜ浜面を助けるような真似をしたのかは、解らない。だが、彼女と再会するときがあることを、浜面は理解した。

彼の腕の中には、全てをかけても守りたい1人の少女がいる。

その様子を確認した最愛たち4人は、満身創痍の麦野が次の行動を始めるよりも早く、その場を後にした。

さすがにすぐに追ってくる様子はない。だが、黒服の男たちもいるので、行動は早いに越したことはないのだ。

案の定、しばらくすると正体不明の技術を有した連中が追いかけてくる。広大な飛行場を動き回るための車両（学園都市製）に乗っているのだが、それでも『走って』徐々に距離を詰めてきていた。

「あいつら、足に発条包帯ハードテーピングなんて不良品でも突っ込んでいるんじゃないやねえだろうな？」

駆動鎧の身体強化を行う部分のみを取り出したようなものであり、身体の各所に貼り付けることで、運動機能を飛躍的に増強することが出来る代物だ。

しかし、海鳥の言う通り、体に甚大な負担がかかるため、警備員アンチスキルの仕様運用からも落ちた欠陥品である。

「学園都市の超技術ですから、案外裏ではサクツと超解決されているのかもしれない。生み出されたのは、結構前のことですし」

結構前、と最愛は言うが、実際のところ1年経過していない。学園都市の技術の進歩の前では、半年ほどたっていると、『裏』の社会では、技術的に『結構前』であったりするのだ。

「結局、これからどうするって訳よ？ 行くあてはあるの？」

フレンドアが言った。

彼女が懸念している通り、学園都市の中に逃げ場などない。だからこそ、浜面と滝壺は超音速旅客機によって『外』へと逃げたのだから。

しかし、最愛は言った。

「ひとまず、学園都市の外に超出てしましましょう」

学園都市の中にいれば、いずれその居場所を割り出されてしまう。しかし、一度『外』へと出てしまえば、学園都市の組織の行動の自由度はかなり制限されるはずだ。

外に出るとは言っても簡単ではないが……学園都市の『暗部』にい

た彼女たちは知っている。

「学園都市には、輸出品を運ぶために『外』へとつながっている貨物列車があります。そこまで超移動しましょう」

「荷物の中に紛れ込んで出るってことか」

途中にある別の車両を窒素爆槍ボンバーランスで切り裂き、海鳥が納得した声を上げる。

「ええ。ここまで派手に動いた以上は、この空港のカタパルトはここ以外、全て超抑えられていると考えるべきですから」

「そこまで、うまく移動することができれば、な」

「そこが、勝負って、訳よー！」

とにかく、優先事項が決まった彼女は、一直線に貨物列車の線路へと向けて動き出す。

その途中でも、連中の妨害は続くだろう。しかし、それでも彼女たちはあらゆる障害を乗り越える。その先にある勝利をつかみ取るために。

誰に教えられなくても、自分の内から湧く感情に従って真っ直ぐに進もうとする者。

過去に大きな過ちを犯し、その罪に苦悩しながらも正しい道を進もうとする者。

誰にも選ばれず、資質らしいものを何一つ持っていないなくても、たった一人の大切な者の為にヒーローになれる者。

そして——1人の少年に憧れ、その少年に並び立つために突き進む者。

全員が、ロシアという超大国へ集結する。

そこは、世界で3度目に起きた、最大の戦争の最中であった。

e

ヒーローたちの戦争

白い雪で覆われた大地に、1台の自動車が走っていた。

その周囲には何もなく、平べったい雪原だけが広がっている。おぎなりに作られているはずのアスファルトの道路でさえも、完全に白に覆われてしまっていた。

日本の光景ではない。北海道の規模よりもはるかに広大なこの場所は、ロシア西部の平原であった。

しかし、その自動車を運転するのは、ロシアの平原とは裏腹に、極めて日本らしい顔つきをした少年である。否、らしい、というのは間違っているだろう。彼は真正銘の日本人であるのだから。

10月30日。

ロシア連邦大統領、ソールジエーIIークライニコフにより、ロシア連邦とイタリア共和国・フランス共和国が、学園都市とグレートブリテン及び北部アイルランド連合王国——すなわちイギリスに対して行った宣戦布告から、12日が経過していた。

そんな中、学園都市に住む元スキルアウトの不良、浜面仕上は、この敵国の中を盗んだ乗用車で走っていたのである。

(……盗んだものだから文句は言わねえが、くそつ。暖房がどうのこののじゃなくて、根本的に服装が間違っているのかもしれないねえな。防寒具に求められるレベルが、日本とは段違いだぞ……)

しかし、そんな泣き言を少年は口に出さない。彼は、1人でいるのではないからだ。助手席には、1人の少女が座っていた。否、座っていると言っているのかは分からない。彼女はただ、ぐったりとした様子で、シートのもたれに体を預けていた。その顔は明らかに赤みがかかっており、普通の様子じゃないことをうかがわせている。

名前は滝壺理后。

『体晶』という学園都市の薬品(のようなもの?)によって、文字通り

の重病人となっていた。すぐにでもどこかの病院に運んでやりたいが、それは意味がないことを知っている。学園都市の薬品による副作用である以上、技術が20年、否、恐らくはそれ以上にかげ離れている『外』の病院が頑張ったところでどうにかなるものではない。仮に、そこに『外』では屈指の名医がいても、意味はないのだ。

つまり、彼女に対する有効な治療方法を持つのは、学園都市だけ、ということになる。だが、彼らはその学園都市から逃げている。

(……このロシアで逃げている間に『何か』を見つけて、それを取引材料に交渉する)

浜面の作戦は、それしかなかった。

「はまづら、どうかしたの?」

「なんでもねえよ」

彼は笑って答えた。

「……ここで何をやるにしても、金が要るなと思ったただけだ」

盗難車をやすやすと売らせてくれるディーラーなど、そう簡単に見つかるわけではない。仮にここが学園都市の中であれば、心当たりがなくもないが、ここでは事情が違った。ロシア語にも詳しくはないし、ここで日本語など話してしまったら、どんなことが起こるか分からない。い。

「やっぱ盗むしかねえよな。強盗だ」

「はまづら、それは……」

滝壺は言い淀んだが、これしか方法がないのも分かっていた。そして、そんな彼の決意に応えるかのように、車の前方にガソリンスタンドを併設した商店が見えてくる。

「ここで待ってる。ちよつと稼いでくるから」

彼はそう言うと、ポケットの中の拳銃を確認しながら、外に出た。ガソリンスタンドに近づきながら、パークカーのフードを目深にかぶり直し、盗難車の中にあつた手袋をはめる。

(絶対に、店員さんは傷つけない! 威嚇射撃をするときには、銃口を真上に上げてから!)

そんな決意で店に飛び込んだ彼であつたが。

ダクトテープで両手足を縛られ、ムームー唸っている店員さんと。ナイフを持った複数の大男の姿を店の中で目撃することになった。

『誰だ、お前？』

男たちはロシア語でそんなことを言うが、ただの不良の高校生に分かるわけがない。その代わり、用意していた日本語だけを言い放ち、銃口を向けた。

「強盗だ。両手を上げろ」

アクセラレータ
一方通行は貨物列車に乗り込んでいた。

連邦横断鉄道。

世界最長の路線は、ユーラシア大陸を東から西へと、アジアとヨーロッパの北部を横断する大国家ロシアにしかないものであった。始発から終着まで本来ならば2週間はかかるものであるのだが、軍用物資を搬送するために通常のダイヤは放棄され、安全規定を無視したハイスピードで走っていた。

（戦争、か……。くだらねエ。あのクソツタレの学園都市が画策しているかどオかはさておいて、何か裏があるって可能性までは否定できねエか）

通常、このような大ごとになる前に、裏の世界だけでケリをつけてしまうのが、学園都市のやり方であったはずだ。一方通行もまた、かつてアビニヨンで『爆撃』を行ったという経験を持つものの、あれもまたイレギュラーの一種であることを、彼はそれまでの経験で感じ取っていた。

つまり、この戦争を起こしてでも手に入れたいものが、学園都市にはあるということなのだろうか。

もつとも、今の一方通行にとっては、学園都市の思惑などよりもはるかに重要なことがあった。それは、彼の傍らにいる1人の少女である。

ラストオーダー
打ち止め。

第三位の超能力者『レベル5超電磁砲』の能力を持つ少女、御坂美琴の体細胞クローンである。その妹達の中シスターズでも、特に彼女は検体番号シリアルナンバー20001号の最終信号であり、ミサカネットワークと呼ばれる彼女たちの電磁波ネットワークの司令塔の役割を担っていた。

しかし、彼女は今エイワスと呼ばれる正体不明の怪物をこの世界に出現させるために利用されており、その脳に重大な負荷がかかってしまっている。おかげで自由に歩き回ることもできず、ぐったりとした様子のままであった。

「……どこどこ？ ってミサカはミサカは辺りを見回してみたり」

「列車の中だ」

「ヨシカワやヨミカワは？ ってミサカはミサカは質問してみる」

「今はいない。でも絶対にすぐに会える。絶対にだ」

その言葉に、彼女は少し残念そうにするが、それでも一方通行に向かって手を伸ばす。無邪気そうに、黄泉川の煮込みハンバーグの話を、『日常』の話をしながら、久しぶりに見ることができた一方通行に笑顔を向ける。

この戦争には、多くの人が参加している。それぞれが皆、大切な人たちのために戦うのだろう。しかし、何も悪いことをしていない打ち止めのために戦ってくれる人は、1人もいなかった。

そのことに、一方通行は強い憤りを感じる。

ベコン！ という音が、天井から聞こえた。立て続けに、周囲から同じ音が連続する。貨物列車のコンテナが歪んだ音であろうが、その後には怒鳴り声と銃声が続いた。

確認するまでもない。時速500キロオーバーの列車に飛び移ることが出来る相手など、限られている。

ついに、彼らの下に学園都市がやってきたのだ。

「どうしたの、ってミサカはミサカは尋ねてみたり」

「何でもねエよ」

一方通行はハンカチで少女の両目を覆うと、首筋にある電極のスイッチを入れ替えた。それは、学園都市最強の怪物としての力を振る

うためのスイッチだ。

「ドゴン！」と音を立てて、彼は鋼鉄の天井を突き破り、高速で走る列車の屋根の上へと飛び乗った。

少年が周囲を見渡すと、そこには数機の白い駆動鎧パワードスーツの姿があった。上半身のスリムなデザインに反して足は異様に太くなっており、どうやら移動速度を重視した機種であるようだった。

本来、戦争で使用される駆動鎧は、運動性能と防御能力を重視しているはずであるが、これは明らかにその一点に特化しており、そのために採算を度外視している節すらある。どうやら、彼らを指示している上層部は、どうあってもこの作戦を成功させたいようであった。

「……ゴミクズが。俺の癩に障ってンじゃねエよ」

「チツ、この程度じゃ死なねエか」

高速列車に飛び乗ってきた白い機械の兵隊を難なく蹴散らした怪物が、そんな言葉を呟くのを聞いて、ロシア兵は恐怖に震えていた。日本の学園都市では科学的に超能力が開発されていることは知っているが、実際にそれを暴力という形で目の前にするのは、また別問題である。

しかも、この怪物の話す日本語からして、時速500キロを超える列車から蹴り落とされたにも拘わらず、あの兵隊たちは死んでいないようだ。どちらもまともではなかった。

諦め悪く再度列車に飛びついてきた白い兵隊を、怪物は片手を振るう程度の仕草で吹き飛ばした。そして、怪物は次に、彼らから強奪したジュラルミン製のトランクを開封する。それは鎖のついた手錠のようなもので白い兵隊の手首に繋がれていたが、怪物が指先で触れるだけでちぎったものであった。鍵がかかっていたはずだが、力技でこじ開けたのだろうか。

「……なんだこりゃ？」

そこから出てきたのは、数十枚の羊皮紙であった。くだらないガセだった——そう考えるのは簡単だ。しかし、その程

度のものをわざわざ『手錠付きのトランク』で運ばせるのだろうか。

ロシア兵は考えた。はたしてこれは、ロシア上層部の陽動作戦に、学園都市が嵌まったのだろうか。それとも、この羊皮紙には何か重要な情報が込められているのだろうか。

その混乱の中で、白い怪物が呟いた。

「……面白エ。この俺と、学園都市最強の超能力者^{レベル5}と同レベルの作戦、か。……いまいち効果は見えねエが、これがあのクソ野郎の語る『もうひとつの法則』に繋がるかもしれないねエな」

「……何で、レッサーがここにいるわけ？」

ようやくロシアに潜り込んだ当麻であったのだが、彼は一人ではなかった。冬の大平原に降り立ったしばらく後に、魔術師の少女と遭遇したのである。

ラクロスのユニフォームを連想させる服装に、ジャケットを追加していたような恰好をしている。

彼女は、イギリスの魔術結社予備軍『新たな光』の一員として、第二王女キヤリーサ率いる『騎士派』のクーデターに協力させられ、その挙句裏切られたはずだ。

「んー？ 別にイギリス王室から命令を受けているとか、右方のフィアンマとやらの恨みがあるとか、上条・神谷勢力の一員になりたいとか、そういう意図はないんですけどね」

適当な調子でレッサーは答えているが、その後、次第に勝手な独り言モードに入ってしまった。クーデターの時から思っていたが、もしかするとこの子はどうでもなく自分中心な思考回路を持っているのではないかと思う。

「ま、その辺は利用し利用されるってくらいに考えてもらえれば。プ口の魔術師が戦力として使えるって考えれば、そっちだって悪いものではないでしょ？」

「……レッサーって、そもそも強いんだっけ？」

当麻はそんなことを言うが『新たな光』に所属する彼女たちが持

つ霊装『鋼の手袋』は、北欧神話でも主神オーディンに次いで強い、雷神トールの伝説に出てくる、グリーザルヴオルル棍メギンギョルズ棒、ヤールングレイプ力グレイプ帯、鉄の手袋を分析、再構成して生み出されたものである。並大抵の魔術結社予備軍程度では、相手にならないだろう。

もつとも、今回の戦争の中心にいるのは、そんな彼女たちですら『一介の』魔術師と言わざるを得ない、超一流の者たちばかりであるのだが。

「そつちだって、ロシア語の使える通訳をひとり置いておいたほうが、いろいろとやりやすいでしょ」

フィアンマによってインデックスが連れ去られた後、当麻と駿斗は確かにイギリスの人たちに、自分たちがフィアンマを追ってロシアに行くことを伝えた。しかし、具体的な日程や方法については、全く言わなかったはずだ。

「ははん。もしかやロンドンの大聖堂で眠っているインデックスに悪いかなーとか思っているんですか？ 彼女を助けるために俺は頑張るんだーとか言っておきながら、開始一発目で他の女と合流してしまつたことが」

「ぐっ………」

凶星である。情けないと思つたのは確かだ。

「ここで耳寄りなお知らせがあります。スカートの下から『尻尾』を伸ばしているわたくしレッサーですが、スカートの下はスパッツではなく直パンツです」

「その何の役にも立たない情報を渡されて、俺はどうしろってんだ!?!」
こめかみに青筋を浮かべて手を頭に当てる当麻に対して、レッサーは気軽なものであった。

「そもそも、この広いロシアで、どうやってフィアンマを探すんですか？」

一通り当麻をからかったことで満足したのか、彼女はようやく本題に話を切り替えてきた。

誰もが知っている通り、ロシアは広大な面積を持つ国だ。

その領土の面積は1700万平方キロメートルを超えており、日本

の国土面積の45倍を超える。居住地域で言えば、地球上の8分の1を占める大国家である。国内だけで、時差が最大10時間存在するほどだ。当然ながら、1人の人間をたった2人で探し出せるような広さではない。

しかし、その事実とは対照的に、当麻には自信があるようであった。「……こつちが今までどんだけ魔術師と戦ってきたと思っただ。いい加減に、ああいう連中のやり方も少しは分かってきてんだよ」

「……ここがロシア、か。ロンドンもなかなか寒かったけれど、ここはあの場所の比じゃねえな……」

戦争している国の中に潜り込んだとは思えない、平和な発言をしているのは、駿斗であった。彼もまた、当麻とは異なるルートを使用して、この国に入り込んだのである。

とはいえ、決して彼が戦争というものを楽観視しているという訳ではない。どちらかというところ、あまりに悲観的にならないようにするための、自己暗示に近かった。

彼も当麻と同じように詰襟の学生服を着用しているわけであるが、彼はその上からやや大きめの薄手のコートを着込んでいた。コートをいうよりは、マントに近いかもしれない。何しろ、その辺で死んでいた生き物の皮を魔術で加工して拵えたものであるのだから。

(当麻のほうは、大丈夫かねえ。ここまでの道のりで、どうしても厄介なことになり込まれる前に、俺が困りになって逃げたもの)

自他ともに認める親友同士である彼らであるが、いつも通り当麻の『不幸』に遭遇したため、その後始末をした駿斗は現在ひとりぼっちである。

それでも、周囲の人に自分が敵国の人間であると気付かれないよう『人払い』を応用した認識阻害の術式をかけており、それ以外にも探知術式などを常に複数展開していた。

(戦争、ね……)

携帯電話のニュースサイトを確認しながら、駿斗は世間の様子をチエックする。

(ロシアの人々も、別に全員が戦争反対派ってわけじゃない。だが、世論がその方向に制御されているから、始まってしまった戦争に、あまり大きな反対派閥ができていないってことか)

当然ながら、世間の一般人は魔術側の事情など知らない。魔術師であれば誰もが、ファイアンマの差し金としてローマ正教とロシア成教が動いた結果であるということを知っているが、テレビ・新聞・インターネットのニュース以外の情報網を持たない一般人は、この戦争に十字教の派閥がどのように絡み合っているのか、あまりはつきりと分かっているはずだ。

(でも、気になることもあるんだよな……)

それは、先日イギリスで起きたクーデター。

イギリスの失われていた選定剣カーテナ^ニオリジナルを手に入れた第二王女キャーリサが起こしたそれは、最終的に女王エリザードが発動した国家規模の大魔術『ユニオンジャック連合の意義』によって解決がされた。しかし、その魔術はカーテナに集められた天使長の力を、英国国民全員に渡すというものであったのだ。

魔術というものは本来秘匿されるものであり、それは魔術大国イギリスにおいても変わりがない。しかし、女王は自国の変革のために、その禁忌《タブー》を破ったのである。

しかし、国民に対し魔術についての詳細な説明がされたわけではなく、世間では『ブリテン・ザ・ハロウィン』という言葉で、世界の神秘のひとつ、ナスカの地上絵やネツシーなどと同じような扱いになっってしまったているらしい。

しかし、『連合の意義』はこれまでの曖昧な不思議写真や、長い歴史で風化してしまった風景の中から発掘されたものではない。この現代において、現実起こったできごとなのである。その気になれば、あの騒ぎに参加した人々の生の声を聞くことだって可能だ。実際、取材を試みるマスコミだって少なくない。もともと、当の本人たちが自分の身に起きたことを覚えてはいても理解していないため、単なる心霊体験の延長のようなもので片づけられつつあるが。

だが。

人々が納得してしまう下地には、もつと別のものがあるのではないかと考える者もいるのだ。

つまり、学園都市。その特色たる、超能力開発。そのような不思議な力がこの世の中にはある、という事実が、人々の認識の底に存在するためだったのではないか。

だが、これは非常に危ないものを、幾ばくかの人々は感じ取っていた。科学サイドの常識が、魔術サイドの安定を支えているのだ。

(9月30日のことといい……学園都市は、次第に魔術サイドを追い詰めていつているように感じるんだが)

そのことが、駿斗に警戒感を抱かせていた。
と、

「どうやら、ゆっくり考え事をするのも、これまでのようだな」

魔力の気配を感じた。この様子からして、既に戦闘が始まっているようだ。

今の情勢からして、少なくとも片方はロシア成教の魔術師だろう。しかしもう片方は、何者なのだろうか。どこか特定の十字宗派に属さない魔術結社か、あるいはフリーの魔術師か。どちらにしろ、ロシア成教と対立している組織であることには違いない。

近くに行くと、そこでは予想通り魔術が飛び交っていた。

(妖精の類、人外の存在をモチーフにした魔術が多いな……：そういえば、ロシア成教の特色だったっけ)

十字教の宗派には、それぞれに特色がある。

最大宗派であるローマ正教は『世界の管理と運営』。

イギリス清教は『ローマ正教からの支配から脱し、イギリスの人々を悪い魔術師から守る』ことに特化した結果、魔女・異端狩りや宗教裁判などの対魔術師組織と化している。

対して、ロシア成教では『心霊現象の解析と解決』を目的としており、そこに端を発して『在らざるモノ』である幽霊・亡霊・悪霊・妖精といった分野を専門とする。そのため、彼らが扱う魔術もそれらに關したものが中心となる。

駿斗は辺りで飛び交っている攻撃や、仕掛けられている魔術的なト

ラップに注意しながら、その中に飛び込んで行った。

「……さっそく発見したよ」

彼の視線の先には、一人の少女がいた。

白髪赤眼の少女であった。恐らく年齢は13か14。もともと、才能がある人物ならば十分に一流と呼べるだけの魔術師になっている年齢であるが。

どうやら少女は、3人の魔術師に追われているようであった。少女の魔力でつくられた吹雪が、遠目ではあるが確認できる。視力を強化すると、彼女の手には、杯の外側に老人の髭のようなものが付けられている、奇妙な霊装があった。

(恐らく、ジエド・マロースか?)

ロシアの昔話に登場する霜の精だ。

連れ子ばかり愛する継母に虐げられていた従順な娘は、ジエド・マロースの吹雪を受けても「暖かい」と答え、毛布と食料を手にする。その一方、その奇跡を求めて外の放り出された連れ子は「寒い」と答えただために何も与えられずに凍死する。

恐らく、自分自身に加護を与えながら、同時に相手に冷気を使つて攻撃するのだろう。

しかし。さすがに1人で3人の魔術師を相手にするには実力が足りないのか、少女は次第に疲弊している。3人の魔術師は、それぞれロシア成教であることに間違いないようであった。彼らの特徴的な、魔術の構造をしている。

故に。

駿斗は、少女に迫っていた魔術師3人に大量の雪の槍を放った。

『何だ!?!』

『奴の仲間が潜んでいたのか?』

ロシア語が聞こえるが、駿斗にはその内容が分からなかった。しかし、相手を容赦なく無力化していく。

『あの……』

「すまん、話は後だ」

ロシア語で何か言いかけた少女に対して、駿斗はジェスチャーを交

えながら日本語でそう言った。あいにく、ロシア語など何一つ知らない。

（たまたま見つけたから勝手に手助けしちやっただけど、あの子、日本語話せるかなあ……）

駿斗は敵を3人とも無力化すると、ため息をつきながらそんなことを考えた。

どうやら自分もまた、親友の体質を笑えなくなっているようである。

それぞれの作戦会議

ドーヴァー海峡は、イギリスとフランスの間にある、30キロ程度の海峡である。なお、ドーヴァーはイギリス側の名称であり、フランスではカレー海峡と呼んでいる。

ヨーロッパではこの海峡を挟んで、イギリスとドイツ、イギリスとフランスがそれぞれ激しい戦闘を繰り返してきた歴史が存在する。そんな、血塗られた海峡であった。

現在その海峡には、多数の木の帆船が浮かんでいた。昔の海戦の風景を連想させるその光景は、全て魔術によって生み出されたものであった。

この異様な光景は、今回のこの海峡での戦いが、かつての戦争とは異なるものであることを示していた。

すなわち、魔術師による大規模な戦争である。

帆船のうちの1隻の上に立ち、神裂火織とアニエーゼIIサンクティスはその光景を見つめていた。

「ここを抜けられれば、あとはロンドンまで一直線です。可能な限り交戦は避けたいですが、フランス勢力が攻めてきた場合には、なんとかしても守り切らなければ」

「ほぼ100%来ることは分かっちゃってるんでしょう?」

アニエーゼの言葉に、神裂は否定できなかった。

クーデターの発生よりもはるかに前から、フランスはローマ正教の尖兵として動いていた。フランスがローマ正教の指示に従つてのことであるのか、それともイギリスとの歴史的・魔術的な因縁に決着をつけたがってのことであるのかは分からないが。

と、その時。

『フランス側からの干渉を確認! 警戒してください!』

通信用霊装から修道女の声が聞こえると同時に、周囲の……海面の様子が変貌した。

「塩!」

海の塩がその表面を固めていく。それは、戦闘のための足場を提供

すると同時に、彼らの帆船の動きを止める機能も持っていた。

その白い足場の上を、遠くから矢のような素早い動きで急接近してくる影が見えた。10や20ではなく、100、あるいは1000を超える敵が、砂浜に打ち上げられたクジラに向かって剣を突き立てるために走り迫る。

慌てて神裂たち、接近戦を得意とする新生天草式十字凄教の面々が船から飛び降りるが、その直後に神裂が慌てて動いた。海の上を覆い尽くす塩の足場に、穴が空いていたからだ。

船の上でも、塩の大地の上でも、彼らはその機動力を奪われる。相手は、確実に有利な戦況を築こうとしていた。

そこへ。

「この程度でうろたえてどーするの。お前たちはこのイギリスを守るための戦力だろーが」

再び、足場が新たな白に染まった。しかし、今度はフランス側からイギリス側に向かって来たのではなく、イギリス側からフランス側に広がっていく。

自らが作り直した足場に立った赤いドレスの第二王女は、その両目で眼前の敵を睨んでいた。

今回のこの大戦の黒幕は、考える間もなく右方のフィアンマだ。

彼はローマ正教の最暗部組織『神の右席』の実質的なリーダーであり、ローマ教皇が意識不明の状態である今、実質的な権限の全てを握っていた。その言葉に反抗はおろか、口をはさむことさえ、誰もできない状態であろう。

だが『神の右席』のリーダーとはいっても、現在は4人いたメンバーの内、2人が脱退、1人が死亡という結果になってしまっているため、ローマ正教は大幅にその戦力を削がれてしまっていた。

そのため、欠けた戦力を補うためにフィアンマが目をつけたのが、

ロシア軍だったのだ。

「当然、フィアンマに仲間意識なんてないだろうさ。せいぜい、『自分の計画』を邪魔されないように時間を稼ぐ、防波堤ぐらいの考えしかないかもな」

しかし、ロシア国内で『計画』を進めるのであれば、元々ロシアにいた人間が動いた方がやりやすいし、見た目も『自然』だ。

彼の目的は、8月の『御使墮し』^{エンゼルフォール}において、その身に正真正銘の大天使『神の力』^{ガブリエル}を宿したロシア成教の少女、サーシャ・クロイツェフである。

しかし、ここまでレッサーに話した当麻はこう続けた。

「でも、本当に『それだけ』なら、フィアンマ自身が入国する理由にはならない」

これが、駿斗と当麻の2人で話し合って結論付けた予想だ。

フィアンマは今や、ローマ正教の実権を全て握り、ロシア成教とも同盟を結んでいる。その気になれば、大勢の魔術師を動員して、サーシャを探し、拘束させることも可能はずだ。

しかし、実際には自らの足でロシアに入国しているということが分かっている。

それは恐らく、フィアンマが自らロシアに入国しなければ、できないことがあるから。

「駿斗が言うには、恐らくロシア国内の霊装とかの魔術的な要素のあるものを集めている可能性が高いんだと。それを使って、恐らくあの時『未完成』と言っていた『右腕』の術式を完成させるらしい」

その正体までは、科学・魔術の両方において大きな力を発揮する駿斗にも、分かっていない。

駿斗がああ少しの間で解析した限りでは、あの『第三の腕』は『神の如き者』^{ミカエル}が墮天使の長『光を掲げる者』^{ルシフェル}をねじ伏せた右腕の術式であると同時に、十字教における『奇跡を起こす右腕』という意味があるらしい。

予想の範疇ではあるが、フィアンマは『神の如き者』の力を扱いなから、同時に『神の子』と『神』の力の一端を扱えると考えられる……

と駿斗は言った。

「でも、今は第三次世界大戦の真つ最中ですよ？」

先ほども述べた通り、ロシアの国土面積は広大だ。その上、中国もインドも学園都市側についてしまったために、あちこちに戦力を分散させている。

一見すると、その中からファイアンマにかかわりがあるものを見つけ出すのは難しいように感じるが……。

「ファイアンマは、ロシア軍を利用しながら、ロシア軍には作戦の内容を秘密にする」

そのために、魔術を知らないロシア兵に対して、いちいちもつともらしい理由をつけて動かす。ロシア成教の魔術師に対しても、本当の理由を伏せたまま行動させようとする。

そこで、不自然さが浮かび上がるはずだ。

「……待ってろよ」

駿斗は、その辺りの銀行で、大胆にも学園都市の貨幣をロシアのルーブルとカペイカに替えてもらっていた。ちなみに、100カペイカで1ルーブルである。

当然ながら、単純に銀行に入り窓口で学園都市のお札を差し出したわけではない。単に外見上ではそう見えたかもしれないが、相手が一切の疑問や敵愾心を持たないように幻術系の魔術を複数使用した。

「意外とためらわずにこういうことができるんですね。一般的な日本人で、もつと平和主義なのかと思っていたの、ですけど」

丁寧な口調でありながら、少し文章の区切りがおかしい日本語でそう話すのは、駿斗が先ほど助け出した少女ユリヤである。

綺麗な白髪を背中まで延ばした、14歳ほどの少女だ。彼女はロシア成教どころか、どこの魔術組織にも属さない、完全にフリーの魔術師であるらしい。もつとも、集団よりも個を重んじる魔術師にとっては、フリーランスも別に珍しくはないようだが。

「今は緊急事態だから。別にこの戦争がなければどうってことない取

引だろ？ 交換レートは誤魔化していないんだし」

「別に、責めているわけ、ではありません」

彼らは、適当にその辺りでホットコーヒーとブリヌイ（ロシア風のクレープ。ペーコンやジャム、魚の燻製に生地が巻かれている）を購入した。

「じゃあ、ユリヤは戦争反対派で、ロシアにいたフリーの魔術師の日本人を、国外に逃がす手伝いをしていたってことでもいいのか？」

「ええ、まあ。私は、戦いが特に好き、というわけではありません、ので。助けられる命は助けたいですし」

それでも、ばれてしまったために、あのように追われていたという訳だ。もつとも、彼女もそのリスクを覚悟して行動していた。ただ予想外だったのは、その日本人魔術師が無事にロシア国内を出て行った直後に、3人の相手に見つかってしまったということだ。

その場はどうか相手を撒いたものの、結局見つかってあのような状態になっただけらしい。

一通り自分の事情を話したユリヤが、駿斗に尋ねた。

「それで、どうして日本人の魔術師がこんなところにいる、のですか？」

天草式十字凄教は、イギリスにしていると聞いていま、したが」

「いや、俺は天草式どころか、そもそも魔術師ではないんだ。学園都市の学生で、ちよつと事情があつて」

彼女は、怪訝な表情をする。まあ、自分は戦争に加担していないとはいえ、ロシアにとって敵である学園都市の学生がここにいるのだから、当然の反応だろう。

もつとも、彼女が思っている以上に、駿斗はこの戦争の『当事者』なのであるが。

「……まあ、なんだ。はつきり言ってしまうえば、俺が『イマジネーション幻想創造』なんだよ。ローマ正教ならびに右方のファイアンマに目を付けられている」

その言葉を聞いた瞬間、ユリヤは思わず数歩後ろに下がった。

「わ、私、あなたと一緒に、にいて大丈夫、なのでしようか!？」

「別に、俺が君をどうこうするつもりはないんだけど……まあ、ファイア

ンマ本人や、残り3人となった『十二使徒』と遭遇する可能性は否定できないかもな」

まあ、その時になつたら君だけでも逃がせるように、術式を用意しておくから。

そんなことを簡単に言われ、ユリヤはこの上なく不安になつていくのであった。

レッサーは白い雪の上を歩きながら、自らの霊装である『鋼の手袋：レッサーカスタム』……の残骸を、カチャカチャと音を立てながら組み直していた。

「……うーん。スぺアパーツをかき集めても、レッサースペシャルカスタムは無理かー」

彼女は今回の戦争に向けて、ありとあらゆるものを『掴む』ことが可能なその霊装を、遠距離でも掴めるように改造を施していたのだが、それは当麻が考えた『作戦』によつて、ご臨終となつてしまった。もつとも、それを考えた本人のほうは、そのおかげでロシアのエリザリーナ独立国同盟を襲うためにつくった基地建設計画によつて、移動馬車霊装『スレイプニル』で強制輸送されていた人々を助けることができたので、ちよつと悪かつたなー程度にしか考えていない。

すると、壊れた霊装をいじるのをやめたレッサーが、雪の窪みにあるなにかを覗き込んだ。当麻もそれに倣つて覗き込むと、そこには3メートル以上の空洞が空いている。

Vの溝に合わせて魔術的に作られたトンネルだった。

「……触った途端に崩れて生き埋めなんてことにならないだろうな」

「さあ？　念のため、壁に触れるのは避けておいたほうが無難かもしれないけど」

その中をしばらく進んで行くと、そこには貨物列車があつた。見たところ電線はないので、ディーゼルエンジンなのかもしれない。

当麻とレッサーは、その中にごっそりと乗り込んだ。しばらくすると、複数の男の声が聞こえてくる。

息をひそめて待つっていると、列車が音を立てて動き出した。

これで、一安心だ。あとは、3、40キロは先にある基地まで、勝手に敵が自分たちを運んでくれる。

貨物列車が止まり、レッサーが声をかけてきた。

「降りますよ」

「え？ 連中が立ち去ってから抜け出した方がいいんじゃないのか」
「変なところで抜けている人ですね」

これは貨物列車なのだ。当然ながら、目的地に到着したら、その後で積み荷を降ろす。だから、その前に立ち去る必要がある。

しかし、必要なことだと分かっているにもかかわらず、緊張することには違いなかった。これから先は、周囲の全員が敵なのだ。

「ポジティブに考えましょう。周りが騒がしければ、私たちが多少物音を立てても気づかれません」

覚悟を決め、出口に向けて歩き始めたところで。

ロシア成教の魔術師と鉢合わせた。

荷物運び要員なのであろう。青年の両手が荷物でふさがっていたことが幸いした。

対応が遅れたその一瞬で、レッサーが距離を詰め、敵の喉に腕を突き出した。その一撃で魔術師は倒れ、どさりという鈍い音よりも、大きな音を立てる可能性がある荷物の木箱を空中で掴んだ。

最小限の音で全てが済まされた後に、当麻は小声で訊く。

「……し、死んでないよな？」

「殺した方が簡単ではありませんがね」

さらりと言うレッサーは、やはり当麻とは違う世界に住んでいるように感じられた。

その後、階段を上って地上に出ると、そこは基地の敷地内であった。鉄柵で囲まれた10キロ四方のバリケードの中央7キロ四方程度が、なぜか盛り上がっている。

「普通、基地ってのは平べったくするのが定石なんだけどな」

素人であるはずの当麻がそう思ってしまうほどに、その姿は異質であった。彼らは、盛り上がり上がっている部分の端、20メートルほどの高さの壁の一角所に設けられた、その扉を開く。

中は、西洋の城を思わせる内装をしていた。照明も電球や蛍光灯ではなく、一定間隔で取り付けられている蝋燭だ。その途中にある、わずかに開いた扉の前に来た時、レッサーの肩を当麻が掴んだ。

そのわずかに開いた扉の先には、広大な空間があった。しかし、視界に移る部屋の風景の外側から、その声は聞こえてきた。

「……フィアンマだ。まさか、いきなり大本命にぶつかるとはな)」
その言葉に、レッサーもわずかに身を強張らせた。

フィアンマは、他に誰もいない空間で椅子に腰かけ、その正面にある机の上で本を広げていた。霊装だろうか？

「必要なんだよ。ここは『空間』だ。座標と容積、その両方が重要って訳だ」

絶対に忘れることができない声が、当麻の心をざわつかせる。

「それでも、計画を進めるうえでこの場所は外せんよ。『プロジェクト・ベツヘレム』という観点からすればな」

努力をしなければ、すぐにでも叫び声と共に突撃していきそうだった。

しかし、レッサーにその言葉を翻訳してもらっている中で、気づいてしまった。

テーブルの上にある、ダイヤル式の南京錠のような霊装。インデックスの、遠隔制御霊装に。

あれさえ、破壊することができれば。

「……エリザリーナ独立国同盟、か。確かに、それならロシア国内を探し回っても、サーシャ・クロイツェフを見つけられなかったわけだ」
しかし、思わず身を乗り出そうとした当麻に、レッサーは鋭い一撃でその動きを封じた。脇腹に激痛が走るが、口を押さえつけられたので、咳き込む声は洩れなかった。

「……次、妙な出し惜しみをしてつまん交渉事を行うつもりなら、俺様は容赦なくお前を切つて別口を探す。分かったか？」

ファイアンマはそう言って通信を打ち切ると、遠隔制御霊装を掴み、鋼鉄の窓のような場所を開けてひらりと外に飛び出した。

彼の姿が見えなくなると同時に、当麻はレッサーへ勢いよく振り返った。

「(……何のつもりだ!? あと少しだったのに!)」

「(あなたこそ何のつもりだったんですか? 室内には200人以上の魔術師がいるっていうのに)」

その言葉にぎよつとして振り返ると、広い空間を満たす闇の中に、光る眼のようなものがあちこちにあつた。単に、命令のために待機しているのか、それとも何かの作業をしているのかは分からないが。

今優先するべきなのは、どちらにしろサーシャ・クロイツェフ。それは両者にとって、同じであるようだった。

「そもそも、だ」

腹ごしらえも済んだところで、駿斗は話を切り出した。

話の内容は、この戦争のことももちろんであるが……今回駿斗が戦いことになるであろう『十二使徒』のことだ。

「十二使徒というのは、『神の子』によって選ばれた12人の高弟のことだ。神話上の表記揺れというべきかどうか分からないが、福音書によっても異なるようだが」

そのため、マルコやマタイの福音書に準ずるものであるのか、ルカの福音書か、使徒言行録なのか……それは分かっていない。バルトロマイが出てきたので、ヨハネの福音書ではないだろうか。

残るはタダイとヤコブの子ユダ、イスカテリオのユダ、マテイエだ。ちなみに、裏切り者として有名なユダは後者であり、マテイエはその欠員を埋めた存在と言われている。

ローマ正教がどれを採用しているのかは分からないが(案外、こだわっていないのかもしれない)、いずれにしろ、その神話に対応した特異な術式を扱い、強力な敵になるだろう。

と、ここまで話したところで、2人は立ち止まった。

「……結構、数がいるな。40人くらいか？」

「人数、まで分かるんで、すね。やはり、ローマ正教の敵でしょうか」

2人は、小さな街の曲がり角に身を潜めて様子をうかがう。

3人組の男たちが、大型バスの周りで何か話していた。その後ろには、鋼鉄の馬車がある。馬まで金属でできていた。

「スバジルフアリか？ 伝説では、馬車ではなかったはずだが」

山の巨人が美の女神フレイヤとの結婚を報酬に、壁を立てる約束をしたときに使った馬である。

「改造され、ているみたいですね。ロシア成教ではスレイプニル、なんかも用いられ、ているみたいなんですけれど。重い荷物でも運んでいるので、しょうか？」

「まさかあの中身、戦車や自走砲の砲弾なのか？ ……いや」

駿斗は、自分の言葉を取り消した。

超音波で中身を調べたら、分かってしまったからだ。その中に、大勢の人々が乗せられていることを。

「ユリヤ」

「はい？」

「とりあえず、まずはあいつら……あの馬車に閉じ込められている人々を助け出すぞ」

「それ、は気持ちと、して分かりますけれど……」

彼女もそこまで言うが、一度口をつぐんだ。

「ですが、簡単なこと、ではありません、よ？ 必ず見張り、が付いているはず、ですし」

「そこは、俺がなんとかするさ。俺が最初に奇襲をかけるから、ユリヤは中の人たちを頼む」

駿斗はそれだけ言うと、さっさと攻撃の準備を始めた。もつとも、ユリヤとしても困っている人を放ってはおけないので、協力するのであるが。

「……行くぞー！」

駿斗の言葉と共に、一斉に雪でできた槍が、雨のごとく敵に降り注ぐ。

ユリヤも得意とする吹雪の術式で敵を凍り付かせると、案外すんなりと制圧が完了した。

エリザリーナ独立国同盟に、当麻とレッサーは侵入した。地続きの国の国境というものは、結構あっさりとは抜けられるものらしい。

「射殺させるための人員を配置する余裕もないんでしょうね」

エリザリーナ独立国同盟というのは、複数の民族が入り混じっている。もともとは、ロシアの国のやり方に賛成できない地域が集まって独立した国々だ。同盟の全方位をロシアに囲まれないようにするために、領土の形が東西に長く伸びていた。長さはおおよそ300キロ程度だ。

「とにかく、ファイアンマよりも先にサーシャとコンタクトを取らないとな」

肝心なそのやり方が分からない当麻であったのだが、そのとき周囲から視線を感じた。見渡すと、周囲を歩き交う人々の中に、4、5人の迷彩服の男たちが2人をじっと見据えている。

「国境警備隊です」

どうするんだ、と焦る当麻に対して、レッサーは平然と言った。

「決まっています。彼らに尋ねるんですよ」

サーシャはこの国に逃亡しているため、ファイアンマはすぐにここへやって来る。戦争の首謀者である、あの男が自ら。

「彼らにとつても、無視のできない『交渉材料』にはなりませんかね？」
そんなわけで、彼らは複数の屈強な軍人たち（全員拳銃を持っている大男）に囲まれた状態で移動させられることになった。

彼らが連れていかれたのは、広場の近くにある四角い石の建物だ。もともとは大きな教会が持つ建物のひとつであるようだが、今は臨時の軍事施設として機能しているようだった。

その中にいたのは、1人の金髪の女性だった。ただし、あまりにも不健康そうな、痩せ細った体をしている。

「右方のファイアンマが、こちらに来るそうね」

彼女が、エリザリーナ独立国同盟の名前の由来となった女性、エリザリーナである。

不法入国者へいきなりそんな大物が直接顔を合わせるということが、フィアンマという名前の価値を示していた。

「国境の向こう側に隣接しているロシア軍の基地で、当人の口から直接出た言葉だからな。多分間違いないと思うけど」

そこまで口にしてから、当麻は気付いた。

「ちよつと待て。その、エリザリーナさんは、右方のフィアンマっていうのが何を指しているのか分かるのか？」

彼女は、表向きには政治的・経済的な国家としての基盤を整えた功労者であるが、裏ではオカルト的な工作を行おうとするロシア成教の魔術師たちを片っ端から押し返した実力者でもある。

ロシアという国から領土が分離されるという事は、政治的な意味合いだけではなく、魔術的にも不利益が生じるのだ。特に、ロシア成教にとっては。

「そこまで大それたことではないわ。『フランスの姉さん』に比べればまだまだよ」

それに、実際にフィアンマが攻めてきたら、同盟内の戦力全てをかき集めたところで、あの男に勝つことはできない。

十字教最強の天使長『神の如き者』の力の一端を振るう、フィアンマには。

だから。

「一度俺たちやフィアンマをエリザリーナ独立国同盟の外……ロシア国内に送り返した後に、対フィアンマ用の作戦を実行するって訳か？」

「そうよ」

エリザリーナは頷く。

「冷たい人間だと思ってもらって構わないわ。でも、事態はそれぐらいデリケートな」

とになっているの。多くの無関係な人たちが殺されるかもしれないほどにね」

それでも、当麻にとっては十分だった。

「問答無用で手錠をかけられなかっただけでも感謝できるさ」

希少な右手を持っているとはいえ、高校生の一人でしかない当麻と、同盟国の柱となっている彼女では、その手に抱えているものの規模や程度が違うだろう。しかし、それでも彼らには、互いに守るべきものがある、ということとは一致していた。

「それで、具体的にどう動く」

「こちらへ。……とはいえ、急なことなので、勝算は確約できないわよ」

エリザリーナが、部屋にあるホワイトボードの方へ動こうとしたその時、声が聞こえた。

『そうだな。この段階で作戦会議をしている時点で、もう遅すぎるな』
そして。

長さだけで30キロ〜40キロはありそうな、巨大すぎる光の剣が、作戦会議室を切り裂いた。

突き付けられるもの

「なるほど、ロシア国内の日本人・イギリス人たちか」

「ロシアも、急に戦争、になったもの、ですから、慌ててあちこち、に基地を作っていますから、ね。そういう時、敵国の人、たちの集落をどかした方が、世論とし、ても受け入れられやすいです、し」

『保護』という名目での『監視・厄介払い』ってところか」

馬車型霊装『スバズルフアリ』の中に入れられていた人たちを確認した駿斗は、ひとまず彼らを解放した。

とりあえずユリヤの提案で、彼らには近くの田舎町に移動してもらうことにした。地形的にも、一時的な拠点としては使用しづらい湿地帯であった。もつとも、11月の今は、他の地域と変わらず雪に覆われていたが。

そこに移動しているときに、ユリヤがぼつりと言った。

「懐かしいです」

「え？」

「私、一応この出身、なんですよ」

彼女は笑顔でそう言った。

(……『一応』?)

その言葉にひっかかりを覚えた駿斗であったが、彼女にもいろいろな事情があるのだろう。強引に聞き出すようなことではないと駿斗は考え、それ以上の話題は続けなかった。

「そっか、じゃあ、道案内は任せるよ」

「はい、お任せあれ、ですー!」

彼女は元気にそう言うと、鼻歌交じりに先を歩き始めた。

「じゃあ、この辺りの空き家を、使用し、てもらうのはどうですか？

過疎化が進ん、でいる地域な、ので、そういう物件、は多いですよ」

「確かに、この戦争が終わるまでの、暫定的な住みかとしては十分かな。必要な建物の修理とかは、俺が能力や魔術でやっておこう」

こういうとき、活躍するのが『自在変換』マテリアルハンドである。物質の形状も三態も元素変換まで可能なこの能力があれば、DIY工具の類は一切要

らないのだ。もつとも、駿斗の周囲で一番物を壊している（というか、物が壊れてしまう、の方が正しい）彼の親友の場合、直した物がその右手で壊れないように、能力抜きで修理する必要がある。そのため、もともと手先が器用なこともあり、駿斗は能力抜きでも修理が得意だ。

そんな駿斗の特技と能力のお陰もあって、とりあえずの人々の宿は確保することができた。

用意された家々に、人々は嬉しそうに家族単位で入っていった。その場で不満などが生じないように、家族ごとに人数に比例して十分な大きさの家を分けていき、余った家は集会場のように使用してもらうことにする。

人々が笑顔で新しい住まいを確認しているのを見て、駿斗もユリヤも頬を緩めた。

「じゃあ、この人たちも、戦争までの仮の住まいを手に入れたところで……俺はファイアンマと『十二使徒』の残りの3人について対策を立てていこうと思うんだが、ユリヤはこれからどうするんだ？」

駿斗は、このままこの場所に留まっている理由はない。対しユリヤは、その目的上利害が一致しているため、一緒にいたただけだ。

しかし、その過程で発生した今回の人助けによって、ユリヤは今回の目的をほぼ達したということになる。

しかし、彼女は言った。

「私の、魔法名、は、『光りなき道に灯を』、です。このまま、自らの行先、を見失っている人々、を探します」

「つまり、このままロシアが目を付けそうな場所を、順番に探っていくって感じか？」

ユリヤはその言葉に頷く。

一方で、駿斗もどう動いていこうかを考えていた。

（ファイアンマについては、ロシア軍やロシア成教の動きを監視して『微妙におかしな動き』を探していけばたどり着ける気がするが……その裏で、あいつら『十二使徒』がどのように動いているのかが気になるんだよな）

今回、『十二使徒』は未だその姿を見せていない。

しかし、今回の戦争の目的として、ロシア・フランスがローマ成教側に協力していることを考えると、そちらの関連施設にいる可能性が高い。

そして、フランスがイギリスと戦わせるための尖兵だと考えると、魔術の儀式に最適なのはロシアだ。何しろ、ロシア成教のおひぎ元であり、そこにはさまざまな魔術的な物があるはずなのだから。

（今回、当麻は自分の右腕を狙っているフィアンマの野郎と直接対決することになるだろうし。そうすると、俺は『十二使徒』の3人を探し出すのが最適か？）

彼はそう考え、この後の行動の指針を考え始める。

「今日はラッキーデイだな」

フィアンマは、エリザリーナと上条を押しのとけると、右手で軽く指を弾くような動作だけで、人ごみの合間をとてつもない速度で縫って襲いかかろうとしたサーシャを、あっさりと吹き飛ばした。

フィアンマがここにやってきたときも、同じだった。その右肩から生える奇怪な形の『第三の腕』が振られると、明らかにその範囲外にいる人間も吹き飛ばされる。

武器が持つべき間合いを無視した『射程距離』は、皮肉にも、先日のクーデターで騎士団長ナイトリーダーが使用したものだ。

ただし、その威力は文字通り桁違いである。

一度に複数の敵であろうと、倒すのに最適な出力で、間合いを無視し、確実に不可視の攻撃を喰らわせる。

その攻撃で、この場にいた人々は次々と倒され、今動くことができるのは当麻だけになった。

当麻は、静かに右手を構える。

フィアンマの前には、親友からもらった手袋であろうと紙きれのようになされるだろう。学園都市製の防刃繊維でできていようが、手の甲の部分に硬い合成樹脂のプロテクターが備わっていようが、あの『第

三の腕』には意味がない。

この場であれに拮抗できるのは、唯一幻想殺イマジンプレイカーしただけだ。

そう覚悟を決めた時、フィアンマが不自然な行動を取った。何気ないしぐさで、首を横に振ったのだ。

先ほど既に、建物壁は壊されてしまっていて、彼らたちは大勢の民衆がいるどこかの広場へと移動していた。その野次馬たちは、相変わらず何が起きたか分からない顔で呆けている。

しかし、曲がりなりにも『魔術』というものに関わってきた当麻は驚愕した。あのフィアンマが、はじめて自身に向けられた攻撃を回避した、その重大さが分かったからだ。

「懐かしい顔だ」

黄色い服装をした女だった。派手な、パンクファッションの仲間のような化粧をしているその姿は、他人からあえて嫌悪感を集めようとしているように見える。

前方のヴェント。

9月30日に『天罰術式』によって、たった1人で学園都市の機能の大半を奪った『神の右席』の一員である。

「別に、そこらのガキやロシア成教のシスターに肩入れするつもりはないんだけどさ。いい加減、アンタがローマ正教を引つ掻き回すの、見てらんないのよねえ」

ローマ正教20億人の頂点に立つ2人の衝突が、始まった。

氷の巨大な錨が、フィアンマの肉体を数キロ単位で吹き飛ばす。

ローマ正教が誇る『聖霊十式』のひとつ、『アドリア海の女王』から生み出される氷の帆船『女王艦隊』。

これを実戦レベルに調整したのが、ほかならぬヴェントであり、また、彼女の扱う属性である『風』は、嵐のエピソードを介することによって『水』の力もある程度引き出す特性を持つ。

錨はフィアンマを抱えたまま起爆し、巨大な氷の杭を無数に生み出した。その剣山が生み出されたのが原野だったのが幸いして、地下の

シエルターが地表に露出している様子はない。

その姿を見て、前方のヴェントは嘲るように笑う。

「無駄弾を撃ちすぎなのよ、間抜け。……つつつても、もう聞こえていないか」

『そうか？ 俺様はお前が思っているより物持ちは良い方だぞ』

その言葉の直後、氷の剣山が砕けた。

その光景に反して、氷の欠片が空から降り注いでくることはなかった。だが、それで民衆に怪我が出ないことを、彼らは素直に喜ぶことなどできない。

それは、ファイアンマの生み出したエネルギーによって、全てが風に流されるほど、粉々に砕け散ったことを意味しているのだから。

その先には閃光があった。それを見たヴェントの顔が、苦渋に歪む。それは紛れもなく、ファイアンマの『第三の腕』であった。

『空中分解そのものは避けられないようだが、この状態で固定することには成功した』

そんな彼の手にあるのは、インデックスの遠隔制御霊装だった。彼はその叡智をもって、既に自分に課せられた制限を取り払っていたのだ。

ヴェントもただ黙っているのではなく、再び氷の戦艦を動かした。砲弾が空気を揺らし、氷の錨がファイアンマを押しつぶすために迫る。だが、ファイアンマは避けることすらしなかった。

ただ、その右腕を振るうだけ。

『破壊力は要らない。触れれば終わるのだから、相手を壊すための努力は必要ない』

ヴェントが舌打ちして、ハンマーを取り出す。高速であやとりを行うかのように、急造でありながら、一流の魔術師ですら届かない魔術を生み出そうとする。

しかし。

『速度は要らない。振れば当たるのだから、当てるための努力は必要

ない』

気づいた瞬間には、数キロ先にいるはずのフィアンマがヴェントの懐まで潜り込んでいて、彼女を吹き飛ばした。そして、宙に舞う彼女の舌に付けられたピアスの十字架を、フィアンマは無造作につかむ。当然ながら、ヴェントはそのままの速度で後ろへ吹き飛んでいく。そのため、ピアスはフィアンマに捕まれた状態でヴェントの舌から引きちぎられた。そして、ヴェントの肉体は広場に突き立っていた氷の帆船の柱に激突する。

そこでようやく、ヴェントの絶叫が炸裂した。

「がアアアああああああ!!」

悲惨な光景を前に、広場にいた人々が次々と走り去っていく。その中で、それでもヴェントは立ち上がろうとしていた。

「ご、ぶっ、何が……!?!」

「簡単なことだよ。俺様が保有しているのは、『右腕』そのものではなく、右腕に備わっているべき力だ」

十字教において『右』は神聖なものであり『対等』を表すこともある。それゆえに、多くの儀式で用いられる。十字を切るのも、聖書を記す時もそうだ。聖書の中で言えば、天使長『神の如き者』が墮天使の長『光を掲げる者』を斬り伏せたのも、全て右手である。

極端に言えば、十字教で説明できる奇跡の全てを引き起こす『右手』、それがフィアンマの『聖なる右』であった。

しかし、これはヴェントが言ったように不完全な代物である。だが、それはフィアンマに限ったことではなく、世界そのものもまた、ねじれていたのだ。

『御使墮し』時、不完全な状態で現れた天使は、自らの名をミーシャと呼んでいたそうだな」

フィアンマは、そのことを指摘した。

ミーシャ (M i s h a) は、ロシアの男性名ミハイル (M i k h a i i) の愛称として使われるべ

き名前だ。そして、その綴りから察せられるように、この単語は天使長『神の如き者』の別名である。『神の力』が名乗るには相応しくな

い。天使にとって、名前とは神が自らを造った理由そのものであるというのに。

また、前方のヴェントが『神の火』と『風』を、左方のテツラが『神の薬』と『土』を担っていたが、これも間違っている。本来は『風』は『神の薬』が、『土』は『神の火』が担うべき属性なのだ。

人々が暮らすこの世界を構成する、四大属性。それが歪んでいる。そう語るフィアンマの背中めがけて、当麻は突進した。

「振り返る必要は、ない」

吹き飛ばされる。

それは『上条当麻を吹き飛ばす』のに最適な出力でもって、間合いを無視した不可視かつ必中の攻撃だった。

RPGで例えるとするならば、『戦う』とか『道具』などと一緒に、『倒す』というふざけたコマンドがあるかのような。

「愉快なやつだ」

フィアンマは、ヴェントと当麻の2人を見ながらそう言った。

「一番愉快なのは、多くの他者へと触発されて自ら死地へと赴いておきながら、結局全ての成果や報酬はお前自身の中へと蓄積されてつるところだな」

「何が、言いたい?」

「お前は自分の行動が善だと、本当に確信をもって言えるのか?」

フィアンマと上条当麻。

どちらとも、その右腕を振るうことで何かを変えられることができる存在だ。

「俺様には確信がある。……自らの行動が絶対的な善の到来を意味するものであるとな」

「……そのために、インデックスがさんざん苦しめられていても放っておけっというのか」

ふざけるんじゃない。

ローマ正教もフランスも自分の都合でチェスの駒のように動かし、その結果イギリスにクーデターを起こさせて、大勢の人々が苦しんだ。

そんなものが善など、認められるわけがない。

「なら、それを止めるお前は善だとしても?」

「善かどうかなんて、問題じゃない」

インデックスが苦しんでいる。

フィアンマの勝手な都合で始まった戦争のせいで、大勢の人が苦しんでいる。

それだけで、理由は十分だ。

「少なくとも、大勢の人たちを苦しめて喜んでいるお前に言われる筋合いはねえ」

「愉快だな」

だが、フィアンマは笑いながら告げた。

「生まれつき幻想創造イマジッククリエイトと互いを否定し合う存在でありながら、人が苦しめられることに怒れるとは」

その言葉に、当麻の思考に空白が生じた。

自分が、神谷駿斗を否定する存在だと?

確かに、当麻の右手に宿る『幻想殺しイマジックレイカー』は、駿斗の持つ『幻想創造』とは対極にある力だ。そのことは、当麻も認識していた。

だが……否定する存在というのは、どういう意味だ?

『あの幻想創造に至っては、その本来の力を発揮することができれば「十二使徒」の3人程度、他の作業の片手間で戦ってもお釣りがくるでしょうにねえ』

かつて、フランスのアビニオンで左方のテツラが言っていた言葉を思い出す。

『お前が持っている「右手」だって似たようなものなんだからな。俺様もお前も、その隣の貴様も未完成であることまでそっくりなんだが』
フィアンマがイギリスで発した言葉も、突きつけられる。

「まあ、仕方がないのかもしれないな。本来教えるべきものを教えるはずだった存在がいらないのだから」

(こいつ……!)

親友への侮辱の言葉を聞きながら、当麻は壊れそうなほどに右手の拳を握りしめた。

（本当に、駿斗のことを知っているのか……親友に宿る、幻想創造の正体を）

そのことについて、インデックスと出会ったその直後に話し合ったことはあった。

だが、その時には魔術に対する知識が不十分であり、その上インデックスは超能力に対する知識がまるでなかったものであるため（今でも大して変わりないが）、大した考察はできなかったのだ。

しかし、目の前のフィアンマの口調は、その正体の見当をつけている様子だ。

「お前たちはずいぶん仲良くしているようだが、それは互いに自分のことを知らないからに他ならない。全てを知ったとき、互いにその関係を保ち続けることができるのかどうか。ジャッジが下るのが楽しみだ」

悪意ある言葉にその体を締め付けられた当麻は、フィアンマが再び『第三の腕』を振るったことに反応もできなかった。

「まずはひとつ」

カメレオンの舌に巻き取られるかのように、サーシャの体が『第三の腕』の中に納まっていた。

「二つ目も頂きたいところだが、やはり相性の問題があるな。簡単に死ぬなよ。その右手にはまた用があるからな」

「フィアンマー！」

当麻はようやく声を上げるが、声の代わりに帰ってきた爆風を右手で打ち消すと、そこに2人の影はなかった。

その誰もいなくなった空間を見つめながら、フィアンマの声だけがその耳に残った。

『全てを知ったとき、互いにその関係を保ち続けることができるのかどうか。ジャッジが下るのが楽しみだ』

「結局、最終的にはどうするつもりなんだ？」

浜面は、その言葉に答えることができなかった。

小さな集落に辿り着いた彼は、そこで盗んだディーゼル車の燃料と引き換えに、彼女へ医者と燃料を提供してもらったのだ。

もつとも、学園都市の科学技術で作られた『体晶』の副作用に対して、適切な処置が『外』の医者に行えるはずもない。しかし、まともなベッドを提供してもらえというだけで、今はありがたかった。

「何だか慌ただしいな」

浜面が周囲の様子に目をやると、集落の大きさにしては多すぎる人々が動き回っていた。彼らには知る由もなかったが、当麻が助けた人々である。

「定期的に物資や燃料は運搬される予定だったんだが、こんな状態だろ。ロシア軍が進路上に駐留したおかげで、ルートが分断されてしまったんだ」

「済まねえ……」

俺たちのせいだ、と言ってから、浜面はそれが大げさすぎることに気が付いた。

デイグルヴは、そんな彼に首を横に振った。

「本当は分かっているんだ」
「？」

「第三次世界大戦がはじまる前から、この集落はロシア軍に狙われていたんだ」

この集落のすぐ目の前には、エリザリーナ独立国同盟との国境が存在する。侵攻用の前線基地をつくるには格好なこの土地では、『独立国同盟からの進行を阻止する』などという名目で、輸送機から大量の地雷をばらまかれるなど、軍の横暴な行為がまかり通っていたらしい。

そして、彼らはそれを安全に回収してNGOに渡すことで、平和維持活動への協力の報酬として、食料と物資を得ていた。

しかし、そんな当事者でも、ロシア軍がそこまでしてエリザリーナ

独立国同盟に攻め込みたい理由は、はつきりと分からないのだった。そのとき、後ろからザク、と雪を踏みしめる音がした。

振り返ったデイグルヴが、浜面を雪の上へ突き倒してから、抗議の間もなくそのまま建物の影へ一緒に飛び込む。

「ロシア兵だ。周囲には一応、侵入者防止用のセンサー類を取り付けていたんだがな」

しかし、のろのろと歩いてきたそのロシア兵は、雪の上に倒れてしまった。たっぷり30秒以上経過してから、2人は兵士に近寄る。

「凍傷だな」

すると、彼は2人を見上げながらおぼろげに何かを呟いた。

「助けてほしい、だど。近くにある空軍基地で『荷物』を待っていたんだが、それが到着する前に学園都市に襲われたらしい」

こいつを見捨てても何も状況は変わらない。そのため、この男をデイグルヴと浜面が運ぶこととなった。

だが、診療所の前まで来たところで、状況は突如として変わる。

診療所から現れた10歳ほどの少女が、ロシア語でなにかをまくしたてた。デイグルヴはしばらく怪訝そうな顔つきをしていたが、その言葉の内容が分かると、彼の表情が変わる。それを見て、浜面にも緊張が走った。

少女が出てきた診療所は、滝壺が休んでいる場所だったからだ。しかし、デイグルヴはさっさとその中に入ってしまった。浜面は慌てて中に入ると、入り口近くの電気ストープの前にロシア兵を降ろす。

「プライベーターティアだ……」

「何だよそれ」

日本語では私掠船と呼ばれる制度だ。元は中世に存在した、国家公認の海賊（のようなもの）である。

それを、ロシア軍では現在でも採用しているという。

ロシア製の最新兵器を押し付けて汚れ仕事をさせ、いざとなれば書類上で部隊を解体し、政治犯収容所に送りつけたことにして、各々の国へ逃亡させる。

そんなごろつきのような連中がこの場所へ来るといふ事実には、浜面

はぞつとした。加えて既に、少し離れた場所にある、磁気で人を探知する見張り用の鉄塔を、先ほど破壊された。彼らの攻撃圏内にこの集落が入ってしまうまで、時間がない。

「どうするんだ……!? どこに逃げりゃいいんだよ!?」

彼が思わずそう叫んだとき、周囲が慌ただしくなった。

「ついに来たか!? にしても早すぎるー!」

デイグルヴが叫ぶと、診療所の中に慌てた様子でライフルを持った男が入ってきた。この集落の人だ。そして、早口で何かの言葉をまくしたてる。

そのロシア語を聞いたデイグルヴが、怪訝そうな表情になっていくのを見て、浜面の心拍数が上がった。

(まさか、もつとやばい状況になっているんじゃないか)

そう考えたその時、彼は思わず叫びそうになった。

なぜなら、その男の後ろから見知った顔が現れたからだ。

「やつほー、浜面。滝壺さんはどこですか?」

「まったく、寒い場所に来たら、どうも面倒な事態になっちまってるようだな」

「結局、行き着く先は同じだったみたいだな訳よ」

「久し、ぶり」

外見ではとても戦場に似つかわしくない13歳の少女3人と金髪の少女は、あっけらかんとした様子でそう言った。

一方通行は、敵に囲まれていた。

ここは、ロシア軍の空軍基地……だったのだが、学園都市暗部組織の襲撃のお陰で、跡地と化した場所だった。

白い髪に赤い目をした彼の姿も異様ではあったが、彼とその腕の中にいる少女を取り囲んでいる、10人ほどの男女の方が異様だった。単なる兵士とは思えなかった。そもそも、実に纏っている服は軍人のものではなく、修道服だった。そして、手にしている武器も、ロシアに似つかわしいカラシニコフなどの銃ではなく、特殊な装飾がされ

た剣や槍といったものだった。

彼らからは『グループ』の1人である海原に似たような圧迫を感じる。

だが、今の彼にとって最優先であるのは、それではない。その腕の中にある打ラストオーダーち止めだ。

彼は彼女に攻撃が逸れるのを防ぐために、意図的に防御力を落とした。そして、攻撃用のベクトルを全て右手だけに集中させる。

ゴッ！ という轟音と共に、彼は駆けだした。

彼が軽く腕を当てる。それだけの動作で、槍を持った男がノーバウンドで10メートル以上吹き飛ぶ。

「ヴオジャノイー！」

薙ぎ払われた修道服の男の言葉で、集団は我に返った。そして、一方通行の斜め後ろに立っていた女——おそらくはヴオジャノイー——が、手の指を不自然に動かした。

その直後、彼女の周囲の雪が溶け、水の槍となって彼に襲い掛かった。

不可思議な攻撃に対し、しかし不可思議な現象に慣れている彼は、速やかに対応した。唯一『反射』を適用した右手で、それを迎撃する。

だが、水の槍は七色の光となって散り、斜め後方に逸れていくだけであった。それは重圧のある壁となって、周囲の修道服を数人なぎ倒してしまう。

しかし、その様子に、一方通行は眉をひそめる。

(反射が……通用しない?)

おかしい。

本来ならば、水の槍はそのまま彼女へと向かい、その体を貫かなければならなかったはずだ。

一方通行にとって不可解なその現象は、彼女にとっても同じであったらしい。再び同じような水の槍を生み出し、一方通行に向けて放つ。もつとも、それは一方通行にとっても好都合であった。

しかし、その2回目は先ほどとは異なっていた。とはいっても、彼の『反射』を貫通したからではない。逸れた七色の光が、打ち止めの顔を掠めそうになったからだ。

「……気をつけろ」

その言葉と共に、周囲の雪が津波のようになって彼らに襲い掛かった。敵が全て気絶したことを確認すると、今の水の槍について考える。

学園都市の水流操作系の人間のものとは、明らかに異なるベクトルを持つていた。

違うベクトル。——違う法則。

そのことについて、襲撃者から聞き出そうと歩き出したその時、上空から学園都市の超音速爆撃機が、何かを落とした。爆弾ではない。ハンググライダーのような、滑空機構をもつものだった。

敵だ。

彼は再び電極のスイッチを入れ替えると、小石を蹴り飛ばして、それを撃ち落とす。だが、それに乗っていた人間がそのまま墜落することとはなかった。

紫電が散った。

段階ごとに空気を爆発させて、その人型はふわりと雪原に着地する。

一方通行は、そのことに驚いた。あの高さから着地したことに対してではない。気にしていたのは、使用された能力だ。

それは、とても見覚えがあるものだった。

そして、その後姿を現したその襲撃者の髪の毛も、とても見覚えのあるものだった。

白い戦闘服を身に着けた彼女は、その顔を仮面のようなゴーグルで覆っていた。しかし、一方通行はその腕の中に抱く少女と、襲撃者が似通っていることを感じ取っていた。

そして。

「^{サー}第三^ド次^シ製^ズ造^ン計^ン画^ンって言えば、ミサカのことは分かるかな？」

一瞬、その言葉に凍り付いた一方通行に、彼女は容赦なく襲い掛かった。

悩み抜いた先に

これから『十二使徒』と戦う、と駿斗は決めたものの、それですぐに相手が姿を現してくれるわけではない。そのため、しばらくはユリヤたちの手伝いをしつつ、彼女から、ロシア成教の情報が得られそうなものを聞き出していた。

また、それと並行して行うのが、周囲に同じように困っている人がいないかどうか探すことと、近くにロシア軍やロシア成教が来ていないかどうかの偵察である。

「……これほど大規模、な探知術式って……やっぱり、どう考え、てもおかしいです」

駿斗の『幻想千眼』を見た彼女は、もはや呆れた様子でそう言った。

まあ、魔術師である彼女からすれば、無理もないことかもしれない。そもそも、駿斗はインデックスから魔術を教わっているものの、使用の際の基礎となる知識には、かなり科学サイドの影響を受けている。そのため、仮に他の魔術師と同じような術式をつくったところで、インデックスなどの専門家から見れば、かなり異色のものとなってしまっているようだ。

しかしながらそれは、相手に術式の正体が看破されにくく、対策が立てられにくいというメリットが存在する。そのため、駿斗は特に気にしていなかった。

ユリヤはそんな文句を言っていたが、しばらくすると、駿斗が何か他の作業をしていることに気が付いたようであった。

「いったい、何をしているん、ですか？」

これは、明らかに先ほどの探知術式とは、毛並みが違うようだ。もつとも、それ以上のことはユリヤには分からなかったが。

「ああ、これは『準備』だよ」

『準備』？」

駿斗は、作業をしながら答える。

「これからの戦いは、『十二使徒』が全力を尽くしてくるはずだ。今までのように、何か問題が生じたからとか、そういったことで撤退はし

てくれない」

そして、彼らはその全員が猛者の集まりだ。

現在のところ、シモンの別名を名乗るシメオンの術式が『支配に対する抵抗』なのは分かっているが、残る『タダイ』『ヤコブの子ユダ』『イスカテリオのユダ』『マテイア』のうち、残りの2人が誰に該当するのかも、どのような術式を使用するのかも不明のままである

このような状況では、対策を立てようにも立てられない。

「それに、『十二使徒』のことばかりも気にしてられない。ローマ正教とロシア成教が、どんな切り札を隠し持っているのかも分からないからな」

だが、ひとつだけ分かっていることがある。

ファイアンマが、自分の腕とは別に用意した切り札というのが、恐らく『神の力』^{ガブリエル}であるということだ。

『神の力』……!? まさかそんな、大天使、を召喚するなん、てことが」

「それが、実は8月に一度、大天使は召喚されているんだ」

開いた口がふさがらない、といった様子のユリヤ。まあ、無理もないことであろう。普通の魔術師が訊いたら、どうして人間が滅んでいないのか、不思議に思うのが普通の反応だ。

だが、駿斗に確信があるのが、ミーシャ・クロイツェフと過去に名乗った、ロシア成教『殲滅白書』の魔術師サーシャ・クロイツェフと体を入れ替えた存在だ。大天使『神の力』。それは、科学サイドではまるで歯が立たないだろう。仮に風斬氷華が出てきても相性こそいいものの、230万人の8割程度から集められた力と、全十字教徒に支えられた存在では、力の大きさが桁違いだ。

「じゃあ、今やっているのは、そのための?」

「ああ。ファイアンマはロシアと協力関係にある。ならば、この土地だって重要な魔術基盤になるはずだ」

だからこそ、逆転の一手になり得る。

駿斗はそう言ってユリヤと共に作業を続け、しばらくすると再びロシア成教に占領された土地を見つけたので、攻撃をしかけた。

外国人傭兵部隊・プライベートティアによる侵攻が始まった……のであるが、浜面はそれよりも、今日の前にいる2人の少女に目を向けた。「……なあ、どうしてこんな戦争の最中に来ているんだ?」

「それは超こちらの台詞です。まあ、私たちは共に、どちらにしてもあの学園都市を相手に、超交渉する必要がある訳なんです」

最愛と海鳥は、もしかするとこのまま放っておいても大丈夫なのかもしれない。そう思うほどに、彼らの『卒業』は不自然に穏やかだったからだ。

しかし、滝壺に至っては、学園都市でも希少なA I M拡散力場関係の能力者、その上大能力者^{レベル4}である。霧丘にしても同様だ。間違いない、追手が来るだろう。フレンジも、勝手に飛び出してきただけだ。ならば、相応の交渉材料が必要になる。

そう考えた時、彼らがいる診療所の地下に、震動が伝わってきた。「なんだこれ、キヤタピラか?」

「戦車でも送り込んできているのかもしれない」
正規兵であれば、戦車は隊列をつくり走行車両などで歩兵が同行する……いわゆる随伴歩兵というものが存在するはずだが、連中は完全な独断専行だろう。もともと、それでも十分すぎるほどに脅威だった。

メリメリ、という嫌な音に、2人の会話が止まった。どうやら、戦車の装甲を利用して、建物に体当たりしているようだ。まともな運用方法でないことが、素人の浜面にも分かる。

(……俺たちが恐怖で飛び出してくるのを待っているんだ)

戦略上の目的よりも、殺しそのものを楽しんでいる彼らに、何を言っても無駄なようである。そのため、必死に耐えている彼らに倣うように、浜面も少女2人も口を閉じていた。
しかし。

ベゴツ！ と突如として、天井が崩れる。

恐らくは彼らとしても、この状況を予定していたわけではないはずだ。しかし、浜面達としてはたまったものではなかった。

「走れー！」

デイグルヴが叫んだ。

先に地上に出ていた彼に、意識を失っている滝壺を引き上げてもらい、その直後に浜面も飛び出した。最愛もオフエンスアーミー空素装甲で強化した自分の腕で自らの体を引き上げ、海鳥は槍を簡易なブースター代わりにして大きく跳躍する。その後、2人の少女が引き上げられる。

しかし、それと同時にライフル弾が闇雲にまき散らされた。診療所が一瞬にして瓦礫の山と化す。だが、ライフル弾の脅威からは逃れることができた。

「このまま地上にいたら殺される。追いつかれる前に他のシエルターに逃げるんだ！」

滝壺を抱えたデイグルヴがそう言ったとき、近くで何かが爆発した。その音が鳴りやんだ後、彼は滝壺を抱えてどこかへ走り去ってしまふ。

(……くそ、俺はその地下の場所が分からねえんだよ！)

彼はそう毒づくが、その直後に声がした。

「浜面、超大丈夫ですか？」

突然の声に、浜面は思わず銃口を向けそうになる。しかし、そこにいたのは最愛であった。

彼女のジェスチャーで、2人は姿勢を低くして建物の影に隠れる。

「おう、お前は大丈夫そうだな」

「これでも、超防御に特化した大能力者レベル4ですから。もっとも、戦車砲まで防ぐことはできませんよ」

彼女も彼女で、もはや拳銃すら持っていないという。しかし、彼女の場合は素手の方がよほど凶器となり得るだろう。

もっとも、その自慢の装甲も戦車相手には分が悪い。

しかし、浜面はそれよりも、目の前に鎮座してあるものに目を向けていた。

かなり大きなサイズの機関銃だ。

2人は転がるような挙動で銃座までたどり着く。

しかし、機関銃は三脚で固定されていて、ジョイント部分だけが回転するようになっていた。

「これは、さすがに使えません！ 使えるように、三脚を超破壊しますか？」

「ダメだ！」

さすがに、これに衝撃を加えたらどうなるのか、恐ろしくて頼むことはできなかつた。

その時、別の建物の影から、新たな走行車両——恐らくは、マシンガンのように砲弾を連射して航空戦力を撃ち落とすための高射砲——が現れた。地上の標的に用いるための兵器ではないのだが、彼らはそんなこともおかまいなしのようだ。逆に、『趣味』のためにそうしているのかもしれない。

その標的にされているのは、赤ん坊を抱えた1人の女性と、その背中を追いかけるようにして走る10歳ほどの少女だつた。服装からして、車列から解放されてた人だ。

気が付けば、浜面はその機関銃を掴んで引き金を引いていた。

地面に固定されているはずなのに、右肩に電動工具を抑えつけるような衝撃が一瞬、かかつた。しかし、突如として割り込まれた少女に、その肩を掴み離される。

高射砲の装甲に火花が散り、浜面の銃撃でその砲弾は2人とは離れた場所に着弾した。

「走れ！」

こいつ馬鹿か!? といった様子の子の最愛を無視して、浜面は親子に向けて叫んだ。

一方で、高射砲も黙つてはいなかつた。キャタピラの上に取り付けられた砲塔部分が、巨大なモーターの力で勢いよく回転する。

掃射。

壁となつている土囊の黒土が吹き飛ばされ、大型機関銃もバラバラにされた。しかし、しばらくすると砲弾がやんだ。

「超飛びますよ！」

最愛の叫び声に、浜面は半ば無意識に従う。その直後、砲塔の脇に取り付けられた、地对空ミサイルが強引に発射させられた。
趣味。

そのためだけに、彼らは戦場を蹂躪する。

爆発で聴覚が損失する感覚があった。2人は雪の上を転がり、その勢いだけで別の建物の影に入る。

すると、そこには滝壺を抱えたディグルヴと海鳥、フレンダがいた。少女の寝顔が、くじけそうになった浜面の心を辛うじて支える。

「プライベートティアの連中の目を逃れるように走り回っているうちに、気が付いたらここに来ていたんだ」

それはつまり、包囲網が狭まっているという意味を表していた。

肝心のシエルターの方は、偶然にも近くにいる少数の兵隊が遮っている。カーテンの奥やベッドの下まで調べているあたり、どうやら人を殺したくてウズウズしているようだった。

浜面には、理不尽な暴力に対する怒りがあった。学園都市の裏路地でも、暗部の下部組織の中でも、力のない自分たちは、力のあるものに打ちのめされていく。

だが、滝壺が、こんな自分たちに力を貸してくれるような人たちが、こんなくだらない理由で襲われなくてはならないはずがない。いい加減、こちらが反撃を始めてもいいはずだ。

「……もうちょっとだけ、滝壺のことを任せられるか」

ポイントシールみたいなものだ、と言いながら、浜面は思い出していた。NGOに渡すための地雷を、一か所に集めてあるということに。

一方通行は、雪の上を走っていた。
アクセラレータ

狙うべき獲物を追うためでもなく、目的地に向かっていているわけでもなく……ただ、逃げるために。

学園都市第一位の超能力者^{レベル5}が、打ち止めを抱えてただ走っていた。恐ろしかった。

木原数多よりも。

垣根帝督よりも。

エイワスよりも。

あの少年たちよりも。

自らの研究の産物である、2人の少女たちよりも。

その理由はただひとつ。彼女は、その容姿が、その存在そのものが、今の一方通行を支える柱のようなものを一撃で揺さぶってきた。

バチツ、という、風船の弾けるような音と共に、その脅威はやってきた。

2センチ程度の鉄釘が、音速を超えた速度で射出されたのだ。それは、一方通行の左腕の二の腕の中間を射抜いた。

「がアアアあああああああアツツツ!?!」

絶叫が響く。

打ち止めの体が、雪の上に投げ出された。

頭のイカれた研究者たちと、何より自分自身の身勝手のために生み出され、殺し続けてきた体細胞クローン。それを守るために、彼はあの8月31日以来戦ってきた。

しかし、学園都市はピンポイントで『そこ』を折るための対策を練ってきた。

(偽装ならー!)

彼は一抹の望みにかけて、足元のベクトルを操る。すなわち、足元の雪を散弾銃のように、彼女にぶつけたのだ。

だが、襲撃者はその攻撃を読んでいたようで、実をかがめることによつて、それを躲した。しかし、仮面に引っかけたわずかな欠片が、それを剥がして素顔を露わにする。

今度こそ、一方通行は雪の上を転がった。その仮面の下の素顔を、認めたくなかったのだ。

「む・だ」

打ち止めを高校生くらいにしたような少女は、ニコリともせずと言

う。

一方通行の能力は、現在ミサカネットワークを利用して代理演算を行っている。そのため、その内容から能力による攻撃は予測できる。手加減などとしても、たいしたダメージは与えられない。

その上、彼女には『シート』や『セレクター』と呼ばれる部品によって、最終信号ラストオーダーからの命令を拒絶することが可能となっている。

殺さなければ、殺される。

しかし、一方通行はどうあっても妹達を殺すことができない。

サードシーズン
第三次製造計画と呼ばれる計画。

「実際にそれが開始されて、オマエが生み出されたってことは、他の妹達だっていつだって交換できるってことだ」

「そう。司令塔である最終信号であつても、例外じゃない」

一方通行は、あの実験の意味は自分を絶対能力者に進化させることなどではないことに、とつくに気が付いている。本当は、あのエイワスと呼ばれる化物を生み出し、それを制御・運用するために妹達を生み出したということくらいは。

そのためには、エイワスの召喚（現出？）及び維持に使われるらしい、最終信号を手元に置いておかなければならないようだ。したがって、新たな司令塔を創り出す必要に迫られた。

しかし、ネットワークに司令塔は2つも必要ない。むしろ、司令塔が2つあることは、命令の競合を起こす可能性が高くなることを意味する。

「どつちにしろ、あなたの心はここで死ぬ。人格が粉々になるまで遊んであげるから存分に楽しんでよ！」

一方通行にとって、勝つことも負けることもできない、絶望的な戦闘が始まる。

便所の個室に似た簡素な扉を開けると、雑誌の束のように五角形の金属の板が、無造作に積まれていた。

その対戦車地雷を、浜面は両手でつかんで雪の上に置いた。地雷の

性能を知っていれば、絶対にできないような動作だ。

使い方は手榴弾と基本的に同じだ、とデイグルヴは言っていた。つまり、投げるか置くかであって、ピンを抜いた後に衝撃が与えられれば、爆発を起こす。

(……俺では二つが限界か)

できるだけたくさん持っていきたかったが、予想以上にその兵器は重かった。もつとも、こういうときに役に立つのが、最愛の窒素装甲オフエンスアーマーである。

デイグルヴは、集落にやってきた装甲車両は、2台くらいだろうと言っていた。片方は地下室をぶち抜いて落ちてしまったので、残りの高射砲を何とかすれば、ひとまず安全は確保できるはずである。

その時、小屋から比較的近い民家の屋根が吹き飛ばされた。浜面と最愛は身をかがめて、地雷を抱えて小屋から離れる。

海鳥はというと、窒素爆槍ボンバランスを生み出した状態で待ち伏せしている。彼女であれば、近づくことさえできれば、戦車だつて中にいる兵士ごとスクラップにすることが可能だ。もつとも、『槍』の間合いである、彼女の腕から3メートル程度までだが。

次は、あの高射砲に近づかなければならない。高射砲のルートを特定するのは容易ではなく、一度にたくさん敷設することもできない。そのため、結局は『地雷を投げつける』という常識はずれなことをしなければならなかった。

フレンドは海鳥の補佐に回った。一応、爆弾の類はあの日の残りではあるものの持っている。それに、彼女は一応『アイテム』の中では一番爆薬に詳しいのだ。

崩れた建物のがれきの中に潜んでいると、割れた窓の外からキヤタピラの震動が伝わってきた。その鋼鉄の塊までの距離は、ほんの5メートル。

浜面は大きく息を吸うと、一気に行動に移した。

割れた窓から身を乗り出し、全力でその地雷を投げる。窓の関係上、1度に1人しか投げることはできないため、順に投げるしかなかったのだ。

地雷は高射砲の砲塔に命中し、轟音が響く。

しかし、予想ほどのダメージを与えるには至らなかった。地雷は地面に設置して使う兵器であるため、爆風は接地面に対し、効率的にダメージが与えられるよう、上方向に向かうようになっている。しかし、浜面が投げた地雷は、ちょうど裏面の方が砲車塔に当たってしまったのだ。

しかし、その次に起きたことは、浜面にも予想外であった。高射砲がその向きを変えるよりも早く、爆風によって崩れた建物が、高射砲の上に落ちてきたのだ。

それは、鐘のある尖塔を持つ、小さな教会だった。

鋼鉄の塊である高射砲は壊れなかった。しかし、それによって動きを封じられた。

海鳥は、透明な槍を片手に、高射砲に近づいて行く。あえて相手に能力が伝わるように、周りの瓦礫を豆腐のように切り裂きながら。

「とりあえず、そのスクラップごとテメエを切り裂くが、構わねエよな？」

ロシア語で放たれたその言葉に、慌てて出てくる兵士たちに向けて、海鳥と浜面は襲い掛かった。

上条当麻は、ボロボロになった広場の中を、走り回っていた。レッサー、エリザリーナがフィアンマたった1人に手も足も出ずに撃破され、前方のヴェントまでも、一矢報いるのが精いっぱいだった。

そして、肝心のサーシャクロイツェフは連れ去られてしまった。「それにしても、まさかフィアンマが10万3000冊の知識を利用できたなんて」

インデックスは『神の右席』の知識までは完全にカバーできていなかった。しかし、外堀を埋めて効率を上げるために使用しているのだろう。

恐らく彼は今、国境の向こう側にある例の基地で、作戦の中で重要になる『何か』をしているはずだ。

すると、飛び出そうとする当麻の腕を、レッサーが掴む。

「時間がありません。エリザリーナ独立国同盟の力を借りましょう」

近年に独立したばかりということもあり、使用している車両の種類はほぼ同じであるという。

「……巻き込まれて、大丈夫なのかな」

「それを決めるのは私たちではありません」

命をかける当人が決めるべきことであり、少なくとも、自分の人生は自分で決めるべき、とレッサーは言った。この辺りで割り切ることができるのも、彼女の魔術師らしい一面なのだろう。

すると、悩んでいる当麻に対して、レッサーはこめかみに人差し指をあてながら、めんどくさそうに告げた。

「結局、同じことだと思いますけどね」

「何が？」

「フィアンマが何を言おうが、当人の人生は当人が選ぶべきなんじゃないですか」

中学生の時、自分は曲がりなりにも1人の少年に手を差し伸べ、そして彼の親友となった。自分自身のよりどころを失いかけてきた少年は、漠然としたその不安に終止符を打ち、しっかりとひとつの信念を抱くことができるようになったのだ。

それは、親友が言っていたように、素晴らしい思い出なのだろう。だけ。

「それでも、俺がいることで駿斗に与えていた影響が、全部いいことだったなんて、本人でも言い切れないことなんじゃないか」

2センチほどの鉄釘が、アクセラレータ一方通行のふくらはぎに突き刺さった。どうやら、今度は体内に残ってしまったようだ。

「もつと逃げ回ってよ」

その声の主は、焦って追撃などをしなかった。一方通行をなぶるためだけに、彼女は存在している。

ジャリジャリと鉄釘の音を鳴らしながら、突き刺すように話す。

「あなたはミサカたちを1万回以上、1万人以上殺してきたんでしよう？」

だから逃げ回れ。無様に命乞いしろ。

今まで殺されてきた10031人の全てだけでなく、それ以上の屈辱を与えなければ、気が済まないのだから。

彼女は他の妹達シスターズと同じ顔つきでありながら、しかし他の妹達ではありえない歪んだ表情で、そう吠えた。

生まれたくもないのに、生み出された。上位個体である最終信号ラストオーダーからの信号を拒否できるようにするため、皮膚を切り開いて得体のしれない『シート』や『セレクター』を埋め込まれた。

「どうして今まで——最終信号を含めて、他のミサカたちがあなたを糾弾しなかったと思う？ 不自然だとは思わなかった？」

妹達というのは決して、人工的につくられた聖人君子の集まりという訳ではない。

ただ、持ち合わせていなかったのだ。人間らしい感情——その中でも『負の感情』と呼ぶべき部分を、心で処理して表現する『心』を。

これが、彼女による作戦だという事は、一方通行も理解している。しかし、頭で理解することと、心で、感情で納得することは、全くの別物だった。

顔面を蹴り飛ばされても、彼は『反射』を機能させることも、攻撃することも回避することもできなかった。

「ミサカたちには『憎悪の感情が存在しない』のではなく、『存在しているものの、それを表に出すための手段がない』だけだということは判明した」

そこで、番外個体ミサカワーストは、視線の先を変えた。少し離れたところで、もぞもぞと手足を動かそうとしている幼い少女に。

エイワス出現の影響で意識すらも怪しいにも関わらず、それでも一方通行ををどうにか守ろうとするかののように、必死になっていた。

不吉な予感を思わせる汗を流す彼女を見て、番外個体はこれまで以上に笑みを歪めた。

「そうね。まずはあっちの不良品から片づけるか」

あ、な、た、の、せ、い、だ。

第一位のトラウマを利用して弱体化させ、殺害できればそれでよし。仮に敗北したとしても、妹達シスターズを殺害したという事実が彼を精神的に死滅させる。

そういう作戦なのだと考えていた。

しかし、実際はそんなに甘くなかったのだ。

勝ちも負けも、引き分けも和解も関係なく、ただ1人の怪物を完膚なきまでに破壊するための装置。

それが『番外个体』ミサカワースト。その名の通り、最悪ワーストな現実を突きつけるための妹達ミサカ。

そして。

「ふぎけんじゃねエぞオオオおおおおおおおおおッッッ！」

一方通行は、番外个体の下へ向かった。

ベクトル操作——その能力は最強の武器として振るわれることが多いが、それは本質とは程遠い。その気になれば、人体の血流や電気信号のベクトルを読み取り、操作することも可能だ。

これが学園都市の考えることだというのであれば。

番外个体が死ぬことが、彼らの計画であるというのであれば。

——俺の手でこいつを救うことで『失敗』させてやる！

「今からオマエたちに見せてやる！ あのガキを天井のウイルスから救ったよオに、俺にだって何かを守る力があるってことをよオオオオおおおおおおおッ！」

雪原の襲撃

駿斗は無事に、ロシア成教の魔術師たちを拘束した。

「これで、とりあえず全員のようにだな」

「ええ、なんとか無事に拘束できてよかった、です」

ユリヤと共に、一息つく。

そんな中で、駿斗は感心したようにユリヤの様子を見ていた。

主にロシアの魔術師らしい、妖精や魔女のお伽噺をベースにした魔術を彼女は使う。

しかし、なんというか、彼女は少々焦った時に、とんでもない力を発揮している気がするのだ。というのも、いくつか強引に魔術を發動している節がみられたのである。

魔術とは基本的に、自分の生命力^{マナ}を魔力へ精製し、この世界へなんらかの現象を生み出す技術。それはオカルトの領域であるとはいえ、きちんとした理論が存在する。

だが、その過程を魔力を多く消費することによって、多少ごり押ししている感覚が、彼女には見受けられた。

彼女の年齢を考えれば、まだ魔術師としては一人前になっていなくても、決しておかしくはない。レッサーなどと変わらない年であるが、彼女たちはそもそもが、年齢に対して優秀なのだ。

駿斗がおかしいと感じているのは、その感覚だった。

本来であれば、魔力を多く消費することによって、術式を強引に成立させることなど、できるはずがないのである。

だが、現に彼女はそれを実現させている。そして、それだけの魔力を消費しても、それをものともしない様子だ。つまり、魔術師としての腕は一流には及ばないが、魔力量は並よりもはるかに多いのである。

(これはまた、この子も難儀なものを抱えていそうだな……)

駿斗はそう思いながら、ユリヤにこれからのことを相談しようとした。

その時。

ドオン！ という爆音が、ロシアの雪原に鳴り響く。

感じられたのは、普通の魔術師には制御することが不可能な、莫大な量の天使テレズマの力。

駿斗とユリヤは速やかに、3人の人影に対して雪の槍を飛ばす。だが、それは簡単に蹴散らされ、そのお返しとばかりにやってきた衝撃波を、ユリヤが間一髪のところまで回避した。

魔術攻撃を受けた場合に、自動で術者に衝撃波をとばす術式。それは、以前に見たことがあるものだった。

「……ユリヤ、気をつける。あいつらが『十二使徒』だ」

その言葉に、ユリヤが最大限の防御を築く。

「はい。いかにも」

3人の中から、鋸を持ったシメオンが出てくる。熱心党と呼ばれた使徒の象徴物アトリビュートを持った彼の術式は『支配への抵抗』。こちらの魔術攻撃に対して、自動反撃を行うものだ。

残りの2人は初めて見る顔であるが、彼らもまた、それぞれ鳩の首飾り、槍という象徴物を身に着けていた。

「タデーと申します」

「……ジユダ、だ」

タデー……タダイ。『神の子』の実兄、あるいは異母兄であるとされている使徒。そのように、血縁上では近い存在でありながら、新約聖書には記述が少ないとされる存在でもある。

ジユダ……ユダ。タダイの別名がユダであるため、イスカリオテのユダと呼んで区別する使徒。他の十二使徒とは、その知名度は一線を画する。もつとも、『最後の晩餐』の席において神の子から裏切りを予告され、神の子を引き渡した裏切り者として、であるが。

しかし、

(ユダか……予想と違うな)

駿斗は、元からその存在に疑問を抱いていた。

ユダといえば、先述の通り裏切り者という印象が強い存在である。

にもかかわらず、なぜ『神の子』を崇拝の対象としているはずのローマ正教が、その存在を『神の右席』の側近のような形で置いているのであろうか。

彼らの考えに従うならば、ユダの代わりに入ったマテイアを12番目の使徒として扱うのが、道理であるように感じられるのだ。

しかし、現にユダの別の名を口にした以上、彼とも戦うしかない。(マテイアの伝承から予想してきた術式が、全部無駄になったのは痛いな……)

当然ながら、ユダに関しても予想は立てている。しかし、イマイチ自信がない。

だが、迷っている場合ではなかった。悠長に構えている時間はない。なぜなら、彼らにとつて駿斗は狩るべき獲物であり、駿斗にとつて彼らは殴るべき相手なのだから。

「お前ら……どうして戦争まで起こした？ お前らの実力をもってすれば、ここまで大ごとにしなくても良かったはずだ」
イマジン・コアロット

『幻想核杖』に四大属性の輝きを宿らせた駿斗は、その右手を突き出して言う。

「そうでしょうか？」

「そうだ。他の『神の右席』は3人いたが、『前方のヴェント』は学園都市に直接乗り込み、『左方のテツラ』は『C文書』を使って世界規模の学園都市反対運動を起こした。そして『後方のアックア』は自ら学園都市に直接乗り込み、正面衝突を選んできた」

しかし、最後に残った男である『右方のファイアンマ』は、彼らよりもはるかに大掛かりであった。

「……ファイアンマ様の目的のためですよ」

「だから、それが分からねえんだよ。ヴェントは科学への憎しみから、その破壊を望んでいた。テツラは思想が統一されていない人間を、ローマ正教に染めることで『神聖の国』で争いが起こらないように考えた。そしてアックアは、この世界の騒乱を治めるために俺たちを排除することを考えた」

彼らは歪んでいたが、結局の始まりは、人を大切に思う気持ちから

始まっていた。

だが。

「世界大戦なんて始まってしまえば、もはや誰が安全、なんてものはない。むしろ、今はローマ正教やロシア成教の庇護下にいた、魔術師を含めた人々が疲弊しているだけだ」

戦争とはそういうものだ、駿斗は思っていた。つまり、戦いを仕掛ける方は、当然ながら利益がコストよりも高いことを見積もるものだ、と。

しかし、今回の戦争は、明らかに採算が取れない気がする。

確かに、学園都市はその秘匿技術の全てを公開することが、要求事項には書かれている。それは、学園都市が学園都市として存在し続けることができている理由であり、もしもそれが世界中に公開されたら、学園都市は消滅するだろう。

だが、実際にはどうだろうか。学園都市は相手の予想をはるかに上回る性能の兵器で、数の有利を簡単に覆している。そして、ロシアはその広大な土地に散らばっている莫大な戦力を、小出しにして戦うことを余儀なくされている状態だ。

学園都市に住み、その異常な科学技術の一端に日頃から触れている、駿斗だから言えるのかもしれないが……啖呵を切つて戦争を仕掛けたにしては、あまりにもお粗末である。

流れるようにそう言った駿斗に対して、シメオンが答えた。

「簡単なことにございますよ……。ただ、私たちがするべきことは、フィアンマ様の『右腕』の完成。そうすれば、主が、神の如き者が、『神の子』が聖書の中で成し遂げてきた奇蹟が、そのままこの世によみがえるのですから」

しかし、彼らは揺るがない。分かっていたことであるが……駿斗は今一度、右手の杖を握り直した。

「ならば、もう話す必要は」

「ないようですね、残念ながら」

ゴォー！ という音と共に、両者の間で攻撃が弾けた。

両者の攻撃が激突するその中を、駿斗は正確に避けながら駆ける。シメオンに対処するために、駿斗が考えた答えはシンプルなものだ。それはすなわち、魔術による攻撃を引き金にして自動反撃がなされるというのであれば、物理的な手法で攻撃してしまえばよい。

天使の力テレスマによる身体強化と、高速移動術式により強化された拳で殴りつける。が、やはりそれは象徴物アトリビュートである鋸で受け止められ、返す刃で風の刃が駿斗の腹に叩き込まれる。

「つつつつ！」

(念のため、防御術式を常時展開していてよかった……)

しかし、それでも完全に威力を殺すことはできず、腹部に重い痛みを感じた。

「水よ——」

「風よ——」

タデーとジユダが術式を重ね、増幅された雪の嵐が駿斗に殺到する。ユリヤが扱うような吹雪の術式だが、その威力は桁違いだった。

「吹雪の翁は捨て子を庇護する！」

ユリヤが呪文を紡いだその直後、駿斗の周囲に透けるほど薄い銀の毛布のようなものが現れ、その吹雪の術式を蹴散らす。

「サンキュー！」

駿斗はその守護の下で、木、火、土、金、水の五行相生を生かした術式を連続で生み出す。5色の弾丸を辺り一面に撃ち、一発ごとにその威力を向上させていく術式だ。

轟音が、冬のロシアの雪原に響く。

タデーとジユダはそれに対し、回避ができないと悟ると防御を展開した。そして、続けてシメオンの反撃術式が作動する。

(こいつら、シメオンの術式が増強されるように、あえてあいつの方向に俺の攻撃を受け流した!?)

そのことに気づき、驚く駿斗に向かって、シメオンがその体を酷使して駿斗の砲撃の中を突破してくる。

「くそー！」

駿斗の杖とシメオンの鋸が互いに打ち付け合う。その中で、ユリヤにタデーとジユダの魔術砲撃が雨あられと降り注いだ。

「ユリヤー！」

雪煙が晴れたその場所に、彼女はいなかった。シメオンはその隙に駿斗へ強力な一撃を叩き込むが、駿斗はそれを利用し、あえて吹き飛ばされることで威力を殺しつつ、距離を取る。

「大丈夫、です、駿斗さん！」

いつの間にか、駿斗よりも30メートルほど後ろにユリヤがいた。確か、彼女はあの攻撃を受けるまで『十二使徒』、駿斗と50メートルほどの正三角形を結ぶような位置関係だったはずだ。

（高速移動も使えたのか……！）

魔術師は自分の魔術に関してわりとおしゃべりではあるが、重要な手札は当然ながら黙って隠している。彼女もまた、そういった術式を隠していても不思議ではない。

安心するとともに、彼女が優れた魔術師であることを、あらためて認識した。後方支援であるとはいえ、この戦場で『十二使徒』相手に攻撃の相殺や防御、支援を行えるのは、彼女もかなり優秀な魔術師だ。

「（ユリヤ。まずはあの連携を崩す）」

「（分かりました）」

音波を操作して簡潔に作戦を告げると、2人は今までとは異なる動きを見せた。

駿斗は莫大な魔力をかき集めると、万象再現リプロダクションによりそれに形と意味を与える。

駿斗が知り得る中で、純粋な威力では最強クラスの魔術攻撃。

宙に光で描かれる幾何学模様の魔方陣、その中央の裂け目から放たれるのは、かつて聖ジヨージゲオルギウスが対峙した悪竜の息吹だ。

「竜王の殺息」
ドラゴンブレス

現在フィアンマに囚われた少女の、かつての攻撃を生み出そうとしたところで……彼らの様子が変わった。なんらかの通信を受けたようだ。

「申し訳ありませんが、ここまでのようですね」

「待て！」

駿斗はそのまま光線を放ったが、彼らはそれを3人がかりで受け止める。

「それでは」

その言葉と共に、彼らのいる場所が爆発した。

「くそ……あらかじめ、逃走用の術式を組んでいやがったのか」

どうやら、最初の交戦は互いに戦果のない状態で終わってしまったようだった。

集落を襲ってきた高射砲の動きが止まったことをきっかけに、プレイヤーティアはその戦意を失った。そして逆に、集落の人たちは戦意を高めた。

そのため、それからはあっさりと彼らを拘束することができた。もつとも、これはこの集落においてアサルトライフルという武器が、消火器よりも普及しているという戦力上の理由もあつただろう。さらに、アサルトライフルオフエンスアーマーごときでは、最愛の窒素装甲を貫通することはできない。

彼らは両手を上げたが、そうすれば助かると思っている時点で、自分たちがしてきたことの重さを理解できていないのであろう。……それでも、浜面の願いで一応シエルターの中に拘束されることとなった。

一時的かもしれないが、危機は去った。

そう思っていたのに。

「来てくれ！　まずいぞ、さっきの連中どこの話じゃない！」

金属反応の反射を捉えるという旧世代のレーダーのモニターには、3つの点が映っていた。その影の大きさから考えると、地上を攻撃するための爆撃ヘリだという。

高射砲に比べると装甲は薄いが、その分速さがけた違いだ。専用の地对空携行ミサイルであつても、後ろから奇襲をかけなければ回避されるほどである。

その上、速さがあるということとは、その分攻撃から逃げるのも難しくなる。さらに、宙を飛んでいる以上、今度は最愛や海鳥の能力は、まるであてにならない。

「またプライベーターティアなのか」

「おそろくな」

正規の軍隊であれば複数の兵器を組み合わせるらしいが、プライベーターティアには、そういったセオリーが存在しないのも特徴だった。

海鳥は、端正な顔を歪めた。

「大した執着心なこと。地下はどうだ？」

「もう使えないでしょうね。さっきの戦闘で、超傷んでいます。生き埋めにされますよ」

すると、デイグルヴは地図を広げた。

集落の南方には、森が広がっているらしい。枝や葉によってその姿を隠していけば、まとまらずに行動することでどうにかなるかもしれない。

まとまらずに行動すれば、獣の群れと思ってももらえるかもしれない——という甘い言葉を口にするが、それが建前であることは誰もが分かっていた。ようするに、この場から1人でも多くの人が生き残る手段を考えるのだ。

しかし、浜面はこう言った。

「……高射砲を使えば、勝てるかもしれない。建設重機はないか？」

その言葉に、誰もが懸念した。

つまり、彼は先ほど行動不能に追い込んだプライベーターティアの高射砲を使おう、と言ったのだ。

「最悪、俺の乗る高射砲が吹き飛ばされたとしても、連中は『歯ごたえのある標的』を倒したことで満足して帰るかもしれない！」

デイグルヴの案内で、除雪用のショベルカーを動かす。出てきた高射砲はキャタピラこそ傷ついていなかったが、二門あるうちの片方の砲塔が歪められていた。

「命中率は格段に下がるぞ」

デイグルヴの言うとおり、そもそも戦車というのは、隊列を組んで

行動するものである。それが対空兵器であればなおさらのことで、空一面に弾幕を張ることで、時速数百キロで動き回る戦闘ヘリを叩き落とすのだ。

ついでに言えば、もともと高射砲なんてものは、戦闘ヘリではなく軍用観測気球を狙い落とすために開発されたものである。

しかし、そもそも浜面は拳銃と車両しか扱いを知らない状態で、ライフルのように熱線などを放つ能力者たちと戦ってきた身である。ここに『空を飛び回る』という条件がついたところで、圧倒的に不利であるのは元からのこと、と割り切っていた。

しかし、高射砲は基本的に1人では動かせない。指揮官の下、車両の操縦士と砲塔を操作して砲撃する係は最低限必要だった。通常ならば、5人ほどは必要だ。

浜面としては、これ以上デイグルヴたちを危険に巻き込みたくなかったのであるが、そうはいかなくなった。

「話を聞いた連中が、みんな揃って戦いたいとか言い出さないか、そっちの方が心配だな」

しかし、デイグルヴはそんなことを言う。しかも、

「おい。それなら俺にも手伝わせろよ。空軍基地所属だが、転属前にはこういった対空兵器の訓練も受けていた」

そう言ったのは、凍傷で苦しんでいたロシア兵だった。

「何が同じロシア軍だ、くそつたれ」

見捨てられて当然の敵兵を助けた人物が、虫けらのように殺されそうになっている。それは、助けられた人からすれば、我慢ならないとだった。

この戦争の後、エリザリーナ独立国同盟に亡命してでも、この借りを返すことの方が、彼にとつては重要だったのだ。

「アンタは自分が思っているよりも、俺たちが巻き込まれるのを恐れているらしい。そういう顔をする人間を見殺しにはしたくない。そんな理由のためなら、正々堂々と戦える」

彼らは、共に敵から奪い取った武器である高射砲の方へ向かった。外国人傭兵部隊・プライベーターティアが操る攻撃ヘリが、まもなくやつ

て来る。

高射砲の戦闘となれば、自分たちに出番はない。必要以上にあの高射砲の中に詰めかけるのは、かえって操作の邪魔になるだろう。

そんなわけで、最愛も海鳥もフレンダも、攻撃ヘリが来る側とは集落の逆の場所で大人しく見張りをしているしかなくなってしまった。実際、この役目が必要なかどうかも不明だ。

滝壺の手伝いをしようかどうかとも考えるが、ここで万が一、ロシアや学園都市の部隊が反対側からこんにはしないとも限らない。特に、集落にある旧式の金属探知型レーダーでは、とてもではないが、学園都市製の軍用駆動鎧パワードスーツのステルス性能を上回ることができるとは思えなかった。

自分自身にそう言い聞かせて、彼女たちは退屈な待機状態にいた。まあ、彼女たちの能力では、先ほどの戦車のように対応することは不可能なのだ。海鳥ならば窒素爆槍ボンバーランスの噴射で、もしかすれば、攻撃のために高度を下げるヘリまで飛び上がることができるかもしれない。しかし、言うまでもなく自殺行為である。

「はあ、集落はあんな状況だというのに、私たちはここで何をやってんだ？」

海鳥は、ため息をついてそう言った。実のところ、見張りという名の厄介払いである。

「超仕方がありませんよ、黑夜。必要以上に人員を駆り出せば、逆に統率された動きは取りにくくなります」

「それは分かっただけだよ」

結局のところ、彼女たちがこのような役回りになっているのは、至極単純な理由——彼女たちが、まだ13歳であるためであった。

「まったく、あいつら。人を見た目だけで判断しやがって。あんなアホどもより、こっちは相当に修羅場を潜り抜けてんだぜ？」

「まあそうですね、こちらはあくまでも能力を前提とした戦闘が超中心になっています。そもそも、学園都市ではこんな針葉樹林の中で超

戦うことはありえませんが」

「私も、拳銃や小型携行ミサイルはへりに届きそうにないって訳よ」
「たしかに、そういったセオリーなら、あの集落の素人共のほうを知っているだろうけど」

海鳥は好き勝手言っているが、彼女からすれば、国によって多少迫害されるくらい、まだ楽だと思っているくらいである。まあ、イカれた科学者たちの手で10歳にも満たない子供が人格を無理矢理捻じ曲げられる、などということに比べれば、この戦争はまだ精神的に耐えられるものなのだった。

と、その時。

ゾワリ、と。

何か空気が変わった気がした。

いつの間にか、彼女たちの目の前に、3人の男が立っていた。

(こいつら……どこから現れやがった!?)

目の前に広がるのは、冬のロシアの雪原だ。そこに、隠れることができる遮蔽物など、ほとんどないはず。

しかし、確かにその男たち3人は目の前25メートルほどに現れた。

近代兵器で武装した軍人たちが闊歩する、このロシアの平原には似つかない恰好であった。修道服を着ていたのだ。もしかすると神父の類なのかもしれないが、宗教に疎い彼女たちにとって、両者の違いは分からなかった。

一見すれば、逃げ遅れたか、迷ってしまった教会の人に見える。
しかし。

(……なんだ、この違和感は)

最愛も海鳥もフレンドも……目の前の存在に、頭の中で警鐘が鳴るのを感じていた。長かったかつての『闇』の中での経験が、そう教え
ていた。

「……学園都市の人間でしょうか？」

その中の1人が、突然言葉を発した。

誰が言ったのか分からないほどに、ぼそりとした呟きのようなもの

だったが、それに最愛が答えた。

「超その通りですけれど？　それで、あなたたちは何者なんですか？」
只者じゃないことは、超分かりましたけれど。

一応、しらばっくれないように言い足して、最愛は彼らの出方を見る。

「学園都市……そうですか。私は、ローマ正教の者です」

その言葉に、最愛と海鳥の表情が一段と険しくなった。

ローマ正教。

表向き、魔術や『神の右席』及び『十二使徒』の存在については公表されていない。しかし『〇九三〇事件』の時に、学園都市を襲撃したのは『ローマ正教の一部の者の手で、科学的な能力開発を受けた者』であるという発表はされていた。もつとも、誰もが半信半疑であるが。

しかし、もしそうならば。

目の前にいる彼らが、まさかそうだというのであろうか、という結論を彼女たちは出す。

2人は同時に能力を発動した。

空気中の約78%を占める、原子番号7の元素Nの単体の分子、窒素。それを、攻撃性と防御性という対極の方法で、2人は制御する。

どのような武器を身に着けているのかは分からないが、彼女たちの前では個人で携帯できるレベルの近代兵器など、油断しなければ大した脅威ではない。

「つまり、私らとアンタは、敵同士ってわけだ」

「遠慮は、超不要ってわけですね」

その言葉を皮切りに、飛び出したのは、最強の能力者の一端を身に着けた2人だった。

2人とも、戦闘は近距離が基本になる。そのため、どのように敵が出てこようとも、間合いを詰めなければならぬ。

すると、1人……タデーは虚空から槍を取り出した。外部の人間が実際に使用した異能に彼女たちは驚いたが、しかしそこで足を止めるような真似はしない。

そもそも、彼女たちにとって物理的な槍など脅威に値しない。最愛の装甲には傷一つつかないし、海鳥の槍とはその長さも攻撃力も可愛いほどに低い。

そのはずだった。

しかし、そこから予想外の現象が起こる。

彼が振るう槍に合わせて、周囲の雪が解け、槍と化して襲いかかってきたのだ。その数、およそ10。

「黑夜！」

「大丈夫だ！」

最愛がその拳で次々と弾き飛ばし、海鳥の窒素の槍が雪の槍を斬りとばす。その合間を縫って投げられた爆薬が、敵の雪の壁に防がれる。

だが、それに続けてきたのは炎だった。業火が、巨人の腕のように振り回される。

「だあああああ！」

海鳥が叫びながら、窒素の槍を噴射する。そのブーストによって横に紅蓮の柱を回避すると共に、その勢いで最愛を少しでも遠くへ吹き飛ばす。

彼女たちは、学園都市の能力者の中でも、特に戦闘向き能力者である。さらに、学園都市の『闇』で生きてきた経験からしても、高い戦闘力を誇る。

ただし、それはあくまで学園都市という科学の街中で築き上げてきた実績であった。

ロシアの平原のような、樹木と小さな建物以外には、ほとんど何もない、ビルも地下もないこの空間において、彼女たちは非常に不利な状況にあることを悟る。

(ここにきて、経験不足が出てくるかよ！)

海鳥は心の内側で毒づきながらも、その体制を立て直す。

ここで、拳銃を持っていないことが悔やまれる。意外に思われるかもしれないが、亜音速で鉛の弾丸を打ち出すことができる銃器は、能力が際立つあの街でも強力な武器であることには変わらない。

しかし、暗部を卒業した時点で、全ての武器は失ってしまっていた。というよりも、常盤台中学からの監視の目を潜り抜けて、武器を持ち込むのが難しかったのだ。一時的に潜入するならまだしも、日常的に持ち続けるというのは困難である。

「どうやら、風の能力を使うようですね。であれば、炎が有効な手ですかね？」

誰が言ったのかは分からないが、彼らは3人とも炎を連続で繰り出してきた。

(くそっ)

不利なのは経験だけでなく、ステータスの面からもそうであったらしい。どういう理屈であるのかは分からないが、敵は火も雪も自在に操っている。

おまけに、そのひとつひとつが並の強能力者³以上であり、中には大能力者⁴クラスの攻撃力に達しているのも少なくない。

(どういう理屈だ！)

海鳥は声に出さずに叫んだ。

学園都市で開発される能力は、その下地に『自分だけの現実』^{パワソナルリアリテイ}というものが存在する。これはかなり定義が難しいのだが、砕けた感じでは言えば『思い込み』のようなものだ。

発火能力者は、自分の掌から炎が発生することを不思議に思ったりはしない。彼らにとっては、手足を動かすようなものなのだ。

そのため、各個人が持つ『自分だけの現実』によってその能力は決まる。多重能力者が理論上存在しないのはこのためだ。

木山晴生も複数の能力を使ったが、あれは『幻想御手』^{レベルアップバー}によって他人間の能力をいわば『借りた』ようなものである。

長くなってしまうが、結論を言えば『多重能力』はありえないのである。

神谷駿斗はこの例外にあてはまるかのように感じられるが、その根底にあるのは『能力を感知・創造・行使する』力であるため、そもそもベースが違うのだろう。

つまり、

(くっそ、やっぱり学園都市の発表は大嘘じゃねエか！)

だが、いつまでも毒づいている訳にもいかない。

海鳥は窒素の噴射で数多の攻撃をかくぐり、最愛の拳が敵の雪の槍を弾き飛ばす。だが、それを牽制にして、本命の炎の弾丸が雨あられと彼女たちに降り注いだ。

「超跳べえー！」

最愛の叫び声に呼応して跳んだ瞬間、雪原が爆発した。大地を覆う雪に灼熱の弾丸が降り注いだため、急激に気化した雪によって水蒸気爆発が起きたのだ。

しかも、

(……通常の水蒸気爆発じゃ、ない!?)

その爆発にすら、謎の指向性が存在していた。

未知の攻撃に彼女たちは、なされるがまま雪原に叩き付けられる。

「アメモエええええー！」

海鳥は地面に横たわったまま、両手を体の前に突き出した。

片手から生み出される窒素の槍は、どちらとも3メートルほどの大きさだ。しかし、両手から槍を生み出す際の窒素の気流を操ることによって、その槍を巨大な1本のものに合体させることもできる。

滑腔砲という武器がある。要するに砲身にライフリングが刻まれ、滑腔砲という武器なのであるが、学園都市のバワードスーツ駆動鎧にも一部で採用されている。

駆動鎧の場合、APFSDS(装弾筒付翼安定徹甲弾)などを装填するのだが、海鳥の攻撃はそれと同じ原理である。

すなわち、破壊対象に向けて高い圧力をかけて物体を切断する。

ドバツ！ という音が響くとともに、雪原が裂けた。

「はあ、はあっ……！」

肩で息をする海鳥の前へ、壁になるように最愛が立つ。

彼女たちは、巨大な窒素の槍が雪原を切り裂いた時にできた雪煙の中を見据えていた。

正直なところ、これ以上の戦闘続行は難しい。しかし、彼らをこの先に進ませると、浜面達が危険になる。

神経を研ぎ澄ませて次の攻撃を待ち構える彼女たちであったが、そこで声が聞こえた。

「すみませんが、これ以上時間がないようです。では、今度はお会いすることがないよう、祈っております」

その言葉を最後に、彼らの気配が消える。

視界が確保できた時には、そこにはただ何も無い雪原が広がっていた。

己の心を守るため

自分は生き残ってしまったのか。

学園都市の計画は失敗してしまったのか。

学園都市第一位の超能力者⁵は、世界レベルのグローバルな悪意に打ち勝つことすら可能だともいうのか。

ネットワークの中から悪意のある感情を優先的に拾い上げるミサカワースト番外個体には、いまいち信じられないことであつた。

だが、自分が生き残ってしまったているのは確かなようだ。そして、あの状態からこの個体を救い出すことが可能な人物など、1人しかない。

しばらくの間の沈黙は、どこか居心地の良いものであつた。

だが、その後聞こえた声は。

「ぎゃは」

どうしようもなく。

「ぎゃはは。駄目だ。駄目だ。くっははは」

絶望的で。

声の波が安定しない様子だつた。聞いているだけで危うさを感じさせる、壊れた人間の声。

「全部ぶっ壊してエ！ 片っ端から薙ぎ払いてエ！」

こんなものを作っている連中も。その恩恵を受けて喜んでいるような輩も。

全て、ただ、壊したい――。

爆発的に、全方位へ『黒い翼』が放出された。一對のその翼は、互いが互いを壊し合うように絡み合っていた。それが、一方通行アクセラレーターの心の内だつた。

これは、どこまで膨らむのだろうか。

一方通行から番外個体を感じていたのは、間違いではなかったのかもしれない。この少年にも、心の中にわずかに温かいものが流れていたのかもしれない。

しかし、わずかに残っていたその感情も、粉々に砕かれた。

制御を失った絶望的な暴力の嵐の行く末を考え、番外個体は震えるのを止めることができなかつた。

その時、上条当麻とレッサーは大型車に乗っていた。

だが、唐突に暴力の嵐がそこを襲う。

一方通行が能力を用いた投石は、それだけで大型車の後部を弾き飛ばした。

八つ当たりなのは分かっていた。これは、本来は一方通行が成し遂げるべき仕事だ。

だが、それでも彼は抑えきれなかつた。

この世界の理不尽によつて極限まで追い込まれ続けた男は、その暴力を一人の少年に向ける。

壊された大型車から出てきたのは、一人の少年だつた。かつて、2万人の体細胞クローンの少女を殺す『実験』を仲間と共に止めた少年だつた。

だが、今はその仲間はいない。

この世界で最も頼りになる親友も、クローンたちの元になったエレクトロマスター電撃使いも、怪物の一部を強引に植え付けられた2人の少女も、いない。

だが。

一方通行の背中から噴き出す『黒い翼』。

暴力の権化とも呼べるそれを、少年はその右手で吹き飛ばす。

「――」

その結果を見て、一方通行は唇を歪めた。

そこに感じたのは、怒りか、安堵か、納得か、理不尽か。その答えを本人すら出さないまま、彼はさらにその力を振るう。

横薙ぎの攻撃が、再びその右手に弾かれる。しかし、先ほどは完全に打ち消した黒翼を、今度は受け止めたものの、その姿勢をぐらりと

崩した。まるで、その威力に押されるかのように。

あの右手は、触れただけで学園都市第一位の超能力を打ち消す秘密がある。

しかし、ベクトル操作で投げたコンテナや生み出した烈風といったものは打ち消していなかった。

その基準が破壊力なのか、攻撃範囲なのか、あるいは能力によって直接生み出したものだけで、二次的な影響によるものは打ち消せないのか。

その答えは出ていなかったが、やるべきことは分かっていた。

（圧倒的な破壊力で、反撃する機会を与えずに粉々にしてやる……ッ！）

轟！ と空気が震動した。

一对の黒い翼は何重もの巨大な杭と化し、あらゆる角度から少年を襲う。

そして、少年が立っている場所が爆発した。

確実に潰した。

あの少年の武器は右手一本だけだ。分裂したとはいえ、ひとつだけでも生身の人間ならば潰すことができる破壊力を、あの翼は有している。8月の時と異なり、一応、何らかの特殊なグローブを左手に嵌めていたようだが、そんなものは気休めにもならない。

2か月半越しのリベンジは、勝利と同時に何らかの希望を一方通行アクセラレータから奪った。

そのはずだった。

なのに。

たちこめる雪煙の向こうに。

ゆらりと立つ人影があった。

泥まみれの服で。体のところどころを赤くにじませて。それでも、少年は2本の足で立っていた。

「は、はは……」

そのことに、一方通行は歓喜した。
理不尽は覆せる。

運命とやらは飛び越えることができる。

そのことを、まざまざと見せつけられた気分だった。
だから。

「ははははー！　ぎゃははははははははははははー！」

一方通行は、もはやその手を緩める気はなかった。
全ての黒翼が、上条当麻に降り注ぐ。

正体不明の敵に敗北を喫した最愛と海鳥であったが、敵が自ら引き下がってくれたが故に、五体満足のまま見張りを続けることができた。

その一方で、浜面の方は高射砲の中で待ち構えていた。

「……来やがった」

高射砲の上部ハッチから顔だけ出したデイグルヴが、双眼鏡を片手に呟いた。浜面が座っているのは、高射砲の前部にある、キヤタピラを操作する操縦席だ。彼に砲塔の取り扱いなど分かるわけがないが、キヤタピラならば、要するに建設重機などと基本は同じなのだ。ただ、サイズが違うだけである。

敵はレーダーに映った通り、攻撃ヘリの三機編隊だ。

「見たこともない機種だ。かなり大きい。もしかしたら、試作機のテストも兼ねているのかもしれない」

「ロシアは元々、大型ヘリの兵器開発に力を注いできた兵器開発の歴史を持っている」

機体によつては、輸送機と変わらない積載量を持つような輸送ヘリすらあるらしい。そういつたヘリを開発しようとすること自体、ロシアの特色であるそうさ。

しかし、大型ということとは、それだけ保有する火力も高いことくらい、素人の浜面にもわかる。

試作機のテストというのであれば、実戦に投入されてきた歴戦の機

体よりは現実性が低いかもしれない。そんな気休めの言葉もほどほどに、戦闘が始まった。

「……恐らくは最高速度重視のヒット&アウェイ型。小回りは利かないから、一直線に戦場を抜けた後にUターンして戻ってくると思う」つまり、すれ違いざまに互いに攻撃を叩き込むということだ。西部劇の撃ち合いだ、とグリツキンが言った。

バタタタツツ！ というローターが空気を叩く音を鳴らしながら、空の向こうから影が3つ近づいてくる。

「始めるぞー！」

敵が300メートルほどまで近づいたところで、砲口が火を噴いた。それに反応したヘリは、互いにバラバラの方向へ散っていく。

その中の一機の側面にオレンジ色の火花が散る。どうやら砲弾が掠めたようだが、それでも撃墜には至らなかった。

「大型だから、装甲も厚いつていうのか!?!」

「浜面、敵のターンだ！ 今度はミサイルが雨のように降ってくるぞー！」

その声に、浜面は一気にキャタピラを後退させた。キャタピラという言葉からはのろのろと遅い印象を受ける。だが、軍用の物は時速70キロは出せるように設計されているらしい、と浜面は速度メーターを見て理解する。

そして、敵の戦闘ヘリから攻撃が放たれた。

ヘリは当然ながら、目視でミサイルの照準を合わせるわけではない。センサーにより敵の金属反応を捉え、それをレーダーで映し出されたモニタ上に表示するのだ。

キャタピラ式の高射砲ごとき、亀に等しかった。

「あつは、粉々になれ！」

だが、パイロットの言葉通りにはならなかった。高射砲が後退したことにより、その射線上に針葉樹の太い幹が入ったからだ。ミサイルはそれに衝突し、爆発してしまった。

しかも、

「風穴が開いた意味を知れ！ グリツキン！」

グリツキンが、機銃の横に取り付けられたミサイルを、お返しとばかりに発射する。それは、今攻撃をしかけたヘリではなく、次の攻撃の準備をしかけていた、隣にいるヘリに命中した。地面に衝突すると同時に、大きな爆発が起こる。

「ミサイルじゃ阻まれる。機銃の雨を使ってハチの巢にしてやるぞ！」

パイロットの男は、同僚を撃墜されたものではなく、屈辱にまみれた怒りのままに叫ぶ。

二つの方向からの同時掃射。30ミリのガトリング砲ならば、針葉樹林など丸裸にしてそのまま攻撃できる。

そのはずだった。

「おい、どういふことだよ！」

しかし、彼は未だに苛立ちの声を上げる。レーダー上の金属反応が、先ほどよりも逆に増えているのだ。

それに答えたのは、同僚の無線通信だった。

『見ろ、乗用車だ！ あいつら、自分たちが狙われることを見越して、集落にあった乗用車を林の中に隠していたんだ！ だから俺たちは間違った金属反応に照準を合わせ——』

そこままで通信は途切れた。高射砲からの連射が、ヘリを撃墜したからだ。

オレンジ色の爆発を視界に収めた彼だったが、そこで一旦基地に帰還するという選択肢はなかった。頭に血が上っていたのも事実であるが、それだけではなかった。

彼の目の前にある針葉樹林は、先ほどの掃射で丸裸になっていたのだ。

「こ・ろ・すう」

遮蔽物を失った高射砲は、今度こそヘリからの攻撃を避けられない。

ドーヴァー海峡上では、イギリスとフランスの魔術師たちが戦っていた。

戦況は最初こそフランスが有利にしかけたが、イギリス第二王女キヤーリサと『騎士派』がそれを押し返した。

移動要塞グラストンベリ。

この空中要塞の周囲を、強引に一時的なイギリス領と定義することによって、騎士派はカーテナから『天使の力』の供給を受けることができる範囲を広げた。

しかし、

「……順調に勝ち進んでいると、敵の隠し玉の布石だと警戒してしまうのは職業柄ですかね」

騎士団長ナイトリーダーが考えているのは、フランスの軍師。

彼女は『首脳』や聖女サマなどと呼ばれていた。

『傾国の女』。

ジャンヌⅡダルク。マリーⅡアントワネット。フランスの歴史には、しばしば存在するだけで歴史を変えてしまった女性が登場する。そういった国なのだ。

彼女もまた、そのような存在だった。

当然ながら、フランスという国家にとっては目の上のたんこぶである。しかし、その力の大きさを考えると、処刑も簡単にはできないのだ。故に、フランスという国家はヴェルサイユの地下へ幽閉するという手段を採った。

それほどの脅威。

キヤーリサは、騎士団長に適切な調子で言った。

「追いつめられたと知れば、通常の軍事行動からはありえない暴挙に出る危険性もある」

それを防ぐには……その暴挙を起こされる暇を与えずに、一気に制圧してしまうのが理想的だ。

しかし。

『私が頭を使うことは分かっているのに、どうしてその可能性を考え

られないのでしょわかね』

ゴツ、と騎士団長の体が、莫大な衝撃によってなぎ倒される。

彼は『全英大陸』によつて莫大な力を得た騎士たちの中でも、最も強い実力を持つ。それは、かつてのクーデターの中で、『聖人』である神裂火織を一蹴したことから分かることだ。

奇襲とはいえ、そんな彼が簡単に弾き飛ばされる相手など、フランスには1人しかいない。

白いゆつたりとした華美なドレスに包まれたその肉体は、不健康な印象を与えるほどに華奢で白かった。しかし、その片手には赤や金を基調にした、派手な西洋剣が握られている。

「……実は、この私が動けること。これこそがフランスが張った最強の策ですよ?」

デュランダル。イタリア語読みでドウリンダナとも呼ばれる。

決して壊れず、そしてどんなに硬いものでも切り裂く。聖騎士ローランが所有していた、フランス最強の聖剣。

「——ゼロにするー!」

ナイトリーダー騎士団長が叫ぶ。どんな名剣をも鈍なまくらへと変える、ソーロルムの魔

術。それは、デュランダルから攻撃力というものを消し去った。

そう思われたが、

「甘い」

イギリスとフランスの歴史の境界は、実のところ非常に曖昧だ。イングランドの王ウィリアム一世が、元々フランスの貴族であったように。

「確か、あなたの術式は王家に関する武具には適用されないんですよ?」

「しま——ッ!?!」

フランスという国家の力を束ねたその一撃が、キャーリサを襲った。

カーテナーオリジナルは、クーデターの終結と共に失われた。カー

テナーセカンドは、女王エリザードの手にある。
ならば、キヤーリサに防御策はない。
しかし。

ガツキイイイイイ！ というかん高い音と共に。
第二王女は、確かにその斬撃を受け止める。

「なぜ？」

ぽつり、と『傾国の女』が呟いた。

キヤーリサの手に数センチの金属が握られていて、そこから飛び出した光の剣で、彼女の聖剣が受け止められていたのだ。

フランスの力の象徴。それに拮抗するその光は。

「イギリスとフランスの歴史は意外と曖昧。お前が言った台詞だし」
ジョウユーズ。

『神の子』を処刑した槍『ロンギヌス』の欠片を柄頭に埋め込んだ聖剣。
それと同じ。

「カーテナーセカンドの、欠片ですか？」

クーデターの際、カーテナーセカンドはカーテナーオリジナルと打ち合う中で、すり減ってしまった。

彼女が手にしているのは、その欠片。

由緒ある王族の手に罹れば、欠片だろうとそこから聖剣の力を引き出すことができる。

だからこそ、かつてキヤーリサはカーテナの破壊ではなく、クーデターによる王族の血の消滅を図ったのだから。

「実は、この私が動ける事。これが、我がイギリス最大の秘策よ」

一方通行は、アクセラレータ背中から生えた2本の漆黒の翼を振り下ろす。

ただし、今回は上条当麻ではなく、その手前にある地面を狙った。
轟音が炸裂し、土砂が高さ15メートル以上の津波となって少年に襲い掛かる。

確実に死んだ。

ちらりとそう思ったが、次の瞬間には土煙の中からひとつの影が飛び出してきた。

一方通行は、あの8月の夜の時以外にも思い出したことがあった。第三位に関するうわさには『超電磁砲を右手一本であしらう、正体不明の無能力者』という噂がある。それがあの少年だろう、ということとは簡単に予想がついた。

しかし、疑問がある。

超電磁砲は音速の3倍、雷撃の槍はそれ以上の速度を誇る。脊髄反射で右手を突き出したところで、間に合うものではない。しかも、それを向かってきた場所に合わせることは、普通に考えれば不可能だ。

だがここで、当麻との付き合いが長い駿斗も考えている結論を、一方通行は導き出した。

(前兆の感知)

たとえば超電磁砲の場合、その砲撃の前に周囲に電磁波と磁力がまき散らされる。周囲にあるクリップやドアノブ、砂鉄などの微弱な変化を読み取り弾道を予測するのだ。

雷撃の槍の場合には、右手を目の前に突き出しておくだけで、避雷針のようにそこに吸い込まれるのかもしれない。

砂鉄の剣の場合、磁力線の一部でも触れることができれば、そこから連鎖的に破壊できる。

重要なのは、勝つための方法があるかどうかではない。一種類のパターンに頼り切らず、その時その時の状況から最適解を導き出す、というスタンスだ。

それは、右手の特性を最大限に生かした戦法だろう。なにしろ他の能力とは異なり、一方通行のよう^{アクセラレータ}に数少ない『たったひとつであらゆる攻撃を防ぐことが可能な力』である。しかし、そこらへんの喧嘩慣れた無能力者^{レベル0}にあの右手を与えたところで、とても使いこなせるものではないはずだ。

おそらく、彼はそれを全て無意識で行っている。

周りに能力という存在がなければ、本人にすら認知されない。それ

でいて、最強の能力者すら殴り倒すことができる、学園都市最大の常識外れ。^{ジョーカー}

「おおおおおおおつつつつツツツ！」

黒い翼と右拳が交差し、わずかに速く届いた拳が、一方通行の体を殴り飛ばす。そのために黒翼の軌道がそれるが、その余波は右手の少年だけでなく一方通行をも吹き飛ばした。

起き上がった2人が、最短距離で突撃する。

「オマエはヒーローだろオが！ あの『実験』を拳ひとつで止められたほどのヒーローだろオが！ 俺みてエなクソツタレの悪党が、今まで立ちあがっていた方がおかしかったんだよ！」

一方通行自身、自分が何を言いたいのかもわからなかった。ただ、この激闘の中で、ふと2人の視線が地面に横たわる少女の方へ向けられた。

その後に、黒い翼が膨張した。100以上に分断されたそれが、ありとあらゆる方向から一斉に1人の無能力者^{レベル}へ叩き付けられる。

少年の体だけでなく、地面そのものが爆発した。

(これで死んだろ……。死ななきゃおかしいだろ)

そうでなければ、おかしかったのに。

「なんで今で死なねエンだよ、ヒーローツ!?」

それでも、少年は立っていた。

その服は引き裂かれていた。その手足からは、赤いものが滲んでいった。体中が泥に汚れ、決して少なくない怪我を負っていた。

それでも、その少年は2本の足でしっかりとその体を支えていた。

「……ヒーローなんか必要ねえだろ」

当麻は、絞り出すように言った。

善人？ 悪人？ そんな立場如きに、一体何の意味があるというのか。善悪など、その場にいる人々が感情の多数決で決める程度のものでしかない。この歴史において、多くの聖者や英雄が処刑されているのは、善悪というものがそれまでに曖昧なものであるからなのだ。

何より、上条当麻は聖者などではない。

だから、その程度のもものは当麻の原動力にはならなかった。彼が抱

いているのは、もつと簡単なものだ。

「目の前で泣いてほしくない人が泣いているんだ。助けて、つて一言を言うこともできずに、唇をかんで耐えている人がいるんだ！」

それだけで十分なのだ。決して、特別なポジションなどいらな
い。

たとえ、かつて疫病神の烙印を押された少年だろうが、自分自身が何者かも分からずにいた迷い人だろうが、かつて闇の中にその身を浸していた少女だろうが。

自分の想いだけで動いたとしても、いいはずだ。その先に、みんなが笑うことができる結末を求めても、いいはずだ。

「お前自身はどうしたいんだよ！ たいして知りもしない人間を勝手に持ち上げて、そいつに一番大切なものを預けて、それで全部満足できるのかよ！」

その間にも、黒翼が振るわれ、爆音がまき散らされていた。

だが、上条当麻の進撃は止まらない。その右手で攻撃の一部を打ち消し、そのわずかな隙間に体をねじ込んで、さらに前へ前へと進んで行く。

その光景に、一方通行の背筋に寒いものが走った。彼は、少年の評価を間違えていたことに気が付く。

彼のその真価は、その右手ではなかった。隣にいた少年や少女などの仲間でもなかった。

ただ、少年は諦めなかった。

何があっても絶対に諦めずに敵に向かって突っ込んでくることこそが、最大の脅威であるということに、学園都市最強の超能力者^{レベル5}は初めて気がついた。

そういえば、と思い出す。あの時、最もあの少年のことを恐ろしいと感じたのは。

満身創痍の状態で、自分より華奢な少女に支えられないと立っていられなくなっている。それでも立ち上がって、その拳を握ってきた瞬間ではなかったか。

「このままお前の手で守り続けるのか、他人に全部預けて逃げるのか、

それとも俺の手を借りて協力してほしいのか！」
拳が、かつてないほど強く握られる。

「傲慢だろうがなんだろうが、お前自身が胸を張れるものを自分で選んでみるよ！」

そもそも。

アクセラレータ一方通行が『悪党』にならなければならない理由など、なにひとつとしてなかった。本当に大切なものを守るためには、善も悪も関係ないのだ。それならば、彼はその背中を追いかけているつもりで、異なる方向へ向かっていたのかもしれない。

顔面への衝撃の後、後ろ向きに雪の上へ倒れ込みながら、一方通行の心の中にわだかたまっていた幻想が、壊れていくのを感じた。

当麻はしばらくすると、ラストオーダーレッサーと共にその場から立ち去った。打ち止めの頭を右手で触れ、なんらかの影響を受けているであろう元凶を少しでも取り除くと、彼の下にひとつ、メモ書きを残しておいた。

Index—Librorum—Prohibitorum—
禁書目録、と。

視界を遮っていた針葉樹の壁は失われてしまった。それはすなわち、高射砲が戦闘ヘリの攻撃から逃げる術を失ったことを意味していた。

西部劇のような、正真正銘、真っ向からの撃ち合い。しかし、浜面達が駆る高射砲に比べて、上空を闊歩する戦闘ヘリはあまりにも有利だった。

必死にキヤタピラを操作する浜面をあざ笑うかのように、ヘリは正確にその軌道を合わせてきた。

機銃はまともに当たらない。地对空ミサイルは、打ったところで回避されるのが目に見えている。

回避はできない。

反撃もできない。

「おおおおおおおおおおおおおッッッ！」

……おしまいだ。

思わず滝壺の名前を叫んだその時、甲高い音が鳴り響いた。分厚い金属板を、武器が貫通する音だ。

ただし、それでも浜面たちは死んでいなかった。

なぜなら武器に貫かれたのは、高射砲ではなく戦闘ヘリの方だったからだ。

「……は？」

戦闘ヘリの側面に、巨大な剣が突き刺さるのを見て、浜面の口から、思わず間の抜けた声が出る。全長3.5メートルもの大剣の側面に書かれたAscalonという文字が、やたらと目についた。

常識外れの光景は、その後にも続いた。地上からは20メートル以上離れた上空を飛んでいた戦闘ヘリに、地面から跳んだ人間が飛びついたので。

棒高跳びの世界記録でも6メートル越えだということにも関わらず、青系の衣装をまとった大男はそれをいとも簡単に成し遂げた。

そしてそのまま空中で大剣のグリップを掴むと、ハンマーのように空の王者を振り回し、地に墜とす。

「……いわれなき暴虐から人々を守り、流れる必要のない涙を止めるために、敵の武器を奪いながら全力で戦う姿勢は見事である」

炎の中から、低い男の声が響いてきた。流暢な英語だった。

そして、次の瞬間には炎が吹き散らされた。声の主は、周囲に不自然に水の塊を漂わせながら、浜面たちがいる高射砲の方へ語り掛ける。

「詳しい事情は分からぬが、この後方のアックア、背熱ながら助力させてもらおうか」

その頃、学園都市の戦闘機のパイロットと、イギリスの第二王女

キヤリーリサは、奇しくも同じ言葉を口にしていた。

「クレムリン・レポート」

あるいは『細菌の壁』。

空気感染だけではなく、皮膚上からも人の体内に侵入する細菌兵器だった。

兵器であるため、当然ながら侵入した人や動物の息の根を止めるものだ。これは、その高架に加えて油分を分解する効果を併せ持っているため、対BC兵器用のマスクやダクトのフィルターに穴を空けることができる。

そんな恐ろしい兵器の使用目的は、核兵器発射施設の防衛だった。『当然、施設で働いているロシア軍の人間や、周囲で普通に暮らしている民間人に避難勧告を送ることはない。各発射施設の安全確保のみを優先したマニュアルだからな』

対応したワクチンもなく、熱処理などに対しても高い耐性を持つ。殺菌するためには、極めて高い濃度のオゾンを用いる必要があるが、そんなものを感染した人々に使用できるわけがない。

そのことに、ロシア空軍のパイロット・エカリエーリヤは、操縦桿を握る両手を震わせた。

「敵国の言葉だ、そんなものが信用できるか！」

『そう言うと思った。だから用意もしておいたよ』

近頃の戦闘機はアナログな針のメーターではなく、複数のデジタルモニターで、様々な計器からの情報を多角的に映し出せるようになっている。

その中のひとつが強引にポートを開放させられ、情報を映し出していたのだ。

その画面に表示された数値や文章に、エカリエーリヤは自分の心臓が驚掴みにされるかのような感覚を覚えた。

『どう判断する？ お前たちの上層部は、本当にロシアの人々を守ってくれると思っているのか？』

一方で、イギリスの第二王女とフランスの聖女もまた、互いに聖剣を振るいながらも言葉を交わしていた。

「……何ですって?」

「わざわざ、クレムリン・レポートを自分の目で見るまでは信じない、などというつまらない台詞を吐くつもりか?」

両者の間で力が爆発を起こし、10メートルほどの間が空いた。

だが、フランスはローマ正教の庇護によって成長してきた経緯がある。そのため、彼らからの命令を反故にする訳にもいかなかった。

「貴女だって、自国の民を守るためにクーデターを起こし、ヨーロッパの民を駆逐しようとしたでしょう」

「それが必要な分ならね」

キヤーリサは、あつさりとする過去の過ちを認めた。

「だが、私は私の民を守るのに必要のない人員を殺害する気はないの」

ローマ正教の庇護? それは本当にフランスが望むような盾だったのだろうか。実際には、ローマ正教からの圧力によって、起こす必要のない戦争を起こし、自国の民を窮地に立たせているのではないだろうか。

そのことを指摘された『傾国の女』はわずかに黙った。そもそも、ヨーロッパの中で本格的な魔術攻撃をイギリスに対して仕掛けているのは、フランスだけなのである。

「さーどーする。私が己の宿敵と定めたフランスは、この程度のくだらない存在だったの?」

第三次世界大戦の戦場が、新たな状況に向けて動いて行く中で、さらにそこへ新たな人々が飛び込もうとしていた。

たとえば、第四位の超能力者^{レベル5}。

「……たーのしみだねー、はーまづらあー」

他には、^{イマジネブレレイカー}幻想殺し確保のために編成された特殊部隊を潰した、電撃の超能力者。

「ロシアまで行ってちょうだい。本来通りの仕事をしてくれれば褒めてあげる」

そして、人ならざるものまで。

「さて、どうする」

学園都市のどこかで、エイワスは目の前の存在に対して言った。

『彼女』は、一見して人のようでありながら、その正体は学園都市の能力者たちが形作るA I M拡散力場の集合体であった。

風切氷華。

しかし、今の彼女はいつものおどおどとした様子はなく、その瞳には力強い芯があった。

「大天使『神の力』^{ガブリエル}。いや、不完全性を個性として認めるならば、ミィシャークロイツェフと呼んであげべきか。一度蹂躪が始まれば、あの地にいる全ての人々に惨劇が訪れるだろう」

「だから、私に戦えっていうんですか」

「それもまた、興味深い選択肢のひとつだ。もっとも、君にはそれを選ばなくてはならないという義務もないが」

能力者たちのA I M拡散力場にその存在を保っている彼らは、基本的にこの街が『現出（厳密には違うが）』に適した場所ではある。しかし、世界各地にいる妹達^{シスターズ}を媒介にして、A I M拡散力場に指向性を与えてしまえば、ロシアの深部まで届かせることは可能だった。

「さて、どうする?」

「あなたは、どうするんですか?」

「何も」

エイワスは、興味なさげにそう言った。

これが、学園都市統括理事長アレキスター・クロウリーとの、決定的な違い。

何か大きな目的のために、繊細な計画をひとつひとつ積み上げていく者と、指先ひとつで世界を滅ぼすほどの力を持っていながら、興味と気まぐれでしか動けない者は、はたしてどちらが恐ろしいのだろうか。

「言っても良い。ただし、私の『友達』には手を出さないでください」
「興味が沸かなかったならば、いくらでも」

「……手を出せば、たとえ『共食い』になっても、私はあなたの敵に回ります」

エイワスは微かに笑った。

「それは逆に、私の興味を惹きつけかねない台詞だぞ？」

エリザリーナ独立国同盟に入る車列の中の一台区、当麻とレッサーは乗り込んだ。

「……そうだよな。勝手にグズグズ悩みやがって。一方通行に偉そうアクセラレーターなこと言えた義理かよ」

当麻はしっかりと前を見据えて、自分自身を殴り飛ばすかのような勢いで、笑いながらこう続けた。

「何が理由だ、何が正当性だ。そんなもん、欠片も必要ねえじゃねえか！」

そう。

泣いている女の子がいる。インデックスが、いつも通りの笑顔を浮かべることができずに、苦しんでいる。

人が立ち上がるには、その事実だけで十分だ。

正しいからじゃない。助けなければならぬとか、そういうルールが存在するわけでもない。

助けない。

ただ、その気持ちだけで動くのが彼ら『偽善使い』フォックスワードなのだから。

その思いを再確認した少年は、再び拳を強く握りしめた。

得体のしれない何か

ロシアの白く染まった雪原の中に、爆音が鳴り響いていた。

音源は、目の前にあるライベーターテアの駐屯基地。真っ白な雪景色を遮るかのようには、その中から黒い煙が立ち上っていた。

当然ながら、その中にいた兵力は二度にわたる集落への襲撃2回に用いられたものよりも、はるかに多いはずだ。

対して、駐屯基地を蹂躪している兵力は、非常に少なかった。いや、兵力と呼んでいいものかどうかとも分からない。

何しろ、蹂躪劇を行っているのは、巨大すぎる剣を持った1人の傭兵なのだから。

彼とは、ここに来るまでの間に、少なからず言葉を交わしていた。しかし、白人の彼がその風貌に反して流暢な日本語を操っていたのは対照的に、そこから得られた情報はあまりにも少なかった。いや、理解できなかったのである。

聖人や魔術だなんだ、と言われても、浜面に分かるわけがないだろう。

分かっているのは、男はアックアと呼ばれていること。超能力とは異なる、何らかの力を持っていること。そして、そもそも初めからプライベーターテアの基地に強襲をかけるつもりであったこと。

(……ふざけてんのか。どんな方式か知らねえが、ウチの超能力者^{レベル5}だつてあんなに一方的にことが進むかどうか分からねえぞ)

彼が剣を振るうだけで、数十トンの雪が溶け、水の塊と化して戦車や装甲車へ襲い掛かっていった。砲弾やミサイルの雨には水の槍が片っ端から迎撃に向かい、敵地の中央で球状に爆発した水蒸気が、敵の要塞を嵐の中のビニール傘のように切り裂いていく。

天災。そう呼んだ方が相応しいかもしれない、と思える光景であった。

「何だ、ありや……あれが、学園都市で開発している超能力者つてやつか……？」

違う、と浜面は思った。

駆逐。排除。討伐。

戦闘という言葉よりは、その呼び方の方がふさわしいその光景は、20分ほどで終了した。

「……ひとまずは、といった所であるか。腐っても大国、人員などすぐに補充されそうなものではあるが」

いつの間にかそばに現れた男は、大剣を担ぎながら抑揚のない声でそう言った。先ほどまで双眼鏡で覗かなければならない距離にいたにも拘わらず、彼は息を切らした様子もなく一瞬で移動してみせた。(どうなつてんだクソ……)

「もう一度訊くけどよ、アンタ、一体何者なんだ」

「後方のアックア。傭兵崩れのごろつきである」

本人は真面目に答えているようだが、一向に答えになつていなかった。雪を水に変えて操っていたところから、水流操作系(ハイドロハンド)の能力者であることを考えたが、それでは異常な身体能力の説明がつかない。体内の水分を操ったところで、内圧に弱い人体が耐えられる以上の力はないからだ。

つまり、この男は『学園都市で開発されている科学的な能力』とは別の『何か』を使っているともいうのだろうか。

「浜面」

すると、そこで高射砲の車内から声がかかった。グリッキンが、無線の電波を拾ったことを報告したのだ。

双眼鏡を覗くと、その正体はすぐに分かった。何しろ、戦車隊の中パワードスーツに駆動鎧の影があつたからだ。

学園都市。

(……『表』の一般兵みたいだな。俺たちみたいに、暗部が関わっているってわけじゃなさそうだ)

もちろん、暗部の人間が一般兵の装備を使っているという可能性もあったが、浜面は自分の経験から来る嗅覚でそれを否定した。同じ穴の貉であれば、それとなく感じられるものなのだ。

「どうする。蹴散らすか」

アックアは、大きすぎる剣を担いだままそう言った。彼ならば、確

かにそれは簡単であろう。

しかし、浜面は首を横に振った。

「……いいや、アンタの目的が何かは知らねえが、あの集落を守るってだけなら、このまま抵抗しない方がいい」

アックアの戦闘能力は驚異的の一言に尽きるが、彼の体はあくまでもひとつだけだ。どれほど高速で移動できたところで、複数の場所を同時に責められたら、勝てはしても被害が出る。

それならば、逆に彼らを歓迎して場所を提供することで、ついでにこの集落も守ってもらうことができる。通常の軍隊ならば使い捨てにされる可能性が高いが、学園都市ならばその心配もあまり要らない。

そんな浜面の説明に、アックアもふんと鼻を鳴らしてその意見を認めめた。

「浜面、お前はその学園都市から追われているんじゃないのか」

「……仕方ねえさ」

デイグルヴの言葉に、浜面はそう返した。

あの集落は、確かに居心地がいい場所だった。突然やってきた2人の日本人を気遣ってくれた。だが『交渉材料』が見つかるまでは、これからもやってくる学園都市には、絶対に捕まるわけにはいかないのだ。

今なら、浜面と滝壺のことを彼らが把握している可能性は低い。しかし、高性能センサーでこの集落を走査し始めたら、すぐに見つかってしまう。

だから、すぐにここから離れる必要があった。それに、ここにも滝壺の容体が改善するわけではない。

最後に、浜面はアックアと向かい合った。

「言い忘れてた」

「何であるか」

「ありがとう。アンタが来てくれたから、俺も、集落の連中も、俺が惚れてる女も、みんな死なずに済んだ。……いつか礼は返させてもらおうぜ」

浜面は、アックアと別れた後に、集落の近くまで高射砲を走らせた。高射砲から降りて彼女の言葉を叫ぶと、3人の少女が滝壺を抱えてきた。

「浜面、超大丈夫でしたか!？」

「まあな、滝壺は大丈夫か？」

「先ほどまでのままってところだ。悪化はしてねえが、改善の兆しもねえな。私たちも襲撃を受けはしたが、向こうから引き下がっていった」

「まあ結局、私たちが浜面に心配される必要はないって訳よ」

例の、ローマ正教が秘密裏に開発したって言う能力者たちだ、という海鳥の言葉に、浜面は肝が冷える思いがした。

「はまづらこそ、また生きててよかった」

「悪い。ちよつと面倒なことになっちまった」

「それでも、方針は超立ちました。エリザリーナ独立国同盟を超利用します」

最愛が言うには、この近くにはロシアとの国境が存在するらしい。そこまで逃げる事ができれば、学園都市の連中は攻め込む口実を失うはずだ。現在、学園都市が戦争をしているのは、ロシアなのだから。そうすれば、一度彼らをかく乱することができるはずだ。その上で、再びロシアへと戻って再び交渉材料を探す。

滝壺の体を浜面が背負い、最愛と海鳥がその後を歩き始める。すると、集落の中の1人の老人が、何か光るものを投げてよこした。

車の鍵だ。

「集落の外れに止めてある。青い4WDの鍵だって」

「いや、困る」

これでは、彼らが学園都市から逃げている浜面たちを助けたことになつてしまう。

「だったら、鍵を使わずに動かせばいいってさ。盗まれたことにするみたい」

「言ってくれるぜ。高性能マイクや精神感応テレパスで、この会話を聞かれないたらどうするつもりなんだ」

そう言いながらも、浜面はありがたく使わせてもらうことにした。
4WDに向かつて歩きながら、浜面は少女たちに呟いた。

「……情けねえよな。結局、中途半端に放り出すのが最良の選択なんてよ」

「はまづらは、今も私のために戦っている。だから情けなくなんかない」

その滝壺の言葉に背を押されるように、浜面はしつかりと雪原を踏みしめて車の下へ向かう。

狭い4WDの中に無理矢理6人の体を押し込めて、彼らは学園都市の追手からエリザリーナ独立国同盟へと逃げる。

元は砦か何からしい、石でできた建築物の一室にアクセラレーター一方通行はいた。

地震などが多い日本の木造建築ではめったにない、数百年前の建築物。そこに平然と現代機器が導入されているその光景は、多くの日本人にとって違和感を抱くものだった。

不思議な右手を持つ無能力者レベルの少年との戦闘の最後に気を失った後、いつの間にかエリザリーナ独立国同盟のこの施設の中に運び込まれていたのだ。どうやら、彼が話をつけておいてくれたらしい。

度重なる戦闘で消耗したバッテリーを充電すると、彼は最後に手に入れた羊皮紙の方へ意識を向けた。

その中身は、オカルトじみた内容の記号などだった。しかし、ラテン語で書かれたそれは、ところどころにラテン語で注釈が書かれており、見た目の印象に反してその内容の重要さが表されているようでもあった。

「……分かるのか？」

一方通行が睨んでいる紙を見ていたロシア兵に尋ねると、彼は一方通行をまじまじと見つめながら「日本人、だよな？」と言葉を返してきた。

「何人に見える？」

質問に質問で返された言葉に対し、一方通行はさらに質問を返す。

すると、さすがに彼がイライラしている様子が伝わったらしい。

「分かるのか？」

「いいや……」

一方通行が指さした羊皮紙を見て、兵士は首を横に振った。

「ただ、これは魔術の変換条件みたいなものリストのようだ」

ローマ正教式の術式をロシア正教式の規格で実行する方法を指しているらしいが、具体的な術式の効果までは分からない。自分は、呪文を唱えて掌から炎が出せるわけではないからな、と彼は懐に持つ手榴弾を指して自嘲気味に言った。

しかし、一步通行は眉をひそめた。

この白人の兵士は、さつきから何を言っている？

魔術？ 術式？ ローマ正教式？ ロシア正教式？ 呪文を唱えて掌から炎？

それが単なる精神論や宗教の話ではないことが、ロシア兵の話し方から分かることこそが、彼を余計に混乱させていた。この男は、人に肉料理にワインを使う方法について話すかのように、『現実的に使用できる手段』として話しているのだ。

エイワスは『ロシアに行け』と言った。

あの無能力者は『Index—Librorum—Prohibitorum』というメモを残した。

これは、今までのものを一直線につなげる『何か』になり得るのだろうか？

「……エリザリーナってのは？」

「魔術師……いや、魔導士だったかな。個人で使うより後進を育てることに重点を置くのは、そういう風に呼ばれるらしい」

イギリス清教とかいう組織が恐ろしい猟犬を放ちそうだとか、遠方からの形の見えない呪を弾く防衛線だとか、再び一方通行を混乱する言葉が連続した。

「とにかく、そのエリザリーナって野郎なら、この羊皮紙を解読できる

「だな？」

「話ができればな。あの人は今、野戦病院のベッドの上だ」

ここまで来て、頼みの綱の人が人がけ人だった。

独立国同盟を離れて別のヒントを探す……という選択肢もあるにはあったが、一方通行は打ち止めの体調を慮つてその考えを打ち消した。
ラストオーダー

ならば、その眠り姫が起きるまでベッドの空きがあるうちに、打ち止めを少しでも休ませておきたい。

だから、一方通行はいきなり拳銃を抜くと、室内にいる男女の足を続けて撃ち抜いた。

「スパイだよ」

けだるそうな様子で、彼は口を開く。そして、銃撃で動かなくなつた男の体を蹴ると、確かにそこから小型マイクと録音・送信媒体が転がり出てきた。

白人の兵士は、慌てて他の人々の体を探る。すると、やはり同じようなものが次々に出てきた。どうやら、小型である代わりに通信範囲が狭い機器のようだ。つまり、中継するための兵士が外にいる。

一方通行は杖について基地の外へと向かう。

「騒ぎに気付いてインなら、逃走準備を始めんだろ。あるいは、玉碎覚悟で『ロシアのために』なる行動を起こすかもしれない」

宿代の代わりだ。一掃してやる。

そういう彼に向かって、兵士は慌てて訊いた。

「なぜ分かった？」

「細かいしぐさや特徴を観察すりゃあ、周りから浮いているやつは自然と見つかる」

そんなことを、当然のように彼は言う。

彼にとっては、この程度の『闇』はまだまだ薄味であると。

一方通行は、その名の通りの『地均し』を始めた。

ローマ正教暗部組織『神の右席』直属の下部組織『十二使徒』の3人は、自ら撤退していった。

戦闘の内容としては、五分五分とあったところである。そして、互いに切り札を伏せた状態のままだ。

「結局、タデーとジユダの使用術式の正体は、分からずじまいつてことか」

「はあ、と駿斗がため息をつく。

こうなったら、さつさとフィアンマかシメオンたちを探し回って、彼らの準備が終了する前に決着をつけた方が良さそうだ。もつとも、それができないから困っているのであるが。

しかし、駿斗の強み、すなわち幻想創造イマジネーションクリエイトの強みは、その名の通り『創造』にある。今は手元のない手札を、新たにつくりだして加えることができる力。

ならば、自分は彼らに適した切り札を創造することを考えるべきだろう。

「基本は高速近接戦闘……といたいたいところだが」

しかし、これは路地裏の喧嘩ではない。素人どうしの殴り合いならまだしも、敵は我流であろうとひとつの『型』を身に着けた猛者。

近接戦闘では分が悪いだろう。

そんなことを彼がユリヤに語ると、彼女も頷いて言った。

「あなたの力、である、幻想創造、というものは、知っての通り無限、の可能性に手が、届く力だと、私も思います」

しかし、

「ですが、あなた自身、はその力を、十全に使い、こなせていない、いや、どう使えばいい、のか分からない、ですか？」

「あ、ああ……」

自分の常日頃の懸念を、ピタリと言い当てられてしまった駿斗は、少しうろたえながらそう答える。どうにも、ユリヤという少女は、過程をすつとばして結論を突き詰める姿勢が強い気がする。話し方という意味でも、魔術の使い方という意味でも。

「ファイアンマは、当麻の右手と俺の力……幻想殺しについて、ファイアンマの『右腕』と同様に『未完成』だ、と言っていた。奴はローマ正教随一の実力者だ。まったく的外れのことを言っているという可能性は低いと思う」

すなわち、2つの力には『本来あるべき形』というものが存在するはずなのだ。だから、彼の思惑を推測するのであれば、そのことについてでも考えておく必要があった。

すると、ユリヤが不思議そうな顔をして言った。

「私はあなたを、今日初めて見たばかり、ですが」と、彼女は前置きをした上で、思いがけない言葉を放ってきた。

「そもそも、あなたは、本当に『魔術』と『超能力』の両方を使っているのでしょうか？」

その言葉に、駿斗の思考が一瞬固まった。

「え？ ……いや、だって、使っているだろ。魔術は見ての通りだし、能力を使用しているときには、魔力だの天使テレズの力だのといった力は、何も感じられなかったんだぜ？」

彼自身は、魔術を知る前から、そのような力を無意識のうちに感じ取ってはいた。しかし、それが明確に何かのエネルギーとなり得るものであると認識したのは、インデックスと出会ってからののだ。

そして、それを実際に運用しているのは、駿斗自身である。それを、簡単に否定されるのはいかなものなのか。

しかし、

「確かに、あなたは魔術、を使っています。しかし、超能力者、は魔術を使用できない、という原則に従えば、あなたが魔術を使える、こと自体、がおかしいことです」

「いや、それは確かにそうだけど。でも、俺が幻想創造イマジネーションクリエイトを使用して、幻想創造が魔術を使用するっていう、二段階構成だと思っていたんだが」

すなわち、駿斗が使用しているのはあくまでもその身に宿る『幻想

創造』であり、魔術を行使しているのは、幻想創造の力そのものである、という考えだ。

分かりにくい表現になってしまったが、例えるならば、駿斗は『幻想創造』というロボットのコントローラーを握っている状態であり、そのロボットが『魔術』という工具を使用している。そんなイメージを彼は持っていた。

だが、

「それだと魔術を使用する、上で必要な魔力、や天使テレズマの力を、その肉体、を媒介にして操作する、ことはできないはずです。ただでさえ、科学的な能力開発、を受けた体なので。他者に使用することを前提、とした治癒魔術、ならともかく、自分自身の肉体に作用さ、せる身体強化や高速移動術式は、通常的能力者、と同じように拒否反応、を起こすはず」

そう。

能力開発を受けた者が魔術を使用した場合、負荷を受けるのはその脳ではない。体内の血管や神経系といった、肉体の内臓器官全般に、莫大な負荷がかかるのだ。

ならば、駿斗が天使の力による身体強化を行った時点で、その負荷によって肉体が内側から傷つけられるような事態になつていなければならぬ。

しかし、そんなことは起きず、彼は普通に（ある意味では普通ではないが）身体強化と高速移動術式を使用している。

その事実を改めて指摘されて、駿斗の頭は混乱に陥った。

だが、聞いてみれば納得できる、というよりは簡単とも言える話だ。「そうすると……」

駿斗は混乱したまま、しかしそれでも自分の力について考える。

自分自身のことを。

「……俺は、本当に超能力開発を受けているのか？」

根本的な、そのことにすら疑問を抱いてしまう。

駿斗は比較的には優等生ではあるが、学問の分野においては天才という訳ではない。どちらかという秀才の類で、学園都市の学生の中

では『上の下』程度の学力でしかない。もつとも、これは超能力者^{レベル5}クラスの人々の演算能力が、常軌を逸しているということもあるが。

そのため、学園都市の能力開発に対する理解度も、あくまで一般学生の域を出ない。能力を行使することにおいては、恐らく最も長けているであろう。しかし、その理論的な部分には、理解が及んでいない。投薬だの暗示だのと言われたところで、その中身について分かっているわけではないのだ。

ならば、駿斗に対して能力開発を行う過程で何かしらの『細工』をすることで、能力開発をする『ふり』をして実際にはやらない、ということも可能だ。

(では、もしも仮に……俺が能力開発を受けていないのだとしたら)

ならば、駿斗が魔術を使うことができる理屈は通る。しかし、問題はどのようなにしてそのような時間^{カリキュラム}割りが考えられ、実行されてきたか、ということだ。

(中学の先生や、小萌先生たち高校の先生まで……いや、あの人たちが何かを知っている、ということはないはずだ)

さすがに、ここで身近な人たちを疑うのはためられる。というか、小萌先生たちが生徒を相手に隠し事をしているのは信じがたかった。

(そもそも、幻想^こ創造^れは学園都市の『暗部』と『魔術』の両方に精通している土御門にだって、正体が分からなかったものなんだ)

そうやって彼はひとまず自分を納得させると、改めて考察に取り掛かった。

仮説その1。純粋な『原石』すなわち超能力である可能性。あくまでも噂の範疇を出ないが、原石の中にはAIM拡散力場が存在しない人もいるらしい。そのため、駿斗の能力が学園都市の機材で計測できない理由も分かる。

しかし、それでは魔術を使用することができる理由について、先ほどのユリヤの指摘に対する有効な反論が存在しない。そのため、この仮説その1は保留。

仮説その2。『聖人』や『ワルキューレ』などといったものと同じ、

先天性の魔術的素質である可能性。要するに偶像崇拜の力が集まるような肉体的な特徴を持ち合わせていればいいので、これは分かりやすい答えである。

しかし『聖人』である神裂火織やアツクア、そして何より魔導書図書館であるインデックスが気づかないわけがない。そのため、この仮説その2は却下。

仮説その3。超能力でも魔術でもない、第3の力である、という可能性。それが何なのかが分からないのが問題なのだが、鳴護アリスのように、純粋な祈りが奇蹟という形で具現化したものであるという可能性はある。しかし、その場合には誰がどのような祈りを捧げたのかが分からないし、これ以上の考察が不可能になる——。

行き詰ってしまった。

ならば、と駿斗はもうひとつの切り口を考えてみる。

それはすなわち、上条当麻の右手、イマジンブレイカー幻想殺しについてだ。

それは、ありとあらゆる異能の力を打ち消す右手。本人の意思に係なく、超能力・魔術を問わず超常現象を打ち消すことが可能だ。

しかし、あくまでも触れているもの限定。さらに、ドラゴンブレス竜王の息吹のような破格の攻撃には、処理が追い付かないことがある。また、『女王艦隊』のようなブロック構造の魔術の場合、その一区画しか打ち消すことができない。

単純に考えると、幻想殺しは魔術を否定する役割を持っているかのように感じられる。しかし、『ブリテン・ザ・ハロウィン』の最後に言っていたフィアンマの言葉から考えると、それは魔術サイドのものであるということになる。

そして、それが『未完成』というのは、よく分からない。そもそも、成長するものなのか？

確かに、当麻はもつと強くなることができるとは、駿斗も思う。しかし、それはあくまでも戦闘経験が積み重なるという意味であって、幻想殺しが進化するという意味でない。

「あー……駄目だ、分からん。情報が足りなすぎる」

駿斗は、そこまで考えて思考を止めた。フィアンマを止めることに

成功すれば、いくらでも考え直す時間があるさ、と思い直し、今は『二使徒』の対策を急いだ方が良さそうだ。

……今までの経験から考えれば、フィアンマを止めたところで半月と経たずに、何かしらの戦いに巻き込まれるだろう、ということとを、駿斗は無意識のうちに無視していた。

浜面の駆る4WDには、日本国内の公道では使用が禁止されているスタッドタイヤが使われていたが、ロシアの分厚い平原ではあまり意味をなしていなかった。

しかし、それでも浜面は目いっぱいまでアクセルペダルを踏み込んでいた。

原因は、バックミラーに映る5機の駆動パワードスロット。戦隊ものの主人公よろしくチームを組んで迫ってくるが、雪原の上をスケートのように滑り、三段跳びのように跳躍しながら徐々にその距離を埋めてきていた。

「少しずつだが、距離が超詰まっています」

「分かっているよ！」

「エリザリーナ独立国同盟の国境まで、500メートルくらい。凌げる？」

応える暇はなかった。

駆動鎧が5機といえば『外』の戦車隊にとっては十分にオーバーキルの戦力である。そもそも、あいつらとまともに戦おうと向かい合った瞬間に、6人の体が爆散してもおかしくなかった。

横滑りを始めた4WDは、ついに国境手前の針葉樹林の中に突撃した。恐ろしいほどに太い幹を持った巨木が両脇を通り抜けていくが、その4WDを駆動鎧たちは、木々の間を滑ったり、時にはジャンプすらしながら巧みに追いかけてくる。単なる搭乗者の運動能力の増幅だけでなく、各種センサーによる知覚能力の向上と、コンピュータによる判断能力の補助なども行っているに違いない。

その時、ふわり、と車体が宙に浮いた。

「うわっ!？」

海鳥が、思わず声を上げる。地面のふくらみに合わせて、車体が跳躍してしまったのだ。

地面に着地した衝撃と共に、車が回転を始めた。

だが、最後に運は彼らに味方した。

国境のフェンスを引き裂きながら、20メートルほどではあるが確かにエリザリーナ独立国同盟の領土内に潜り込んだのだ。

これで、あくまでもロシアと戦争している学園都市は、エリザリーナ独立国同盟にいる浜面達には手を出せなくなった。

そのはずだった。

だが、

「嘘だろ……」

手出しできないはずの駆動鎧は、そのままこちらへと迫ってきていた。そして、その手に握られた巨大なハンドガンを、浜面の方へ向ける。コーヒーの缶が丸ごと入りそうな口径だ。銃弾ではなく、グレネードの類が込められているに違いない。

(忘れていた)

戦争は、スポーツでもゲームでもない。ルール違反だと叫んだところで、審判がやってきて止めてくれるわけではないのだ。

そんなこと、学園都市の裏路地で良く分かっていたはずだったのに。

浜面の喉が干上がるのを感じたその時、奇妙な音が響いた。花火が打ちあがるとき、夜空で爆発するのではなく、その前に響くような音だ。

そして、次の瞬間。

グワツ! と。

駆動鎧のいる場所が爆炎に包まれた。

油でラインを引いたかのように、不自然に広がる炎だった。それが、4、500メートルもの幅になって壁を作っていた。

「ナパーム……う？」

「いや、音からしてロケット砲な訳よ。中身は多分、液化爆薬」

普段から爆薬物を使っているだけあって、フレンダからすぐに答えが返ってきた。すると、最愛はドアを開けようとする。

「とにかく、このボロは捨てましょう。すぐに移動を超始めるべき……」

そこまで言いかけた次の瞬間、2人の少女が一斉に能力を発動した。窒素を最愛は体に纏い、海鳥はその手先から槍を生成する。

ゴン！ という音と共に、ボンネットの上に1人の影が落ちてきた。

「超久しぶりですね……アクセラレータ私たちの原型」

その言葉に、白髪赤目の最強の能力者は、チツ、と忌々しそうに舌を鳴らした。

「身内の中からスパイを探している最中に、余計な面倒事を持ち込みやがって。全て話せ。洗いざらいだ」

そのイラついた様子を見て、浜面とフレンダは少し震えあがり、3人の少女は肩をすくめた。

魔術師たち

「参ったわね」

野戦病院というよりは、歴史ある石造りの建物の中に医療器材だけを持ち込みました、という感じの建物だった。

ベッドの上にいる女性はあちこちに包帯を巻いていたが、それを差し引いても、スレンダーというよりは骨と皮しかなさそうに見えるほど痩せた肉体と、色白というよりは病的に青いといったほうがふさわしいほどに赤みのない肌は、不健康な感じを一層際立たせていた。

エリザリーナ。

独立国同盟がその名を冠している女性。

「……回復魔術をどうにかしたいなら、まず真つ先に私自身をどうにかしたい状況なのに」

「す、すみません」

「頭を下げる必要はないわよ。そもそも、私は休む必要はないと言っていたのに、側近の手で強引に緊急手術を受けさせられただけなのだから」

その中で、浜面は首を傾げた。

カイフクマジユツってなんだ？

(RPGみたいな回復魔術ってことか？ いや、でも医療関係だと

……開腹？ でも魔術ってなんだ、そんな専門用語でもあるのか？)

浜面が混乱しているその横で、最愛と海鳥もまた険しい顔つきをしていた。

「(魔術……つまり、オカルトの存在を肯定するようなことを、こいつはさらっと言いやがった)」

「(何も知らなければ、単なる迷信の一言で超済ませてしまうところですが……)」

なぜなら、彼女たちには思い当たる節があったからである。

「(……黒夜(私)の腕を取り戻したあれは、やはり魔術ということに(超)なるのでしょうか(だろうか)?)」

——そう。

彼女たちは、実際にその現場を見ている。

その時には、駿斗から魔法陣のことを全力でごまかされてしまっていたが、当然ながら疑問に思っていた。

つまり、

（駿斗兄ちゃんは、学園都市の『闇』に少し入り込んでしまっただけでなく、それとは別の『何か』にも超関わっている……）

（それが魔術ってことは、ほぼ確定だな。それならば、ありとあらゆる現象が起こせるということにも納得がいく）

少し誤解がありつつも、各々で納得がいく結論を出す2人の少女。「結論を言うわね」

一通り診たエリザリーナは、2人の患者を順に指さして言った。

「そっちのジャージの子は何かかなりそう。そっちの小さい子は難しそう。以上よ」

「……、」

そう言われても、打ち止めの保護者役である一方通行は、眉をピクリと動かしただけであった。

「魔術と言っても分からないわよね」

その言葉に一方通行を除く4人が首肯すると、エリザリーナは適当な調子で続けた。

それが実在するかはさておいて、昔から薬草や鉱物など、現代では毒物とされるものも含めて、それらを扱ったという伝承は数多く残っている。

その魔術や儀式に実際の効力があつたかどうかはさておき、そのよくなものを扱ってきた以上、少しずつ毒素を体に慣らしていく方法や、体内にたまった毒素を抜く方法は考えられてきた。

「ジャージの子と小さい子は、それぞれ症状が違う」

打ち止めは、エイワスが存在する限り、恒久的に毒素を注入され続けているような状態だ。そのため、一時的な対症療法では根本的な解決にはならない。

しかし、滝壺の場合には、あくまでもこれまでに服用してきた『体晶』が溜まっているだけである。そのため、『体晶』の成分である物質

を抜いてしまっただけでも、それなりに体調の改善が見込めるのであった。

その言葉に、浜面は思わず涙を浮かべながら滝壺の体を抱きしめ、それに戸惑いながらも滝壺もその背中に腕を回す。その様子を見て、フレンダも滝壺に明るく声をかけ、他の3人の表情も晴れた様子になった。

その一方で、学園都市最強の超能力者^{レベル5}は壁に背を預け、静かに腕を組んでいた。

ここでも、打ち止めを救うための手掛かりは見つからない。

ここに来るよりも前の彼であれば、激しい焦りと恐怖に身を焼かれていたか、あるいは地団駄を踏んで、何でもいから打ち止めの治療をやれと暴れていたかもしれない。

しかし今、彼の中で急速に何かが変わりつつあった。

彼は懐の羊皮紙を出してエリザリーナに読み解くことができるかどうかを訊き、そのまま立ち去った。

「当てはありそう？」

「なけりや見つける」

彼はそう言つてその場から立ち去ると、番外個体^{ミサカワースト}を探しに出た。これからの戦いの協力者には、もってこいだと思つたからだ。

一方は、学園都市によつてつくられた、最強の怪物。

一方は、クローンの少女たち全ての悪意を押し付けられた存在。

そんな最悪の2人は、これからの運命を覆すため、手を取つて戦いに出る。

そこは、何も無い雪原だった。

元々存在するもの自体が少ないのだが、そこに加えてファイアンマがいる施設の周囲にある建物が、徹底的に取り払われていた。それは、近づく者を速やかに発見し、ミサイルで迎撃するためのものであった。

その迎撃範囲の一手前ギリギリのところ、当麻は雪原の中にあ

る低い丘に空いた、直径2メートルほどの穴を覗き込んでいた。

「……あるもんだなあ」

これは、フィアンマ……というよりは、ロシア成教が用意した秘密基地である。

その中は壁際に一定間隔で電灯が並んでいたため、歩くのに困ることとはなかった。

50メートルも歩くと、貨物列車の発着駅に辿り着いたが、そこには誰もいなかった。当麻は金属製レールに手を触れてみるが、そこからはひやりとした感触が伝わってくる。

「振動は全然ないな。ディーゼルの匂いもしない」

それはすなわち、近くにはいない、ということだ。ひよっとしたら、もうすでに運ぶべきものは運んでしまった後なのかもしれない。

すると、ここから40キロ離れた場所まで移動しなければならない訳であるが。

「分かった、分かりました。私にひとつ提案があります」

レツサーは『鋼の手袋』を肩に担ぎ直しながら言う。

「おんぶしてください」

「ぶつとばすぞこの野郎」

そんなやり取りを交わしながらも、目的地に向かって歩き始めた2人であったが、その直後。

ゴッ！ という爆碎音と共に、前方の通路の雪でできた天井が崩落した。

あつという間に通路が塞がってしまった。それどころか、崩落はそのまま続けて当麻たちの下へ迫ってくる。

「ヤバイ！ とにかく出入口まで戻ろう！」

「言われなくてもそのつもりです！」

当麻の右手が、天井を支えていた魔術的なものを消してしまったのか。あるいは、フィアンマからの素敵なアトラクションか。

分からないまま、全力で駆け抜ける。

当然ながら崩落の方が早かった。しかし、もう巻き込まれる、というところで2人の体は出口の外へ飛び出した。

(た、助かった……?)

そう感じた次の瞬間、当麻は崩落の原因を目にすることとなった。

「学園都市の砲撃かよ！」

倒れたままのレッサーの襟首を掴み、横穴の入り口だった丘の斜面へ押し付けた。

周囲から五感の許容量を超えた光と音が、2人を襲った。未だに目と耳が正常にはたらいているのか疑わしくなるほどだった。

爆風に煽られた体は宙を舞い、当麻の意識が30秒以上も断絶した。

「レッ……サー……」

だが、傷ついた自分の体をいたわっている余裕もなかった。ギヤラギヤラギヤラギヤラ！ というキャタピラの重たい音が響いてきたからだ。

(学園都市の機甲部隊……！)

そこへ、ようやくロシア側からの砲撃が始まった。最初の攻撃で戦力を削がれてしまったのか、先ほどの爆撃に比べると心許ないが、それでも1発でも当麻の体は吹き飛ばされてしまう。

「……チャンスです！」

いつの間にか、間近にレッサーがいた。

当麻がいる場所の防衛に、ロシア軍が出てきた。それは、ファイアンマが自分で動きたくない理由があるからだ。

ならば、このどきどきに紛れて基地に向かうことができれば、一気にファイアンマの下まで行くことができる。

しかし、実際にやる方法が見当たらない。レッサーは学園都市の駆動鎧を奪うなどと提案したが、それはほとんど不可能だ。

学園都市の駆動鎧は、危険な作業だけでなく、警備員が能力者の犯罪や暴走を止めるための装備として(表向きは)開発されてきたもの

も多い。

当然ながら、超自然的な現象に対してエラーを起こしたりなどしない。生じた現象をありのままに捉え、そして正確に分析・判断を行い『対処』する。

「……レッサーツ！」

「(お褒めの言葉なら、ベッドの中で頭をなでなでしてもらいながら聞きますよ)」

当麻の制止の言葉も聞かずに、彼女は移動してしまった。

しかし、彼女の他にも懸念がある。

そもそも、フィアンマのいた場所には200人以上の魔術師がいたはずだ。

彼らを投入すれば、学園都市の軍勢も抑えることができる。いや、魔術という物理法則を超えた現象ならば、1人なら先ほども言ったように対処は可能であるが、複数の敵が一斉に不可解な現象を起こした場合、そのコンピュータがはじき出す答えが、最適解になる保証はない。

つまり、数をそろえていれば、十分にこの駆動鎧たちを押し返す力になるはずなのだ。

「(何でみすみす学園都市を招くようなやり方で『温存』する必要がある?)」

当麻はそう口にした。それは、あくまでも自分の心の中にある疑問を整理するための、単なる呟きであった。

だが、そこに答えがあった。

『ん? 決まっているだろう。重要な右腕を持ったお前を招くためだよ』

当麻の服の中。そこに、小麦粉でつくられた小さな人形があった。

エリザリーナ独立国同盟でフィアンマと対峙した時、フィアンマはその力を見せつけておきながら、サーシャ・クロイツェフだけを確保して引き下がった。しかし、彼の實力なら、そのまま当麻たちと戦っ

でもお釣りが来たであろうにも関わらず、だ。
泳がされていた。

そこに思い至った時には、地面からゴツ！ と震動が響いてきた。

ロシア兵を尋問して情報を聞き出した一方通行と番外個体は、食肉保存用の倉庫から出てきた。もともと、エリザリーナ独立国同盟に拷問部屋は存在しないらしい。

その代わりに、仲間のロシア兵の服をはぎ取って、その中にブロック状の牛肉を詰め、有刺鉄線で縛り付けた姿を、薄暗い倉庫で意識を戻した兵士に見せるのだ。そうすれば、兵士は服を着た牛肉ブロックの人形を、仲間の惨殺死体と思いこんでしまう。

「詐欺の手法は昔から変わらねエ。正常な判断能力を与える隙を奪うことだ」

「けけ。お優しいことで。打ち止めだの民間人だのならともかく、自分と敵対するプロ相手に、暴力を使わないでケリをつけるなんてのは、初めてじゃないの？」

「お嬢ちゃんにや刺激が少なくて物足りなかったか？」

「いいやあ。ミサカ、人を騙すの大好き☆」

しかし、そうやって聞き出した話の内容は、おかしなことばかりであった。

ロシア軍はこの大戦の乗じて、目の上のたんこぶだったエリザリーナ独立国同盟に対し、大規模な空爆を実行する予定だったはずだ。しかし、そこにあえてスパイを潜入させた理由が分からない。

「元々、撤退予定だったスパイたちは、数時間前に急きよ居残りを命じられた。しかも、それに合わせて追加のスパイまで潜ってきた始末だ」

「わお。まるでミサカたちがこの国にやってきたのに合わせたみたい」

そういう見方もできる。

しかし、それにしても彼らは簡単に術中にはまりすぎていた。つま

り、能力者という者に対する理解が、いくら外部の人間であるとはいえ不十分だったのだ。したがって、一方通行はもともと自分たちを狙ったわけではないと考えられる。

そして、彼らの任務は盗撮だったという。本格的な空爆の前に、施設内部から機密文書を持ち出し、所定の場所まで運ぶこと。具体的な指示は、モニタの向こうから逐次とばされる予定だった。

ならば、その指示をする予定だった誰かさんならば、この羊皮紙の解読方法を知っているのだろう。軍の施設を襲ってでも、その内容を吐かせる必要がある。

「ミサカ、そういう自分勝手な展開に、いろんなところが勃たちやいそう☆」

だが、そんな重要なやり取りをしているところで、一方通行の視界が大きく揺れた。

いや、彼の視界が揺れているのではない。

これは。

その現象に一番初めに気が付いたのは、フィレンツェの市民団体の男性だった。

歴史的な遺産を保護するため、古い教会の前で仲間たちと集まっていた。しかし、その守るべき教会から、突如として鐘が備え付けられた尖塔が抜き取られたのだ。

比喩ではなく、その尖塔は本当に宙を舞っていた。それを見た彼は、自分の常識の何かが壊れたことを感じた。

その時。

フランスのモンサンミシエル修道院から、巨大な尖塔が引き抜かれた。

その時。

イタリアの聖マリア教会から、複数の柱が抜き取られた。

その時。

インドの聖ヨセフ教会から、荘厳なパイプオルガンが飛び出した。

現在、地球上にいるローマ正教徒は20億人以上。その長い歴史の中で、各々の場所、各々の土地ではそれぞれの文化・風土に影響を受けながら、様々な個性を持つ建造物がつくられてきた。

その中でも、特に重要とされる部品が、一か所に集まる。すなわち『聖なる右』を持つ者の下へ。

ゴッ！ という爆音と共に、当麻の体が上昇した。その地面が、突如として宙に浮かんだのだ。割れた地面の境目の向こうで、レッサーがこちらを振り返って呆然としていた。

「なん、だ……ッ!？」

上昇する地面の上に乗っていたパワードスーツ駆動鎧や戦車が、そのまま下に落ちていくのが見えた。

辺りが白い霧に包まれ、空が青く変わった。

(雲の上に……出た!?)

当麻は周りを見渡した。

城のような『本体』が中央に存在し、四方へ長い橋が伸びていた。しかし、それは中央とはいっても、その形状はひとつの側だけが歪に長かった。進行方向を『前』とするならば『右』に当たる部分だけが。

含み笑いすら交えて、右方のフィアンマはこう告げた。

『では歓迎しようか。俺様の城、「ベツヘレムの星」へ』

半径数十キロにも及ぶ巨大な物体が宙に浮かんでいる。下手をすると、学園都市がそのまま宙に浮かんでいるようなものかもしれない。なかった。

当然ながら、このような巨大な物体が宙に浮かんでいたことなど、神話の中ではないだろう。

史上初、ということ。歴史が塗り替えられた、ということ。

当麻は、その事実をめまいがする思いがした。しかし、心は折れなかった。

やるべきことは変わらない。フィアンマを倒し、インデックスの遠隔制御霊装を破壊すること。

それを今一度確認すると、当麻は一度短く息を吐いて立ち上がった。

いきなり上空に投げ出されたため、高山病のような状態になってしまわないか不安であったが、その心配はなさそうだった。どうやら、この要塞は特殊な結界でも張られているのか、地上と同じ条件が整備されているらしい。そういえば、浮かび上がった時の雲の裂け方が不自然だった。要塞の周囲に、特殊なフィールドでも張られているのかもしれない。

適当な壁へ右手を押し当てると、オレンジ色の亀裂が走って周囲1メートル程度が砕けた。しかし、それ以上に崩壊は広がらず、そして砕けた破片は落下せずに元の場所へ戻り始める。

おそらくは『女王艦隊』と同じように、魔術的な構造がブロック状に別れているのだろう。その上、要塞には自動修復能力が備わっているようだ。

しかし、今までの経験からすれば、この手の再生を起こすための核が存在するはずだ。ステイルの『インケンティウス魔女狩りの王』におけるルーンのカードや、『女王艦隊』の旗艦『アドリア海の女王』におけるビージーオIIブゾーニのメノラーなどがその例である。

その時、ゴッ！ という爆音と共に、石の壁にガラスがはめられた窓の向こう側を、学園都市の超音速戦闘機が通り過ぎた。

その直後。

『必要なものは全て揃ったことだし、そろそろ脇役にはご退場願おうか』

右方のフィアンマは、静かにこう告げた。

『出撃だ、大天使「ガブリエル神の力」。前部吹き飛ばせ』

ドンツ！ と。

世界が夜へと転じた。

この星の空を彩る天の輝きを半回転させたのだ。当麻がこの大魔術を見るのは2度目であった。

アストロインハンド
天体制御。

『いいや、この場合はミーシャークロイツェフと呼んだ方が良いのかな？』

青き大天使が翼を振るうと、ロシアの空を席卷していた学園都市の無人・有人の戦闘機が数十機、まとめて吹き飛ばされていた。しかも、その先で水翼が途中で自壊し、その余波で山が一つ、丸ごと吹き飛ばされて行くのが見えた。

『科学サイドには色々と秘密兵器を開陳していただいたからな。魔術サイドとしても、そろそろ本気を出させてもらおうか』

そう言ったフィアンマは、『神の力』に『羊皮紙』を回収するように命令を出した。

彼の手元には、魔導図書館にアクセスができる遠隔制御霊装がある。しかし、そこには『天使』や『神の右席』など、一部の知識が欠けている。

それを補うための羊皮紙だ。

ブワツ、と駿斗の全身から、嫌な汗が噴き出した。

「どうしましたっ……!?!」

怪訝な表情をしたユリヤが尋ねかけたところで、彼女の言葉が詰まった。なぜなら、彼らの頭上を聖遺跡の欠片が飛んで行ったからだ。

「魔術の秘匿も何もない……!」

魔術とは、一般的には秘密にされるべきものだ。しかし、それすらも気にしないという事は、フィアンマの行動がそれほどのものであるということを示していた。

駿斗は、遠見の魔術を編み出して、その様子を確認する。

「出来合いの魔術じゃあ、このくらいの距離が限界か……」

駿斗は、自分が映したものを見てそう呟いた。『幻想千眼』サウザンズアイは探知に特化した魔術であるため、遠見にはそこまで適していない。

「フィアンマは、世界中の霊装、を集めて『何か』をつくる、ということ、でしょうか」

「恐らくはな……もしもこれが世界各地で起こっているのだとしたら、それを集めてできるのは」

「神殿」

それは、神聖な領域となる。そこにいるだけで、特殊な儀式が進行したり、力が強化されたりするような場所になるのだ。

（このために、フィアンマは『十二使徒』や部下、ローマ正教を使ったのか……）

駿斗は納得し、ユリヤもまた、遠くの様子を確認したようで呆けた表情をしている。

「魔術の歴史、が変わる……」

彼女が思わずつぶやいたように、これは歴史に残ることとなるだろう。第三次世界大戦の中でも、最大級の衝撃的事件として。

世界初、ということ。

学園都市では毎年当たり前のように新技術が開発されているが、ここまでの規模のものはありません。何しろ、大きさ自体が学園都市に匹敵するほどのものだ。

そして、次の瞬間。

白銀の世界が夜へと塗り替えられた。

「な、なにが……これは、天使の力!?!」デレズマ

突如として生じた超常現象にユリヤは戸惑うが、駿斗はすぐに気が付いた。

「この感覚は、一度『知っている』」

「大天使『神の力』、だど……!?!」ガブリエル

「……まさか」

「ああ、そうだ。フィアンマの野郎、真正正銘の四大天使、それも後方を司るあの『神の力』を召喚しやがった。夏に起きた『御使墮し』エンゼルフォールの

時と同じ、いや、もしかするとそれ以上に純度が高いものを」

駿斗は事の大きさを改めて受け止めた上で、ユリヤに向き直った。

「ユリヤ」

彼は、雪の妖精のような少女に言った。

「君は、ここを離れて別にできることをしてくれ。俺は、これからあの天使を討ちに行く」

「——何言っている、んですか!?!」

彼女が、今までにないほどの大声を出した。

「自殺行為、です！ あれほどの力、では私の強引な『出沒』、でもどうにもなりません。ただ、虫を払う、かのように、蹴散らされます！」

「それでも、行くよ。当てがないわけではないし。それに」

駿斗はそこで言葉を区切ると、ユリヤにこう言った。

「やっぱり、ユリヤは『妖精』だったんだな」

「っ!?!」

ずっと気になっていた、彼女の特性。理論を無視し、過程をすっ飛ばしたような、強引な魔術。

しかし、それがお伽噺に出てくるような妖精であれば、話は別だ。彼女たちは『聖人』のように、存在そのものが魔術的な奇跡で成り立っているのだから。

特に決め手となったのは、転移だった。

「神出鬼没は『妖精』の特権だからな」

それが、彼女の特性。

十字教における『聖人』や、北欧における『ワルキューレ』のように、この世界には『生まれつき、肉体に魔術的な記号を持った人間』が存在する。

彼女もまた、そのうちのひとり。

「だから、ユリヤが戦力にならないか、というと違う。君のおかげで大いに助かったし、『十二使徒』と戦う上では、勝手だけど当てにしていた。でも」

あの天災に立ち向かわせるほど、駿斗は覚悟を決められてはいなかった。

「ようするに、俺の覚悟が足りない、ということなんだ。だから、すまないがここは下がって——」

その時。

2人は一斉に、雪の槍を放った。しかしそれは、土の壁に止められてしまい、敵に届くことはなかった。

「これは、随分と手荒い歓迎ですね」

「お前たちローマ正教には、いつも特別待遇を押し付けられてきたからな。たまには、俺の方からおもてなしをしてもいいだろう？」

シメオンの言葉に、駿斗は冗談交じりにそう答えた。しかし、その口調とは裏腹に、彼が抱く警戒心はこれまで以上のものであった。

ここで駿斗とユリヤを止められなければ、フィアンマの計画は大きく破綻する可能性がある。そんなわかりきったことを、『神の右席』の尖兵である『十二使徒』が許すはずがないのだ。

「Weng cheng 雪の翁よ。Дать решение с нега упрямыи ребенок 強情な子に吹雪の裁きを」

コオオ……と、この雪原に吹き付けるものよりも、さらに凍えるような吹雪が巻き起こった。それと同時に、彼女に雪のような半透明の羽衣が纏われる。

ロシアのお伽噺に登場する雪の精霊ジエド・マローズを軸にした、攻撃と庇護を同時に与える術式。従順を美德とし、強情な者へ裁きを与える魔術。

本来『神の力』が召喚されているときは、その周囲にある水は全てその配下に置かれてしまうのであるが、彼女は自分の『妖精』の特性をもって、ごまかしているようであった。他人のものを勝手に借りるのもまた、妖精の専売特許である。あと、吹雪が嵐と同じように、『水』と『風』の混合属性であるからかもしれない。

「駿斗さん」

「どうした？」

「……先ほどあなたは、私を『神の力』との戦い、から遠ざけようとしていた、ようですが……私にも、魔術師、としての矜持、というものがあります！」

彼女はそれだけ言うと、その杯に魔力を通した。コオオ！ と音を立

て、より一層強烈な冷気が吹き荒れた。
「ならば、ここで決着をつけましょう」
これ以上の言葉は、必要ななかった。

次の瞬間、2つの陣営の間で、互いの攻撃が衝突した。

空に輝くもの

御坂美琴は、学園都市製の超音速爆撃機H s B―02に乗り込んでいた。もともとの機体はとある少年を確保・場合によっては暗殺するための特殊部隊を乗せる予定であったのだが、彼らは現在、第二十三学区の格納庫に放置されている。

爆撃機であるためか、全長80メートルを超える巨体であるにもかかわらず、窓と座席がある場所は前方のコックピットしか存在しなかった。

美琴は携帯端末の画面を見せながら、

「とりあえず、ここまで近づいて。あとは私が勝手にパラシュートで降りる」

「……こ、こんなことをして、自分がどれほどのリスクを背負っているのか、理解しているのか?」

パイロットが口にしたその言葉に、こんなこと? と、美琴は端麗な眉をひそめた。

「アンタこそ、こんなことをしようとしていた自分を何とも思わない訳?」

プロの暗殺部隊を、一介の高校生に差し向けようとしていた。しかも、その方法は、ツンツン頭のほうを確保したうえで、彼を人質としてもう一方をあぶりだすという作戦になっていた。

別に、彼女は自分が善人だとは思っていない。あの街に生きる大人たちの、汚さというものも痛感している。

しかし、彼女は同時に、あの街にいる人々が全てどす黒いものではないことを知っている。

自分のせいで『実験』されていたにも関わらず、あのとときの呼びかけに答えてくれた妹達シスターズであるとか。『暗闇の五月計画』という非道な実験を受け、長い暗部暮らしを経験したにも関わらず、それでも懸命に光の中の生活になじもうとしている2人の少女だとか。幼いころに『才人工房』クロードリーで『妹達』に関して、辛い経験を覚えながらも、それでも影ながら自分の妹達を支えてくれる、憎き胸部装甲を持つ同級生

だとか。

その事実を否定できないのか、学園都市の『闇』に染まっているはずのパイロットは、その事実を鼻で笑って否定したりはしなかった。(……あーあ。こういうモードは私のガラじゃないんだけどな変なものに感染したか)

そう思いながら、美琴は頭をガシガシと掻いた。その直後だった。眼下の白い雲の下から、突如として巨大な『何か』が浮かび上がったのだ。街が丸ごとひとつ浮かんでいるような、常識を無視した光景。

(……何よ、あれ)

学園都市の科学技術は、『外』の人間にとっても常識外れのものであるが、その街で暮らしている彼女にすら、常識をまるつきり無視した光景にしか見えなかった。

しかも、

(う、そ……ッ!?)

その塊の端、石橋のような場所に、ツンツン頭の少年がいた……ように見えた。

しかし、美琴がその光景に衝撃を受けていることを気にしている余裕は、パイロットにはなかった。突然、自分が飛んでいる場所に巨大構造物が出現したため、ぶつからないように回避しなければならなかったからだ。

しかも、その変化は止まらない。

続けざまに、昼が夜へと変貌した。冗談ではなく、雲の上、上には何も遮るものがなく太陽の光が降り注いでいる光景だったものが、突如として青い月の輝く夜空へと変貌したのだ。

その夜のロシア上空の中に、青い光があった。

重力を無視して浮かぶ、人のようなシルエット。しかし、その背中には翼があることが分かった。一對ではない。クジャクのように、水晶のような翼が何本も背中から生えている。1メートル以下の小さなものから、100メートル以上はあろうかという長大なものまで、不均一なもの。

そのうちの一本が振るわれたとき。

「嘘でしょオイ!？」

明らかに、間合いの外にいたはずだった。にもかかわらず、H S B—02の胴体は真つ二つに割かれた。

彼女は、下で展開していた攻撃ヘリとの間に磁力をつなげ、なんとか軟着陸を試みる。

その姿を、彼女と瓜二つの顔を持つ少女が、カラシニコフ——世界的に有名なAK—47の派生型である、木と鉄を組み合わせたライフル——をその体に抱えながら見ていた。

巨大な震動は、エリザリーナ独立国同盟の野戦病院にも襲いかかった。

その時、滝壺は応急用のストレッチャーの上で、酸素吸引用マスクのマスクをつけられていた。そのマスクから延びるチューブにつながっているのは、酸素ボンベではなく、複数の乾燥した香のような植物であったが。

浜面にはさっぱり分からないが、とりあえずこれで毒素を取り除くことができるらしい。

そこへ激震が襲った。

「滝壺!」

悲鳴のような声を上げてジャージ姿の少女の下へ駆け寄ろうとする浜面を、エリザリーナは片手で制した。

彼女は滝壺の口を塞いでいた酸素マスクを取ると、

「問題はないわ。処置は完了。これで、この子の体内にあった毒物は除かれた」

あまりにもあつさりと言われたその言葉に、浜面も最愛も海鳥もフレンダも霧丘も……誰もその実感がわかかなかった。

学園都市の時代の最先端に行く医療でさえ、専門の機関でなければ治療を受けられないであろう症状。

それが、こんなにもあつさりと解決できてしまったのだ。

エリザリーナが言っていた通り、これはあくまでも体内の毒素を取り除いただけに過ぎない。すでに毒に侵されてしまった部位に関しては、再び別の治療が必要になる。

その時、バタン！ と大きな音を立てて扉が開かれた。

顔を出したのは、アクセラレータ一方通行だ。

「どうか、したの？」

「どうかしたじゃねエぞー！」

彼は、疑問を投げかけた霧丘をギロリとにらみつけると、

「外の様子は確認したか!? どオなつてやがんだ、クソツタレが！」

「フィアンマね。まさか四界を揺るがすとは……」

この野戦病院はもともと砦として使用されていた場所であるので、窓はなかった。ゆえに、外で起きていることは把握してなかったのだ。

眉をひそめると、エリザリーナは一方通行と共に外の様子を確認するため、ドアの向こうへと消えていった。この砦は窓がないのだ。

浜面も気にはなったが、

「じゃあ、私たちが行くってわけよ」

「滝壺を、よろしく」

と、少女4人が気を利かせてくれたため、久しぶりに2人きりになった。

まずは、床に倒れたままの滝壺を、ストレッチャーの上に戻す。しかし、彼女には今までに感じていたような、泥の詰まった袋を持ち上げるかのような重さは感じなかった。彼女自身に意識が戻り、浜面が運びやすいように体重を移動させるだけの気配りが可能になったということだ。

「はまづら……?」

「大丈夫だ」

そう言った浜面の方が、安堵のあまりに体から力が抜けそうになった。

とりあえず、滝壺の体調がこれ以上に悪化することを防ぐことは可能になった。

ならば、これからは浜面達が仕掛ける番になる。
守りから、攻めの姿勢へ。

「お前はまだ病み上がりだ。ここで待っていてくれなくても……」
「はまづら」

滝壺は、遮るようにこう答えた。

「くちづけと平手打ち、どっちをすれば目が覚める？」

「そういうことを言われると、逆においていきたくなるよ」

浜面は、乱暴な手つきで彼女の頭をなでる。しかし、その時床に散らばった書類の中に、見覚えのあるものがあつた。

正確には、その書類の内容ではない。そもそも、浜面にロシア語は読めない。

見覚えがあつたのは、その書類に載っている写真だつた。

「……独立国同盟の加入希望地域と、その問題点について」

滝壺がその書類を読む。そこには、以下のような内容が書かれていた。

デイグルヴたちの集落は、エリザリーナ独立国同盟に接しているというだけで、ロシア軍に接收されそうになっていた。そのため、独立国同盟に加入を希望していたらしい。

しかし、この国の人々は国境のすぐそばで苦しんでいる人々を助けてくれないなかつた。

「集落や、そこに住んでいる人たちに問題があるわけじゃないみたい」
「どういうことだ？」

「集落の近くに、冷戦当時の核ミサイル発射サイロがあるの」

滝壺が口にした言葉に、浜面はギョツとした。

ミサイル自体はサイロから撤去済みであり、何十年も放置されていたらしい。しかし、それでも完全に解体されていなければ、『エリザリーナ独立国同盟はロシアの核ミサイル発射施設のノウハウを手に入れようとしている』と判断される恐れが出る。

「ふざけやがって……」

デイグルヴたちが知らないうちに勝手に建設したくせに、そんなことで苦しめられているのが、浜面には許せなかつた。

しかも、それだけでは理不尽は終わらなかった。

「クレムリン・レポート……？　　まずいよ、浜面」

彼女が手にしたのは、気象データなどが載っているレポートだった。風向きと気温・湿度の数値から、細菌の拡散状況を予測するものだ。

ロシア軍から送信されているが、それは形式的にでも『警告』を発することで、自国内で行う軍事作戦を正当化させる狙いがあるという。しかし、実際にはこんな情報を実行数時間前に与えられたところで、大規模な避難などできるはずもない。

実質的には、エリザリーナ独立国同盟に対する脅迫だった。次はお前だ、と示すための。

その実態は、細菌兵器の運用。核ミサイル発射施設が占拠された、あるいはされそうになっている場合に、その場所を守るために強力な細菌兵器を散布する。

当然ながら、その実行場所はディグルヴたちの集落近くにある発射サイロである。

「自分の国だぞ、ロシア軍は見境なしに細菌兵器をばらまくつもりか！」

「……弾道ミサイルが素通りする恐怖は、当のロシア軍上層部が一番理解しているはず。彼らはその阻止のためなら、なんだってやると思う」

めまいがする思いだった。

しかし、ここでいつまでも待っているわけにはいかない。

現地に到着した瞬間に、散布が開始されるかもしれない。でも、「ディグルヴたちを放っておけない。俺達にはリスクにしかならぬのは承知している。でも、あいつらを見捨てたくない」

止めるのが異常なのではない。本来ならば、こんなことが起こること自体が異常なのだ。

「あの集落ではほとんど会話もできなかつたけど、でも、あそこの人たちがしてくれたことはちゃんと覚えている。私だって、あの人たちのために戦いたい」

「後悔はしないな」

「浜面こそ」

ふたりは互いの顔を見合わせて頷くと、そろって病院の出口に向かった。

すると、そこから出た直後に声がかげられた。

「……で、どうして、あなたたちだけ、で戦うことになって、いるの？」

霧丘だった。

彼女だけではない。最愛もいた。海鳥もいた。仕方がない、とややあきらめ半分呆れ半分のフレンダも、そこにいた。

すぐそばで、彼らの会話を聞いていた。彼らの決意を聞いていた。だから、放っておけるはずもなく。

「二人きりでデートするのは、この戦争から超帰宅してからにしてください」

「全員で無事に自分たちの家に帰るまでが、戦争だぞ？」

家に帰るまでが遠足です、的なノリで言われても……と浜面は戸惑いながらも、笑顔で「おう」と返した。

彼らには、借りがあつた。

冬のロシアの雪原に、叫び声がこだました。

それは、人間や獣のものではない。それとは明らかに一線を画す、異質なものであつた。

大天使『神の力』。あるいは、ミーシャ・クロイツェフ。

「やめろオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

ちっぽけな人間の声など、大天使には届かなかつた。

一振り、学園都市の戦闘機や爆撃機が撃墜され、意図的に分解した水翼が、地上にいる戦車や駆動機パワードスーツの部隊を蹂躪する。その莫大な衝撃波で、大空を飛んでいるはずの『ベツヘレムの星』にまで震動が襲い掛かつてきた。

戦争ではない。

天罰。

たったひとり人間ごときでは、大天使を止めることなどできるはずもない。

(……だけど)

駿斗ほどではないが、当麻もこの3か月間の間に、魔術というものをそれなりに理解してきた。

彼は石の室内を飛び出す。

大天使は、どこかにその存在を支える魔法陣などの基盤となるものがあるはずだ。それは、かつての『御使墮し』^{エンゼルフォール}で知っている。

(だったら、あの天使が動けなくなるまで重要そうなものは片っ端からぶっ壊してやる!)

目の前の石橋を駆け抜け抜けると、そこには荘厳なパイプオルガンがあった。

関係あるのかどうかなど分からない。ならば、右手で触って確かめればよい。

そう考えて手を伸ばしたその時、突然わき腹に体当たりを食らった。

「——ッ!？」

どうやら、近くの長椅子の影に隠れていたらしい。

2人は互いにマウントポジションを取ろうとしながら回転を続け、そして襲撃者の体が長椅子にぶつかったところで、その回転が止まった。

相手の体に乗り上げた当麻は、そのまま拳を振り上げて……そして、その右手をピタリと止めた。

「……サーシャ=クロイツェフ？」

エリザリーナは、重苦しい野戦病院の中を早足で歩く。

「なんて事……!」

彼女は、野戦病院の外に目を向ける。

そこには、時間に逆らった『夜』が広がっていた。

曇っているのではない。昼の空を照らす存在が、白い太陽から蒼い

月へと変わっていた。

そして、その闇の中を泳いでいるものがいた。

天使。

今のファイアンマがやっているのは、向かってくる敵を倒すために、地球全体を氷河期へと変えるようなものだった。

そのエリザリーナを、アクセラレータ一方通行は壁に背を向けて観察していた。

謎の存在エイワスは、ロシアに行け、と言っていた。その通りにしたら、意味不明の羊皮紙と出会った。それは、あの宙に浮かんでいる要塞に届けられる予定のものだったらしい。

そして、その中からアレは現れた。

天使。

(……俺や、あのガキが無理やりに関わらされた『謎』の中心核)

9月30日に、木原数多の手によって起こされた『巨大な光の翼』の出現。それは、ラストオーダー打ち止めを介して行われた。

そして、ヒューズⅡカザキリと呼ばれるそれを基にして、あのエイワスは現れた。

今、ロシアの大地を蹂躪しているあれも、エイワスに近い存在であるとすれば。あの要塞でよく似た技術で出現・制御されている可能性はある。

すると、エリザリーナが彼を振り返って言った。

「逃げなさい」

「何だって?」

「早く! 今すぐに行方をくらませないとヤツらが来るわ!」

「ヤツらってのはどこの誰だ!」

彼女が言うには、この戦争を起こした元凶は、あの宙に浮かぶ城の中にいる。そして、その城は未完成であり、その『最後のピース』がこの羊皮紙なのだ。

「今のインデックスの10万3000冊は、ファイアンマがほぼ完ぺきに掌握している。しかし、過去の事例から、『天使』や『神の右席』に関する深い情報までは収録されていない可能性もあるらしいわね。その羊皮紙は、抜け落ちた『穴』を塞ぐためのものではないかしら」

「インデックス……？」

エイワスは、禁書目録という言葉覚えておけ、と言っていた。

あのツンツン頭の少年は、Index—Librorum—Pror
hibitorumという文字を残していた。

ここでも、またつながった。

学園都市の暗部にいても知らなかった、この世界のもうひとつの闇と。

「あのガキを『天使』なんてメルヘンから解き放つための、最後の鍵になるかもしれないねエンだ。手放すかよ」

「なら急ぎなさい」

吹雪が風に蹴散らされ、土の壁が風の弾丸を受け止める。互いの攻撃で周囲に雪煙が巻き起こるが、それが立ち込める間もなく、次の攻撃で吹き飛ばされるので、視界が悪くなることはなかった。

その猛攻の中で、駿斗はプロの戦闘集団を相手に、幻術や光学的虚像、物理攻撃と魔術攻撃をうまく織り交ぜて対処していた。

(ようやく、ジユダの術式の正体が見えた……)

駿斗は、確信をもってその正体を口にする。

「奇跡の否定とは、まったくもって十字教徒らしくない術式だな、ジユダ！」

その言葉に、互いの猛攻がふっ……と止まった。

他の『十二使徒』はその術式の正体が看破されても、あまり表情を変えなかったにも拘わらず、彼だけがその表情を変えた。

驚きと、悔しさが混ざったような顔つきだった。

「そこまで正確に分析されるとは、予想外でした」

彼はふう、とため息をつく。

『神の奇跡』の否定。

十字教をベース、あるいは影響を受けた逸話を基にした術式に対し、高度な耐性をつける術式。

奇跡。呪い。祝福。災厄。

あらゆる超常現象を真つ向から否定する。

十字教に、真正面から喧嘩を売っているような術式であるが、そのこと自体に驚きはない。

目の前のこの男は、裏切り者であるイスカテリオのユダに由来する名を冠しているのだから。

「ですが……今までの様子から察するに、様々な逸話を取り入れてはいても、あなたの術式のベースは十字教にあるはず。それとも、別の仏教式や神道式の術式を持っているのですか？」

「……」

駿斗は、その返答に詰まった。

ジユダの指摘にある通り、駿斗の魔術のベースはイギリス清教式の十字教がベースとなったものが多い。

当然ながら、神道や仏教、ケルト、北欧なども使えなくはない。しかし、あくまでも十字教を軸に術式を組み上げてきた駿斗では、今まで使っているような威力のものは使用できない。

正確には『陰陽ノ鏡』という、風水に陰陽五行説を加えた術式は使用できるが、あれはもとより術式に適した地脈・龍脈を持つ場所か、下準備を済ませた場所でしか使用できない。

だから。

ジユダの周囲にある雪が、突如として無数の氷となって襲い掛かった。

その光景を見て、彼は目を見張った。

その現象自体は驚くことではない。水を操る魔術師ならば、その量にさえ目をつむれば誰でもできる程度だ。

問題なのは、そこに魔力も天使デレズマの力も何も感じなかったことである。

「――忘れたか？ 俺が、どんな街に住んでいる人間だったか、ということ。」

マテリアルハンド
自在変換。

念動系統の能力と物質変換系統の能力を統合させた、その名の通り、あらゆる物体を手足ののごとく操る能力。

同時に、蒸発・凝縮・融解・凝固・昇華によって三態を操作する『状態変換』や、結晶化などの原子・分子レベルで結合状態を操作する『結合変換』、元素そのものを変化させる『物質変換』も可能である。

まさに、物質の操作最強の能力。大能力相当^{レベル4}の力をもつてつくられた20本以上の氷の杭が、3人を襲った。

彼らも、すぐにその場をとびのき、土の壁でそれを防ぎ、炎弾がそれを砕く。

一方で、分子レベルで硬度と靱性を向上させた氷の杭は、複数の土の壁を砕き、炎の弾を受け止める。

その直後、氷の杭が一斉に爆発を起こした。どうやら、氷の杭にルーンを刻んであったらしい。

(魔術による爆撃は、私には通用しない……いや、これは)

氷の杭の爆発は周囲に霧となって漂い、彼らから視界を奪う。

(それだけでなく、霧をモチーフにした幻術が複数使用されているようですね)

タデーは、その槍をくるりと回転させると、自分の立っている地面に突き立てた。

その直後、巨大な雪の掌が、見えない障壁に阻まれる。

「結界……それも、単なる結界魔術ではない」

霧が晴れたその場所から、駿斗はその目を細める。

「そういえば、タダイは神の子にその正体を明確にしない理由を尋ねたことがあった」

「ええ。『わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。父とわたしはその人と共に住む』と……それが神の子の回答です」

『神の子』がその正体を明確にせずとも、神の子を信仰する者のところへ神の子と神は現れ、その加護を与える。それを明らかにする言葉を引き出したのが、タダイ。

(どうするか……)

いつまで経っても、突破口が見えてこない。

(これは、長期戦を覚悟するべきか……)

しかし、彼は肉体的な疲労を治すことはできても、精神的な疲労は治すことができない。そして、精神面のスタミナは、喧嘩慣れた高校生の自分よりも、精鋭の魔術師たちである彼らの方が上だろう。

隣にいるユリヤも、かなり消耗している様子だった。そもそも、この領域の戦闘についていけているだけでも、規格外なのかもしれない。

だが『妖精』としての生まれつきの性質を持つ彼女にも、魔力量という限界がある。

駿斗は、ずしりと重くのしかかってくる不安を打ち消すかのよう
に、再び術式を組み始めた。

本来の時刻に合わない夜空に、蒼い光が浮かんでいた。

その何もかもが歪みきった世界を、後方のアックアと呼ばれていた傭兵、ウイリアムⅡオルウエルは見据えていた。

端的に言えば、あの大天使はこの戦争を終わらせる力を秘めている。それも、ローマ正教・ロシア成教の勝利という意味ではなく、戦争をする人間を絶滅させる、という意味だ。

(なるほど。ファイアンマが増長するのも頷ける)

彼は、自分の力が遠く及ばないことを、率直に認めた。しかし、その上でこう考える。

(だが忘れたのか。『神の右席』の中で、この私が何を司っていたのかを)

バチカンでは、ペテロⅡヨグデイス枢機卿とその周囲にいる司祭・司教が感嘆のため息を漏らしていた。

ある者は手で十字架を切り、ある者は聖書の一節を口にしていた。常に偉大な父に見守られているとはいえ、その存在をこれほど近くに感じられる機会などごく稀だ。

「おお……」

ペテロⅡヨグデイスもまた、興奮を隠しきれずにいた。しかし、それは他の者とは全く異なる感動であった。

この機に乗じて、教皇の座を奪えるのなら。

全てはそのためであった。イタリア全土にはすでにエージェントを潜り込ませてあり、暴動が起こっても、それを適正なレベルでとどめることができる手はずとなっている。

瓦礫と一緒に死体の処分を済ませたころには、彼が世界で最も主に近い場所に上り詰めるのだ。

「ペテロⅡヨグデイス枢機卿！」

この身分違いの僧兵がこの場所に現れるまで、彼はその未来を疑ってはいなかった。

だが。

「緊急事態です！ 教皇選挙は一時中断されます！ 我らで守りを固めますので、枢機卿は奥へお下がりにください！」

外からは喧噪らしきものが聞こえてきた。どうやら、暴動が起こっているらしい。それも、ローマ市内からバチカンの方へ流れているようだった。

だが、

「ローマ正教の部隊を動かして鎮圧しろ」

「無理です！ その指示は我々の命令系統上、競合を起こしています！」

現在の枢機卿を超える権力を持つ者。

そんな人間は、このローマにおいてただひとりしか存在しない。

目を覚ましたローマ教皇は、皆に声をかけ、近づき、声を聴き、高ぶっている神経をなだめた。

普通であれば、荒々しい民衆の異様な熱にさらされて、袋叩きにされてもおかしくはなかった。しかし、彼は初歩的な思考誘導の魔術すら使わなかった。

それなのに、槍を握っていた僧兵の手から力が抜け、軍人は構えていた銃を下ろし、プロのエージェントすら、懐にある拳銃に手を伸ば

することができなかつた。

(この人がつくる小さな流れだけは、絶対に断ち切らせてはダメだ……！)

そんな得体のしれない恐怖に縛られた状態で、エージェントは始まったローマ教皇の進軍を見送った。

皆が祈り、武器を落とし、中には涙ながらに懺悔する者もいた。そして、誰もがその後ろに列をつくり、ひとつの穏やかな波となつて、バチカン市国の国境となる門を超えた。

そこを通さないようにするはずの僧兵たちは、その姿を前にすると、ゆつくりと十字を切った。

善きことが訪れますように、との声もあつた。

世界大戦という大きな魔物に、人間の理性が立ち向かう。

剣と銃を武器にする相手に、正義と博愛をもって立ち向かう。

その結末を突き付けられたペテロⅡヨグデイスは、涙ながらに叫んだ。

この男を殺せ、と。

私が教皇になれば、何十倍も豊かな暮らしを約束する、と。

この教皇がいたために、この戦争が起こつたのだ、と。

「案ずるな」

重々しい老人の声が、泣き叫ぶ幼子のような男を、一瞬で黙らせた。

「教皇選挙を行うのであれば、私にそれを止める意思はない」

マタイⅡリースは、死刑台に向かうことも覚悟した上で、それでもこの戦争を止めに来た。ローマ教皇としてではなく、ひとりの信徒として。

そのために、かつて禁書目録という少女を招き入れた、聖ピエトロ大聖堂の地下書庫から、ファイアンマを止めるための方法を探ることを、簡潔に伝えた。

殺される。

近づいてくるマタイⅡリースを前に、枢機卿はそう考えた。彼の魔

術の腕は知っているし、そんなものを使わずとも、その号令ひとつでペテロⅡヨグデイスという男は、周囲の市民の手で八つ裂きにされるはずだ。

しかし、その老人は笑顔でぽん、と愚かな男の肩に手を置いた。

「この辛い情勢の中、よく20億人の信徒を束ねておいてくれたな。教皇選挙の際は、私はお前に投票しよう。微力ながら、お前の進む道に協力させてくれ」

それだけ言って身を翻すマタイⅡリースの力強い背中には、ペテロⅡヨグデイスが求めたもの全てが備わっているように見えた。彼は、その場に泣き崩れながらその大きすぎる背中を見つめていた。

新たな星と日蝕の下で

「サーシャークロイツェフ……?」

当麻は自分に突如として襲い掛かり、馬乗りになっている少女を見て、ポツリと呟いた。

彼女はわずかに首を傾げると、

「第一の質問ですが、あなたはなぜ私の名前を知っているのですか？」
当麻はそれに答えることができず、結局L字のボールを引き抜かれて、頭から血が引いていく感覚を味わうこととなった。

「わあー！ ミーシャになってもサーシャになってもこんな感じか!」

大体、あの天使は何なんだ!? 本当にお前とは関係がないのか?」

ほとんどパニック状態で当麻はそう口にしたが、その言葉に彼女は沈黙した。

この少年は、何か自分の身に起こったことについての情報を持っているのではないか、と思っただからだ。

というのも、8月の終わりに、彼女は他者の魔力や礼装に近づくと、胸に奇妙な圧迫を覚える、という体質を得た。

ロシア成教の分析班の話によれば、自分の体内に大天使に匹敵する天使の力テレズマが存在していた痕跡があつたらしいのだ。

「右方のファイアンマってやつを知っているか?」

サーシャが考え事をしてしていると、当麻が質問を重ねてきた。

その後にも追加された質問によれば、そのファイアンマという男はエリザリーナ独立国同盟にいたサーシャを攫い、あの大天使を召喚するための触媒にしたらしい。

「ファイアンマが召喚の魔術……この場合は儀式っていうのか? とにかく、アクションを起こした場所を教えてください。あと、大雑把でいいから手順や使われた道具も」

サーシャは、当麻のことなど覚えていない。

しかし、少なくとも利害はある程度一致しているようだ、と結論付けたのか、彼女も当麻の質問に回答してくれた。

彼女が気が付いた時には、儀式は終了しており、その場には首謀者

であるファイアンマの他に、ロシア成教の魔術師が複数いたらしい。しかし、難事を終えた後に一瞬の隙をつけたことで、彼女は脱出に成功した。

もつとも、あのファイアンマは超遠距離を一瞬で移動できるようなので、用済みであつたのかもしれないが。

儀式場は十字教の術式で構成されていたが、基本的な儀式魔術とは異なり、四大属性をバランスよく並べるのではなく、『火』を集中的に運用する奇妙なつくりをしていたという。

しかし、本来『火』に対応する大天使は、天使長『神の如き者』だ。にもかかわらず、この場に召喚されたのは『神の力』である。

「——ひゃわんっ!？」

そこまで説明した時、サーシャは奇妙な声を上げた。

当麻の右手が彼女のほつぺたまで伸びたからだ。

小刻みに震えるサーシャの様子には気づかず、当麻は頭、肩、腋、お腹、太股などをぶつぶつ言いながら順に触っていく。

さすがに耐えかねたサーシャは、L字のボールをぶん回して、その直角に折れた角の部分を、当麻のこめかみにクリーンヒットさせた。

「第二の質問ですが、あなたはワシリーサと同じ魂を持つ者ですか?」「ぎゃぶっ!?! 何、こっふー! わしりーさ?！」

そんな一幕があつたものの、サーシャは説明を続けた。

その儀式上は高級なものではあつたが、使用されている霊装は非常にポピュラーなものであつた。

ただし、そこにはひとつだけ、奇妙な霊装があつたという。

火の象徴武器である、先端を赤く塗り棒磁石を差し込んだ杖ではなく、ダイヤル式の南京錠のような円筒形の霊装を、儀式場の中央にはめ込んでいたらしい。

その霊装には、心当たりがあつた。

インデックスの10万3000冊の知識を引き出す、遠隔制御霊装。

しかし、彼はすでにその霊装を使いこなしていたはずだ。それをさらに改造するということは……。

「まさか『遠距離から他者を操る』霊装そのものの効力を応用して、ミーシャークロイツェフを制御しているっていつのか……?」

白い雪原の上で、御坂美琴は頭上を見上げていた。

こうしている今も、あのツンツン頭の少年を乗せた巨大な要塞は、高度を上げていた。

(……ええい！　ここまで来ても蚊帳の外とか絶対にありえない！)

今の状況を見る限り、どう考えてもあいつともうひとりの少年は、この騒乱の中心にいる。第三次世界大戦の中心にいるだなんて、ただスケールが違うんだあの馬鹿と思わなくもないが、説教をするのは安全な場所まで引きずり込んでからだ。

彼女の妹は、ロシア製のアサルトライフルをぬいぐるみのように抱えながら、

「どうにかしてあの人へ支援をしたいのですが、とミサカは議題を提案します」

「……それはそうだけど、具体的にどうやって近づくかが問題なのよね」

妹達シスターズはぐるりとあたりを見渡すと、半壊したロシア製のミサイルランチャーを指さした。

「まずはあれを発射し」

「死ぬ」

姉が即決で却下する。

しかし、普通のヘリコプターなどでは届きそうにない高度だ。本気で行くのであれば、飛行機は必要になるだろう。

その時、妹達がピクンと顔を上げた。彼女のヘッドセット状の無線装置に、連絡が入ったのだ。

「ロシア側の通信を傍受しました、とミサカは報告します」

ニコライ・トルストイという人物の名前が何度か登場しているが、おそらくは独立部隊の暗号通信。どうやら上空の要塞に対し、地上から大規模な攻撃を行おうとしている模様なのだ。

「ふうん。まずいわね。あそこにいるあのバカも巻き込まれそうな雰囲気じゃない。で、そいつらの使おうとしている兵器は？」

彼女の質問に対し、妹達は記号で答えた。

「Nu—AD1967」

「何よそれ？」

「アメリカ側の呼び名ですね。こちらでは『アパースナスチ』と呼ばれているようです、とミサカは通信の内容に耳を傾けます」

事務的ではあるが要点を得ない答えを返す妹に対し、姉はもう一度訪ねた。

「だから何なの？」

10777号は、その疑問に簡潔に答えた。

「旧ソ連製の戦略核弾頭です、とミサカは報告します」

ロシアの大雪原の夜空に、蒼い光が浮かんでいた。

ミーシャークロイツエフ。

あるいは、大天使『神の力』ガブリエル。

2メートル前後のその体は、神話の中で語られるように、女性の形をしていた。

しかし、人間の姿をしていながら、そこには目も鼻も口もない。皮膚表面がすすべとした白い布で覆われていて、その凹凸が、髪までを含めた、女性の形をつくっていた。

ところどころに金色の葉脈のようなものが走ったその体からは、淡く青い光が放たれていた。

その背中に生えるのは、100ほどもある氷の翼だった。

その姿は、幻想的にも見えるかもしれなかった。

だが、その大天使も今は、暴力の化身だった。

戦車や駆動鎧パワードスーツが密集する敵の中央に、上空から着弾すると同時に、周囲へ3桁にも上るその翼を乱雑に振り下ろす。

そんな雑な挙動だけで、今までロシアの地を蹂躪してきた学園都市の部隊は、子供に蹂躪される蟻の行列のように吹き散らされた。

その光景を、学園都市の戦車兵やロシア軍の歩兵が、雪原の上で見ている。そして、己の死を待っていた。

待つことしか、できなかつた。

しかし、

ゴツ！ という轟音が炸裂し、何者かが空中で大天使と衝突した。

燃えるような赤いドレスの女は、右手に閃光の剣を手にして、大天使と上空300メートルで衝突したのだ。

ミーシャの体が、クレーターを生み出さずに地面の上をはねた。そして、赤いドレスの女は、戦車兵のすぐ近くに着地した。

パラシュートも何も使わず、ただ2本の足でふわりと。

「やはり、お前の武器無効化術式は通用しないの？」

「恐れながら、格が違いすぎます」

ほかのイギリスの魔術部隊——つまりは『清教派』の『必要悪の教会』であるが、学園都市とロシア軍双方の負傷者の手当てに回っている。そもそも、彼らは本来の役割に対して、今までが殺しすぎだったのだ。

『聖人』神裂火織がこちらにいないことが悔やまれるが、文句を言う筋合いなどなかった。

「行けるか、フランス人」

「私を使いつぶす気まんまんでしよう」

そんな軽口を叩きながらも、彼女たちは不敵に相手に剣の先を突き付ける。

「来やがれ怪物。我が手にも同じ大天使の力が集約されていることを知らしめてやるの」

低い震動が、断続的に続いていた。

そこから感じられるのは、地上での戦闘の余波だ。空中にある『ベツヘレムの星』にそれが伝わっているという事実には、当麻は身がすくむ思いがした。

「……さらに高度が上がってるな」

辺りの雲の様子を見て、当麻はそう言った。

サーシャが言うには、『ベツヘレムの星』というのは、その星を見た預言者が『神の子』の誕生を確信したといわれるものであるらしい。

それをもとにしたものが現在、上空へ浮かびつつある。その事実には、とてつもなく不幸な感じだ、と当麻は感想を漏らした。

その大きさは、半径40キロほど。

そして当麻がいたのは『後方』に近い場所だった。そして、サーシャが言っていた儀式場は『右方』の端にある。

「この要塞のサイズを考えると、フルマラソンのスケールだぞ。走り回るだけで体力なくなりそうじゃないか」

「第四の回答ですが、私もそこまで体力に自信はありません」

そう言つて案内されたのは、モノレールの車両だった。本当に移動目的しかないのか、一両しか用意されていない。

「……なんでこんな遺跡の塊のような場所にモノレールが？」

「第五の回答ですが、私に訊かれても困ります」

モノレールはしばらく要塞の中を進んでいたが、やがてトンネルの中を飛び出すような感じで、その姿を天空の下へさらけ出した。

崖の下には雲が広がっていたが、ぽつりぽつりと存在する切れ目から、赤いものが見えた。

何かのテレビ番組でやっていたことを思い出す。衛星からみたアマゾンというものだった。大規模な焼き畑が行われている地域は、衛星写真でも赤く輝いて見えるのだ。

ギリ……と奥歯をかみしめる当麻であったが、そこで分厚い雲が何かによって引き裂かれた。

「地对空ミサイル……ッ!?!」

起死回生の一手かもしれないが、このままでは当麻たちが乗るモノレールか、その線路に当たる危険性がある。

当然、当麻たちに逃げ場はない。
轟音がさく裂した。

ミサイルが直撃したのではない。
何者かが100もあるうかというそれらを撃墜し、その爆発による
衝撃がモノレールを襲ったのだ。

大天使ミーシャークロイツェフ。

怪物が、走行車両に速度を合わせて飛行していた。

大天使と視線がぶつかった。

(まずい……い……)

当麻も『御使墮し』^{エンゼルフォール}の一件の時に、天使という存在について、簡単に説明を受けている。

細かいことは覚えていないが、あれは主あるいは召喚者の指示に従って動く、ロボットなのだ。

右方のフィアンマならば、自分の『計画』に必要なであるらしい当麻やサーシャに対して、過剰な攻撃はしないかもしれない。

しかし、目の前の大天使に、その指示が伝わってはいなかった。そのまま『水翼』が振るわれる。

巨大な岩をぶつけたような、すさまじい音がさく裂した。
ただし、それはミーシャによる一撃ではない。

隣から突如として飛来した何者かが、猛烈な速度で飛び蹴りを放つたからだった。

「だ、第二の質問ですが、いったい何が……ッ!？」

大天使。

そんな存在に有効打を加えられる存在など、当麻は親友や『聖人』以外には1人しか知らない。

科学の天使。

A I M 拡散力場の集合体。

「風斬、氷華……ッ！」

その姿は、9月1日に初めて知り合ったその時と異なり、紫電の翼と天使の輪を携えていた。その姿は、9月30日に暴走させられていた、その時と同じ姿だった。

しかし、あの時と異なるのは、今の彼女は他者に操られた存在ではない、ということだ。

一瞬、こちらにちらりと見せたその視線は、今までに知っていたような、気弱な視線だった。

しかし、次に彼女が見せた視線は、今までには知らないような、強い意志を秘めていた。

両者が、その手に翼と同質の剣を携えると、視界が遮られた。モノレールが、トンネルの中に入ってしまったのだ。

しかし、ズウウウウウン！ という凄まじい震動が、起こったことを示していた。続けて、2回、3回とそれは続く。

(……何がどうなってやがる!?)

風斬氷華。

彼女が天空を舞うのは、これが初めてであった。にもかかわらず、その翼は彼女の思い通りに揚力を生み、その体を自在に移動させていた。

『友達』を守る。

その想いではるか北の大地までやってきた彼女は、そこで見つけた。自分と同じような存在でありながら、モノレールに乗った彼女の恩人を殺そうとしている存在を。

高度5000メートル以上の大空で、彼女は正面の敵をにらみつける。

似た者同士だった。

天使。

そう感じた彼女の感想が、はたして相手に対するものだったのか、あるいは自分自身に対するものだったのか……おそらくは、両方なのだろう。

両者は、互いに翼と同質の剣を生み出すと、そこで静止していた時間が動き出した。

ゴツ！ と。

球場に広がる衝撃波が、世界を揺さぶった。

その剣で鏝迫り合いを行いながら、互いの翼が動いた。

氷の翼が振るわれ、紫電の翼がそれを引き裂き、紫電の翼が襲い掛かり、氷の翼に碎かれる。

その中で、風斬には声が聞こえた。

「h b o …… 帰 …… f b y u o ……」

感情に色がついている。それが分かる。

「帰る。 f r 位置。正しい。座。 u j。天界。元の。あるべき。 q e 場所」

ブレている。

その理由が、同じ存在である彼女には分かった。

「……違うフォーマットの力が、強引に混ざってる……?」

火が見えた。

水と油のように、互いに反発しあう存在。

しかし、それは本来あり得てはならない、邪道なものだ。

「戻る。作業 t。必要。行う。ファイアンマ。利用。利害。接点。 y 計画。協力」

「……そのために私の大切な『友達』を傷つけるといっているのであれば、私は持てる力の全てを使ってあなたを止めます」

今一度、大きな衝突が起こった。両者は、互いに距離を取る。

その時、大天使がピクリと動いた。風斬とは別のものに意識を向けたのだ。

「捕捉」

必要な言葉だけを、それは口にした。

「必要。情報。羊皮紙。入手」

その姿を、神谷駿斗とユリヤが見ていた。

「大天使『神の力』ガブリエル……ここまでやるものか!？」

3人を相手にしながら、駿斗はその惨状を感じていた。

天災。

それを体現するがときミーシャークロイツェフの振る舞いに、駿斗は驚愕を禁じ得ない。

8月の時のものとは、また別の感覚がした。それは、サーシャークロイツェフという媒体メディアを有しているか否かという差なのであろうか、駿斗には分からなかった。

それよりも大切なのは、今日の前の災害である。

「あれのおかげ、で雪の術式が使いづらい、です。『風』を中心、にした術式に改良、することで、強引にしのい、でいます」

ユリヤは、得意とする雪の術式が制限されている。そのため、より面倒なことになっていた。

「あそこ、まで純粋な天使を引きずり出す、には、何かしら特殊、な『媒体』を用意する必要、があるはず……」

「その件に関しては、おそらく簡単に解決する。ロシア成教のサーシャークロイツェフという魔術師を確保すればな」

いや、すでに手遅れなんだけど、と駿斗は、迫る砂嵐を風で吹き飛ばしながら言った。

「御使エンゼルフォール墮しという魔術が8月にあった」

「？」

ユリヤはマシンガンのように繰り出される土の弾丸を雪の羽衣で防ぎながら、首を傾げる。

あの魔術自体、そもそも一部の人間しか感知できなかったものである。イギリス清教やローマ正教などの大組織に所属しない、フリーの

野良魔術師である彼女には、そのような情報に触れる機会がなかった
のであろう。

「まあ、簡単に言えば『天使の魂を天界から人間界へ引きずりおろし、
地球上の人類全員の魂＋天使の魂ひとつが、肉体で椅子取りゲームを
した』という感じだ」

そしてその時、サーシャ・クロイツェフの肉体に入った大天使が
『神の力』ミィシャ・クロイツェフなのだ。

「……なるほど。確かに、その理屈なら、『神の力』を狙って召喚する
ことは、可能かもしれません」

「おまけに、今のフィアンマは、禁書目録10万3000冊の魔導書の
知識をものにしているからな」

必要な材料と、それを活用するための知識。

その両方がそろっているならば、『神の右席』でも最強のあの男にで
きないことは、ほとんどないのかもしれない。

だが。

「このまま、黙ってると思うなよ！」

駿斗は、その背中から4枚の翼を生やした。

純粹な天使テレズマの力でできたそれは、赤・黄・緑の3色に輝く。

權天使アルヒヤイ。

「……『神の力』ガブリエルに水を取られちゃまっているから、本来のものとは
ちよつと違うけどな！」

だが、それでもいい。

今、ここで重要なのは、あの大天使の横暴を少しでも止めることな
のだから。

「……少しはこれで、おとなしくしやがれ！」

幻想天軍エンジェル・レヒリオン。

後方のアックアの必殺の一撃を受け止めた、墮天使の軍勢の砲撃。
かつて『神の如き者』に滅ぼされたその神話をここで使ったのは、駿
斗が意図せずに皮肉な一撃となっていた。

なぜなら、彼が狙ったのは『3人』ではなかったのだから。

（——まさか、大天使を!?）

駿斗の執念の一撃が、『神の力』を襲った。

エリザリーナから借りた乗用車はオートマ車であったため、片腕が使えない番外個体ミサカワーストでも運転に大した支障は出なかった。

「どちらまで?」

「コソコソ逃げ回ったって消耗するだけだ。一刻も早くケリをつけるためには、騒ぎのど真ん中に飛び込むのが手っ取り早い」

不自然なほど真つ暗になった闇の中で、彼らの乗る乗用車はあつという間に小さな市街地を抜け、雪原へと飛び込んでいく。

「……それにしても、ここからでも分かるくらいぶっ飛んでる戦場だよね。非科学的にもほどがある」

その暗闇の中には、巨大な要塞が浮かんでいた。かなりの距離があるはずなのに、それでも視界の空の一角を覆いつくしている。

さらに、その要塞の近くでは淡く光る2体の『天使』が空中で激突を繰り返していた。

「が、あ……っ!?!」

アクセラレータ 一方通行は、突如として胸に強い圧迫感を覚えた。

感覚としては、海原に近づいた時のものに近い。しかし、それを何十倍にも増幅させたような『圧迫』。

その感覚に呻きながら、一方通行は言った。

「オマエ、本当にあれに心当たりはねエのか?」

「それはどつちの天使について?」

「……」

「ついでに言えば、学園都市にいるからと言って、それが必ずしも科学的とは限らないとも思うけどね」

番外個体の言葉の意味。

……それが事実だとするならば、『それ』に深くかかわっている打ち止めラストオーダーを助けるためには、科学『だけ』では地力が足りなくなつて当然なのかもしれない。

懐の羊皮紙。

そこに書かれているのは、落書きのような呪文や魔法陣だ。

だが、これは今までの一方通行には存在しえなかつた、セオリーの通じない解決方法だ。それを利用するのは、大きな賭けに思える。

しかし、そんなことを考える暇を与えてはくれなかつた。2匹の天使が、この車の方へ一気に急降下してきたのだ。正確には、一方が彼らを狙い、その後をもう一方が追っているようだった。

「……この羊皮紙の『匂い』につられて来やがったか？」

怪物同士の戦いに、さらなる怪物が追加された。

グリツキンは、雪の森を歩いていた。

プレイヤーティアに襲撃されていた集落を守るため、浜面、デイグルヴと共に高射砲を操っていたロシア軍の兵士である。

現在の集落には、学園都市の部隊が駐留している。それによって、集落の人々はその恩恵を受けることができた。

しかし、グリツキンは元々ロシア軍の人間だ。プレイヤーティアと彼が交戦した時点で、彼は軍での居場所を失った。

したがって、彼はこれからの行き先として、エリザリーナ独立国同盟などを考えているのだが、今はそれよりも迷子を捜していた。

無理もないことだ。プレイヤーティアの襲撃によって、大人も含めて誰もが極度の緊張に陥っていた。そこから解放されれば、遊びたがるのが子供というものだ。大人でさえ、酒盛りの雰囲気になっていたのだから。

そんな折、10歳くらいの女の子が姿を消した。

ロシアの冬は厳しい。しかも、この戦争の中、砲撃や爆撃の轟音で、冬眠から目を覚ました肉食獣と遭遇してしまう危険性もある。そのうえ、この辺りには地雷があるという話もあった。

集落から3キロほど歩いたところで、彼は戻ろうとした。子供なら、ここまで遠くまでくれば、不安を感じて元の道に戻っている可能性が高い。

その時、吹雪の向こうにふらりと人影が揺らめいた。

ただし、子供にしては大きすぎる。

「!?」

とつさに樹木の影に隠れた彼は、熊か何かを発見してしまったかと思っただが、あれは人影だ。

しかも、極寒仕様の白い戦闘服とその意匠から、ある非公式戦の工作部隊であることが分かった。

(『東側の死神』って呼ばれていたヤツじゃねえのか！)

他国の要人の暗殺や、時にはロシアに不都合な国同士の戦争を誘発させることすらやってのける部隊だ。

なぜここにいる。

しかも、車を降りて徒歩で移動している理由は何だ。

一刻も早く、ここを離れて集落に戻る必要がある。そう考えた彼は、樹木の影から一步踏み出した。

しかし、二歩目を踏むよりも早く、相手の視線に捉えられた。

「ちくしょう！」

アサルトライフルの銃撃は、幸いにも背を向けて走るグリツキンの頬を浅く裂くだけに留まった。

しかし、その幸運をかみしめている暇もなかった。まず間違いない、無線で連絡される。その後は、部隊に囲まれて逃げられなくなる。しかも、不幸はそこだけにとどまらない。

足元の雪がライフル弾に吹き飛ばされ、グリツキンは足を絡めて雪の上に倒れ込んだ。そこに人影が姿を現す。工作部隊の男ではない。今まで迷子になっていた女の子だった。

雪の森に響いた轟音を聞いて、こちらにやってきてしまったのだろう。ただでさえ、ひとりでも逃げ切れる保証はない。しかし、この子を置いていくこともできない。

グリツキンが少女を抱え、走り出したところで再びその足を取られた。雪の上を転がる彼らに、工作部隊のアサルトライフルが向けられ

る。

そして。

タアアン！ という銃撃が雪の森へ響き渡る。

だが、それはグリツキンと少女に向けられたものではなかった。

工作部隊の頭上には、木の上に積もった雪があった。その雪を支えていた幹が他の人間に狙撃されたことで折れ、10キロ近い塊が男を上から押しつぶしたのである。

続けて、2人の少女が飛び出してきた。12、3歳ほどの少女たちが、倒れている男から武器を取り上げ、手慣れた様子で縛り上げていく。

その少女たちは、彼にも見覚えがあるものだった。

「グリツキン！」

浜面仕上が走ってくる。彼の手には拳銃があった。

「……何で……？ いや、とにかくここを離れよう。お前らが今縛つたのは、ロシア軍の工作部隊だ。囲まれる前に逃げねえと」

「俺もそいつらに用がある」

その後から、以前は病人のようだった少女がやってきた。どうやら、体調がかなり回復したらしい。彼女は迷子になっていた女の子の手を取ると、自然な様子で距離を取った。

「クレムリン・レポートだ」

「なんだって？」

「この集落の近くに、使われなくなった核発射用サイロがある。学園都市上層部に奪われることをロシア軍上層部は危惧していて、先手を打つために辺り一帯に細菌兵器をばらまくつもりらしい。そういったマニュアルが、事前に設定されていたんだと」

「……クソツたれ……」

呻くようにグリツキンがそう漏らしたのは、先ほどの工作部隊のことだ。彼らの存在が、浜面の言葉に信ぴょう性をもたらししていた。

滝壺がロシア語のレポートを読んだ限りでは、細菌兵器をばらまく

際には、湿度の状態が重要になる。冬のロシアの寒さでは、ダイヤモンドダストと化して有効に機能しない可能性が高いのだ。

しかし、要するに湿度を高めればよいのだから、水である必要はなく、融点が高い保湿用のジェルで代用できる。

そのジェルを放つための加湿器、スチームデイスペンサーを、工作部隊が行動を起こす前に、どうにかして破壊する必要がある。

しかし、その『どうにかして』が問題だった。

すると、浜面はグリツキンに女の子を集落に連れ帰ることに、学園都市の人を説得して、集落全体を避難させるように言ってきた。

「ああ、分かったよ！ クソツたれ、俺は何があっても集落の人を守ってみせる。だからお前も絶対に死ぬんじやねえぞ！」

互いに携帯電話の先を突き付けあい、連絡先を交換する。そして、互いの掌を軽くたたいた。

その後は、互いに言葉を交わさなかった。グリツキンは滝壺が預かっていた少女の手を取って、集落の方へ向かった。そして、浜面は自らの仲間たちの方へ戻っていった。

「話が終わったなら、さっさと行くぞ」

海鳥の言葉に、浜面は頷いた。

「レポートにあった気象や地形のデータから考えると、たぶん、ここから500メートルほど進んだところが怪しい」

「そちらの方向には、小さな山があります。そこから風が超降りてきて、その先に核発射サイロを挟んで集落が超存在するって具合です」

滝壺の言葉を、最愛が捕捉した。

「相手側も、時間がないはずですよ。できるだけ麓ふもとに近い位置で、超設置したいですよ」

浜面は、兵士のアサルトライフルを回収して背負った。これからの大仕事には、拳銃ではあまりにも心もとない。

「はまづら。早く終わらせよう。もうこんな戦争はうんざりだよ」

「それにしても、嫌な日蝕だぜ。どうせなら、オーロラでも見せてくれればいいのに」

彼らの敵は目の前に

ゴオオオン！ という轟音が、ロシアの夜空を揺さぶった。

大天使『神の力』^{ガブリエル}による『一掃』だ。

駿斗の一撃で大きくダメージを与えられた『神の力』は、本来格下であるはずの風斬氷華から徐々にダメージを与えられていた。そこに加え、一方通行の参戦で、戦闘の雲行きが怪しくなり始めた。

それを打開するための『一掃』だ。

「……やりすぎだ」

その惨状を見たフィアンマが、そう呟いた。

『一掃』の魔法陣は、『ベツヘレムの星』よりも高い場所で展開されている。そのため、破壊の礫が要塞の一部を削り取ったのだ。

第二波も、30秒以内には放たれる。しかし、その事実を確認しても、フィアンマの表情が大きく変わることにはなかった。

一定以上に膨らんだ『ベツヘレムの星』は自己修復機能を手に入れている。現に、破壊された場所のパーツは、自動的に元の場所へ戻ろうとしていた。

「こんなものか、俺様の敵は」

大天使と一部の五感をリンクさせたフィアンマは、そう呟いた。

学園都市製の天使と思われる存在が出てきた時には少しだけ興味をそそられたが、大勢に影響はなかった。虎の子の超能力者であろう人物が参戦しても、ミーシャ・クロイツェフの撃破には至っていない。その他大勢に比べれば、なるほど、あの大天使に食い下がっていることは賞賛できる。しかし、このまま第二、第三波の『一掃』が投下されれば、確実に動きは止まるはずだ。

「誰も俺を止められんというなら」

フィアンマの『一掃』は、世界そのものを覆うだろう。

しかしその時、割り込んでくる声があった。

「久しいな、アックア。今はただの傭兵家業に逆戻りか」

『いずれでも構わん。貴様の暴虐を止められる立場であれば』

しかし、『聖人』の言葉を聞いたところで、フィアンマが止まること

はない。

そもそも、この『聖人』こそ、世界のいたるところでその圧倒的な暴力によって、数々の問題を解決してきた男だ。そうした戦乱の象徴となった今となっては、フィアンマにとって、もはや役目を終えた駒でしかない。

そもそも、この男は大天使とまともに戦うことすらできないはずだ。一度はほとんど失われた『聖人』としての力はある程度戻っているようだが、逆にそれが危険なのだ。科学の天使のそばでは、魔術はその影響で誤作動を起こしてしまう。前方のヴェントが、かつての襲撃でそれを証明していた。

『そうか』

しかし、そこでフィアンマは男の笑い声を聞いた。

つまりは、失笑を。

『ならば、武力を使わない方法とやらを提示してやろう』

奇しくも、傭兵がそれを実行した直後だった。

当麻は、『ベツヘレムの星』の一角、つまり要塞最右部の儀式場に入った。

簡単な話だ。

ミーシャークロイツェフを止める方法として、すぐに思いついたのは、右方のフィアンマを撃破することだ。しかし、それまでにどれほど被害が拡大するか分かったものではない。

だが、もうひとつの方法があった。自分は8月のときに知っていたはずなのだ。

儀式場を破壊する、という方法を。

思えば、サーシャークロイツェフを誘拐した後、ベツヘレムの星を作り上げてから、フィアンマは大天使を召喚した。それはつまり、あれを維持するためのものが、この要塞にあるということなのだ。

儀式場には、細い柱のようなものがあつた。直径3センチほどの柱の中に白、あるいは黒の液体が入つたものが何十本もある。サーシャ

の話では、白と黒で一对の『門』となっていて、そこにオカルト的な力を通らせるものらしい。

それを。

片っ端から薙ぎ払う。

そして。

後方のアツクアがその『聖人』と『神の右席』としての資質を代償に力の半分を削り取り。

上条当麻にその存在を支える根幹を破壊され。

神谷駿斗の『幻想天軍』によってその翼の片方をほとんどもぎ取られ。

学園都市最強の超能力者^{レベル5}と科学の天使の猛攻を受けたミーシャとクロイツェフは。

ロシアの夜空に、大天使の咆哮がさく裂した。ミーシャの、翼をはやした女性の形が崩れていく。

しかし、それは爆弾だった。形を持った力が、形を失うそのなれの果て。

そのことに気が付いた一方通行は、全力で大天使に突き進んだ。以前の彼を知っているものなら、場違いな行動だと言うかもしれない。

しかし、そんなことは問題ではなかった。

守りたい。失いたくない。そのたったひとつの幻想を守るためなら、今の彼はどんな現実とでも立ち向かうのだ。

「抑え込めエエエええええええええええええええええ！」
爆発。

それによってもたらされる被害を、予測することはできなかった。何しろ、一方通行にも理解できない非科学的な力だ。

だから、すべてを抑え込んだ。科学の天使がその力を一方通行へたたきつけ、そのベクトルを操って球場にその爆発を抑え込んだ。

完全に抑え込んだ爆発は、その中でさらに大きな力でその外殻を破

ろうとする。それを、一方通行が抑え込む。
そして。

『天使の力』の霧散を確認したアックアは、その手をアスカロンから静かに離れた。

これで良い。

ファイアンマは、大天使の力を過信しすぎた。しかし、人々は手を取り合い、自分一人では決して敵わない敵とも戦える。それを、あの男は忘れていた。かつての自分と同じように。

この命もそう長くはないだろう。大天使を道連れに、自分は死ぬ。

これで良い。

傭兵崩れのごろつきにとつては、自分の生死よりも、戦争の行く末を変えることができたということが重要だった。

その時だった。

「ちくしょう……ッ！」

声が聞こえた。あの集落を守ろうとしていた東洋人——浜面のものであった。

「どうなってるんだ!? これ、ただの銃創とかじゃねえよな」

浜面と滝壺がアックアのそばに屈みこみ、包帯のようなものを取り出した。しかし、アックアは、自身の体のことは分かっていた。

「やめ、て……おけ」

ここは戦場だ。医療物資が余ることはない。ならば、ここで無駄遣いなどせず、他の者に回すか、後々のために温存するのがいい。

そもそも、詳しいことは明かせないが、自分は戦争の首謀者に喧嘩を売ってきたところだ。一泡吹かせることには成功したが、あの男がアックアに追手を差し向けないとは限らない。彼らがここに留まるのは危険だ。

そんなことを語っても、浜面はこう言った。

「うるせえつつつてんだろ！ そんな状況ならなおさら置いていけるか！ こっちはもういい加減に戦争なんてうんざりなんだ！」

右方のフィアンマは、杖に手をやった。

本来、学園都市製の天使と超能力者を殺害した上で、その羊皮紙を回収する算段であった。しかし、各方面からの援護が働いた結果、『神の力』^{ガブリエル}は撃破されてしまった。

しかし、問題はない。大天使の五感は、人間のそれとは比べ物にならない。そのため、超能力者が懐に入れていた羊皮紙の内容を入手することはできていた。

必要な知識は手に入った。

「なるほど、なるほど、なるほど」

杖をくるくると回したフィアンマは、

「ふざけやがって、クソつたれが」

ゴキリ、と真ん中からへし折った。

続けざまに、右手から莫大な閃光が標的に向かって迸る。しかし、そこに手ごたえは感じなかった。

つまり、少年の右手で弾かれたのだ。

トン、とフィアンマが踏み出すと、一瞬で体が5キロ以上先に進んだ。直線的な移動に限れば、遮蔽物に邪魔されない限り、彼は望んだ分だけの距離を一瞬で移動できるのだ。

「面倒なことをしてくれたな」

移動した先は、儀式場。そこにいるのは、ひとりの少年だ。

「おかげで学園都市やイギリスから邪魔が入る前に儀式を執行する必要が出てきた。という訳で、そろそろその右手をいただこうか」

「……そう簡単に進むと思ってるのか。ミーシャはもういないぞ」
「心配には及ばんよ」

当麻の言葉に、フィアンマは天井の穴から除く夜空を指さして答えた。

そう、夜空。

ミーシャの『天体制御』^{アストロインハンド}によって、天空が昼から夜へと変わったにも拘わらず、そのミーシャ本人がいなくなっても、夜空のままになっていたのだ。

以前にファイアンマが話したように、四大属性にはズレが生じていた。そのため、一度空から全ての星を消したうえで、改めて再設定を行ったのだ。

そもそも、預言者が『神の子』の誕生を確信したのは、夜空に出現した『ベツヘレムの星』を見たときだったのだから。

「なん、だ……？ お前、何をしようと……」

「まさかとは思うが、『ベツヘレムの星』を浮かべた程度ではいおしまいななんて考えてはいないだろうな」

こんなものは単なる手段だ、と彼は言った。

結局、彼の全てはそこにあつた。

『聖なる右』。

バズン、という異音と共に、星空が広がった。黄、赤、青、黄緑。奇怪な色の星々が、プラネタリウムのごとく広がっていく。

全ての属性が、正しい位置へ収まる。

そして、十字教における四大属性は、互いが互いに影響を及ぼす。だから『火』を司るファイアンマであっても、他の3つの属性もそろえた儀式場を用いたのだ。

しかし、その関係性は歪んでいた。

そして今、正しい場所へ戻った。

「正しい力とは、正しい場所でこそ万全に振るえるものだ」

ドン！ とファイアンマから放たれる重圧に、ジリジリとした肌を刺すような、嫌な刺激が当麻の全身をなでる。

しかしそれでも、当麻が後ろへ下がることはなかった。

ファイアンマの掌に収められている、遠隔制御霊装。それを破壊しなければ、あの少女が苦しみから解放されることはないと分かっているからだ。

『第三の腕』が蠢く。

「さあ、正しい力の意味を知ってもらおうか」

ロシアの雪原で、美琴はぐったりと座り込んでいた。

Nu-AD1967。旧ソ連の戦略核弾頭だ。

「ロシアの大統領は、そんなもののゴーサインを出したって訳？」

顔面蒼白になる美琴に対し、妹達^{シスターズ}10777号は、あくまで無表情のまま首を傾げた。

通常の軍用回線などは使用されず、加えて核発射認証用コードの送受信なども行われた形跡がない。そのため、おそらくはニコライ・トルストイなる人物の傘下にある独立部隊が勝手に起こした行動だろう、と考えられる。

「でも、あれって大統領の認証用コードがなければ起爆できないはずよね」

そうでなければ、軍人Aの暴走で核兵器が使用されてしまう可能性がある。

「そうとも限りません、とミサカは通信内容に耳を傾けつつ困り顔になります」

「アンタ眉一つ動いてないわよ」

しかし、あくまでそれは『通常の』核兵器（という表現が正しいのかわからないが）の場合だ。

冷戦終結とソ連崩壊に伴い、多数の核弾頭や放射性物質が『流れた』。しかし、それと共に多くの核技術者と技術情報が流れてしまったのだ。

その結果、ひとつの事実が発覚した。

一部の核弾頭は、例外的にセキュリティロックが核物質を囲む『外殻』とでも呼ぶべき部分に設定されている。すなわち、『中身』を抜いて別の『外殻』に詰め直してしまえば、使用可能になるのだ。

「彼らは車両発射型のランチャーを用意し、Nu-AD1967を応用した『交換弾頭』を空中の要塞に打ち込もうとしているようです、とミサカは計画内容を暴露します」

冗談じゃない……と美琴は呟いた。

まず、いくら死地から生還してきた男でも、ほぼゼロ距離とも呼べる場所でそんなものを起爆させられたらただではすまない。

しかも、心配されるのはそれだけではない。

冷戦当時にすら、禁忌は存在したのだ。

それは、核兵器の爆発と共に発生する『死の灰』。それを一定以上の高度に上げてしまうと、地球全体の上空を流れる空気層に大量に巻き込まれてしまう。その結果、日光が遮蔽されることで、地球全体で環境が大きく変質してしまうのだ。

さて、と妹達の説明を聞き終えた美琴は、周囲を見渡した。学園都市の部隊が、複数の戦車や駆動鎧パワードスーツで砲撃や移動を行っていた。

「……その辺のを適当に奪うとするか。アンタ、車の運転ってできたっけ？」

見つけた。

アックアと別れてしばらく雪原を進んだ浜面と滝壺は、最愛、海鳥、フレンダ、霧丘の4人と合流した。

彼らは針葉樹の林の木陰に身を隠し、首だけを出して遠く離れた場所を観察する。

50メートルほど先に立っている兵士は、見張りであろうか。一般の軍服とは異なる白系の戦闘服に身を包み、アサルトライフルで武装していた。

その奥は低い山の麓ふもととなっており、そこに大型のタンクローリーが3台も止まっている。他にも細々とした車両が何台も止まっていた。

男たちは、5メートル程度のポールを何本も等間隔で地面に突き立てていく。そして、そのポールにタンクローリーから延びた太いホースを接続していた。

「あれがスチームディスプレイ……？」

「タンクローリーの方は、保湿用のジェルかもしれない」

「あのポールが、霧吹きってわけよ」

浜面の言葉に、滝壺とフレンダが順につないだ。

するとその時、見張りの兵士がこちらに体を向けたので、彼らは一斉に木の陰に首をひっこめた。

浜面は携帯電話でグリツキンと連絡を取り、観察した状況を報告した。

どちらにしろ、相手の人数が多すぎる。

見張りを倒すこと自体は容易い。最愛の能力の前では、銃器はかなり口径のものか、ショットガンなどを至近距離で使用しなければ、まともにダメージを与えることもできない。連射速度と汎用性の高さが売りのアサルトライフルは、彼女の前では無力だ。

しかし、それで無事なのは最愛だけなのだ。彼らが懐に手榴弾などを持っていない保証はないし、万が一フルオートで放たれた弾丸が、他のメンバーに被弾しないとも限らない。

かといって、最愛ひとりに突っ込ませるのも危険だ。連続で手榴弾などを食らった場合、衝撃が貫通する可能性はあるし、一瞬でも真空の場所が生まれた場合、そこから爆炎が侵入してしまう。それにオフエンスアーマー窒素装甲は、衝撃を受け止めることはできても、熱量を遮断することはできない。

極寒の吹雪の中で緊張の汗をかく浜面だったが、そこで滝壺が意外な言葉を放ってきた。

「……はまづら、ここは連中が立ち去るのを待った方がいい」「何だって?」

滝壺が資料を読んだ限りだと、『細菌の壁』は空気感染を起こすタイプであり、呼吸器の他に皮膚上からも体内に侵入する。そのうえ、油分を分解する効果もあるため、BC兵器用のマスクやダクトに使われるフィルター類に穴を空けてしまうので、既存の防護は無意味となる。

確かに恐ろしい兵器であるが、そこには弱点も存在する。つまり、一度動き出したが、気温や湿度の状態が整っている限り、工作部隊にも防ぎようはない、ということだ。

したがって、彼らの手段はひとつ。時限装置を使って、立ち去って

から十分な距離を取った後にスチームデイスペンサーを作動させることだ。

「工作部隊が立ち去ってから、タイマーがゼロになるまでに、若干のラグが発生する。その間にスチームデイスペンサーに接近して装置を壊しちまえば、細菌兵器の拡散は止められる！」

しかし、その猶予は決して長いものではない。当然ながら、工作部隊は自分たちの安全を確保しながらも、できるだけ早く、装置を作動させたいと考えるからだ。

「結局、『弱点』になりそうな場所を探すって訳？」

「そう、だね」

「フレンダ、爆薬の残りは超大丈夫ですか？」

最愛の言葉に、フレンダは手持ちの爆薬を出して見せた。

「残りは少ないけど、1回だけなら何とかなるってわけよ」

「まあ、最悪私の槍と絹旗の拳でなんとかするか。あと、霧丘の能力がどれほど使えるか、だが」

海鳥が霧丘の方へ話を振ると、彼女はいつも通り、少ない言葉で答えた。

「問題、ない。あの装置の破壊くらい、大丈夫」

これなら、最初に接近した人が誰であろうと、その場で破壊できる。破壊方法に関して、問題は特になさそうだ。

すると、浜面がぼつりと呟いた。

「……電源車両がある」

タンクローリーの近くにある装甲車に、太い送電ケーブルが集中していた。

それを見た最愛と海鳥も、頷いた。

「電源車両の後ろから、廃棄パイプが3本超出ていますね。装甲車のエンジンにしては、多すぎます」

「電源車両の核は、ディーゼルの発電機なんじゃないか。俺たちの目的は、電源車両からスチームデイスペンサーへ送られる電気が送られるのを阻止すること。排気パイプに土でも詰めちまえば、内燃機関はストップしちまうだろ」

そうならば、狙いは一か所に定まる。

「あれが巨大なりチウムイオン電池の塊だったら？」

「その時は、私の槍でまとめてケーブルを切り裂くさ。これなら、足元にさえ気を付ければ、感電の心配もない」

そこで、特殊部隊に動きがあった。彼らの1人が無線でどこかへ連絡を取ると、全員が小型の車両へ乗り込み始めたのだ。

「みんな」

わかっている、と滝壺の言葉に全員が返事をした。

もうすぐ工作部隊が立ち去る。彼らがこの場から完全に目視できなくなるのを、全員で確認しようと注視していた。

しかし、

タアアン！ と、銃声が鳴り響く。

ライフル弾が、浜面のすぐ近くの雪を弾き飛ばした。

「ヤベえ。気づかれちゃった！」

この場を去ろうとしていた複数の車両が、急ブレーキをしていた。いくつかのドアが開き、重装備の兵士たちが降りてくる。

浜面はアサルトライフルの安全装置を外し、フレンダが爆弾を手に構え、最愛と海鳥が空気中の窒素を集める。

しかし、どうする。

最愛は、自分が盾になるつもりなのか、姿勢を低くした状態から、前に進み出た。そして、彼女の背後から、透明な槍を構えた海鳥が続いていく。

それで勝てるのか？ 最愛がいる以上、最後には勝てるかもしれないが、全員が無事であるという保証はない。

すると、その時音がした。

笛のように甲高い音だ。

真上を見上げると、学園都市の超大型戦闘機が大空を悠々と飛んでいた。

それ以上のことを考えることはなかった。

直後に爆発があったからだ。

単純に爆弾を投下したのとは違う、磁力か何かで強引に加速させられた砲弾が、音速以上の速度で地面に突き刺さったのだ。

全員が雪の中に埋もれることになったが、工作部隊たちはその衝撃で意識を失っているようだ。

すると、浜面の目の前に飛んできた無線機から声がした。おそろく、あの工作部隊のものだろう。

『よお。磁気の反応から、そこに誰かがいるってのは分かってる。善意のボランティアアッてやるなら握手しよう。俺も似たようなもんだ』
「がはっ、くそ、学園都市……?」

ロシア軍の無線機から聞こえるということは、これは誰にでも聞こえる周波数を使っているということだ。学園都市の『暗部』ではありえない。

つまり、

(こいつ、正規部隊の人間……つまり、教師なのか……?)

学園都市には、表向き職業軍人はいない。あくまでも、教員たちが学園都市の次世代兵装で武装しているに過ぎないのだ。

しかし、今は学園都市から逃亡している身であるとはいえ、全身から力が抜けるほどの安心感があるのも事実だった。

立て続けに発生する爆発から身を守りながら、浜面は言った。

「おい、これ、大丈夫なのか? 『細菌の壁』って殺人ウイルスなんだろう……?」

『だから徹底的に焼き払う。ちよいと身を屈めて目を瞑り、耳を塞いで口を開けてな』

あつという間に悪魔の装置が二重三重に破壊されていく。さらに、ロシア軍の工作部隊のただでは済まなかった。

爆弾は直接人間を狙ったものではない。しかし、爆発の余波を受けたために、プロの軍人もその意識を奪われていた。

すると、その余波で、山の斜面にあった大量の雪が突き崩された。雪煙が一気に立ち込め、最愛や海鳥、フレンド、霧丘、そして浜面の真横にいた滝壺さえも、彼の視界から覆い隠す。

「……滝壺っ!? どこだ、大丈夫か!?!」

叫び声に対する返事はなかった。他の3人の少女もまた、気配すら感じられない。

何もわからない中を10分ほどさまよった。

しかし、ついに彼の手が柔らかい感触をつかみ取った。

「滝壺ー!」

慌てて抱き寄せ、その顔を確認する。

確かに滝壺理后だった。

短めの黒い髪。眠たそうな瞳。

しかし、

「……はま、づら……」

彼女は、薄手の秋物の黄色いコートを羽織っていた。ストッキングで足を覆っていた。背丈が高かった。

そして……邪悪な顔で笑いかけてきた。

「ひっさしぶりだねえ、はーまづらあああああああー!」

ビキビキ、と小動物を思わせる少女の顔に、亀裂が走った。そして、そこから別の顔が覗いた。

凶暴で、凶悪。

そんな、学園都市の『闇』の一角を体現したような女。

(……)いつ……ッー)

目の前に現れた純白の光に、浜面はとつさに顔を横に振った。

その光線はロシアの天空を支配していた超大型戦闘機の主翼をかすめた。しかし、そちらに気を向けているひまなどない。

「麦野、沈利……ッー!」

——やるしか、ない。

滝壺を含め、他のメンバーが今どこにいるのかは分からない。だが、学園都市第4位の化け物を相手にするなら、彼女たちが揃ったところで変わらない。

やるしか、ない。
この怪物と、麦野沈利と決着をつけるしかない。

それぞれの強さと対峙する時

「この後に及んでも、続けるつもりか？」

駿斗が、口を開いた。

彼の『エンジェル・レビリオン幻想天軍』の一撃を受けた『ガブリエル神の力』は、その姿を消した。

さすがに、あの一撃で仕留めたとは思えないので、一方通行や風斬の力でとどめを刺されたのだろう。もしかしたら、召喚に用いた儀式場を破壊されたのかもしれない。

しかし、それでもこの天空の様子は変わらなかった。そして、それによって、駿斗もその意味を理解した。

「確かに、大天使の『アストロインハンド天体制御』によって、四大属性の歪みは元に戻った。その事実は変わらない」

だが、風斬と一方通行アクセラレータによって、敵は大天使という巨大な戦力を失った。

駿斗&ユリヤ対タデー&シメオン&ジユダの戦いはほぼ互角状態だが、徐々に駿斗の行動にユリヤのサポートが呼吸を合わせてきていた。

これでもはや、敵に勝ち目があるようには見えないのだが……。

「冗談を。大天使など、ファイアンマ様のための儀式場を整えるために召喚しただけですのぞ」

「儀式場……ただ、四大属性の歪み、を整え、天界をこの世界に近づけるためだけ、ということですか!？」

その言葉に、ユリヤが驚愕の声を上げた。

それもそうだ。その気になれば、人類を簡単に滅ぼせるほどの戦力を手に入れておきながら、その力は魔術に必要な儀式場を整えるために使おうというのだから。

それはつまり、

「そんなに重要なのか？ あのパイアンマの『右腕』を完成させることが！ そのためだけに！」

「ええ、その通りですよ」

彼らにとって、あの『右腕』の完成はすなわち、神話の時代の再来

なのだ。

そのため、彼らが迷うことはない。

結果を重視する姿勢。そして、そのための過程に存在する犠牲を軽視する。

それは皮肉にも、学園都市と非常に似ていた。

「そしてあなたは、素材としては最高の媒体です。その肉体を取り込めば、ファイアンマ様は真の意味における『神上』として、この地に永遠に君臨するでしょう」

「これ以上、人々が醜い争いをする理由はなくなる、というわけです。真の奇跡の前には、誰もがひれ伏すしかないのですから」

ばかりている、と駿斗は吐き捨てた。

結局のところ、それは管理社会であり、究極の恐怖政治なのだ。

もしも仮にファイアンマが完成すれば、その力の前には、戦争は無意味になるかもしれない。

病気や貧困も根絶させるのだろう。ファイアンマが持つものが、『神の子』であり『天使長』の右腕の力だとすれば、それは可能だ。

だとすれば、この世のほとんどの悲劇はなくなる。

だが、それはあくまでもファイアンマの支配下に置かれた存在でしかないのだ。

「……それは、旧世代の絶対王政や、宗教分離がなかった、悪質な宗教国家と変わらない」

だから、駿斗はそれを否定する。

「名君が、あるいは教会が決めた法の下で、多くの者は安定した、幸せな暮らしを送れるのかもしれない。だが、その大多数の人のために、一部の意見は封じ込められ、どんな人生を送ってきたのか……それは、十字教徒のお前たちの方が知っているはずだろ！」

かつて、宗教裁判というものがあつた。そこでは、多くの科学者が裁かれ、その功績を捨てるのを余儀なくされた。

魔女狩りなんてものもあつた。滅茶苦茶な理屈で『神の加護』という言葉を都合よく振り回し、無実の女性たちが覚えのない罪を着せられた。

しかも、その風習は一部の地域ではあるが、現在にも形を変えて残っている。

目の前にいるフィアンマは、そのような、自分に都合のいい理論を振りかざす『教会』でしかない。

だから、駿斗はそれを否定する。

誰もが、心に抱いたものを口にすることもできない、そんな世界を回避するために。

「勘違いしないでいただきたい。フィアンマ様の救済は、過去の司教や司祭たちの、愚かで中途半端なものとは比べようもないのですから」

「かもしれないな」

意外にも、駿斗はそう言った。

しかし、その上で言葉を重ねる。

「だが、フィアンマの計画が成就された世界には、俺が今言ったこと以外にも、明確な問題点がある。……分かっているか？」

その言葉に、彼らは沈黙で肯定を返した。

そう、彼らも分かっているのだ。

……このような形を取った時点で、ある意味フィアンマの目的は破綻している。

なぜならば、あの男の前提では、世界は人々のとめどない悪意によって歪められており、それを完成した『右腕』の力によって浄化する、という目的となっている。

しかし、

「確かに、この世界には人々の間に対立がある。貧困がある。難病もある。その他にも、どうしようもない不幸が襲い掛かることもある」
それでも、と駿斗はそこで言葉を区切り、はつきりと言いつつ。

「俺は、奇跡ってやつを知っている。人が持つ思いやりの心も知っている。だから、どうしようもない『不幸』にだって、立ち向かえて来た」

使い古された言葉ではあるが、自分が生きてきたのは、間違いもなく、『ありふれた奇跡』の連続なのだ。

確かに、駿斗は学園都市に捨てられた。しかし、最愛と海鳥、園長先生という人と出会うことができた。

上条当麻と出会ったことで、多くの『不幸』に巻き込まれることとなった。しかし、そのおかげで彼らは唯一無二の親友となることのできた。

インデックスという少女と出会ったことで、彼らは幾度も命がけの戦いに身を投じることとなった。しかしそのおかげで、ありふれた日常では決して出会うこともなかった人々と知り合い、時に肩を並べて戦うこともできた。

だから、神谷駿斗がこの世界に絶望しきってしまうことはない。

どんな辛いことがあるとも、最後は全員で集まって笑いあえるのだと、心の底から信じることができた。

そして、それができるようになったのは、紛れもなく一人の少年のおかげなのだ。

破壊と創造。

死と生。

神を淨い魔を討つ者と、神より逸れる存在へ登りつめる者。

神淨討魔と神也逸登。

両者が揃ったことは、紛れもない奇跡だった。

「……だから、ここでこの戦争を終わらせる。奇跡なんてものは、お前らが思っているよりも、誰もが常日頃、享受しているものだ」

その手に、莫大な力を込める。

駿斗は『幻想創造』^{イマジナクリエイト}によって、さまざまな力を振るうことができる。

しかし、ここ一番で使うのは、やはり右手だった。

この一撃で決める。

その意思が伝わったのだろう、敵も防御態勢を取る。

タデーは、侵入を阻む結界を展開する。

ジュダは、裏切りの逸話を基にした、拒否の術式を発動する。

シメオンは、支配への抵抗の伝承を基にした、防御力向上の術式を

重ねてかける。

互いに、この戦争の中で消耗している。そして、この一撃を放ってしまったら、両者ともに、今までのような必殺の術式は放てなくなるだろう。駿斗はユリヤの助けを得られるかもしれないが、彼女も彼女で、あまり攻撃は得意ではない。どちらかといえば、補助などが専門なのだ。

ふう、と息を吐き、駿斗は術式を展開した右手を掲げた。

いや、それは魔術と呼んでいいものかも分からない。単純に、力を凝縮してぶつけるだけの、繊細さにかけて、暴力的なものだったから。それはプロの魔術師からすれば、まるで素人が痼癩を起して暴走しているようにしか見えないかもしれない。

しかし、駿斗はあえてそれを選択した。

神に頼ることなどせず、単に己の力で道を切り開けるのだと示すために。

「お前らが、勝手に奇跡の定義を決めつけるっていうなら——」
全力で、その右手を振り下ろす。

「——まずは、その幻想をぶち殺す！」

その彼の一撃は、魔術というよりは単なるエネルギーの塊だった。術式ではなく、ただ手先の感覚に頼るだけで、その一撃を制御している。

いくなればそれは、オートマチックで誰もが運転している複雑な機械を、全てマニュアル調整で操作しているようなものだった。

だが、本来それが、あらゆる異能の力を、感じ取り制御する駿斗の得意とするところである。

莫大な力の奔流があった。

その眩いほどの一撃に、しかし『十二使徒』最後の3人は、その全力でもって拮抗する。

衝突した力がせめぎあい、駿斗が押されそうになるのを、ユリヤはそのそばで補助的な魔術を使用して援護した。

互いの力がせめぎあい、そして周囲に爆発四散する。

「滝壺だあ!? 何でそんな小物のことを、気に掛けなくちゃあならぬいのよ……」

浜面は、勘違いをしていたのだ。

超能力者^{レベル5}。その怪物に勝利したという意味を。彼らと同じ場所に立ったということ。

彼らから、真正面から敵と定められたということは、その全力を叩きつけられるということだ。

「なあ浜面。第四位の超能力をどうしようもないほど暴走させちまつたら、どれほど被害が拡大していくと思う?」

直後に、閃光の爆発があった。

上条当麻は、『ベツヘレムの星』の上で、右方のフィアンマと対峙していた。

魔術師のレッサーはこの空中要塞が浮かんだ時に離れてしまい、サーシャルクロイツエフもまた、フィアンマが生み出した床の亀裂に落ちてしまった。

今ここでは、己の他に頼れる者はいない。

だが、彼には戦う理由があった。目の前の男がその手に持っている、禁書目録の遠隔制御霊装だ。

向き合ったまま少しずつ距離を取る当麻に、フィアンマは酷薄に笑いかける。

「お膳立てはもう終わった。そろそろ、その右腕をいただこうか」

「……そうまでして、ローマ正教の勝利つてのが欲しいのか」

当麻の言葉に、フィアンマは首を振った。

「ローマ正教のことなど、どうでもいい。基本的に俺様の行動は俺様のためのものだよ」

そもそも、フィアンマは自分が戦争の原因だとは思っていない。

彼は、あくまでも引き金を引いただけに過ぎない。世界大戦というもの、個人の思惑では発生しないものだ。世界中の人々が、その中

に憤怒、怨嗟、嫉妬といったものをため込んでいなければ、こんなにも簡単に戦火は広がりはない。

つまり、この世界の人々は、(この男のことを知っているいは別としても) 右方のファイアンマを免罪符としている、ということだ。

「だから、お前がやってきたことが正当化されるとでも?」

「思ってはおらんよ。思う必要もないからな」

第三次世界大戦において、ファイアンマは二つの目的を持っていた。

ひとつは、計画に必要な物資を『戦争だから』という理由で集めるため。

そしてもうひとつは、ファイアンマにとっての『倒すべき敵』を表に引きずり出すための儀式だ。

「いくら悪の王を切り伏せる剣を持っていたとしても、悪の権化が目の前にいないのであれば、剣を振り下ろすこともできんのだからな」

直後に、斬撃が来た。

真横からの一撃。イマジンプレイカー 幻想殺しでは相殺しきれないほどの力が、振られる。上条当麻がそれを受け止めることはできない。

しかし、

「ほう」

上条当麻の体が真っ二つになることはなかった。当たる直前に、アッパーカットのようにして、下から拳を叩きつけたのだ。そのため、斬撃は当麻の頭上を突き抜けることとなった。

「単に受け止めるだけではなく、受け流すすべを覚えたか」

つまり、アクセラレータ 一方通行との戦いで、黒翼に対して行ったことと同じだ。

その時。当麻にもファイアンマにも予想できなかった一撃があった。

白い光。

頭上からのそれを認識した直後、莫大な熱量がファイアンマに降り注いだ。当麻は顔を腕で覆ったが、それでも衝撃で体を後方に吹き飛ばされる。

しかし、

「学園都市の光学兵器か」

攻撃を受けている本人は、涼しい顔をしていた。莫大な光を『第三の腕』で、巨大な日傘のように受け止めている。

そして、その腕の一振りですぐに霧散した。つまり、それだけの動作で、人工衛星をひとつ撃ち落としたのだ。

「驚くようなことではない。エリザリーナ独立国同盟でも披露したはずだぞ。俺様の右腕は、必要に応じて、試練や困難のレベルに合わせて、最適な出力を行う」

万能。

その言葉を体現したかのような存在。

速度。

硬度。

知能。

筋力。

間合。

人数。

得物。

それらすべてが、フィアンマの前では無意味なのである。彼のやることはただ一つ。右腕を振る、という動作だけで、全てが完了するのだ。

以前にあつたらしい回数制限も、インデックスの知識で補強することで、克服されている。それは『フィアンマ個人の勝利』であり『政治的な勝利』とは異なるために、ロシア成教などを動かしていたのだろう。

だが、このデタラメな魔術を前にして、どうすればいいのかが分からない。

「とはいえ、誇るが良い」

最強の腕は一つの存在を理解できずにいた。つまり、あらゆる敵に対して最適な出力を自動的に調節する機能が、うまくはたらいっていないのだ。

しかし、それはさほど問題になっていない。

ドッ！ と横薙ぎの一撃が来た。

当麻は右手を『第三の腕』の先端に触れないかどうかというところで、掌をフィアンマの腕に沿わせるように動かした。

わずかにできた間に体をねじ込み、その懐へ飛び込もうとする。

だが、そこにフィアンマはいなかった。この男は、水平方向であれば、望むだけの距離を一瞬で移動できるのだ。

3000メートル離れた場所から、インデックスの遠隔制御霊装が起動する。

「警告。第二十二章第一節。命名『神よ、エリ・レマ・サバクタニなぜ私を見捨てたのですか』——完全発動まで7秒」

ゴッ！ と血のように赤い閃光が走った。とっさに当麻は右手を突き出す。

待っていたのは、指が折れるのではないかと思わせるほどの重圧だった。

しかも、

「やはり、単純な術式では分が悪い、か」

真後ろ。

第三の腕は、長大な光の剣を振り回した。

当麻の幻想殺しは、複数の攻撃に対処するのが難しい。しかし、当麻は全力で身をひねった。

「おおおおおおおっ！」

同時に、右手の位置を少し変更した。赤黒い光線に対し、わずかに当たる程度の場所まで動かしたのだ。

ボウリングで、ボールをピンの芯を外すように当てることで、横方向に弾くように。当麻は、その光線の先を動かした。

つまり、彼の首を切断しようとしていたフィアンマの方へ。

(やっ——!!)

しかし、当麻は目を見開いた。フィアンマは自分に迫る光線に目もくれず、そのまま剣を振り回したのだ。

自らの足を払うようにして、当麻は斬撃を回避した。そして、斬撃、というよりはほとんど爆撃に近いような一撃は、自らの光線を吹き散らしながら、要塞の壁を破断していく。

「警告。第二十九章第三十三節。『ペクスチャルヴァの深紅石』——完全発動まで7秒」

遠隔制御霊装が赤い光を放った後、床から足の指、足首、脛、膝へと激痛が這い上がってきた。骨の痛みを強引にずらすような痛みが、当麻の足の中を上がってくる。

「くっ……があああああああ！」

当麻は右手の拳を太股へたたきつけた。

「警告。第三十五章第八節。『硫黄の雨は大地を焼く』——完全発動まで5秒」

オレンジ色の灼熱の雨が、50ほど降り注ぐ。当麻は倒れたまま、迫りくる右手でその中のひとつを払いのけた。連鎖的に、その飛沫が他の雨と衝突して誘爆を起こす。

全ては撃ち落とせないので、当麻のそばに落ちた雨が、地面で爆発を起こした。その衝撃に打たれながらも、転がるように後方へ移動し、当麻は再び2本の足で立ち上がる。部屋も要塞も真つ二つにしておきながら、フィアンマ本人の動きは、常人のそれと変わりなかった。ただ右腕を振るうだけで、山が砕け大地が裂ける。

「この世界は歪んでいるよ」

たとえば、四大属性のズレ。

あるいは、第三次世界大戦の根底にある、ドロドロとした『負の燃料』。

神がつくったこの世界のシステムは、その歯車がうまく回るようにつくられていたはずだった。

しかし、この世界は歪んでいる。なぜか？ それは、その歯車が限界に達しているからだ。

だから、それを元に戻す。

今までの犠牲は、全てそのためのもの。

目詰まりした埃を取り出すかのように、世界中の悪意をこの戦争を

通して表出させた。そして、歯車についた汚れを落としたうえで、十字教規範という潤滑油を差して、元の軽快な動きを取り戻す。

しかし、潤滑油とはいっても、複雑なことをする必要はない。彼は、ただその絶対的な力を見せつけなければいいのだ。

「さて、人類はどこまで怯えれば現実気づくかな」

従えば、フィアンマにより世界中の人々が救済される瞬間に立ち会える、と。『ベツヘレムの星』が夜空に輝いた時点で、すでに新しい時代が始まっていたのだ、と。

それは、神への冒瀆なのかもしれない。

しかし、当麻が気になったのは違った。

「世界中の人間を救う、ね。……お前、『世界中』なんてものを、本当にくまなく見て回ったことがあるのか？　そこでどれだけの人々が笑っているか、見たことはあるのか？」

「なるほど、興味深い意見だ」

ニヤリ、とフィアンマが笑った。

「だが、それは世界を救ってから考えるとしよう」

トン、と。

その音は、人間の右腕が斬り落とされたものとは思えないほど軽かった。

本来ならば、周辺数百キロは不毛の大地と化していたかもしれない。しかし、風斬の力を使って限界まで抑えたことで、最小限に留めることはできた。

ただ——番外個体が運転していた、ラストオーダー打ち止めを載せていた車は横転していた。番外個体もまた、ぐったりとした様子だ。

一方通行は、その前で愕然とする。

——一体、自分は何のために戦ってきたのだ。

本来、最優先で守るべき者を守ることができなかった……その事実
に、心が折れそうになる。

結局、あの羊皮紙の使い方も使い道も、分からないままなのだ。
しかし、その時。

「なんとか、できるかもしれません……」
弱弱しい声が聞こえた。

一方通行と共に戦っていた科学の天使、風斬氷華だ。ほとんど消えかかっているが、なんとかギリギリのところ言葉をついでいた。

「何を言っている？ 何とかできるってのは、何なんだ！」

時間がない中で、一方通行は結論を急かしたが、次の言葉に目を見開くことになった。

「9月30日……インデックス、という私の『友達』は……その子の頭の中に入っていたウイルスを、特定の『歌』を聞かせるという形で取り除いていました」

9月30日。そして、インデックス……禁書目録。

それは、あの怪物エイウスと無能力者が残っていた単語だった。
つながっている。

だが、その詳細が分からない。だというのに、科学の天使の輪郭が
どンドン失われていく。

「オリジナ……ルのものは、私……のパラメー……タに対……応
しているた……め、私か……ら派生……したあの……怪物には通……
用し……ないかもしれ……ませんが……」

(歌？ 五感を刺激して精神状態を制御する方法論か？)

かつて、自身が天井のウイルスに対して、頭の中の電気信号を直接
刺激して制御したことがあったが、それを歌で行う、ということか。
一方通行は考える。

しかし、その歌を一から十まで教えてもらうだけの時間がない。

「……大丈夫、夫……」

天使は、自分のこめかみにその人差し指を当てた。

「『歌』……は治療を受け……たその子……の頭の中……に記——」

消えた。……いや、強制的に学園都市へと『帰った』のだろうか。

「……生きてるか？」

「生憎と。死んだふりをして楽をしようと考えた時期もあったけど」

番外個体もまた、潰れた車の中で話を聞いていた。そして、これからは彼女の力が必要となる。

「こいつは自分の記憶を他の妹達と共有させて、バックアップを取る癖がある」

「そりゃ不用心な。司令塔がバックアップに触れるタイミングに合わせれば、司令塔によからぬデータを埋め込むチャンスが出てきそうだね」

「ああ。だが一般的には、その不用心は信頼って呼ばれているらしいな」

皮肉の応酬がされているが、風斬が言っていた『歌』のデータにアクセスすることができるとは、この場では番外個体だけだ。

しかし……それにアクセスすることができれば。

一方通行は懐の羊皮紙に手を伸ばした。

「パラメータについては、こいつを探れば見つかるかもしれないねエ」

学園都市の『外』にある技術。それを使う。

差し伸べられる手

神谷駿斗と『十二使徒』タデー、シメオン、ジユダの3人の決着がついた。

しかし、だからといってこの戦争が終わるわけではない。首謀者たるフィアンマが残っているし、彼を倒したというだけで、世界中に渦巻く悪意が収まるわけではない。

だから、駿斗はこれで何かが終わったとは考えていなかった。あくまでも、この戦闘はフィアンマの計画を阻止するための、ひとつに過ぎない。そもそも、そのフィアンマと戦うことすら、インデックスを苦しみの中か解き放つための手段だった。

「あの、これ、からどうする、んですか？」

「この戦争を止める。そのための方法を探す」

ユリヤの言葉に、駿斗は答えた。

「今はどこにかく、あの空の向こうにある要塞に干渉する方法を考えないとな」

『ベツヘレムの星』……ですか」

突然、その名称を答えた声に、駿斗は警戒した。

全力の一撃で倒したはずのジユダが、その意識を取り戻していたのだ。

「マジか……」

駿斗とユリヤは警戒する。

しかし、ジユダは目を覚ましていても、起き上がろうとはしなかった。どうやら、完全に敵意や戦意を失っているらしい。

その上、霊装で象徴物である鳩の首飾りは、粉々アトリビュートになっていた。どうやら、あの一撃に霊装が耐えきれなかったようだ。

しかし、その名前を聞いた駿斗は、怪訝な表情になった。

『ベツヘレムの星』って……」

『神の子』の誕生、を預言者に示し、たという星です、ね。新世紀の幕開けでもする、つもりなの、でしょうか」

駿斗の疑問に、ユリヤが答えた。

その言葉に、ジユダは頷く。

「あの要塞自体が、一種の儀式場となっていています。その上、あの儀式場はフィアンマ様の力によって、いくらでも再生します」

「つまり、フィアンマを倒さない限りには、どうしようもない………ということがあるか」

しかし、どうしてジユダはいきなり情報を教えてきたのだろうか。

「……何のつもりだ？」

駿斗の言葉に、ジユダはわずかに笑みをつくった。

「どうでしょう………自分でもよくわかりませんが」

彼はそこで少し視線をさまよわせてから、

「あなたの言ったようなことが、もし本当に起こるのだとしたら………それを見てみたいと、思ったのかもしれない」

なぜなら、自分には何もなかったから、とジユダは続けた。

「そもそも、我々『十二使徒』が、どのような組織であるのか、知っていますか？」

「確か、肉体が人間ではなく『天使』に近い状態になっている『神の右席』は、通常の術式が扱えない」

そのため、儀式魔術や霊装を扱うため、ローマ教皇の権限にとらわれずに使える部下を用意した。

しかし、ただの魔術師を『神の右席』の側近になどさせるわけにはいかない。そのため、特別な素養を持った魔術師を用意した。それが『十二使徒』。

「天使は神のしもべです。そして、三位一体の思想に基づくのであれば、『神の子』は『神』と同一の存在であり、『聖霊』はその姿を変えた存在とされました」

「……何が言いたい？」

『神の右席』。それは『原罪』を消去して『天使』に近づこうとする集団です。それも、ただの天使ではない

人間の中に紛れ込んだ『天使のふりをした神』。そんな存在を探す。

そしてその上で、神と対等である『右』にいたはずの『光を掲げる者』を倒した天使長『神の如き者』の力を手に入れ、神よりも上の存在……

『神上』へ進化することを求める。

「その補佐をするために、私たちは必要な儀式を行いました」

「儀式、です、か？」

ユリヤは、訊き返した。

魔術的な儀式なら、当然行われているだろう。しかし、あえてそれを言い出したということに、嫌な予感を覚えたからだ。

そして、やはり駿斗はその言葉に絶句することとなった。

「それぞれが……担当する使徒、その人生を一通りなぞったのです。簡単に、重要な話だけを抜き出したものですが」

人生をなぞる？

駿斗は最初、その言葉の意味をはかりかねた。人生をなぞるといっても、別に大量の書物を読めば、その使徒の人生をたどることはできるからだ。

しかし、そのようなことではないはず。すると、その意味が分かってきた。

「まさか……」

「はい、おそらくはその予想で正解かと」

駿斗は、その考えを口にする。

「聖書に書かれたことと、同じ内容をやり直した、というのか!？」
伝説の再現。

言葉にしてしまえば簡単だが、それはとてつもない行動だ。

何しろ神や天使の言葉、行動、そして『神の子』とその弟子の生涯を著したものだ。

その上、その中には並大抵の手段では再現できないような、正真正銘の『奇跡』としか呼びようがないものが数多く存在するはずだ。それを、魔術があるとはいえ再現しようなど、正気の沙汰ではない。

「当然ながら、あくまでも……魔術的な劇、のようなものです。当然ながら、『神の子』の奇跡をそのまま起こせたわけではございませんし、実際に『神』や『天使』が出現されたわけでもございません」

ジユダはそう言うが、それを差し引いても、駿斗は未だ衝撃が収まらなかつた。

「そこまでやるか……」

「ですが、それを行うだけのメリットはありません。現に、それぞれの使徒に対応するように調整を受けた私たちは、並大抵の魔術師では届かない領域にまで届きました」

とはいっても、いくつか弱点は存在するらしい。

その中のひとつが、聖人に対抗するような魔術が一切使用できなくなる、ということだ。

現状、対聖人用術式は、天草式十字凄教が使用する『聖人崩し』だけである。しかし、仮にローマ正教がそのような術式を手に入れたところで、『十二使徒』はその性質上、聖人に特化した術式は構築できなくなる。

ただし、『裏切り者』とされるユダだけは別のようだが。

「そして、そのような素養がある者たちは……つまり、私たちは、ローマ正教の下部組織のひとつが経営する孤児院などより見いだされ集められた者が、圧倒的に多いのです」

ジユダは、話を続ける。

「私は、適切な素養を見出されました。そして、神に仕える存在として、そして『神の右席』の部下となるにふさわしい者となるように教育を受け、この座に収まりました。……ですが、それでも私の心には、いつも疑惑がありました」

「疑惑？」

「ええ……つまり、主に対する疑惑です」

聖職者とは思えない言葉だった。

しかも、彼はローマ正教最暗部『十二使徒』のメンバーだ。この言葉は、ある意味周りの仲間全てに対する裏切りでもある。

「父なる神が完璧なのであれば、この世界におおよそ悲劇というものはないはずでしょう。しかし、現にこの世界には、戦争、病気、事故、事件、怪異……さまざまなもの蠢いています」

だから、どんなに修行を重ねても、神の教えに対して全てを捧げよ

うと、心の底から思うことはできなかつた。そんな、聖職者とは程遠い、どちらかといえば、無神論者のような男になつていた。

しかし、それでも彼は『十二使徒』のひとりになつていた。いや、されてしまった、と言うべきか。

改めて、駿斗はジユダという男を見た。

鳩の首飾りを身に着け、この極寒の中スータン（神父の真つ黒な服）に身を包んでいる。おそらくは『十二使徒』特有の霊装なのであろう。その外観からすれば、立派な神父の一人に見える。

だが、駿斗はどうしても、この男がただの迷える子羊にしか思えなかつた。迷える人々に神の教えを説いて、導く手助けをする立場にありながら、その男自身が迷つてしまつてゐる。

「こんな私は、ローマ正教の一員として、失格なのでしょうね」

「そんなこと、ねえだろ」

だから、自嘲の言葉がジユダの口から飛び出したとき、駿斗はすぐにそれを否定した。

「確かに、神様の教えに心酔しているような連中からすれば、お前は異端者なのかもしれない。だけど、神様だつて、別に自分の言葉をただ鵜呑みにしてほしかつたわけじゃあないだろ」

駿斗は、別に十字教徒ではない。そのため、本当の信徒からすればお粗末すぎる知識かもしれないが、それでも魔術を習う過程で、神の子の話についても、勉強はしている。

「自分の頭で一生懸命考えて、自分の心で感じ取つて、きちんと理解してほしいつて思つたから、だから、神の子だつて、聖書の中であれほどこいろいな人に妨害だつたり、嫌がらせだつたりをされても、それでもあらゆる人を許していったんだろ」

だから、そんなことを言うなよ、と駿斗は言った。

彼の言葉を、ジユダは黙つて聞いていた。そして、その言葉をかみしめるように、ぎゅつと目を瞑つてから、ゆっくりと起き上がる。

「私は……これから、どうなるのでしょうか」

「お前次第、だろ」

駿斗は、そう言つて、立ち上げるように促した。

「だからまずは……これからこの世界が続くように、この戦争を終
わらせようぜ」

麦野沈利が『炸裂』した。

彼女はしばらくの間、四方八方への斉射を続けていたが、やがてそ
れは一本の巨大な腕の形に収束した。

その意味は、次は別の攻撃が来ることを意味していた。

「——ッ！」

浜面は、全力で横に転がる。

その直後、先ほどまで彼がいた場所に、メルトダウナー原子崩しの腕が叩きつけら
れた。

直撃は、当然避けた。だが、それでも浜面の体は衝撃で10メー
トル以上吹き飛ばされる。足元の雪に莫大な熱量がたたきつけられた
ため、水蒸気爆発が起きたのだ。

再び、斉射。それも、いつものように一瞬光が瞬くようなものでは
なく、永続的なものだった。

浜面が生きているのは、ただの偶然だった。

今までの戦闘においても、麦野の力は絶対的だった。何しろ、遮蔽
物ごと相手を貫通できるような砲撃を、好き勝手に放てるのだ。吐息
の音ひとつ聞かれただけで、その命を失いかねない、それほどの相手
だった。

だが、今度はそれよりもさらに上だ。

もはや、溶鉱炉や太陽と同じだった。莫大な熱量には、近づくだけ
でも死を意味していた。下手に近づいただけで、その肉体はどうなる
のかも分からなかった。

「……はーまづらあ……」

声が聞こえると、その溶鉱炉が近づいてくるのが分かった。

「私は、ここままで捨てたぞ」

彼女は、浜面を殺すという、そのためだけに『体晶』を使用した。そ
の代償を分かっているながらも、だ。

ならば、浜面が生き残るためには、相応の代償があつてしかるべきなのかもしれない。

——同じ人間なのか。

崖にどれだけ近づけるかを競い合うチキンゲームをしているはずなのに、麦野沈利は背中羽根を飛ばたかせて、崖の先を悠々と飛んでいる。そんな気持ちだった。そして、そんな怪物相手に勝負を挑んだところで、崖の下に一直線になるのがオチだ。

どうにもできない。

溶鉱炉相手にアサルトライフルで突撃したところで、どうなるというのだ。

「……………はまづら……………」

死。

それを具現化したような女が、こちらへと近づいてくる。

逃げたら殺される。

しかし、立ち向かったところで死は見えている。

ならば……………どうしろというのだ!?

「はーまづらああああああああああ——ツ!!!」

その叫び声に対して、浜面はもう何も考えることはできなかつた。目の前で収束していく莫大な光を前に、とにかく、0.1%であろうが、滝壺が生き残ることができるよう、浜面は引き金を引こうとする。

「ああああああアアアああああああ——ツ!!!」

そして、その咆哮と共に光が爆発しようとしたその時。

かくん……………と麦野沈利がその場に崩れ落ち、その光が消滅した。

「は……………?」

唐突な出来事に、浜面は思わず呆けた状態で彼女を見た。彼は、まだ引き金を引いていないはずだ。

(……………助かつ、た……………?)

そう考えたとき。

ナイフが麦野の下へ飛んだ。

彼女の目の前に正確に突き付けられ、宙に静止したそれには、見覚えがあった。

そして、離れた場所から一斉に2人の少女が飛び出した。最愛と海鳥だ。その後ろに、霧丘とフレンドもいた。

「浜面、限界が来た今のうちに、麦野を超抑えますよ！」

限界？

思わずその言葉を聞き返そうとして、彼は気が付いた。

雪の中に沈んだ麦野の体は、ガクガクと震えていた。そう、それは、非常に見覚えのある症状だった。

体晶。

もともと、能力者を意図的に暴走させるためのもの。それを使用するには、適性があるようだが、その適性を持つ滝壺さえ、徐々にその体を蝕まれていった。

ならば、適性のない麦野が使用した場合、どれほどの弊害を被るかは分からない。

(……麦野も、立っているのが精一杯だったのか)

浜面には分かっていたはずだ。簡単に能力を増大させることができれば、そもそも彼は武装無能力者集団になど入っていなかったのだから。

「何でだよ、クソ、クソがッ！ あと少し……あと10秒で全部きれいに終わっていたのに……ッ！」

浜面は、最愛とその視線が合った。彼女に引き寄せられるように、アサルトライフルを握ったまま、倒れた麦野の下へ近づいていく。

これで終わり。この引き金を引けば。

滝壺が狙われることはなくなる。浜面も、同様だ。詳しい経緯は分からないが、『アイテム』にいたにも関わらず、裏社会から足を洗った最愛と海鳥も、麦野の私恨に巻き込まれるようなことはなくなる。しかし。

ロシアに来る直前、再会した麦野沈利と殺しあったことを後悔して

いたのは、どこの誰だ？

浜面は、改めて倒れている少女に目をやった。

「浜面アアアあああああああつ！ 見下してんじゃねえぞクソが！ テメエは……テメエだけは、何があつても私の手で殺す！ テメエを叩き潰さなきや、頭ン中のイライラが収まらねェんだよオオオ！」
麦野沈利は腕の一本を失っていた。片目も潰れていた。顔の大部分は焼けただれている。体の外側だけでそれなのだ。その内側が、学園都市の技術でどれほど弄りまわされているのか、分かったものではなかった。

そこへ、極めつけに『体晶』だ。今まで立っていられたこと自体、奇跡のようなものだった。

「麦野オオオおおおおおおお！」

気づけば、浜面は彼女の下へ駆け寄っていた。アサルトライフルなど、投げ捨てていた。

驚く最愛たちを他所に、麦野の体を抱え起こすと、掌にゴツツとした感触が伝わってきた。体の中に、普通の肉体とは別の『何か』があることを示していた。

「何の、つもり……？」

「もう嫌だ……」

一度そう吐き出すと、言葉は止まらなかった。

「なんで俺たちがこんな殺し合いをやらなくちゃならないんだ！ そもそも対立のきっかけになった『アイテム』と『スクール』との戦いだって、ホントは学園都市の大人たちが解決すべき問題だったはずだろ!! あいつらの欲望がつくった『闇』の尻拭いを、どうして俺たちがやらなくちゃならないんだ！」

「……」

「何でだ。何でこうなった!? 単にお前がフレンドや絹旗の命を狙ったからじゃねえ。学園都市の上層部がああ事態を把握していたんだったら、『スクール』に負けることも、追い詰められた俺たちが殺しあうことも、あいつらに設計されていたんじゃないのか？」

だから、浜面は戦いが終わるなら、どんなことだってしてやろう、と言った。決めた。

社会や自然環境が悪かったんです、なんてものではない。路地裏の不良や、能力者の全てを都合よく組み換え、自らの利益に還元している存在がいるとすれば。

それは——超能力者^{レベル5}などは別の、もっと『恐ろしい何か』なのではないか。

自分たちが命のやり取りを行ったところで、その労力の結果が、自分たちが知らない誰かの宝石や絵画に変わるだけなのだとしたら。

「だからもう、殺し合いなんてやめよう」

その言葉を聞いた最愛たちは、深く、長くため息をついた。

「さつきから私たちをほったらかして、何勝手に自分だけ超納得しているんですか？」

「いや、絹旗……」

その怒りをわずかに含んだ声に、浜面は声をつまらせた。

彼女もまた、麦野のかつての仲間だ。その上、彼女から命を狙われたこともある。

麦野の説得のことばかり頭にあって、絹旗最愛の説得を忘れていた。

彼女をどう説得しようか、と考え始めた浜面を置いて、最愛は話し始めた。

「まず、麦野。いい加減、超素直になってください」

「素直……？」

その言葉に、麦野は怪訝そうに顔を歪めた。浜面にも、意味が解らない。最愛は、何を言っているのだろうか。

「おい、絹旗、素直ってぐふ」

彼女に尋ねようとする、なぜか強制的にボディーブローで黙らせる。

「麦野が浜面に怒ったのは、単に『スクール』に敗北したからだとか、

自分が仕留めそこなったからってだけでいいでしょう?」

その言葉に、麦野はチツと舌打ちをした。

「そうよ。浜面は滝壺を選んだ。私は選ばれなかった」

それは、大きな挫折だった。

そもそも、麦野沈利にとつて、男は誰であつても、こちらから強氣に出れば、へこへこと言うことを聞いてくれる軟弱な存在だった。その気になれば一撃で命を奪うこともできる存在だった。

今までに会った男の中で例外だったのは第二位だが、あれはもとから別格だと分かっていた。

しかし。

そこにイレギュラーが現れた。

浜面仕上。

単なる下っ端だったはずの男。ほかの下らない小間使いの下部組織のように、ただ自分の言うことをへこへこ聞きながら、おとなしく従っているだけだったはずの男。にも拘わらず、自分と2回も戦い、そして1人の少女を守って見せた男。

いつもの方程式が当てはまらないその男が、とても鼻についた。

そして、特別な存在になっていた。

なのに。

「そうだ。俺は滝壺を選んだ! 事実は何も変わらない。俺は、滝壺を守るためにお前は見捨てたんだ!」

そして、この結果がこのザマだった。

体はもとの形とは大きくかけ離れたものとなり、全身を『体晶』が蝕んでいる。

「……勝手な野郎ね」

浜面はその言葉を自分に向けたものだにとらえたようだが、麦野はそれを両方に対して言っていた。

「私はフレンダを殺そうとしたぞ。滝壺も、霧丘も、絹旗も……それに、絹旗についていた窒素爆槍ボンバーランスの小娘に、下っ端のお前の命も狙った」
「ただで済むとは思ってない」

浜面は、足りない頭をフルに回転させて、言葉を絞り出す。

それでも、麦野が滝壺に、フレンダに、絹旗に、霧丘に、黑夜に、謝ってくれば。

「そうしたら、俺たちはもう一度『アイテム』になれる。必ずなれる！」

その言葉に、麦野の思考が停止した。

「それまでの間なら、俺がお前の命を守ってやる！ みんなが『アイテム』に戻るまでだったら、いや、前のメンバーも併せて、新しい『アイテム』ができるまでだったら、俺は自分の命を懸けられる！」

「……無能力者の浜面が、超能力者の私を守るだって……？」

そこまで呟くと、麦野の顔にはニヤリとした笑みが戻っていた。

ファミレスで作戦会議をしていた頃と同じものだった。

彼女はゆつくりと雪の上で立ち上がった。ふらつきながらも、顎で不気味な四色に輝く上空を指す。

そこに、学園都市の超音速爆撃機が通り、3体の塊を落としていった。

さらに、雪の上に落ちている無線機からは、ジリジリジリ！ という耳障りな音も聞こえてくる。広範囲にわたって、ジャミングが行われているらしい。

つまり、これから起こることが、外部に漏れないようにするために。彼らに与えられた時間は少ない。麦野沈利の代わりになるほどの『闇』が、間もなくやってくる。

学園都市の戦車を奪うのは、簡単だった。

このような車両の動力源は主にディーゼルではあるが、その大半に電子制御が導入されているものだ。

学園都市製のものの場合、対電気能力者用にありとあらゆる電磁波をはじく装甲で覆われていたり、薬品によって化学性スプリングを収縮させる方式に特化させたモデルも存在するようだが、この戦争でわざわざそのようなものを使う必要はないだろう。

その上、レーダーやUAVなどによる空中撮影についてもやはり電磁波を用いるものであるため、美琴の前では無力なのである。

「ふうん。戦車つてものは意外と速く進むもんなのね」

「元々、近代的な戦車は高速道路を問題なく走れるほどの走行性能を有してはいますが、この雪道の中でも時速150キロを叩き出せるのは、学園都市の技術の賜物でしょう、とミサカは適当に報告します」
ついでに、最近の戦車砲はマッハ4.5ほどの速度を叩き出すので、純粋な初速では御坂美琴の超電磁砲レールガン以上である。

もつとも、美琴は自分の能力の真骨頂は、磁力や電磁波など、多角的に相手を叩くことができる応用性にこそあると考えているので、そこまでプライドが傷つくことはなかった。……だからこそ、あらゆる手を右手一本で振り払ってしまおう男が鼻についたりするのだが。

「核弾頭の準備を進めている独立部隊の方に目視で感づかれたようです、とミサカは報告します」

キヤタピラに舞い上げられた雪煙を、暗視スコープか何かで見られたようだ。遠方から何かが発射されたのが分かる。

「空爆用の地对地ミサイルのようです、とミサカは警告します」

しかし、当然ながら御坂美琴にとって、恐るべきものではない。彼女は、戦車のハッチから上半身を外へ出す。

「得意分野で料理してやるわよー！」

雷撃の槍ではない。前方へ放たれたのは、広範囲の電磁波だ。地对地ミサイルは標的を見失い、あらぬ方向へ逸れていく。

「このまま前進！　ここで一気に片をつける！」

と、その時。妹の様子がおかしいことに彼女は気が付いた。

「ミ、ミサ……」

「？」

「ミサ深刻なカミ電波障害サカミのネットワークがサカミサカ断線ミサ緊急カミサ復帰作業をカミサカぶくぶく」

「わわわ！　アンタいきなり何ぶっ飛んでんのよ!？」

……妹達シスターズは、常時己から発せられる電磁波によって、ミサカネットワークと呼ばれるものを形成している。しかし、オリジナルである彼

救済と祈り

くるくると。

血のラインを描きながら、上条当麻の右腕は宙を舞っていた。

右方のフィアンマが手を差し出すと、そこに吸い込まれるように、当麻の右腕は掴み取られた。

「掴んだ……」

ぱん、と水風船が弾けるような音と共に、切断された右手が肉、血管、神経などに分離されていく。

世界環境は『ベツヘレムの星』によって整えた。そして媒介となる右手も手に入れた。幻想殺しとは、イマジンプレイカー神聖なる右手が自然と備えてしまった浄化作用だったのだろうが、それもはや不要だ。

「後は、俺様の身の内にある『本来あるべき力』を全出力で振るえば、全ての救済は完了する。それを人は『神上』とでも呼ぶのかもしれないが……俺様としてはどうでもいい。ただ、今ある力を集めて世界を救えれば成功だ」

分解された右手が、フィアンマの右肩から生えた『第三の腕』に呑み込まれていく。

その時、苦悶があつた。常に余裕を失わない彼の眉が、ほんのわずかに、不快げに歪む。

組み込んだ『幻想殺し』が、フィアンマの力を内側から削り始めたのだ。しかし、その打ち消す力を上回るほどのエネルギーを、フィアンマは内包していた。

そして、ズグン、と彼の体が揺れ、その力が血肉を得た『第三の腕』に移動した証拠に、大きな変化が生じた。

フィアンマの体に、ではない。

天空が、大きく開く。

赤、青、黄、緑に、人為的に彩られた夜空がぱっくりと裂けた。その向こうから現れたのは、黄金の光。

それは、天界に満ち溢れる『天使テレズマの力』だった。ただし、天使を呼び出したわけではない。天使のいる世界を呼び出したようなものだった。

聖女が娼館や牢獄へ連れ込まれたとき、その場が清らかな場へと変貌を遂げた話があるが、それと同じだった。正しい者の周囲は正しく染まる。

その事実を確認したフィアンマの唇が、愉快気に歪んだ。

(俺様はこの世界を救う。そのためには、もはやお前は不要なんだよ)

フィアンマは、今も切断面から大量の血を噴き出している少年に『第三の腕』を突き付けた。

「光栄に思え、肉塊。お前の存在価値は、無事に刈り取れたぞ」

世界を救う力。

『神上』と称されるもの。

必要とあれば惑星一つを粉碎するほどの圧倒的な光の爆発が、用済みのアダプターを粉微塵に変える。

そうでなければおかしかった。

「……!?!」

にも拘わらず、そこにはフィアンマに疑問を与える光景があった。彼が放った力の奔流は、上条当麻の目の前で2つに裂け、散らばっていったのだ。

神話にも匹敵する、あるいはそれ以上の力が、見えない右手に弾き飛ばされるように。

その傷口に。

ゾゾゾゾゾぞぞぞざざざざざざざざざざざざざざざざざざ!!! と、見えない『何か』が集まっていく。

フィアンマはこれまで、さんざん大仰お膳立てをして、全ての準備を完璧に整えた上で、最後のカギとして幻想殺しを手に入れたはずだった。そして、それを一度バラバラに分解し、自らの力を出力するための霊装として再編し直したのだ。それによって、世界をまるごと

救済するほどの力を手に入れた……。

にも拘わらず。

見劣りした。

霞んで見えた。

少年の肩口に……

(透明な……『何か』がある！)

当麻がゆつくりと顔を上げる。ただそれだけの動作に、フィアンマは自然と警戒を行っていた。

来る。

何かはわからないが、とにかく警戒すべき『何か』が来る。そして。

上条当麻は、その『何か』を自らの力で握りつぶした。

ボン！ という音と共に、その『何か』は新たにその上から現れた、より巨大な力に呑み込まれてしまったのだ。

「……『テメエ』がどこの誰かなんて知らねえ」

ボソリ、と上条の口から言葉が発せられた。

その声は決して大きなものではない。しかし、最大限に警戒していたフィアンマは、当麻が『何か』に向けて呟いたその言葉を、しっかりと聞き取った。

『『テメエ』が何をやるうとしていたのかも知ったことじゃねえ』

当麻は、目の前の強敵であるフィアンマさえ気にも留めずに言い放つ。

「……ここでは黙ってる。こいつは俺が片付ける」

ずるずるずるずる！ という湿った音と共に、右腕が出現していた。莫大な力を取り戻し、その肉体の一部は、完全に再生されていたのだ。

(捨て、た……？ あれだけの力を棒に振って、わざわざ右手を取り戻

した……?)

フィアンマはいつの間にか、のどが渇いて言葉が出ていなかった。

そして、己の『右腕』に取り込んだ方の『幻想殺し』イマジンブレイカーからは、その力が、価値が、急速に失われていくのを感じ取っていた。

つまり。

このような特異な力は、同時に二つも存在することはありえない。上条当麻という少年の右手にこそ、本物の力が宿るのだ、と。

失うわけにはいかない。幻想殺しの力自体はどうでもいいが、その神聖な右手の価値すらも同時に失われているのだとしたら、フィアンマの力を受け止めるための機能自体に影響が出る可能性が高い。

「……ようやく、少しは分かってきたぞ」

その時、当麻が呟いた。

「何をだ」

「随分と大仰な計画だと思っていた」

『ベツヘレムの星』。

第三次世界大戦。

いや、その前からあるローマ正教とロシア正教の同盟。

そもそも、それらは本当に必要なものだったのか？

フィアンマが最強の存在であるというならば、どうしてわざわざ『倒すべき敵』というものを浮き彫りにする必要があった？

なぜ、フィアンマはローマ正教とロシア成教の間に同盟を組ませた？ この男が本当に最強で、出てきた者を片っ端からなぎ倒せる存在であるならば、そもそも部下なんてものは、必要ないはずだ。

「……テメエは怯えていたんじゃないやねえのか」

つまり、

「本当に、自分の体の中に『世界を救えるほどの力』があるかどうか分からないから」

ゴッ！ と光の奔流が飛んだ。

しかし、当麻はそれを右手で斜め上の方向へ受け流す。

その攻撃に、傷一つ増えることはない。

それが、あらゆる幻想を殺す力に相応しい結果を示している。簡単なことだった。

北欧神話の『神々の黄昏』。十字教の『最後の審判』。少し趣がずれているかもしれないが、仏教における『末法』やインドにおける『カリ・ユガ』なども含められるだろう。

神話には、そのように多くの『世界の終焉』が描かれている。

しかし、少なくとも今生きている人々は、それを経験したことはない。

そして、世界が終わるほどの危機が訪れなければ、世界の危機を救うほどの力があつたとしても、それを発揮する機会はない。

上条当麻の右手『幻想殺し』が、超能力者や魔術師に囲まれた中にいなければ、そもそも存在が認知されないと同じことだ。

「一度も世界の救ったことのないやつに、『世界を救える力』があるかどうかなんて分かるはずねえだろ」

右方のフィアンマは少し黙り、そして低く静かに笑った。

「……だからどうした。それを言うなら、お前には俺様を糾弾する資格などあるのか。お前は『世界を救えるほどの力』を実感したことがあるのか」

「あるに決まってるだろ」

フィアンマの予想を覆す回答が、少しの間も空けずに帰ってきた。

別に難しいことではない。

「ちっぽけだろうがなんだろうが、一人分の世界を救った瞬間ってヤツを目撃したことがあるぞ」

そう。

この世界が小さな人間一人ひとりの集まりでできているというのであれば。

割に合わないことをしてきたという自覚はある。それに親友を付き合わせてしまっている、ということも分かっている。

しかし。

だからこそ、得られたものもある。

そして、神谷駿斗には謝罪よりも感謝の気持ちをいつも抱いている。このどうしようもない『偽善使い』フォックスワードに付き合ってくれる親友に。

二人で手に入れてきたものは、他の人からすれば価値を感じないかもしれない。しかし、彼らはその意味をよく分かっていた。

もしもフィアンマが『世界』なんて大きなくりに囚われずにいれば、『世界を救えるほどの力』なんて実感に怯える必要はなかった。だが、彼はそうしなかったのだ。

だから、見えない。

「世界を『救ってやる』なんて思う野郎に救われなければならないほど、俺たちの世界は弱くなんかない」

黄金の空の下、今まで何にも手を伸ばすことすらしなかった孤独な男に、上条当麻は静かに告げた。

美琴の攻撃によって、Nu-AD1967を積んだミサイルから噴射炎は消えていた。

垂直に立てられた大型ミサイルは、発射直前の状態を維持することが難しかったのか、大きな音を立ててその場に倒れる。

これでもう、ミサイルは発射できないだろう。

「200人規模の一個中隊相手にこの一方的な暴れっぷり。ここまでやられるときすがにコンプレックスを感じずにはいられません」

「何言ってるの。アンタらの戦力、全部集めれば一万近い旅団クラスでしょ」

しかも、全員が能力を使い、その上ネットワークでの連携が可能、学園都市最新鋭の戦術をインプットしているのだ。

だが、彼女が言いたいのはそういう意味ではないのだ。

するとその時、妹達はピクンと眉を動かし、ヘッドセットに手を添

える。

「……首謀者と思しきニコライ・トルストイなる人物と連絡が取れないという混乱が生じているようです、とミサカは真顔で報告します」
「アンタいつでも同じ顔じゃない。それってつまり、相手が勝手に自滅したってこと?」

しかし、妹達が報告する限りでは、部隊は作戦を続行する方向で意見をもとめたらしい。

「ええい、クソ！ やたら熱心なヤツらですこと！」

だが、現在運用が可能なN u | A D 1 9 6 7は先ほど美琴が発射を阻止した一基のみ。

しかし、それが逆に問題を起こすこととなった。

「将校クラスはその事実に基づいておらず、遠隔地から強引に発射命令を下そうとしているらしいです、とミサカは呆れかえります」

それってつまり……

「緊急用のリモート命令を下しても、ミサイルは飛びませんが、弾頭はこの場で起爆するのではないのでしょうか、とミサカは自らの予想を言います」

「死ぬって！ そんなことになったら絶対死ぬ！」

その上、これは電波ではなく赤外線通信を採用しているらしい。テレビのリモコンかよ！ と叫ぶ美琴であるが、どうしようもない。

とにかく、受光部を布で覆ってしまうだけでも阻止できるはずだ。
「間に合いますかね、とミサカはため息交じりに応援します。がんばれー。はあ、でもいつになったらあの人に会えるのやら」

「余裕だなおい！」

駿斗はジユダと、『ベツヘレムの星』について話をしていた。

「すでにお分かりかと思いますが、あれはフィアンマ様が『右腕』を完成させるために用意した儀式場です」

儀式場。

フィアンマ自身が語っていたように、あれだけの規模の魔術要塞

も、結局は儀式のための下準備に過ぎなかったのだ。

あの赤い男は、徹底的にその『右腕』にこだわっている。

「ああ。異形な力で満たされた神殿を用意し、その中で右腕の力を精錬し、完成させる……つまり」

——学園都市で生活している上条当麻と同じだろうか？

駿斗は、何の不思議もないかのように、そう言い放った。

ジユダすら、思わず絶句する。

「少し視点を変えてみれば、わかりきったことだったんだ」

今は自動書記により放たれた竜王の息吹ドラゴンブレスによって破壊されてしまっているが、学園都市では『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』によってさまざまな計画がされていた。

いや、それだけではない。あの街の中は、あらゆる監視網が張り巡らされているはずだ。ならば、風斬氷華について上昇部の人間が知らないはずはないし、そもそも『虚数学区』についてだって、知っているに決まっている。

そして、そう考えれば、上条当麻、いや、幻想殺しの異常性に気が付く。

ありとあらゆる異能の力を打ち消す力。それは逆に言えば、周りに様々な異能の力が存在しない限り、存在すら知られることもない。ただ自分の幸運を打ち消していくだけのものにしかない、ということだ。

そして、イマジネクリエイト幻想創造についても同じことだ。

もはや、語る必要はないだろう。

「学園都市そのものが……俺たちを成長させるための箱庭となっていた。おそらく、統括理事長はそのことを見越して、一から作り上げたんだ」

しかし、それ以上のことは分からない。唯一言うことができるのは、この戦争が終わってからも、自分たちの戦いはまだ続くのだろう、ということだけだ。

「で、ベツヘレムの星に関しても、大まかな役割は変わらない。しかし、ここで両者の違いが生きてくる」

それは、単に科学と魔術の違いというだけでない。

学園都市は、ゆつくりと科学的にこの大地を改変した方法を取った。つまり、日本から東京の西部3分の1を独立させることで。

しかし、ファイアンマは世界中から魔術的な建造物を集合させることで、強引にこの空中要塞を作り上げている。つまり、この要塞そのものが魔術的なものである以上、そこに干渉することで、ファイアンマの計画をいくらでも妨害する手段が存在する、という訳だ。

「ファイアンマの幻想——それを上書きする形で、俺の幻想を創造する！」

胸にかかってくる強烈な圧迫感に、アクセラレータ一方通行の呼吸がわずかに止まった。

一体どういう理屈なのかは分からないが、夜空が開かれ、その先から黄金の光が世界を照らしていた。太陽光の屈折率を考えても、明らかに物理法則を無視している。

しかも、それ以上にその異常が何の隠蔽もされていないことに、一方通行はばかばかしさすら感じていた。

しかし。

(……知ったことか)

世界なんて漠然としたものの変貌など、知ったことか。それよりも、一方通行にとっては、ラストオーダー打ち止めの命が危険な状態にあることが重要だった。

「ミサカワースト番外个体。木原数多のウイルスを駆除した『歌』のデータってのは手に入ったか？」

「ミサカネットワークの割と浅い所に」

ミサカネットワークの統一的な意思もまた、修道女の歌の異常性に気が付いていた。ネットワークの中で日ごろから並列的に解析を行っていたらしい。

「おかげで深部に潜ることなく、新参のミサカにもデータを入手できた」

「データを」

「少しは聞きなつて」

中身を急かす一方通行に、番外個体はストップをかけた。

インデックスがその知識に基づいて組み上げたこの歌は、発音どころか、呼吸法からして、科学サイドの人間の常識には当てはまらない。番外個体の口から話すには、少々複雑すぎた。

「楽譜、疑似音声データ、サウンド振幅グラフ、どれがお好み？」

「全部出せよ。出し惜しみは三下のすることだ」

「とことん嫌な奴。そっちのほうが居心地いいけど」

ジジツ、とノイズのような音が携帯端末から流れると、そこにはいくつかのファイルが追加されていた。

しかし、この歌だけでは足りない。

「どオにかなる」

一方通行が取り出したのは、羊皮紙の束だった。それを見た番外個体が「……ミサカのことバカにしてんの？」と眉をひそめる。

「そオじゃねエ」

ラストオーダー

「そもそもさ。最終信号の問題は学園都市内部に元凶があるんでしょ。なのに、こんな遠く離れた場所に解決のマニュアルがポンと置いてあるって何？ まるでテレビゲームね」

「そオじゃねエつつつてんだろ」

一方通行は彼女の眉間に拳銃を突き付け、その悪意しか吐かない口を止まらせた。もっとも、ここまで彼を煩わせて引き金を引かせていないあたり、一方通行もずいぶん丸くなっているのだが。

「コンピューター上の高度なセキュリティ暗号だろオが、ダーヴインチの時代の図面の暗号だろオが、基本的には数学の世界だ」

そう、あくまでも数字の集まり。ただし、それらを解き明かすには、莫大な計算量が必要となる。『暗号方式』そのものが複雑であるわけではない。

アクセラレータ

だから、一方通行も同じ手を使った。全ての情報を0と1に分解して、頭の中でパズルを組んだ。それで解くには時間がかかろうとも、解くための糸口くらいは見つかるはずだった。

そう、『はずだった』のだ。

「ミサカ好みの不幸と挫折の匂いを感じさせるね」

「パズルが解けない」

一方通行は簡単に肯定した。

まるで、円周率を計算したら、何度やつても100桁目で誤差が出てしまうような感覚。

それを解決したのは、やはり理解のできないものだった。

水の天使と科学の天使との戦いに割り込んだ時の、あの水の天使の攻撃の感覚。しかし、それよりも前に、彼はその感覚を知っていた。

「実際には『反射』なんてできなかった。正体不明の攻撃は素通りして、俺の体を真っ二つにしゃがった」

彼が己の敗北を語るということ自体が、彼の成長を現しているのだろうか。だが、今は優先順位が違う。

己のプライドも捨てて、彼はひとつの小さな命のために突き進む。

「——だが、ベクトルが『なかった』訳じえねエ。俺はあの時、エイワスから受けた『正体不明の法則』を自分の体に入力していたはずだったんだ」

あの無能力者の拳のように、能力を消したわけでもない。

木原数多や垣根帝督のように、能力の裏をかかれたわけでもない。

あの怪物は、そのベクトルをストレートに一方通行へ伝えてきたのだ。ならば、そのベクトルの情報もまた、彼の中に伝わっている。

エイワスはロシアへ行けとは言ったが、そこに解決法がそのまま置いてあるとは言わなかった。あくまでもヒントだけを示したのだ。

正体不明と割り切らず、ブラックボックスの中に放り込んで、そのままにしないこと。

架空のベクトル軸を設定しろ。違和感を違和感として処理できるような、数学で例えるならば虚数のような概念。いきなり規格外の怪物のパラメータを入力するのではなく、目の前のベクトルから数値を逆算し、それを生み出すための法則を逆算するのだ。

宇宙の法則、たとえばビッグバンなど、解析が難しい事象がある場合、その現象に極力近づけた状態を再現・観測し、物理学者が逆算して仮説を裏付けるための装置が存在する。

アクセラレーター
粒子加速装置。

「このガキを助けるためのパラメータは手に入った。ここから先は逆転する番だ」

殴りあうだけが戦いではない。

他人から奪うだけが勝利ではない。

「始めるぞ」

ブワツ！ と、歌唱データという形で入力が始めたが、その滑らかな動きの中に、わずかな引っ掛かりを感じた。

(黄金の空……ツ！)

真上から押し掛かる重圧から放たれる『不可思議なベクトル』。それが、彼らに干渉を起こしていた。まるで、高圧電流が周囲のテレビやラジオにノイズを走らせるように。

アクセラレーター
一方通行は、下りの坂道を転がるボールを連想した。『普通の物理法則』と『不可思議な法則』、その一線を越える。

直後、異変があつた。

「——ッ?!」

ビキリ、と体の内側で、何かははじけた。

体中の血管が内側から裂け、破られた皮膚から赤黒い液体が噴出する。

彼は知らない。

常人にはありえない呼吸は、生命力を魔力へ精製する方法だ。

喉だけでなく体内全体で音という振動を大きく震わせる発生方法は、その魔力を術式という形に変換する方法だ。

魔術。

それは、能力者に禁じられた技術だった。

一方通行を、甚大な拒絶反応が襲った。体内のあらゆる器官が悲鳴

を上げ、それでも彼は、荒々しくも荘厳な声を白い大地へと響かせる。
一方通行は祈っていた。

無理やり娼館に連れられた女性が、一転してその場を光り輝く信仰
の場へ変貌させた逸話が存在する。

立ち位置程度で魂は汚されない。

罪人は、心から猛省し、心を入れ替えようと運命に抗い続け、己の
宿命を断ち切ろうとする者に救いを与えぬほど、この世界は冷たくは
ない。

善人か、悪人か。

人間か、怪物か。

科学か、魔術か。

問われれば、彼はきつとこう答えたはずだ。

決まっている。俺は俺という言葉以外に表現なンざできねエ、と。

あらゆる鎖を断ち切った彼は、そのまま歌い続けた。

そして。

善意で人は繋がっている

麦野沈利の『原子崩し』マルチダウンは、もう使い物にならない。

二、三発『撃つ』ことは可能でも、『体晶』でボロボロになった体では、そのあたりが限界だった。

滝壺理后はそもそも使い物にならない。体調が万全でないのもそうであるが、それ以前に彼女は後方支援向きだ。手足を使った肉体格闘も得意ではない。

フレンダは、得意の爆薬がもうほとんど残っていない。

つまり、現状でまともな戦力になるのは、霧丘の『座標確立』セトルポイントと最愛の『窒素装甲』オージェンステーマー、黒夜の『窒素爆槍』ボンバランクスだ。

しかし、彼女たちは大能力者^{レベル4}であっても、似たような系統の能力を持っていて。そのため、窒素に何か介入するような技術を使えば2人はほぼ完全に無力化が可能であり、霧丘にしても、光学迷彩など、指定座標を誤魔化すような技術を使用すれば、ある程度は崩すことが可能だ。

強力な能力というのはその反面、弱点が露呈しやすくもある。襲撃者はそのことがよく分かっていた。

だからこそ、これ見よがしに爆撃機から投下してきたのだろう。接近に気を使われている様子がない。それはつまり、気を使わなくても問題ないと判断されたということだった。

数十メートル先にいる兵士は、おおよそまともな格好をしていなかった。

黒一色の服装の中、顔を覆うのつぺりとした仮面だけが金と白であった。目や口の穴すら存在しない。

浜面はアサルトライフルの安全装置を親指で弾き、両手で構える。最愛と海鳥、霧丘も能力を発動済みであった。戦力外の麦野と滝壺、フレンダは、近くの洞窟へ避難するように指示を出しており、この場にはいない。

ぐるん！ と襲撃者の首がこちらへと向かった。最愛は警戒しながら、自らが盾となるために一歩前へと出る。

猶予はない。

浜面はためらいなく引き金を引いた。

右腕から殴られたような衝撃が来る。

一発目は、途中の木の幹に当たった。そして二発目は、襲撃者へと一直線に向かっていった。

しかし、甲高い音と共に、銃弾は弾かれた。

服装や仮面の表面ではない。金と白の仮面の真ん中から、突如として生物的な外見の翼が盾のように広がったのだ。

襲撃者の仮面には、自らの存在を誇示するかのようには、金色の文字が躍った。

Equ·DarkMatter·

かつて麦野を易々と撃破した、学園都市第二位の超能力^{レベル5}。

「おおおおおおおおおおおっ！」

浜面は叫びながら、フルオートで弾丸を撃ち続ける。しかし、襲撃者は仮面から複数の翼を出して容易くそれを弾いた。

轟！ と襲撃者が突進してくるのに合わせて、海鳥が動いた。

迎撃のためではない。槍の生成プロセスのひとつである『噴射』を制御し、窒素により小規模の爆発を起こしたのだ。

4人全員が、その衝撃に吹き飛ばされながら体制を立て直す。しかし、立て続けに攻撃が来た。

辺りの針葉樹がバターのように簡単に切断され、翼を間一髪で回避した浜面は、倒れてきた木に当たってその場に倒れた。針葉樹の下敷きにならなかつたのは、幸いと呼ぶべきか。

「超能力は炎と似ている」

襲撃者の1人がそんなことを言った。

炎をそのまま使うのは、原始人の松明と変わりない。しかし、文明人は炎を使って鉄を打つ。

すなわち、この世のものでない物質である未元物質^{ダークマター}を利用して作られた兵器には、この世のものとは異なる性質が宿る。

「……超余裕じゃありませんか」

最愛は吐き捨てた。霧丘が辺りの切り倒された針葉樹で襲撃者に殴りかかるが、その巨木は細切れにされた。

「今度は、麦野を『溶鉱炉』にでも超変えるつもりですか」

敵が距離を詰めてくる。

絶体絶命。

そんな状態の中、あと一歩で手が届きそうな位置に迫ったところで、浜面が言った。

「派手にその辺を転がっちゃまったせいで、ポケットも中身がどこかに行っちゃまったんだがよ」

その言葉を気にも留めなかった襲撃者であったが、ふと足元からジャリ、という音がした。

透明なガラスの破片だった。

「ちくしょう、最後の希望だったんだぞ」

絶対的に優位だった襲撃者に対して、浜面はこう言い放った。

「ロシアの工作部隊がばらまこうとしていた『細菌の壁』のパッケージ。わざわざ俺たちの前で踏みじらなくてもいいだろうがよ」

周囲の空気が一瞬で凍り付いた。

学園都市の部隊である彼らも、その細菌兵器について報告は聞いていた。

そして、彼らは特に対細菌兵器用の装備をしていない。『細菌の壁』は爆撃によって焼き払われているはずであり、まさか事前に浜面仕上 が確保していたのは、完全に予想外であったからだ。

「くそっ！」

初めて襲撃者に焦りが生まれた。意味がないと分かっているながらも、反射的に砕けたガラス容器から遠ざかろうとする。

「嘘だよ、マヌケ。そりゃ炭酸水のビンだ」

「!？」

雪の上に膝立ちになった浜面が、仮面から出た羽根と羽根の間に、

アサルトライフルを差し込む。

銃声が鳴り、襲撃者の1人が倒れた。

「貴様―」

他の襲撃者が、慌てて羽根で攻撃を再開する。まさか、自分たちから犠牲者が出るとは思っていなかったんだろう。それほどの戦力差だったはずなのだ。

しかし、浜面はその攻撃を倒れた人間の仮面から伸びた羽根の影に隠れることでやり過ごした。そして死体を蹴り飛ばす。ちょうど、その羽根が襲撃者を襲うような角度になる形で。

仮面から複数の白い翼を出し、全力で受け止める襲撃者。これ以上余裕がない状況の中で、最愛が襲撃者の背後に回り、その背後から拳を一撃お見舞いする。

鈍い音と共に、襲撃者が1人倒れた。

だが、そこが限界だった。

最後の1人が、海鳥の槍を翼で受け止めながら後退すると、彼女たちの足元を払うように、翼を大きく薙いだ。そして、地面に転がった浜面の首元を、片手でつかんでかろうじて残っていた近くの針葉樹に叩きつけた。

「貴様らは手を出すなよ」

一応、といった様子で、最愛たちに男は警告する。しかし、そこで口を開いたのは、浜面だった。

「……重要なことを忘れてんじゃねえのか？ 『体晶』のせいで体のバランスを壊したって、麦野は第4位だ。2、3発程度なら何とか撃てるぞ」

しかし、男の様子は変わらなかった。

「はったりだな。同じ手を二度も使えると思うな」

「そうかよ」

浜面は、だらりと両手の力を抜いた。

「なら、勝ち誇ったまま撃ち抜かれちまいな」

次の瞬間、眩い光と共に、浜面を掴んでいた右腕ごと、襲撃者の右胸まで空洞と化した。

「な……に……う？」

麦野沈利の一撃。しかし、彼女はまだ『体晶』の影響で正確な攻撃ができるほど回復していなかったはずだ。

しかし、その隣には1人の少女がいた。

滝壺理后。

他者のAIM拡散力場、すなわち能力そのものに干渉することが可能な少女。

その力を借りて、照準を補正したのだ。

襲撃者の肉体が動かなくなる。力尽きたのではない。わずかな力は残っているものの、座標を固定する能力に最後の反抗すら封じられたのだ。

その頭に、銃口が当てられる。

「これが、浜面仕上……」

「いいや、違うな」

ふらつく体でアサルトライフルを構える少年は、はつきりと告げた。

「これが『アイテム』だ。死んでも忘れるな」

駿斗が『ベツヘレムの星』に魔術をかけ、解析する様子を、ユリヤは横で見ている。

（本当に、とんでもない、ことです……）

片鱗しか理解が及んでいないものの、彼女にも駿斗が使う魔術の異様さは分かっていた。

これまでの常識を、真正面から破壊してくるような、そんな力。

（……まるで、アレイスター・クロウリー、ですね）

彼女は一人の魔術師の名前を連想した。

その男は、一代にして近代魔術の基礎を築き上げたといっても良

い、魔術世界の革命児である。

現在、表向きにはイギリス清教から派遣された猟犬に殺された『ことになって』、学園都市の統括理事長と同姓同名の魔術師と、その時。

周囲が、光で満たされた。

(これは……天界とは似て異なる、新世界!?)

たったの一瞬。

しかし、その瞬間だけ、神谷駿斗の周りの世界が変化したのを、ユリヤは確かに感じ取った。

『妖精』の魔術的記号を生まれながらにその体に持っていた彼女にとって、それはある意味で懐かしさすら覚える感覚だった。

しかし、それと同時に得体のしれない、何か怖いものを感じていた。

だが、そのことに駿斗本人は気が付いていないのか、空中要塞の解析作業に没頭している。

しばらくすると、彼は魔術の使用を終了して立ち上がる。

「……とんでもない要塞だが、概ねの構成は理解できた」

彼はそう言っ、その中身を雪の上に描き出す。

ファイアンマの要塞の内容が、丸裸にされる。奇しくも、それは別の場所でも起きていることであつた。

ファイアンマにとって、世界を救いたいと考えること自体は、至極自然なことだと考えていた。

それは、その右腕に特別な力を宿していたからだ。

例えば、今にも核ミサイルが発射されようとしているとき、目の前にある発射装置の制御盤の鍵が、その右手にあつたとする。

そのような状況ならば、その鍵を使ってミサイルの発射を止めようとするのは、非常に自然なことだろう。自分は軍人や警察官でないだとか、そんな理由でやらないことの方が、不自然なはずだ。

戦うことに理由などいらなかった。

それは、目の前の男だつて同じはずだった。立ち止まる理由など、

ないはずだった。
なのに。

ゴツキイイイイイン！ という、甲高い音が『ベツヘレムの星』に
鳴り響く。

上条当麻の幻想殺しが、右方のフィアンマの『第三の腕』を弾いた
音だった。

正面から受け止められないのであれば、受け流す。
なぜだ、とフィアンマは疑問に思う。

彼の右腕は『倒すべき敵の強度』に最適な出力を調整する。その『倒
すべき敵』を明確に浮き彫りにすることもまた、この第三次世界大戦
の役割だった。現在のフィアンマは、科学と魔術、その双方が入り混
じる世界大戦の全てを相手取っても勝てる存在であったはずだった。
「……なぜ、受け止められる」

彼は、遠隔制御霊装を掴み直す。

天空で収束した黄金の光が、一直線に上条当麻へと降り注ぐ。

「それほどの性能か？ たかが異能を消去するだけの力だろう！」
しかし、その幻想を上条当麻は打ち砕く。

雨のように降り注いだ無数の黄金の光、そのうちのひとつを右手で
弾き、それが炸裂した余波で、他の光線と相殺したのだ。

「まだ分かんねえのか？」

当麻の低く、重い声が響く。

フィアンマの右腕の性能は、敵対者の実力によって変動する。そし
て、その力を最大限に発揮するために、フィアンマは第三次世界大戦
を引き起こし、人々の悪意を増大させ、『倒すべき敵』の輪郭を明確に
させた。

しかし、これならこうも言えるはずだ。

「もしも、みんなの心の中に、テメエが思っているほどの悪意がなかつ
たとしたら。テメエが想定しているほどの力は引き出せねえってな」

フィアンマの眉が、微かに動いた。

「……それは、前提が間違っている」

遠隔制御霊装を強く握る彼の目に宿っているのは、憎悪だった。

「この世界は歪んでいる」

基幹となる四大属性の歪み。資源不足。民族間の対立。宗教の対立。食糧不足。環境破壊。それらの問題は、完全に解決されることなく、今日も続いている。

「こんな世界で、想定していた量の悪意を収穫できなかつただと？」

それは悪意という言葉の意味を知らぬ者の寝言に過ぎん！ ……現にこうして大戦は継続している。そんな人間の心の奥底が、綺麗なものだと信じたいのか!？」

「確かに、人間の心なんて、外から見えるものじゃない」

その叫びに、当麻は素直に認めた。

人間の心は、決して無垢で純粹で、善意の塊のようなものではない、と認めた。

しかし、その上で。

「人の本性は、それだけじゃない」

「何、だと……?」

「人の内側が、どうして一面しかないと断言できる」

人は、単に他の人とのつながりを求めるだけの生き物ではない。

たとえば、大切な人の身を守るために、他の人間を傷つける。

たとえば、何かを独占するために、他の人間を貶める。

たとえば、自分の安全と安寧と手にするために、時には人の命すら奪う。

しかし、それだけではない。そのような闇と同じか、それ以上の光だつて眠っているのだ。

たとえば、大切な誰かを守るために、己の努力をすべて注ぎ込む。

たとえば、その日に会った人に、惜しみなく善意の行動をささげる人もいる。

たとえば、不幸ばかりにあう男のために、時には軽口を叩きながら

も、どこまでも付き合ってくれる親友がいる。

そうでなければおかしい。人間の本性が悪意でしかないというのであれば、とつくに昔に人類は滅んでいなければならぬのだから。

誰かを傷つけようとする心よりも、誰かを守ろうとする心の方が多かった。

誰かを切り捨てようとする心よりも、誰かを救おうとする心の方が多かった。

誰かを恐れた心よりも、誰かを求めた心の方が多かった。

歴史が続いているというその事実こそが、滅びようとする心よりも、繋がるうとする心が強かったことの証明。

例えば、先ほどのミサイルの制御キーの例にしても。

「キーなんていらんのだよ。鍵穴に針金を差し込んでもいい。制御盤の蓋をこじ開けてパソコンのケーブルを突き刺してもいい。何なら、発射直前のミサイルそのものに砲弾をぶちこんでもいい」

キーのあるなしなんてものは、解決手段のひとつに過ぎない。持っていないからといって、ミサイルの発射をそのまま見送る理由など、ありはしない。

「……誰だって、戦っていいんだ」

バカな、とフィアンマは呟いた。そして、彼はようやく気が付く。

自分が相手にしていた上条当麻という男は、根本的に自分とは違う精神を抱いていたことに。

「インデックスは返してもらおうぞ。それだけじゃない。イギリスと学園都市、ローマ正教とロシア成教。科学と魔術。そんな風にいがみ合うのも、第三次世界大戦も、ここで終わらせてやる」

目の前にいる男は、世界最大の十字教宗派であるローマ正教、その最暗部のトップだ。その上、『ベツヘレムの星』に禁書目録の10万3000冊の知識、などで徹底的に強化されている。

そしてこの少年は、少しばかり特殊な右手を持っているだけの高校生。

しかし、憶する必要はなかった。

これは、親友とずっと続けてきたことなのだから。

「俺はテメエと違って、人間の強さってやつを信じてる」

その時。

バルセロナの海岸線突き破るように、異形の影が顔を覗かせた。
100メートル前後の、黄金の腕。

比較的戦火から離れた地域であり、周囲は厳戒態勢ではなかった。
怖々と、その場にいた全員がそれに注目する。

ボコボコボコ！ と。

地面から指先に向かって、黄金の腕が膨らんでいく。

そして。

破裂音が、世界に響き、30メートルを超える高波が全てを呑み込んだ。

その時。

東欧の戦線でも、同じように黄金の腕が破裂していた。

しかし、ここでは高波が起こる代わりに、謎の雷雲が周囲を襲っていた。

「嘘だろ……」

左右へ数キロ単位で膨張していく雲を前に、学園都市の男は、呆然と呟いた。

これでは避けようがない——そう考えたとき、ロシア軍の装甲車の中に引きずり込まれた。

「お前……」

「もう戦争がどうのこうの言っている場合じゃない。指揮系統もめちゃくちゃだ。世界のあちこちで似たようなことが起こってるって、未確認情報も飛び交っている」

女性兵士は吐き捨てるように言う。

「こっちも家族を守るために戦争やってるんだ。ここまできて、世界

の終わりだの人類滅亡だの、そんなのにつきあつてられるか！」

ズドン！ というすさまじい音が響き渡った。

周囲に、純金にも似た黄金のリングが突き刺さっている。半径100メートル以上の巨大な輪となっていた。

天使の輪のようだ、と女性兵士が思うのもつかの間、周囲には弧を描き先端が尖った肋骨のようなパーツや、川のような曲線を描く布の束などが、次々と生み出されていく。そして、周囲の針葉樹はそれに押しつぶされていった。

「……どうなつてやがるんだ、ちくしょう」

「知るか」

不幸中の幸いだったのは、ここが都市部ではなく雪原だったことか。

しかし、この現象が1回だけという保証はない。

「また出てきやがった、どうする!？」

「決まつてるだろう。破裂する前にケリをつける！ 手伝え学園都市。お前たちの火力が必要だ！」

すでに、彼らの目的は同じだった。

不要な死人を作り出すようなものは、オカルトだろうが『細菌の壁』だろうが、まとめてぶつ壊す。

そのころ。

ロシア成教特殊部隊『殲滅白書』^{Annihilatus}の長である女性・ワシリーサは、かつての部下だった女魔術師を思い切り蹴り飛ばし、その体を砲弾代わりに、施錠された両開きの扉を強引に破壊した。

軟禁されていた人物は、15歳ほどの少年だった。この、女性よりも線が細く、外に放り出せばすぐに永遠の眠りについてしまいそうな彼こそが、ロシア成教の総大主教なのである。

「はあい、ロシア成教のトップ様。童話の少年とヒロインの立場とは丸つきり逆になつちやっただけ、とりあえず魔王の城から助け出しに来ちやっただわよん」

「……私をまだ総大主教と呼んでくれる者が残っていたとはな」

結局、彼には何の力もなかった。皆が都合の良い『細工済みの調印』を免罪符に掲げて、撤回の言葉を聞こうとはしなかったのだ。

「可愛いので許す」

ワシリーサは、ふざけた様子で総大主教の自虐の言葉を遮った。そして、窓の向こうに見える巨大な要塞『ベツヘレムの星』を指さす。

あれは、世界中から十字教にとって重要なパーツを集めてつくられたものだ。しかし、それぞれのものは時代も違えば、設計者も違う。簡単にくつつけられるものではない。

つまり、接続のための術式があるはずなのだ。

「解析してしまえば、要塞のジョイントを切り崩すことができる」

「そうか。……確か、この近くに現象管理縮小再現施設があったな」

ロシア成教は『オカルトの検閲と削除』を旨とする宗派だ。その一環で、亡霊や心霊にまつわる現象の発生条件を探るための、ジオラマ作成と再現実験の施設が存在していた。

「リミッターを外せば、人間が扱うロシア成教式の魔術に対しても適応させられるわ」

「私に外せということか」

「できるかにやーん？」

ワシリーサに頭をなでられそうになった総大主教は、それをひよいと躲して扉へと向かう。一方で、躲されたことによつて余計に身をぞくぞくとさせながら、一本足の人食い^バいばあさん^ヤを連れた彼女はその後を追った。

『ベツヘレムの星』には、ロシア成教だけではなく、ローマ正教の術式も、当然ながら使われている。しかし、その点に関しても問題はなかった。

その時。

ローマ教皇という立場を捨てたマタイリースは、半壊したバチカン大聖堂の地下へと潜り込んでいた。目的は、右方のフィアンマが使

用している術式の情報だ。

そこへ、通信が入った。

『はあい、ダンディな紳士様。そっちの調子はいかがかしらん』
「ふん。つなぐ相手は私でいいのか？」

ロシア成教からの通信に応えながらも、奥へ歩みを進める。

『ところでさ、ローマ正教としてはオツケーな訳？』

右方のフィアンマは、現在のローマ正教ともロシア成教とも相容れない。

しかし、その一方でローマ正教に莫大な恩恵を与えてきたこともまた、事実だった。

つまり、フィアンマを止めることは、ローマ正教の基盤の一つを砕くことになる。

しかし、『元』ローマ教皇のマタイ・リースはこう断言した。
「構わんさ。……皆を守れぬ力など、持っていても意味はない」

彼は、地下にある膨大な資料に目をくれる。
それはかつて、禁書目録という小さな少女を招いたこともある巨大な書庫の蔵書だ。

「我々は、自らの敗北のために力を貸しているのですね」
「敗北ではない」

マタイ・リースの後についてきた若い神父の絞り出すような言葉を、元教皇は強く訂正した。

「我々は勝利のために戦っている」

禁書目録を招くほどの純度の高い知識は、それだけで人間の肉体を蝕んでいく。しかし、頭痛に顔をしかめる彼は、慌てて介抱しようとする若い神父を片手で制した。

「まだ戦える」

右方のフィアンマは、ローマ正教の最暗部だ。そして、ロシア成教からの支援を受けていた。

しかし、それだけではない。イギリス清教から、禁書目録の遠隔制御霊装を強奪している報告も受けている。

ならば、最後の鍵は。

「イギリス清教の、最大主教か……」

『ねーねー。どっちがあのお狐に話しかけるか、ジャンケンで決めない?』

彼らだけではない。

例えば、サーシャとレッツサーの場合。

「第二の回答ですが、フィアンマは私の肉体を利用して『神の力』を呼び出し、空一面の環境を自分の望むように変化させました。……ならば、私が、私自身が、フィアンマの計画にくさびを打ち込む要因になるかもしれない」

サーシャはL字のボールで床を傷つけながら、魔法陣を描いていた。その横にいるレッツサーは、ようやく脱出できると思っていたばかりに、やややくそくそ気味に言い放つ。

「ええいくそー。じゃあ手早く終わらせますよ!」

「第三の回答ですが、そこまですてもらわなくても……」

「どのみち、あなたがその道を選んだことで、脱出計画も一時停止は確定してしまっただけなんですよ」

レッツサーが親指で指した彼女の後ろでは、脱出用のコンテナから降りたロシア成教の魔術師たちが、彼女たちのほうへ近づいてきていた。

サーシャの描く魔法陣を、より複雑に広げていくために。

「こうなったら、結果を出すまで『流れ』は変わらないでしょう。だから、さっさとフィアンマの計画に一矢を報いるとしましょうよ」

その時。

黒を基調とした修道服をまとった少女たちの集団が、ロシアの雪原を高速で移動していた。

元アニエーゼ部隊。

「シスター・アニエーゼ。救助対象を発見」

「良いですか、シスター・アンジェレネ。シエルターには『神の子』の産着と飼葉桶の理論を応用します！」

「重傷者は次の爆発が起こる前に搬送させてしまってください！」
「軽傷については各シエルターへ！」

彼女たちが『シエルター』と呼んでいるものは、木の骨組みと大きな白い布を組み合わせたテントのようなものだった。しかし、それらはばね仕掛けの玩具のように十数秒で展開されていく。

「なん、だ。お前ら……」

所属を聞いても「そんなことを論じるためにここに来たのではないのでございますよ」と、見慣れた抗生物質ではなく草木でできた薬品を修道女は取り扱う。

そこに、通信の音が響き渡った。

『やれやれ。綺麗好きのフィアンマの野郎、ここまで大掃除のスケールを大きくするとは参ったのよ』

「やはり、これはフィアンマの浄化作戦の一環だど？」

『そう考えるのが無難よな。予定調和の破壊に加えて、再建のために必要な物資の生産まで行ってやがる。……とはいえ、人類では破壊できない新物質などと与えられたところで、ただのデカイゴミなのよ』

ま、1人の少年なら、苦も無く加工しやがるとは思うのよな、などという声が聞こえたのは、シエルターの壁に貼り付けられた、カードのようなものだった。

すると、そこで地響きが鳴る。すぐ近くの地面から、黄金の腕が突き出たのだ。

学園都市の男も、すぐ隣に寝ていたロシア兵も、痛みを顔にしかめながら起き上がろうとした。

「くそ、銃をよこせ」

せめて、こんな人の良いやつらが逃げるための時間くらいは稼ぐ。そんな思いで起き上がった彼だったが、その必要はなかった。

ゾーン！ と、一本の長大な刀が、黄金の腕を根元から切断したからだ。

2メートルを超す長さの刀を振り回す東洋人の女も異常ではあった。しかしそれ以上に、100メートル以上の長さを持つ黄金の腕が切断されることがおかしかった。腕は、その長さに見合うだけの太さを持つているため、一撃で切断されるはずがないはずだ。

しかし、結果は明確にそこにある。

『ようは、ビニール袋の切り口と同じ理屈です。標的に小さな傷をつけた上で、あとは標的自身の重さで切り口を強引に裂いてしまう』

唾然とする男たちの下に、修道女が手に持った、カンテラという古めかしい照明の光を当ててきた。

しかし、単に光に照らされただけで、彼女が光と共に立ち去った後も、体の表面が薄く光り、体が内側から支えられる感触があった。

「生き残るためにせよ、強敵の前に立ち塞がるにしても、まずは五体満足に体を動かせる環境を整えなければならぬのでございますよ」

学園都市の男は、まだ使える駆動鎧パワードスーツや戦車がある場所を、頭に思い描く。

間もなく、男は出撃の準備を終える。

その時。

イギリスの聖ジョージ大聖堂。

魔術師ステイル・マグヌスの肩から胸にかけて、光の粒子が集まってできた西洋剣が、容赦なく食い込んでいた。

豊穰神フレイの剣。自動的に動き、相手の急所に切り込む、不敗の聖剣。

しかし。

その斬撃は、あまりにもスムーズに入りすぎていた。まるで、ヨーグルトにスプーンを入れるように。

「蜃気楼だよ。よくある手だ」

背後から声が聞こえると同時、ズドン！ と、貼り付けられたルーンのカードが、少女を拘束する。

「警告。第47章第80節。心理的効果による心身の拘束効果を確認。思考能力に影響あり。拘束効果をダミー領域に誘導し、術式の逆算行動能力の確保を優先します」

ラミネート加工のカードに記されたルーンが、色褪せ始めた。

ルーンは染色と脱色の魔術と言われる。その『染色』が解かれれば、当然効力を失う。

(……遠隔制御霊装の割り込みで弱体化しているとはいえ、腐っても10万3000冊の魔導書図書館。この程度で封じられるとは思っていない)

しかし、それで構わない、とスタイルは思っていた。

理由はひとつ。

「その間にあの忌々しい男どもが片をつければ、それで僕たちの勝ちだ」

その時、ローラースチュアートがその場に現れた。

「ご褒美よん」

遠隔制御霊装ではなく、通信用の霊装を手にした彼女が言う。

「ま、ノルマは達成したるようだし、こちらも魔導書図書館のために尽力したるわよ」

そして。

イギリス清教、ローマ正教、ロシア成教。

十字教三大宗派が、ついに手を取り合った。

目的はたった一つ。右方のフィアンマの暴虐を食い止めること。

世界を縛り付け、蝕んでいく鎖を引きちぎる。

守るために、最後まで……

「おおおおおおおおおっー！」

天空を漂う『ベツヘレムの星』の上で、絶叫しながらファイアンマは『第三の腕』を振るう。

しかし、その行動が矛盾していることに、彼自身気が付いていた。元々、彼の腕は万能だった。振れば当たるのだから速度は要らず、当たれば倒せるのだから威力を求める必要もなかった。

つまり、ファイアンマがそれだけ弱体化していることを意味していた。

ズズン！ という震動が響く。当麻とファイアンマの戦いとは、完全に独立した震動だった。『ベツヘレムの星』そのものが崩壊を迎えようとしていたのだ。

要塞内のスピーカーが勝手に起動し、そこからレッサーの声が聞こえた。

『イギリス清教、ローマ正教、ロシア成教が「ベツヘレムの星」のジョイント用術式の解除を始めました！ 脱出用コンテナはもう数がありません！ 急いでくださいー！』

まただ。

イレギュラーが、善意という名の因子が、ファイアンマの計画にダメージを与える。

「終わりだ、ファイアンマ」

当麻は、はつきりと告げた。

ファイアンマの力は失われつつあり、儀式場である『ベツヘレムの星』も、限界を迎えている。

そして何より、本当に世界を救いたいのであれば、自分の右腕から力が失われつつあること、すなわち世界中の善意が悪意に勝ったこの状況を喜ばなくてはおかしいのだ。

「確かに」

ファイアンマは、率直に認めた。

「このままでは何もかもが有耶無耶に崩落していくことだろう。……

そう、このままではな」

不吉な言葉だった。

その直後。

ゴッ！ と上空にある黄金の力が揺らいだ。そして、それは一点に集まっっていく。

すなわち、彼らのいる『ベツヘレムの星』へと。

「言っておくが、遠隔制御霊装れを使ったわけではないぞ。……何者からの協力も取り付けられなかったが、時間は俺様に味方した」

本来は、天空の変化に合わせるために、段階的に地上も変化していくはずだった。しかし、地上がそれを拒み続けた結果、天空と地上で想定外の歪みを生じてしまったのだ。

その結果、莫大な量の天使テレズマの力が、地上へ降下されることとなった。地表と雷雲の間で電位差が生じたことによつて発生する、落雷のようなものだ。

当麻は、その事実には歯ぎしりをする。

「天使の体をつくつているのと同じ、莫大なエネルギーの塊だぞ。あんなものが地上に落下したら、変質がどうか言う前に、メチャクチャな爆発が地上を舐め尽くすに決まってる！」

「力の量から察するに、少なくともユーラシア大陸の全土は光に呑み込まれるだろう」

その莫大すぎる力は、この戦争の中で芽生え始めていた善意を呑み込み、上から塗りつぶすだろう。それによつて生み出される諦観と絶望は、ファイアンマの力を増大させることとなる。

「……ファイアンマ……」

「お前の方法で、世界を救うには遅すぎた」

余裕のある笑みを浮かべて、ファイアンマは宣言する。

「これで、俺様の勝ちだ」

「……どうやら、ろくでもないことが起ころうとしているみたいだな」

上空の要塞を、駿斗は眺める。

要塞にいくつかの楔を打ち込んだ駿斗は、あとは親友がフィアンマを倒すまでにするべきことを、考えていた。

しかし、その時、莫大な力を感じ取ったのだ。

『ベツヘレムの星』。そこに、とてつもない量の『天使の力』が蓄えられている。

「っ！ この量は……！」

ユリヤやジユダも気が付いたのか、体を緊張でこわばらせていた。

「あのバカ野郎は、この世界を終わらせる気でもあるのか!? おい、部下としてどうなんだよ、お前ら！」

「フィアンマ様からすれば、この世界を壊したところで、後からどうとでもなる、と考えていらっしやるのでしよう」

少々焦っている様子はあるが、それでもこのローマ正教徒は変わらなかった。

「で、お前は どうするんだ?」

「質問を質問で返すのは心苦しいのですが、あなたは どうするのですか?」

ジユダは、駿斗を真正面から見つめた。

彼は今、これまで頼ってきたものを全て失おうとしている状態だ。しかし、それでも駿斗を止めないということは、彼なりに覚悟を決めているのかもしれない。

駿斗は、彼の目を見てそんなことを考えた。

「決まってるさ。フィアンマの野郎がどこまでも地上の『浄化』とやらにこだわるというなら、その幻想をぶち殺す! 2人とも、その手足と知識を貸してもらおうぞ。あれが地表にたどり着く前に、空中で迎撃するための、大規模魔術を構築する」

「3人で、ですか?」

「できるに決まっているさ」

ローマ正教最暗部『十二使徒』の1人、裏切り者と呼ばれたイスカテリオのユダの名を冠する男、ジユダ。

生まれながらにして『妖精』という稀有な魔術的素質を持つ少女、ユリヤ。

そして、科学的な能力だろうが、オカルトに染まった魔術だろうが、人間の術式だけでなく天使の術式にすら手を届かせるイレギュラー、神谷駿斗。

「さあ、あと一息だ」

駿斗は、今までにない感覚で魔術を行使する。

その姿は、まるで天界に住む存在のような神々しさを持っていて……しかし、あの大天使とはとても似つかないものだった。

Nu-AD1967の弾頭側面にあつた小さな窓のような窪みに布を突っ込んだ美琴は、そこでようやく息を吐いた。

「さらに超音波式とかいろいろ出されても困るわよ」

「通信内容の混乱ぶりから察するに、これ以上の策はないようです、とミサカは報告します」

そして、どうやら彼らは次に打つ手がないたため、逃走に移るらしい。美琴は受光部の強化ガラスを粉々に砕くと、コンピュータと接続するためのポイントを3か所ほど潰す。これで、この弾頭は使い物にならなくなった。

「別の『外殻』に、また詰め直されたら話は変わるけどね」

「弾頭だけで2トンはありますし、クレーンもなしに持ち運ぶことはできないでしょう、とミサカは予測をつけます」

「念のために、ロシア当局か学園都市にこの場所を流しておいて」

これで、ようやく核ミサイルの問題は解決した。

長い前座だった。そもそも、彼女はこんなことをするためにロシアにやってきたのではない。

「航空戦力のつもりか移動手段なのかは知らないけど、あそこにVTOL機があるでしょ。あれを使えば、天空の要塞まで飛んでいけるんじゃない?」

一方通行の歌は止んでいた。

その全身は赤い血にまみれており、呼吸という生命として最低限の動きにすら、その肉体の全てが悲鳴を上げていた。

これ以上は歌えない。

しかし、歌う必要もない。

「……大、丈夫…？　ってミサカはミサカは尋ねてみたり」

はつきりと、声が聞こえた。

先ほどまで、意識すらなかった少女の言葉。その声色に、細くともすっかりとした芯が通っているのを、一方通行は感じ取った。

これ以上、打ち止めが苦しめられることはないのだ。彼は、幼い体をしっかりと抱きしめる。

「ちくしょう。良かった、本当に良かった……っ！」

今までの一方通行を知る者からしたら、驚く言葉かもしれない。しかし、何をもって『本来の』などと言えるのだろうか。

そもそも、大人が生み出した『闇』に呑み込まれる前は、彼も一人の少年に過ぎなかったはずなのだ。

その片鱗を、この少年のどこかに見ていたからこそ、芳川桔梗や黄泉川愛穂は守ろうとしていたのかもしれない。

「感動の再会をしている最中に水を差すように申し訳ないんだけどさ」

しかしその時、傍らにいた番外^{ミサカワリスト}個体が、警戒を含んだ調子で口を挟んだ。

「このクソつたれの戦争は、このままハッピーエンドで終わらせてくれる様子じゃなさそうよ」

ゾワリ！　と。

莫大な重圧が黄金の天空から放たれた。

海原光貴。羊皮紙。水の天使。それらから放出されていたものを、凄まじく濃縮したような感覚。

それが、地上へ照準を定めているのが分かる。

相変わらず、理解はできない。だが、

「……発射されれば、まともな結末にはなりそオにねエな」

あれに『反射』は通用しないだろう。であれば、全ては失われる。
アクセラレータ
一方通行自身も、打ち止めも、番外個体も……1人残らず。

「……ふざけやがって」

ボン！ と音を立てて、その背中から黒翼が飛び出した。彼の怒りの象徴。垣根帝督を叩き潰し、上条当麻に振るった『暴力』そのもの。
「番外個体」

しかし、これまでとは異なり、彼の言葉は静かだった。

「俺はあれを止めてくる。このガキを任せられるか」

「ロシア側から？ 学園都市側から？」

「全てからだ」

無茶苦茶な要求だった。

それでも、あの都市の連中に吠え面をかかせると決めている以上、彼女は承諾する。

すると、そこで小さな手が一方通行の服を掴んだ。

「どこへ行くの、ってミサカはミサカは質問してみたり」

「心配はいらねエよ。すぐに終わらせる」

打ち止めは、彼が行おうとしていることを、おそらく理解している。

実際、彼は戻ってくるとも帰ってくるとも言わなかった。

「嫌だよ。ずっと一緒にいたいよって、ミサカはミサカはお願いしてみる」

「……そオだな」

最後の最後に見せたその表情は、怪物とはかけ離れた子供ような表情で。

「俺も、ずっと一緒にいたかった」

バキバキバキバキ！ と氷に亀裂が入るような音と共に、翼の色が変わっていく。墨のような漆黒が、雪のような純白へと。

その頭上には、同色の天使の輪のようなものであった。

精神の変異。

それを見せつけるかのような姿へ変わった一方通行は、空中へと身を躍らせる。100メートル以上の巨大な翼は、風の力ではない得体のしれないエネルギーを浮力へと変えていた。

一方通行の行く先には、要塞の光とは別に、いつの間にか大規模な光輪があつた。相変わらず得体のしれないエネルギーを感じるが、どうやらそれは、あの要塞から放たれる光を受け止めるようにできていることを、得体のしれないままに感じた。

だが、それだけでは足りないことも予想できた。だから。

威力を減衰されながらも、その光輪を力づくで貫通した光の渦と、地上から飛び立った白い影が、上空8000メートルで衝突した。

ズズウウウン！ と莫大な衝撃が『ベツヘレムの星』を揺るがした。地上に狙いを定めた黄金の光が放たれ、爆発した。

「なん、だ……う？」

しかし、右方のファイアンマが予想していたような大災害が地上を襲うことはなかった。要塞から放たれた莫大な天使テレスマの力は、何らかの要因によって阻害されてしまったのだ。

「地上には戦略上の条件を満たすだけの破壊が起こり、俺様の勝利を後押しするはずだった、それなのに何が……ッ!？」

望んできた悲劇は起きず、世界中の悪意は善意の前に消え去りつつあつた。

それはあくまで一時的なものに過ぎないのかもしれない。世界規模のスポーツの祭典の時に、一時的に世界中の国と一体感を感じるようなものかもしれない。

しかし、一時的であつたにしろ、世界中の人は明確にこの思いを示した。

この世界は、自分たちだけでも十分だ。上から目線の救いなどクソくらえだ、と。

「もういいか。……この辺りが、お前の幻想の引き際だよ」

その答えを目にした上条当麻もまた、己の足で駆け出した。

余計な小細工などいらぬ、そのまま全力で駆け出し、フィアンマが振るう『第三の腕』に真正面から右拳を叩きつける。

異形の腕が、一瞬で吹き飛ばされた。かろうじて受肉していたそれが、血肉と鮮血をまき散らし、依り代を失う。

「な、これ！」

上条当麻の右手『幻想殺し』イマジナリーキラーは、以前より変わらない。しかし、地上で小さな善意がさざ波のように広がった結果、フィアンマの力の軸となっていたものは、折れてしまったのだ。

もはや、上条当麻を撃破するどころか、水平方向へ数キロ単位で移動する力も失っていた。

「チツ——ッ！」

もはや己の『腕』に頼ることができなくなったフィアンマは、遠隔制御霊装を突き出す。防御が甘くなったためかすさまじい激痛が頭を走るが、無視して検索を実行した。

しかし、目の前の敵を絶対に倒すというその信念は、無機質な声に阻まれた。

（——警告。第88章第1節。作業中の『本体』に異常あり。外的な影響を強く受けすぎた影響で、作業効率に深刻な弊害が発生しています）

禁書目録の本体は、聖ジョージ大聖堂に保管されている。すなわち、イギリス清教が何かしらの手を打ったのだろう。

最後の手段も断られた。

あくまでも頂点に立つものとして力を磨き続けた右方のフィアンマ。

皆の力を借りてその頂点に立ち向かおうとあがき続けた上条当麻。

ここに、両者の違いが明確に表れた。

深く、鋭く——たった1人の男子高校生が、世界の王の懐まで突き進む。

その時。

ずっ……！ と、上条当麻の足元がいきなり沈んだ。

『ベツヘレムの星』の弱体化の影響だった。

つまり、

(不幸)

最後の最後で、上条当麻の行く手を阻もうとしたものを見て、フィアンマはその唇を不気味に歪めた。

(5秒、10秒あればそれでいい！ その間に魔導書図書館の設定を強引に組み替える！)

高負荷により禁書目録すら失われかねないが、それでもフィアンマは目の前の敵を洗い流そうとする。

「お」

しかし、上条当麻の進撃は止まらない。

「おおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

だんツ！ と。

今まさに崩れたその足場から、上条当麻は大きく跳び、両者を隔てる亀裂を乗り越えた。

フィアンマは、ようやく目の前の敵が何者であるのかを知る。

(ふぎ、けるな……)

フィアンマが『神の子』の奇跡や恩恵を受けようと、上条当麻は全くお構いなしに突き進む。

(幸運も不幸も関係ない。こいつはそういった『曖昧なもの』を全部自分の足で踏破する力を持ってやがる——ツ！)

「テメエが、そんな方法でなけりや誰一人救えねえって思ってたなら」
彼は、右拳に全ての力を乗せる。

「まずは、その幻想をぶち殺す！」

轟音がさく裂した。

何者の攻撃も受け付けなかったフィアンマの顔面に拳を叩きつけた当麻は、そのままの勢いで強敵をなぎ倒す。

そして。

わずかにその形を保っていた『第三の腕』が空気の中へ溶けていくかのように消え、インデックスの遠隔制御霊装がその手から零れ落ちた。

右方のフィアンマの力の核である『第三の腕』の消失は、それを源としていた『ベツヘレムの星』にも大きな影響を与えていた。

先ほどまでよりも大きな揺れが要塞全体を襲い、このままではいずれ下降が始まるだろう。

フィアンマは朦朧とする意識の中で、要塞の中のスピーカーから声が響くのを聞いた。どうやら、彼と一緒にいた魔術師が、サーシャⅡクロイツェフと共に脱出するらしい。そして、上条当麻にもここからの脱出を促していた。

この要塞には、脱出用のコンテナがいくつか用意されていたが、そのほとんどが使い物にならないほど破壊されていた。

残りは、1人しか使用できない個人用のものが1基だけ。

上条当麻と右方のフィアンマ、どちらが使うのかは明白だった。

(ここまでか)

この世界に住む人間が救いを拒むというのであれば、もはや構わない。自らが選んだ道に従って、勝手に滅びへ突き進むがいい。なのに。

「おい、行くぞ」

上条当麻は、そう言ってフィアンマを強引に起こした。状況が分からんのか。

「脱出用のコンテナは使い物にならん。個人用のものが1基動かせるかどうかといったところだ。俺様か、お前か。どちらか片方しか助からん」

「らしいな」

彼は、そこで息を吐く。

そして、

「なら、お前が脱出しろ。早く行くぞ」

今度こそ、ファイアンマは絶句した。一方で、当麻は構わずに彼の体を引きずりながら、最下層のフロアにある脱出用のコンテナへと向かっていく。

ここで、ファイアンマを見捨てたところで、批判はおろか、賞賛の方が多いだろうにも拘わらず。

最後に、右手でコンテナが壊されないか、当麻は恐る恐る扉に手を伸ばすと、無事にその扉を開けて、ファイアンマの体を押し込めた。

「……良いのか……？ 俺様は、『世界中』なんてものがどれだけ広い場所なのかも分からん人間だぞ」

「そうか」

当麻はそう言つて笑つた。なぜ笑つたのかも、ファイアンマには分からなかった。

「なら、これからたくさん確かめてみるよ」

最後のコンテナが射出され、これでこの要塞から脱出する術は失われた。

最も、上条当麻は意識していなかったが、ひとつだけ、『ベツヘレムの星』から脱出する当てはあった。

そう、神谷駿斗だ。

別の位相から放たれた莫大な天使テレズマの力の威力を、どうにか減衰させることに成功した彼らは、その後、要塞に行くための手段を考えていた。

現代の魔術師は、空を飛ばない。

厳密には、空を飛ぶための魔術は山のようにある。しかし、十二使徒のひとりであるペテロが『祈っただけで空を飛ぶ魔術師シモンIIマクスを地に落とした』という有名な伝承を基にした撃墜術式が発達しすぎたため、空を飛ぶのは簡単であるが、落とすのも簡単というジレ

ンマが存在している。

これに対抗するには、空中要塞クラスの対撃墜術式専用の防御術式を組まなければならないが、これは駿斗でも時間がかかりそうだ。

すると、残る手段は、ユリヤの力を借りて向かう、ということになる。『妖精』の神出鬼没な性質を利用した、転移術式だ。

「ですが、この術式は私、の肉体を転移、させることを前提としています。『妖精』の素養をベースにしているため、他の人を転移、させることまでは」

「それをどうにかするのが、俺の力だろ。ユリヤは、要するに『射出装置』になってほしいんだ。そこに搭載される弾丸は、俺」

駿斗は、テキパキと指示を出す。

「それで、ジユダと、こつそりと近づいてきているシメオンとタデーはユリヤのバックアップに回ってほしい」

その言葉の直後、林だけが立ち並ぶ雪原から、魔術で気配遮断と認識阻害を行っていた2人が現れた。

「その頼みを、私たちが聞くとしても？」

「聞かなけりや、どうしようもないだろ？ どちらにしろ、あの要塞が崩壊を始めていて、地上の変質が完全に止まっているということとは、フィアンマが敗北したことを示している」

駿斗の言葉に、彼らは苦い表情をした。

2人からすれば、今まで信じてきたもの全てから裏切られたような思いなのかもしれない。

「まあ、他にも言いたいことはあるだろうが……今は、まずあの要塞の後始末を考えてくれ。お前たちも、まさか氷河期の再来を望んでいるわけじゃないだろ？」

「それはそうですが……」

「これを機に、右方のフィアンマから独立すればいいさ」

「独立？」

その言葉に、彼らは首を傾げた。

神谷駿斗からすれば、『十二使徒』どころか、ローマ正教を離れる、と言ってもおかしくないはずだ。

しかし、彼はローマ正教ではなく右方のフィアンマから離れる、と言った。

実際のところ、フィアンマの行動はローマ正教の本意とは言い難いものとなっていた。そのことくらい、この少年は理解しているはずだ。

つまり、駿斗は右方のフィアンマから距離を置いてみる、と言っているだけで、アニエーゼたちのようにローマ正教から離れる、とは言っていないのである。

今まで1か月の間、十字教最大宗派の最暗部から指名手配を受けていた、という自覚が足りないのではないだろうか。

そんなことを考える3人であったが、当然ながら駿斗はそんなことを気にせず、自分を『ベツヘレムの星』へ転移させるための魔法陣を描いている。

はつきり言って、隙だらけだった。

(……まったく、この男は)

他の魔術師を圧倒する才能を持ちながら、それに自信を持つてはいても、誇示することはない。そして、あらゆる魔術を使っておきながら、神を信じることはない科学の街に育てられた少年。

そして、それこそ『神上』にさえ届くのではないかと思われるほどの力を持っていながら、一番肝心なところでは、右手の拳に頼る。

生まれながらにして魔術の世界だけで育ってきた彼らにとって、それはとても奇異な生き方だった。

しかし、それでいながら、それは羨ましさをすら感じるものであった。

(いけませんね。こんなことを感じては)

ローマ正教徒の最暗部たる自分が、他教徒、それも科学の街の学生に、神々しさを覚えるなど、あつてはならない重罪だ。

それでも、この男の生き方には、何かを感じさせる。

神や神の子とは、確かにほど遠い。比べるのも失礼なほどに。

にも拘わらず、大勢の聖人と肩を並べても遜色ないほどの、結果を出してきた。

イマジックリエイト

(幻想創造、ですか)

神也逸登。

神より逸れる存在へ登りつめる者。

「よし、これで一気にあの星まで行く！」

歪な形の船をくみ上げた彼は、そう言ってみんなに合図する。

神の御加護があらんことを。

彼が消える瞬間、誰かがそう呟いた。

「もつと右！ もうちよい！ もつと近くに寄って！」

御坂美琴は、VTOL機の中で操縦桿を握る妹達シスターズへ声を放つ。

ここまで来てやっと、あのバカと同じ時間、同じ空間に到達できた

！

「お姉様オリジナル、顔がにやけて不気味です、とミサカは指摘します」

「ぶふっ!? そ、そんなことにやい！ 比較対象がアンタだからおかしな判断になってるだけよ！」

妹達はわずかに機体を傾けるような格好で、VTOL機の右の主翼の先端を要塞に接近させていった。

あと数メートルほどの位置であるが、要塞が不規則に揺れているため、適切な距離がつかめないでいる。

「ここがギリギリ……着陸は難しいかもしれませんが、とミサカは操縦桿を握りしめます」

VTOL機は地表にゆっくりと着陸させるものだ。そのため、大きく震動する要塞に無理やり着陸を試みれば、胴体部分を激突させてしまうかもしれない。

「できるだけバランスを保たせて！ 私が直接、主翼を辿って、あの馬鹿を引きずり上げる！」

彼女はベルトを外すと、磁力で貼り付きながら四つん這いで主翼を移動する。

しかし、その途中でがくん、と要塞が大きく震動した。徐々に高度が下がっていく要塞は、先ほどまでのような安定感を失っている。要塞を支えていた糸が、一本ずつちぎれていくかのような感じだった。

(届け！)

その時。

彼女は、ツンツン頭の少年と目が合った。突如として降って湧いた脱出手段に戸惑っている様子である。

美琴は、全力で手を伸ばす。

しかし。

少年は突如として、首を横に振って伸ばそうとしていた手をひっこめた。

声は聞こえないが、唇の動きで言葉は分かった。

——まだ、やるべきことがある。

ガコン！ と一層大きく揺れる要塞を見て美琴は、ここであの馬鹿を回収しなければ、と強く感じた。しかし、その直感とは反対に、妹達は機体を大きく揺らして要塞から遠ざかる。

「ちよつと！ どういうつもりなのよ！」

「要塞の震動が一定値を超えました、と、ミサカは報告します。これ以上接近を続けければ、この機体が激突する恐れがあります」

「——ッ！」

美琴は主翼に張り付いたまま、磁力を操った。学生服のボタンでも、ベルトの金具でも何でもいい。とにかく、強引に引きずり上げてやる、と。

しかし、その糸はプツリと簡単に切れてしまう。

「えっ……っ！」

意味が分からず呆けるが、しかし彼女はすぐに理解した。

あの少年の右手に宿る、能力を無効化させる謎の力。それが最後の命綱を断ってしまったのだ、と。

たとえ、どれほどの戦車をまとめて相手にする力を持っていたのだとしても、核ミサイルの発射すら阻止することができるとしては、たまったひとりの少年を、救い出すには足りなかったのだ。

御坂美琴の絶叫が、ロシアの上空に響き渡った。

新たなる時代へ

(まだ、やるべきことがある)

遠ざかるV T O L機を確認した当麻は、自らその救いの手に背を向けた。

半径40キロを超える『ベツヘレムの星』が地上に落下すれば、この地球にどのような被害がもたらされるか、見当もつかない。

それに、インデックスの遠隔制御霊装が、フィアンマの手から落ちた後、この要塞のどこかに転がっているはずだ。それを探そうと考えていると、声がした。

『とうま』

フィアンマの手から離れても、霊装はまだ起動していた。ただし、誰の手にも収まっていなかったため、ここにある意識が漂っているのだ。

『どうして脱出しなかったの?』

「何も終わっていないからだ」

当麻はそう答えながら、要塞の中を走った。目的地は、少女の存在が教えてくれる。

「お前の霊装のこともそうだけど、この要塞そのものの面倒も見なくちゃならないからな」

そう、上条当麻の行動目標は終わっていない。

この馬鹿げた戦争は、未だ終わりを告げていない。

「必ず、戻る」

そう約束した後、彼はこの要塞と通信するための周波数を彼女に教えた。スピーカーのロシア語は読めなかったが、その部分の数字だけは理解できた。

「イギリス清教の方に伝えてくれ。周波数50.9MHz。これでこのスピーカーと繋がられる」

これだけの大質量を安全に落下させる方法など、見当もつかない。きちんとした組織のアドバイスが、必要だ。

『できないよ。……私は自分の意志で、体に戻ることができない』
「だよな」

彼は忌々しい円筒型の霊装に手を伸ばす。

「だから、一足先に戻ってくれ」

霊装が破壊されたのと同時に、半透明の少女の体も薄れて消滅した。

それは、最後の戦いの始まりを意味している。

勝利の報酬として差し出されたのは、この惑星の命運だった。

ローマ正教とロシア成教が開示した資料によると、『ベツヘレムの星』は合計20基の大型上昇用霊装で空中を漂っているらしい。

しかし、動力源であったファイアンマを失ったことで、連鎖的に『ベツヘレムの星』の浮力は減少しつつあり、このままでは1時間後に完全に浮力を消失、地表へ自由落下していく計算だ。

そのため、大型上昇用霊装を破壊すれば、落下の向きと進行方向を制御することが可能である。つまり、イマジネレイカー幻想殺しにはおあつらえ向きということだ。

『詳しい位置は口頭で伝えるが、南方にある3番、9番、13番を破壊するんだ。北極海の端まで向かわせろギリギリまで速度を落とし、水面に着水することで衝撃を殺す』

「大型上昇用の霊装を壊すことで、かえって落下速度を速めることにはならないのか？」

『動力源は同じだ。数が減れば、ひとつごとの出力が増す。かえって、間引いた方が瞬間的な出力は上がるかもしれないな』

目的の3番霊装は、まるで工場のようなだった。太いパイプが何十本も並び、中には金属製の階段や通路が並んでいる。

バン！ と当麻がそれに右手を叩きつけると、パイプに無数の亀裂が走った後、内部で連続して爆発が発生した。それに巻き込まれないうちに、当麻はその場を駆け出す。

その時。

突如として、その場に虹色の輝きが現れた。そして、そこから一人の少年の影が姿を現す。

その姿は、よく知っているものだった。

「駿斗……！」

「よう、当麻。親友がわざわざ迎えに来てやったぜ」

当麻の記憶では、駿斗はあらゆる能力を使うことはできても、空間移動系統だけは『理解できても使うのは難しい』と使用を避けていたはずだった。にも拘わらず、いきなり上空数千メートルへの転移を成し遂げていることに、違和感を覚える。

「当麻、今はどんな状況なんだ？　ファイアンマの野郎は倒したんだろ？」

「ああ……それよりも、今はこの要塞を無事に着水させたい。駿斗も協力してくれ」

彼らは、共に次の9番霊装まで走り出した。駿斗が先に行くことで、最短距離を移動する上で邪魔になるものを排除し、移動をより効率化していく。

9番霊装を目の前にした2人は思った。ようやく、この長い戦争も終わる。でも、最後にはなんとかなるんだ、と。

しかし、

『何だこれは……。巨大な……天使テレズマの力？』

スピーカーから、ステイルの焦ったような声が聞こえた。

不吉な予感が、2人の中で増大する。

『何で今更、ミーシャクロイツェフが浮上しつつあるんだ!』

そのころ、ロンドン、聖ジョージ大聖堂では、20歳程度のシスターがうめき声を上げた。ロシアの魔術的な力の流れをモニターしていた人間だ。

ミーシャクロイツェフが、北極の氷を手に入れようとしている。「新たな力を……いや、肉体を補充するつもりか」

あの天使が北極の氷を溶かしてしまったら、北極海に面する地域では大規模な津波に呑み込まれる。

しかも、今のミーシャクロイツェフは手綱が握られていない状態

だ。それが、今以上の力を手にした場合、どれほど被害が拡大するの
かも分からない。

そもそも、この世界にある物質だけで、神が作った大天使の全容量
を抱えられるとは思えない。『御使墮し』エンゼルフォールの時のミーシャークロイ
ツエフでさえ、あくまでも『不完全な』顕現に過ぎなかったのだ。

つまり、この世界にある物質で構成された肉体に新たに莫大な天使
の力を流し込めば、耐えきれずに大爆発を起こすはずだ。

北極点を中心にした、惑星の起爆。

最低でも、北半球の生命体は死滅。下手をしたら、その衝撃で惑星
の公転軌道そのものに影響が出る恐れもある。そうなれば、地球は海
が干上がるほどの灼熱の星になるか、あるいはすべての海が凍り付く
ほどの極寒の星になるか。

(しかし、どうやって止める)

旧来のミーシャでさえ、全ての力を結集したところで、食い止めら
れるかどうか分からない。かといって、手をこまねいていれば、破滅
的な結末を迎えてしまう。

その時。

「……おい、何をしている?」

ステイルは思わず呟いた。

『ベツヘレムの星』の落下軌道が変化している。

要塞に不具合は見られない。それは、明確に制御を握っている者の
手で、安全なルートを外れていた。

そう、ミーシャークロイツエフへとまっすぐに向かっていたのだ。

高速で移動する大天使は、進路上の白い雪を吸い上げていた。その
ため、その移動の軌跡がはつきりと地表に残っていた。

その進行を止める者はいない。魔術らしき光を飛ばす影もあつた
が、ただ通過しただけで、攻撃ごと人間も吹き飛ばされた。

大天使が、沿岸から北極海へ到達する。

同時。

真上から、『ベツヘレムの星』がそのまま落下した。

大天使ごと、要塞が海に落ちた。その上を、二人の高校生は懸命に走る。極寒の海水が流れ込んでくるのも気に留めず、ひたすら。

その先には、月のような青白い光があった。

ここに来るまで、いろいろなことがあった。

かつて救えなかった教え子を守るため、大勢の学生を利用しようとした先生を、電撃の少女と止めた。そのすぐ後に、白い修道服の少女と出会い、魔術との邂逅を果たした。特別な『血』を持つ少女を助けるため、錬金術師と戦った。電撃の少女とその妹達を助けるため、暗部組織と命がけの戦いをした。その中で見つけた幼馴染の少女を『裏』から『表』の世界へ引きずり上げるため、第四位の超能力者とも戦った。その後には、最強の怪物と死闘を繰り広げた。海の家では『聖人』と肩を並べて大天使と戦った。8月31日にはいろいろなことがあった。AIM拡散力場の集合体である『ともだち』を助けるため、ゴーレムに立ち向かった。『法の書』を解読できるという触れ込みのシスターを助けるため、十字教最大宗派に喧嘩を売った。空間移動が印象的な、常盤台中学の風紀委員ジャックズメントにかかわったこともあった。大覇星祭では運営委員やクラスメイトが巻き込まれる事態になりながらも『使徒 十字』の脅威から学園都市を守った。イタリアのキオツジアではかつて敵だった少女を守るため、氷の艦隊に突撃した。9月30日には変わり果てた『ともだち』を助けるため、『十二使徒』を率いる『神の右席』と衝突した。クラスメイトと食べたすき焼きやおいしかったし、常盤台中学の少女の母親を守るため、スキルアウトともぶつかった。フランスのアビニオンではC文書をめぐって『神の右席』と『十二使徒』と戦った。独立記念日には、裏で暗躍する暗部組織の争いから1人でも多くの命を守るため、学園都市を駆け回った。学園都市の地下街では、天草式十字凄教と一緒に、『二重聖人』と『十二使

徒』を相手に戦った。イギリスのロンドンでは、第二王女が主導するクーデターを食い止めた。

そして今。

それらの行動で、少しでもこの世界のくだらない幻想を打ち砕き、優しい幻想を生み出してきたと思っっているから。

最大の敵、大天使に向かってまっすぐ突き進むことができる。

(……確かに、この世界はいつか滅んでしまうのかもしれない)

惑星にだって寿命はあるし、その前に地球の表面から生き物がいなくなってしまう可能性の方が高いのかもしれない。

でも、

何も、こんな悲劇的な結末じゃなくてもいいはずだ。

そいつを食い止めるために、戦ったっていいはずだ。

ドン！ と3つの影が一か所で交差した。

そして。

10月30日。

ローマ正教とロシア成教。

イギリス清教と学園都市。

ふたつの勢力が争った第三次世界大戦は、終結した。

終戦間際、北極海に要塞『ベツヘレムの星』の着水を確認。しかし、沿岸部での若干の水害があったものの、死者は確認されなかった。

着水の時の衝撃で要塞は完全に崩壊し、同時にミーシャークロイツエフの消失も確認された。

——そして、同海域における十字教三大宗派の連合捜索隊の努力も虚しく、水温2度の海水の中から生存者が発見されることはなかった……。

逃げるためのアシを探さなければならぬ。

浜面仕上は、太い枝を使って雪を掘っていた。「細菌の壁」をしかけた工作部隊が使っていた車が、学園都市による空爆で雪の下に埋まっているはずだった。

結局、何も見つからなかった。

細菌兵器の散布の阻止、第4位との戦い、未元物質ダークマターによって鍛え上げられた『この世のものではない』兵器を扱う学園都市の部隊の撃破。

その結果だけ見れば、凄まじいものだった。しかし、肝心な『学園都市との交渉材料』が見つかっていなければ、本末転倒だった。

「はまづら。これからどうする。襲撃部隊が使っていた『仮面』でも回収して、交渉材料への足掛かりにする？」

「拾えるものは拾っておくけど、たぶんそれだけじゃ足りない」

「私の血を保険にしよう」

麦野も太い枝を動かしながら参加する。

「第4位のDNAマップよ。私たちそれぞれで持っておけば、けん制できるチャンスが増えるかもしれない」

「……クソつたれ」

すると、浜面が別の方向を向いていることに、彼女たちは気が付いた。他の6人も、その方向へ視線を動かそうとする。

その時、ザザッ！ と雪を蹴散らす足音が複数響いた。気づいた時には、周囲10メートルほどを、半円状に男たちが取り囲んでいたのだ。白い服装で統一された暗殺部隊は、カービン銃を握っている。

麦野沈利や『仮面』の男たちに比べれば、今回は非常にシンプルな構成をしていた。しかし、女性たちは一層嫌な表情をしていた。

「AIMジャマー……最新型を超投入してきましたか」

物理攻撃を完全に防ぐ最愛の能力さえ封じてしまえば、あとはどうとでもなる、ということだろう。最愛以外に防御能力を持つのは霧丘だか、彼女もそこまで得意ではない。

となれば、霧丘が3人ほどの銃を封じたところで、他の3人は倒れることとなる。そうなれば、霧丘も複数の方向から同時に打たれれば対処できない。

大能力者^{レベル4}とはいえ、能力が分かり切った1人の少女。特殊部隊に敵うはずがない。

しかし、ここで倒されれば、この場にいるほとんどの人員は『回収』されることとなるだろう。そして、その中で利用価値が低いフレンダと浜面は、この場で処分される。

「……まったく、めんどろなことをしてくれましたね」

10人の男に取り囲まれる浜面達の前に出てきたのは、チョコレートのような色合いの、上品なスーツを着た女だった。ただし、その雰囲気^{雰囲気}を台無しにするような、フルフェイスのヘルメットを着用している。

「今後の『振り分け』は大体想像できていますね」

「……、」

「麦野沈利と滝壺理后、霧丘愛深は即時回収。絹旗最愛と黑夜海鳥に関しては、指示を待つということになるでしょう。フレンダⅡセイヴェルンと浜面仕上に関しては難しいところですが……まあ、条件は合致しないでしょうねえ。そもそも、滝壺理后の基本的な運動性能は低い。精神的な枷を用意しなくても、コンクリートの部屋に隔離するだけで研究は進められますし」

「待て」

浜面は遮るように言った。

今の台詞には、確かに聞き逃せない言葉があったからだ。

「研究？・滝壺を？・麦野じゃなくてか？」

「少なくとも、そちらの人々は気づいているかと思いますが」

垣根帝督から抽出した『未元物質^{ダイクマター}』で鍛え上げた『仮面』部隊を撃破したとき、麦野は己の力では照準が合わせることができない状態でも、『原子崩し^{メルトダウナー}』を使用できていた。それは、単に麦野だけの力ではなく、滝壺が麦野の『自分だけの現実^{パーソナルリアリティ}』に干渉し、書き換えていたからだったのだ。

しかも、その状態では滝壺は『体晶』を使用していなかった。

「本来は滝壺を『8人目』にする計画は『体晶』とは切り離されていたんですがね」

しかし、『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』のシミュレート結果を受けても、現実的な条件がシビアすぎた。そのため、かろうじて似たような性能を持つ『体晶』を使用していたのだという。

「……にも拘わらず、お前たちは滝壺の体をいじり続けた」

「あまりにも惜しい可能性だったからですよ」

それは、滝壺が麦野に行ったことを考えれば、当然だった。

『自分だけの現実』は、この世界にあらゆる能力・現象を生み出す源となるものだ。それを完全に制御できるということは、もはや学園都市で行われている能力開発を超えることを意味する。無能力者レベロを超能力者レベロにすることも、その逆も可能だ。

学園都市よりもはるかに高度な超能力開発。

学園都市に対する、学園個人。

「元々滝壺には稀な『素養』があつたのですが、開花させるのが難しかったです。……けれど、これで『8人目』への道は開けました。あなたたちの美しい人間関係と、この過酷な戦争のおかげでね」

しかし、浜面はそれ以上に驚いていた。

『8人目』というインパクトに押されて隠れそうになっているが、絶対に看過できない言葉を。

「……元々、滝壺には稀な『素養』があつた？」

震える声で、浜面は確かめる。

そう、

「つまり、時間割カリキュラムりに参加する前から分かっていたっていうのか？

どれだけ努力しても、どれだけ勉強しても、成功するヤツは成功するし、失敗するヤツは失敗するって」

地獄よりも恐ろしい答えだった。

努力をして無能力者レベロから強能力者レベロになれた人間は、最初から『強能力者レベロになれる』と設定されていただけに過ぎない、ということか。なら。

生まれた時から無能力者と決めつけられた人間に、希望なんてある

のか？

麦野が、何かを思い出すように言った。

「……そういえば、おかしいとは思っていたわ。第三位が幼少期の頃に騙され、提供したDNAマップを基に軍用の体細胞クローンを量産する計画。……でも、低能力者から時間をかけて超能力者になった第三位は、DNAを提供した段階では、まだ超能力者じゃなかったのよ」つまり、あらかじめ超能力者になることが分かっていたから、DNAマップの値が上がる前に手を打ったということだ。

「まあ、『素養格付』にも弊害はありますがね。断片的なリストが流出するたびに、一攫千金を狙うため裏で血が流れるなんて問題も発生しています」

「……、」

「しかしまあ、総合的に見ればプラスに働いているとは思いますよ。最初から伸びもしない人間の分を有用な能力者へ重点的に割り振った方が、はるかに効率的でしょう」

「こ、の……野郎……ッ！」

その言葉に激昂したのは、浜面ではなく麦野だった。

「つまり、浜面がこんな所まで落ちちまったのは、お前たちが勝手に諦めちまったからじゃねえか！ 確かに、超能力者になてなれなかったかもしれない。でも、少しでも平等に機会を与えていれば、少しでも伸びる可能性はあったのに！」

そうだったら、浜面仕上は武装無能力者集団になてならなかったかもしれない。『アイテム』とも無関係でいて、この場の誰もつかめなかった、退屈で平和な生活を謳歌していたかもしれない。

「良いんだ。俺たちは『アイテム』だ。そのことに後悔はしていない。麦野が怒ってくれたことが、彼にとつてはうれしかった。」

「それより、気になることを言っていたな」
『素養格付』

それは、学園都市中の学生を、どん底に突き落とすことになるだろう。そして、上層部が街の機能が止まるほどのリスクを望んでいるとは思えない。

「不確定な情報ならともかく、現物を手に入れる機会があるとしても？」
女の合図で、金属音と共にカービン銃が彼らに向けられる。
これで終わりだ。

「お前こそ、忘れてるんじゃないのか。俺が今立っている場所は学園都市じゃない。そもそも、俺は単なる無能力者だ」
そう。

浜面は、超人的な力を持ったスーパーマンではない。
ピンチになった時、突如として謎の力が覚醒するような都合主義的主人公ではない。

ならば、彼がこの場から生き残る手段は、たったひとつ。

タアアアアン！ と。

雪原に響いた銃声と共に、複数の肉体が地に伏せた。

「な……」

驚いた声を出したのは、ヘルメットの女だった。銃声と共に倒れたのは浜面達ではない。彼らを取り囲んでいたはずの、10人の男たちの内の数人だったからだ。

そう、彼らは気が付かなかった。盛り上がった丘の向こうに伏せるように、30人ぐらいの男女が取り囲んでいることに。

「生きているか、浜面！」

デイグルヴが叫ぶ。

その脇で同じようにライフルを掴んでいたグリツキンが、舌打ちをする。

「お前は逃げろつつつたけどよ、結局みんなで舞い戻って来ちゃったよ。お前を見捨てることはできないってな！ で、そいつらがスチームディスプレイを仕掛けようとしている工作部隊の仲間か!？」

「……ズレたことを言っているが、ありがとう。お前たちのおかげで命拾いをした」

浜面がヘルメットの女と話していたのは、単に情報を知りたかっただけでない。彼女たちの背後で、彼らがそれぞれの配置につくように

動いているのが見えていたため、その時間稼ぎを行っていたのだ。

「……何故？」

しかし、ヘルメットの女は現状が理解できていないようだった。自分たちが窮地に陥ってしまったことが、信じられないのだ。学園都市は、ロシアに対して常に一方的な戦いを展開してきたにも拘わらず。

彼女たちは、敗北した。

なぜなら、

「学園都市が戦争の中で優位に立っていられたのは、大規模な連携行動で互いをフォローし合っていたからだ」

浜面は、その事実を突きつけた。

そもそも、学園都市が無敵状態なのだとしたら、彼らがこの場所まで逃げることも自体、とてもできたものではなかったはずなのだから。だが、これで終わりではない。

彼らによる浜面の始末と滝壺たちの捕獲作戦が失敗しても、学園都市はいくらでも増援をよこすだろう。それだけの価値がある『学園個人』なのだから。

だから、その前に片をつける必要がある。

「ディグルヴ、グリツキン。お前たちは白い戦闘服の連中を縛り付けて、妙な動きをしないように見張っててくれ。麦野たちは滝壺を押さえてろ。これからちよつと刺激の強いことをしてくるから」

「何を……」

何か言いかけたヘルメットの女を遮るように、銃声が鳴り響いた。

浜面が拳銃を引き抜き、女の右ひじと右膝を一気に撃ち抜いたのだ。

「……100メートルぐらい先に、ちよつとした洞窟がある。続きはそっちでやろうか」

浜面は平たんな声でそう言いながら、女の襟首をつかんで引きずり歩き始めた。

「目標は『パラメータリスト素養格付』。気づいたら自然と口が開いていた、ぐらいのこととはさせてもらおう」

「ひ、ひ」

「人間ってのは怖いよな。……大切な者を守る、って言い訳ができれ

ば、どんなに残忍なことでもできる。今から人間がどんなに残酷なのかをみせてやる」

雪の上に倒れる一方通行の下へ、輸送用の大型ヘリコプターが降りてきた。

あの要塞から放たれた黄金の光と激突した後、どうなったのか分からなかったが、ギリギリでも最悪の破壊は食い止められたようだ、と彼は理解する。

回収にきた部隊の男たちは、彼をストレッチャーの上に乗せると、大きな分厚いベルトで固定した。彼もまた大きな抵抗はせず、そのまま巨大なヘリの中へと収容される。

派手な揺れと共に、ヘリが宙へ浮かんだ。

「あのガキどもは？」

「別動隊が」

短い返答に、一方通行はふん、と鼻を鳴らす。

「……なら、これだけ確約しろ」

打ち止めや番外個体、その他の妹達の命を盾にして命令を飛ばされるのは、やはり気に入くない。そして、第三次製造計画とやらも、同様だった。

そして、自分と同じように、何かしらを盾にして穢れ仕事を行うこともまた、気に入らなかった。そんなものは、自分から進んで行うような狂人に任せておけばいいのだ。

「何も分かっているようですね。取引ができるような立場とでも？」

「オマエの方こそ、何も分かっているエよオだな」

その一言に、防護スーツの研究者は警戒を深めた。念のために、彼は一方通行の電極のスイッチを確かめようと、その首元に手を伸ばす。

しかし。

よりにもよって、一方通行はその心理を逆手に取った。

研究員の指先がスイッチを押さえた瞬間、一方通行は首を大きく振った。そのことによつて、研究員の指は彼の能力の引き金を引いてしまう。

ベルトが一瞬ではじけ飛び。防護スーツの男はヘリの壁に叩きつけられた。

「これは、交渉でも、提案でも、取引でも、懇願でも、協定でも、妥協でも、降伏でもない」

立て続けに、ヘリの壁が破られる。通常ならばバランスを失ってヘリが落下しているところであるが、それは一方通行自身が、その能力でバランスを保つてみせた。

一瞬で、機内を畏怖が支配し、その上に王が君臨する。

「凱旋だ、クソ野郎」

右方のフィアンマは、震える手で鉄の扉を内側から開けた。

全身を蝕むダメージのせいで、起き上がることもままならなかったので、転がるように外に出るしかなかった。

自らが作り上げた『ベツヘレムの星』は、すでに墜落したのかどこにもなかった。いや、戦争ならどこからか聞こえてくるであろう砲撃音すらない。静寂に包まれた真っ白な雪原だけが、フィアンマを包み込んでいた。

全てが、終わったのだ。

転落を続けているこの世界。しかし、こんな世界を生きて行けと、あの男は提示した。ただの綺麗事ではなく、フィアンマに最後の脱出の機会を譲つてまで、あの男は貫き通した。

なら、これからたくさん確かめてみるよ。

あの男の最後の言葉が、やけに耳に残った。

フィアンマから『聖なる右』そのものが失われたわけではない。しかし、明確に弱体化していた。克服した使用回数制限も、復活してしまっている。

これから先の逃亡生活に、希望は見えない。

しかしファイアンマは、あの男から与えられた可能性を簡単には捨てられなかった。先のことは、先に進んでから決めればいいのかと、そう思えた。

だから、自分の足で、よろめきながらも立ち上がり、一步目を踏み出す。

同時に、ファイアンマの右腕が肩のところから切断された。

魔術の発動、その予兆を一切感じさせない一撃だった。己の象徴を失ったファイアンマは、白い雪に赤い血をまき散らしながら絶叫した。

異様な魔術師が、いつの間にか存在した。

長い銀色の髪に、表情が一切見えない顔。緑色の手術着をまとったその人間は、男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも罪人にも見える奇妙な雰囲気を持っていた。

右方のファイアンマはこの魔術師を知っている。

「……アレキスター……クロウリー……？」

「やはり『容器』を抜けると正しく認識されるらしい」

彼は、魔力の源である生命力を、生命維持装置を用いて機械的に生み出している。そのため、あらゆる魔術的な探査を逃れることができた。

しかし、その理論だどこにしている理由が説明できないはずだが。

「何もおかしいところはなからう」

学園都市の中心部、窓のないビルの中にいなければおかしいはずの魔術師は、さも当然のように話す。

「シークレットチーフとの『窓口』としての役割を全うし、『黄金』の結社の設立にも協力したアンナ・シユプレンゲルという女は、最後には実在すらも怪しい存在と称された。……私もまた、シークレットチーフの一学説であるエイワスの『窓口』として機能していた者だ。となれば、〇と一だけで表現できる域を超えていたとしても、何ら不思議ではあるまい」

アレイスター・クロウリーという魔術師は、こうしている今も学園都市の中央に存在する。しかし同時に、この場所でフィアンマの前に姿を現してもいる。

クローンなどという陳腐なものではない。同一の人間が、複数の場所と同時に存在する。『生命の樹』^{セフィロト}でも一定以上の上部組織については、『言葉で説明できない』として意図的に説明が省かれている。

まさに次元が違う。

「……何故だ？ 俺様にはできなかつた。『神の子』と同じ、この世界を救うだけの力があつたはずなのに。俺様にそれはできなかつた」
「それは、力の質や量というよりも、使い方の問題に過ぎんよ」

アレイスターは、つまらなさそうに答える。

彼が記した『法の書』は、紐解けば十字教の時代は終わりを迎えるとされているが、彼にとつては完成した時点で十字教の時代は終わりを迎えていた。

アレイスターの言葉を借りれば、オシリスの時代からホルスの時代へフオーマツトを移していたのだ。その点が違うというだけであり、そのほかは似ていた。

科学の力で異能をつくる。

その集合によつて天使を築く。

それは単に人外の存在が誕生するということだけではない。この世界のシステムへ、根幹から干渉するということだ。

神が構築したものに、人為的に歯車をねじこみ、オルゴールを時限爆弾へと変えるような所業だった。旧時代であれば、考えるだけで処刑されるだろう。

「……エイワスは、そこまで魅力的な存在か」

聖書や神学では説明のできない天使。

『法の書』を授けるほどの異形の天使。

それが、アレイスター・クロウリーが求めたもの。

フィアンマの言葉に、史上最悪の魔術師は肯定も否定もしなかつた。

「まあ、本来ここは私の出てくるべき段階ではないのだがね」

魔術史上最悪と称される魔術師は語る。

「ものの価値も分からんとはいえ、君は少々あの右手に深入りしすぎた。単なる『異能の力を打ち消す右手』として認識されていればよかつたものを、君はその奥にあるものを垣間見ただろう。さすがに放置はしておけん。私が出る幕となったわけだ」

「奥に、あるもの……？」

「それは同時に、あの肉体に宿るものまで理解される可能性を意味している。おかげでだいぶ『回り道』をしなければならなくなった。……そうか、私という生き物は、月並みに怒りを自覚しているのかもしれない」

フィアンマが思い出すのは、あの少年の右肩を切断した時にあふれ出した『何か』。

先ほどもアレイスターが述べたように、フィアンマがやろうとしていたことは、似ていた。

異形の力で満たされた神殿を用意し、その中で右腕と特殊な肉体の力を精錬し、その力でもって位相そのものの厚みを再調整し、結果として世界を変ずる。

ただ、基幹となるフォーマットが時代遅れのものだったただけだ。

だからアレイスターは出てきた。フィアンマが起こした不出来な事件から、アレイスターの計画が逆算される可能性を、少しでも確実に叩き潰すために。

「そうか」

片腕のない状態で、しかしフィアンマはゆっくりと首を横に振った。

「……だが、もはやそんなことはどうでもいい」

その顔からは、これまでにあつた熱のようなものが、不思議と全て引いていた。

この銀の男の顔を、おそらくはかつての自分と同じ表情を見て、フィアンマは自分がやってきたことの虚しさを覚えていた。本当に世界を救う男は、こんな顔をしない。

「……あの時、あの場所で、あいつは誰も追いつけん場所に立ってい

た」

自分に足りないものを、少しでも理解したような気がした。

フィアンマは、出来損ないの『第三の腕』をかざした。己の血で輪郭が浮かび上がるそれは、もはや自らの意志で制御することもままならない。

「無駄だと思うがね」

対し、アレイスターは手の中にある杖を握るようなしぐさをした。そこには何も無い。

しかし、フィアンマの目には、なぜか存在しないはずの銀色の杖を見た気がした。視界には映っていないはずなのに、気配や雰囲気といった未分類情報によって、『銀』という色がついているように錯覚したのだ。

ブラステイングロッド
衝撃の杖。

究極の悪人とされたクロウリーが、純粋な尊敬から師と仰ぐことを決めた古い魔術師の伝説にある、一本の杖。

「無駄かどうかは問題じゃないんだ」

本当に助けたいという思いがあれば、勝算など二の次三の次にならなければおかしいのだ。そのことすら、自分は知らなかった。

踏みにじらせるわけにはいかない。

たとえ、真正正銘の怪物と戦うことになっても。

勝敗など、一目瞭然だった。

ただ、片方の影だけが、山の斜面を転がり落ちていった。

勝者はその影を見送りながら、空気に身を溶かし呟いた。

「……たかが十字教程度で、あの右手や幻想殺し、イマジンプレイカー、イマジックリエイト、幻想創造……そして『神浄』を説明しようとしたこと。それ自体が君の間違いだ」

アレイスターはクロウリー。

かつて、イギリス清教の刺客の手で葬られたはずの魔術師。

しかし、彼の後継を名乗る魔術結社や彼自身の生存説に対処するため、クロウリー専門の部署は存続していた。

そして、

「反応ありました！ 700秒程度ですが、この波長は間違いありません。魔術師アレイスター・クロウリーのものです！」

個別に設定していた探査用の霊装が思わぬ結果をはじき出したのだ。

部下からの報告に、イギリス清教最大主教ローラースチュアートは思いを巡らせる。

(……やはり、生きていたか)

やはり、と彼女は前置きをした。つまり、あの男の消滅を、彼女を信じていなかったのである。

この戦争において、イギリス清教は学園都市の味方をした。そのため、一見すれば戦勝国ではある。

しかし、学園都市が科学サイドの一強であるのに対して、イギリス清教は十字教『三大』宗派の一角に過ぎないのだ。

そのため、戦争が起こった場合には、イギリスは弱体化を余儀なくされると思われていた。それは、戦争に勝とうと負けようと、だ。第二王女などは、そのためにクーデターを起こしたはずだ。

しかし、ローラースチュアートはその答えを用意した。

戦勝国である学園都市から、何もかもむしり取れば良い。イギリス清教は対魔術師機関という役割を担っており、そして処刑した魔術師の財産を保管する権限があるのだから。

「……さて。面白くなりけるのはこれからよ、統括理事長アレイスター」

学園都市のビルの屋上に、二人の人影があった。

「……楽しそうですね」

そう問いかけたのは、風斬氷華。普段怯えたような様子の彼女には珍しく、眼鏡の奥の瞳には眼光があった。

そんな彼女に対し、エイワスは両手を軽く広げて言う。

「愉快だとも」

正確には、愉快的時間が長引きそうに喜んでいる。

アレイスターの『計画』^{プラン}は、彼にとって少々急ぎすぎている、とエイワスは感じていた。

家畜は太らせてから食べるに限る。

「私の出現の有無に拘わらず、あの司令塔は長持ちしなかった」

だから、必要な強度を与えるためのヒントを与えた。

それもまた、彼が価値と興味を感じたというだけの結果だった。

「あなたはもう少し、人間というものを知った方がいいと思います。

私たちの肉体は、彼らの力によって支えられたもの。……侮っている
と、あつという間に胸を突かれるかもしれないよ」

「何を言う」

エイワスは、風斬のその忠告にすら昂揚感を押さえずにこう答えた。

「もしも、本当に、脆弱な人間にそんなことができるとしたら……それもまた興味深い事例だとは思わないのかね？」

そして、少年たちの意志とは関係なく、時代は次なる場所に向けて動き出す――。